

木田余台 I

—茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財調査報告書—

1991

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会
木田余土地区画整理組合

木田余台 I

—茨城県土浦市木田余土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財調査報告書—

1991

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会
木田余土地区画整理組合

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところがありました。そのため市内には貝塚、古墳、集落跡など多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このように貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のために必要不可欠なことだと思います。

このたび、市内木田余地区において土地区画整理事業が計画されました。その対象地内にある木田余台遺跡群の取扱いにつきまして関係諸機関と協議を重ねたところ、発掘調査を実施して記録保存することになりました。今回の調査によって数多くの文化財が発見されましたことは、当地域の古代を解明する重要な手がかりとなると思われます。

今後、この成果が研究や生涯学習の向上のために充分活用されることを希望いたします。

最後になりましたが、調査から報告書の発刊にあたり、木田余地区画整理組合をはじめ、関係者の皆様方のご協力とご指導に対し、深く御礼を申し上げます。

平成3年3月

土浦市教育委員会
教育長 青木利次

序 文

木田余地区は霞ヶ浦を望む大地に有り、土地区画整理事業による開発が事業途上にあり、健全で魅力ある住宅市街地の形成が期待されます。

地区内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が有り土地区画整理事業実施に伴い昭和63年の2月から12月迄11ヶ月の間、発掘調査をした結果、古代の縄文時代から平安時代までの郷土の歴史を知るに当り、此の上もない貴重な資料となる品々が発掘されました。

其の結果、木田余の台地は大昔の頃より、水と緑、気候、風土には、大いに恵まれた土地であったのです。

先祖の人々は、恐らく平和な日々を営んで居られたのです。此の美しい郷土の山河をこれから後も大切に保護し、子孫に誤りなく伝えていくことが私達木田余に住む者に課せられた責務であろうかと思います。

此の報告書が活用されて埋蔵文化財の保護に参考になることを期待いたします。

平成3年3月

木田余地区画整理事業組合

理事長 小野 明

例　　言

1. 本書は、茨城県土浦市木田余字御戻3901番地に他所在する木田余台遺跡群（羽賀場遺跡・御戻遺跡・宝積遺跡・東台遺跡・東台古墳群）のうち、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳群に係わる御戻遺跡・宝積遺跡・東台遺跡・東台古墳群の調査報告書である。
2. 本調査は、土浦市木田余地区画整理事業に伴う事前調査として、茨城県教育委員会の指導のもとに、土浦市遺跡調査会（会長 永山 正）が実施した。
3. 現地調査は、昭和63年2月12日から同年12月17日（第1次調査）にかけて実施した。
4. 調査組織は下記のとおりである。

土浦市遺跡調査会

会長	永山　正	土浦市文化財保護審議会委員長	(～H 3. 3. 31)
副会長	日下部　晃	土浦市教育委員会教育長	(H元. 12.)
	青木　利次	土浦市教育委員会教育長	(H元. 12. ～)
理事	茂木　雅博	土浦市文化財保護審議会委員	(～H 3. 3. 31)
	中山　清	土浦市建築指導課長	(～H 2. 3. 31)
	雨貝　宏	土浦市建築指導課長	(H 2. 4. 1～)
	神林　栄久	土浦市耕地課長	(～H 2. 3. 31)
	横田　紀夫	土浦市耕地課長	(H 2. 4. 1～)
監事	田中　昭	土浦市教育委員会教育次長	(～H 2. 3. 31)
	藤枝　正	土浦市教育委員会教育次長	(～H 2. 9. 30)
	二野屏　昌男	土浦市教育委員会教育次長	(H 2. 10. 1～)
	滝ヶ崎　洋之	土浦市企画課長	(～H 2. 3. 31)
	廣田　宣治	土浦市企画課長	(H 2. 4. 1～)
幹事	田中　紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長	(～H 3. 3. 31)
	岩沢　茂	土浦市教育委員会社会教育課長補佐	(～H 3. 3. 31)
	桜井　正広	土浦市教育委員会社会教育課文化係長	(～H 2. 3. 31)
	加倉井　藤雄	土浦市教育委員会社会教育課係長	(H 2. 4. 1～)
	石山　淳一	土浦市教育委員会社会教育課主幹	
	石川　功	土浦市教育委員会社会教育課主事	
	黒澤　春彦	土浦市教育委員会社会教育課主事	
	中澤　達也	土浦市教育委員会社会教育課主事	
	塙谷　修	土浦市立博物館学芸員	
	関口　満		

発掘調査組織

調査主体者 土浦市教育委員会
事務局 土浦市教育委員会社会教育課
調査担当 大淵 淳志（日本考古学研究所調査研究員）
調査員 小川 和博（日本考古学研究所、日本考古学協会員）
石井 純一（日本考古学研究所調査員）

5. 調査および整理作業・報告書作成にあたっては、日本考古学研究所長・藤下昌信の指導助言のもとに、小川和博・大淵淳志・石井純一が実施した。
6. 本書の執筆は小川和博・大淵淳志が行い、文末に分担者名を明記した。また整理作業および実測図、図版の作成は大淵淳志が行い、調査員石井純一、調査補助員徳生さち子の協力を得た。
7. 発掘調査から報告書刊行に至までご指導いただいた茨城県教育委員会をはじめ、茨城大学人文学部教授茂木雅博先生、茨城県立歴史館瓦吹堅先生、早稲田大学橋本博文氏・千葉県印旛郡文化財センター橋本勝男氏らから多大なご助言とご協力を得ました。各々記して感謝の意を表します。

本文目次

序

序文

例言

序 章

1. 調査に至る経過	3
2. 立地	3

旧石器時代

1. 概要	7
2. 層序	7
3. 発掘された遺物	9
A. 宝積遺跡	9
B. 東台遺跡	12
C. 御戻遺跡	12

縄文時代

1. 概要	15
2. 発見された遺構と遺物	17
A. 一丁目台遺跡	17
B. 東台遺跡	18
C. 御戻遺跡	65

弥生時代

1. 発見された遺構と遺物	106
A. 宝積遺跡	106
B. 東台遺跡	120

古墳群

東台古墳群	131
-------------	-----

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 木田余遺跡群調査区地形図	4
第3図 木田余遺跡群旧石器時代遺物出土地点	6
第4図 宝積遺跡層位図	7
第5図 宝積遺跡旧石器時代確認グリッド配置図	8
第6図 宝積遺跡8~10c グリッド第IV層石器分布図	10
第7図 宝積遺跡8~10c グリッド第IV層出土石器	10
第8図 木田余遺跡群出土遺物実測図	11
第9図 周辺の縄文時代の遺跡分布図	14
第10図 一丁目台遺跡調査区地形図（縄文時代）	16
第11図 一丁目台遺跡出土遺物	17
第12図 東台遺跡S I 06実測図	19
第13図 東台遺跡S I 06出土遺物	19
第14図 東台遺跡S I 16実測図	20
第15図 東台遺跡土坑系統図	22
第16図 東台遺跡S K45・50	29
第17図 東台遺跡出土石器実測図（1）	60
第18図 東台遺跡出土石器実測図（2）	61
第19図 東台遺跡出土土器片錐実測図	65
第20図 御吳遺跡S I 07 遺構と出土遺物	67
第21図 御吳遺跡S I 34 遺構と出土遺物	67
第22図 御吳遺跡S I 31 遺構と出土遺物	69
第23図 御吳遺跡S I 53 遺構と出土遺物	71
第24図 御吳遺跡S K25・87・100・145・154・197実測図	79
第25図 御吳遺跡出土石器実測図	101
第26図 宝積遺跡調査区全体図	105
第27図 東台遺跡調査区全体図	122
第28図 東台遺跡壺棺墓	127
第29図 東台古墳群出土遺物	143
第30図 東台古墳群台13号墳出土遺物（1）	146
第31図 東台古墳群台13号墳出土遺物（2）	147
第32図 東台古墳群台13号墳出土遺物（3）	148

表目次

表1 東台遺跡出土石器計測表	62
表2 東台遺跡出土土器片縫觀察表	64

図面目次

Fig 1 東台遺跡調査区全体図	Fig28東台遺跡 S K147・148・149・150
Fig 2 東台遺跡 S K3・4・5・7	Fig29東台遺跡 S K152・153・154・156
Fig 3 東台遺跡 S K8・9・10	Fig30東台遺跡 S K3・4・5・7
Fig 4 東台遺跡 S K11・12・13	Fig31東台遺跡 S K8(1)
Fig 5 東台遺跡 S K14・16	Fig32東台遺跡 S K8(2)
Fig 6 東台遺跡 S K19・20・21	Fig33東台遺跡 S K9, 12
Fig 7 東台遺跡 S K22・24・25	Fig34東台遺跡 S K13・14
Fig 8 東台遺跡 S K26・27	Fig35東台遺跡 S K16・19・20
Fig 9 東台遺跡 S K28・30・31	Fig36東台遺跡 S K21・22
Fig10 東台遺跡 S K32・33・34	Fig37東台遺跡 S K24
Fig11 東台遺跡 S K35・36・39	Fig38東台遺跡 S K25・26
Fig12 東台遺跡 S K38・43・44・45	Fig39東台遺跡 S K28
Fig13 東台遺跡 S K46・47・48・51・92	Fig40東台遺跡 S K27・31
Fig14 東台遺跡 S K52・53・54・55・75・77・88	Fig41東台遺跡 S K32・33
Fig15 東台遺跡 S K56・58・61	Fig42東台遺跡 S K34・35
Fig16 東台遺跡 S K59・60・62・63	Fig43東台遺跡 S K36(1)
Fig17 東台遺跡 S K64・68・71A・71B・74・79	Fig44東台遺跡 S K36(2)
Fig18 東台遺跡 S K81・82・83	Fig45東台遺跡 S K43
Fig19 東台遺跡 S K85・97・100・108	Fig46東台遺跡 S K38・39・45
Fig20 東台遺跡 S K114・117・118・119	Fig47東台遺跡 S K46
Fig21 東台遺跡 S K109・110・112・113	Fig48東台遺跡 S K46・47
Fig22 東台遺跡 S K120・121・122	Fig49東台遺跡 S K48・49
Fig23 東台遺跡 S K124・125・126・138	Fig50東台遺跡 S K51・52・53・54・55・56
Fig24 東台遺跡 S K127・129・130・131	Fig51東台遺跡 S K58・62・64
Fig25 東台遺跡 S K132・133・134・135・136	Fig52東台遺跡 S K68・79
Fig26 東台遺跡 S K137・139・140・141・151	Fig53東台遺跡 S K81(1)
Fig27 東台遺跡 S K143・144・145・146	Fig54東台遺跡 S K81(2)・91

- Fig55東台遺跡 S K97(1)
Fig56東台遺跡 S K97(2)
Fig57東台遺跡 S K97(3)
Fig58東台遺跡 S K97(4)・109・110
Fig59東台遺跡 S K112・113
Fig60東台遺跡 S K122
Fig61東台遺跡 S K118・120
Fig62東台遺跡 S K124
Fig63東台遺跡 S K125・126・129
Fig64東台遺跡 S K130
Fig65東台遺跡 S K131・132・133
Fig66東台遺跡 S K134・135
Fig67東台遺跡 S K136・137・138・140
Fig68東台遺跡 S K141・134
Fig69東台遺跡 S K144・148・149・151
Fig70東台遺跡 S K152
Fig71東台遺跡 S K153
Fig72東台遺跡 S K154
Fig73東台遺跡 S K155・156
Fig74御灵遺跡調査区全体図
Fig75御灵遺跡 S K1・2・3・104
Fig76御灵遺跡 S K82・83・86・105・106・107・108
Fig77御灵遺跡 S K2・5・6・82・83・85・86・90・110
Fig78御灵遺跡 S K5・6・7・82・85・86・90・110
Fig79御灵遺跡 S K7・8・9・111・112・113
Fig80御灵遺跡 S K7・8・9・110・111・112・113
Fig81御灵遺跡 S K11・12・16・19・120・121
Fig82御灵遺跡 S K11・12・15・16・18・19・22・99
Fig83御灵遺跡 S K10・13・15・17・79・79・114・115
Fig84御灵遺跡 S K10・13・15・17・18・79・114・116
Fig85御灵遺跡 S K20・24・26・27・30・31
Fig86御灵遺跡 S K17・20・24・26・28・30・34・36
Fig87御灵遺跡 S K28・32・34・36・37・84・102・12
Fig88御灵遺跡 S K24・28・31・37・84・102・124
Fig89御灵遺跡 S K41・42・80・103・127
Fig90御灵遺跡 S K35・37・39・42・80・103・123・1
Fig91御灵遺跡 S K43・45・51
Fig92御灵遺跡 S K43・51・94・130
Fig93御灵遺跡 S K54・59・97・133
Fig94御灵遺跡 S K50・51・53・60・92・96・97・133
Fig95御灵遺跡 S K52・68・69・71・78・88・91・133・135
Fig96御灵遺跡 S K52・67・78・88・91・133・135
Fig97御灵遺跡 S K60・66・93・95・132・133
Fig98御灵遺跡 S K60・66・68・88・93・95・131・13
Fig99御灵遺跡 S K148・151
Fig100御灵遺跡 S K155・157・173
Fig101御灵遺跡 S K155・158・173・175
Fig102御灵遺跡 S K158・161・165
Fig103御灵遺跡 S K158・161・165
Fig104御灵遺跡 S K162・164・166・167・169
Fig105御灵遺跡 S K168・170・172
Fig106御灵遺跡 S K178・182・188・191・214・241
Fig107御灵遺跡 S K182・188・191・214
Fig108御灵遺跡 S K177・179・190・216・218
Fig109御灵遺跡 S K180・183・186
Fig110御灵遺跡 S K197・200・201・203・205
Fig111御灵遺跡 S K81・207・223 S I 51・52
Fig112御灵遺跡 S K206・207・212・222
Fig113御灵遺跡 S K206・207・202・222
Fig114御灵遺跡 S K208・209・211・215・217・218
Fig115御灵遺跡 S K208・209・211・215・217・218
Fig116御灵遺跡 S I 55・S K210・213・219・221
Fig117御灵遺跡 S I 55・S K208・210・213・219
Fig118御灵遺跡 S K1
Fig119御灵遺跡 S K2・6・9・13
Fig120御灵遺跡 S K16・20・21・22・24・27
Fig121御灵遺跡 S K28・30・36・37・38
Fig122御灵遺跡 S K48・49・50

Fig123御灵遺跡 S K53•54•55•70•79•80	Fig157宝積遺跡 S I 70
Fig124御灵遺跡 S K81•83•86	Fig158宝積遺跡 S I 72
Fig125御灵遺跡 S K100•110•145•148	Fig159宝積遺跡 S I 74
Fig126御灵遺跡 S K154•156•157•158	Fig160宝積遺跡 S I 75•76
Fig127御灵遺跡 S K159	Fig161宝積遺跡 S I 78•79
Fig128御灵遺跡 S K165(1)	Fig162宝積遺跡 S I 81•83
Fig129御灵遺跡 S K165(2)	Fig163宝積遺跡 S I 96•100
Fig130御灵遺跡 S K165(3)	Fig164宝積遺跡 S I 107•109
Fig131御灵遺跡 S K178•179•182	Fig165宝積遺跡 S I 1•12•16•29•34
Fig132御灵遺跡 S K188•190•191	Fig166宝積遺跡 S I 19
Fig133御灵遺跡 S K197•208	Fig167宝積遺跡 S I 36•37•38
Fig134御灵遺跡 S K209	Fig168宝積遺跡 S I 41•44•45
Fig135御灵遺跡 S K214•215	Fig169宝積遺跡 S I 47•49•54•67
Fig136御灵遺跡 S K216•217•225	Fig170宝積遺跡 S I 70•72•73
Fig137御灵遺跡 S K10•15	Fig171宝積遺跡 S I 74•75•76•78
Fig138御灵遺跡 S K17•18•25	Fig172宝積遺跡 S I 79•81•83
Fig139御灵遺跡 S K26•34•46•56	Fig173宝積遺跡 S I 96•100•107•109
Fig140御灵遺跡 S K58•59•60•63	Fig174東台遺跡 S I 01•03
Fig141御灵遺跡 S K67•68•72•75•76	Fig175東台遺跡 S I 12•17
Fig142御灵遺跡 S K82•84•88•91	Fig176東台遺跡 S I 16
Fig143御灵遺跡 S K93•96•97•102•104•115	Fig177東台遺跡 S I 20•21
Fig144御灵遺跡 S K118•120•128•135•149	Fig178東台遺跡 S I 34•35
Fig145御灵遺跡 S K195•198•199•200•201•204	Fig179東台遺跡 S I 38•39
Fig146御灵遺跡 S K207•211•212	Fig180東台遺跡 S I 01•12•16
Fig147御灵遺跡 S K218•224	Fig181東台遺跡 S I 17•20•21
Fig148宝積遺跡 S I 1•16	Fig182東台遺跡 S I 34•35•38•39
Fig149宝積遺跡 S I 19	Fig183東台古墳群
Fig150宝積遺跡 S I 29	Fig184東台古墳群 第1号墳
Fig151宝積遺跡 S I 34•36	Fig185東台古墳群 第1号墳
Fig152宝積遺跡 S I 37•38	Fig186東台古墳群 第2号墳
Fig153宝積遺跡 S I 41•44	Fig187東台古墳群 第4•7号墳
Fig154宝積遺跡 S I 45•47	Fig188東台古墳群 第4号墳
Fig155宝積遺跡 S I 49•54	Fig189東台古墳群 第4号墳
Fig156宝積遺跡 S I 67•73	Fig190東台古墳群 第7号墳

Fig191 東台古墳群 第4・7号墳
Fig192 東台古墳群 第5号墳
Fig193 東台古墳群 第5号墳
Fig194 東台古墳群 第5号墳
Fig195 東台古墳群 第6号墳
Fig196 東台古墳群 第6号墳
Fig197 東台古墳群 第6号墳
Fig198 東台古墳群 第9号墳

Fig199 東台古墳群 第9号墳
Fig200 東台古墳群 第10・12号墳
Fig201 東台古墳群 第10号墳
Fig202 東台古墳群 第10号墳
Fig203 東台古墳群 第10号墳
Fig204 東台古墳群 第13・14号墳
Fig205 東台古墳群 第13号墳
Fig206 東台古墳群 第13号墳

図版目次

- 図版1 木田余遺跡群
図版2 旧石器時代遺物
図版3 東台遺跡
図版4 東台遺跡
図版5 東台遺跡
図版6 東台遺跡
図版7 東台遺跡
図版8 東台遺跡
図版9 東台遺跡
図版10 東台遺跡
図版11 東台遺跡
図版12 東台遺跡
図版13 東台遺跡
図版14 東台遺跡
図版15 東台遺跡
図版16 東台遺跡
図版17 東台遺跡
図版18 東台遺跡
図版19 御灵遺跡
図版20 御灵遺跡
図版21 御灵遺跡
図版22 御灵遺跡
図版23 御灵遺跡
図版24 御灵遺跡
図版25 御灵遺跡
図版26 御灵遺跡
図版27 東台・御灵遺跡
図版28 宝積遺跡
図版29 宝積遺跡
図版30 宝積遺跡
図版31 宝積遺跡
図版32 宝積遺跡
図版33 宝積遺跡
図版34 宝積遺跡
図版35 宝積遺跡
図版36 宝積・東台遺跡
図版37 東台遺跡
図版38 東台古墳群
図版39 東台古墳群
図版40 東台古墳群
図版41 東台古墳群
図版42 東台古墳群
図版43 東台古墳群
図版44 東台古墳群
図版45 東台古墳群
図版46 東台古墳群
図版47 東台古墳群
図版48 東台古墳群

序 章



第1図 木田余遺跡群 (1/25,000)

(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

1. 調査にいたる経過

本報告書の木田余台遺跡群の発掘調査は、木田余土地区画整理事業の昭和63年、平成元年の道路工事及び同事業の切り土部分、宅地造成部分にかかる遺跡の調査であった。

昭和63年1月28日に同台地の初買場・御美遺跡の道路予定地の試掘調査が行われ、住居跡などの多數の遺構が確認された。それをうけて、同年2月6日、木田余土地区画整理組合、土浦市土地区画整理課、土浦市教育委員会社会教育課と日本考古学研究所の4者によって、遺跡の取扱いに関する慎重な協議を行った。その結果、工事変更、現状保存ともに困難との判断から、発掘調査を行い記録保存することになったことから、昭和63年2月12日から初買場・御美遺跡の発掘調査が開始された。この道路幅の調査は、同年4月23日に終了し引き続き、宝積・東台遺跡、東台古墳群の調査が実施された。宝積・東台遺跡、東台古墳群は、土地区画整理事業の切り土部分と一部の宅地造成地の工事に伴う発掘調査であったが、同年8月31日に一旦、調査を終了している。だが、同年11月、工事中に古墳の石棺が出土したことから、東台古墳群・東台遺跡にかかる一部の宅地造成地の調査を同年11月28日から12月17日かけて現地調査を行っている。この調査の後にも、翌年平成元年7月3日から8月12日にかけて、御美遺跡にかかる宅地造成地の発掘調査を行っている。

(大渕 淳志)

2. 立 地

木田余台遺跡群(初買場遺跡、御美遺跡、宝積遺跡、東台遺跡、東台古墳群、一丁田台遺跡)は、常総台地の南側に位置する土浦市の北部にある木田余台地に存在している。標高25~27mをはかる木田余台地からは南に、日本第2の湖霞ヶ浦を望むことができる。この霞ヶ浦は、約1,000年前までは流海といわれる大きな入江の一部であったが、流れ込む河川によって土砂の堆積が進み、現在の湖水化が進んだとされている。そして、この平坦な木田余台地の東と西には、霞ヶ浦に流れこむ河川によって広く深い開折谷が形成されている。ほとんど、畑作などの農地が大部分であった木田余台地も、現在は急速に宅地化が進んでいる。

(大渕 淳志)



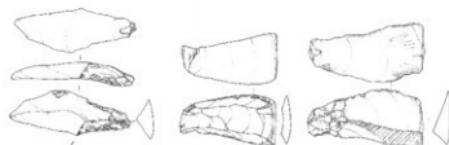
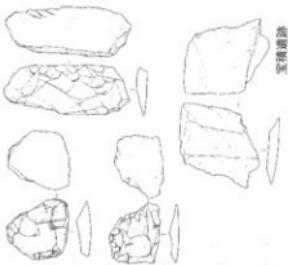
第2図 木田余遺跡群調査区地形図 (1/5000)

旧石器時代

東台遺跡

東台遺跡

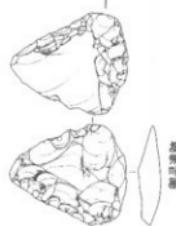
東台遺跡



200m



第3図　木田余遺跡群　旧石器時代遺物出土地点



1. 概要

木田余台遺跡群では旧石器時代の遺物が数か所より出土している。今日までほとんど知られていないかったもので、今回の発掘調査によって始めて明らかにされたのである。しかし、その出土状況は良好ではなく、ほとんどが時期の異なる遺構に伴いしかも1点のみに限定されている。僅かにユニットとして確認できたのは宝積遺跡1遺跡のみである。

なお単独出土した地点は御美遺跡1箇所と東台遺跡3箇所である。御美遺跡では古墳時代の住居跡から、また東台遺跡では縄文土坑、古墳時代住居跡及び古墳周溝中からの出土である。石器はナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、調整剥片等の種類がある。（第3図）

2. 層序

旧石器時代の遺跡を確認するため各遺跡において何箇所かローム層以下の調査を実施しているが、いずれも大きな成果はなく僅かに宝積遺跡においてのみユニットを確認した。宝積遺跡では、この木田余台遺跡群の基本層序としての堆積が認められる箇所があり、これによって木田余台における大方の層序を把握することができると思われる。以下層序の概略を記す。（第4図）

I層 黒褐色土（7.5Y R4/4）表土である。

II層 褐色土（7.5Y R4/3）I層に酷似して締まりがなくバサバサしている。遺物の包含はあまりない。

III層 暗褐色土（7.5Y R3/4）遺跡全体に存在する。締まりのないバサバサした土層である。遺物の包含が認められる。

IV層 明褐色ローム層（7.5Y R5/6）いわゆる立川ローム軟質部（ソフト・ローム）である。締まりが若干弱くボソボソしており、V層との境は明瞭であるが、かなり複雑に食い込みの状態がみられる。宝積遺跡では旧石器時代の遺物包含層である。

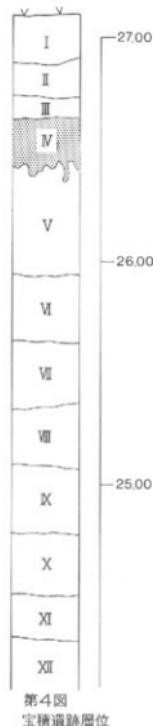
V層 褐色ローム層（7.5Y R4/6）立川ローム硬質部に相当する。硬く締まっており、全体に均質である。遺物の包含は認められない。

VI層 暗褐色ローム層（7.5Y R4/4）立川ローム層第2暗色帯に相当する。やや軟らかい部分が認められるところもある。

VII層 明褐色ローム層（7.5Y R5/8）やや明るいロームで全体が硬質だが部分的に軟質状態が観察される。

VIII層 灰褐色ローム層（7.5Y R4/2）立川ローム最下層である。やや明かるく、全体に硬質だが、軟質部分もみられる。

IX層 黒褐色ローム層（7.5Y R2/2）粘性が強く軟らかい、武藏野ローム層上層に相当しよう。





第5図 宝積遺跡 旧石器時代確認グリット配置図

X層 黄橙色ローム層 (7.5Y R7/8) 全体に明るく、しかも硬く締まりがある。

XI層 明褐色ローム層 (7.5Y R5/6) 下末吉ローム層と武蔵野ローム層の境界に位置するものと思われる。締まりがある。

XII層 灰褐色粘土層 (7.5Y R6/2) 下末吉ローム層である。粘性が強く、締まりがある。

3. 発見された遺物

A) 宝積遺跡（第5図）

先に調査した縄文時代の土坑群が密集し、ローム層深くまで調査した御美遺跡あるいは東台遺跡に比べて本遺跡は弥生時代および古墳時代の集落跡であり、住居跡間に若干の空間があつたためスポット的な調査ではなく、調査区の東に寄った6-11B・7-11A・8-10C区の3箇所に5×5のグリットを設定することができた。その中で南端に位置する8-10Cグリット内IV層から石器集中地点（ユニット）1箇所を検出した。また更に下層の調査を実施するため北東隅1.5m四方を深掘して層序の確認を行った。その結果第XII層まで掘り進めたが文化層の検出はできなかつた。

（1）ユニット（第6図）

8-10Cグリットの北寄りで検出された。径2mの範囲に削器1点、調整剥片1点、二次加工のある剥片1点、剥片2点の計5点からなる。およそこれら石器群がユニットの概念の範疇に入るか問題であるが、一応剥片を含めてまとまりのある一群と考えユニットとする。なお出土層位は第III層と第IV層にかけてであったが、その主体は第IV層立川軟質ローム層（いわゆるソフトローム）であり、本層を文化層として確認した。

（2）石器 石器は削器と剥片の5点が出土している。

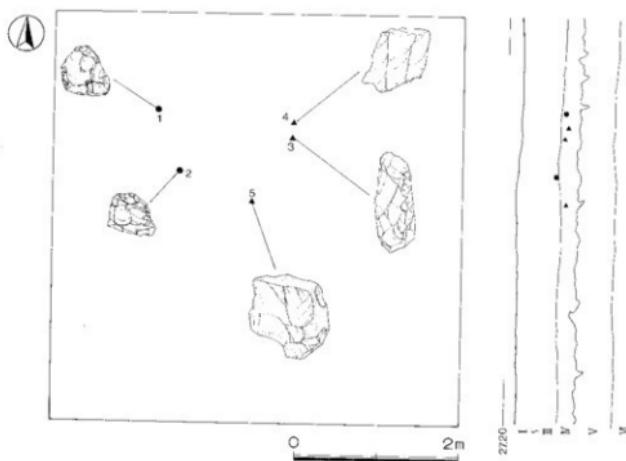
削器（第7図1）縦長剥片を素材として左側縁下部および右側縁下端に調整加工が施されている。また刃部にも細部の調整は行われていないものの調整が認められる。石材は珪質頁岩を使用している。長さ33.0mm、幅31.0mm、厚さ7.5mm、重量9.60gを測る。

調整剥片（第7図2）縦長の剥片である。基部附近に比較的細かな調整が加えられている以外大まかな剥離のみ残されている。石材は珪質頁岩を素材としている。長さ27.1mm、幅33.0mm、厚さ4.7mm、重量3.04gを測る。

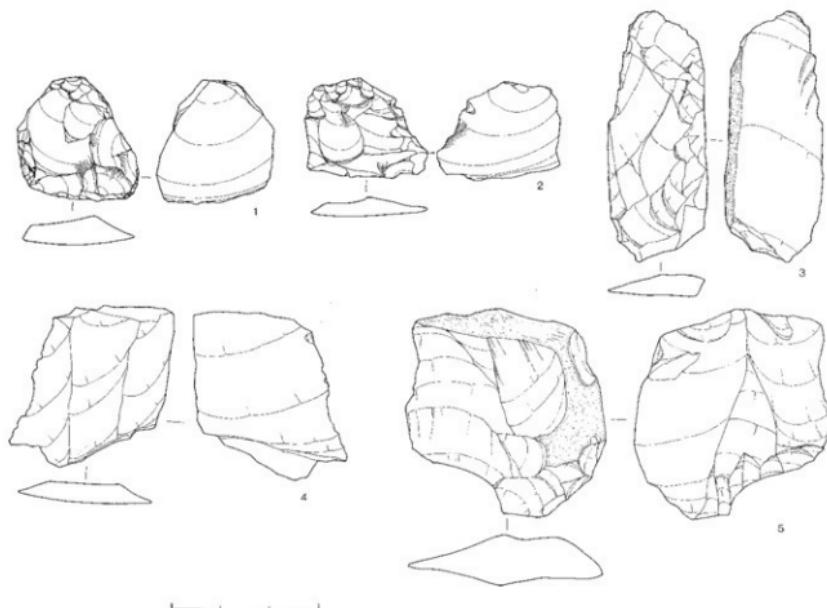
剥片（第7図3・4）3は縦長の剥片で表面は大まかな剥離で調整しているものの、裏面では1次剥離のみで調整は認められない。なお右側縁に原礫面を残置している。石材は安山岩を使用している。長さ68.0mm、幅26.4mm、厚さ5.2mm、重量13.40gを測る。

4は縦長剥片で、打面部を欠損している石刃である。表面にはほぼ平行する棱をもち、裏面は全く加工が認められない。石材は安山岩である。長さ43.9mm、幅35.5mm、厚さ5.0mm、重量12.36gを測る。

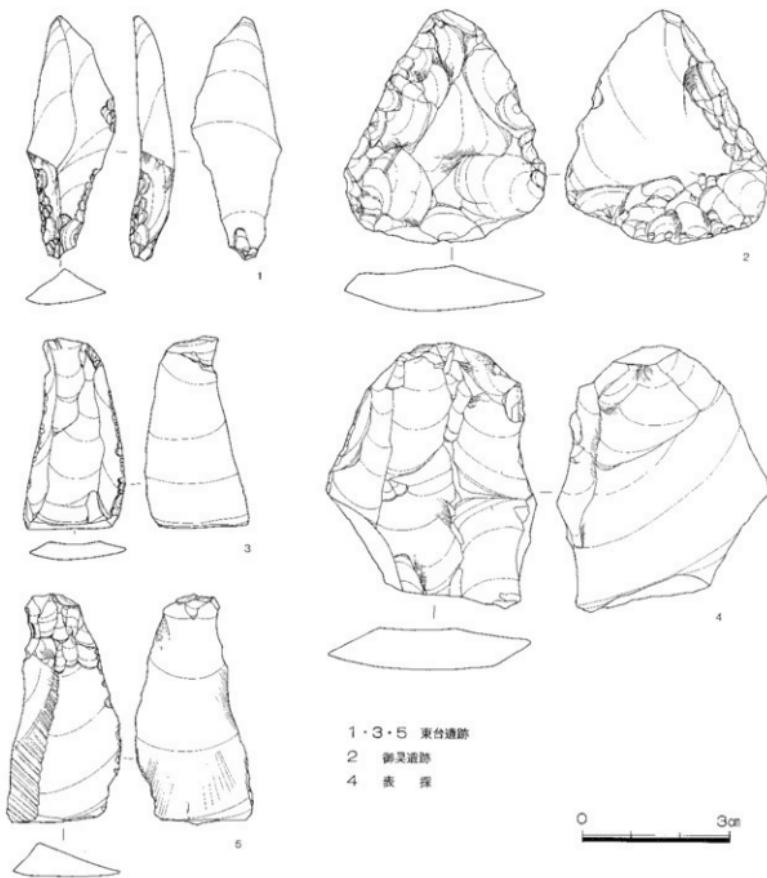
二次加工のある剥片（第7図5）打面部、末端部の欠失した剥片である。細かな調整は施されていないが、大まかな剥離が表裏面とも認められる。石材は安山岩を使用している。長さ55.6



第6図 宝積遺跡 8-10Cグリット 第IV層石器分布



第7図 宝積遺跡 8-10Cグリット 第IV層出土石器 (1/1)



第8図 木田余遺跡群出土遺物実測図 (少)

mm、幅 52.5 mm、厚さ 13.9 mm、重量 47.85 g を測る。

B) 東台遺跡（第8図）

本遺跡は縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期の集落跡と古墳群を伴う遺跡構成である。特に縄文時代の土坑群は遺跡の大半を占め、ローム層深くまで掘り起こされ、既に旧石器時代文化層は破壊されてしまっていることが判明している。しかし、これら遺構の一部から3点の石器が出土している。その石器の形状から判断して旧石器時代の石器であることは間違いないであろう。ここではナイフ形石器1点と二次加工のある剥片2点がある。

ナイフ形石器（第8図1）継長剥片の石刃を素材としている。基部に打面を残置し、基部両側縁に微細な刃潰し状の調整を施している。先端部には全く加工が行われていない。石材はチャートを使用している。長さ 66.2 mm、幅 21.5 mm、厚さ 9.4 mm、重量 11.32 g を測る。古墳時代の住居跡より出土した。

二次加工のある剥片（第8図3・5）3は継長剥片の石刃を素材としている。打面を残し、表面両側縁に微細な刃こぼれ状の剥離が認められる。石材は珪質頁岩を使用している。長さ 50.0 mm、幅 26.5 mm、厚さ 4.0 mm、重量 7.38 g を測る。3号墳周溝中より出土。

5もほぼ3と同じ形状を呈しており、継長剥片の石刃を素材とし、打面を残置している。基部に調整加工を施し、表面右側縁部に刃こぼれ状の剥離がみられる。石材は珪質頁岩である。長さ 62.4 mm、幅 29.5 mm、厚さ 5.8 mm、重量 13.82 g を測る。縄文土坑より出土。

C) 御戸遺跡（第8図）

本遺跡もまた先の東台遺跡と同様縄文時代中期・後期・古墳時代前期～後期・歴史時代の集落跡であり、古墳群を伴う遺跡である。やはり縄文時代の土坑群が集中しており、旧石器時代文化層の残存している確立はない。ここでは古墳時代住居跡から削器と表面採集資料として二次加工のある剥片が出土している。

削器（第8図2）横長剥片を素材としている。形状は三角形を呈しており、両面に加工が施された削器である。表面左側縁に比較的細かな調整剥離を行い、更に裏面の右側縁部と基部にやはり細かな剥離がみられる。石材はチャートを使用している。長さ 63.5 mm、幅 54.2 mm、厚さ 11.5 mm、重量 45.20 g を測る。古墳時代住居跡より出土。

二次加工のある剥片（第8図4）継長剥片を素材としている。打面を残置し、表面左側縁に微細な刃こぼれ状の剥離がみられるほか、大きな調整剥離が施されている。石材は流紋岩である。長さ 67.8 mm、幅 55.1 mm、厚さ 10.8 mm、重量 65.0 g を測る。

縄文時代



第9図 土浦市内縄紋時代中期の主な遺跡

1. 概 要

木田余台遺跡群のなかで縄文時代の遺跡は調査区の全てから確認されている。今回の報告では3遺跡について掲載している。時期は早期から後期にわたるが、とくに中期は豊富である。土浦市内ではこれだけの資料を提出した遺跡は今までないであろう。

まず早期は遺物の出土は少なく、僅かに土坑が東台遺跡で検出されている。前期は一丁目台遺跡において遺構を伴わないが、比較的良くまとまった土器群が出土している。前期中葉から後半にかけてのものである。中期は多量の資料を提出してくれている。東台遺跡では中期後半中峠式期から加曾利E1式期の時期で住居跡と多数の土坑をもつ集落跡である。御戸遺跡では中期中葉阿玉台式期から中峠式期、加曾利E4式期から称名寺式・堀之内1式期、更に加曾利B1式期の住居跡と土坑を検出されている。また今回掲載しなかった羽賀場遺跡からは加曾利E3式期から同4式期の集落跡が確認されている。

ところで市内では縄文時代の遺跡が多数知られている。国指定史跡である上高津貝塚をはじめ鳥山貝塚・小松貝塚等の貝塚遺跡のほか、縄文土器包蔵地は既に150箇所を超えるほど周知されている。なかでも中期の遺跡は多く1984年の調査では実に53遺跡にのぼる。また後期の遺跡は僅か10箇所に過ぎない（茂木1984）。ここで市内における中期の遺跡を列挙しておきたい。

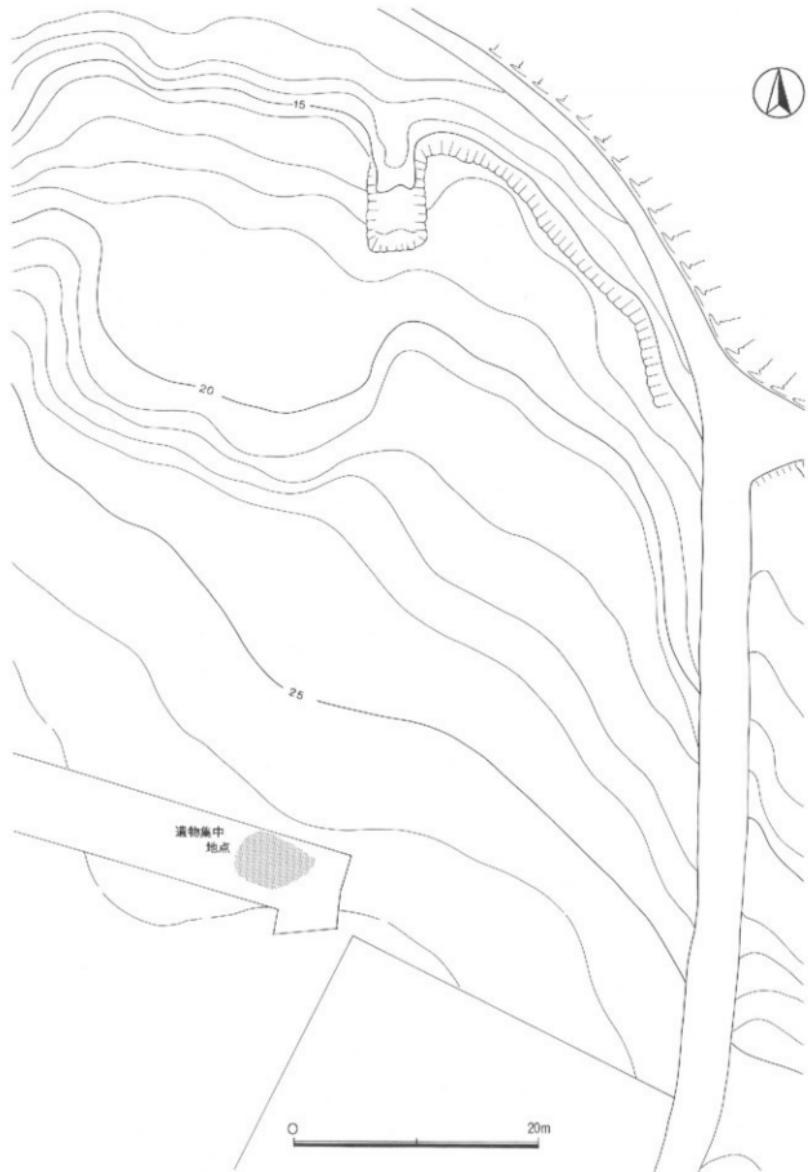
1. 東台遺跡（中峠式・加曾利E1）

2. 御戸遺跡（阿玉台式・中峠式・加曾利E1・E4）

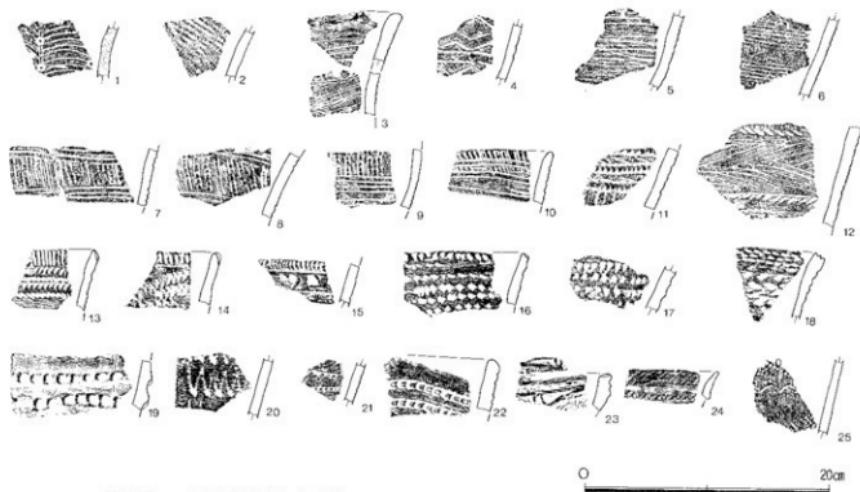
羽賀場遺跡（加曾利E3・4）

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 3. 谷原門遺跡（加曾利E） | 4. 木の宮北遺跡（加曾利E） |
| 5. 峰崎遺跡A地点（加曾利E1） | 6. 峰崎遺跡B東地点（加曾利E3・4） |
| 7. 峰崎遺跡C地点（加曾利E） | 8. 宮前遺跡（加曾利E1・2） |
| 9. 笹崎遺跡（加曾利E1～3） | 10. 石橋台遺跡（阿玉台・中峠・加曾利E1） |
| 11. 国分遺跡（加曾利E3） | 12. ピヤ首遺跡（加曾利E） |
| 13. 永国遺跡（中峠・加曾利E1） | 14. 内根B遺跡（加曾利E3） |
| 15. 上高津貝塚（加曾利E3・4） | 16. 宮脇B遺跡（加曾利E） |
| 17. 原口遺跡（加曾利E2） | 18. 新田遺跡（加曾利E） |
| 19. 神立遺跡（加曾利E1～3） | 20. 八幡遺跡（加曾利E3） |
| 21. 蟹久保遺跡（加曾利E1～2） | 22. 西山遺跡（加曾利E3） |
| 23. 天神脇遺跡（加曾利E） | 24. 中都遺跡（加曾利E） |
| 25. 神明遺跡（加曾利E1～2） | 26. 北西原遺跡（加曾利E） |
| 27. 小坂の上遺跡（加曾利E） | 28. 根本西遺跡（加曾利E2） |

上記のほかにも市内には中期の遺跡が確認されており、沖宿町上郷遺跡（中峠～加曾利E3）・同町北ノ内貝塚（加曾利E2～3）等は規模の大きな遺跡である。



第10図 一丁目台遺跡調査区地形図（縄文時代）（ $1/400$ ）



第11図 一丁目台跡出土遺物

2. 発見された遺構と遺物

A) 一丁目台跡（第9・10図）

当遺跡は木田余台遺跡群の北西端にあたり、北方向にひらく小支谷の谷東部の緩斜面に立地している。標高は26.5m、現水田面との比高差は約20mほどである。ここにちょうど遺跡に直行するように東西トレントをいれ、東端で歴史時代の住居跡1軒が検出された。当該遺構について次編で触れるが、この住居跡の北側に縄文時代前期の遺物包含層が確認された。遺物の集中範囲は約5×3の小規模であり、しかも生活面を検出することができなかったものの、前期黒浜式期から浮島式期の土器の出土は本地区では少なく、貴重である。

(1) 遺物

(1) 土器

前期中葉の土器（第10図1・2）1は半載竹管による平行沈線で肋骨文を描き、縦の区画文に円形竹管文を添える。2は単節斜縄文L Rを縦位方向へ回転させ施文している。いずれも胎土中に多量の繊維を含む。黒浜式である。

前期後半の土器（第10図3～23）3は無文地に平行沈線文が施された口縁部破片で、体部下半部では斜行線文がみられる。5・6も平行沈線文をもつ類である。

4は半載竹管による平行沈線文を鋸歯条に施し、変形爪形文を横位に施す。浮島I式である。

7～10は横位の平行沈線文間に縦位に爪形文を施す。11～15は変形爪形文土器で12は爪形文間に平行沈線文を描出す。13・14は口縁部に縦位の沈線文帯を設ける。16～18は三角文を施す一群である。連続三角文を横位に施し、18は口唇部にも表出している。

19は輪積痕をもつ土器である。20は波状貝殻文土器である。アナグラ属貝殻文をずらして施文する。

21・22は連続する爪形文を文様描出技法としてもつもので、いずれも口縁に平行して施文する。諸磯a式。23はいわゆる浮線文系土器である。口縁部で2条の浮線を単位としている。いずれも口縁に平行して施文する。諸磯b式。

中期初頭の土器（第10図24・25）24は口縁を外反し、折返し口縁である。地文として縄文施文する。25は横位の結節文をもつ土器である。下小野式である。

B) 東台遺跡

当遺跡は本田余台遺跡群の南東方向で霞ヶ浦を南に望む。ここはほぼフラットな台地面が広範に続き、南辺が緩傾斜する。標高は26～27mで、現水田面からの比高差は約21mである。

調査はこの東縁辺部に沿ってすすめた。表土層を除去後、Ⅲ層の堆積を検出した。さらに人力で精査しIV層まで掘り遺構の確認にあたった。その結果縄文時代住居跡2棟、土坑156基、弥生時代その他の住居跡34棟、古墳15基が検出されている。また縄文時代の遺構のほか多量の遺物が出土している。

（1）遺構と遺物

A 住居跡

S I 06（第11・12図）

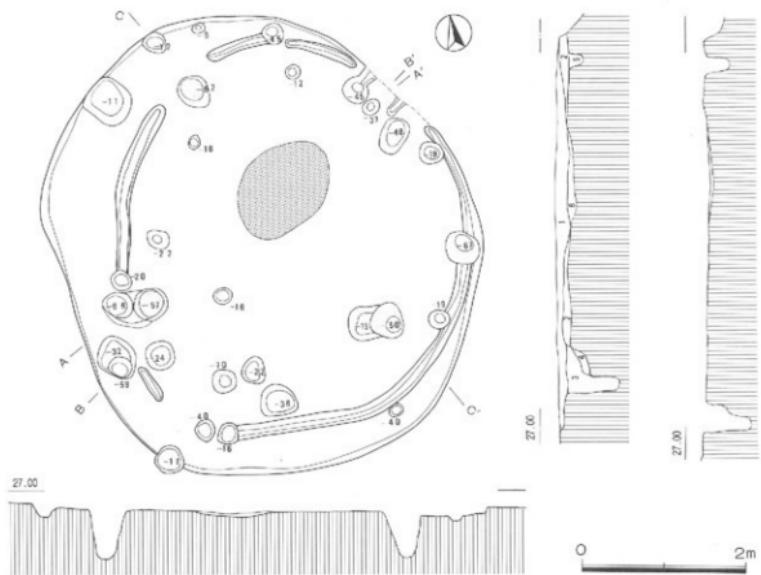
本調査区のはば中央部に位置し、集落の中にあっては南東端に占地している。平面形は不正円形を呈する竪穴住居跡で、しかも拡張住居である。新期の規模は主軸（北東－南西）5.0m×副軸（北西－南東）5.58m、旧期は主軸4.75m×副軸4.55mを測る。

周溝は旧期の住居跡で検出されている。幅20cm、深さ5cmを測る。全周はしないが、ほぼ一周する。新期住居跡では周溝はなく、壁のみ全周する。しかし、後世の深耕のため削平されその遺存状態は不良で、僅かに10cmの壁高を確認するにすぎなかった。

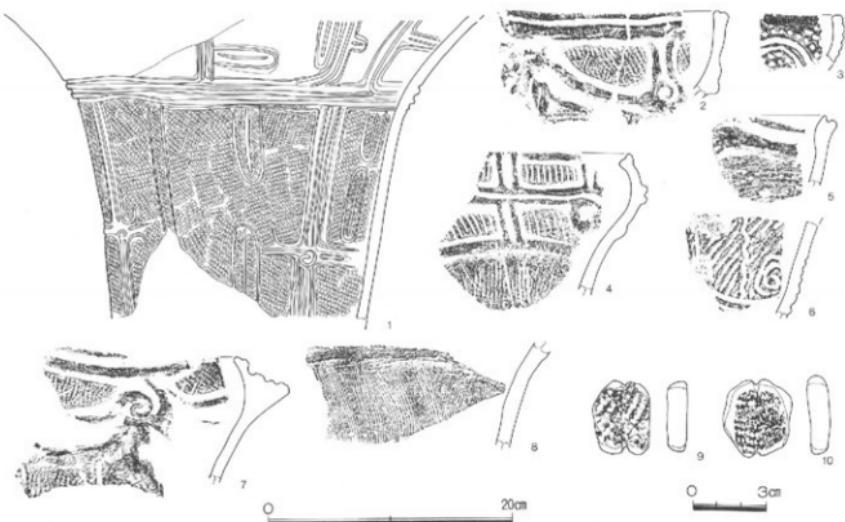
柱穴は、新期で6本、旧期で5本が確認された。新期の6本は北東・東・南東・南・西・北西部に位置し、ちょうど六角形を呈する。いずれも円筒形をなし、深さは40～67cmを測る。旧期の5本は北東・東・南東・南西・北西部に位置し五角形を呈し、やはり円筒状で、深さ48～70cmとほぼ一定している。

床面はほぼ平坦で、炉址周辺がとくに堅緻に踏み固められていた。炉址は床面のはば北寄りに位置する。規模は長径1.28短径0.96m深さ0.06mの樽円形を呈し、浅い皿状の地床炉であり、新旧2時期共通使用していたと思われる。

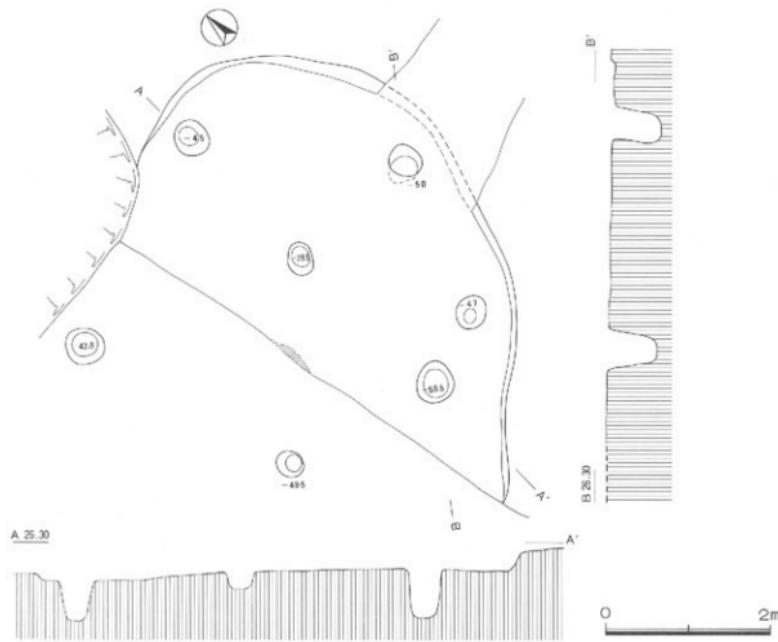
覆土の堆積は自然堆積土で、6層に分層されている。1層 黒色土（ローム粒子を僅かに含む）、2層 褐色土（ローム粒子を多く含む）、3層 黑褐色土（ローム粒子を僅かに含む）、4層 暗褐色土（ローム粒子を僅かに含む）、5層 黑褐色土（ローム粒子を僅かに含む）、6層 赤褐色土（焼土粒子を含む）である。



第12図 東台遺跡 S I 06 実測図



第13図 東台遺跡 S I 06 出土遺物

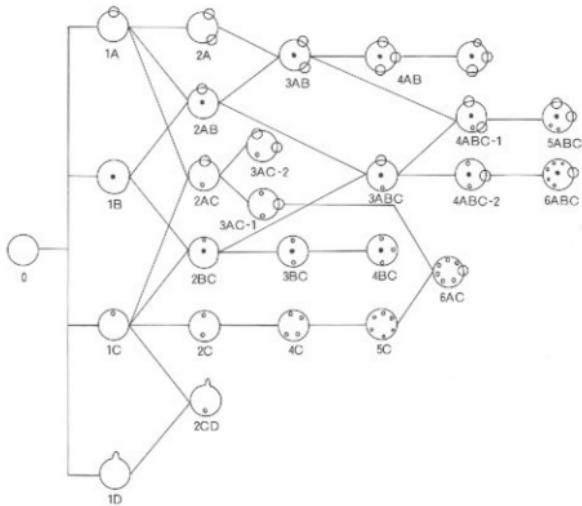


第14図 東台遺跡 S I 18

出土遺物（第12図1～10）

1は炉附近の床面上より出土したもので、口縁部および底部を欠損している。口縁部下部は無文地に沈線により区画文が施され、体部は単節縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下している。2・4・7はキャリバー型の深鉢で、いずれも口縁部破片である。文様は隆帯による横位の区画分を施し、体部に沈線文を垂下させる。3も口縁部破片で刺突文を地文に沈線より曲線文を描出している。5は口唇部に太い沈線を巡らす。6・8は体部破片である。6は撚糸文を地文に沈線により懸垂文を垂下させる。8は柳歛状工具による条痕文を垂下させている。以上3を除き加曾利E1新期に比定できる。

9・10は土器片鱗である。これらは土器の破片を板状に打ち欠いて両端一対にV字状の溝を入れ、糸掛け部を作出したものである。2点とも土器片の周縁を打ち欠いて調整した打割調整で、更に周縁に研磨調整を加える。けい形状は楕円形を呈し、9は長さ3.0cm、幅2.35cm、厚さ0.8cm、重量9.5gを測る。10は長さ3.15cm、幅2.7cm、厚さ0.85cm、重量10.2gを計る。



第15図 東台遺跡土坑系統図

S I 1 6 (第13図)

本調査区の北寄りに位置し、集落の中にあって南方に占地している。当住居跡は西半分を中世造構によって切られ、しかも大半は2号墳周構により削平されてしまっている。現存している形状は椭円形を呈しており、現長径5.93mを測る。周壁は約10cmほどの高さでやや緩く外傾して開いている。柱穴は6本確認でき、いずれも円筒状を呈し、深さ42.5～59.5cmとほぼ均一である。なお柱は6本であるが、南に位置する柱穴は2本接近しており、いずれかは立替えされているものと考えられ、主柱穴は五角形と推定できる。

床面はほぼ平坦であるが、特に堅緻なところは見受けられなかった。炉址は大部分が破壊され、僅かに住居跡の中央付近に位置する。その規模は不詳である。覆土の状態も不良であった。

出土遺物は小片のみでここに図示できるものは一片もないが、小片より判断して加曾利E1式期であることは誤りないであろう。

B. 土坑 (Fig. 2 ~ Fig. 29)

調査区内における縄文時代中期の土坑は全部で103基検出された。確認面はすべてローム層面で、一部古墳周溝内で発見されたものもある。調査は平面確認後セクションを観察するためセクションベルトを設けるか、あるいは土坑の半分の覆土を掘り下げる方法を用いた。セクションはなるべく客観的に把握するため「標準土色帳1970」を参考に土質の色調を判別した。

なおセクション実測後、セクションベルトを除去し土坑本体の覆土の完全掘り上げ、加えて下部施設の確認を行った。本調査区内の土坑の大半は下部施設を伴うことが判明し、縄文中期後半期における土坑の一様相を明らかにすることができた。

覆土 土坑内に堆積している覆土の諸要因を大別すると自然埋土と人為埋土に分けることができる。自然埋土は黒色系を基調に、加えて壁の崩落などによるロームを多く含む黄褐色土もしくは黄橙色土を基本土層とし、人為埋土は当調査区の基本土層であるⅢ層に類似した暗黄褐色土系を基調とするもので、層厚が比較的厚くしかも層がいわゆるレンズ状堆積を示さないもの、または層序を判別するにやや困難を要するものが多い。

なお本調査区の土坑覆土の土層説明について、とくに人為埋土とはっきり判別できるものは「(埋め戻し)」として土層断面図中に付すこととした。

形態 本調査区内で検出された土坑のうち、縄文中期に属すると判断される土坑の形態はほとんどが円形を基本とするもので、方形あるいはこれに近い形は皆無である。掘り上げた形態を見るかぎりではやや不整形に見えるものもその坑底形はすべて円形もしくは梢円形である。したがってここでは確認平面形よりも、分類に際してはむしろ坑底面の形状および底部施設を基準して分けている。

そしてその横断面は上狭下広の「袋状」を呈するものが一般的であるが、いわゆる「袋状」土坑のうち内傾角度の鈍い三角フラスコ型が最も多く、次いで底面直上で大きく膨らむ袋型があり、そのほか円筒状あるいは皿状もみられる。

また底部施設も複雑で一定の統一性はみられないが、基本的な底部施設は4種類がみとめられる。まず坑底中央部に配される主柱穴状のセンターピット、壁側に配される壁柱穴状のサイドピット、やはり壁側に配置するいわゆる子ピットと呼ばれているサイドポケット、壁中に土器等を埋設する小ピットのソケットピットが確認され、これら施設が何種類か組み合わさって一つの土坑を構成している。本調査区で検出された土坑ではこれら坑底施設の組み合わせによって下記の24種類に分類可能である。

0類 坑底施設を全くもたないもの。(24基)

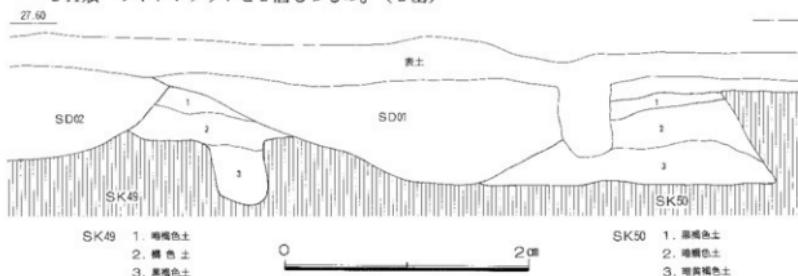
1A類 サイドポケットを1個もつもの。(16基)

1B類 センターピットを1個もつもの。(7基)

1C類 サイドピットを1個もつもの。(4基)

1D類 ソケットピットをもつもの。(1基)

2A類 サイドポケットを2個もつもの。(2基)



第16図 東台遺跡 SK49・50 断面図

- 2 AB類 サイドポケットとセンターピットを1個づつもつもの。(11基)
2 AC類 サイドポケットとサイドピットを1個づつもつもの。(3基)
2 BC類 センターピットとサイドピットを1個づつもつもの。(7基)
2 C類 サイドピットを2個もつもの。(1基)
2 CD類 サイドピットとソケットピットを1個づつもつもの。(1基)
3 AB類 サイドポケット2個とセンターピット1個をもつもの。(4基)
3 ABC類 サイドポケット1個、センターピット1個、サイドピット1個をもつもの。(4基)
3 BC類 センターピット1個とサイドピット2個をもつもの。(4基)
3 AC-1類 サイドポケット1個とサイドピット2個をもつもの。(1基)
3 A-2C類 サイドポケット2個とサイドピット1個をもつもの。(1基)
4 ABC-1類 サイドポケット2個、センターピット、サイドピット1個をもつもの。(2基)
4 ABC-2類 サイドポケット1個、サイドピット2個およびセンターピットをもつもの。
(1基)
4 AB類 センターピット1個とサイドポケット3個をもつもの。(1基)
4 C類 サイドピットを4個もつもの。(1基)
4 BC類 センターピットとサイドピット3個をもつもの。(1基)
5 ABC類 サイドポケット2個、サイドピット2個とセンターピットをもつもの。(1基)
6 AC類 サイドポケット1個とサイドピット6個をもつもの。(1基)
6 ABC類 サイドポケット1個、センターピット、サイドピット7個をもつもの。(1基)
以上底部施設形態から24種類という多くの分類が可能であったが、より多くの施設を設ける土坑の占める割合は極端に少ない、単純な0類および1類(施設が1種類)の土坑が半数以上ある。またいわゆる子ピットと呼ばれるサイドポケットの形状はパライティーに富んでおり一様ではなく、ここでは柱状のピットと明らかに異なる遺構でしかもはっきりと施設として機能しているものを見ている。

なお構築時期は比較的短時間で縄文中期後半・中晩式から加曾利E 1式に限定される。以下本調査区で検出された土坑について述べてみたい。

S K03 (Fig 2) 円形を呈し、底部長径2.47 短径2.29 深さ0.47 mを測る。壁は底面より内傾する三角フラスコ状が南壁面で認められるほかは、確認面で大半が外方へ開く。坑底施設は南および西壁でサイドポケットが付されている。南サイドポケットは長径128 短径60 深さ20cm、また西サイドポケットは長径71 短径45 深さ15 cmでいずれも子ピットの範囲から外れる。覆土はほぼ自然埋土である。出土遺物は少ないが、ほぼ復原できるものが1点あり、加曾利E 1新期である。

S K04 (Fig 2) 円形を呈し、底部長径2.465 短径(1.56)深さ0.375 mを測る。なおSK05に北壁が切られている。壁はやや開き気味に立ち上がる。坑底施設は、東西両壁側にサイドポケットを設ける。東サイドポケットは壁際に接して構築されており、長径54 短径38 深さ31cmで、西サイドポケットは壁より若干離れて設けている。長径69 短径63 深さ46 cmを測る。これ

らは子ピットの範疇に含まれるであろう。覆土は単純で7~9層の暗褐色土・暗黄褐色土は埋め戻し土層である。出土遺物は小片で器形は窺い知れないが、加曾利E1新期である。

SK05 (Fig 2) 南側でSK04を切っている。円形を呈し、底部長径2.665短径2.38深さ0.70mを測る。壁はやや凸凹のある底面から緩く内傾し開口部にいたる。坑底施設は南壁際に皿状の浅いサイドポケットを配している。形状は楕円形で長径93短径55深さ7.5cmである。また覆土は自然埋土で5層までレンズ状の堆積状態を呈していた。出土遺物は浅鉢形土器1点と小片および底部である。加曾利E1古期である。

SK07 (Fig 2) 円形を呈する。底部長径1.922短径1.81深さ0.55mを測る。底面は平坦で、側面から緩いカーブで内傾し開口するいわゆる袋状形態をもつ。坑底施設として北壁際に長径45短径36.5深さ26cmの楕円形のサイドポケットを付する。覆土は単純で2層暗褐色土は埋め戻し土層である。出土遺物は小片であるが、加曾利E1式期に属する。

SK08 (Fig 3) ほぼ円形を呈する。底部長径2.76短径2.50深さ0.98mを測る。壁は平坦な側面から内傾しながら開口する三角フラスコ状を呈するが、西壁上のピットは付随施設ではなく構築時期は異なる。坑底施設は径20.3深さ30.4cmのセンターピット1個だけである。覆土はレンズ状をなす自然埋土で、多量の遺物が含まれていた。遺物はすべて覆土中に2層黒褐色土中に集中し、完形土器1点を含み多量の土器片がまとめて出土している。加曾利E1新期である。

SK09 (Fig 3) 楕円形を呈し、底部長径2.47短径2.05深さ0.615mを測る。壁は底面よりほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。坑底施設は3ABC類で、センターピット、サイドピット1、サイドポケット1の3施設を保有する。センターピットは径30深さ40cm、サイドピット径40深さ58cm、子ピット状をなすサイドポケットは長径143短径92深さ50.1cmを測る。土坑内より完形土器1点を含む土器破片が多く出土している。加曾利E1新期である。

SK10 (Fig 3) 円形を呈する。底部長径2.30短径2.08深さ0.465mを測る。壁は平坦な底部からやや内傾しながら開口する。坑底施設はセンターピット1個だけである。センターピットは径32深さ40cmで垂直に穿っている。覆土は自然埋土でほぼレンズ状堆積している。出土遺物は小片のみで図示できるものはないが、加曾利E1式期である。

SK11 (Fig 4) 楕円形を呈する。底部長径1.515短径1.34深さ0.86mを測る。壁は平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がる。覆土は自然埋土で、出土遺物は小片のみである。坑底施設も検出されていない。構築時期は加曾利E1式期である。

SK12 (Fig 4) 正円形に近い形状を呈し、底部長径2.98短径2.83深さ0.89mを測る。断面形は底面近くで大きく膨れる袋状をなす類で、やや平坦な底面から緩いカーブを描きながら開口する袋型である。覆土は自然埋土で8層観察できた。覆土中央は黒褐色土、壁周囲は壁崩落によるロームが混在する黄褐色土や暗黄褐色土である。覆土中より大型の土器破片が出土している。坑底施設は伴わない。加曾利E1古期である。

S K13 (Fig 4) 略円形を呈する。底部長径 2.57 短径 2.31 深さ 0.735 m で壁はほぼ垂直に立ち上がるタライ状をなす。坑底施設はセンターピット 1 個とサイドポケット 1 個を伴う。センターピットは径 37 深さ 56 cm、サイドポケットは径 61 深さ 67 cm の円形を呈する子ピットを伴う。覆土は自然埋土で底部および壁際に壁崩落によるロームを含む褐色土と明褐色土、明暗褐色土が堆積している。出土遺物も多く、無節縄文施文の深鉢（完形）1 点を含む浅鉢や底部破片が検出されている。加曾利 E 1 新期である。

S K14 (Fig 5) 円形を呈し、底部長径 2.69 短径 2.40 深さ 0.665 m を測る。壁は平坦な底面から内傾して開口する三角フラスコ型で、坑底施設はセンターピット 1 個とサイドポケット 2 個を付随する。センターピットは径 20 深さ 33 cm、サイドポケットの北側は長径 114 短径 69 深さ 18 cm、西側は長径 93 短径 60 深さ 14.5 cm で非常に浅く、これらは子ピットに対してまさにサイドポケットの典型である。また覆土は平均的な自然埋土で、壁周辺に壁の崩落ロームが堆積している。出土遺物は比較的多く実測可能な土器 3 点の他大型破片がある。加曾利 E 1 古期である。

S K16 (Fig 5) 開口部は不正円形であるが、底部は円形を呈している。底部長径 3.22 短径 2.97 深さ 0.94 m を測る。壁は平坦な床面から緩いカーブで内傾し開口する三角フラスコ型である。坑底施設としてサイドピット 2 個、ソケットピット 2 個、小ピット 1 個をもつ。サイドピットは東西に位置し、東ピットは径 27 深さ 62 cm、西ピットは径 21 深さ 32 cm で、ソケットピットは南西に位置し、いずれも径 18 奥行 26 cm を測る。また小ピットは径 28 深さ 16 cm である。覆土は自然埋土で 12 層確認できる出土遺物は覆土中より僅かに検出されており、加曾利 E 1 古期の土器が主体である。

S K18 (Fig 6) 南壁に接して S K18 が重複しているが、本土坑が古く S K18 は近世以降の所属と考える。本土坑は円形を呈し、底部長径 2.63 短径 2.11 深さ 0.85 m を測る。壁は平坦な底面よりほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設としてはセンターピット 1 個とサイドポケット 1 個をもつ。センターピットは径 30 深さ 48 cm、サイドポケットの北西に配し径 77 深さ 50 cm の円形の子ピットである。出土遺物は破片が多いが比較的まとまっている加曾利 E 1 新期である。

S K20 (Fig 6) やや規模の小さな円形土坑で、底部長径 2.15 短径 1.88 深さ 0.62 m を測る。壁は平坦な底面から内傾しながら開口するフラスコ型である。坑底施設はなく、覆土は 4 層確認され、2 層暗褐色土および 3 層暗黄褐色土は埋め戻し土層である。この埋め戻し土層中に胴部下半部の土器 2 点と口縁部破片が出土している。加曾利 E 1 新期である。

S K21 (Fig 6) 典型的な三角フラスコ型を呈する円形土坑である。底部長径 3.48 短径 2.96 深さ 1.18 m を測る。壁は平坦な底面よりやや凸凹しながら内傾して立ち上がる。坑底施設は壁の周辺にピットが 7 個不規則に配されている。これらのピットはここ言うサイドピットの一群で特に北側から東側にかけて集中する。規模は径 20 ~ 30 深さ 30 ~ 60 cm と一定している。覆土は 5 層確認され、最下層の 4 層の明褐色土は埋め戻し土層と考えられている。また遺物は 1 層黒褐

色土より集中して出土している。加曾利E 1新期である。

S K22 (Fig 7) やや小型の円形土坑で、底部長径 2.35 短径 2.17 深さ 0.76 m を測る。壁は平坦な底面から緩いカーブを描きながら内傾して立ち上がるフラスコ型である。坑底施設はセンターピット 1 個、北と西側にサイドポケット 2 個をもつ。センターピットは径 14 深さ 44 cm、北サイドポケットの長径 41 短径 33 深さ 44 cm、西サイドポケットは長径 64 短径 53 深さ 12 cm を測る。覆土は 6 層に分かれ、いずれも自然埋土である。覆土中に土器破片が出土している。加曾利 E 1 新期である。

S K24 (Fig 7) 正円形のフラスコ型土坑である。底部長径 2.65 短径 (2.15) 深さ 0.57 m を測る。壁はフラットな底面から内傾しながら開口する。坑底施設は南壁際に長径 88 短径 55 深さ 20 cm を測る楕円形サイドポケットが配される。覆土は 6 層に分層でき、サイドポケット内の 2 層を除き埋め戻し土層である。覆土中より遺物は比較的多く出土している。完形の深鉢 1 点およびほぼ完形 2 点を含み、口縁部破片が多量に検出された。加曾利 E 1 古期である。

S K25 (Fig 7) 開口部は長径 2.78 短径 2.53 深さ 0.78 m の円形を呈し、底部長径 3.38 短径 2.89 m を測る大型のフラスコ型土坑である。壁は平坦な底面から緩やかに内傾して立ち上がる。土坑内は 5 層にわたって堆積し、奇麗なレンズ状堆積をなしている。覆土中の遺物は多く完形土器 1 点を含み底部や大型破片が出土している。加曾利 E 1 古期である。

S K26 (Fig 8) 整った楕円形を呈する大型の土坑である。底部長径 2.92 短径 2.54 深さ 0.70 m を測る。壁はフラットな底面から内傾し開口する。坑底施設はサイドピット 2 個とサイドポケット 1 個を伴う。なお北壁上にあるピットは本土坑に伴わないものと考えられる。サイドピットは長軸から僅かに北へずれるものの、ピットはほぼ南北に配する。北ピットは径 25 深さ 28 cm、南ピットは径 23 深さ 32 cm である。またサイドポケットは南東に位置し長径 2.65 短径 (2.15) 深さ 0.57 cm を測る。壁はフラットな底面から内傾しながら開口する。坑底施設は南壁際に長径 68 短径 63 深さ 63 cm の円筒状を呈している。覆土は 5 層あり、検出覆土の半分以上は 5 層暗黄褐色土の埋め戻し土層で覆われている。覆土中より口縁の大型破片が出土しており、加曾利 E 1 古期に位置づけられる。

S K27 (Fig 8) 開口部は不正円形を呈するが、底部では略円形である。底部長径 2.95 短径 2.70 深さ 0.715 m を測る。壁は平坦な底面から北東部は大きく内傾しフラスコ型をなすが、南西部ではほぼ垂直に立ち上がり開口する。覆土は自然埋土で 8 層観察できた。覆土中央は黒褐色土、壁周囲は壁崩落によるロームが混在する明褐色土である坑底施設は壁周囲に径 20 ~ 30 深さ 30 ~ 55 cm の円形のサイドピット 4 個を伴う。覆土中より完形の深鉢 1 個体と口縁部破片が出土している。中峠式期である。

S K28 (Fig 9) 典型的な三角フラスコ型土坑で、その形状は正円形を呈する。開口部長径 2.10 短径 2.09 深さ 0.92 m で底部長径 2.94 短径 2.90 m を測る。壁は平坦な底面から大きく内傾し開口部へ移行する。坑底施設はセンターピット 1 個とサイドピット 2 個を伴う。センターピッ

トは径 20 深さ 18 cm、サイドピットは北東部と北西部に位置し、いずれも径 25 深さ 30 cm を測る。覆土は上層が自然埋土、下層が埋め戻し土層である。覆土中より遺物の包含が多く、多量の土器破片が出土している。加曾利 E 1 古期である。

S K30 (Fig 9) 長椭円形を呈し、底部長径 2.16 短径 1.65 深さ 0.65 m を測る。壁はやや平坦な底面から内傾して開口する三角フラスコ型で、坑底施設は検出されていない。覆土は典型的な埋め戻し土層である。出土遺物は小片のみで図示できなかった。時期は加曾利 E 1 式期である。

S K31 (Fig 9) 開口部の広い円形土坑である。底部長径 2.23 短径 1.92 深さ 0.32 m を測る。壁は平坦な床面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設としてサイドポケット 2 個、サイドピット 1 個をもつ。サイドポケットは東西に位置し、東ポケットは径 52 深さ 35 cm、西ポケットは径 50 深さ 38 cm で、サイドピットは西ポケットの脇に穿ってあり径 24 深さ 37.5 cm を測る。出土遺物は覆土中より大型破片が出土しており、加曾利 E 1 古期の土器が主体である。

S K32 (Fig 10) 西壁に接して S K84 が重複しているが、本土坑が古く S K84 は近世以降の所属と考える。本土坑は円形を呈し、底部長径 2.65 短径 2.46 深さ 0.50 m を測る。壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設としてセンターピット 1 個とサイドポケット 1 個をもつ。センターピットは径 30 深さ 31 cm で、サイドポケットは北西に配し径 53 深さ 51 cm の円形の子ピットである。覆土は 8 層に分層でき、自然埋土である。覆土中に大型の口縁部が出土しており、加曾利 E 1 古期である。

S K33 (Fig 10) 正円形を呈する土坑で、底部長径 3.07 短径 2.97 深さ 0.76 m を測る。壁は平坦な底面から内傾しながら開口するフラスコ型である。坑底施設としてセンターピット 1 個とサイドポケット 1 個を伴う。センターピットは径 30 深さ 59 cm、サイドポケットは北に位置し、径 68 深さ 13 cm の皿状のポケットピットである。覆土は 8 層観察され、自然埋土を呈している。覆土中より完形深鉢 1 個体を含み浅鉢などまとまった出土がみられた。加曾利 E 1 新期である。

S K34 (Fig 10) 略円形を呈する浅い土坑である。底部長径 2.86 短径 2.53 深さ 0.64 m を測る。壁は平坦な底面よりほぼ垂直に立ち上がりながら開口する。坑底施設はなく、南壁に S K99 が重複しているが、本土坑のほうが古い。なお規模のわりには出土遺物は豊富で実測可能な深鉢 4 個体のほか底部や口縁部破片が多数検出されている。加曾利 E 1 古期である。

S K35 (Fig 11) 略円形の土坑である。底部長径 2.80 短径 2.70 深さ 0.39 m を測る。壁はフラットな底面から緩やかに外反しながら開口する。坑底施設は北西壁際に径 23 深さ 48 cm を測る円形サイドピットが配される。覆土中に縄文土器破片が僅かに出土しただけである。加曾利 E 1 式期である。

S K36 (Fig 11) 開口部は長径 2.03 短径 1.83 深さ 0.67 m の円形を呈し、底部長径 2.20 短径 2.04 m を測る小型のフラスコ型土坑である。壁は平坦な底面から緩やかに内傾して立ち上がる。坑底施設は伴わない。土坑内は 3 層にわたって堆積し、埋め戻し土層の様相を呈している。

覆土中の遺物も土坑規模の割に多く、深鉢完形土器1点を含み浅鉢や底部・大型口縁部破片が出土しており、本調査区でも最もまとまって検出された土坑の一つで加曾利E 1古期である。

SK38 (F i g 12) 開口部は不整形を呈するものの、底面は略円形土坑である。底部長径2.52 短径2.42 深さ0.68 mを測る。壁はフラットな底面から大きく内傾し開口する。坑底施設はサイドポケット1個が南東壁に接し意配されている。規模は長径51 短径44 深さ47 cmの円形ポケットで子ピット状を呈している。また覆土は8層に分層でき、ほぼレンズ状に堆積している。覆土中より浅鉢を含み口縁部破片等比較的多くの土器片が出土している。加曾利E 1古期に位置づけられる。

SK36 (F i g 11) 東壁約半分が古墳周溝によって切られている。形状はほぼ円形土坑を呈し、底部長径3.00 短径2.98 深さ0.85 mを測る。壁は平坦な底面から緩やか外方へ立ち上がり開口する。坑底施設はちょうど南北にサイドピットが配している。南ピットは径29 深さ51 cm、北ピットは径27 深さ48 cmの円形ピットではほぼ垂直に穿っている。覆土は5層に分層され中位に埋め戻し土層である黄暗褐色土が堆積している。出土遺物は少なく小片が検出されたのみである。加曾利E 1式期である。

SK43 (F i g 13) 典型的なフ拉斯コ型を呈する円形土坑である。開口部長径2.19 短径2.08 深さ0.92 m、底部長径3.01 短径2.71 mを測る。坑底施設として西壁に穿かれた径30 奥行20 cmのソケットピットが確認された。このソケットはちょうど土器を横にしてインサートされていたものと思われる。また壁はフラットな底面から大きく内傾しながら開口する。覆土は10層に分層でき自然堆積を呈している。この覆土中に多量の土器が出土している。大型深鉢を含め浅鉢や底部等大型破片の検出が目立つ。時期は中晩式新期に位置付けできる。

SK44 (F i g 12) 北壁を古墳時代の住居跡によって切られている。ほぼ円形を呈する小型の土坑である。底部長径は1.46 短径1.39 深さ0.34 mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設は伴わない。覆土は5層に分層でき自然堆積である。出土遺物は小片で図化できなかった。加曾利E 1式期である。

SK45 (F i g 12) 南側が住居跡によって半分切られている。円形を呈し底部長径1.94 深さ0.60 mを測る。壁はフラットな底面から緩く外傾し開口部にいたる。坑底施設は西壁際にサイドポケットを配している。形状は梢円形で長径43 短径30 深さ29 cmである。また覆土は自然埋土でレンズ状の堆積状態を呈していた。出土遺物は完形土器1点を含み保完状態の不良の割には大型の土器破片が検出されている。加曾利E 1古期に位置付けできる。

SK46 (F i g 13) SK46によって西壁が切られている。したがってSK46より古期である。平面形は梢円形を呈している底部長径2.26 短径1.63 深さ0.76 mを測る。底面は平坦で、底面から緩いカーブで内傾し開口するいわゆるフ拉斯コ状形態をもつ。坑底施設は伴わない。覆土は埋め戻し土層で、2層はハマグリを主体とする混土貝層が検出されている。全部で9層確認している。出土遺物は多く、実測可能な土器5個体を含め、大型破片が多量に検出できた。時期は加曾

利E 1古期に比定される。

S K47 (Fig 13) S K46を切って構築されている。円形土坑で、底部長径 2.30 短径 2.30 深さ 0.72 m を測る。壁は平坦な底面から内傾しながら開口する三角フラスコ状を呈するが、西壁上の土坑は付随施設ではなく構築時期は異なる。坑底施設は伴わない。覆土中より大型破片を含めた土器が数点出土している。加曾利E 1式期に属する。

S K48 (Fig 13) 略円形を呈し、底部長径 1.84 短径 1.615 深さ 0.33 m を測る。壁は平坦な底面から開き気味で立ち上がる。坑底施設は検出できない。覆土は 3 層に分層できいずれも自然埋土である。覆土中より小片の土器が比較的多く出土している。加曾利E 1古期である。

S K49 (第15図) 未調査区の崖断面で発見した土坑である。大半は後世の溝によって破壊されその全貌を掌握できない。僅かに残された横断面から判断すると、径 50 cm、深さ 50 cm のサイドポケットが確認できるだけである。なお本土坑からは多量の縄文土器が出土しており、復元可能な土器 1 点を含め、口縁部破片が検出されている。時期は加曾利E 1新期である。

S K50 (第15図) S K49の北に位置する。やはり崖断面でみつけたもので、底面の長さが 2.45 m を測る。壁は平坦な底面から大きく内傾して開口する三角フラスコを呈している。覆土の土層は 3 層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は小片のみで図示できなかったが加曾利E 1式期である。

S K51 (Fig 13) 東半分の調査である。現存底部長径 2.67 深さ 1.00 m を測る。壁はやや凸凹のある底面から緩いカーブを描きながら内傾して開口する。坑底施設はセンターピットとその南側に位置するサイドポケット 1 個がある。センターピットは径 22 深さ 37 cm、サイドポケットは長楕円形を呈し、長径 86 短径 47 深さ 16 cm である。層土は 7 層に分層でき自然堆積層である。遺物は小片のみではり加曾利E 1古期に比定される。

S K52 (Fig 14) 南壁に S K88が切っている。当該土坑は近世以降の時期に比定できる。また上面は古墳周溝によって壊されている。ほぼ正円形をなし、底部長径 2.39 深さ 短径 2.25 深さ 0.57 m を測る。壁はフラットな底面から大きく内傾するフラスコ型である。坑底施設は径 28 深さ 21 cm の円形ピットが穿ってある。覆土 6 層に分けられ、いずれも自然埋土である。遺物は浅鉢 1 点を含み僅かであるが口縁部破片が出土している。加曾利E 1古期に比定される。

S K53 (Fig 14) 南半分が切られ、しかも上面は周溝によって壊されている。形状はほぼ正円形を呈し、現存底部長径 2.80 深さ 38.5 m を測る。壁は一部内傾するものの、全体には垂直に立ち上がり開口する。坑底施設は西壁接して楕円形のサイドポケット 1 個が配している。規模は長径 157 短径 99 深さ 9 cm である。覆土は 4 層確認でき遺物は小片が僅かに出土している。加曾利E 1古期に位置付けできる。

S K54 (Fig 14) S K75に切られて構築されている。椭円形土坑で、底部長径 1.44 深さ 0.52 m を測る。壁は平坦な底面から外傾しながら開口する坑底施設は伴わない。覆土より口縁部破片が 1 点だけ出土している。加曾利E 1式期である。

S K55 (Fig 14) 北壁にSK77に切って構築している。形状は楕円形で底部長径2.13短径1.99深さ0.12mを測る。壁は南側のみ検出され、周囲の壁の立ち上がりは確認できなかった。坑底施設はセンターピットとサイドポケット2個保有している。センターピットは径19深さ31cmである。またサイドポケットは北東部と南西部があり、北西部の規模は長径84短径43深さ43cmの円形をなし、南西部のポケットは長径72短径60深さ16cmである。遺物は少ないが北西ポケット中より阿玉台式土器が出土している。

S K56 (Fig 15) 大型の円形土坑である。底部長径3.42短径3.28深さ1.01mを測る。壁はフラットな底面から大きく内傾しながら開口する。坑底施設は多く、センターピット1個とサイドピット7個およびサイドポケット1個が伴う。センターピットは径26深さ59cmであり、サイドポケットは南壁に接して位置しその規模は長径50短径32深さ20cmの楕円形を呈している。サイドピットは7個あり径20~40深さ20~25cm前後の同規模の大きさである。覆土は6層確認できるものの状態は良くない。遺物は深鉢1個体のみ出土している。加曾利E1新期である。

S K58 (Fig 15) SK61を切って構築している。形状は長楕円形でその底部長径は2.92短径2.55深さ0.53mを測る。壁は若干凸凹のある底面から僅かに内傾し開口している。坑底施設はセンターピット1個とサイドポケット1個からなる。センターピットの規模は径18深さ80cm、サイドポケットは長径100短径45深さ31cmである。ここはちょうどS I 04が上面に貼床しており、床直下に位置している。覆土は9層堆積おり、いずれも自然埋土である。遺物は僅かに小片が5点出土したに過ぎない。加曾利E1古期である。

S K59 (Fig 16) 略円形を呈する土坑である。底部長径1.96短径1.67深さ0.25mを測る。壁はやや丸底状の底面からゆるやかに外方へ開口する。坑底施設は南壁によって楕円形サイドポケットが位置する。その規模は長径93短径57深さ26cmである。覆土は2層確認できるものほぼ埋め戻し土層である。遺物の出土は少なく図示できるものが無いが、加曾利E1式期である。

S K60 (Fig 16) 円形土坑である。底部長径1.80短径1.53深さ0.20mを測る。壁はやや平坦な底面からやや外傾して開口するタライ型で、坑底施設は北壁に接してサイドピット1個が穿ってある。径28深さ22cmである。覆土は4層確認できるものの状態は良くない。遺物の出土はないものの、加曾利E1式期に比定できる。

S K61 (Fig 15) SK58によって切られている。楕円形を呈する土坑である。底部長径1.98短径1.91深さ0.62mを測る。壁は平坦な床面から緩いカーブを描きながら内傾して開口する。坑底施設はセンターピットのみである。その規模は径19深さ13cmと小さい。覆土は4層に分層できるが、状態は良好ではない。遺物は小片のみで図示は不可能であった。時期は加曾利E1式期である。

S K62 (Fig 16) 南壁約1/3は未調査である。若干楕円形を呈する土坑である。現存底部長径は2.20深さ0.51mを測る。壁はフラットな底面から緩やかに外傾して開口する覆土は5層分層できいずれも自然堆積である。遺物は比較的多くほぼ完形の浅鉢1個体と深鉢が出土してい

る。加曾利E 1新期である。

SK63 (Fig 16) 正円形を呈する土坑であるが、大半を1号墳主体部によって壊されている。壁は平坦な底面から緩やかに外傾して開口する坑底施設はサイドピット3個が検出されている。その規模は径20~34深さ50~57cmである。遺物の出土は少なく図示できなかった。加曾利E 1式期である。

SK64 (Fig 17) 東側でSK74を切って構築しており、南壁約1/3は未調査である。形状はほぼ円形土坑で、底部長径2.19深さ0.56mを測る。壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。遺物は大型の深鉢が出土しており、加曾利E 1新期である。

SK68 (Fig 17) 円形土坑である。底部長径2.14短径2.04深さ3.68mを測る。壁は平坦な底面から緩いカーブを描きながら内傾し開口する。坑底施設はサイドポケットが西壁に位置する。規模は土坑の大きさに比べかなり大きく、長径144短径66深さ14cmの長椭円形を呈している。覆土は6層に堆積しほぼ自然堆積である。遺物は小量であるが、口縁部破片を含み良好な土器片が出土している。時期は加曾利E 1古期に比定される。

SK71-A (Fig 17) 西壁でSK71-Bを切って構築している。円形土坑である。底部長径2.24短径2.14深さ0.66mを測る。壁は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設は伴わない。遺物の出土は少なく図示できるものはないが、加曾利E 1式期である。

SK71-B (Fig 17) 東壁をSK71-Aによって、また西壁はSK90より切られている円形土坑で、現存長径2.36深さ0.56mを測る。フラットな底面からやはり垂直に立ち上がる壁をもつ。坑底施設はなく、遺物の出土もない。

SK74 (Fig 17) 西壁でSK64によって切られ、南半分は未調査である。したがって現存は約1/4だけである。形状は円形で、壁の立ち上がりフラットな底面から緩く外傾して広がる。出土する遺物はないが、SK64が加曾利E 1式期であり、同時期かもしれない古い時期に比定できよう。

SK79 (Fig 17) 楕円形を呈する土坑である。底部長径2.34短径2.24深さ0.51mを測る。壁は平坦な底面から外傾しながら開口する。坑底施設はセンターピットとサイドポケット1個を伴う。センターピットは長径35短径28深さ24cm、南西に配されるサイドポケットは長径99短径48深さ22cmの楕円形ポケットである。覆土は4層に分かれ、壁際の4層は壁の崩落土、他はレンズ状堆積をする自然埋土である。出土遺物も多く、大型深鉢を含み口縁部破片が多量に検出されている。加曾利E 1中位期に比定される。

SK81 (Fig 18) 円形を呈する土坑である。底部長径3.35短径3.21深さ1.01mを測る。壁は南側が崩落によってほぼ垂直に立ち上がるが、北側半分は緩いカーブを描きながら内傾し開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピット2個が付随する。センターピットは径32深さ80cm、サイドピットはほぼ接近して穿ってあり、西壁に接するピットは径19深さ24cm、南西壁に接するピットは径24深さ13cmの皿状をなしている。覆土は8層に分層され、ほぼ中央の

6層黄橙色土は捨てロームであろう。出土遺物は多く、深鉢や浅鉢など多量の土器が検出されている。加曾利E 1中位期に位置付けられる。

SK82 (Fig 18) やや椭円形を呈する土坑である。底部長径 2.63 短径 2.39 深さ 0.51 m を測る。壁は崩落によって大半が垂直に立ち上がるが、一部わずかに内傾するところもある。坑底施設はセンターピットと北西部にサイドポケットが配される。センターピットは径 26 深さ 29 cm、サイドポケットは長径 62 短径 38 深さ 20 cm である。覆土は 10 層に分層され、自然堆積を呈している。遺物は少なく小片のみで図示できなかった。しかし時期は加曾利E 1式期で誤りないものと思われる。

SK83 (Fig 18) 円形土坑である。底部長径 2.31 短径 1.89 深さ 0.50 m を測る。坑底施設はセンターピットとサイドポケット 2 個保有している。センターピットは径 16 深さ 20 cm である。またサイドポケットは東西両部に位置し、東ポケット長径 72 短径 60 深さ 41 cm、西ポケットは長径 62 短径 49 深さ 12 cm である。覆土は 7 層確認され、最下層の 7 層黄橙色土は崩落土層に酷似している。遺物は少なく図示できるものはなかった。加曾利E 1式期であろう。

SK85 (Fig 19) 西壁 1/3 を残存する円形土坑である。現存する底部長径は 2.08 深さ 0.2 3 m を測る。壁はやや平坦な底面からやや外傾して開口するタライ型で、坑底施設は確認できなかった。遺物の出土はない。

SK97 (Fig 19) 円形土坑である。底部長径 3.04 短径 2.78 深さ 0.49 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩いカーブを描きながら内傾して開口する。覆土は 4 層分層でき、最下層はロームの混じる崩落土でその上層に黒色土が堆積している。坑底施設はサイドピットとサイドポケットが伴う。サイドピットは南壁に接して位置し径 21 深さ 27 cm の規模を有する。サイドポケットは西壁に接して椭円形を呈し、長径 100 短径 61 深さ 9 cm と浅い。遺物は非常に多く、完形もしくは完形に近い深鉢もしくは浅鉢が 14 点にものぼり、他にも口縁部破片が多量に出土している。時期は中期後半加曾利E 1古期にあたる。

SK100 (Fig 19) 袋型を呈する円形土坑である。開口部長径 1.25 短径 0.96 底部長径 1.9 7 m 短径 1.89 深さ 0.81 m を測る。壁はやや平坦な底面上から大きく膨らみ狭い開口部へ開く。遺物は小片のみで図示できるものは一点もなく時期を判断するのが、難しいが一応形態からみて加曾利E 1古期ではないかと考えている。

SK108 (Fig 19) 円形土坑である。底部長径 2.43 短径 2.25 深さ 0.35 m を測る。壁は一部フラスコ型を呈しフラットな底面から緩いカーブを描きながら内傾するものの、大半は外傾し開口する。坑底施設はセンターピット、サイドポケット 2 個とサイドピット 1 個が伴う。センターピットは径 26 深さ 42 cm、サイドポケットは南壁に接して大小 2 個あり東側の小ポケットは長径 61 短径 54 深さ 45.5 cm 西側の大ポケットは長径 93 短径 78 深さ 33.5 cm を測る。またサイドピットは径 34 深さ 65 cm である。覆土 4 層に分かれ一部埋め戻し土層である。包含されている遺物は小片のみで図示できるものはないが、形状から判断して加曾利E 1式期である。

S K109 (F i g21) 楕円形土坑である。底部長径 2.23 短径 1.84 深さ 0.465 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から垂直に立ち上がり開口する。坑底施設はセンターピットとサイドポケットの 2 施設が伴う。センターピットは径 19 深さ 32.5 cm サイドポケットは円形を呈し、長径 69 短径 58 深さ 34.5 cm である。覆土は 4 層に分かれ、埋め戻し土層である。遺物は深鉢・浅鉢と底部破片が出土している。加曾利 E 1 中期である。

S K110 (F i g21) 円形を呈する土坑である。底部長径 2.03 短径 1.83 深さ 0.37 を測る。壁はほぼ平坦な底面から垂直に近く外傾し開口する坑底施設は小ピットを伴うサイドポケットで径 61 深さ 27 cm である。覆土は 5 層に分かれ、いずれも自然堆積である。遺物は底部と深鉢口縁部破片で加曾利 E 1 新期である。

S K112 (F i g21) 楕円形土坑である。底部長径 3.00 短径 2.56 深さ 0.64 m を測る。壁は一部垂直に立ち上がるが、ほぼ内傾して開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピット 1 個が付随する。センターピットは径 30 深さ 40 cm 、サイドピットは径 19 深さ 14 cm である。覆土は 6 層に分層され自然堆積を呈している。遺物は完形の深鉢を含み浅鉢、底部が検出されている。加曾利 E 1 中葉である。

S K113 (F i g21) ほぼ円形を呈する土坑である。底部長径 2.31 短径 2.26 深さ 0.48 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から一部内傾するところもあるが、大半が垂直に立ち上がり開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピットの 2 施設が伴うセンターピットは径 19 深さ 42 cm 、サイドピットは径 32 深さ 15 cm である。覆土は 5 層に分かれ、上層は埋め戻し土層である。出土遺物は完形の深鉢のほか浅鉢などがある。加曾利 E 1 中葉である。

S K114 (F i g20) 楕円形土坑である。底部長径 1.62 短径 1.58 深さ 0.46 m を測る。壁はフラットな底面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設はサイドピット 1 個が南東壁接して位置する。このサイドピットは径 34 深さ 24 cm の円形を呈している。覆土は 5 層に分層され、自然堆積である。遺物は小片のみで時期決定できるものは出土していない。しかし形状から判断して加曾利 E 1 式期であろう。

S K117 (F i g20) 円形土坑である。底部長径 1.53 短径 1.48 深さ 0.10 m を測る。壁は平坦な底面からゆっくりと外傾し開口する。坑底施設はなく、遺物の出土も確認されなかった。時期は不詳である。

S K118 (F i g20) 円形土坑である。いわゆる袋状を呈し、開口部長径 1.95 短径 1.89 深さ 0.63 m で、底部長径 2.42 短径 2.36 m を測る。壁はやや凸凹のみられる底面から大きく膨らみ内傾しながら外傾する。覆土は 5 層に分層でき、下層は埋め戻し土層である。坑底施設はサイドポケット 1 個とサイドピット 1 個からなる。サイドポケットは南壁に位置し、長径 130 短径 80 深さ 16 cm 、サイドピットは西壁に接して構築されており、径 37 深さ 48 cm である。覆土は 5 層に分かれ下層は埋め戻し土層である。出土遺物は比較的多く深鉢が目立つ。時期は加曾利 E 1 中葉である。

S K119 (Fig 20) 約1/2が残存する。残った南壁はやや隅丸方形的である。底部辺 2.06 深さ 1.28 m を測る。壁はフラットな底面からほぼ垂直に立ち上がり開口する。坑底施設はセンターポケット、サイドピット 3 個をもつ。センターピットは径 15 深さ 37 cm、サイドピットは南・北・西に位置し、南ピットは径 40 深さ 42 cm、北ピットは径 31 深さ 21 cm、西ピットは径 17 深さ 10 cm を測る。遺物は小片のみで図示できなかった。加曾利 E 1 式期である。

S K120 (Fig 22) 円形の大型土坑である。底部長径 3.00 短径 2.83 深さ 0.41 を測る。壁はフラットな底面から一部内傾するが、大半は垂直もしくは外傾し開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピットがある。センターピットは径 18 深さ 37 cm、サイドピットは西壁に位置し、径 40 深さ 41 cm である。覆土は 5 層に分層でき、埋め戻し土層である。遺物は深鉢と底部破片が出土している。加曾利 E 1 中葉である。

S K121 (Fig 22) 円形の土坑である。底部長径 2.22 短径 1.95 深さ 0.60 m を測る。壁は平坦な底面から一部内傾するものの大半は垂直もしくは外傾し開口する。坑底施設として南東壁上に径 30 深さ 16 cm のピットがある。しかしこのピットが本坑に付随するものか疑問である。ここでは付隨施設ではないと考えている。覆土は 5 層に分層でき埋め戻し土層である。遺物は小片のみで図示できないが加曾利 E 1 式期である。

S K122 (Fig 22) 楕円形を呈する土坑である。底部長径 2.85 短径 2.51 深さ 0.77 m を測る。壁は平坦な底面から大きく内傾し開口する。坑底施設はセンターピットとサイドポケットを伴う。センターピットは長径 28 短径 26 深さ 49.56 cm、サイドピットは径 28 深さ 29.5 cm である。覆土は 4 層に分かれ、一部埋め戻し土層である。遺物は多く深鉢のほか浅鉢が多く出土している。加曾利 E 1 新期に比定される。

S K124 (Fig 23) 楕円形土坑で、S K125を切って構築されている。底部長径 2.30 短径 2.55 深さ 0.84 m を測る。壁は平坦な底面から緩やかに内傾し開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピットがある。センターピットは径 34 深さ 60 cm、サイドピットは北壁に位置し、径 16 深さ 29.5 cm を測る。出土遺物は多く、大型の深鉢口縁部多量に検出されている。加曾利 E 1 古期である。

S K125 (Fig 23) S K124によって切られている。楕円形土坑である。底部長径 2.59 短径 2.40 深さ 0.58 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から垂直に立ち上がり開口する。出土遺物は多くはないが、深鉢や浅鉢などが検出されている。加曾利 E 1 古期に位置付けられる。

S K126 (Fig 23) S K138を切って構築されている。大型の円形土坑である。底部長径 3.27 短径 3.20 深さ 0.64 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩やかに内傾し開口する。坑底施設はセンターピットが 1 個のみ付随する。このセンターピットは径 27 深さ 59 cm の円筒状に穿ってある。覆土は 4 層に分層でき、センターピット内を除き埋め戻し土層である。出土遺物は少ないが深鉢口縁部が検出されている。加曾利 E 1 新期である。

S K127 (Fig 24) 小型の楕円形土坑である。底部長径 1.59 短径 1.31 深さ 0.18 m を測る。

壁は平坦な底面から僅かに外傾し立ち上がる。坑底施設として南西壁際に長径 105 短径 54 深さ 17cm サイドポケットがある。覆土は 2 層であるが、出土遺物は小片のみで図示できなかった。加曾利 E 式期である。

S K129 (F i g 24) 典型的な三角フラスコ型土坑である。円形を呈し、開口部長径 1.89 短径 1.83 深さ 0.935 m、底部長径 2.65 短径 2.60 m を測る。壁は平坦な底面から大きく内傾して開口する。坑底施設は西壁に接し径 42 深さ 45.5 cm の円形のサイドピットが伴う。覆土は 7 層に分層でき、主体は埋め戻し土層である。遺物は小片ばかりで深鉢や浅鉢が出土している。

S K130 (F i g 24) 南西壁で S K131 によって切られている。形状は椭円形を呈し、底部長径 2.36 短径 2.31 深さ 0.49 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩やかなカーブを描きながら内傾し開口する。坑底施設は確認できなかった。覆土は 3 層に分かれ、埋め戻し土層と考えられる。出土遺物は多く当遺跡の中でまとまった出土を示している。加曾利 E 1 古期にあたる。

S K131 (F i g 24) 北西壁で S K130 を切って構築されている。円形土坑である。底部長径は 2.32 短径 2.08 深さ 0.505 m を測る。壁は平坦な底面からやや垂直に近い角度で外方へ開いている。坑底施設はセンターピット、サイドポケット 1 個、サイドピット 1 個を付随する。センターピットは径 25 深さ 17 cm、南壁に位置するサイドポケットは長径 97 短径 50 深さ 9 cm、北東にあるサイドピットは径 26 深さ 24 cm を測る。覆土は 4 層に分層され、埋め戻し土層として考えている。遺物として胴上半分が残存する深鉢が出土している。加曾利 E 1 中葉である。

S K132 (F i g 25) 北壁で S K135 を切られている。円形土坑で、底部長径 1.75 短径 1.70 深さ 0.63 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から大きく内傾し開口する。坑底施設は確認できなかった。覆土は 3 層に分かれ、最下層を除き埋め戻し土層である。出土遺物は深鉢胴部破片および底部破片が検出されている。加曾利 E 1 新期である。

S K134 (F i g 25) 円形を呈する土坑である。底部長径 1.50 短径 1.46 深さ 0.45 m を測る。壁は平坦な底面から大きく内傾しながら開口する。坑底施設はサイドポケット 1 個が南側に位置している。径 48.0 深さ 7.5 cm の円形である。覆土は埋め戻し土層で、4 層に分層できる。遺物は浅鉢 1、深鉢 2 点と少ない。加曾利 E 1 新期に比定される。

S K135 (F i g 25) 南壁において S K132 を切って構築している。円形土坑で、底部長径 2.10 短径 1.89 深さ 0.54 m を測る。壁はやや凸凹のある底面から大きく内傾し開口する。坑底施設は南壁に接してサイドピットが 1 個配されている。このサイドピットは径 27.0 深さ 18 cm の大きさを呈している。覆土は 4 層に分かれ、埋め戻し土層が主層となっている。遺物は多く復元可能な深鉢が 5、浅鉢 1、そのほか土器破片が出土している。加曾利 E 1 式古期にあたる。

S K136 (F i g 25) ほぼ円形を呈する浅い土坑である。底部長径 1.73 短径 1.51 深さ 0.08 m を測る。覆土は 2 層に分けることができ、底坑施設は検出されなかった。遺物の出土もほとんど発見できなかった。

S K137 (F i g 26) ほぼ円形を呈する土坑である。底部長径 2.32 短径 2.30 深さ 0.31 m を測

る。壁はやや凹凸のある底面から外傾しながら立ち上がる。底坑施設はセンターピット 1・サイドポケット 2・サイドピット 3 個を保有する。センターピットは径 20 深さ 44 cm、サイドポケットは北東部にあり、長径 70.0 短径 68.0 深さ 62.0 cm を測るいわゆる子ピット形態呈している。また南東部は長径 111.0 短径 65.0 深さ 24.0 cm を測る。またサイドピットは西から南西にかけて配列され、径 25~45 深さ 35~45 cm を呈する円形ピットである。遺物は深鉢が出土している。加曾利 E 1 新期である。

S K138 (F i g 23) S K126 によって大半が切られている。円形土坑で、径は 2.50 深さ 0.64 m を測る。壁は凹凸のある底面からほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 5 層観察でき自然埋土である。底坑施設の検出はない。遺物は深鉢が出土しており、加曾利 E 1 古期である。

S K139 (F i g 26) 不整形を呈する土坑である。底部長径 1.48 短径 1.41 深さ 0.225 m を測る。ほぼ平坦な底面から外傾しながら壁が立ち上がる。底坑施設は北側にサイドピット 1 があり、径 24.0 深さ 13.0 cm を測る。遺物は小片のみで時期は不詳である。

S K140 (F i g 26) ほぼ円形を呈する土坑である。底部長径 2.21 短径 2.13 深さ 0.51 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から小さく外傾して立ち上がる。底坑施設は検出されていない。出土遺物は完形の深鉢 1 点を含む、大型の土器破片が多く検出されている。時期は加曾利 E 1 古期である。

S K141 (F i g 26) S K151 を南側で切って構築する椭円形を呈する土坑である。底部長径 1.73 短径 1.48 深さ 0.67 m を測る。壁は平坦な底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底坑施設は検出されていない。遺物は豊富で、深鉢を主体に出土している。時期は加曾利 E 1 式古期に比定される。

S K143 (F i g 27) 円形を呈する土坑である。底部長径 2.30 短径 2.17 深さ 0.65 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から大きく内傾しながら開口する。覆土は 3 層に分層され、3 層の崩落土および 1 層の薄い自然埋土以外は埋め戻し土層である。底坑施設はセンターピット 1、サイドピット 2 個が検出されている。センターピットは径 36.0 深さ 48.0 cm の円形を呈し、サイドピットは南北に位置し、北ピットは径 40.0 深さ 33.0 cm、南ピットは径 20.0 深さ 21.0 cm を測る円形ピットである。覆土中より完形の深鉢土器 2 点が出土している。時期は加曾利 E 1 中期である。

S K144 (F i g 27) 東西両辺部を後世の遺構によって切られている。形状は椭円形を呈し、底部長径は 2.38 短径 2.05 深さ 0.62 m を測る。壁は平坦な底面から内傾しながら開口している。覆土は 6 層に分層され、下層の崩落土および上層の自然埋土を除き埋め戻し土層である。底坑施設は、南側に長径 91.0 短径 60.0 深さ 9.0 cm のサイドポケットをもっている。覆土中より深鉢形土器の破片が多く含まれていた。加曾利 E 1 中期である。

S K145 (F i g 27) 南側で S K146 を切って構築している。椭円形を呈する土坑で、底部長径 2.04 短径 1.56 深さ 0.295 m を測る。壁は平坦な底面から緩やかに外傾して立ち上る。覆土は 2 層確認され、自然埋土である。底坑施設としてセンターピットとサイドピット 1 個が検出されて

いる。センターピットは径 27.0 深さ 26.5 cm の円形を呈し、北側に位置するサイドポケットは長径 64.0 短径 44.0 深さ 28.0 cm を測る橢円形である。覆土中より縄文土器の小片が出土しているが、図示できないでいる。加曾利 E 1 式期である。

SK 146 (F i g 27) 北側で SK 145 によって切られている。橢円形を呈し、底部長径 2.32 短径 1.80 深さ 0.24 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩やかに外傾し、一部内傾するところもある。覆土は 2 層あるが、埋め戻し土層かもしれない。坑底施設はサイドピット 1、サイドポケット 1 個を伴う。サイドピットは西壁寄りに配され、長径 45.0 短径 28.0 深さ 18.0 cm の橢円形をなしている。またサイドポケットは東に位置し、長径 92.0 短径 65.0 深さ 15.0 cm のやはり橢円形を呈している。覆土中より縄文土器の小片が出土していたが、図示できない。加曾利 E 1 式期である。

SK 147 (F i g 28) 北側で SK 148 によって切られている。円形を呈し、底部長径 2.09 短径 2.04 深さ 0.64 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩やかに内傾し開口する。覆土は 5 層に分層でき、自然堆積である。坑底施設はセンターピット・サイドピット 1・サイドポケット 1 個が検出されている。センターピットは径 20.0 深さ 32.0 cm の円形ピットである。サイドピットは南西に位置し、径 23.0 深さ 40.0 cm を呈し、サイドポケットも南西壁際に配され、長径 51.0 短径 46.0 深さ 5.0 cm の橢円形をなしている。覆土中より遺物は、縄文土器小片のみの出土で図示は不可能であった。加曾利 E 1 式期である。

SK 148 (F i g 28) 南側で SK 147 の上面を切って構築している。円形土坑を呈し、底面長径 1.57 短径 1.56 深さ 0.76 m を測る。覆土は 3 層に分層でき、自然堆積である。坑底施設は検出できなかった。覆土中より深鉢底部 1 点のみ出土している。加曾利 E 1 式期である。

SK 149 (F i g 28) 円形土坑で、底部長径は 2.70 短径 2.50 深さ 0.97 m を測る。壁はやや凹凸がある底面から大きく内傾し開口する。いわゆるフ拉斯コ型土坑である。覆土は 9 層に分層できるが、最上土層および最下層以外埋め戻し土層である。坑底施設は検出されていない。覆土中より深鉢土器 1 点が出土している。加曾利 E 1 古期である。

SK 150 (F i g 28) 円形土坑である。底部長径は 3.31 短径 2.91 深さ 0.46 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から大きく内傾し立ち上がる。坑底施設はセンターピットが配され、径 19.0 深さ 50.0 cm を呈する。覆土中より縄文土器の小片が出土しているが、図示できない。加曾利 E 1 式期である。

SK 151 (F i g 26) SK 141 により北側が切られている。橢円形土坑で、底部長径 2.22 短径 2.00 深さ 0.53 m を測る。壁はほぼ平坦な底面から緩やかに外傾して立ち上がる。坑底施設はセンターピットとサイドポケット 1 個が検出されている。センターピットは径 30.0 深さ 35.0 cm を呈する円形ピットである。覆土中より縄文土器小片が出土している。深鉢と浅鉢で、時期は加曾利 E 1 古期に比定される。

SK 152 (F i g 29) 円形土坑で、底部長径 2.36 短径 2.32 深さ 0.77 m を測る。壁はほぼ平坦

な底面から大きく内傾し開口する。いわゆるフ拉斯コ型土坑である。坑底施設はサイドポケット1個が南東壁際に配されている。大きさは長径50.0 短径34.0 深さ43.5 cmを測る。覆土中より遺物が多量に出土している。深鉢が多く、浅鉢の完形土器も検出されている。加曾利E1古期に比定される。

S K153 (F i g 29) 円形土坑である。底部長径2.80 短径2.65 深さ0.81 mを測る。壁はほぼ平坦な底面から大きく内傾しながら開口する、いわゆるフ拉斯コ型土坑である。覆土は6層に分層でき、上層は自然埋土、下層は埋め戻し土層である。坑底施設はセンターピットとサイドピット1個が検出されている。センターピットは径22.0 深さ25.0 cmを測る円形ピットである。サイドピットは西壁際に配され、径23.0 深さ10.0 cmを呈する円形ピットである。覆土中より遺物の出土は多く、深鉢を主体に検出されている。中峠式期である。

S K154 (F i g 29) 円形土坑である。底部長径2.61 短径2.60 深さ0.67 mを測る。壁はほぼ平坦な底面から大きく内傾しながら開口するフ拉斯コ型土坑である。坑底施設はセンターピット・サイドピット2・サイドポケット1個を有する。セイターピットは径34.0 深さ42.0 cmの円形ピット、サイドピットは北西側と南東側に配され、北西ピットは径30.0 深さ38.0 cmを測り、南西ピットは径41.0 深さ11.0 cmを測る円形ピットである。サイドポケットは北東壁際に位置し、長径60.0 短径45.0 深さ9.0 cmの椭円形を呈するピットである。覆土中より多量の縄文土器が出土している。時期は加曾利E1古期である。

S K156 (F i g 29) 円形土坑である。底部長径2.64 短径2.63 深さ0.28 mを測る。壁の立ち上りは低く、平坦な底面から短く外傾気味に開口する。坑底施設はセンターピットとサイドピット2個検出されている。センターピットは径29.0 深さ19.0 cmを測る円形ピットである。またサイドピットは南北に位置し、北側は径42.0 深さ17.0 cm、南側は径22.0 深さ13.0 cmの円形を呈している。

遺物

本土坑より出土した遺物には、縄文土器・石器・土製品があり、時期は縄文時代中期後半・中峠式～加曾利E1にかけてのものに限定されている。とくに加曾利E1式期が主体となっており今日加曾利E1式は2～4期に細分されているものの、ここでは3期に分けて記述している。すなわち加曾利E1古期、中期、新期として分類しておきたい。

a) 土器 (F i g 30～73)

S K03 (F i g 30-1～3) 1はキャリバー状を呈する深鉢形土器の上半部である。口縁部文様帶は隆帶による渦巻文を4単位に配し、この間に半円形区画文が連繋する。渦巻文内には沈線により充填させ、地文にLR縄文を施す。体部は地文上に沈線による懸垂文を垂下させる。8単位に分割された沈線文は、3単位の直線文と1単位の蛇行懸垂文を組み合わせる。2も深鉢形土器で、口辺部を無文帶として体部に沈線による鍵状懸垂文と直線沈線文をもつ。3は深鉢形の口辺部破片で隆帶を一条口唇部に巡らす。加曾利E1新期。

SK04 (F i g 30-4・5) 4・5とも胴下半部の破片で、4はRL縄文を地文に沈線による蛇行・直線文を垂下させる。5は縄文施文のみの底部に近い土器片である。

SK05 (F i g 30-6～9) 6は地文として沈線による斜行文を施し、蛇行沈線文を垂下させる。曾利系土器の深鉢である。7は深鉢の胴部破片で、沈線文の下位に斜縄文を地文に平行沈線文を巡らす。8は浅鉢形土器で、口縁部は一段稜をもち、貼り付け隆帯による装飾文を4単位配する。9は深鉢形土器の底部破片である。

SK07 (F i g 30-10～12) 10は口縁部破片で、隆帯を巡らし地文に縄文施文を施す。11・12は胴部破片で、12は斜縄文を地文に沈線を巡らす。

SK08 (F i g 31-1～14、32-1～20) 31-1は小突起をもつキャリバー状の深鉢形土器で口縁部文様体は隆帯による梢円形区画文を配し、区画内を綫位の沈線をもって充填する。胴部はRL縄文を施す。2も小突起をもつ深鉢形で、口縁部文様体は棒状区画内にやはり綫位の沈線を施す。口縁部下は無文帶として残し、胴部はLR縄文を施す。3はキャリバー状の深鉢形で口縁部は棒状区画文を配し、区画内を縄文で充填する。口縁部と胴部は二条の隆帯により区画され、胴部はLR縄文を地文に直線沈線と蛇行沈線を垂下させる。4は平縁の深鉢形で、隆帯による棒状区画文を配し、地文にRL縄文を施文する。胴部もRL縄文を地文に三単位の沈線文を懸垂文として垂下させる。5は完形土器で四単位の小突起をもち、口縁部は無文帶二条1単位の隆帯により4分割させ、やはり胴部との区画も二条の隆帯を巡らす。胴部はLR縄文を地文に、三条1単位の直線沈線文と1単位の蛇行沈線文を交互に配する。6～11は深鉢形の底部破片で6・7は網代痕を残している。12～14は浅形土器である。14は内面に有段をもつ。

32-1～20はキャリバー状の深鉢形で、1は隆帯の棒状区画内に綫位の沈線文を充填する。2は口縁部が小さく外傾し、体部は緩くカーブする。文様は帯状帯で、二条の隆帯による区画文に地文として斜縄文を施す。4・8は二条の隆帯による渦巻き文に、地文として沈線文をもつ。6は小さな渦巻き文をもつもので大木系土器である。12は沈線による渦巻く文に綫位の沈線文を充填する。加曾利E 1中期。

SK09 (F i g 33-1～8) 1は底部より直線的な体部をもつ。口縁部は幅広く肥厚し、無文帶となる。体部は単節縄文を施文する。2はキリバー形を呈する深鉢形土器である。文様は口縁部と胴部に施され、頭部は無文である。口縁部文様帶は横波状の隆帯を巡らし、胴部文様帶は沈線により逆U字状区画文に螺旋状懸垂文を垂下させる。3は口縁部破片で沈線による渦巻き文と刺突文を施す。6とも口縁部破片で、沈線による重弧文を施し、小さな渦巻き文を配する。8は大型のキャリバー形を呈する深鉢で、波頂部に大きな窓を開け、口縁部文様帶は隆帯区画内に沈線文を充填する。7は胴部破片で単節RL綫回転による斜縄文を地文に、沈線による区画文を施す。4・5は底部破片である。加曾利E 1中期。

SK12 (F i g 33-9～16) 9は小突起を対にもつキャリバー形の深鉢形土器である。文様は口縁部と胴部に分かれ、口縁部は隆帯による渦巻き文を起点に、隆帯棒状区画文に綫位の沈線文

を充填させる。胴部は単節LRを地文として、頸部付近に沈線による波状文を一条巡る。10は胴部破片で単節縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させている。14～16は口縁部破片である。14は隆帯による渦巻き文、15はやはり隆帯による横波状隆帶文を巡らす。16は口唇部に文様を集約させ、沈線による渦巻き文と刻み文を施す。口縁部は無文である。11・12は底部付近の破片である。13は無文の手捏土器である。加曾利E 1中期～新期。

SK13 (Fig. 34-1～9) 1は底部より直線的な体部をもち、口縁部は強く外反する。文様は縄文施文だけで、無節LJ継回転の斜縄文をもつ。2は口唇部が肥厚する浅鉢形土器で、内面に稜をもつ。3～5は口縁部破片で、3は渦巻文とそれに連結された半月形を呈する隆帯と懸垂する短い隆帯によって構成され、地文に単節LR縄文が施文されている。頸部は無文帯である。4は波状口縁の破片で、沈線による棹状区画文内を縦位の短い沈線により充填する。7～9は底部破片である。7は木葉痕を残置している。加曾利E 1新期。

SK14 (Fig. 34-10～16) 10および11は波状口縁をもつキャリバー状の深鉢形土器。文様は口縁部に集約され、単節LRを地文に隆帯によるクランク文を施文する。12は底部から直線的に外方へ開く深鉢形土器で、口唇部は肥厚する。文様は無節Rを器面全体に施文する。16は体部が小さく膨らむ深鉢形土器で、口唇部が二条の隆帯状に肥厚する。文様はやはり体部全体に無節Rを施す。14は深鉢の口縁部破片で、隆帯による半月状区画文を配する。15は無文の口縁部が外反する深鉢で、体部は単節RLで斜縄文を地文としている。加曾利E 1中期。

SK16 (Fig. 35-1) 1点のみ出土。キャリバー形の深鉢で口縁部破片である。文様は単節RLを地文に、隆帯によるクランク文を配する。

SK19 (Fig. 35-2～10) 2～7は口縁部破片である。2は口唇部を無文に、口縁部は斜縄文を地文として、隆帯による渦巻文を施文する。3～5は隆帯による棹状区画文を施し、地文に単節斜縄文を施文する。6は沈線による渦巻文と縦位の区画文を配する。7は口縁部は単節LRを地文に沈線を伴う隆帯棹状文を施す。8・9は胴部破片である。10は口唇部が折り返し口縁部様に肥厚する浅鉢形土器である。加曾利E 1中期。

SK20 (Fig. 35-11～13) 11・12は体部下半部の破片である。11は単節LR斜縄文を地文に3本単位の直線文と1単位の波状懸垂文を垂下させる。12は単節LR斜縄文を地文としている。13はキャリバー形の深鉢、口縁部破片である。隆帯による棹状区画文内に沈線文を充填する。加曾利E 1中期。

SK21 (Fig. 36-1～8) 1・2は口縁部および体部上半部を欠損する。地文としていずれも単節斜縄文を施す。3～5は口縁部破片である。3は口縁に平行する隆帯を二条走らせる。5は無文地に6単位の櫛歯状工具による櫛歯状文を螺旋状に施す。6～8は胴部破片である。7は地文に撚糸文を施し、細沈線による直線文および波状文を垂下させる。

SK22 (Fig. 36-9～17) 9～12は口縁部破片である。9は単節縄文を地文に隆帯による渦巻文および棹状文を配する。10は口唇部を無文に口縁部は単節LR斜縄文を施文する。11は隆帯

による枠状文を配し、区画内は地文として単節LRを施す。12はキャリパー形の深鉢で、口縁部文様は縦位の細い沈線を施文する。13～15は胴部破片で、13は沈線による渦巻文を施す。また14・15は単節LRを地文に沈線による懸垂文を垂下させている。16は浅鉢形土器で、口唇下に一条の沈線を巡らす。加曾利E 1中期。

SK24 (Fig 37-1～16) 1は直線的な体部から口縁部は外方へ小さく開き、肥厚する。また口縁部に大きな把手を1個保有する。文様は口縁部を無文として、体部は単節RLを地文に沈線による直線文および波状文を懸垂文として垂下させる。2はキャリパー形深鉢土器で、底部より外反しながらやや膨らむ胴部に至り、一旦小さくくびれた頸部になり、ここから大きく口縁部が外反する。なお口縁部は欠損している。文様は口縁部が縦位の沈線を充填させ、胴部は単節LRを全面に施文する。3はほぼ筒状の体部から口縁部が小さく外反する。口縁部を無文として体部は単節LRを全面施文している。7～16は口縁部破片である。7・10・11は大型のキャリパー形を呈する深鉢土器で、単節斜繩文を地文に隆帯による渦巻文およびクランク文を配する。8も同じく隆帯を波状に施し、9はクランク状隆帯に沈線文を充填する。14は小突起をもつ深鉢土器で、刻み目のもつ隆帯を渦巻文に施す。15・16は胴部破片で、15は地文に単節LR斜繩文を施し、沈線により渦巻き状文様を描出す。4～6は深鉢土器の底部破片である。加曾利E 1中期。

SK25 (Fig 38-1～10) 1は底部からやや小さく膨らみながら口縁部で外反する深鉢土器である。文様は口縁部と胴部の二分帶で、まず口縁部は小把手をもち、把手部外面に彫刻状の渦巻文を施し、さらに、口縁部下に波状の彫刻文を刻む。また胴部は単節LRを地文に直線文と螺旋文の懸垂文を垂下させる。2～4は口縁部破片である。2は単節LRを地文に隆帯による区画文を施す。3は隆帯枠状文内に縦位沈線を充填させ、胴部単節RL縦回転を施文し、地文をしている。4は隆帯による椭円形文を施す。5～8は胴部破片である。5は単節RLを地文に隆帯による懸垂文を垂下せる。6はくびれをもつ深鉢土器で単節LRを地文に隆帯による区画文を配する。7は沈線の懸垂文を施文する。9・10は底部破片で、10は網代痕を残置している。加曾利E 1中期。

SK26 (Fig 38-11～14) 11は比較的大きな把手を有し、内面より外面左右に穿孔され、外面の双孔に沿って隆帯が巡らされ、そのまま枠状区画文となる。区画内には短沈線により充填されている。また窓下位は隆帯により渦巻文が表出され、同じく沈線に充填されている。12はキャリパー形の深鉢で、口唇部は無文帯となり、口縁部文様帶は二条の隆帯により渦巻文を抽出し、区画内に沈線により充填されている。13はやや小形の深鉢、口唇部を無文帯として太沈線により口縁部とを分けている。口縁部は単節LRである。14は胴部破片、単節RLを地文に半截様工具による二条の沈線文を十字状に施す。加曾利E 1中期。

SK27 (Fig 40-1～5) 1は底部から胴部にかけていわゆる算盤玉底を呈する器形をもつ深鉢で、さらに口縁部にかけて大きく外方へ開き、口唇部でくの字状に内彎する。口唇部には二山1組の円孔のもつ把手1対と、やはり円孔のある把手1対が付されている。口縁部文様帶と胴

部文様帶に分かれ、口縁部文様帶は2本組隆帶によって、渦巻文と円形の区画文が施され、区画内には縦位の沈線を充填させる。また胴部は単節LRを地文に2本組の太沈線を伴う細隆帶が鍵状渦巻文を垂下させ、算盤玉底は無文帶である。2は把手をもつキャリバー形の深鉢土器で、把手部には沈線による渦巻文が描出され、口縁部は沈線による楕円形区画文と沈線区画文を二段に施し、この区画内に縦位の沈線を充填させる。胴部は単節LRを地文に沈線による直線文と波状文を垂下させる。3～5も口縁部破片で、3は隆帶による枠状区画文と鍵状文を配する。地文に縦位の細沈線を施している。4は把手をもつ深鉢土器で、2本組隆帶による渦巻文、地文に単節RLをもつ。5も隆帶による枠状文で、地文に単節LRをもつ。加曾利E1古期。

SK28 (Fig. 40-1～5) 1はくびれ部より大きく開く口縁部は、口唇部で内湾するキャリバー形の深鉢。二山を一単位とする把手を一对と、円孔をもつ把手が1個付く、文様は口縁部と胴部に分かれ、口縁部文様帶は2本組を中心とした渦巻文と変形クラシック文を配し、区画内は縦位の沈線を充填させる。胴部には3本組の直沈線と波状沈線を交互に垂下する。2は頸部から大きく外方に開き、さらに口唇部付近でくの字状に外開する浅鉢である。文様は口唇部下を無文帶として、口縁部は波状隆帶を巡らし、以下単節RLを地文に2本組隆帶による横線の両端には鍵状と渦巻文となる。3も浅鉢形で、無文地に連続交互刺突文を巡らし、さらに連続するように沈線の枠状区画文が表出されている。4～8・11は深鉢土器の口縁部破片で、4は大きな把手をもち、2本組の隆帶による区画文内に、縦位の沈線を充填する。7も同じ。5も把手をもつキャリバー形の深鉢。単節RLを地文に2本組隆帶による枠状区画を設ける。6は単節RLを地文にやはり2本組隆帶により区画文を描出する。8は鉢形土器で、口縁部がくの字状に内湾する。文様は口縁部に集約され、口唇部は無文とし、口唇部下から枠状隆帶を区画し、隆帶に沿って沈線が巡り、さらに区画内に沈線による枠状区画を2重に施す。地文は単節RLである。胴部は無文である。9は口縁部下半から頸部の破片で、口縁部は無文地に連続爪形文の施された隆帶が波状に走り、頸部との区画に2条の細隆帶が巡る。胴部は単節LRである。17は2本組の隆帶の枠状区画内に縦位に沈線文を充填され、頸部は単節RLである。11は口唇部下を無文としてやや肥厚させ、口縁部は柳状工具による沈線を垂下させている。12も6本単位の柳齒状工具による沈線を波状に垂下させる。10・13は胴部破片である。14・15・18は深鉢土器の底部破片で、18は網代痕を残置する。16・19は浅形土器である。加曾利E1古期。

SK31 (Fig. 40-6～8) 6は平縁で大型の深鉢形土器の口縁部破片である。口唇部下は無文帶として、口縁部は2本組の隆帶による渦巻状に区画され、区画内に縦位の沈線が充填される。7・8は胴下半の破片である。いずれも深鉢土器で、単節LRを施文している。

SK32 (Fig. 41-1～6) 1はキャリバー形の深鉢。口縁部破片で、口縁部に小突起が付き、この小突起から連続して2本組隆帶が渦巻文および半月状文を表出し、地文に単節LRを施文している。2もほぼ同様で、口縁部に小突起をもち、ここから2本組隆帶が渦巻文を描出する。また頸部からは沈線文を垂下させている。3は平縁の深鉢で、口唇部に一条の沈線を巡らす。4・

5は胴部破片、縄文地文に沈線による懸垂文および区画文を施文している。6は浅鉢の底部破片である。加曾利E 1中期。

S K33 (F i g 41- 7~11) 1は底部より徐々に膨み、口縁部で垂直に立ち上がる小型の深鉢である。口唇部は肥厚しながら上方へ突出し、この突出部に太沈線様に文様を描文する。頸部は無文で、胴部上位から単節L R継位回転で施文する。8は胴部破片、輪積状態の明瞭な深鉢である。地文に単節L Rを施す。9も胴部破片で、無文地に頸部付近では肥厚する隆帯を巡らし、胴部は沈線により、2本の波状文とそれに挿まれた直線文を1単位に表出し、これを懸垂文として垂下させている。10は口縁部が外方へ大きく開く深鉢で、胴下半でくびれている。11は無文の浅鉢である。口唇部は肥厚し、内面に稜をもつ。加曾利E 1中期。

S K34 (F i g 42- 1~16) 1は平縁の深鉢で、口唇部下に一条の隆帯を巡らし、口縁部は単節L Rを全面に施す。また頸部は隆帯により区画され、胴部は単節L Rを地文に、3本単位の沈線文・2本単位の波状懸垂文を垂下させている。2は底部からほぼ直線的に立ち上がり、文様帶は三分帶で構成されている。つまり、口縁部は無文地に沈線による四角形の区画文、頸部は高い隆帯による楕円形区画文を表出し、区画内に継位の沈線を充填する。胴部は無節L 継回転を地文に沈線文を垂下させる。3は小さな山形状の突起をもつ波状口縁で、体部は単節L Rを全面に施文する。4・13は平縁の深鉢で、口唇部は肥厚し、一条の沈線を巡らす。また口縁部は継位の沈線文を配し、隆帯により区画する。頸部以下は無文。9は口縁部破片でキャリバー形の深鉢。2本組の隆帯により棹状文、半月状文を表出し、区画内に継位の沈線を充填させる。10は単節R Lを地文に隆帯による渦巻文、直線区画文を施す。11は口唇部を無文に、連続交互刺突文を巡らす。12は口唇部下に隆帯を巡らし、口縁部に単節L Rを施文する。14~16は胴下半部の破片、縄文地文に沈線文を垂下させている。5~8は底部破片である。加曾利E 1古期。

S K35 (F i g 42-17) 17は深鉢の胴部破片で、2本組隆帯を区画文に、地文として単節R Lを継位回転させ施文している。

S K36 (F i g 43- 1~12、44- 1~14) 43- 1は底部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外方へ開く深鉢で、体部全体は無節L 継回転により施文されている。2~6は胴下半部の深鉢、7・8は底部破片である。2は単節L Rを地文に、沈線による波状懸垂文を垂下させる。2・3とも網代痕を残置している。9は浅鉢で、口唇部が緩く内彎する。また内面中位で段を有する。10は円孔が穿られた深鉢で、刻み目のある隆帯を半月状に区画し、区画内に継位の沈線を充填する。胴部は単節R Lを地文に沈線による直線文と波状文を垂下させる。11も円孔のある把手をもつ深鉢で、隆帯と隆帯脇の沈線による楕円形区画文、渦巻文を施し、地文に単節L Rが施文されている。12は波状口縁をもつ深鉢で、単節L Rを地文に、口唇部から連続させて隆帯が渦巻区画文を施文する。44- 1~3・5・6はキャリバー形の深鉢で、いずれも縄文施文を地文に2本組隆帯による渦巻文、変形クランク文、十字文を記する。中でも1は口縁部が内彎する平縁の深鉢で、隆帯と沈線を組み合せて、渦巻文、十字文を配する。胴部破片である10~13も同系の土器類

である。4は波状口縁で、口唇部下に沈線による渦巻文を配し、口縁部は縄文を地文としている。7は口唇部が大きく外反し、口縁部が肥厚している。文様は口縁部が沈線と連続交互刺突文を巡らす。頸部は単節RLを地文に、沈線による波状文を垂下させている。8は平縁の深鉢で、口縁部を無文に、頸部は隆帯の枠状区画文を施す。14は底部付近の深鉢で、単節RLを地文に3本単位の沈線文を垂下させている。加曾利E1古期。

S K38 (F i g 46-1~10) 1は浅鉢で、胴部が算盤玉状に膨み、口縁部が強くくの字状に外反する。無文である。2~7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片である。2は単節LRを地文に、隆帯による区画文を描出する。6は隆帯による渦巻文を施文する。7は口唇下に平行沈線、口縁部に波状沈線を巡る。8・9は胴部破片で、8は連続交互刺突文を巡らせ、隆帯による区画文を施文する。10は浅鉢の底部破片である。加曾利E1中期、7のみ阿玉台式。

S K39 (F i g 46-11~14) 11は口縁部破片で、隆帯による枠状区画文を描出し、地文に単節RLを施す。12は口唇部が肥厚し、口縁部は無文、体部を単節LRを施す。13・14は胴部破片で、13は隆帯による区画文内に縦位の沈線を充填する。加曾利1中期。

S K43 (F i g 45-1~12) 1は胴部下位に脹らみをもち、口縁部は大きく開きながら内彎する。3単位の円孔をもつ把手を有する深鉢土器である。把手は円孔の周囲に太沈線を巡らせ、口縁部は2本組の隆帯による鍵状文とハ字状隆帯の区画文で、口唇部下に連続交互刺突文を巡らしながら、沈線を充填させている。胴部は櫛歯状工具による縦位の櫛描文を充填する。2は胴下部を欠損するもので、胴部で脹らみ、口縁部は大きく開く。口縁部には大小1対づつの把手をもつ。大把手は三角形状を呈し、刻み目のある隆帯を円孔を取り込むように渦巻き、口縁部は2本組隆帯で2段の変形クランク文を表出する。区画内は沈線により充填されている。胴部は単節LRを地文に3本単位の沈線によりL字状文を描出している。3はキャリバー形の深鉢で口縁部のみ遺存している。口縁部には双孔を有する把手をもち、隆帯が巡っている。また口縁部は2本の隆帯によるクランク文が4単位で巡っており、頸部の隆帯に連続する。地文は単節LR横回転されている。4は同じように2本組隆帯によるクランク文が配されているが、区画内は縦位の沈線を充填している。胴部は単節LRを地文に沈線による懸垂文が垂下している。5は口唇部下が無文帶で口縁部は単節LRを施文する。6は連続交互刺突文を巡らす浅鉢である。7は胴部破片で、頸部に一条の隆帯を巡らし、胴部は単節RLを施す。8は平縁の深鉢で、口唇下から無節Lを縦回転させている。9~10は深鉢の底部。12は無文の浅鉢で、口縁部に太沈線により区画している。加曾利E1古期。

S K45 (F i g 46-15~20) 15は胴部中位で脹みをもち、口縁部は開きながら内彎する。口縁部には3単位の把手をもち、一山のみ円孔が穿されている。この円孔の周囲を隆帯が巡り、連続して2本組隆帯となり、クランク文が3単位で巡っている。このクランク文区画内を沈線により充填している。胴部は単節LRを施文している。16はキャリバー形の深鉢の口縁部である。山形状の把手が付き、把手部に沈線による渦巻文が描出されている。また連続して、2本組隆帯がク

ランク文を構成している。区画内は単節 L R を地文としている。17は把手部の破片。円孔が穿たれ円孔周囲に沈線を巡らす。18は口唇部が内傾する深鉢で、隆帯による区画文が施されている。地文は単節 L R である。19は2本隆帯の渦巻区画内を沈線により充填している。20は胴部破片で、単節 L R を地文に、沈線による波状文を垂下させている。加曾利 E 1 中期。

S K46 (F i g 47-1~20, F i g 48-1~10) 47-1は平縁のキャリバー形の深鉢である。2本の隆帯によりクラック文を描出し、区画内を縦位の沈線を充填させる。胴部は単節 L R を施文する。8は口縁部破片で、中空の大型把手をもつ。把手には8字状の沈線を基本に沈線文を加える。9も内面は大きく貫通する円孔を有する把手で、口縁部には単節 L R を施されている。10~16はキャリバー形の深鉢で、2条の隆帯によるクラック文 (11・12・15) を配する。また地文に縄文施文と11・15のように区画内に沈線文を充填するものがある。17~20は沈線文により文様を表出するもので、17は口唇下に単節 R L を地文として、沈線による蕨手状を描出する。18・19はやはり沈線による横 S 字状施す。横文帯の上下に短い縦位の沈線文を施す。20は渦巻文を中心二重の梢円形文を描き、縦位の沈線文を加える。2はほぼ直線的に立ち上がる平縁の深鉢で、口縁部が若干肥厚し、体部は単節 R L を施す。3は胴下半部のみ遺存する深鉢で、単節 R L を地文に2条1単位の直線文と波状文を垂下させている。4は底部からやはり直線的に口縁へ開く深鉢で地文に単節 R L を施文するものの、器面全体をヘラ整形している。5も同様で無文土器である。6・7は底部破片。6は網代痕を残置している。48-1は平縁で、短く外反する口縁部の無文帯下に交互刺突文を巡らし、以下2条の隆帯による波状区画を設け、縦位の沈線で充填している。2~8は胴部破である。2は頸部付近で、隆帯による区画下に沈線を3条巡らす。単節 L R を地文としている。4も同様、2条の隆帯により区画文を構成し、胴部は沈線による渦巻文を描出する。3・5も2もしくは3本一対の沈線文が垂下している。6・7も同様、懸垂文がみられる。9・10は浅鉢の底部である。加曾利 E 1 中期。

S K47 (F i g 48-11~15) 11は口縁部が外方へ開く深鉢で、口縁部文様を無文地沈線により横位の長方形文に、2本の縦位の沈線文を配する。胴部は単節 R L を施す。12は平縁の深鉢で、口縁部から縦位の櫛齒状文を垂下させている。13は2条の隆帯の区画文で、区画内は沈線で充填させている。14も2条の隆帯による区画文で、地文に単節 L R を施文する。15は地文に単節 L R を施し、3本単位の沈線文を垂下させる。加曾利 E 1 中期。

S K48 (F i g 49-1~10) 1は深鉢の底部破片。地文は単節 R L 縦位回転の施文で、沈線文が垂下する。2は口縁部破片。口縁部文様帯の上下を隆帯で区画し、文様帯内には L R 横位の縄文を地文として、隆帯とそれに伴う沈線によって波状文を施文する。4も波状文を施文する。3は内側するキャリバー形深鉢で、隆帯による区画文内に縦位の沈線文を施文する。5~9は胴部破片である。5は隆帯の区画文で、地文に単節 R L 縦回転。6は単節 R L を地文に、沈線による懸垂文を垂下させる。8も同様、単節 L R を地文に沈線による波状懸垂文を垂下させる。7は無文地に隆帯による円形文と区画文を配する。10は浅鉢の底部である。加曾利 E 1 中期。

SK49 (F i g 49-11~19) 11はキャリバー形の深鉢。胴下半部を欠損する。平縁で、口縁部文様は隆帯により渦巻文と半月文を組合せた区画文を4単位配し、区画文を縦位の沈線で充填する。胴部には単節LRを地文に1条の蛇行沈線および3条の沈線を1単位とした4単位の懸垂文を施している。14も11とはほぼ同じ形態をもつ。13は単節RL縦位回転の縄文を施し、3条1単位の沈線文を垂下している。12は波状口縁を呈する深鉢。波頂部は隆帯による円形区画文を配し、大きく外反する。体部は2本組沈線による懸垂文間を斜行沈線が充填している。17は口縁部破片。短い口縁部無文帶下に沈線を巡らし、以下縦位の沈線文を充填する。16・18は2条の隆帯区画文内に沈線を充填する。15は口縁部破片。単節LRを地文に2条の隆帯による区画文を表出している。19は胴部破片、単節RL縦位回転を地文に、3本の沈線文と1本の波状沈線文を懸垂文として垂下させている。加曾利E 1中期。

SK51 (F i g 50-1~4) 1は底部破片。単節LRを地文としている。2は平縁の深鉢。口唇部下位より単節RL縦位回転を地文としている。3は胴部破片。単節RLの原体を縦位・横位に回転させて羽状縄文を施す。4は胴部破片、単節RL縦位回転させる。

SK52 (F i g 50-5~11) 5は浅鉢形土器。口唇部に一条の沈線を巡らし、大きく外反する。内面に陵を有する。6は口縁部破片。口縁部に短い無文帶をもち、以下に連続交互刺突文を巡らし、頸部は隆帯による区画文を表出する。7は単節LRを地文に隆帯による区画文を施す。8は内側する頸部破片。縦位の沈線を施す。9は波状口縁を有する深鉢の波頂部の破片である。沈線文を垂下させている。10・11は胴部破片で、10は縄文地文に2条の隆帯により区画文を構成する。11は突出部を有し、沈線により区画文内を沈線で充填する。加曾利E 1古期。

SK54 (F i g 50-12) 12は口縁部破片。単節LRを地文に、隆帯で区画している。

SK55 (F i g 50-13・14) 13は胴上半部を遺存する。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく開く。口唇部は肥厚し、一段稜をもつ。口唇部は単節LR横位、体部は同じくLRの縦位回転を施す。14は口縁部破片で、口縁部は短く無文帶とし、沈線による区画している。以下は単節LRを施す。

SK55 (F i g 50-15) 15は胴部破片で、頸部に隆帯による区画文を配し、胴部は単節RLを地文に、1条の波状沈線を垂下させる。

SK58 (F i g 51-1~5) 1は胴部破片。単節RLを地文に隆帯による区画文内を波状の横走する隆帯を巡らす。2は波状口縁の深鉢。3は単節RLを地文に区画文としている。4は単節RLを地文とする。5は浅鉢の底部。加曾利E 1中期。

SK62 (F i g 51-6~11) 6は口縁部破片。口縁部は無文帶で、大きくて字状に外反する。体部は2条の隆帯による半月状の区画文を配する。地文は単節RLである。7は口縁部が外方に開く深鉢で、口縁下より単節LRを施している。8は浅鉢形土器で、口縁部は短く垂直に立ち上がる。無文である。9は深鉢の底部破片で、単節RLを地文に2条1組の沈線文を垂下させている。底部は網代痕を残置している。10・11は深鉢の胴部破片で、縄文地文に2もしくは3本単

位の沈線文で直線文や曲折文が施されている。加曾利E 1新期。

S K64 (F i g51-12~17) 12は口縁部を欠損する大型の深鉢で、口縁部下位は沈線により棒状区画を設け、区画内を沈線で充填している。頸部は無文帶とし、隆帶により区画している。胴部は単節L R継位回転により全面施文している。13は平縁の口縁部破片である。口唇部は短く外反し、無文帶としている。無文帶との境に刻目を一列巡らし、以下沈線による棒状区画文が二重に施され、さらに下位は細い刻目が巡る。14は平縁の口縁部破片。単節L Rを地文に2条の沈線を施す。16は単節R Lを地文に、沈線による波状文と直線文を垂下させる。17は深鉢の底部破片である。加曾利E 1中期。

S K68 (F i g52-1~4) 1は深鉢の口縁部破片。口縁部に小突起をもち、口縁部に2条の隆帶を巡らし、さらに連続して渦巻文を配する。口縁部区画は幅広い凹帯により施され、地文として単節L Rを施文している。2は深鉢の口縁部破片。口縁部はやや内脣し、口縁部から2条の沈線を施した隆帶によるクランク文状の区画文を配し、区画内に縦位の沈線を充填させる。3は深鉢の胴部破片、頸部付近は連続交互刺突文を巡らし、単節L R継回転を地文に沈線による円形モチーフを描出する。4は撫糸Rを地文に細沈線による波状文と沈線文を垂下させている。1は加曾利E 1古期。

S K79 (F i g52-5~17) 5はキャリバー形の大型深鉢。胴部は直線状に開き、口縁は内脣しながら大きく開口する。文様は口縁部に集約され、口唇部に一条の隆帶を巡らし、さらに2条1組の沈線を伴う隆帶による5単位となる渦巻文と渦巻文に連結した区画文をもつ。地文は単節L Rを継位に施される。6はキャリバー形の大型深鉢の口縁部破片。口縁部に一条の隆帶を巡らし、さらに2条1組の隆帶による区画文が施される。区画内には縦位の沈線が充填する頸部は単節L Rが施文されている。7も口縁部破片で、口唇部下に連続交互刺突文を巡らし、さらに隆帶によって区画される。区画内は単節L Rを施文し、地文としている。8~10は縄文地文に、隆帶による半月状文、梢円形文等の区画文を施している。11は口唇部がくの字状に短く外反する平縁の深鉢で、口唇部下に波状沈線を巡らし、以下沈線区画内には、単節R Lを地文としている。12は深鉢の胴部破片で、単節R Lを地文に沈線による渦巻文とそれを囲む劍先文が施されている。13は単節L Rを全面に施した深鉢形土器。14・15も胴部破片で、14は複節R L Rを地文に、2条1組の沈線による波状文を垂下させている。15は隆帶と沈線による文様構成で、地文に単節R Lをもつ。16・17は深鉢の底部破片。加曾利E 1中期。

S K81 (F i g53-1~7、54-1~15) 53-1はキャリバー形の深鉢で、底部を欠損する。胴部でやや膨み、口縁部で緩やかに開きながら内脣する。口縁部は3単位の波状口縁となり、各波頂部では沈線による渦巻文を描出し、連続して口縁部に一条巡る。またこの沈線は2条隆帶と組合ってクランク文を構成し、4単位で巡っている。頸部には続いて2条1組の隆帶が巡り口縁部を区画している。地文として単節L Rが施されている。2は平縁を呈するキャリバー形の深鉢でやはり底部を欠いている。口唇部は肥厚して、一条の隆帶を巡らし、さらに頸部にも隆帶を巡

らし区画文としている。区画内には波状の隆帯を一周させている。地文は単節LRを施している。3は胴部中位より外反気味に開いていく深鉢。口唇部と底部を欠損している。口縁部文様帶は隆帯による長方形と半円形区画文で、長方形区画内には縦位の沈線文を、半円形区画文内には単節LRを地文に施されている。また胴部は単節RLの縦位の繩文を施している。4も口縁部と底部を欠損している。頸部に2条の隆帯が巡り、胴部は地文に撚糸Rを施し、波状沈線文と直線沈線文を垂下させている。5～7は浅鉢形土器である。5は底部のみの破片。6は頸部でくの字状に内彎し、さらに口縁部端が短く外反する平縁の浅鉢。文様は口縁部を無文に、頸部は沈線により半月形文や楕円形文が表出されている。7も頸部で内彎し、口縁部端で短く外反し、しかも肥厚する。文様は口縁部を無文とし、沈線により区画された頸部は隆帯による連結して長く延びる渦巻文を表出している。54-1～11は口縁部破片である。1は大型キャリバー形の深鉢で、口縁部に外面2孔、上面1孔、円面1孔の貫通孔を有する立体的な把手をもち、口縁部は2条1組の隆帯による半円形（クランク文）の区画文を施し、区画内を沈線により充填する。2は波状口縁の深鉢で、口唇部に沈線による渦巻文を描出し、口縁部は単節LRを地文に2条1組の隆帯による渦巻文と剣先文の組合せ区画文を配する。3は平縁の深鉢。口唇部を一条の沈線文を巡らし、口縁部は隆帯による検先文状の区画文を表出する。区画内には縦位の横齒状文を施す。4も平縁の深鉢で、口唇部下に一条の隆帯を巡らし、地文に単節RLを施して波状隆帯を一周させる。5は小突起をもつ深鉢で、突起部は円形文を施し、口縁部は微隆帯によるクランク文を配し、区画内を縦位の沈線により充填する。6も小突起をもつ深鉢で、突起部には沈線による渦巻文がみられる。7も口縁部破片。口縁部は無文帯を有し、無文帯下に単節RLを地文に2条1組の隆帯を楕円形状に配する。8は口縁部が緩く外反する平縁の深鉢。口縁部は無文、体部は2条1組の隆帯を渦巻文で区画し、以下単節LRを地文として施す。9は口唇部に2条の沈線を巡らし、口唇部下は無文、体部は単節LRを施す。10は口唇部に沈線による渦巻文を描出し、口縁部も沈線による渦巻文を基調とする横モチーフと縦位の短い沈線を組合せる。11は口縁部が無文帯で、胴部が単節LRを地文に3本1单位の沈線文と1本の波状文を垂下させている。13は頸部に2条1組の隆帯を区画文に、以下単節LRを地文に3本1单位の沈線文を垂下させ、これを横切るように横位の沈線文を施す。14は口縁部を縦位の沈線文で充填し、胴部は単節RLを地文に3本1单位の沈線文を垂下させる。15は2本組の沈線による懸垂文を垂下させ、一部が小渦巻を描いている。地文は単節LRである。加曾利E1中期。

SK91 (F i g54-16) 16は胴下半部が膨らみ、口縁部で開く深鉢である。文様は単節RLを地文に沈線により縦位の懸垂文とその一部に突出させた懸垂文を垂下させ、横位に施された沈線によって区画されている。

SK97 (F i g55-1～6、56-1～5、57-1～15、58-1～7) 55-1は胴部下位にやや膨らみをもち、上位より外反しながら、口縁部は内彎する。3単位の把手を有するキャリバー形の深鉢である。把手は有孔の環状把手で、孔に沿って渦巻状の沈線と縦位区画の沈線文を配する。

把手内面にも半円状の沈線文を描く。口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文を3単位で巡らし、クランク文に挟まれた間には同じ隆帯により縦位区画を施す。地文として口縁部は単節RLの横位施文、胴部は単節RLの縦位施文である。2は胴下半部を欠損するが、口縁部は頸部から緩やかに外方へ開きながら内彎する。口縁部は3単位の突起をもつ波状口縁で、各頂部に沈線による渦巻文が表出され、各波頂間は沈線が一条巡っている。口縁部文様はこの口唇部からの連続で、2条1組の隆帯により横S字状文を3単位で巡らしている。また横S字状文に接続して頸部の隆帯区画へと連がる。地文は口縁部が単節RL横施文、胴部が単節LR縦位施文である。3は平縁の深鉢で、内面に一段の棱をもつ。口縁部には4単位の橋状把手を付す。この把手には沈線と半截竹管による角押文を巡らし、さらに短沈線を加える。口唇部下には2条の沈線を施し、上端と下端に連続交互刺突文を配し、その間に沈線文区画内を設け、区画内を縦位の沈線が充填する。胴部は単節RLを施文している。4は底部が徐々に外方から開き気味に立ち上がり、口縁部で大きく開口するキャリバー形の深鉢である。口縁部は4単位の山形状の把手をもち、把手は橋状を呈している。この把手には隆帯が口唇部付近から口縁部上端まで派生させている。口縁部および胴部には2条1組の隆帯が方形を基本に区画文を2段作成している。この区画文の一部に鍵状の渦巻文や横突出文を垂下させている。地文は単節LRである。なお胴下半部は無文である。5は深鉢の胴下半部の土器で、単節RL横位施文の繩文を地文に2本の平行する沈線が渦巻文が施文される。6はいわゆる大木8b式で、底部からほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は欠損している。地文に単節RLを縦回転施文し、頸部はまず直線文と波状沈線文により区画文を構成し、以下3条1組の沈線文により渦巻文や直線文に加えて幾何学的な文様を施文する。

56-1は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部が内彎しながら外方へ開き、口唇部がくの字状に外反するキャリバー形の深鉢。口縁部文様は、口唇部が肥厚して短い無文帶となり、以下2条1組の隆帯によりクランク文を4単位巡らし、この区画内に縦位の沈線を充填する。胴部は6単位の櫛齒状工具による波状条線を垂下させている。底部は網代痕を残置している。2は底部から直線的に開き、口縁部上端で内彎し、さらに短くくの字状に外反する深鉢である。折り返し口縁で、口縁部下端は押捺による波状を呈している。地文は単節RL繩文が施されている。3は直線状に緩やかに口縁が開いていく深鉢で、口縁部は無文帶で、胴部上位に2条1組の隆帯を巡らし、さらにここから同じ隆帯を4単位懸垂文として垂下させ、胴下部で1条の隆帯で区画する。区画内は単節RL繩文を施文している。底部は木葉痕を残置している。4は胴下半部で膨らみ、上位より内彎して立ち上がるキャリバー形の深鉢。口縁部は肥厚して端部は無文帶としている。その下位は連続交互刺突文が一条巡り、胴部は単節RLが縦位に施されている。5は胴下半部の深鉢。櫛齒状工具による条線が波状に垂下している。57-1は底部からほぼ直線的に開口して口縁にいたる深鉢で、口縁部は肥厚している。口縁部上端は短い無文帶で、沈線により区画された下位は櫛齒状工具による条線で充填されている。2は口縁部を欠損する深鉢で、全体を単節LRによって施文されている。3はキャリバー形の深鉢で、口縁部破片である。口縁部は小突起をもつ

波状口縁で、口縁部上端は無文帶で、以下波頂部から2条の隆帶が横S字文を施し、この横S字文からやはり2条1組の隆帶が、縦区画文、半月文、剣先文等のモチーフ描出している。4は平縁の深鉢で、口縁部破片である。口唇部には1条の沈線が巡り、以下隆帶による区画文内を沈線で充填する。5は口縁部部破片で、口縁がほぼ垂直に立ち上がり、頸部が肥厚する。口縁部上端に繩文施文し、以下沈線区画内に縦位の沈線を充填する。6は突起をもつ波状口縁の深鉢で、突起部は円孔が穿たれ、円孔に沿って隆帶による区画文が施されている。区画内に縦位の沈線を充填させ、以下波状沈線を2条巡らせ、地文に単節RLを施す。7は二山突起をもつ深鉢で、突起に沿って沈線を施し、以下沈線区画と刻目のある隆起を配し、円形区画内には地文の単節LRを施し、他は縦位の沈線文を充填させる。8は口唇部が短く外反する平縁の深鉢で、口唇下に連続交互刺突文を一条巡らし、体部は3本単位の沈線文を垂下させ、沈線文間を斜行する沈線で充填している。9・10は口縁上端は無文帶を有し、その下位に連続交互刺突文を1条巡らす。11は口縁部が大きく外反する平縁の深鉢。口縁部下位に眼鏡状把手が4単位付されている。口縁部は縦位の沈線が施されている。12は胴部が大きく内彎しながら口縁部で外反する平縁の土器。文様は口縁部が無文帶、胴部は単節RLを地文に2条1組の隆帶を半円形に施文する。14は口縁部上端を無文とし、以下連続交互刺突文を1条巡らす。15は口唇部が小さく外反する。文様は横沈線を2条巡らせ、これに対して縦位の沈線文を施す。13は大型の浅鉢。口唇部に2条の沈線をめぐらせ、最終的に一部先端は渦巻を呈する。内面には一段陵を有する。58-1は口縁部端がくの字状に立ち上がる浅鉢で、隆帶により半円形区画文を表出している。2~4・7は深鉢の底部破片。5・6は浅鉢の底部破片である。加曾利E 1古期。

S K109 (F i g 58-8~14) 8はキャリバー形の深鉢。口唇部に沈線を伴う隆帶を1条巡り、口縁部は単節LRを地文に波状の隆帶を施文する。9は平縁の深鉢で、口唇部下を無文とし、隆帶と沈線モチーフを表出す。10は胴部破片で、単節LRを地文に沈線による波状文を垂下させる。11は深鉢の底部破片。単節LR縦位施文を地文に、沈線文を垂下させる。12~14は浅鉢の底部。加曾利E 1中期。

S K110 (F i g 58-15~20) 15は深鉢の胴下半部の破片。単節RL縦位施文を地文に、沈線文を垂下させている。16・17は口縁部破片。16は口縁部が内彎する深鉢で、沈線を伴う隆帶を1条巡らし、以下は単節LR横位施文の繩文を地文としている。17も口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢で、口唇部に1条の沈線を巡らし、口縁部は2条1組の隆帶による渦巻文とそれに連なる半円文区画を配する。地文は単節LR横位施文の繩文である。18~20は胴部破片である。18は単節RLを地文に、隆線による長方形区画文を施す。19は口縁部に近い破片で、沈線による渦巻文を表出している。20は立体的な円形文を配し、以下単節RLを地文に、沈線文を垂下させる。加曾利E 1中期。

S K112 (F i g 59-1~7) 1はキャリバー形の大型深鉢。胴部での張りはほとんどなく、口縁部で大きく外反しながら、口縁部上端で内彎する。口縁部は4単位の小突起をもち、各突起

部は沈線による渦巻文が施され、更に口縁部において渦巻文に連絡するように渦巻文・長方形区画文を配する。いずれも2条1組の隆帯によって施文されている。地文として区画内に単節LRを横位施文している。胴部は単節RLの縦位施文を全面施している。2~5は深鉢の胴下半部もしくは底部破片である。6は口縁部上端がくの字状に外反する平縁の深鉢で、角押文で棹状区画を施している。7は平縁の浅鉢。口縁部がくの字状に内彎し、口唇部は肥厚する。太沈線による渦巻文、三叉文を描出している。加曾利E1中期。

SK113(Fig.59-8~12) 8はキャリバー形を呈する深鉢。平縁で単節LR横位施文の縄文を地文に2本1組の隆帯により、半月状区画文と、縦位区画文を施す。半月状区画文は渦巻文を伴うものもあり4単位が巡っている。頸部は3条の沈線により区画され、胴部は3本単位の沈線により懸垂文を垂下している。9は底部から口縁部まではほぼ直線的に立ち上がり、口縁部下位より外反する深鉢である。口縁部は4単位の波状口縁を呈し、各波頂部には隆帯による渦巻文を配している。口縁部下は無分化し、下位に1条の隆帯を巡らし、この隆帯に連なって4単位の隆帯が懸垂文として垂下している。隆帯区画内には地文として単節LR縦位施文が施されている。10は底部から大きく内彎しながら、口縁部でくの字状に短く外反する。口縁部端は無文帶、以下連絡交互刺突文を1条巡らし、単節LRを地文とする。11~12は胴部破片、いずれも単節LRを地文に隆帯による区画文を施文している。加曾利E1中期。

SK118(Fig.61-1~10) 1は口縁部を欠損する深鉢で、底部からほぼ直線的に立ち上がる。単節RL縦位施文を地文に、沈線による直線文と鍵状文を垂下させる。2も胴下半部のみ遺存する深鉢。地文として捺糸Rを施文している。3~4は底部破片、3は網代痕を残置している。5~7は口縁部破片。5は平縁のキャリバー形の深鉢。口唇部に1条の沈線を巡らせ、口縁部は2条1組の隆帯による半円形文を表出する。地文として単節LR縄文を施文する。6は小突起をもつ波状口縁のキャリバー形深鉢。口唇部は1条の沈線を巡らし、2本1組の隆帯による渦巻区画文を施す。地文として単節RL縄文を施文している。7は波状口縁の深鉢で、単節LRを地文に沈線文を垂下させる。8~10は胴部破片。8は浅鉢で沈線による梢円形文を表出する。9は深鉢で沈線による渦巻文を施す。10は単節RLの縦位施文の深鉢。加曾利E1中期。

SK120(Fig.61-11~16) 11~12は口縁部破片。11は平縁のキャリバー形深鉢。口唇部に1条の沈線を巡らせ、口縁部は単節LR横位施文を地文に、2条1組の隆帯による渦巻文・半円形文を配する。12は平縁のキャリバー形深鉢で、地文に単節RLを施し、口唇部から連続する隆帯による渦巻文を施文する。13は深鉢の胴部破片。単節RL縦位施文を地文に、3本1単位の沈線文と1本の波状文を垂下させている。14~16は底部破片で、いずれも深鉢形の底部。14には網代痕を残置している。加曾利E1中期。

SK122(Fig.60-1~14) 1~8はキャリバー形の深鉢。1は口縁部から頸部の土器で、口縁がやや緩く内彎する。口唇部に小さな突起部をもつものの、ほぼ平縁を呈している。口唇に1条の沈線を巡らせ、口縁部は2条1組の隆帯による4単位のクランク文とこれらの隆帯を

連結した区画文をもつ。なおクランク文の先端には渦巻文と劍先文が伴う。頸部は無文帯をなし、3条の沈線によって区画され、以下3本組の沈線が垂下している。地文は単節LRが施されている。9も同様、波状口縁で、波頂部に渦巻文が施され、口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文を配し、地文に単節LR横位施文が施されている。8は平縁で、口縁部上端および頸部に隆帯が巡り、その間に波状隆帯が巡らされている。地文は単節RL横位施文である。10も平縁で、口縁部上端と頸部に隆帯が巡る。隆帯は地文である単節RL繩文によって施文されている。2は胴部中位よりくの字状に大きく開く深鉢。口縁部端は肥厚し、内面に稜を有する。口唇部は無文で、胴部は全面に単節LRが施されている。3は胴部下位より直線的に立ち上がる円筒形の深鉢で、口縁部上端がわずかに肥厚する。無文で、胴部中位に1条の隆帯を巡らす以外に文様の施文はない。口縁部には補修孔がみられる。11～14は深鉢の口縁部である。11は平縁で、口唇部に沈線を1条もつ。文様は単節RL繩文を縦位に施文し、2条の平行沈線文の間に波状沈線文を垂下させ懸垂文としている。12は平縁で、外方へ開く土器である。単節LRを地文に沈線により楕円形区画文を配し、区画内に2条の平行沈線を施文する。13も平縁で、口唇部下に連続交互刺突文を1条巡らす。地文は単節LR横位施文である。14は櫛齒状工具による条線文を垂下させている。4は深鉢の底部破片である。5～7は浅鉢である。5は胴部上位が内彎し、口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部がやや肥厚し、全体に装飾的文様はない。6は胴部で内彎し、口縁部はくの字状に外反する。やはり口縁部は肥厚し、内外面ともナデ仕上で文様はない。7は平縁で、胴部中位でくの字状に内彎し、口縁部は緩く外反する。口縁部は無文で、頸部に連続交互刺突文を1条巡らし、以下沈線による渦巻文と長方形文が連結したモチーフを5単位巡らす。やはり内外面ともナデ仕上で行われている。加曾利E中期。

SK124 (F i g 62-1~14) 1・8・9・11はキャリバー形の深鉢。1は口縁部は緩やかに開いている。胴下半部を欠損している。口縁部は4単位の波状口縁となり、各波頂部間に太沈線文を施す。頸部には隆帯が巡り、口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文とクランク文の端に劍先文が付され、さらにクランク文に連結した縦位の隆帯区画文が施されている。地文は口縁部が単節LRの横位施文、胴部が単節RLの縦位施文が施されている。8は口唇部に沈線による渦巻文が波頂間に施され。口縁部は2条1組の隆帯による横S字状文が配されている。地文は単節LR横位施文である。9は口唇部の1条の沈線文が巡り、口縁部は隆帯による渦巻文などの区画文が施されている。地文は単節LR横位施文である。11も9とほぼ同じ形状を呈している。2・3・10はいずれも同じ形態をもつキャリバー形の深鉢である。2は口縁部は大きく内彎し、口唇部に眼鏡状の把手がつく。この把手の周囲に沈線文が巡り、口唇部へと連結する。さらに2本1組の隆帯に連なり、クランク文が施される。このクランク文区画内に縦位の沈線文が充填される。頸部は単節LRが地文として施文されている。3・11は同一個体で、大型の深鉢である。口縁部はやや緩やかな内彎で、口唇部に眼鏡状の把手がつく。やはり把手の周囲に沈線文が巡り、2条1組の隆帯によるクランク文が施されている。クランク文区画内には沈線文が充填され、胴部は

単節LR縄文を地文に、3条1単位の沈線文を懸垂文として垂下され、さらに円形（渦巻文）が表出されている。4は胴下半部のみ遺存する深鉢で、底部よりほぼ直線的に胴部へ移行する。単節RL縄文を地文に3本1単位の沈線を垂下させ、その間に2条1組の波状沈線文を垂下させている。底部は網代痕を残置している。5は口縁部と底部を欠損している。胴部は朝顔形に大きく外方へ開く、頸部に3条の沈線を巡らし区画文とし、以下地文として単節RLを施文している。6も胴部破片で、胴部中位付近で大きく脹らみ、頸部で括れるキャリバー形の深鉢。頸部に3条の沈線文を巡らし区画文とし、胴部は単節LR縄文を地文に3本1単位の沈線による懸垂文と曲線の組み合せモチーフとしている。曲線文の中位には渦巻文がみられる。7は底部からほぼ直線的に外方へ開く深鉢。地文は単節LRである。12は口唇部に連続交互刺突文が1条巡り、口縁部は無文である。13は胴部破片、地文に単節LRが施されている。14は底部に近い胴部破片。櫛齒状工具による条線文が施されている。加曾利E1中期。

SK125 (F i g 63-1) 1は平縁の浅鉢である。口唇部が肥厚し、内外面とも丁寧なナデで仕上げられている。

SK126 (F i g 63-2~6) 2は平縁のキャリバー形深鉢の口縁部破片。4~6も同一個体である。口唇部に1条の沈線が巡り、口縁部は2条1組の隆帯による半円形文や渦巻文で区画している。地文に単節LR横位施文である。3は平縁の小形の深鉢。口唇部下を無文とし、単節RLが施されている。加曾利E1中期。

SK129 (F i g 63-7~18) 7は波状口縁を呈するキャリバー形の深鉢。口唇部に1条の沈線を巡らし、口縁部は2条1組の隆帯による区画文が施されている。地文は単節LRである。8は平縁の深鉢でわずかに口縁が内彎する。文様は単節RLを地文に沈線による渦巻文・曲線文を描出している。9は波状口縁を呈する深鉢。波頂部には隆帯による渦巻文が配され、ここから沈線文を4条垂下させている。地文は単節RLである。10は口縁部がくの字状に外反し、頸部に沈線文による区画文を有する。11~14は頸部付近の破片で、11は隆帯区画文下を2条1単位の沈線文と1条の波状文を垂下させている。地文は単節RLである。12は隆帯による区画文と渦巻文をもち、胴部は3条1単位の懸垂文を垂下させている。地文は単節RLである。13は口縁部に沈線文を、頸部を2条1組の隆帯により区画され、胴部は懸垂文が垂下している。地文は単節RL縫位施文である。14は地文を単節LR施文し、沈線による区画文が施されている。15は単節RLを地文に懸垂文が垂下されている。16・17は深鉢の底部破片。18は浅鉢で、内外面とも丁寧なナデ仕上がり施されている。加曾利E1中期。

SK130 (F i g 64-1~11) 1は口唇部および胴下半部を欠損している。器形は頸部で括れ、口縁は大きく外方へ開く。口縁部は2条1組の隆帯による変形クランク文を配し区画され、頸部にも隆帯による区画が施されている。胴部は2条1単位の懸垂文と1条の波状沈線文を垂下させている。地文は単節RL縄文である。2は三単位の大型の山形把手をもつ深鉢で、口縁部のみ遺存している。把手には隆帯を走らせ、さらに沈線による渦巻文が施される。口縁部は2条1組の

隆帯により円形文、半円形文、曲線文区画が行われ、区画内には地文として単節LRが施文されている。3は胴部中位より口縁部にかけて内彎する浅鉢で、口唇部下より全面単節LRを施文されている。4は円孔のある大型把手をもつ深鉢で、口縁部が内彎するキャリバー形を呈している。把手の周囲は沈線により囲まれ、口唇部の沈線へ連なる。口縁部は1条の隆帯と2条1組の隆帯がみられ、半円形区画を施している。頸部に1条の隆帯により区画され、胴部は3条1単位の懸垂文と1条の波状沈線文が垂下している。地文は単節LR繩文である。5は橋状把手をもつ大型のキャリバー形深鉢。把手上には沈線が渦巻状に巡り、口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文が施され区画文としている。胴部は頸部区画の隆帯に沿って2条の沈線が巡り、3条1単位の沈線文がそこから垂下している。地文は単節LRが施されている。6は口縁部が内彎して、口唇部が短くくの字状に外反する大型のキャリバー形深鉢である。口縁部と頸部には隆帯が1条ずつ巡り、その間にやはり隆帯による波状文が横走する。地文は単節LRである。7もキャリバー形の深鉢。2条1組の隆帯により区画文が施されている。地文は単節LRである。8は深鉢の底部破片。底部に網代痕を残置している。9は深鉢の破片。頸部に2条1組の横走させ区画文としている。また胴部は3条1単位の沈線によってクランク状に施文している。地文では単節LRが施されている。10・11は浅鉢。10は胴部で緩く内彎して、口縁部でくの字状に短く外反する。また頸部は隆帯突出部により区画されている。文様は沈線による渦巻文とそれに連なる梢円形文が描出されている。11は胴部下位より直線状に大きく開き、口唇部は肥厚し、内面に稜を有する。内外面とも丁寧なナデ仕上げが施されている。加曾利E1中期。

S K113 (F i g 65-1～3) 1は胴下半部を欠損しているキャリバー形の深鉢。口縁部は緩やかに開いている。口縁部は4単位の波状口縁となり、各波頂部には沈線による渦巻文が施されている。口縁部に2本1組による渦巻文と半円文が描出され、さらに半円文に連なり縦位の区画文が施されている。胴部は2条1単位の懸垂文が垂下している。地文は単節LRを施している。2はキャリバー形の深鉢で、口縁部のみの小破片である。口唇部に1条の沈線が巡り、口縁部は隆帯による渦巻文が施されている。3は底部破片である。加曾利E1中期。

S K132 (F i g 65-4～8) 4～6は胴部破片である。4は単節LRを地文に沈線による区画文が描出されている。5は2条1組の隆帯による区画文が施されている。6は単節RL縦位施文の繩文を地文に、平行する沈線文間に波状沈線文を垂下させる。7・8は深鉢の底部破片である。いずれも底部に網代痕を残置している。加曾利E1中期。

S K133 (F i g 65-9～24) 9は平縁の浅鉢で、口縁部がくの字状に外反し、しかも肥厚している。頸部には1条の沈線が巡り区画されている。内外面ともナデ仕上により施されている。10～18までは深鉢の口縁部破片である。10は平縁のキャリバー形を呈し、口唇部に1条の沈線を巡らし、口縁部上端と下端に1条の隆帯を配し区画文としている。また胴部には逆U字状を呈する沈線の懸垂文が垂下している。11は平縁で、口縁部が無文帶をなし、一段稜をもって沈線文を1条巡り、さらに単節RLを地文に沈線文区画を施す。12は波状口縁で、波頂部から口唇部に沿っ

て沈線を巡らし、口縁部は単節 L R 縦位施文の繩文を地文に、2 条 1 組の隆帯による渦巻文を配する。13は口唇部下に一条の凹帶をもつ隆帯を巡らし、沈線文による区画文を施す。地文に単節 L R 横位施文の繩文が施されている。14は小型の深鉢で、沈線による渦巻文と棹状区画文が施文されている。15～18は口縁部文様帶をもたない深鉢で、15は口唇部下に 2 条の沈線が走り、単節 L R 繩文を地文にもつ。16はやはり口唇部下に凹帶を有し、地文に単節 L R が施されている。17・18は口唇部下は肥厚し、一段の稜を有する。17は単節 R L、18は単節 L R 繩文を施文する。19は胴部破片。節の細かい単節 R L 縦位施文を施す。20は地文に単節 L R 施文し、沈線文を施文する。21は列点文を一列施文する胴部破片。22～24は深鉢の底部破片。加曾利 E 1 中期。

S K 134 (F i g 66-1～3) 1は平縁のキャリバー形深鉢。口縁部は隆帯による楕円形区画文を配し、区画内に縦位の沈線文を充填する。頭部は無文帶である。2は深鉢の底部破片。単節 R L を地文として施している。3は平縁の浅鉢。口縁部は内彎し、肥厚してつくられている。口縁部は凹帶が 1 条巡り、内外面ともにナデで平滑化される。加曾利 E 1 中期。

S K 135 (F i g 66-4～10) 4はキャリバー形の深鉢。底部を欠損している。胴部下位で膨らみ、上位で外反し、口縁部は内彎する。口縁部は 3 単位の波状口縁を呈し、各波頂部は沈線が 1 条巡る。この沈線に連結して 2 本 1 組の隆帯によりクランク文を 3 単位施す。隆帯区画内には縦位の沈線文を充填する。胴部は単節 L R を地文に 2 条 1 単位の沈線文と 1 条の波状沈線文を垂下させる。5は胴下半部を欠損する。頭部付近より大きく外反し、口縁部は緩やかに内彎する深鉢。把手は大小 2 単位存在し、側面から穿孔される橋状把手となる。口唇部は中央部が凹帶を呈し、橋状把手に連なる。各把手との間には沈線による渦巻文が配される。胴部は単節 L R を地文に波状沈線を垂下させる。6は平縁のキャリバー形深鉢。頭部括れ、口縁部は緩やかに内彎しながら垂直に立ち上がる。口縁部は無文化し、直下は連続交互刺突文を 1 条巡らせ、頭部に 1 条の隆帯を施す。この間に隆帯による波状文を横走させる。地文として単節 L R 横位施文。胴部は地文単節 L R に沈線による波状文を垂下させている。8も 6 と同じ波状隆帯を横走させ、頭部を隆帯により区画する。地文は単節 L R 横位施文である。7は胴部下半部を欠損する。口縁部が緩やかに外反して開く深鉢。3 単位の波状口縁を形成している。各波頂部は凹帶が巡らされている。胴部は 2 本組の沈線による懸垂文が垂下している。10も波状口縁を呈する深鉢で、胴部下部で脹らみ、口縁部は緩く内彎する。口縁部上端は隆帯が巡り、胴部は単節 R L を地文に 2 本組の沈線による懸垂文が垂下している。9は浅鉢の底部破片である。加曾利 E 1 古期。

S K 136 (F i g 67-1～2) 1・2は口縁部破片である。1はキャリバー形の深鉢で、口縁部に小突起が付き、突起に沿って沈線文による渦巻文が表出されている。口縁部は隆帯による渦巻文や幾何学文が配され、頭部に沈線を伴う隆帯が 1 条巡る。地文は単節 L R 横位施文である。2も口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢である。文様は口唇部で沈線を伴う隆帯が 1 条巡られ、2 条 1 組の幾何学文を施し、地文に単節 R L 縦位・横位施文が施されている。加曾利 E 1 中期。

SK137 (F i g 67-3~6) 3は胴部下位より直線状に開き、口縁部は外反する深鉢。口縁部は無文帶とし、胴部は全面に単節R Lを施文する。4は外方へ隆帯が突出する深鉢で、胴部は単節L Rの横位施文を施す。5・6は胴部破片で、縄文施文を地文に3本1単位の細沈線を懸垂文として垂下させている。加曾利E 1中期。

SK138 (F i g 67-7~10) 7は波状口縁を呈するキャリバー形の深鉢で、口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文を配し、地文に単節R Lを施文する。8は平縁の小型の深鉢。口唇部下は2条の沈線を伴う隆帯が1条巡り、胴部は単節R Lを施す。9は深鉢の胴部破片で、単節R Lを地文に、沈線と波状文とが組合さって施されている。10は深鉢の底部破片。加曾利E 1中期。

SK140 (F i g 67-11~18) 11は底部からほぼ直線的に延びる胴部より頸部で括れ、口縁部は内彎して開く深鉢。口縁部は突起部を有し、突起部には沈線による渦巻文が施文されている。口縁部は2条1組の隆帯がクランク文を構成し6単位で巡っている。頸部はやはり2条一周している。クランク文区画内には沈線が充填されている。胴部は単節L Rを地文に波状沈線文が垂下している。12は胴部が遺存する深鉢で、胴下半部が若干脹む。文様は単節R L縦位施文を地文に、沈線による逆L字状の懸垂文が垂下されている。13は底部から直線的に開く深鉢の胴下半部の破片。単節R L縦位施文を地文としている。14は橋状把手を有するキャリバー形の深鉢。把手部には1条の沈線が巡る。胴部は単節L Rを地文としている。15は波状口縁を呈するキャリバー形の深鉢で、2条1組の隆帯による区画文内を細かい沈線文が充填している。16は平縁の深鉢で、口縁部が内彎し、口唇部でくの字状に短く外反する。口唇部下は連続交互刺突文を1列巡らし、2本1組の隆帯による区画文内には縦位の沈線文を充填する。17・18はいずれも深鉢の底部破片である。加曾利E 1中期。16は加曾利E 1古期。

SK141 (F i g 68-1~8) 1は胴部中位より直線的に立ち上がり、口縁部でわずかに内彎する深鉢。胴下半部を欠損する。口縁部は無文化となり、口縁下を1条の沈線が巡る。以下単節R L縦位施文を帯状に施す。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁部は内彎し、口唇部に1条の凹帯を有し、連結して2条1組の隆帯がクランク文を構成する。区画内は単節L R横位施文である。3もキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁部は内彎し、太沈線による横T字状文の区画文内に縦位の渦巻文を充填させる。4は口唇部が肥厚する深鉢で、波状口縁を呈する。口縁部は沈線による渦巻文を施文する。5は頸部破片である。頸部は肥厚し、沈線による渦巻文が配される。6・7は同一個体である。頸部から胴上半部にかけての破片で、頸部に2条1組の隆帯を区画文として、胴部は3条1単位の沈線文と1条の波状文を垂下させている。地文は口縁部が単節L R横位施文、胴部も同じである。8は深鉢の胴部破片。単節R L縦位施文を地文としている。加曾利E 1中期。

SK143 (F i g 68-9・10) 9はキャリバー形の深鉢。底部からほぼ直線的に頸部まで立ち上がり、頸部から大きく外反し、口縁部は内彎する。さらに口唇部においてくの字状に小さく外反する。口縁部文様帶は、口縁部上端に隆帯を1条巡らし、これら隆帯に連絡して2条1組の隆

帶が半月形区画文を構成する。この区画文の先端に渦巻文と剣先文が付される。頸部は2条の隆帯が巡り、この隆帯間は磨消縄文帯となり、一部縄文施文痕がみられる。胴部はやはり頸部下位の隆帯に連絡して2条の隆帯懸垂文を垂下させる。胴部中位になって1条の隆帯は三角形状に突出する。地文は口縁部が単節LR横位施文。胴部が単節RL継位施文である。10は直線上に緩やかに開いていく深鉢で、底部を欠損している。4単位の波状口縁を呈し、口縁部下端に1条の沈線を巡らし、区画している。口縁部は無文、胴部は櫛齒状工具による櫛描波状文が器面全体を充填させている。加曾利E1中期。

SK144 (F i g 69-1～9) 1は平縁のキャリバー形深鉢で、口縁部の破片である。口唇部に1条の沈線を巡らし、口縁部は2条1組の隆帯による半月形区画文を配し、頸部に1条の隆帯で区画している。胴部は3条1単位の沈線部と波状沈線文を垂下させている。地文は口縁部がRL横位施文、胴部がやはり単節RLを地文としている。2は波状口縁を呈するキャリバー形の深鉢。口縁部破片で、口唇部に沈線と渦巻文を配し、口縁部は2条1組の隆帯によるクランク文を施し、区画内は単節LRを地文としている。3もキャリバー形の深鉢で、口縁部破片である。口縁部上端は無文として、口縁部は隆帯による区画文で、地文として単節LRを施文している。4は隆帯と沈線文の組み合せで、隆帯上に縄文施文が施されている。5は口縁部が内彎する小型のキャリバー形深鉢。口縁部は沈線文で充填されている。6も口縁部が内彎するキャリバー形の深鉢で、2条1組の隆帯による区画文が施され、地文に単節LRをもつ。7は胴部破片。隆帯と3条の沈線を巡らせ、胴部上位は単節LRを地文としている。8は3条1単位の沈線文と1条の波状文を垂下させている。地文は単節RLである。9は深鉢の底部破片。加曾利E1中期。

SK148 (F i g 69-10) 10は小型深鉢の底部破片である。

SK149 (F i g 69-11) 11はキャリバー形深鉢の把手破片である。把手部中央に円孔が穿たれ円孔の周囲に沈線による円形文が施され、胴部は隆帯による区画文で、地文として単節LR横位施文が施されている。

SK151 (F i g 69-12～14) 12・14は浅鉢の胴部付近の破片である。12は頸部でくの字状に折り返されたもので、口縁部には沈線による楕円形文や垂線が施されている。14は無文で、内面に稜をもつ。内外面のナデは丁寧である。13は深鉢の胴部破片。地文に単節RLの施文後、3本1組の沈線文を懸垂させている。加曾利E1中期。

SK152 (F i g 70-1～16) 1はキャリバー形の深鉢。平縁で口縁部が内彎している。口縁部は隆帯による長方形区画を構成し、無文である。2～5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片である。2は口唇部下を無文化として隆帯を1条巡らし、2条1組の隆帯をクランク文として施文している。地文は単節LRである。3は口縁部は内彎しながら口唇部がくの字状に外反する。口唇部下は無文、その下位は交互刺突文を一部遺存させ、以下2条1組の区画文が施されている。4は大型のキャリバー形を呈する深鉢である。円孔のある大きな把手を有し、口縁部は2条1組の隆帯により渦巻文と区画文が施されている。5も口縁部が内彎する深鉢で、口縁部上端から2

条1組の隆帯による渦巻文を配する。地文は単節LR横位施文である。6は口唇部がわずかながらくの字状に外反している。口縁部は無文。その下位は連続交互刺突文を巡らし、縦位の沈線を充填している。7は胴部破片。2条1組の隆帯による区画分を構成し、区画内を沈線で充填する。8は壺形の胴部破片。胴部中位に沈線文と円形文を配する。9は深鉢の胴部破片。単節RL縦位施文を地文に、2条1単位の沈線文と1条の波状沈線文を垂下させる。10も深鉢の胴部破片。半截竹管様工具により平行沈線文を幾何学状に施文する。地文は単節LRを施す。11は底部付近の破片で、単節RL縦位施文を地文とする。12は深鉢の底部破片。網代痕が残置されている。13は胴下半部のみ遺存するキャリバー形の深鉢で、単節RLを地文に3条1単位と1条の沈線文を垂下させる。14もキャリバー形の深鉢で、底部のみ遺存する。底面に網代痕を残置させている。17は体部は直線状に延び口縁部は内側に肥厚し、端部は外側に突出する浅鉢。内面に稜をもち、底面には木葉痕が残置されている。無文化で内外面ともにナデにより平滑化される。15は浅鉢、16は深鉢の底部破片。加曾利E1中期。

S K 153 (F i g 71-1~14) 1は口縁部が大きく開くキャリバー形の深鉢。胴下半部を欠損する。口縁部は環状把手を有し、内面より1対が穿孔され、外面の円孔に達している。また1対の橋状把手が付き、それぞれ円孔の周囲には沈線が巡り、渦巻文が加わる。口唇部は中央部が窪んで幅広い凹帯を形成している。口縁部は隆帯による波状文、頸部に隆帯が1条巡り、胴部は3条もしくは2条1単位の沈線文と1条の波状文を垂下させる。地文は口縁部が単節LR横位施文、胴部は単節RL縦位施文を施している。2は胴部は直線状に開き、口縁部はやや外反して開く深鉢。口縁部はやや肥厚し無文化している。口縁部下は凹帯が1条巡り区画している。胴部は柳歛状工具による柳描波状文が施される。3・10は同一個体で胴部のみ遺存。胴部で若干脹らみ、頭部で括みながら外方へ開く深鉢。口縁部下位は2条1組の隆帯によるクランク文を配し、沈線を充填する。また2条の隆帯による区画文下は、地文を単節LR繩文とし、沈線による垂線やD字状文を施す。4は口縁部破片で平縁の深鉢。口唇部下は連続交互刺突文を1条巡らし、口縁部は2条1組の隆帯による渦巻文を配し、沈線文を充填する。5も口縁部破片で、橋状把手を付す。口縁部は4と同じ、隆帯区画内を沈線で充填する。7は平縁の深鉢で、口縁部は内嚢する。口唇部に1条の沈線が巡り、口縁部は沈線による渦巻文を施す。8は平縁の筒形の深鉢。口唇部下に1条の凹帯が巡り、体部は単節LRを地文としている。9は小突起をもつ深鉢で、突起部は円形文、口縁部は横走する沈線文。11は深鉢の胴部破片。単節RLを地文に竹管状工具による波状文・渦巻文を描出している。12は深鉢の底部破片。13は深鉢の胴部下半部のみ遺存しているが、輪積痕が明瞭に残置されている。14は底部から直線的に延び、口縁部で若干外反する平縁の浅鉢。口唇部が肥厚し、無文で内外面ともにナデ仕上げが施されている。加曾利E1古期。

S K 154 (F i g 72-1~10) 1は胴部下位に脹みをもち中位より外反していく、口縁部は緩く内嚢する深鉢。口唇部下と口縁部下位に隆帯が巡らされ、その間に隆帯によく渦巻文を伴う波状文が横走する。口縁部下は連続交互刺突文を1条巡る。胴部は2本1組の沈線と1条の波行沈線

文が垂下している。地文は口縁部が単節LR、胴部が単節RLを施文している。2は平縁のキャリバー形深鉢で、胴下半部が欠損している。口縁部は沈線による棹状文を配し、棹状文内に縦位の沈線文を充填している。胴部は単節RL縦位施文である。3は平縁の深鉢で、口縁部上端を無文化し、下位を刻み目のある沈線で区画し、胴部は単節RL縦位施文を施している。4は深鉢の胴部破片。地文に単節LRを施し、半截竹管状工具による幾何学文を表出する。5は波状口縁を呈する深鉢で、口縁部は内彎する。2条1組の隆帯による横S字状文を配し、区画内に縦位の沈線文を充填する。6は深鉢の胴部破片で、頸部付近で2条1組の隆帯による区画文と胴部には3条1単位の沈線文と1条の波状文を垂下させる。地文は口縁部と胴部が単節RLを施している。7は単節LRを地文に沈線による区画文を施す。10は体部が外反的に延び、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚し、一条の沈線文と渦巻文が施されている。体部全体は内外面ともナデ仕上げが丁寧である。8は深鉢の底部、9は浅鉢の底部である。加曾利E1中期。

SK155 (F i 873-1・2) 1・2とも深鉢の底部付近の破片。1は単節RL縦位施文。2も単節RLの縦位施文である。

SK156 (F i 873-3~8) 3はキャリバー形の深鉢。口唇部に沈線が巡り、口縁部は2条1組の隆帯で連続する渦巻文を横走させる。区画内は単節RLの横位施文を施している。4・5もキャリバー形の深鉢の胴部破片。いずれも隆帯による区画文を施す。6は単節LR縦位施文が施されている深鉢の胴部破片。7は櫛歯状工具による波状条線を垂下させている。8は体部は内彎気味に開きながら口縁部は外方へ大きく開口する浅鉢で、内面に一条の稜をもつ。なお内外面ともナデによる丁寧な仕上げが施され、無文である。加曾利E1新期。

表探資料 (F i 873-9~15) 9はキャリバー形の深鉢で、頸部で小さく内彎しながら、口縁部で大きく外反する。口縁部は隆帯による棹状区画文内に、さらに沈線による棹状文を施し、区画内に沈線を充填する。胴部は縦位の沈線文を垂下させている。10・11は深鉢の底部破片で、いずれも網代痕を残置している。12~14は底部付近もしくは底部破片である。15は後期、堀之内2式土器の深鉢。地文に単節LRを施文し、沈線による幾何学文を構成する。

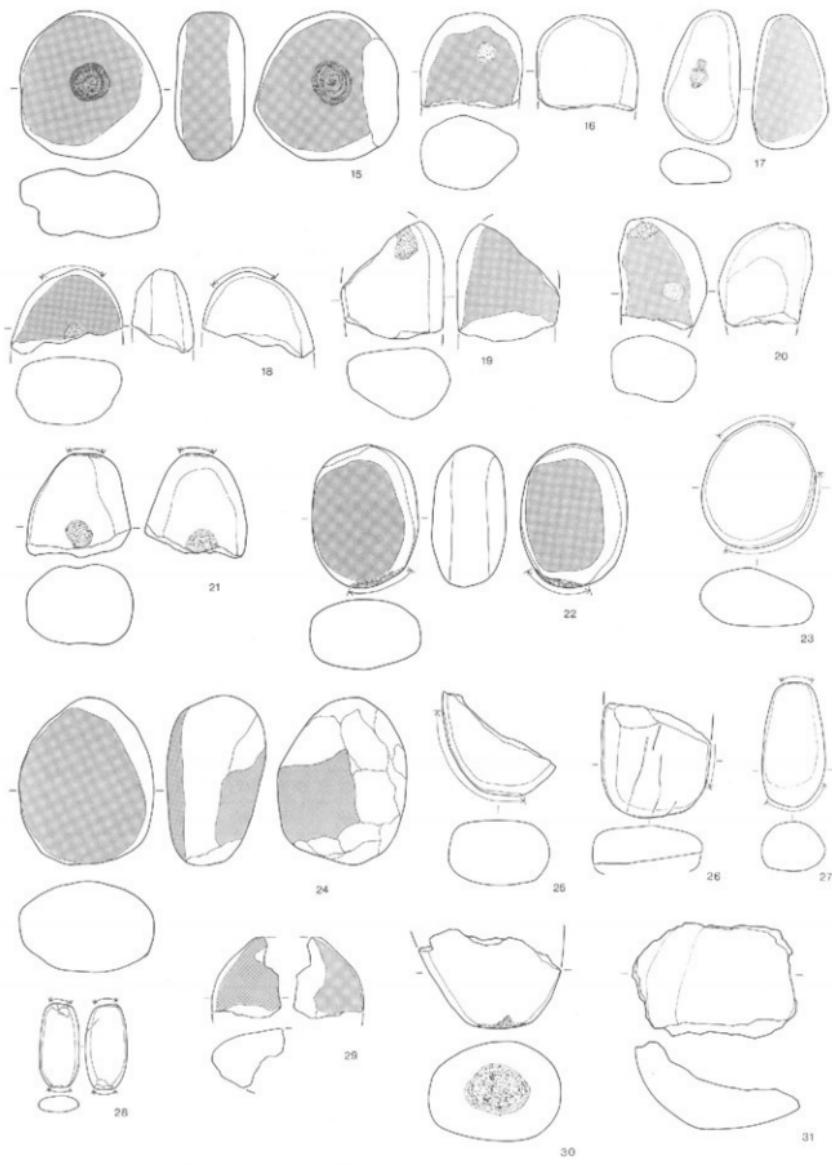
b) 石器 (第17・18図)

東台遺跡から出土した石器には、磨製石斧、礫器、磨石類、磨石、敲石、石皿である。遺物の出土地点および計測ならび個々の特徴については表1のとおりであり、本項では各器種の解説にとどめる。

磨製石斧 (第17図1~8) 8点出土している。1を典型とする定角式石斧が主体を占めている。その他に4・6~8が定角式である。1は刃部幅が4.92cmで、全長11.68cmを測る中型の石斧である。刃溝が著しいものの、他に使用痕が認められない。4は刃幅5.86cmとやや大型の石斧で、刃部のみの破片である。おそらく全長は15cm前後の大きさになるものと思われる。6~8は基部のみの遺存である。基部幅が3cm前後を測り、1に近い中型石斧であろう。6のみ基



第17図 東台遺跡出土石器実測図（1）



第18図 東台遺跡出土石器実測図（2）

表1 東台遺跡出土石器計測表

探査番号	器種	出土地点	計測値(cm)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重量 g		
第17回1	磨製石斧	SK58	11.68	4.80	2.75	278	粘板岩	完存。刃こぼれ有。
2	磨製石斧	SK54	11.78	6.46	3.55	462	綠泥片岩	刃部を欠損。両面に凹み痕。
3	磨製石斧	SK112	9.21	5.59	2.31	190	綠泥片岩	%遺存。縫割
4	磨製石斧	SK46	6.15	5.91	3.18	179	砂岩	刃部のみ遺存
5	磨製石斧	SK130	4.56	6.84	2.20	81	石英斑岩	刃部のみ遺存
6	磨製石斧	SK9	6.02	4.09	2.63	110	砂岩	基部%のみ遺存
7	磨製石斧	SK32	2.98	4.18	2.61	65	粘板岩	基部のみ遺存
8	磨製石斧	SK8	3.27	4.00	2.58	59	珪質砂岩	基部のみ遺存
9	礫器	SK97	7.15	5.73	2.34	121	砂岩	完存,片面のみ調整剥離
10	磨石類	SKI6	11.14	7.46	5.29	772	珪質砂岩	完存,凹み痕,磨耗痕
11	磨石類	SK97	9.98	6.84	3.43	320	石英斑岩	一部欠損,凹み痕,磨耗痕,敲打痕
12	磨石類	SK12	8.55	5.21	3.55	225	珪質砂岩	半欠。凹み痕,敲打痕
13	磨石類	SK44	9.91	7.65	5.45	680	砂岩	完存。凹み痕,磨耗痕,敲打痕
14	磨石類	SK135	10.38	4.92	3.26	218	珪質砂岩	半削。凹み痕,両端に敲打痕
第18回15	磨石類	SK81	9.40	9.11	4.13	480	石英斑岩	完存。凹み痕,磨耗痕
16	磨石類	SK110	4.85	6.39	4.97	210	石英斑岩	半欠。磨耗痕,敲打痕
17	磨石類	SK45	8.13	4.70	3.74	250	細粒砂岩	完存。凹み痕,磨耗痕
18	磨石類	SK46	5.08	7.15	4.67	225	石英斑岩	半欠。凹み痕,磨耗痕,敲打痕
19	磨石類	SK124	7.13	6.65	5.03	358	閃綠岩	半欠。凹み痕,磨耗痕
20	磨石類	SK29	6.62	6.00	4.55	220	石英斑岩	半欠。凹み痕,磨耗痕
21	磨石類	SK149	6.28	6.70	4.95	310	珪質砂岩	半欠。凹み痕,敲打痕
22	磨石	SK27	8.75	6.95	4.55	405	珪質砂岩	完存。磨耗痕,敲打痕
23	磨石	SK131	7.88	6.95	3.57	272	砂岩	完存。周縁部に磨耗痕
24	磨石	SK81	9.95	8.51	6.22	690	砂岩	完存。
25	磨石	SK13	5.55	8.00	4.52	141	石英斑岩	一部のみ。縫割部に磨耗痕
26	磨石	SK16	6.82	6.70	2.29	130	砂岩	一部のみ。磨耗痕のみ
27	敲石	古墳周溝	7.68	4.02	3.26	146	砂岩	一部欠損。両端に敲打痕
28	敲石	SK54	5.11	2.41	1.17	25	砂岩	完存。両端に敲打痕
29	磨石	SK12	5.05	5.11	3.70	82	輝石砂岩	一部のみ。全体に磨耗痕
30	敲石	SK44	6.25	8.95	6.45	365	珪質砂岩	敲打点のみ遺存
31	石皿	SK13	10.10	6.51	6.58	213	多孔質安山岩	一部のみ残存

部の一部に敲打痕が認められる。2・3・5は横断面形が梢円形になる乳棒状石斧である。2は刃部を欠損するものの、大型の石斧である。また両面に凹み痕を有し、刃部欠損後二次使用したものであろう。

礫器（第17図9）1点のみである。円礫を素材として、片面のみ剥離を加え調整し、裏面は自然面を残置している。

磨石類（第17図10～14、第18図15～22）ここでは磨石類として、磨石として磨耗痕のみられるものの他に、凹み痕および敲打痕が存在する石器で、使用痕が明らかに1種のみの場合はそれぞれ磨石、敲石として区別して理解している。本類は12点を数え、当遺跡の主要道具である。使用痕の種類と組合せにより次の四種が磨石類として分類した。

磨耗痕+凹み痕（第17図10、第18図15・17・19・20） 磨耗痕+敲打痕（第18図16・22）

凹み痕+敲打痕（第17図12・14） 磨耗痕+凹み痕+敲打痕（第17図11・13、第18図18）

まず磨石類の種類として、磨耗痕と凹み痕を有する磨石（10・15・17・19・20）のうち、10は全面に磨耗痕が認められ、両面に浅い凹み痕が存在する。15は円礫で、円形の研磨され両面の凹み痕は明瞭である。17・19・20の凹み痕は浅く小円形の敲打痕が観察される。また磨耗痕と敲打痕を有する磨石（16・22）のうち、22は円礫の自然面を残置しているが、磨耗痕も著しく、明瞭な敲打痕を有している。凹み痕と敲打痕を有する石器（12・14）は、本来磨石ではないので分けて記述すべきであるが、形状として他類と大きな変化がないためここに掲載した。いずれも自然面を多く残置し、両端に敲打痕がみられる石器である。そして磨耗痕と凹み痕、敲打痕を有する磨石（11・13・18）のうち、11は一部欠損しているものの、隅丸長方形に研磨され、端部に敲打痕、両面に明瞭な凹み痕を残している。13は片面のみ磨耗痕がみられ、裏面はほぼ自然面を残置している。両端の敲打痕は顕著である。18は破片であるが、ほぼ13と同じで片面のみ磨耗痕がみられる。以上これらはいずれも作業として磨る、敲くという連続性の強い使用方法で用いられた道具であることがわかる。

磨石（第18図23～26、29）先の磨石類とは異なり、明らかに磨る作業のみ使用された石器である。いずれも挙大の円礫で、29を除き自然面を多く残置している。ここでは使用面の違いにより3種に分けることができる。縁辺部のみ使用し、両面は自然面を残置するもの（23・25・26）は扁平の礫をもち、両面を使用するもの（24）は丸い円礫を利用する。また29は一部のみで分類してしまったが、全面磨耗痕が認められるものである。

敲石（第18図27・28・30）は27でみると棒状の自然礫を利用して、両端部を使用している。28は小型の石器であるが、石錘に似て両端を敲いている。本来の敲くというより、細かいものを潰すための使用痕である。

石皿（第18図31）破損品である。円形もしくは梢円形を呈し、凹面を作出しているものと思われる。

C) 土製品

東台遺跡出土の土製品は、土器片鍤のみである。

土器片鍤（第19図1～36）

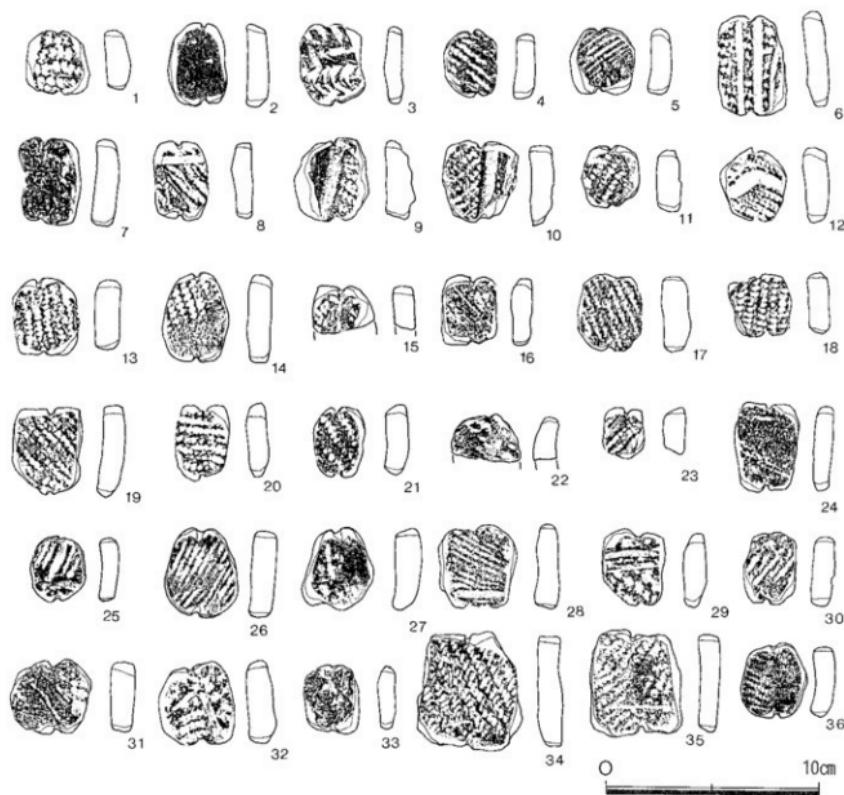
総数で49点が出土している。土器片鍤は土器の破片を板状に打ち欠いて両端一端にV字状の溝を入れ、糸掛け部を作出したもので、土鍤使用の目的の為に焼成したものではなくすべて土器破片利用の二次的加工品である。

およそ5cm前後の土器片を素材とするもので、土器片の周縁を打ち欠いて調整する打割調整を基本に、周縁をさらに研磨調整を行う場合もみられる。また打割の形状は円よりも方形タイプの調整が多く、多くは長方形もしくは長方形に近い橢円形が主体を占める。また糸掛け部のV字溝の形状も浅い切り込みから深い切り込みまでバラツキがみられる。このV字溝の切り込み位置も長軸もしくは短軸のいずれか両端に一对になるように刻み、両軸に刻まれているものはない。本遺跡出土49例中、88%の43例が長軸の両端に切り込みをいれている。

また重量についてみると、もっとも重いもので30.84g、軽いもので23の6.62gである。大きさについてみると、長さの長いものは5.28cm、短いもので2.45cm、幅の長いもので4.62cm、短いもので2.03cmを測る。これらの平均値は重量14.20、長さ4cm、幅2.96cmの値である。全体には重量、大きさとも大差なくバラツキは少ない。なお時期はすべて中期加曾利E1式が主体である。（小川）

表2 東台遺跡出土土器片鍤表

図番号	出土地点	計量			部位	加工状態	形態	切り込み等の状態	〔単位はcm・g. ()内は周辺〕	
		長さ	幅	厚さ						
第19図1	S K12	2.95	2.94	1.29	13.80	脚部	打割・研磨	方 形	長軸に1対	
2	S K13	3.86	2.52	0.95	13.52	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
3	S K46	3.56	2.74	0.76	9.94	口縁部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
4	S K46	3.25	2.55	1.00	11.14	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
5	S K46	3.00	2.93	1.07	13.14	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対	
6	S K45	4.77	3.21	0.95	19.44	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対	
7	S K45	4.10	2.83	1.12	15.48	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
8	S K45	3.55	2.60	1.21	14.46	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
9	S K81	3.82	2.48	0.91	11.28	脚部	打割 調整	楕円形	長軸に1対	
10	S K83	3.87	3.38	1.22	16.02	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
11	S K97	2.85	2.68	1.10	9.56	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対	
12	S K97	3.36	2.82	1.26	13.84	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
13	S K97	3.60	3.25	1.36	20.36	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対	
14	S K97	3.95	3.16	1.10	19.12	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
15	S K97	(2.37)	2.87	1.00	(7.24)	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対・欠損	
16	S K110	3.29	2.51	0.93	11.06	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
17	S K122	3.51	2.99	1.23	14.82	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
18	S K122	2.86	2.73	1.93	9.64	脚部	打割 調整	方 形	長軸に1対	
19	S K129	4.05	3.18	1.10	18.04	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
20	S K129	3.45	2.52	0.86	8.94	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
21	S K129	3.26	2.33	1.11	10.48	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
22	S K129	(2.45)	3.25	1.14	(8.54)	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
23	S K129	2.45	2.03	1.01	6.62	脚部	打割・研磨	長方形	長軸に1対	
24	S K129	4.13	2.80	1.04	13.54	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
25	S K129	2.90	2.38	0.90	7.16	脚部	打割 調整	楕円形	長軸に1対	
26	S K133	3.95	3.29	1.09	17.64	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	
27	S K104	3.70	3.25	1.15	13.86	脚部	打割 調整	不整形	長軸に1対	
28	S K142	3.95	3.72	1.15	21.38	脚部	一部研磨	長方形	長軸に1対	
29	S K144	3.40	3.03	0.90	11.90	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
30	S K154	3.20	2.45	1.07	10.52	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
31	S K154	3.31	3.75	1.17	17.64	脚部	打割 調整	楕円形	長軸に1対	
32	S 118	3.93	3.43	1.38	21.08	脚部	打割 調整	楕円形	長軸に1対	
33	3号塙	3.19	2.53	0.85	8.96	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
34	表 掘	5.28	4.63	1.05	30.84	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
35	表 掘	4.80	4.02	0.78	20.18	脚部	打割 調整	長方形	長軸に1対	
36	表 掘	3.38	2.95	0.86	10.46	脚部	打割・研磨	楕円形	長軸に1対	



第19図 東台遺跡出土、土器片錘実測図

C) 御冥遺跡

当遺跡は、木田余台遺跡群の南西方に位置し、霞が浦を南西向に望む。ここは北端がほぼ平坦な台地面が続くが、南端すなわち霞が浦に向って緩傾斜しており、その比高差は1.5m程である。なお標高は最高位で27.8m、調査区最低位で26.2mを測り、現水田面との比高差は約22mである。

発掘調査は、幹線道路と一部宅地予定地部分に限定され、全体調査は不可能であったものの、遺跡そのものを掌握できるトレンチ調査を実施でき、少なくとも御冥遺跡の内容や性格については今回の調査でほぼ把握できたものと考える。

基本的にはトレンチ調査という限定されたものであったが、当初予想していた以上の成果をあげることができた。まず、調査は南端の平坦面から開始した。すでに古墳の石棺の露出部が確認

されているところで、まず古墳の周溝を検出し、さらに古墳時代の住居跡（前期・中期）を併せて調査をすすめた。なおこの遺跡北側では縄文時代の遺構および遺物の出土はなかった。

縄文時代の包蔵地は緩傾斜のかかる地点から南斜面部全体で台地縁辺部までおよぶ御灵遺跡の大半を占めている。ここでは、縄文時代中期中葉・阿玉台式期、中峠式期、中期後半・加曾利E1古期、中期末葉・加曾利E4式期、後期初頭・称名寺式期、後期前半・堀之内1・2式期、後期中葉・加曾利B1式期の遺構・遺物が検出された。中でも住居跡として加曾利E1式期1棟、加曾利E4式期1棟、堀之内2式期1棟、加曾利B1式期2棟の合計5棟のほか、土坑135基が検出され、多量の遺物が出土している。

（1）遺構と遺物

A 住居跡

S I 7 (第20図)

本遺跡縄文包蔵地北端に位置する。本跡は古墳周溝や後世の耕作による攪乱の影響が著しく壁は全く消失し、床面の一部も削平されていた。残存している床面から判断してもその形状は不明であるが、おそらく円形を呈していたものと思われる。残置されている床面の規模は、南北5.1m、東西4.6mを測る。床面は、貼床でおそらくロームをいったん掘り込み、ロームブロックと黒褐色土との混和土が貼られているものと考える。この床残置部では堅緻で、しかも全面焼土の堆積が認められ、とくに3ヶ所は火熱による赤化が激しく、中央に位置する焼土は炉址である。炉址の規模は、102×90cmの円形で、深さは3.5cmの掘り込みをもつ地床炉である。

ピットは9ヶ所検出されている。壁際に接する3本はおむね柱穴としての機能を有するもので、大きさは径40～50cm、深さ40～50cmの円形ピットである。他のピットは径20～40cm、深さ20cm前後的小ピットであり、柱穴以外の機能を有していたものと思われる。

遺物として床面上より加曾利E式土器が出土している。

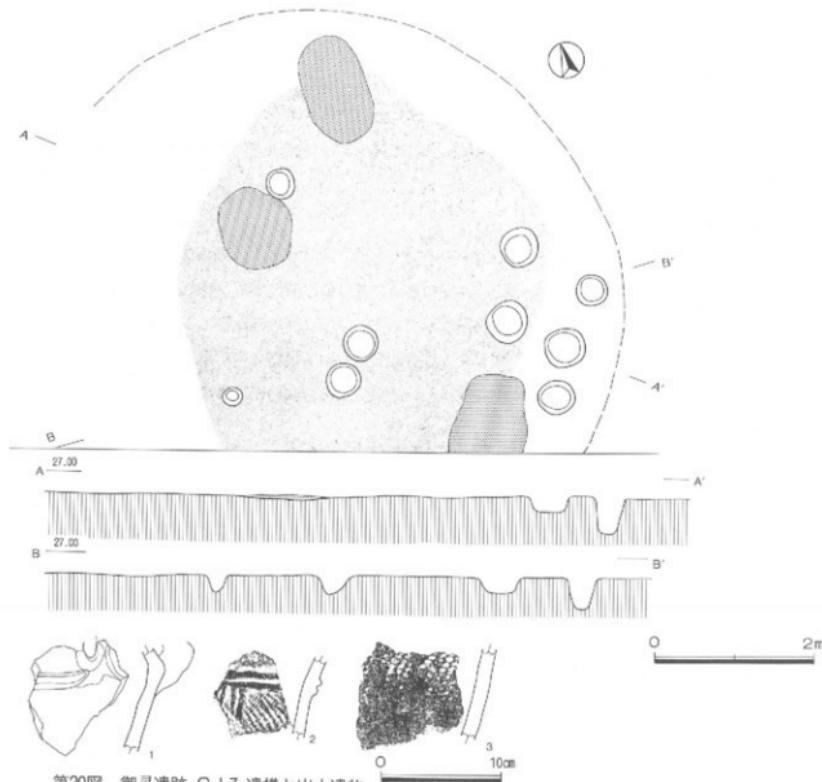
出土遺物 (第20図1～3)

1～3はいずれも胴部破片である。1は口縁部に近い破片で、把手部である。無文地に隆帯による区画文を施す。2は2本1組の隆帯を頸部に一条巡らし、さらに懸垂文として垂下させる。

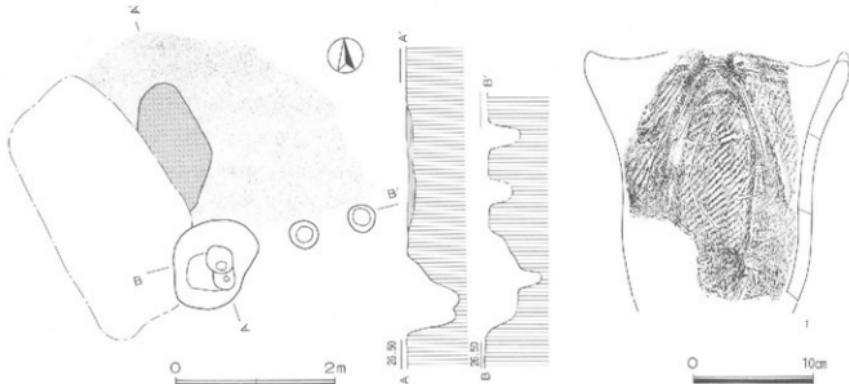
地文は単節RLである。3は底部に近い破片で、地文に単節RL継位回転させている。いずれも加曾利E1古期に位置付けられる。

S I 34 (第21図)

調査区南端の緩傾斜部に位置する。本跡も後世の耕作等による攪乱を受け大半が消失してしまっている。わずかに床面の一部と炉址および柱穴が残置されているのみである。削平されずに残存してしいる床面の規模は、南北2.7m、東西2.1mである。やはり床面では貼床でロームをいたん掘り込みそのうえにロームブロックと褐色土との混和土を貼っており、検出面ではほぼ平坦である。炉址は西側半分を土坑によって消失されているものの、その規模は153×85cm、深さは5.0cmを測る大きな炉址で、炉床は充分被熱・酸化しており、堅緻である。覆土中からは焼土



第20図 御灵遺跡 S 17 遺構と出土遺物



第21図 御灵遺跡 S 134 遺構と出土遺物

の堆積が認められたほか、加曾利E 4式土器が出土している。

柱穴は4本と少ないが、周囲が大きく削平されており、これらを考慮してみればこの4本のピットは明らかに柱穴の機能を有するものと考えて誤りないであろう。これら柱穴の規模は、径35cm、深さ20～67cmで、とくに炉址南側に配されたピットは住居の中央に位置する柱穴と思われる。

遺物（第21図1）

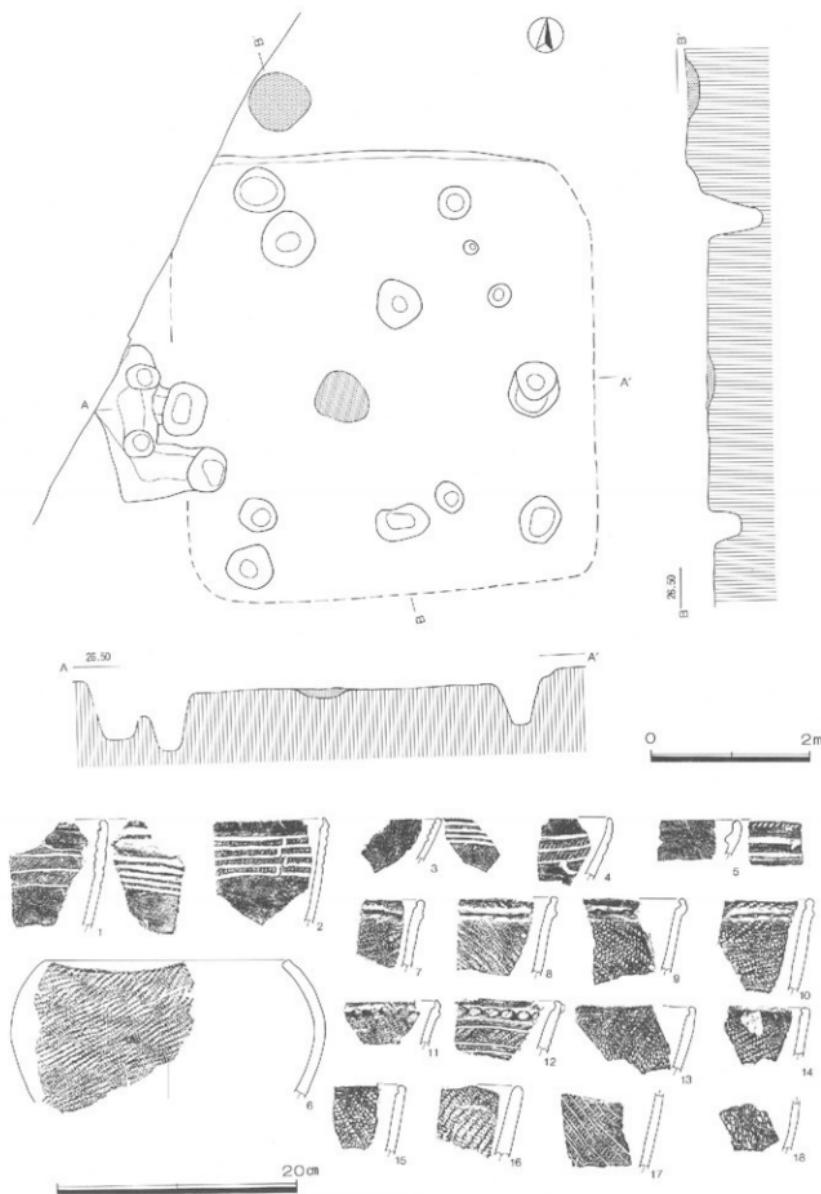
1は炉址中より出土したもので、上部半分の約 $\frac{1}{2}$ を残す深鉢である。口縁部は4単位の緩い波状を呈し、胴部上部で括れながら口縁が外反する。文様は口縁部文様帯がほとんど消失し、微隆帯によって区画された梢円形の無文帯を形成している。胴部文様は微隆帯による逆U字状区画文を垂下させ、さらにU字状区画文を配する。この微隆帯による区画文内には単節R Lを継位回転させ施文している。胎土には砂粒の混入が多く、微細な長石粒がわずかに含まれる。

S I 31（第22図）

調査区の南側、緩斜面部に位置する。ここは古墳時代の住居跡S I 19の床面下で検出されたもので、壁および床面の大半は削平され、わずかに炉址と柱穴のみが確認されたに過ぎない。それでも床面上や柱穴中より遺物の出土がみられるなど良好な住居であることが判明した。

柱穴等の配置からみて本住居跡の形状は、西壁中央に出入入口部を付設する方形を呈するものと思われる。規模は床面確認面で南北5.5m、東西5.3mを測り、主軸方位はN-97°-Wを指し、ほぼ東西に主軸をもつ。壁の大半はすでに消失しているものの、北壁の一部が残置しており、現存最大壁高は15cmを測る。床面はロームを一旦掘り込みそのうえにロームブロックと黒褐色との混和土を貼っている。部分的に起伏を呈するが、ほぼ平坦で、とくに炉址の周辺部は堅緻である。

出入入口部は西壁の中央に位置し、平面形はL字状の溝状掘り込みに中央部で径30cm、深さ75cmの円形ピットを一対配し、溝端に径56×47cmの梢円形ピットを穿って、さらに中央部に68×51cm、深さ72cmの隅丸長方形ピットを配する。これまでの例からすると出入入口部構造は左右対象となり「コ」の字型を呈するのが一般的ではあるが、本例はやや変則的といえよう。ピットは出入入口部を除いて13本検出されている。径30cm以下の2本以外はおおむね柱穴としての機能を有するものと考えられる。うち1本は重複し、3本は2個一対となり、立て替えないしは拡張の可能性がある。柱穴の規模は、40～64cm、深さ40～70cmを測る。炉址は中央やや出入入口部寄りに位置し、南北54cm、東西57cmの不整円形で、深さ12cmを測る地床炉である。炉断面は浅いスリバチ状を呈している。また炉床は、被熱による赤化が著しい。覆土中から加曾利B 1式土器の破片が出土している。なお、本住居跡の北側に径60×64cmを測る地床炉が検出されている。炉の周辺には貼床状の床面が確認されており、別の住居の炉址と考えるが、極端に遺物が少なく、所属時期を判断するのは困難を要する。



第22図 御灵遺跡 S I 31 遺構と出土遺物

遺物（第22図1～18）

いずれも縄文土器で床面上・柱穴・炉址中より出土し、全点数でわずか28点に過ぎないが、このうち18点を図示することができた。いずれも加曾利B式土器に比定される一群で、文様要素から精製土器と粗製土器に分けられる。

精製土器（1～5） 1は平縁の深鉢形土器でいわゆる帶縄文系の土器である。口縁部が直行し、口縁直下は無文とし無文帯下に2条の帶縄文を巡らす。内面には凹帯沈線2条と細沈線5条を施文する。2は口縁部が外削ぎ状を呈し、口縁部下を無文帯に、以下帶縄文を施す。この帶縄文は区画する沈線間が狭く、さらに縦位短沈線を施し帶縄文帯を文帯する。3・5は外面が無文の浅鉢形土器である。3は内面口縁部直下に細かな刻み目帯を2条巡らす。5は口唇部下に刻み目帯をもち、以下凹帯沈線文を施す。4は鉢形土器の口縁部破片で、口縁部が小さく内湾する。口縁部直下は無文帯として以下帶縄文を2条巡らし、さらに沈線区画を設ける。

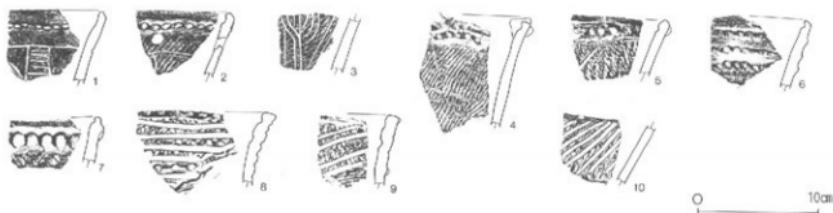
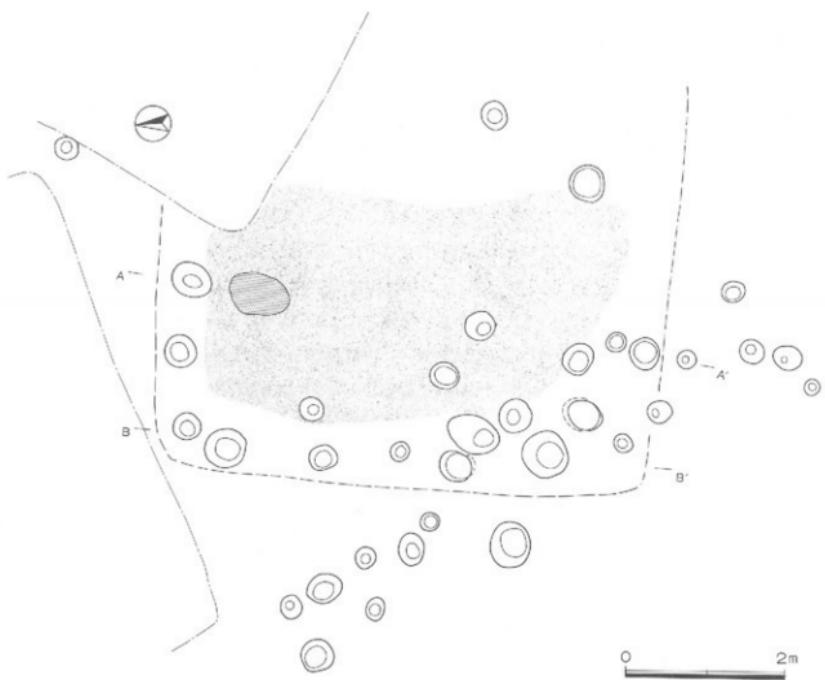
粗製土器（6～17） 7～12は紐線文が口縁部にもつ深鉢形土器である。7～10は紐線文が口縁部から若干下がった位置に配される一群で、紐線文は細く、紐線文上の捺圧痕間隔の開く指頭圧痕である。なお地文は縄文施文である。11・12も紐線文土器で、口縁部直下に紐線が施され、しかも先の紐線文よりは太くなっている。やはり地文は縄文施文であるが、12はさらに半截竹管状工具による横位の並行沈線を施す。なおいずれも口縁内側に1条の沈線を巡らす。

6は口縁部が大きく内湾する鉢形土器で、口縁は平縁となる。文様は口縁部直下から胴部まで単節LRを横位回転させ施文している。13～15は口縁部が平縁の深鉢形土器で、口縁部直下から全面縄文施文の土器である。なお口縁部内側には1条の沈線を巡らす。また13は沈線文が加わる。16は丸頭状の口唇部を呈し、やや小さな波状口縁になるかもしれない。節の太い縄文で単節LRを施している。17・18は胴部破片。17は縄文地文に半截竹管状工具による斜行沈線文を施す。

S 153（第23図）

調査区南側、緩傾斜部に位置する。本跡も構築面が浅いため、後世の耕作等による攪乱が著しく、壁のすべてと床面の大半が消失している。わずかに炉址と柱穴の一部さらには貼床面の一部が残置しているにすぎない。そこで削平されずに残存している床面と柱穴および炉址の位置関係からおおよその形状をみてみると南北6.35m、東西約6mのほぼ方形を呈しているものと思われる。なお床面は貼床で、炉址から南側にかけて、ロームを浅く掘り込み、さらにロームブロックと黒褐色土との混和土が貼られている。ピットは本跡推定線の内側で20本検出されているが、大半のピットは西側に集中し、東側ではわずか2本しか確認されていない。これらすべてが柱穴としての機能を有していたものとは考えられず、規模や深さの点でもバラツキがみられ斉一性に欠ける。

炉址は住居跡の中央部北寄りで、浅い鍋底状の地床炉である。規模は76×52cm、深さ10cmを測る。炉床は被熱を受け、赤化し堅緻である。炉覆土中より焼土の堆積と縄文土器（1～3）



第23図 御灵跡 S 153 遺構と出土遺物

が出土している。構築時期は炉址内出土の遺物から掘之内2式期と考える。

遺物（第23図1～10）

いずれも縄文土器で炉址および床面上より出土したもので、後期掘之内2式と加曾利B式土器である。1～3は精製土器である。1は平縁の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部が緩やかに外反する朝顔形で、文様構成は口縁部に横位の細かい刻文を有する微隆帯（紐線文）を一条巡らし、以下沈線文による幾何学文様が描出される。2もほぼ同様な文様形態をもつ口縁部破片で、1よりやや太めの紐線文を口縁部に一条巡らし、2本単位の平行沈線による区画文が描出され、地文に細かい単節LR横位施文されている。3は胴部破片で、平行沈線による縱位施文を基本とし、横位に突出する文様を表出させている。以上は掘之内2式土器である。4～10は粗製土器である。4は小さな波状口縁をもつ深鉢形土器で、口唇部下に細い紐線文を貼付ける。地文に単節LRを横位施文している。口縁内側に一条の沈線を巡らす。5は指頭圧痕による紐線文を一条巡らし、縄文地文に沈線文を施す。6も口縁部破片で、細い紐線文を3条巡らす。口縁内側に一条の沈線を巡らす。7も口縁部直下に太めの紐線文を巡らし、地文に縄文を施す。8・9は口唇直下に細い紐線文を施文する類で、燃りの粗い縄文を地文に太い沈線文を加飾する。なお口縁内側は2条の沈線をめぐらしている。10も縄文を地文として半叢竹管による斜線文を施すもの、6は掘之内2式、4・5・7～10は加曾利B式土器である。

S 155 (F i g 117)

調査区南端に位置する。東側約半分は工事の関係から未調査である。形状は隅丸方形を呈し、確認面での規模は南北2.95m、東西（検出部のみ）1.5mを測る。壁は床面からやや開口しつつ立ち上がり、現存最大壁高は0.1mである。床面は、直接ロームを掘り込んだ素掘り床面で全体的に軟弱である。現状では炉址の確認はできなかった。

柱穴は3本検出されている。いずれも柱穴としての機能を有していたものと考えられる。規模は北側が21×37cm、深さ88cmの二段掘り柱穴である。また残りの2本は径13cm、深さ13cm前後である。これらは壁際に接して穿ってある。

本跡から出土した遺物は少なく、しかも小片のみで図示できるものはないが、出土遺物の状態をみて後期前半掘之内1式期と考えてよいであろう。

B. 土坑（第24図、F i g 75～117）

調査区内における縄文時代の土坑のうち明確に時期決定できる土坑は135基で、その他94基である。確認面はすべてローム層面であるが、古墳時代の住居跡下から発見されることも多い。調査は、土坑平面を確認後、土層セクションを観察するためセクションベルトを設けるか、あるいは土坑の半分の覆土を掘り下げる方法を用いた。土層セクションを実測後、セクションベルト除去し土坑本体の覆土を完全に掘り上げ、さらに底面施設の検出にあたった。しかし、ここ御冥遺跡では先の東台遺跡とは異なり、坑底施設を伴う土坑は極端に少ないことが判明した。また構築時期も東台遺跡を挟んでその前後の時期、つまり縄文時代中期中葉・阿玉台式期、中井式と中

期末葉加曾利E 4式期、後期初頭称名寺式、掘之内1式期で、東台遺跡とは相互補完的な遺跡群の関係であることが把握できる。

○中期中葉の土坑

SK 1 (F i g75) 円形を呈し、長径 2.87、短径 2.80、深さ 1.06 m を測る。いわゆる袋状土坑である。底面はほぼ平坦で、底面より壁は丸みをもって立ち上がる。開口部の崩落は著しい。覆土は下位層は自然崩落土、上位層は自然堆積層である。覆土上位面より中峠式の完形土器(深鉢) 1点を含め多量の土器が出土している。

SK 2 (F i g75・77) 西側大半が保存地区にかかり、しかも古墳周溝によって切られているため約½を調査する。形状は橢円形を呈し、長径 2.82、現存短径 0.86、深さ 1.06 m を測る。袋状で大型の土坑である。底面は平坦で大きく内傾しながら開口部へ移行する。覆土は 6 層で最下層は崩落土層、その上位は自然堆積層で、底面より阿玉台式の完形土器 1 点のはか胴下半部の深鉢が出土している。

SK 5 (F i g77・78) 円形を呈し、長径 1.53、短径 1.31、深さ 0.66 m を測る。一部袋状を残置するものの、大半の壁はフラットな底面から外方へ開口する。覆土は自然堆積である。遺物の出土は少なく、加曾利 E 1式期で図示できるものはなかった。

SK 6 (F i g77・78) フラスコ型を呈する円形土坑である。底部長径 3.15、短径 2.97、深さ 1.20 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁はここから直線的に内傾しながら開口する。覆土は人為的な埋め戻し土層である。覆土中に中峠式土器片が出土している。

SK 7 (F i g79・80) フラスコ型を呈する円形土坑である。底面長径 3.53、短径 3.35、深さ 1.125 m を測る。壁は平坦な底面よりほぼ直線的に内傾しながら立ち上がる。坑底施設として南西側に 78 × 89 cm、深さ 17 cm の不整円形を呈するサイドポケットを有する。覆土は埋め戻し土層で、大型の土坑にもかかわらず出土遺物は極端に少なく、図示できるものは 1 点もなく、小片から判断して加曾利 E 1 古期に位置付けられる。

SK 9 (F i g79・80) フラスコ型を呈する円形土坑である。底面長径 2.11、短径 2.01、深さ 1.075 m を測る。壁は平坦な底面からほぼ直線的に内傾しながら開口する。覆土は人為的な埋め戻し土層で、ここより中峠式土器が出土している。

SK 13 (F i g83・84) 東側約半分が保存区域に入り未調査となっている。典型的なフラスコ型の円形土坑である。底面長径 3.06、現存短径 1.61、深さ 1.54 m を測る。壁はやや船底状の底面からほぼ直線的に内傾しながら開口部へ移行する。覆土は 6 層で、土坑の半分以上は埋め戻し土層である最下層の黄橙色土で覆われ、開口部は自然堆積土層である。覆土より中峠式期の遺物が集中して出土している。

SK 14 (F i g83・84) 東側を SK 116 に、西側を SK 115 によって切られている。橢円形を呈する土坑で、底面長径 1.09、短径 0.98、深さ 0.24 m を測る。壁は平坦な底面から緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は埋め戻し土層で、覆土中に縄文中期・加曾利 E 1 式の小片が出土

している。

SK16 (F i g81・82) 南側をSK15によって切られている。袋状を呈する円形土坑で、規模は底面長径1.92、短径1.90、深さ0.84mを測る。底面は浅い船底状で、壁は緩く内傾しながら立ち上がる。埋土は人為的な埋め戻し土層で、6層確認できる。覆土中に中峠式土器片が出土している。

SK20 (F i g85・86) 南側半分をSK21によって切られている。楕円形土坑で長径1.18、現存短径0.61、深さ0.7mを測る。底面は船底状をなし、壁は緩く外傾しながら立ち上がる。覆土は1層で自然埋土である。小片であるが、阿玉台式土器が出土している。

SK21 (F i g85・86) フラスコ形を呈する円形土坑である。底面長径2.19、短径2.00、深さ0.90mを測る。底面は浅い船底状で、壁は直線的に大きく内傾しながら開口する。坑底施設として南側にサイドポケットと北側にサイドピットが伴う。サイドポケットは長径1.38、短径0.80、深さ0.20mを測る楕円形ピットである。またサイドピットは径43cmの円形で、深さは55cmを測る。土坑内堆積土は6層で、最下層の6層は崩落土層であるが、他の5層は人為的な埋め戻し土層である。覆土中より中峠式が出土している。

SK24 (F i g85・86) 楕円形土坑で、長径1.72、短径1.54、深さ0.995mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上がる。覆土中より加曾利E1式土器が、小片であるが出土している。

SK27 (F i g85・86) 袋状を呈する円形土坑であるが、東側の大半は未調査区であり、およそ $\frac{1}{3}$ 程を検出したに止まる。確認面での底面長径2.80、現存短径0.62、深さ0.96mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は底面から丸みをもって立ち上がり、入口の狭い開口部に至る。土坑内堆積土は4層で、自然埋土である黒褐色土の間層以外人為的な埋め戻し土層である。覆土中より中峠式土器が出土している。

SK28 (F i g86・87) タライ状を呈する楕円形土坑である。SK84の上面に構築しており、規模は長径2.05、短径1.50、深さ0.14mを測る。やや船底状の底面から壁は外傾して立ち上る。土坑内堆積はいずれも2層で埋め戻し土層である。覆土中より中峠式土器が少量であるが出土している。

SK30 (F i g85・86) SI12によって切られている。楕円形を呈し、長径1.46、短径1.26、深さ0.285mを測る。ほぼ平坦な底面をもち、壁は緩く外傾しながら立ち上る。坑底施設として径が30cm、深さ90cmのセンターピットを有する。覆土中より中峠式土器が出土している。

SK31 (F i g85・86) 形状は楕円形を呈し、長径1.64、短径1.38、深さ0.41mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。坑底施設として径40cm、深さ25cmの円形ピットを伴う。覆土中より遺物の出土は加曾利E1式の小片がある。

SK33 (F i g86～88) 東側でSK32を切り、西側をSK34によって切られている。形状

は円形を呈し、長径 1.89、短径 1.70、深さ 0.31 m を測る。底面はやや船底状で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上る。土坑内堆積土は 2 層で最下層は埋め戻し土層で、底面を覆う黒褐色土層は自然埋土である。覆土中の遺物は少なく、加曾利 E 1 式の小片のみであるが、西側で構築されている SK 34 は加曾利 E 4 式期に比定されている。

S K36 (F i g 87・88) 形状は不整の円形を呈し、長径 1.52、短径 1.39、深さ 0.35 m を測る底面は舟底状で壁は緩く外傾しながら立ち上る。土坑内堆積は埋め戻し土層で、底面上より阿玉台式土器（口縁部を欠損）が貼り付いて出土している。

S K37 (F i g 87・88) 形状はプラスコ状を呈する円形土坑である。底面長径 2.69、短径 2.59、深さ 0.79 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁はやや丸みをもしながら内傾しながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より完形深鉢土器 1 点をはじめ中峠式土器が出土している。

S K43 (F i g 91・92) 北側約 1/3 程は保存区域のため未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.52、現存短径 1.71、深さ 0.82 m を測る。底面はやや船底状で、壁は丸みをもしながら開口部へ立ち上る。開口部は確認面で 2.26 × (1.87) m である。土坑内堆積土は最下層黄橙色土は埋め戻し土層もしくは崩落土層であるが、上層し自然埋土である。また大型の袋状土坑にもかかわらず出土遺物は極端に少なく、中峠式土器の小片が 2 点（図示できない）検出されたに過ぎない。

S K45 (F i g 91・92) 南側約 1/3 程を保存区域にかかっているため未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.43、現存短径 1.24、深さ 0.90 m を測る。底面はやや起伏をもち壁は丸みをもしながら開口部へ立ち上る。開口部は確認面で 1.56 × 1.24 m である。土坑内土層は埋め戻し土層で、覆土中より阿玉台式・中峠式・大木 8 a 式の破片が出土している。

S K48 (F i g 91・92) 北側約 1/3 程保存区域にかかっているため未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑である。底面長径 2.60、現存短径 2.01、深さ 1.17 m を測る。底面はやや起伏のある船底状で、壁は丸みをもしながら開口部へと立ち上る。開口部は確認面で 2.28 × (1.59) m である。坑底施設として南側に径 28 cm、深さ 20 cm のサイドピットが伴う。土坑内堆積土は埋め戻し土層で上層と間層に薄く黒色土が自然堆積する。覆土中より阿玉台式・中峠式土器の出土がみられる。

S K49 (F i g 91・92) プラスコ形を呈する円形土坑である。規模は底面長径 1.87、短径 1.55、深さ 0.81 m を測る。底面はほぼ平坦で、やや丸みをもつ壁が開口部へ立ち上る。開口部は確認面で 0.94 × 0.90 m である。土坑内堆積土は 3 層で、間層の黒褐色土は自然埋土であるが、最下層および上層は人為的な埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式の深鉢が出土している。

S K50 (F i g 91・93) 形状は円形で、径 1.20、深さ 0.41 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾して立ち上る。土坑内堆積土は自然埋土で、覆土中より阿玉台式が出土している。

S K53 (F i g 94) 形状は梢円形土坑である。規模は長径 1.30、短径 1.25、深さ 0.34 m

を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾して立ち上る。坑底施設は南側に径 28 cm、深さ 23 cm の円形ピットを伴う。土坑内堆積土は自然埋土で、覆土中より中峰式土器が出土している。

S K54 (F i g93・94) 北側約 1/2 程保存区域にかかっているため未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑である。底面長径 2.53、現存短径 1.18、深さ 1.20 m を測る。底面は起伏があり東側がやや高くなつて傾斜している。壁は丸みをもちらながら内傾して開口部へ移行する。開口部は確認面で $1.88 \times (1.18)$ m である。土坑内堆積土は 6 層で、人為的な埋め戻し土層である。覆土中に阿玉台式土器が出土している。

S K55 (F i g93・94) 北側で SK 57 によって切られている。袋状を呈する円形土坑である。規模は底面長径 2.18、短径 2.05、深さ 0.90 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。開口部は確認面で長径 2.00、短径 1.65 である。土坑内堆積土は 5 層で人為的な埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式、中峰式、加曾利 E 1 式土器片が出土している。

S K57 (F i g93・94) 北側で SK 58 によって切られ、南側で SK 55 を切って構築している。形状は楕円形を呈し、規模は長径 1.28、現存短径 0.89、深さ 0.36 m を測る。底面はほぼ平坦で、丸みをもつ壁は垂直に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中に加曾利 E 1 式期の小片が出土している。

S K69 (F i g95・96) 形状は円形を呈し、長径 1.67、短径 1.45、深さ 0.35 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土である。覆土中より加曾利 E 1 式の小片が出土している。

S K70 (F i g96) 東側で SK 135 によって切られ、北と南側でそれぞれ SK 67、89 を切って構築されている。形状は円形を呈し、長径 1.60、短径 1.48、深さ 0.63 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より加曾利 E 1 式土器の小片が出土している。

S K74 (F i g95・96) 形状は円形を呈し、長径 1.51、短径 1.44、深さ 0.44 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より加曾利 E 1 式土器小片が出土している。

S K78 (F i g95・96) 形状は円形で、規模は長径 1.06、短径 1.00、深さ 0.235 cm を測る。底面は船底状を呈し、壁は緩い外傾をなして立ち上る。土坑堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より加曾利 E 1 式土器小片が出土している。

S K79 (F i g83・84) 南側を SK 15 によって切られている。形状はフラスコ形を呈する円形土坑である。底面長径 1.71、短径 1.70、深さ 0.56 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に内傾しながら開口部へ移行する。開口部は確認面で 1.65×1.46 m である。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中に中峰式土器片が出土している。

S K80 (F i g89・90) 形状は不整な円形土坑で、長径 2.00、短径 1.82、深さ 0.575 m を測る。底面は船底状を呈し、壁は緩いカーブを描きながら外傾して立ち上る。土坑内堆積土は自

然埋土で、覆土中よりキャリバー形の深鉢形土器・中峠式の出土がある。

S K81 (F i g 76) 形状は袋状を呈する円形土坑である。規模は底面長径 1.60、短径 1.37、深さ 0.77 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は内傾しながら開口部へ移行する。開口部の確認面は長径 1.44、短径 1.26 m である。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中に中峠式土器片が出土している。

S K83 (F i g 76・77) 形状はフ拉斯コ形を呈する円形で、底面長径 2.20、短径 1.80、深さは 1.01 m とかなり深味のある土坑である。底面はやや起伏があり、壁は若干オーバーハング気味に立ち上る。土坑内堆積土は 5 層で、最下層は開口部の崩落土層である。また 1・2 層は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台土器が出土している。

S K86 (F i g 77・78) 西側約 1/2 は保存区域にはいっているため未調査となっている。形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.57、短径 2.42、深さ 0.51 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は 4 層でいずれも埋め戻し土層である。覆土中に阿玉台式・中峠土器が出土がみられる。

S K87 (第 24 図) 調査区西端に位置する。調査の関係で西端および東端の一部の未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.64、現存短径 1.89、深さ 0.50 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は若干オーバーハング状に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中には小片であるが、阿玉台式土器片が出土している。

S K100 (第 24 図) 東側が未調査で約 1/2 を検査している。形状は円形を呈し、規模は長径 1.15、現存短径 0.66、深さ 0.27 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。坑底施設としてサイドピット 2 ケを伴う北側ピットは径 29 × 23 cm、深さ 31 cm で、南側ピットは径 37 × 26 m、深さ 46 m を測る。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より中峠式期の土器片が出土している。

S K110 (F i g 77・78) 西側が約 1/2 程保存区域にかかっているため未調査である。形状はフ拉斯コ形の円形土坑である。規模は底面長径 2.63、現存短径 2.28、深さ 0.70 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に内傾しながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は 5 層で最下層の黄橙色土は開口部の崩落土、1 層暗褐色土、2 層黒褐色土は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式・中峠式土器片が出土している。

S K115 (F i g 83・84) 形状はフ拉斯コ形を呈する円形土坑で、底面長径 3.02、短径 2.91、深さ 1.21 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は直線的に内傾しながら開口部へ移行する。また坑底施設として西側に径 1.20 m、深さ 0.18 m の円形サイドボケットが伴う。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土上層より中期葉・加曾利 E 4 式、後期初頭、称名寺式土器の出土がみられるが、本址に伴うものではない。

S K145 (第 23 図) 東端および西端の一部は未調査である。形状は袋状を呈する円形土坑である。規模は底面長径 3.01、現存短径 2.21、深さ 0.355 cm を測る。底面はほぼ平坦で、壁は内

傾しながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式土器片が比較的多く出土している。

S K148 (Fig. 99) 形状はフラスコ形を呈する円形土坑である。確認面が浅いため底面に近いのみ検出している。底面長径 2.46、短径 2.40、深さ 0.40 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、底面上から阿玉台式土器片が出土している。

S K149 (Fig. 99) 形状はフラスコ形を呈する円形土坑である。やはり確認面が浅いため底面のみの検出である。規模は底面長径 2.40、短径 2.29、深さ 0.16 cm を測る。底面は浅い船底状を呈し、壁は短く立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より阿玉台式土器の小片が出土している。

S K150 (Fig. 99) 形状はフラスコ形を呈する隅丸方形で、やはり確認面が浅いため底面のみ検出している。底面長径 2.80、短径 2.505、深さ 0.35 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、底面から阿玉台式土器片を比較的多く出土している。

S K154 (第 24 図) 形状は袋状を呈する円形土坑である。規模は底面長径 2.75、短径 2.50、深さ 1.01 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は内傾しながら開口部へ移行する。坑底施設として考えられる小円形土坑が本址中央部に位置する。規模は長径 1.49、短径 1.32、深さ 0.115 m である。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より阿玉台式土器片が少量出土している。

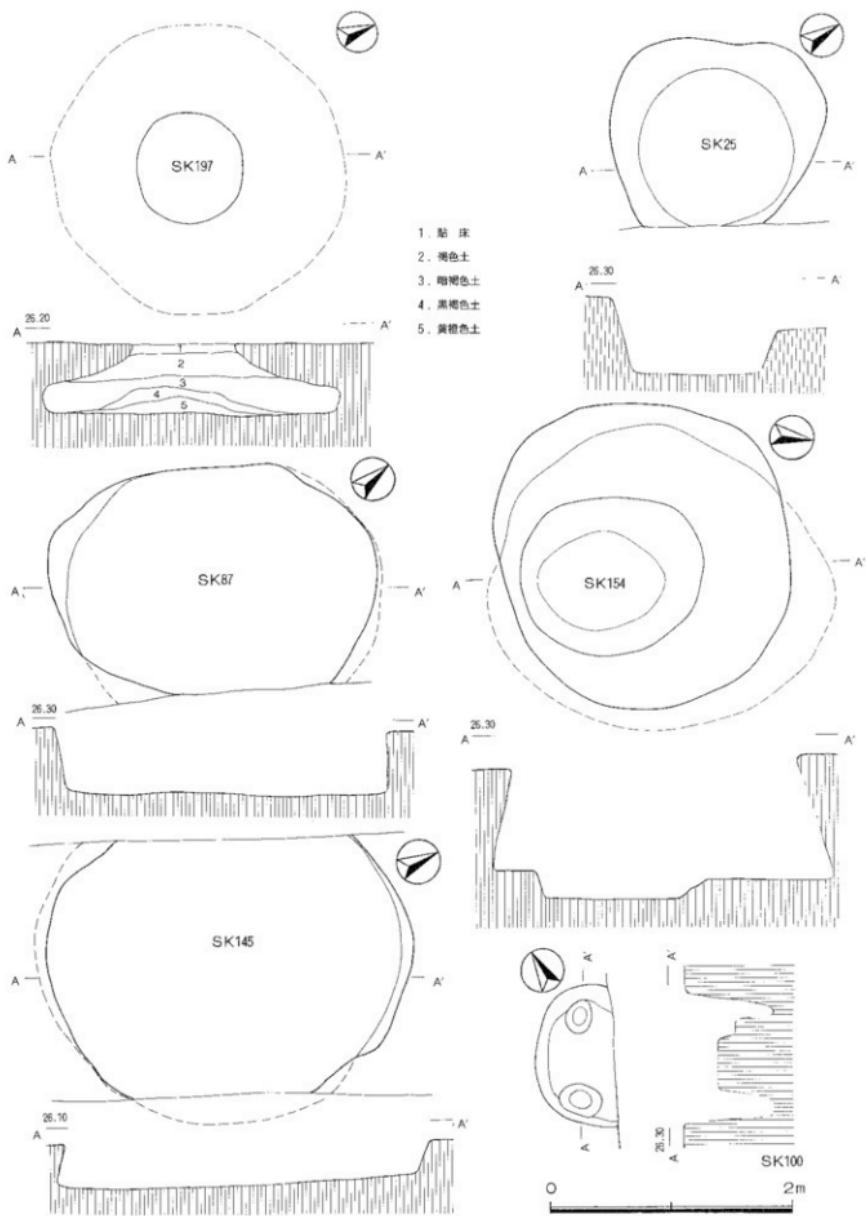
S K156 (Fig. 100・101) 形状は袋状を呈する不整な橢円形で、長径 2.52、短径 2.06、深さ 0.79 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上る。土坑堆積土は埋め戻し土層で、覆土中に阿玉台式土器片が出土している。

S K157 (Fig. 100・101) 形状はフラスコ形を呈する円形土坑で、底面長径 1.86、短径 1.82、深さ 0.46 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は内傾してながら立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より阿玉台式土器片が出土している。

S K158 (Fig. 102・103) 北西側が未調査で約 1/2 程を確認したに過ぎない。袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.50、現存短径 1.09、深さ 1.11 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。土坑内堆積土埋め戻し土層で、覆土中に阿玉台式土器片の出土がある。

S K159 (Fig. 102・103) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 3.10、短径 2.66、深さ 0.87 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は 11 層確認でき、最下層にハマグリを主体とする混貝土層が堆積しているほか、焼土層の堆積もあり、人為的な埋め戻し土層であることがわかる。覆土中より阿玉台式土器片が多量に出土した。

S K165 (Fig. 102・103) 形状は袋状を呈する円形土坑で、歴史的時代の堅穴住居の床面下より検出された。底面長径 3.00、短径 2.80、深さ 1.65 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸み



第24図 御灵遺跡 SK25・87・100・145・154・197

82-

をもちながら開口部へ移行する。開口部の確認面の長径 1.65、短径 1.16 m である。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より完形土器（深鉢・浅鉢）3 点を含み多量の阿玉台式土器の出土がある。

S K178 (F i g 106) 西側約½は保存区域に入っているため未調査である。本址は古墳時代の堅穴住居跡床面下より検出された。ちょうど開口部は貼床され、この貼床面を除去して確認した。形状は袋状を呈する円形土坑である。規模は底面長径 2.38、現存短径 1.70、深さ 1.04 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は10層確認でき、最下層は崩落土層が堆積し、上層は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式土器が出土している。

S K179 (F i g 108) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.53、短径 2.46、深さ 0.49 m を測る。底面は浅い船底状で壁は丸みを帯びて立ち上る。土坑内堆積土は最下層が崩落土層でその上層は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式土器片が出土している。

S K182 (F i g 106・107) 北側は保存区域のため約½の調査である 2 基が重複している土坑で、構築の時間差はほとんどない。新規の土坑（A）の形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.32、現存短径 0.94、深さ 1.21 m を測る。底面は若干起伏があり、壁は丸みをもちながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は最下層が崩落土で、上層は埋め戻し土層である。覆土中より比較的多くの阿玉台式土器片が出土している。

S K188 (F i g 106・107) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.30、短径 2.12、深さ 0.71 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は若干丸みをもちながら開口部へ移行する。なお本址は底面において S K 241 と重複している。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より多量の阿玉台式土器片が出土している。

S K190 (F i g 108) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 1.75、短径 1.58、深さ 0.66 m を測る。底面は若干起伏が認められ、壁は丸みをもちながら開口部へ立ち上る。土坑内堆積土は最下層が崩落土層で、上層は埋め戻し土層である。覆土中より阿玉台式土器片がわずかに出土している。

S K191 (F i g 106・107) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.65、短径 2.49、深さ 0.84 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもち開口部へ立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より阿玉台式土器片が出土している。

S K197 (第 24 図) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.44、短径 2.42、深さ 0.57 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちながら開口部へ移行する。土坑堆積土は最下層の崩落土層を除き埋め戻し土層である。覆土中より比較的多くの阿玉台式土器片が出土している。

S K208 (F i g 114・115) 南側で S K 209、東側で S K 221 によって切られている。形状は袋状を呈する円形土坑である。底面長径 2.43、短径 2.13、深さ 0.41 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸く立ち上る。土坑内堆積土は最下層が崩落土であるが、上層は埋め戻し土層である。

覆土中より多量の阿玉台式土器が出土している。

SK 209 (F i g 114・115) SK 208 に接して構築されている。形状は袋状を呈する円形土坑である。底面長径は 2.80、短径 2.69、深さ 0.28 m を測る。底面は起伏が観られるがほぼ平坦である。壁は丸みをもって立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、底面に横倒れ状に多量の阿玉台式土器が出土している。

SK 214 (F i g 106・107) 北側においてSK 188 と重複している。形状は袋状を呈する不整円形土坑である。底面長径 2.80、短径 2.45、深さ 0.71 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。底面に接して阿玉台式土器が多量に出土している。

SK 215 (F i g 114・115) 形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.78、短径 2.56、深さ 0.97 m を測る。底面は平坦で、壁は丸みをもちらながら大きく内傾して開口部へ移行する。土坑内堆積土は、最下層は崩落土層で、上層は埋め戻し土層である。覆土中より多量の阿玉台式土器が出土している。

SK 216 (F i g 114・115) 西側をSK 218 に、南側上面出SK 217 によって切られている。形状は袋状呈する円形土坑で、底面長径 2.58、短径 2.57、深さ 0.71 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は丸みをもって開口部へ移行する。土坑内堆積土は13層と複雑であるが、埋め戻し土層である。覆土中に阿玉台式土器片が比較的多く出土している。

SK 225 (F i g 116・117) 南側は未調査で、約½を検出したのみである。形状は袋状を呈する円形土坑で、底面長径 2.53、深さ 0.51 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は大きく内傾しながら開口部へと移行する。土坑内堆積層は埋め戻し土層で、覆土中より比較的多くの阿玉台式土器片が出土している。

○中期末以降の土坑

SK 8 (F i g 79・80) 形状は円形土坑で、長径 1.17、短径 1.11、深さ 0.13 m を測る。タライ状を呈し、底面は平坦で、壁は緩く外傾して立ち上る。埋土は埋め戻し土層である。覆土中より称名寺式土器片の出土がある。

SK 10 (F i g 83・84) 形状は長方形で、長辺 2.51、短辺 1.63、深さ 0.495 m を測る。底面はやや起伏があるものの、ほぼ平坦である。壁は緩く外傾しながら立ち上る。埋土は埋め戻し土層で、覆土中より深鉢形土器を含み、称名寺式土器片が比較的多く出土している。

SK 17 (F i g 83・84) 形状は梢円形を呈し、長径 2.04、短径 1.03、深さ 0.365 m を測る。底面は船底状で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上る。覆土中に加曾利 E 4 式土器が出土している。

SK 18 (F i g 84) 形状は梢円形を呈し、長径 1.36、短径 1.20、深さ 0.23 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中に加曾利 E 4、および称名寺式土器が出士している。

SK 25 (第 24 図) 形状は円形で、長径 1.40、短径 1.00、深さ 0.41 m を測る。底面はほぼ平

坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。土坑堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より称名寺式土器が多量に出土している。

S K26 (F i g85・86) 形状は不整梢円形で、長径3.80、短径1.33、深さ0.41mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上る。覆土中より深鉢形土器を中心とする称名寺式土器が多量に出土している。

S K34 (F i g86・87) 形状は円形で、長径1.60、短径1.40、深さ0.55mを測る。S K 33を切って構築している。底面はほぼ平坦で、壁は一部袋状を呈している。土坑内堆積土は自然埋土である。覆土中より称名寺式土器が比較的多く出土している。

S K46 (F i g91・92) 形状は二段構造の土坑で、長径1.31、短径1.14、深さ0.32mを測り、本址中央部に長径0.64、短径0.45、深さ0.74mを測る円形ピットが伴う。覆土中より称名寺式土器片の出土がある。

S K56 (F i g93・94) 形状は円形で、長径1.18、短径1.14、深さ0.32mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上る。覆土中より加曾利E 4、称名寺式土器が出土している。

S K58 (F i g93・94) 形状は梢円形で、長径1.72、短径1.23、深さ0.45mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より称名寺式土器が比較的多く出土している。

S K59 (F i g93・94) 形状は梢円形で、長径2.22、短径1.44、深さ0.30mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く立ち上る。覆土中より称名寺式土器がわずかであるが出土している。

S K60 (F i g97・98) 形状は袋状を呈する円形土坑で、北側約1/3程未調査部分を残している。底面長径2.03、現存短径1.29、深さ0.81mを測る。底面は起伏がありながらほぼ平坦で、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は最下層が崩落土層で、上層は埋め戻し土層である。また覆土中には加曾利E 4式土器が出土しており、本址形態から考えて時期がずれるものと思われる。少なくともこうした袋状形態は阿玉台式期の所産と考えられるからである。

S K63 (F i g97・98) 形状は袋状を呈する円形土坑で、南側約1/3程は未調査である。底面はやや船底状を呈し、壁は丸みをもちらながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より加曾利E 4式土器が多量に出土している。本址も先のS K 60と同じ阿玉台式期の土坑と考えられるが、やはり問題を残すと思われる。

S K67 (F i g96) 東側においてSK 135と切りあっており、北側は未調査である。形状は梢円形を呈し、長径1.60、現存短径0.70、深さ0.35mを測る。底面は平坦で、壁は緩く外傾して立ち上る。覆土中より称名寺式土器が出土している。

S K68 (F i g95・98) SK 69と切りあっている。形状は梢円形を呈し、長径1.55、短径1.03、深さ0.27mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より称名寺式土器の出土がみられる。

S K72 (F i g 95・96) SK 52 と切りあっている。形状は円形を呈し、長径 1.25、短径 1.07、深さ 0.29 m を測る。底面は平坦で、覆土中より比較的多くの称名寺式土器の出土がある。

S K75 (F i g 96) 形状は楕円形土坑である。長径 1.63、短径 1.37、深さ 0.635 m と径の割に深い。底面は平坦で、壁は緩く外傾して立ち上る。覆土中よりわずかであるが、称名寺式土器出土している。

S K82 (F i g 76～78) 形状は不整円形で、長径 1.68、短径 1.48、深さ 0.37 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上る。土坑内堆積土は 2 層で、埋め戻し土層である。覆土中位から加曾利 E 4 式、称名寺式が多量に出土している。

S K84 (第 76 図) 形状は円形で、長径 0.93、短径 0.90、深さ 0.27 m を測る。底面は平坦で、壁は垂直に近い状態で立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より称名寺式土器片が 1 点出土している。

S K88 (F i g 95・98) 形状は円形で、長径 1.53、短径 1.35、深さ 0.80 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上る。覆土中より称名寺式土器片の出土がある。

S K91 (F i g 96) 南側が未調査である。形状は円形を呈し、長径 0.91、深さ 0.43 m を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。覆土中より称名寺式土器の出土がある。

S K93 (F i g 97・98) 形状は円形で、長径 1.20、短径 1.09、深さ 0.26 m を測る。底面は平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より加曾利 E 4 式土器片が出土している。

S K96 (F i g 93・94) 南側が保存区域のため未調査である。形状は円形を呈し、長径 1.08、深さ 0.71 m を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。覆土中より加曾利 E 4 式土器が出土している。

S K102 (F i g 87・88) 東側約 1/4 程の調査である。大半は保存区域に残存している。形状は フラスコ形を呈している円形土坑である。現存の長径 2.51、深さ 1.30 m を測る。平面は若干起伏があり、北側に傾斜している。壁はほぼ直線的に内傾しながら開口部へ移行する。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より称名寺式土器が出土している。

S K104 (F i g 75) 西側約 1/2 程未調査である。形状は隅丸方形を呈し、短径 1.55、現存長径 1.02、深さ 0.57 m を測る。底面は船底状で、壁は外傾しながら立ち上る。覆土内より加曾利 E 4 式土器がわずかであるが出土している。

S K118 (F i g 82) SK 22 を切って構築している。形状は楕円形を呈し、長径 2.65、現存短径 1.16、深さ 0.67 m を測る。底面は平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より称名寺式土器の出土がわずかにみられる。

S K120 (F i g 81・82) SK 19 によって切られている。形状は楕円形を呈し、現存の長径 1.15、短径 1.00、深さ 0.065 m を測る。底面はやや船底状で、壁も緩く外傾して立ち上る。覆土中より称名寺式土器が比較的多く出土している。

S K135 (F i g 96) SK 67・70 と切りあっている。形状は円形を呈し、長径 1.40、短径

1.24、深さ 0.88 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上がる。覆土中より称名寺式土器がわずかながら出土している。

SK 196 (F i g 110) SK 200 によって切られている。形状は円形を呈し、長径 1.06、短径 1.03、深さ 0.59 m を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上る。覆土中より加曾利 E 4 式土器がわずかながら出土している。

SK 198 形状は円形を呈し、長径 0.96、短径 0.875、深さ 0.73 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上る。土坑内堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より称名寺式土器が小片ながら出土している。

SK 199 (F i g 110) 形状は円形を呈し、長径 1.25、短径 1.20、深さ 0.18 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より多量の称名寺式土器の出土がみられた。

SK 200 (F i g 110) 形状は円形を呈し、長径 1.52、短径 1.42、深さ 0.305 m を測る。底面は平坦で、壁はややオーバーハング状に立ち上る。覆土中より加曾利 E 4 式土器が少量出土している。

SK 201 (F i g 110) 形状は円形を呈し、長径 1.26、短径 1.16、深さ 0.32 m を測る。底面は平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。覆土中より加曾利 E 4 式、称名寺式土器が少量出土している。

SK 204 (F i g 110) 形状は円形を呈し、長径 1.80、短径 1.74、深さ 0.86 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁はややオーバーハング状に立ち上る。土坑堆積土は 5 層確認され、埋め戻し土層である。覆土中より加曾利 E 4 式の小片が比較的多く出土している。

SK 207 (F i g 112・113) 形状は円形を呈し、長径 1.28、短径 1.16、深さ 0.83 m を測る。底面は平坦で、壁はややオーバーハング状、もしくは垂直状に立ち上る。土坑堆積土は埋め戻し土層である。覆土中より称名寺式および掘之内式土器が多量に出土している。

SK 211 (F i g 114・115) 南側約 1/2 程未調査である。形状は不整形を呈し、現存長径 1.40、短径 0.96、深さ 0.52 m を測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上る。土坑内堆積土は自然堆積と思われる。覆土中より称名寺式土器片が出土している。

SK 212 (F i g 112・113) 形状は円形を呈し、長径 1.46、短径 1.43、深さ 0.43 m を測る。底面はやや船底状を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上る。土坑内堆積土は、自然堆積である。覆土中より称名寺式土器がわずかに出土している。

SK 218 (F i g 114・115) SK 216 と重複している。形状は円形を呈し、長径 1.69、短径 1.42、深さ 0.41 m を測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上る。土坑堆積土は埋め戻し土層で、覆土中より称名寺式土器が多量に出土している。

S K224 (F i g 116・117) 形状は精円形を呈し、長径 1.30、短径 0.95、深さ 0.245 m を測る。底面は平坦で、壁は緩く外傾しながら立ち上る。土坑内堆積土は自然堆積によって覆われ、覆土中より加曾利 E 4 式の深鉢 1 点出土している。

遺物

本遺跡土坑群より出土した遺物は、縄文土器、石器、土製品があり、時期は縄文時代中期中葉阿玉台式、中峠式土器および中期末葉・加曾利 E 4、後期初頭。称名寺式、後期前半・掘之内 1 式期である。

a) 土器

縄文土器は古くは阿玉台式・中峠式が出土し、新しく加曾利 E 4・称名寺式・掘之内 1 式が出土している。ここでは土器説明が煩雑となるため、土坑番号の順ではなく、前記の時期を前半に、後記の時期を後半に記述していきたい。

S K01 (F i g 118-1～12) 1 はキャリバー形を呈する深鉢形の完形土器である。文様帶は三分帯に分かれ、口縁部は 4 単位の突起部を中心に、そこから連なる隆帶による精円区画文を設け、さらに隆帶に沿って幅広の竹管による押引文を施しており、区画内には交互刺突文を横走させる。頸部は無文帶となり、胴部は縄文施文された隆帶による逆 U 字状の懸垂文を垂下させ、隆帶に沿って押引文が施されている。地文は単節 R L である。2 は胴上半部のキャリバー形の深鉢で、3 単位の大きな橋状把手を有する。口唇部に沿って隆帶が巡り、さらに口縁部は縄文が施文された隆帶をクランク状区画文として配する。区画内は沈線が充填されている。胴部は単節 R L を縦位に施している。3 は胴部破片で、隆帶による継長の X 字状の区画文を配し、区画内は沈線による渦巻文・波状文・懸垂文を垂下させる。地文は単節 L R である。4～8 は深鉢の口縁部破片である。4 は 2 条 1 組の隆帶区画文に沈線が充填している。5 は刻目の施した隆帶をもつ。6・8 は交互刺突文を巡らす。7 は縄文施文の隆帶を区画文としている。9 は沈線区画文内に波状沈線を配する。10 は隆帶による渦巻文。11 は縄文地文地に沈線による懸垂文を垂下させている。12 は浅鉢の底部破片である。いずれも中峠式に属する。

S K02 (F i g 119-1・2) 1 は口縁部が底部から直線的に開く深鉢形土器である。口縁部に横位の R L 縄文が施され、1 条の有筋沈線が巡り、以下全面に縦位の R L 縄文が施される。2 は胴部がやや括れるキャリバー形の深鉢である。縦位の R L 縄文が全面に施文されている。

S K06 (F i g 119-3・4) 3・4 とも胴部破片で、3 は縄文地文に隆帶による区画文を施す。隆帶に沿って半軸竹管による平行沈線を施文する。4 は縦位の条線文を施す。

S K09 (F i g 119-5～8) 5～8 は胴部破片である。5 は頸部近くの破片で、隆帶上に刻み目をもち、区画文を施している。以下は縦位の沈線を充填する。6 は単節 L R を地文に、沈線による円形区画文を施文する。7 は刻み目が施した隆帶を垂下させている。8 は 2 条 1 組み隆帶を巡らし、条線文を垂下させる。

S K13 (F i g 119-9~15) 9は口縁部を残置するキャリバー形の深鉢形土器。口縁部に4単位の眼鏡状把手を付している。この把手を結ぶように口縁に隆帯をめぐらし、胴部との区画を作出している。区画内には交互刺突文による区画文を施し、沈線文を横走させる。また沈線による区画文を表出している。胴部は全面に繩文を施している。10は平縁のキャリバー形を呈する深鉢で、胴部で若干括れ、口縁部が内脣する。文様は全面繩文施文である。11~15は口縁部破片で11は内脣して一度そばまつた口縁部が外傾して短く開く深鉢で、口縁部が無文帶下を押引文と沈線文で充填する。12は幅狭の角押文による区画文が施される。13は半円形文の隆帯区画文内を沈線によって充填する。14・15は繩文施文の深鉢である。12は阿玉台式、他は中峰式土器。

S K16 (F i g 120-1~3) 1~3とも胴部破片、1は隆帯による波状と梢円形区画文を施し、沈線を充填する。2は刻み目を有する隆帯の渦巻文。3は繩文施文の深鉢である。中峰式。

S K21 (F i g 120-4・5) 4・5とも胴部破片。4は沈線による梢円形文。5は沈線区画文下に繩文施文。4は阿玉台式。5は加曾利E 1式土器。

S K22 (F i g 120-6・7) 6は、口縁部に文様が集約され、胴部は無文である。口縁部には、山形状の大形把手を有し、隆帯による区画を設け、区画内を2条1単位の沈線による渦巻文を施文する。地文として繩文単節L Rである。7は繩文施文の深鉢。

S K24 (F i g 120-8・9) 8は口縁部破片、9は胴部破片、いずれも繩文施文である。

S K27 (F i g 120-10~14) 10~12は口縁部破片で、10は口縁部上端で小さく外傾する。口縁部端は円形文、以下沈線による区画文と波状文を垂下させる。11は繩文地文で3条の沈線による曲線文を垂下させる。12は細い半數竹管様工具による結節文と波状文を施文する。13・14は胴部破片。13は刻み目の隆帯による区画文、14は半數竹管様工具による円形文を重層させる。

S K28 (F i g 121-1) 1はキャリバー形の深鉢形土器。口縁部破片で、小把手を有し、交互刺突文を口縁部直下に巡らし、沈線による渦巻文を施す。地文に繩文L Rを施文する。加曾利E 1式土器。

S K30 (F i g 121-2・3) 2は口縁部端がくの字状に外反し、沈線による区画文を施す。3は単節R Lの縦位回転の繩文地文土器。

S K36 (F i g 121-4) 4は胴下半部の深鉢形土器。口縁部下から大きく外反気味に立ち上がる。頸部に4単位の把手を有し、この把手から延びる隆帯が大きく蛇行しながら垂下している。一方隆帯は梢円形区画文を作出し、区画内および隆帯上には幅広の爪形文を施文し、さらに波状沈線が区画内や隆帯に沿って併走するほか、二条1組の波状沈線が懸垂したり、区画文を表出する。阿玉台式土器。

S K37 (F i g 121-5~13) 5は小形のキャリバー形を呈する深鉢形土器。完形である。頸部で小さく括れ、口縁部はくの字状に内脣する。口縁部には2単位の把手を有する。把手には沈

線による円形文を施し、さらに口縁部は綴位の沈線を充填させ、梢円形区画文、渦巻文を配する。頸部以下は無文である。6は平縁の深鉢で、口唇部は沈線を巡らし、口縁部下の刻み目を有する隆帯を横走させ、以下沈線を充填させる。7は口縁部破片で、低い隆帯で梢円形区画文を表し、隆帯に沿って有節沈線を巡らす。8も口縁部破片、口唇部に単節RL繩文を施し、胴部は綴位回転させている。9は胴部破片で、繩文を有する隆帯を垂下させ、隆帯脇に沈線を施す。10は平縁の浅鉢で、口縁部が小さくくの字状に外傾する。頸部には凹帶が巡る。11～13は深鉢形の底部破片である。5は加曾利E 1式。

SK38 (F i g 121-14・15) 14はキャリバー形の深鉢で、口縁部に沈線による渦巻文と区画文を組合せる。15は繩文施文の深鉢形土器。加曾利E 1式土器。

SK45 (F i g 122-1～5) 1は胴部破片で、胴部は外傾しながら口縁部はくの字状に外反する深鉢。括れ部に隆帯が巡り、それよりY字状となる隆帯が弧状に垂下して区画される。隆帯に沿って沈線が巡り、地文は隆帯上にはRL繩文を横位、斜位に施文されている。2はキャリバー形を呈する深鉢形の口縁部破片。単節RLを地文に細い隆帯による区画文を横走させている。3も口縁部破片。口縁部上位に凹帶を巡らし、胴部は繩文施文である。4は口唇部肥厚する浅鉢形で、口唇部は細い隆帯と波状文を巡し、胴部は無文である。5は深鉢。

SK48 (F i g 122-6～12) 6は筒形の深鉢で、口縁下には4単位の貫通孔を持つ把手を配し、口唇部は肥厚となっている。文様は口縁部直下より沈線を垂下させる。7は深鉢形で、口縁部直下は繩文帯を巡らし、低い隆帯区画内に1列の有節沈線が巡り、区画内にも有節沈線が充填される。8は内彎する口縁をもち、口唇部が短かく直立する。口唇部に凹帶が巡り、直下に交互刺突文を区画文として、平行沈線文による区画文を表出する。9は繩文施文の深鉢。10は刻み目を有する隆帯をもつ。11は単節LRを地文に沈線文を垂下させ、波状沈線を横走させる。12は条線文施文の深鉢。

SK49 (F i g 122-13) 13は底部から小さく膨らみながら、口唇部において短く外反する。口唇部から延びる隆帯はY字状となり、それより蛇行して垂下する。口縁部直下には2条の沈線が巡り、地文は櫛状工具による波状櫛齒文を垂下させる。

SK50 (F i g 122-14) 14は深鉢の胴部破片。爪形文を横走させ、半截竹管による平行波状文を横走させる。

SK53 (F i g 123-1・2) 1・2とも胴部破片。1は単節RLに沈線による梢円形区画文を施し、区画内に横走沈線を入れる。2は単節RL繩文。

SK54 (F i g 123-3～5) 3は口縁部破片で、口唇部が小さく外反する。文様は口縁部直下より櫛状工具による波状櫛齒文を垂下させる。4は胴部破片で、連続爪形文を有する隆帯と沈線による重疊鍵括弧文を配する。5は深鉢形の底部破片。

SK55 (F i g 123-6～10) 6は平縁の深鉢で、口縁部が内彎する。口縁部には隆帯による梢円形区画文を表出する。7～9は胴部破片。7は円形刺突文を有する隆帯を区画文に、区画内

は沈線による三角形文を埋る。8は頸部区画文を低い隆帯で施し、胴部は単節R Lを地文としている。9は円形刺突文を有する隆帯を垂下させ、隆帯に沿って3条の沈線文を垂下させる。10は浅鉢形土器である。6は阿玉台、7は勝坂式、8・9は加曾利E 1式。

S K70 (F i g 123-11・12) 11・12は胴部破片。11は沈線による区画文を施す。12は縄文施文の土器。加曾利E 1式土器。

S K78 (F i g 123-13・14) 13は口縁部破片で、口縁部直下を無文とし、交互刺突文を一条巡らし、区画文とする。以下縦位の沈線文を充填する。14は縄文施文地に沈線を垂下させる。13は加曾利E 1式である。

S K80 (F i g 123-15~18) 15は大形把手を有するキャリバー形の深鉢で、口縁部が内彎する。文様は把手部から延びる隆帯がそのまま橢円形区画文を表出する。また同じような隆帯が胴部で2条巡る。地文として撚糸Lを施文する。16は口縁部破片で、口縁が小さく外傾する。口縁直下の無文帶下に交互刺突文を巡らし、以下沈線を横走させる。17は縄文施文の深鉢。18は沈線による橢円形区画文内に縦位の沈線文を充填する。

S K81 (F i g 124-1~5) 1は胴部から内彎しながら、口縁部が直立する深鉢。口縁直下は無文帶として、交互刺突文を巡らし、以下2条の波状沈線を横走させる。2は大きく外反する深鉢の口縁部破片。口唇部は肥厚し、沈線による渦巻文や垂直部を施文する。3は内彎する口縁部で、口唇部は若干肥厚し、全面縄文施文である。縄文は複節R L Rである。4は口縁部が大きく外反する深鉢。口縁部直下より櫛状工具による波状の櫛齒状条線を垂下させる。5は口唇部が肥厚する。沈線文を施文する。

S K83 (F i g 124-6~8) 6~8は胴部破片である。6は頸部で括れ、口縁部が外反するものと思われる。縄文施文の隆帯を垂下させ、地文は単節R Lである。7も隆帯を垂下せる。地文は単節R Lの縦位施文である。8は縄文施文の深鉢。

S K86 (F i g 124-9~14) 9は胴部で内彎して、口縁部は小さく垂直に立ち上がる浅鉢形。刻み目を有する隆帯を口唇部に巡らし、さらに波状に横走させる。また胴部は半數竹管による平行沈線による渦巻文と懸垂文を組合せ、沈線文に沿って連続爪形文を施文する。10は大型土器の山形把手部の破片。縄文施文に沈線による渦巻文や区画文を表出する。11は平縁の深鉢。2条の隆帯上に縄文施文され、以下沈線による円形モチーフを描出す。12~14は胴部破片。12は縄文施文の隆帯、有節沈線さらに沈線文を組合せる。14は縄文地文上に沈線による区画文を施文する。縄文は単節R Lである。

S K100 (F i g 125-1~4) 1~4とも胴部破片である。1は縄文施文。2は沈線区画内に刺突文を充填させる。4は櫛状工具による櫛齒波状文を垂下せる。

S K110 (F i g 125-5~12) 5~7は大型土器の山形把手の破片。5は縄文地文上に、刻み目を有する隆帯を渦巻状に施文する。8はやはり縄文施文を地文に、沈線による渦巻文や区画文を組合せる。7は幅広の連続爪形文を施文した隆帯を渦巻上に施す。8は胴部破片で、沈線によ

る渦巻文に沿って連続爪形文を施す。9は口縁部破片。口唇部は肥厚し、括れ部に交互刺突文を一条巡らし、半円状に刻み目を有する隆帯を配する。10は口唇部が肥厚する繩文施文の深鉢。11・12は沈線施文の深鉢。

S K145 (F i g 125-13~23) 13・14は口縁部破片である。13は口縁部が小さく外傾し、角押文と波状沈線を横走させる。14は角押文と連続刺突文を並行して横走させる。15は隆帯による渦巻文を配し、角押文による重疊円形文を施す。16は単節R Lを地文に爪形文を施文された隆帯を垂下させる。17は口縁部破片、口縁部はくの字状に外反し、繩文施文を地文に沈線による区画文を施す。18は隆帯を垂下させ、隆帯に沿って沈線文が伴う。19は隆帯に沿って爪形文が伴う。20は口縁部破片で、低い隆帯区画文内に波状沈線文が充填する。21は波状沈線文を横走させる。22は半截竹管工具による波状文と沈線文を横走させる。

S K148 (F i g 125-24・25) 24はかなり突出した山形把手の破片である。波頂部と口縁部隆帯が連繋したもので、波頂部で三角形区画文を形成している。区画内縁辺には角押文が巡り、櫛状工具による条線が充填される。胴部も同じく条線が施されている。25はやや小さな山形把手で波頂部から垂下する隆帯と口唇部に沿って施される隆帯の連繋によって三角形区画文を対峙させ、さらに区画内は沈線を巡らし、繩文を充填する。

S K150 (F i g 126-1~?) 1は4単位の小さな山形把手を有する深鉢。口縁部に稜をもつ。2は口縁部破片で、口縁部端で小さく外反する。口縁直下で爪形文を横走させ、さらに波状沈線により区画する。胴部は櫛状工具による櫛歯文を波状垂下させる。3は胴部破片で、隆帯による2段にわたる楕円形区画文が表出される。隆帯の内側には連続爪形文が巡る。4は大形把手を有する深鉢で、波頂部からの隆帯が区画文を形成し、区画内に角押文による楕円形文を施す。5も口縁部に近い破片で、瘤状把手を有する。6・7は無文の浅鉢で、6は口唇部に貼付状の帯をもつ。

S K154 (F i g 126-8~14) 8は波状口縁の深鉢形土器。波頂部から垂下する隆帯が楕円形区画文を作出し、隆帯の内側に沿って2条の有節沈線文が施される。9は平縁の深鉢で、瘤状把手をもち、沈線文および有節沈線文による区画文を施す。10~12も同様、有節沈線による区画文が施される。13は隆帯に沿って角押文が楕円形に施されている。14は波状沈線文を垂下させる。地文地は無文である。

S K156 (F i g 126-15~18) 15は橋状把手を有する口縁部下の破片である。隆帯による区画文内側に沿って爪形文が施され、胴部は沈線文を垂下させる。16は深鉢の胴部破片で、沈線間に挿まれて波状沈線文を横走させた区画文間に、振幅の大きな波状文を施す。さらに下位には沈線による三角状の区画文を施文する。17は口縁部破片で、口唇部に瘤状貼付部が付されている。18は単節L Rを地文に平行沈線を横走させる。

S K157 (F i g 126-19~21) 19は波状口縁で、沈線による区画文と波状沈線文を横走させる。20は平縁の深鉢。頸部に凹帶を巡らし、櫛歯沈線文を施す。21は小さな波状口縁、沈線区

画内に縄文施文を施す。

S K158 (F i g 126-22~26) 22は平縁の深鉢。2列の角押文を施し区画文としている。23はX字状の区画文を有し、有節沈線を3条施し円形区画文を設ける。24は胴部破片。条線を地文に、押捺が加えられた隆帯が垂下している。25は低い隆帯による波状文を横走させ、条線文を施文する。26はキャリバー形の深鉢で、口縁部が内彎する。波頂部からながれる隆帯による楕円形区画文内に2条の沈線文を走らせる。

S K159 (F i g 127-1~23) 1は体部が朝顔形に開き、口唇部が肥厚する。波状口縁を呈し、波状部は方形把手をなす。口縁部は2条の沈線が波状をなしながら巡り、胴部にも円形文を施す。地文は全面、単節R Lを施文する。2は平縁の口縁部で、口縁部下に角押文を巡らし、隆帯によって区画している。3は体部は緩やかに外傾しながら、頸部で括れ、口縁部端は小さく外反する。口縁部は無文、以下櫛状工具による櫛齒波状条線を垂下させる。4は山形把手の波頂部破片。波頂部から垂下した幅広い隆帯が区画文となり、三角形状の区画内には角押文を巡らし、波状条線を充填する。5は平縁の筒形深鉢。横走する沈線間に波状沈線が施されている。地文は単節R Lを施文している。6~9も、縄文施文を地文に沈線文を区画文とする。6は体部が外傾し、口縁部が緩く外反する。地文は単節R Lで、沈線による区画文を施す。8・9も同様。7は体部が内彎し、口縁部が外反する。頸部に沈線による区画文を施す。10は体部が垂直に立ち上がり、口縁部が短く外反する。口縁部は折返し状を呈し、口縁部下端は押捺による3単位の波状をなしでいる。無文である。11は波状口縁、沈線文、波状文を施す。12は波状の口縁部破片。13は沈線による区画文。ジグザグ状文を加飾する。14は胴部破片。隆帯の区画内外に櫛状工具による櫛齒条線を充填する。15是有節沈線による円形区画文を施す。16は胴下半部の破片。櫛齒条線を垂下させる。17は口縁部付近の破片。頸部に縄文を有する隆帯を巡らす。18は口唇部が短かく外反する。全面縄文施文。19~22は櫛齒状条線文を垂下させる一群で、21・22は波状に施す。19は小さな波条口縁を呈する。22は口縁部を横走させる。23は無文の土器。

S K165 (F i g 128~130) 1は体部が直線的に立ち上がり、口縁部において大きく外反する。文様は頸部に隆帯1条巡らし、さらに連繋して曲線文を配する。また隆帯に沿って爪形文を施す。2も体部が直線的に立ち上がり、口縁部が大きく開く。文様は4単位の押捺を加えた隆帯を垂下させ、隆帯間に爪形文を2列巡らす。3は底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は短かくの字状に外反する。口唇部には環状の把手が付される。把手・口縁部・体部には縄文R Lを施文する。完形土器である。4は底部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部端において短かく外反する。口縁部の無文帯下に3条の有節縄文を巡らし、縄文施文の隆帯を1条区画させる。体部は単節R Lを全面に施す。5は深鉢の胴部下半の破片で、4本単位の隆帯を垂下させ、地文はR L縄文が縦位に施される。6は口縁部を欠損する深鉢で、縄文施文の隆帯は曲線文を描出し、地文はR L縄文が縦位施文される。7は口縁部と底部を欠損する胴部破片である。口縁部は無文、胴部は縄文施文を有する隆帯が区画文を施し、区画内には沈線文による幾何学文を表出する。地

文はR L 糸文が施される。8は深鉢の胴部下半の破片である。文様は単節R Lと無節Lの2種を施文する。Fig 129-1は胴上半部で膨らみ、口縁部は短かく垂直に立ち上がる。口縁部は無文でやや低い隆帯状を呈している。この口縁部からY字状の隆帯が垂下する。Y字状隆帯は押捺が加えられる。地文は櫛状工具による櫛歯条線を垂下させる。2は口縁部が小さく内彎し、口唇部が短かく外反する。口縁部文様帶は口唇部から連繋する隆帯によって略三角形区画文を表出し、区画内に沈線文、爪形文を巡らし、さらに波状沈線文を横走させる。胴部は無文である。3は波状口縁の深鉢で、口縁部に沿って刻目が施された隆帯が巡り、さらに三角形区画文を施す。三角形区画文内には沈線を充填させて、さらに橢円形区画文を配し、区画内には2条の波状沈線を横走させる。胴部も四角区画文を施し、区画内には沈線を巡らし、地文はR L 糸文である。4は口唇部が肥厚し、口縁部が内彎する。文様は口縁部に集約され、口唇部をめぐる隆帯によって重三角形区画文を配し、区画内は角押文を沿え、さらに波状沈線文を横走させる。5・6は糸文施文された隆帯による区画文が施され、区画内は5では横走する沈線を充填させ、6では隆帯に並行する2条の沈線を施文する。7は口唇部が肥厚し、外方へ突出し、口縁部は内彎する。口唇部下は押捺文を巡らし、口縁部は沈線による重円形文を施す。8は平縁の深鉢で、2条1組の隆帯が三角形文を横走させ、胴部は波状沈線下に櫛歯条線を垂下させる。9は肥厚する口唇部で、糸文施文を施す。10は胴部破片で、爪形文を施す隆帯を区画文に、爪形文が充填する。11は平縁の深鉢で、糸文地文に沈線による区画文が施される。12・13は無文地に、口唇部から連繋するY字状隆帯が垂下する。14は体部上位で緩く内彎して、口唇部が肥厚しながら、小さく外傾する。口縁部は無文で、体部は単節R LとL Rにより羽状効果をあげてる。

Fig 130-1は口縁部は小さな波状を呈し、無文帶である。体部は単節L RとR Lを施文し、羽状糸文とする。2は深鉢の胴部下半で、単節R Lの継位施文を地文に、隆帯が垂下する。3～5は無文の浅鉢形土器である。3は平縁で、口縁下に凹帯を巡らす。4は山形状大形把手を4単位配し、口縁部内側に稜を有する。5は平縁で、口唇部が肥厚する。6～16は底部破片。6～15は深鉢で、6底面には網代痕が残置されている。16は浅鉢形土器底部である。

SK178 (Fig 131-1～4) 1は胴部は垂直気味に立ち上がり、口縁部は内彎しながら開く深鉢。口縁部は肥厚し、口縁部下より4単位のY字状隆帯が垂下する。隆帯上には押捺が加わる。また口縁部下から隆帯に沿って、有節沈線文が施されている。地文は口縁部から全面施文され、単節R Lである。2・3も同一個体である。4は深鉢の底部で、網代痕が残置されている。中峰式土器である。

SK179 (Fig 131-5～13) 5は山形状把手で、把手形に沿って有節沈線が2条巡り、区画内に波状沈線を垂下させる。6は平縁の深鉢で、瘤状把手を有し、把手部を中心には有節沈線による橢円形区画文を配する。7も隆帯による区画文内に角押文を巡らす。8は無文の浅鉢で、口唇部は小さく外反する。9は有節沈線による区画文を施す。10は口縁部破片で、角押文を横走させる。11は波状口縁で、有節沈線文を区画文とする。12も爪形文を隆帯に沿って施されている。

13は深鉢の底部破片。阿玉台式土器。

S K 182 (F i g 131-14~20) 14は体部が外傾し、口縁部がくの字状に内彎する。しかも口唇部は短かく外反する。文様は口縁部に集約され、口唇部の隆帯が長楕円形を形成し、隆帯に沿って沈線文が巡る。地文は全面繩文施文される。15は内彎する口縁部をもつ深鉢。低い隆帯が楕円形区画文を施し、区画内に角押文を巡らせ、縦位の沈線を充填する。16は繩文施文された隆帯が区画文を作成し、区画内に2条の沈線文が描出される。地文は繩文施文である。17は体部は垂直に立ち上がり、口縁部が大きく外傾する。口縁部下には、波状沈線を横走させ、隆帯を巡らし、さらに連繋させて、懸垂文や円形区画文を施す。隆帯に沿って角押文が併走する。18も胴部破片で、波状隆帯を垂下させ、爪形文が横走する。19は口唇部が肥厚し、口縁部は沈線文を充填する。20は隆帯区画文内に沈線を充填する。

S K 188 (F i g 188-1~19) 1は深鉢の底部破片。隆帯による区画文を施す。2~8は口縁部破片。2は角押文による楕円形区画文を施し、区画内に波状沈線文を横走させる。3は隆帯による楕円形区画文を施し、角押文を巡らす。4は口縁直下は凹槽が巡り、沈線による円形文が施文される。5は口唇部が肥厚し、列点文が施文される。体部に波状沈線文が施される。6は1と同様、底部に近い破片で、隆帯に沿って有節沈線を伴う。7は口縁部破片で、角押文が施文される。8は口縁部端が小さく外反する。9は口縁部に近い波状口縁の深鉢で、隆帯による楕円形区画文し、沈線を横走させる。4も口縁部端が小さく外反し、沈線が横走する。5は大きく口縁部が外傾し、円形隆帯文が配される。8は隆帯による波状文が横走する。9は口唇部がベン先状に尖がり、口縁部下に条線が横走する。10は繩文施文を地文として沈線が横走する。11は浅鉢形土器で、内面に稜を有する。12は刻目のもつ隆帯が垂下される。13は横走する沈線が波状を呈する。14は口縁部上端が緩く外反し、無文帯となり、胴部は条線文で充填される。15は浅鉢の底部破片で、底面に網代痕を残置している。

S K 208 (F i g 133-16~21) 16は底部を欠損する深鉢で、底部から膨らみをもちながら頭部へ移行し、口縁部は内彎する。文様は地文に単節R Lを施し、口縁部上端に一条沈線を巡らせ、胴部は略渦巻文、2条1単位の半円形を施文する。17は口唇部に押捺を加えた波状口縁で、口縁部外側に稜をもつ。無文土器である。18は波状を呈する深鉢で、口縁部上端で小さく内彎する。19は繩文地文上に沈線による区画文が施される。20は口唇部が肥厚する深鉢で、口縁部は隆帯によるY字状文を形成している。全面単節R L繩文を施している。

S K 209 (F i g 134-1~18) 1はほぼ完形の深鉢で、体部は底部から若干膨らみ、頭部から口縁部は内彎する。口唇部下に角押文が一条巡り、それ以下小突起を前に突出すように施す。以下口縁部は縦位の細沈線を垂下させ地文とし、半截竹管工具により、波状もしくは逆U字状区画文を配する。胴部は波状沈線文を垂下させ、2段の区画文を設け、同一工具により幾何学的を配し、区画内は沈線による連続三角形文を横走させ、胴部にも半円形文を連続させる。10は胴部破片、隆帯を垂下させ、隆帯に沿って角押文を施す。11は小さく外反する口縁部破片で、凹槽

が一条巡る。12・13・16は横位の爪形文が施されるもので、12は口縁部破片。口縁部が内彎する。口縁部端から隆帯がY字状に垂下し、隆帯の下位に幅広の爪形文が施される。14・15・17・18は浅鉢形土器。14は口縁部端に隆帯による円形文を配する。17は内側に稜をもち、口縁部直下に粘土紐を波状に貼付けており、口唇部が若干肥厚する。

S K190 (F i g 132-20~22) 20は平縁の深鉢で、口縁部直下に紐線文を一条巡らす。地文は繩文施文である。21は繩文施文、22は沈線文を充填している。

S K191 (F i g 132-23~30) 23~27は口縁部破片である。23は波状口縁で、小突起を伴う。口縁部は一段稜をなし文様帶を集約させている。重半円形文を角押文で充填している。24もほぼ同様、25・26は口縁部に沿って角押文を並列させる。27は波状を呈し、繩文施文を地文に、沈線による区画文を施す。28も同様、29は頸部付近の破片。30は胴部破片、角押文を横走させている。阿玉台式土器。

S K197 (F i g 133-1~15) 1~11・14は口縁部破片。1は波状を呈する深鉢で、隆帯により半円形、三角形等に区画され、隆帯に沿って角押文が巡る。3は口唇部が外傾し、口縁に並行して角押文が巡り、下位に円形区画が施される。3も口縁部端が小さく外反する。口縁部を無文と文様を表出する。2は口縁部と底部を欠損する胴部破片である。文様は横走する大きな波状隆帯に沿って幅広の角押文と有節沈線を並行させ、波頂部から波状沈線文を垂下させる。3も胴部破片で、隆帯に沿って角押文が付随する。4は口唇部が小さく外傾する。隆帯区画に沿って角押文が施され、円形区画内に櫛齒状状線を波状に垂下させる。5は口縁部破片、繩文地文に沈線による渦巻文や直線文を垂下させる。6は小さな波状口縁を呈する深鉢。7・9・10は繩文地文に沈線による渦巻文等のモチーフを描出する。8・12・16は隆帯を垂下させる一群で、8でみると、口縁部は内彎し、口縁部端の隆帯に連繋してY字状隆帯を垂下させる。地文は繩文施文である。11は口縁部破片で、口縁部が小さく内彎する。文様は口縁部に並行して角押文を一横走させる。13~18は底部破片。いずれも網代痕を残置している。1は中鉢式。

S K214 (F i g 135-1~12) 1は体部が筒形に立ち上がり、口縁部が内彎しながら大きく開いた深鉢。口縁部は4単位の大波状となる。波頂部を欠損しているが、刻目のもつ円形文から連繋して頸部との区画をもち、さらに波頂部から続く隆帯は、円形文で左右対象の三角形区画文を表出する。区画内は2~4列の有節沈線文によって充填される。頸部は無文帯となり、胴部は隆帯によるU字状、逆U字状等の曲線文を組合せ、やはり隆帯に付随して1~2条の有節沈線文を施文する。さらに区画文内にはそれぞれ波状沈線文が充填される。2は頸部で括れ、口縁部が若干内彎する。口縁部には円孔を有する大形把手が付く。文様は把手部から連繋した隆帯が突起部を作出している。地文に単節L Rが施されている。3は口縁部が若干内彎する深鉢で、口縁部縁から連繋する隆帯がY字状に垂下する。さらに隆帯に沿って波状沈線が付随する。地文は繩文施文である。4・5は角押文によって区画される。6は繩文施文を地文に沈線によって区画され、さらに斜行沈線が加わる。7・8・11は地文を繩文施文にし、沈線による区画文を施す。10は

櫛齒状条線を波状垂下させる。12は波状口縁を有する浅鉢形土器。9は円孔を有する器台形土器。円孔は3孔穿ってある。

S K215 (Fig. 135-13~23) 13は山形把手の破片。繩文地文に半截竹管工具による渦巻文を施文する。14は口縁部破片で、口唇部と口縁部に無節繩文を施す。15はキャリバー形の深鉢で、把手部が欠損する口縁部破片である。波状部が垂下したと思われる隆帯は渦巻状を呈し、口縁部に沿って三角形区画文をなす。区画内は角押文を付随する。16・19は口縁部に並行して角押文を一条巡る。17・18は繩文施文の深鉢。18は口縁部端が大きくなる字状に外反する。20・21は浅鉢形土器。20は波状口縁をもち、内面に稜を有する。21は方形把手を4単位もち、内面に稜を有する。22は折り返し口縁をもち、体部は繩文施文である。23は深鉢形の底部破片。

S K136 (Fig. 216-1~12) 1は深鉢形の口縁部破片。口縁部直下はR L繩文施文。体部は櫛齒状条線を横走させる。2は平縁の深鉢でY字状隆帯を垂下せる。3は口縁部破片で、口縁に並行して2列の刺突文を施し、体部は繩文施文。4は胴部破片。角押文を横走させる。5は繩文施文を地文に沈線文を横走させる。6も地文に繩文を施し、沈線文・条線を施文する。7は口縁部破片の無文土器。10は地文に条線を有し、波状沈線文を横走させる。11は平縁の深鉢で、口唇部が肥厚する。櫛齒状条線を施文する。12は平縁の深鉢。繩文施文で、節の細かい单節R L横位回転を施す。8・9は底部破片。網代痕を残置する。

S K217 (Fig. 136-13~18) 13は口縁部が大きく外反し、口唇部が肥厚する深鉢。口縁部は波状となる。口唇部文様は刻目の有する隆帯が梢円形区画文を施し、区画内に交差刺突文を充填する。体部は单節L R継位施文している。14・15は地文に繩文を施し、沈線文を描出する。16は18は地文に条線を施し、沈線区画文を表出する。17は条線を施文する深鉢。

S K225 (Fig. 136-19~33) 19は波状を呈する深鉢。口縁部に並行して角押文を一列巡らし、地文を繩文施文とする。20は口唇部が小さく外傾する。口縁部直下に角押文を巡らし、体部にやはり爪形文を施文する。隆帯を配する。21~23は条線を地文にし、隆帯による渦巻文を施す。隆帯に付随して沈線文が施文されている。25は口縁部破片で、隆帯による梢円形区画文を施し、区画内に角押文を付随する。24・29は繩文施文を地文に沈線による懸垂文を垂下せる。26~28は角押文が施された胴部破片。32は繩文施文。33は条線部施文。30・31は無文の深鉢で、30は波状口縁をもち、31は口縁直下に凹帯が巡る。

S K10 (Fig. 137-1~17) 1は体部が脹りをもしながら頸部で括れ、口縁部は大きく外反する。口唇部は肥厚する。口縁部は無文化し、一般の稜をもつ。体部は全面单節L R施文である。2は小突起をもつ深鉢。突起部にはC字状の貼付文をあしらい。波頂部にも凹帯による渦巻文が施文される。口縁部は無文帯で、沈線による区画文に繩文を充填する。3は平縁の深鉢で、口縁直下に繩文帯をもうけ、ポンタ状貼付文を付し、沈線区画文を施す。4は波状を呈する口縁部で、口唇部が肥厚し、やや内脣気味となる。帯繩文のモチーフは円形を基調とする。5も波状口縁で波頂部から刻目を有する隆帯が垂下し、区画文が施られる。8・12も刻目のもつ隆帯が垂下

し、U字状区画、渦巻文状区画が施されている。6も波状口縁、やはり口唇部が肥厚する。意匠文とするモチーフはJ字文系であろう。7も波状を呈する。J字文系を呈する。区画内の縄文は単節R Lである。10・13～15の全体的な意匠文は不明であるが、J字文もしくはU字状を呈するものと考える。16は無文帯を区画する微隆帯が垂下し、地文は単節L Rである。17は深鉢の底部破片である。1・16は加曾利E 4式、他は称名寺I式である。

S K15 (F i g 137-18~35) 18は頸部で括れ、口縁部は大きく外傾して開く、口唇部は内側に肥厚する。文様はJ字文系で、口縁部から縄文帯が施される。19は頸部で括れ、口縁部はわずかに外傾する。口唇部は若干把厚する。口縁部は無文、体部は微隆帯による区画文が施されている。22は波状口縁の深鉢で、口縁部は若干内彎しながら外傾する。文様は波頂部から沈線区画文が垂下し、その意匠文はJ字文を基調としている。20・23は平縁の深鉢。口縁部を無文帯として縄文帯のモチーフはJ字状文を基調とするものであろう。24・25・27・28も同類と思われる。24の縄文帯は細く、入念な作りである。21は胴部括れ部の破片で複雑な縄文帯を呈し、縄文帯内に橢円形区画文を施し、無文としている。30・31は口縁部に無文帯をめぐらし、微隆帯で区画している。体部は縄文地文である。32は縄文施文で、口縁部で燃りを変え羽状効果をあげている。33は口縁部を無文とし、微隆帯で区画しながら、さらに体部へ無文微隆帯を垂下させる。34は胴部破片で、隆帯を横走させ、体部は単節L Rを施す。

S K17 (F i g 138-1・2) 1は平縁の深鉢。口縁部を無文帯として、微隆帯により区画され、体部は縄文。2は口縁部が小さく外傾する。縄文施文の土器である。

S K18 (F i g 138-3~7) 3～5は微隆帯を施す深鉢で、3は口縁部が無文帯として、微隆帯直下から単節R Lを施している。4・5は微隆帯で区画された無文帯が垂下する。6は縄文施文の胴部破片。単節R Lである。7は沈線で渦巻状に区画された内を縄文充填を施す。J字状文をモチーフとしてもつものと思われる。

S K25 (F i g 138-8~33) 8は口縁部破片で、口縁部は外方へ大きく開く。口縁は波状を呈し、波頂部はこれを形成し、これより刻目を有する隆帯が並行して垂下する。その隆帯区画内には橢円形区画の縄文帯が垂下している。体部文様はJ字状の意匠文として理解できるが、明瞭ではない。14は口縁部が内彎して立ち上がり、口唇部が肥厚す。口縁に4単位の耳形状の把手が付く、体部文様は口縁部が無文となり、スペード文および反転したJ字文を配する。9～13、16～28は8・14と同系統の土器でいずれもJ字文を基調としており、19・20には刻目を有する隆帯が垂下している。15は波状口縁で、口縁部無文帯直下に円形刺突文を施す。29は平縁の深鉢で、口縁部より櫛齒状条線文を垂下させる。31・32は胴部破片で、微隆帯区画内の無文帯が描出されている。33は平縁の深鉢で、口縁部が緩く外傾する。地文に単節R Lを施し、沈線を垂下させる。8～28は称名寺I式。29～32は加曾利E 4式。33は掘之内1式である。

S K26 (F i g 139-1～7) 1は胴部で括れ、口縁部は緩やかに外傾して開く。口唇部は内側に肥厚する。口縁部は無文帯を巡し、沈線区画による帶縄文はJ字状文を作出して、さらに胴

部文様帯へ連繋して J 字状文を配する。区画内は単節 L R を充填している。2 は胴下半部の深鉢で縄文帯は J 字状文を施しているものと思われる。3 ~ 7 も 1 ~ 2 と同類系である。ただし 6 は縄文施文が反転しており、刻目の有する隆帯を垂下させている。

S K34 (F i g139-8~12) 8 は体部は筒状に立ち上がり、口縁部は内嚙して開く。口縁部は無文帯を巡らし、無文帯下には地文として無節 L を施す。9 は微隆帯に区画された無文帯を垂下させる。10 ~ 12 は沈線による区画内に縄文を充填させる。11 は条線文を施している。

S K46 (13~16) 13 は口縁部がぐの字状に外反する。口縁部は無文帯となり、縄文帯は J 字状を呈するものと考える。14 は口縁部を無文帯として、やはり J 字状文を施している。15 は平縁の深鉢で、口縁部を無文帯として 2 列の円形刺突文を施し、直下に沈線により区画され縄文施文されている。16 は胴部破片。沈線による区画された区画文内に縄文を充填させる。称名寺 1 式である。

S K56 (F i g139-17~26) 17 は平縁の深鉢。口縁部破片で円形区画内を条線で充填される。19 も平縁の深鉢。口縁部は無文帯で、鉗状の帯が巡る。この帯上にも縄文施文される。20 ~ 21 は微隆帯施文の土器で、20 は口縁部破片で、口縁部を無文として微隆帯により区画され、下位は縄文施文である。18 は波状口縁の土器で、3 本単位の櫛歯条線を垂下させる。22 は無文土器、23 ~ 25 、27 ~ 28 は称名寺式土器で、23 は沈線区画内に列点文を充填する。24 ~ 25 ~ 28 は J 字状文が施された土器である。26 は縄文施文の土器である。

S K58 (F i g140-1~9) 1 は波状口縁の深鉢で、波頂部には C 字状の沈線文が付されている。2 ~ 9 は称名寺式土器の破片で、2 のように口縁部は無文帯が巡り、沈線による縄文帯は J 字状文のような区画文を表出する。5 ~ 7 は微隆帯の伴う土器で、5 は口縁部がやや内嚙し、無文帯を形成し、さらに U 字状微隆起帯を施す。

S K59 (F i g140-10~14) 10 は平縁の浅鉢で、口縁部直下に沈線を一条巡らす。11 ~ 14 は称名寺 1 式で、縄文帯を垂下させる。

S K60 (F i g140-15~19) 15 は波状口縁を呈する深鉢で、口縁は外傾しながら開き、口唇部は内側に肥厚する。波頂部から沈線が口縁部に沿って走り、無文帯として、体部は全面単節 R L を施している。17 ~ 19 も沈線による区画文が設けられ、縄文帯と無文帯を明確に区別している。16 は微隆起線文によって口縁部と体部を区画している。

S K63 (F i g140-20~37) 20 は平縁の鉢形土器で、口唇部の先端が尖っている。口縁部を無文として、微隆起線文により区画されている。地文は単節 R L である。21 ~ 24 ~ 25 、27 ~ 29 は口縁部が無文となり、微隆起帯によって区画され、さらに U 字状微隆起線文が連繋する。22 ~ 23 ~ 26 は口縁が無文となり、沈線によって区画され、沈線による円形区画文が施される。30 は口縁部に凹帯を伴う隆帯が巡り、以下単節 R L を施す。31 は単節 L R を地文に沈線による区画文を施す。32 ~ 36 ~ 37 は縄文施文の土器。33 ~ 34 は波状口縁で、波頂部に C 字状貼付文が施され、34 は縄文区画文が表出されている。35 は沈線区画内は条線によって充填されている。

1～32は加曾利E 4式33～35は称名寺1式土器。

S K67 (F i g 141-1～4) 1～4はいずれも胴部破片。縄文帯が施された称名寺1式である。

S K68 (F i g 141-5～13) 5～10は平縁の深鉢で、胴部で括れ、口縁部は小さく内彎する。口縁部は沈線による楕円形区画内に無節しを充填し、下位に沈線区画文のJ字状文を施す。区画文には列点文と充填する。11～13は微隆起線文が施された加曾利E 4式で、11は口縁部が無文帶となり、12は逆U字状の微隆起線区画文が施されている。

S K72 (F i g 141-14～22) 14は体部は内彎し、口縁部が短かくくの字状に外反する。口縁部は無文となり、口縁部直下に鈍状の隆帯が一周する。さらに隆帯上に4単位の小突起が付く。体部は単節LRを施文する。15・16は波状口縁の波頂部破片。15は隆帯が巡り、沈線文が付隨する。17は口縁部破片で、口縁部直下に一条の沈線が巡る。18～22は称名寺1式土器の胴部破片。縄文帯によるJ字状文が施される。

S K75 (F i g 141-23～25) 23は平縁の深鉢で、口縁部直下は無文帶とし、体部は楕円形の磨消無文帶を配する。24は波状口縁で、口唇部に一条の沈線を巡り、口縁部は無文とし沈線により区画される。以下縄文施文に沈線区画が施される。25は単節LRを地文に沈線区画文が施される。

S K76 (F i g 141-1～26・27) 26は平縁の深鉢。口縁部は無文で沈線間で区画された横位文様帶に縄文が充填される。27は縦位の沈線区画内に無文帶と縄文充填が施されている。称名寺1式。

S K82 (F i g 142-1～14) 1は波状口縁を呈する深鉢。口縁部は小さく内彎し、4単位の把手が付く。把手は環状隆帯をなし、区画内に縄文施文している。体部は微隆起線文による楕円形文やU字状無文帶を施す。地文は単節RL施文である。2は胴上半分を欠損している。U字状微隆起線区画文が4単位施され、区画内に単節RLが充填している。区画外は無文である。3は体部が球形に近い形を呈しており、口縁部と底部を欠損している。口縁部を区画する微隆起線文は一条巡らし、以下単節LR縄文を施文している。4～6は2・3と同類で、微隆起線文を伴う、縄文施文の深鉢形土器である。7は口縁部がほぼ直線的に外傾し、口縁部直下に稜をもつ。8・9は称名寺2式で、沈線区画文を施し、9には列点文が充填される。10～11は称名寺1式で、縄文帶は渦巻状を呈している。12は無文の土器で、口唇部が内側にくの字に内傾する。13は深鉢の底部破片で、沈線文が底面近くまで施文されている。14は掘之内1式で平縁で地文に単節RLを縦位に施し、沈線文を加える。

S K84 (F i g 142-15) 15は波状口縁で、波状部に小突起が付されている。口縁部は無文となり、沈線区画内には縄文が充填している。称名寺1式。

S K88 (F i g 142-16～20) 16はC字状貼付が施された突部の破片である。17は平縁の深鉢で口唇部が肥厚している。口縁部は無文で沈線による円形区画文が施され、区画内に縄文を充填

する。18～20は称名寺1式土器破片である。帯縄文はJ字状を呈しているものと思われる。

S K91 (F i g 142-21～23) 21・22は外傾する深鉢で、無文帶の口縁部は沈線によって区画される。23も同様、無文帶と縄文帶を有する。

S K93 (F i g 143-1～5) 1は口縁部が内彎し、全面単節R Lを施す。2・3は称名寺1式土器で、いずれも沈線区画内に縄文を充填している。4はU字状微隆帶により区画され、区画内は単節R Lが充填されている。5は縄文施文の胴部破片。

S K96 (F i g 143-6～11) 6は口縁部を欠損する深鉢で、底部は小さく上げ底状をなし、胴部で括り、胴上半分は大きく外傾して開いていく。文様はU字状微隆起線文を垂下させ、区画文を構成し、無文化および縄文の充填を施す、区画外は全面縄文施文である。縄文は単節L Rである。7～9・11は沈線区画内に縄文が充填されるもので、8は列点文が施されている。10は継位条線文が施されている。

S K97 (F i g 143-12～19) 12～14は口縁部を無文帶として巡らし、12・13は沈線による区画を施し、以下縄文施文を行う。15は隆帶を巡らす。16～19はJ字状文を施すもので、沈線間には縄文を充填する。

S K102 (F i g 143-20～24) 20～22は沈線区画内に縄文が充填されるもので、20は波状口縁、21は平縁である。23は条線文を施す。24は深鉢の底部破片。

S K104 (F i g 143-25～27) 25は平縁の深鉢で、瘤状突起を付す。26・27は縄文施文の深鉢。28はくの字状に大きく開く。

S K115 (F i g 143-28～31) 28は波状口縁の深鉢。口縁部は無文帶で微隆起線文によって区画され、2列の刺突文を巡らし、縄文施文を施す。29・30は沈線区画内に縄文施文を充填する。30はJ字状文を施す。31は櫛齒状文を波状に垂下させる。

S K118 (F i g 144-1～4) 1はC字状貼付文の破片。2～4は沈線区画内に縄文施文が充填している。称名寺1式。

S K120 (F i g 144-5～13) 5は平縁の深鉢で、口縁部が稜やかに外傾しながら開く。口縁部直下は無文帶が巡り、沈線区画内に縄文施文が充填され、J字状文を作出している。さらに胴下半部に縄文帶が連繋してJ字状文を表出するものと思われる。6～9も5とほぼ同じ沈線区画内に縄文が充填している。10は口唇部が内側に内傾し、口縁部に沿って2列の刺突文が巡る。11・12は縄文施文の土器。13は条線文を垂下している。

S K128 (F i g 144-14～16) 14は平縁の深鉢。口縁部は内彎し、口縁直下から沈線区画内に縄文が充填される縄文帶が、口縁に並行して走り、さらにJ字状文に移行するものと思われる。縄文は単節L Rである。15も縄文帶が横走する。16は単節R L継位施文の縄文である。称名寺1式。

S K135 (F i g 144-17～22) 17は波状口縁で、波頂部に小凹部をもつ。また波頂部から口縁に並行して微隆起帶が施され、逆U字状区画文が施文され、区画内に縄文単節L Rが充填され

ている。18・20は沈線区画文を作出し、18は区画内、20は区画外に縄文を充填する。19・20は縄文施文の土器、19は口縁部破片である。

S K149 (Fig 144-23) 平縁の深鉢。底部からほぼ直線的に外傾して開き、口唇部で小さく外反する。口縁部は無文で、沈線によって区画され、以下5単位の櫛歯状文を波状垂下させる。

S K196 (Fig 145-1~5) 1は平縁の深鉢で、口縁部は無文とし、微隆起線文によって区画され、縄文地文上に円形刺突文が施される。2は口縁部破片で、口縁は無文、沈線によって区画され、以下縄文施文を行う。3・4は縄文施文の深鉢。5は底部に近い破片で、縦位の櫛歯状文を垂下している。

S K198 (Fig 145-6~10) 11は波状口縁で、口縁部は内彎する。口縁部に沿って縄文帯が巡り、それから連繋してJ字状文を作出する。沈線で区画された縄文は充填縄文で、単節RLである。12は平縁の深鉢で、口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁部は無文帯が巡り、沈線区画内に縄文が充填する縄文帯はJ字状文を摘出する。18・19も沈線区画内に縄文が充填し、J字状文、円形文を作出している。13は内彎する口縁部破片で、口縁部は無文帯で、2列の円形刺突文によって区画されている。15は突起部の破片で、C字状沈線文が施されている。14・17は微隆起線文によって区画されている。16・20は縄文施文。13・14・17は加曾利E4式。他は称名寺1式。

S K199 (Fig 145-21~25) 21・22・24・25は微隆起線文によって区画文が構成されている。23は口唇部が内彎して短く立ち上がる。口縁部に並行して円形刺突文が巡る。加曾利E4式。

S K200 (Fig 145-26~28) 26は口縁部が大きく外方に開き、口唇部が丸くなりながら肥厚する。平縁の深鉢。沈線区画内に縄文を充填する縄文帯を横位を基調として施文する。モチーフとしてはかなり崩れた形状を呈している。27は微隆起線文が施された深鉢で、口縁部を無文帯に体部に逆U字状無文帯が連繋している。28も微隆起線文が施文された深鉢。

S K204 (Fig 145-29~38) 29は波状口縁の頂部に把手が付けられている。把手は橋状把手で、この波頂部から口縁部に沿って微隆起線文の無文帯が巡り、さらに逆U字状に垂下する。区画内には縄文が施されている。30も口縁部が無文帯が巡り、微隆起線文によって区画され、以下縄文施文される。31・32は平縁の深鉢で、口縁部は無文帯で、沈線によって区画されている。34も洞部破片であるが同類である。35~38は沈線区画内に列点文が充填されるもので、35は口唇部に円形刺突文が巡り、36は波状口縁となる。また38は区画内に縄文が充填される。

S K207 (Fig 146-1~16) 1は口縁部は外傾しながら口唇部近くにおいてくの字状に内傾する。波状口縁の深鉢である。口唇部は3条の沈線を巡らせ、口縁部は単節LRを地文に2条1単位の沈線によってJ字状文を表出す。2は口縁部を無文とし、沈線によって区画された縄文施文が行われる。3・4は沈線による幾何学状文を描出し、区画内を縄文で充填する。5~8は沈線による曲線文を表出し、5は区画内を縄文で充填する。10・11は沈線による区画文を施す。

12は沈線により蕨手状に施文する。13は沈線により横位に流れる流水状文を呈する。15は胴部破片で、くの字状に内彎する。文様は刻目の有する隆帯を垂下させ、隆帯によって区画される。区画内は3本単位の沈線文を幾何学状に施文する。14は縄文施文の深鉢。16は深鉢の底部で、縄文施文。

S K21 (F i g 146-17~24) 17は波状口縁で、波頂部にC字状の貼付文が付く。口縁部に平行して2列の円形刺突文が施され、沈線区画内には縄文が充填する縄文帯が連繋する。18も波状口縁で、口縁に沿って沈線による区画文が施され、縄文が充填する。19~24も同類で沈線区画内に縄文充填が施されている。称名寺1式。

S K212 (F i g 146-25~29) 25は平縁の深鉢で、口縁部は無文帯が巡り、沈線区画により縄文充填の縄文帯がJ字状文を表出するものと考える。26~28も同類で、沈線区画内に縄文充填が施されている。21は微隆起線によって区画されている。25~28は称名寺1式。29は加曾利E4式。

S K218 (F i g 147-1~16) 1~9・12~16は称名寺1式で、いずれも沈線区画内に縄文充填が施され、J字状文が表出される。1は小突起を付し、口唇部が肥厚する。J字状に分かれることで、縄文帯が看取される。2も内彎する口縁部破片で、梢円形に近い縄文帯が対に施されている。3も1と同類である。5~9・12~15は大きな曲線を描くJ字状の文様を配しており、5・8・9・13~15はとくに明瞭である。また7はS字状の曲線文を表出している。10は無文。11は口唇部が小さく内彎する深鉢。縄文施文の土器である。

S K224 (F i g 147~17) 体部下半部で脹らみ、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる深鉢。口縁部は無文帯が巡り、無文帯を区画する鉗状隆起帯が巡る。隆帯には小突起が付く。体部は単節L Rを縦位施文している。

b) 石器 (第25図1~5)

御灵遺跡から出土した石器には、硬玉製大珠、小型磨製石斧、石鎌、石錐のほか、今回図示しないが、磨製石斧6点、打製石斧3点、磨製石器1点、礫器1点、磨石類31点、石皿4点が発見されている。なお第25図で示した石器類はいずれも複数層からの出土である。

硬玉製大珠 (第25図1) 完存品で、長さ7.6cm、幅3.2cm、厚さ2.6cmを測る。形状はいわゆる鰐節形で、中軸線に並行して一方が入念に研磨され、半月形に近い形態をもつ。なお研磨以外は自然面をそのまま残している。孔は中央部よりやや一方に偏在した位置にあり、直径0.9cmの孔部が一方の穿孔によって貫通している。素材は青緑色を呈する翡翠である。

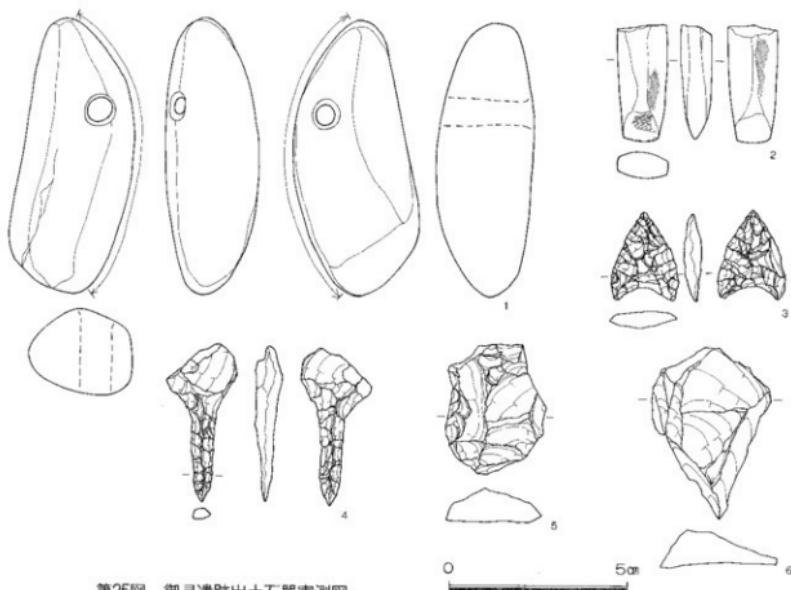
小型磨製石斧 (第25図2) ほぼ中間から折れ、刃部分が遺存している。現存長さ3.21cm、幅1.38cm、厚さ0.8cmを測り、刃部に細かな刃潰れが認められる。頁岩製である。

石鎌 (第25図3) 凹基式の石鎌で、基部の抉りはそれほど深くはなく、縁辺部はやや外彎する。長さ2.4cm、幅1.84cm、厚さ0.36cm、重さ1.60gを測る。チャート製である。

石錐（第25図4）縦長剝片を素材に、縁辺に細かな調整加工を施し、尖頭部は細かく長く作出している。長さ4.31cm、幅1.89cm、厚さ0.7cm、尖頭部長さ2.46cm、幅0.66cm、重さ3.02gを測る。チャート製である。

剝片（第25図5・6）いずれもチャート製で、縦長剝片である。調整加工は施されていない。

（小川）



第25図 御吳遺跡出土石器実測図



硬玉製大珠

弥生時代



第26図 宝積遺跡調査区全体図（弥生時代）

1. 発見された遺構と遺物

A) 宝積遺跡

本遺跡は、木田余遺跡群の北東端にあたり、霞が浦は南方に位置する。ここは東縁が大きく削平され急崖によって画されている。したがって霞が浦に面する東一南方は往時の景観を全く止めていない。反対に北方は大きな開発もなく、自然地形を永く保っている。小山崎に源を発する小河川は緩い蛇行を呈しながら霞が浦に注ぐが、この河口付近に宝積遺跡が立地している。ここ河口近くの地形はやや複雑で、大小支谷があり組んで緩い傾斜面が作られている。これは霞が浦に面する台地縁辺部が急斜面をなしているのと正反対である。北側からみれば奥深く長く延びた小支谷の谷頭に集落が形成されている。

一方後背地となる西一南方は広大な平坦部となっており、北西へ長く延びていく。しかし弥生時代の集落はこの東縁辺部に限定されるようである。標高は 25 ~ 27 m であり、南側の比高差は約 23 m、北側の比高差は 19 m を測る。本遺跡の調査はほぼ全面におよび、弥生時代の住居跡 30 棟のほか、古墳時代・歴史時代の住居跡や土坑、溝等が検出されている。

(1) 遺構

S I 01 (F i g 148)

調査区東端に存在し、東側大半を S I 11 によって切られている。平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸方位 (N - 23° - W) 4.58 m で、副軸方位で推定 3.95 m を測る。壁高は西壁で 11 cm 残存している。床面は貼床で、ロームを浅く掘り込み、さらにロームブロックと褐色土との混和土が貼られている。ピットは 4 本検出され、全て柱穴の機能を有している。径 20 ~ 40 cm、深さ 42 ~ 50 cm の円形ピットである。

炉址は主軸線上北寄りに配され、平面形は長軸 77 cm、短軸 60 cm の梢円形を呈する。深さ 12 cm で、皿状に窪む。焼土の厚さは 8 cm であった。

出土遺物はすくないが、床面上より壺および底部破片が検出されている。

S I 16 (F i g 148)

調査区東端に位置する。平面形は胴張りの方形を呈し、規模は主軸方位 (N - 48° - W) 3.94 m で、副軸方位で 3.40 m を測る。壁は全体に緩やかに外傾して立ち上り、壁高は 21 cm 程である。床面は貼床で、ローム面を掘り込み、さらにロームブロックと黒褐色土との混和土で貼られている。ピットは 5 本検出されており、うち住居対角線上の 4 本は主柱穴としての機能を有し、主軸線上のピットも入口部施設柱ではなく、補助柱として配されたものであろう。規模は主柱穴は径 28 ~ 35 cm で、深さ 40 ~ 64 cm である。また補助柱は径 30 cm、深さ 25 cm と浅い。炉址は主軸線上北寄りで、平面形は長軸 107.0、短軸 40.0 cm の長梢円形を呈している。また深さは 6 cm で皿状に窪む。本址覆土は、東方向からの流入土が主体で 6 層確認されている。自然埋土である。出土遺物は極端に少なく、壺破片 2 点検出されたに過ぎない。

S I 19 (F i g149)

調査区東端、北東約%は崩落して未調査である。平面形は橢円形を呈するものと思われる。現存の主軸方位と考えられる南北方向の長軸は11.05 mを測り、大型住居であることがわかる。主軸方位はN - 59° - Wを指す。壁はほぼ垂直に立ち上り、壁高59 cm程である。床面は貼床で、ローム面を掘り込み、ロームブロックを主体に貼床面を構築しており、全体堅緻である。ピット類は16本検出されているが、いずれも本住居の規模から考えて主柱穴となるものではなく、壁周縁に配される径20 cm前後、深さ15 ~ 25 cmの小ピットは、支柱穴と考えられ、さらに南壁中央に集中する支柱穴は恐らく出入口部に伴う施設と思われる。炉址は確認されていない。覆土は8層に分かれたが、1 ~ 4層まではいわゆるレンズ状の堆積状態を示している。自然埋土であろう。出土遺物は多く、第2層黒色土層でまとまって出土している。紡錘車2点が出土している。

S I 29 (F i g150)

調査区の南東隅に位置するやや大型の住居跡である。平面形は隅丸長方形で、北側が薄く壁の検出が明瞭ではないが、床面は堅緻で全体の形状は明らかである。長軸9.27 m、短軸6.90 mを測る。主軸の方位はN - 41° - Wを指す。壁高は全体に低く、南壁で17.0 cm、東・西壁で9.0 cm、北壁では確認できなかった。ピットは全部で22本検出され、主柱穴は径30 cm、深さ50 cmの大きさの円形ピットが現存で3本確認されている。また壁に接して構築されている壁柱穴は径25 ~ 30 cm、深さ30 cm前後をはかるもので、14本穿ってある。他は支柱穴である。炉址は住居ほぼ中央に配している。長径98.0 cm、短径73 cmの橢円形の地床炉である。深さは10 cmあり、覆土内に焼土の堆積がみられる。出土遺物はやや多く土器破片および底部破片が検出されている。

S I 34 (F i g151)

調査区中央やや東寄りに位置する。平面形は隅丸方形で、各壁共やや弓形に張りだしている。主軸長5.93 m、横軸長5.65 mを測る。主軸方位はN - 16° - Eを指す。壁はロームを深く掘り込んでいて、ほぼ垂直に立ち上る。壁高は30 cmである。周溝は北壁を除き、東・南・西壁で検出された。幅25 ~ 35 cm、深さ7 ~ 10 cmでしっかりと床面に掘り込んでいる。ピットは4本検出され、いずれも柱穴としての機能を有している。規模は径30 ~ 45 cm、深さ25 ~ 55 cmとバラツキがみられる。床面は貼床で、ロームを掘り込んで構築しており、ロームブロックをベースに堅く踏み固めている。とくに内区は堅緻である。炉址は主軸線上北寄りに配している。長径89 cm、短径58 cmの橢円形の地床炉である。深さは12 cmあり、炉内の下底部には焼土が約5 cm堆積している。覆土は6層に分かれ、1 ~ 3層はレンズ状堆積で自然埋土である。出土遺物は少量であるが、小片が9片出土した。

S I 36 (F i g151)

調査区北側に位置する。平面形は方形で、主軸長3.58 m、横軸長3.78 mを測る。主軸方位はN - 107° - Wとほぼ東西方向を指している。しかし、炉址の検出がないため、出入口部施設ピットの配されている東辺を主軸線上とした。壁高は8 cmと低く、やや外傾しながら立ち上る。ビッ

トは6本検出された。主柱穴は4本で、いずれも径20cm前後、深さは20~28cmと浅い。また支柱穴として北壁に接して、径25cm、深さ38cmが穿ってある。さらに東壁辺には径35cm、深さ23cmの出入口部施設ピットが配される。床面は全体に軟弱で、わずかに住居中央部で堅く踏み固められている。出土遺物は少ないが、床面上においてまとまった壺形土器が出土している。

S I 37 (F i g 152)

調査区の北側に位置する。平面形は梢円形で、主軸長5.80m、横軸長4.61mを測る。主軸方位はN-57°-Wを指している。壁高は南壁で27cm、北壁で8cmと北側へ傾斜し、やや外傾しながら立ち上る。ピットは18本検出された。主柱穴となるものは4本で、径30~38cm、深さ38~54cmである。また西壁際には径20cm前後、深さ10cm前後の壁柱穴が10本が集中して穿っている。また東壁中央やや北寄りに径31cm、深さ15cmの出入口部施設の梯子穴が配してある。床面はロームを掘り込んだ素掘り床面で、全体に堅いが炉址を中心とした床面上は良く踏み固められている。

炉址は主軸線上北寄りに位置し、長径81cm、短径63cmの梢円形を呈し、深さわずか8cmで5cmほど焼土が堆積していた。出土遺物は床面上より壺破片を中心に比較的多く出土している。

S I 38 (F i g 152)

調査区の北寄りに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸長6.03m、横軸長5.19mを測る。主軸方位はN-25°-Wでほぼ北方に向く。壁は北壁および東壁が垂直気味に立ち上るのに対して、南壁・西壁は外傾しながら立ち上る。壁高は49~56cmと比較的高さがある。周溝は東壁南側約1/3、西壁南側約1/2に掘り込まれている。幅25~47cm、深さ10cm前後である。ピットは7本検出されたが、住居対角線上の4本は主柱穴で、東西に長く掘り込んでおり、長径45cm前後、短径35cm前後、深さ55~70cmを測る。また南隅に2本の壁柱穴が、さらに南壁中央東寄りに径35cm、深さ18cmの出入口部施設の梯子穴が穿ってある。床面は貼床で、ロームを深く掘り込み、ロームブロックを主体とする土で堅く貼っている。とくに炉址周辺は顯著である。

炉址は主軸線上北寄りに配されるが、長径1.43m、短径0.83mの梢円形を呈し、深さわずか7cmで、南側に焼土が集中して堆積していた。覆土は5層に分けることができるが、いわゆるレンズ状を呈し、自然埋土である。出土遺物は多く、床面上よりまとめて出土している。

S I 41 (F i g 153)

調査区中央北寄りに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、主軸長4.66m、横軸長3.50mを測る。主軸方位はN-31°-Wを指している。壁は北壁・東壁は床面からほぼ垂直に立ち上り、南壁・西壁は外傾しながら立ち上る。ピットは6本検出され、住居跡の対角線上に位置する4本のピットが主柱穴である。柱穴の規模は径20cm、深さ30~60cmとバラツキがみられる。また南壁やや西寄りのピットは出入口部施設の梯子穴で、径20cm、深さ18cmである。床面はロームを掘り込み、上面に若干ロームブロック粒子を敷き締めていた。

炉址は確認できなかった。覆土は4層に分かれ、自然埋土である。出土遺物は少ないが比較的

良くまとまっている。

S K44 (F i g 153)

調査区中央北寄りに位置する。平面形は隅丸方形で、南壁がやや弓形に張りだしている。主軸長 6.11 m、横軸長 5.99 m を測る。主軸方位は N - 3° - E ではば北方に向く。壁は南壁が床面から垂直に立ち上る以外、他壁は緩やかな外傾で立ち上る。ピットは 5 本で、住居の対角線上に 4 本の主柱穴が配している。規模は東西に長く、長径 50 cm 前後、短径 25 cm 前後で、深さは 60 ~ 100 cm とかなりしっかり構築している。また南壁中央に径 30 cm、深さ 16 cm のピットは出入口部施設の梯子穴である。

床面は貼床で、ローム面を掘り込んで、さらにロームブロックを丁寧に張っている。炉址周辺を中心によく踏み固められており、堅緻である。炉址は主軸線上北寄りで長径 84 cm、短径 75 cm の梢円形を示す。深さは 8 cm で被熱による赤化現象がみられる。覆土は 4 層で、いずれもレンズ状堆積を示しており、自然埋土である。出土遺物は小片であるが比較的多く、床面近くよりよろよろと出土しており、紡錘車 1 点が検出された。

S I 45 (F i g 154)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形はほぼ円形で、長径 4.55 m、短径 4.51 m を測る。主軸方位は炉址の位置から考えて、N - 88° - E を指す。壁高は全体的に浅く床面から 15 cm 程度で、緩く外傾しながら立ち上る。ピットは 6 本検出されているが、住居対角線上に配される 4 本が主柱穴である。規模は径 15 ~ 25 cm、深さ 20 cm の円形ピットである。

床面はローム面を若干貼床している。炉址は東よりに配され、長径 76 cm、短径 70 cm のほぼ円形を呈している。深さは 12 cm で、焼土が約 5 cm 程堆積していた。出土遺物は床面上より完形の壺形土器 1 点をはじめ、小片が出土している。

S I 47 (F i g 154)

調査区中央やや西寄りに位置する。北側約半分は削平され、床面および壁は検出できていない。平面形は推定で、円形もしくは梢円形を呈し、現存長径 4.50 m、短径 4.26 m を測る。主軸方位は炉址の配置関係からみて、N - 63° - E を示す。壁高は南壁で 9 cm と低く、緩やかに外傾しながら立ち上る。ピットは 3 本確認され、いずれも柱穴と思われるが、北側に配する柱穴は径 57 cm、深さ 44 cm の二段掘りピットである。また残り 2 本は径 25 cm、深さ 50 cm と 25 cm である。床面はロームを掘り込んだ素掘り床面であるが、炉址周辺を中心に堅緻でよく踏み固められている。炉址は東寄りに配され、長径 49 cm、短径 44 cm の梢円形を呈し、深さはわずかに 5 cm を測るのみである。炉覆土には焼土が薄く堆積している。出土遺物は少量であるが、床面上より小片が 4 点出土している。

S I 49 (F i g 155)

調査区南西端に位置する。北側を古墳時代前期の住居跡 S I 50 によって切られている。平面形は隅丸長方形で、南壁がやや弓形に張り出している。主軸長 6.23 m、横軸長は現存で 3.78 m、

推定 5.50 m を測るものと思われる。壁は確認できる北・西・東壁は緩く外傾しながら立ち上り、壁高は 16 cm の高さをもつ。周溝は西壁、北壁および東壁北壁より続き、幅 25 cm、深さ 8 cm でしっかりと掘り込んでいる。ピットは 4 本検出され、いずれも住居跡の対角線線上に配され、主柱穴である。大きさは径 30 cm 前後、深さ 48 ~ 59 cm の円形ピットである。床面は貼床でロームを掘り込み、さらにロームブロックと褐色土を混和土にして貼っている。

炉址は主軸線上北寄りに配されている。規模は長径 92 cm、短径 74 cm の楕円形を呈し、深さは 9 cm で、炉床面は被熱により赤化している。出土遺物は小片が少量出土している。

S I 54 (F i g 155)

調査区南西端に位置する。平面形は長方形で、若干四隅が丸みをもっている。主軸長 6.23 m、横軸長 5.65 m を測る。主軸方位は N - 15° - W で北方に向く。壁は東壁および西壁がほぼ垂直となるほかは、緩い外傾で立ち上る。壁高は約 28 cm 前後である。ピットは 4 本検出され、いずれも住居跡の対角線上に配されており、主柱穴の機能を有している。大きさは各柱穴とも小さく径 20 ~ 35 cm、深さは北西柱穴が 30 cm と浅い他は、いずれも 80 ~ 90 cm と深く穿っている。床面はロームを掘り込んで構築されており、わずかにロームブロックを敷きつめた貼床状を呈している。炉址は主軸線上北寄りに位置する。大きさは長径 84 cm、短径 59 cm 楕円形をなし、深さは 15 cm で、摺り鉢状に掘り込んである。炉内には焼土の堆積がみられ、炉床に被熱を受けて赤化している。出土遺物は多く、完形の壺形土器を含め、大型破片が出土している。

S I 67 (F i g 156)

調査区西端に位置する。平面形は不正長方形で、南西隅が丸みをもっている。主軸長 3.91 m、横軸長 4.42 m と炉の配置からみて横長住居跡である。したがって主軸方向は N - 13° - W とほぼ北方に向いている。壁は全体的に浅く、やや傾斜をもしながら立ち上っている。壁高はわずかに 7 cm を測るにすぎない。ピットは 8 本検出され、内住居跡の対角線上の 4 本は主柱穴と思われる。大きさは径 17 ~ 30 cm とバラツキがみられるが、ほぼ同じ形態を呈している。深さは 80 cm 前後と深い。その他ピットは径 30 cm 前後、深さ 30 ~ 40 cm で支柱穴であろう。

床面はロームを掘り込んで構築しており、素掘りの床面である。炉址は主軸線上北側に位置し、大きさは長径 66 cm、短径 54 cm の楕円形を示す。深さは 14 cm と浅く、炉内には焼土の堆積がみられ、炉床は赤化して堅緻である。出土遺物は少なく、小片が 3 点検出されたにすぎない。

S I 70 (F i g 157)

調査区西側に位置する。平面形は北隅が若干丸みをもつ大型の長方形で、主軸長 8.11 m、横軸長 5.92 m を測る。主軸方位は N - 43° - W を指している。壁は北壁側がほぼ垂直となるほかは、緩い外傾を呈し、壁高は平均で 35 cm 前後の高さである。ピットは 4 本検出され、それぞれ住居跡の対角線上に配され、主柱穴である。大きさは径が広く 60 ~ 70 cm を測る。また深さは 60 ~ 75 cm とやはり全体的に深くなっている。床面は薄い貼床面を呈し、ロームを掘り込んだ後、ロームブロックと黒褐色土の混和土で貼って構築している。炉址は主軸線上中央よりやや南寄り

に配している。炉の規模は長径 123 cm、短径 87 cm の橢円形を呈し、深さは 18 cm で炉内部には焼土が多量に堆積していた。炉底はスリパチ状で被熱による赤化が著しく堅緻である。覆土は 5 層に分かれ、それぞれ自然埋土である。出土遺物は比較的多く、小片のみ出土している。

S 172 (Fig 158)

調査区北西端に位置する。平面形は隅丸長方形で、南西隅が古墳時代の住居跡 S I 71 によって切られている。規模は主軸長 6.96 m、横軸長 6.23 m を測る。主軸方位は N - 18° - W を指している。壁は低く、全体に緩く外傾しながら立ち上る。壁高は平均 17 cm 前後である。周溝は東壁および南壁東寄りの一部に限定されている。幅 14 ~ 20 cm、深さ 7 cm で、溝底は丁寧に掘り込まれている。ピットは 5 本で住居跡対角線上の 4 本は主柱穴である。大きさは径 40 ~ 50 cm、深さ 60 ~ 80 cm で南東柱穴が若干浅くなっている。また南壁中央やや東寄りに径 45 × 60 cm、深さ 21 cm の出入口部施設の梯子穴が配されている。床面は薄い貼床で、ロームを掘り込んだ後、ロームブロックを薄く敷きつめて貼床としている。炉址は主軸線上北寄りに配され、大きさは長径 90 cm、短径 59 cm の橢円形を示す。深さはわずか 5 cm で炉底はほぼ平坦に近く、焼土が少量堆積しているにすぎなかった。出土遺物は少ないが、大型破片がみられる。

S 173 (Fig 156)

調査区北西端に位置する。平面形は隅丸長方形で、住居跡としては最も整った形態を呈している。主軸長 4.35 m、横軸長 4.10 m を測る。主軸方位は N - 3° - E とほぼ北に向いている。壁は全体に緩い外傾で立ち上り、壁高は 35 cm 前後の深さである。ピットは 5 本検出され、内住居跡の対角線上に位置する 4 本は主柱穴で、径 30 ~ 40 cm、深さ 50 ~ 60 cm である。また主軸線上南壁寄り径 30 cm、深さ 18 cm のピットは出入口部施設の梯子穴と考える。床面はロームを掘り込んで構築しており、さらに薄い貼床状で仕上げている。貼床はロームブロックを薄く敷きつめて堅く踏み付けている。

炉址は主軸線上北寄りに配され、大きさは長径 63 cm、短径 47 cm の橢円形を示す。深さは 9 cm で炉内には多量の焼土が堆積していた。炉床は赤化し堅緻である。覆土は 4 層に分けるが、いずれも自然堆積土を呈している。出土遺物は多く完形に近い壺形土器を含めて、床面うえより出土している。

S 174 (Fig 159)

調査区北西端に位置する。平面形は大型の橢円形を呈し、主軸長 9.22 m、横軸長 7.05 m を測る。主軸方位は N - 49° - W を指している。壁は全体に緩く外傾して立ち上る。壁高は南壁がやや高く 35 cm、北壁がやや低く 15 cm の高さである。ピットは 5 本検出され、住居跡の対角線上の 4 本が主柱穴になるものと思われる。大きさは径 60 ~ 90 cm、深さは 70 ~ 90 cm を呈し、いずれも大きくて深く穿ってある。また南側の主柱穴に挟まれて径 30 × 45 cm、深さ 43 cm の小ピットが配されている。これは梯子穴の位置としては南壁から 2 m 近くも離れているため、4 本柱を支える支柱穴と考えられる。床面は薄い貼床で、ロームを掘り込んだ後、ロームブロックを薄く

敷きつめている。炉址の周辺は堅綴でよく踏み固められている。炉址は主軸線上の北寄りに配され、長軸を主軸に対して直交している。大きさは長径 90 cm、短径 63 cm の楕円形を示している。深さはわずかに 4 cm で、明瞭な掘り込みはみられないが、被熱による赤化と薄層の焼土の堆積が観察できる。出土遺物は比較的多く、小片であるがやや多量に出土しており、紡錘車 1 点が検出された。

S I 75 (F i g 160)

調査区北西端に位置する。平面形は隅丸長方形で、主軸長 6.27 m、横軸長 5.46 m を測る。主軸方位は N - 7° - E とほぼ西を向く。南壁が垂直に立ち上る他は、緩やかな外傾で床面から立ち上る。壁高は平均して 25 cm 前後である。周溝は西壁のみ確認でき、幅は 17 ~ 27 cm、深さ 5 cm と若干浅くなっている。ピットは 4 本で住居跡の対角線上に配し、主柱穴である。大きさは径 25 ~ 35 cm、深さ 30 cm 前後とほぼ同じような形態を呈している。床面はロームを掘り込んで構築しており、一部に貼床面が確認できる。ロームブロックを貼りつめたもので全体に薄層である。炉址は主軸線上北寄りで、長径 145 cm、短径 85 cm の楕円形を示している。深さはわずか 5 cm で、浅い摺り鉢状の掘り込みがみられる。炉内部には焼土の堆積があり、炉床にも被熱による赤化が認められる。覆土は 5 層に分かれ、いずれも自然埋土である。出土遺物は少ないが、まとまりある出土を呈している。

S I 76 (F i g 160)

調査区北西部に位置する。平面形は隅丸長方形で、南壁がやや弓形に張りだしている。主軸長 5.67 m、横軸長 4.87 m を測る。主軸方位は N - 11° - W とほぼ北に向いている。壁は全体的に緩く外傾して立ち上り、壁高は平均して 50 cm 前後と深く掘り込まれている。ピットは 6 本検出され、住居跡の対角線上の 4 本が主柱穴である。大きさは径 22 ~ 32 cm、深さ 65 ~ 75 cm と比較的のしっかりと構築されている。残り 2 本は北西柱に接して穿ってあり、径 25 cm、深さ 32 cm と浅く支柱穴と考えられる。床面はロームを深く掘り込んでおり、一部にロームブロックを敷きつめた貼床面が確認でき、全体によく踏み固められて良好である。炉址は主軸線上の北側に配され、規模は長径 80 cm、短径 56 cm の楕円形の地床炉であり、深さはわずか 7 cm 炉内部には焼土の堆積が認められ、炉床面は火熱による赤化で、堅綴である。覆土は自然埋土である。出土遺物は比較的多く、床面近くより多くの遺物が出土している。

S I 78 (F i g 161)

調査区西側に位置する。平面形は長方形で、主軸長 4.78 m、横軸長 4.42 m を測る。主軸方位は N - 43° - W を指している。壁はローム層を浅く掘り込んで構築しており、全体に緩い傾斜で床面より立ち上る。壁高は平均で 20 cm である。ピットは 4 本検出されており、それぞれ住居跡の対角線上に配され、主柱穴として機能を有している。大きさは径 28 ~ 35 cm、深さ 42 ~ 68 cm と細くて長い柱穴である。床面はロームを掘り込んでおり、一部ロームブロックと褐色土の混和土を貼床材として薄く敷きつめていて、炉址を中心とした内区は堅綴で、よく踏み固められてい

る。炉址は主軸線上北寄りに位置し、長径 117 cm、短径 55 cm の楕円形の地床炉である。深さは浅く、約 10 cm で皿状に掘窪めている。炉内部には焼土が堆積し、炉床は被熱により堅緻である。覆土は自然埋土である。出土遺物は少ないが、床面より壺底部が出土している。

S I 79 (F i g 161)

調査区西端に位置する。平面形は楕円形で、主軸長 5.06 m、横軸長 4.55 m を測る。主軸方位は N - 7° - W と北に向いている。壁はローム層を浅く掘り込んで構築しており、垂直に近い角度で床面から立ち上っている。壁高は平均して約 25 cm の深さで、若干南側が深くなっている。ピットは 6 本検出されているが、住居跡の対角線上の 4 本が主柱穴である。主柱穴の大きさは南西柱が大きく径 40 cm、深さは 50 cm である。一方他の 3 本は径が 25 cm 前後、深さ 60 ~ 80 cm と径の割に深くなっている。また主軸線上南壁際に径 30 cm、深さ 56 cm の出入口部施設の梯子穴が穿ってある。床面はロームを掘り込んでおり、一部貼床面が残置している。ロームブロックを薄く敷きつめた貼床で、堅緻でよく踏み固められている。炉址は主軸線上北寄りに配し、長径 95 cm、短径 72 cm の楕円形を呈する地床炉である。深さは 9 cm で皿状に掘窪めている。炉内部には焼土の堆積がみられ、炉床は火熱により堅緻である。覆土は自然埋土である。出土遺物は床面上より壺が出土しており、紡錘車 1 点が検出された。

S I 81 (F i g 162)

調査区西端に位置する。平面形は隅丸方形で、主軸長 5.81 m、横軸長 5.69 m を測る。主軸方位は N - 28° - W を指している。壁はロームを掘り込んで構築しており、全体に若干の外傾をもちらながら床面から立ち上る。壁高は平均で 35 cm 前後の深さである。ピットは 9 本検出されており、住居跡の対角線上の 4 本は主柱穴である。主柱穴の大きさは径 25 ~ 45 cm で北西柱穴が大きく広がっている。また深さは 65 ~ 72 cm とほぼ同じ深さを保っている。炉址と反対側の主軸線上南寄りに径 25 cm、深さ 15 cm の出入口部施設の梯子穴が穿ってある。さらに主柱穴間に径 20 ~ 30 cm 前後、深さ 10 cm 前後の小ピットがある。小さくて浅いため、支柱穴ではなく、建物構造物の施設柱と思われる。周溝は西壁北側 1.3 m 程掘り込んで溝としている。幅は 15 cm、深さ 5 cm を測るのみである。

床面はロームを掘り込み構築されているが、全体に薄い貼床が施されており、ロームブロックを敷きつめている。とくに炉址の位置する内区では堅緻でよく踏み固められている。炉址は各軸線上に 2 ケ所あり、北側に位置する炉址は、長径 100 m、短径 90 cm の不正円形の地床炉である。また西寄りに位置する炉址は、長径 112 cm、短径 50 cm の楕円形を呈する地床炉である。これら 2 ケの炉址とも浅く深さはそれぞれ 7 cm と 5 cm を測るのみである。いずれも炉内に焼土の堆積があり、炉床は被熱による赤化が認められる。なおこの 2 ケ所はほぼ同時使用された可能性がたかく、西炉址の使用頻度は極端に少ないと想われる。覆土は自然埋土である。出土遺物は多く、床面上より壺のほか、手捏土器の出土がある。

S I 83 (F i g 162)

調査区北側に位置する。本跡の北側では古墳時代の住居跡 S I 77 が接して構築されている。平面形は隅丸方形で、主軸長 5.02 m、横軸長 4.76 m を測る。主軸方位は N - 27° - W を指している。壁はロームを浅く掘り込んで構築しており、南壁がほぼ垂直となる他は、外傾して床面から立ち上っている。壁高は南壁が高く、42 cm を測るのに対して、北壁では 14 cm しかない。ピットは 5 本検出されている。うち住居跡の対角線上に配する 4 本は主柱穴で、大きさは径 33 ~ 60 cm で、南西柱穴が他の 3 本より若干小さい。また深さは 83 ~ 89 cm とほぼ同じ深さである。残り 1 本は南壁際や東寄りに径 35 cm、深さ 30 cm の出入口部施設の梯子穴が穿ってある。床面はロームを掘り込んで構築しており、さらに薄い貼床面で仕上げている。貼床はロームブロックを薄く敷きつめて堅く踏み固めている。

炉址は主軸線上北寄りに配されており、大きさは長径 92 cm、短径 54 cm の梢円形の地床炉である。深さは 10 cm で、浅い皿状に掘り窪めている。炉内には焼土が堆積し、炉床は被熱による赤化で堅く結まっている。覆土は自然埋土である。出土遺物は少ないが、床面上より完形の壺をはじめ胴下半部の土器がほかに 2 点出土している。

S I 96 (F i g 163)

調査区南西端、10 号古墳墳丘下で検出された。平面形は隅丸長方形で、主軸長 5.11 m、横軸長 4.47 m を測る。主軸方位は N - 41° - W を指している。壁は全体に緩い外傾で立ち上り、壁高は平均で 23 cm 前後の深さである。ピットは 7 本検出されている。住居跡対角線上の 4 本は主柱穴で、大きさにバラツキがみられ、北側の 2 本は径 23 cm、深さ 45 cm • 60 cm であり、南側の 2 本は径 39 cm、深さ 45 cm • 64 cm である。また主軸線上の北側と南側にピットが配され、北側は径 34 cm、深さ 10 cm である。また反対の南側では径 30 cm、深さ 45 cm の円形ピットは出入口部施設の梯子穴である。この梯子穴下に貯蔵穴と思われる径 56 × 62 cm、深さ床面より 17 cm を測る小土坑が配されている。

床面はロームを掘り込んだ後、ロームブロックを薄く敷きつめた貼床構造で、本跡内区においてよく踏み固められていた。炉址は主軸線上北寄りに配され、長径 98 cm、短径 44 cm の長梢円形の地床炉である。深さは 10 cm で鍋底状に掘窪めている。覆土は自然埋土である。出土遺物は小片のみわずかに出土しており、他に紡錘車 1 点が出土している。

S I 100 (F i g 163)

調査区西端に位置する。平面形は長方形であるが、北辺に比べ南辺が 50 cm 程長くなっている、若干台形に近い形状を呈している。主軸長 4.44 m、横軸長 3.51 m を測る。壁は短く立ち上り、北壁および東壁がほぼ垂直となる他は、緩く外傾している。壁高は平均約 17 cm である。ピットは 3 本検出されているが、住居跡の対角線上に 3 本とも配されており、通常 4 本が主柱穴の基本となるものの、ここでは 3 本柱の住居形態となるようである。柱穴の大きさは径 30 ~ 35 cm、深さ 35 ~ 50 cm である。床面は薄い貼床で、ロームを掘り込んだ後、ロームブロックを薄く敷きつ

めて貼床としている。炉址は住居跡のほぼ中央部に位置する。長径 59 cm、短径 42 cm の東西に長い楕円形を呈し、深さ 10 cm で、皿状に掘り込んでいる。炉内に焼土が堆積し、炉床には被熱による赤化が認められる。覆土は 3 層に分かれ、いわゆるレンズ状の堆積状態を示し、自然埋土である。出土遺物として床面から壺の出土がある。

S I 107 (Fig 164)

調査区西端に位置する。南側で古墳時代の住居跡 S I 103 によって切られている。またローム面の掘り込みが浅いため、確認面での壁はすでに削平され、全く検出できなかった。したがって平面形は不詳である。わずかに貼床面が残置しており、これから判断すると長軸約 4.40 m、短軸 3.90 m を測る。主軸方位は N - 9° - E を指すものと思われる。壁は削平され、その痕跡すらみられない。ピットは 5 本検出され、住居跡の対角線上に 3 本の柱穴が配されている。これは主柱穴と思われる。主柱穴の径は 22 ~ 30 cm、深さいずれも 20 cm 前後と浅い。残り 2 本は南柱穴間に位置する。径 27 cm、深さ 24 cm で支柱穴と思われる。床面は貼床で、ロームブロックを薄く敷きつめて貼床面としている。炉址は住居中央部に位置し、長径 80 cm、短径 56 cm の楕円形を示す。深さは 5 cm と浅く、炉床は赤化し堅緻である。出土遺物は少なく、炉内焼土中より土器の小片が出土している。

S I 109 (Fig 164)

調査区西端に位置する。ちょうど 11 号古墳周溝によって中央部が切られている。平面形は長方形で、主軸長 6.00 cm、横軸長 5.49 cm を測る。主軸方位は N - 34° - W を指している。壁は浅く全体が外傾して立ち上る。壁高は南壁が 34 cm と高く、北壁が 12 cm と低くなっている。ピットは 7 本検出されており、住居跡の対角線上の 4 本は主柱穴である。この主柱穴の規模は径 30 cm 前後、深さ 50 ~ 60 cm である。また主軸線上に 2 本のピットが並んで穿ってある。北寄りのピットは径 27 cm、深さ 17 cm の支柱穴である。また南寄りのピットは径 28 cm、深さ 50 cm を計り、出入口部施設の梯子穴と思われる。さらに梯子穴下には 104 × 50 cm、深さ 14 cm の台形を呈した貯蔵穴が配されている。床面はロームを掘り込んで構築しており、さらに薄い貼床状に仕上げている。貼床はロームブロックを薄く敷きつめて堅く踏み固めている。

炉址は古墳周溝によって切られている。出土遺物は床面上より壺が出土している。

遺物

本遺跡の弥生時代住居跡より出土した遺物には、弥生土器と土製品である紡錘車がある。

a) 土器

弥生土器はすべて後期末葉に位置付けられている上稲吉式土器である。各住居跡より出土しており、住居跡ごとに説明を加えたい。

S I 01 (Fig 165-1 ~ 2) 1 は壺の口縁部破片で、頸部で括れ、口縁部は小さく内湾して立ち上る。口唇部は付加条の繩文を施し、口縁直下は無文帶として巡らしている。以下付加条の

縄文を施文する。また棒状工具による刺突文を二条巡らし、刺突文列間に瘤状小突起を付ける。頸部は無文帯となろう。2は壺の底部破片。木葉痕を残置している。

S I 02 (F i g 165-3~7) 3~5は壺の頸部下位の破片である。付加条の縄文を施している。6は底部周辺、7は底部破片。やはり付加条の縄文を施文している。

S I 16 (F i g 165-8・9) 8は壺の頸部下位、9は胴部下位の破片である。いずれも付加条の縄文を施している。

S I 19 (F i g 166-1~17) 1は壺で底部から緩いカーブを描きながら、胴部で小さく脹み、頸部で括れ口縁部では大きく外反する。口縁部は複合口縁で、口唇部および口縁部は付加条の縄文を施し、更に口縁部下端には縄原体の端部を連続して押圧し、波状を呈している。頸部は無文帯を巡らし、胴部は全面左燃りの付加条の縄文を施している。2は壺で胴中央部で脹み、頸部で緩やかに括れ。口縁部は外反する。口縁部は無文帯、頸部から胴部は全面付加条の縄文を施す。3は壺で、最大径は胴部中央部にあり、肩部は全く脹ららず、口縁部は大きく外反する。口縁部は付加条の縄文を施し、口縁部下端は棒状工具により連続押捺压痕を加え波状を呈する。口縁部下は無文帯とし、さらに横走する櫛描文が一条巡る。以下は無文帯とし、加えて櫛齒状工具による鋸歯状文を施す。下位は沈線を一条巡らし区画している。4は壺で、底部から緩いカーブを描きながら脹み、頸部で小さく括れる。器面の粗が著しいが、頸部は無文帯を残し、胴部は全面付加条の縄文を施す。底面には木葉痕を残している。5は大型の壺で、最大径が胴部中央部にある。口縁部端と胴下半部は欠損する。口縁部下は無文で、頸部は付加条の縄文帯を施し、区画するように櫛描文を一条巡らす。肩部には沈線区画による鋸歯状文を施す。この沈線区画内には幾何学文が充填されている。胴部には付加条縄文が施されている。6は大きく外反する口縁部破片で、口縁部下は付加条の縄文が施されており、頸部にまず波状を呈する櫛状文、下位に櫛描文による鋸歯状文を施す。7・8は壺の口縁部破片。7は折返した口縁部に付加条縄文を施し、口縁下は無文帯を巡らし、瘤状突起を付し、更に付加条の縄文を施文する。8は折返り口縁は無文帯として、口縁下は付加条縄文を施文する。9・10は肩部破片。付加条縄文を施文する。11は口縁部下に縄原体の端を押捺し、頸部は継位の櫛描文を垂下させる。12は櫛描文を継位に施文し、下位に付加条縄文を施す。13~17は底部破片。いずれも付加条縄文を施文し、14~17は底面に木葉痕を残置している。

S I 29 (F i g 165-10~20) 10は壺の口縁部破片で、大きく外反している。無文である。11は頸部破片で、頸部を無文とし、下位に付加条の縄文を施している。12~16も頸部から胴部にかけての破片で、いずれも付加条の縄文を施文している。17~19は頸部付近の破片で、櫛齒状工具による櫛描文を横走させる。20は壺の底部破片で、外面は底面まで付加条の縄文を施し、底面には木葉痕を残置している。

S I 34 (F i g 165-21~29) 21は壺の口縁部破片。口縁部に付加条の縄文を施し、下端に棒状工具による押圧痕が施されている。22も口縁部破片、大きく外反し、無文である。23~26は

頸部付近から胴部にかけての破片である。23・24は頸部を無文として胴部に左撫りの付加条縄文を施している。25も付加条の縄文を羽状に施している。26は櫛歯状工具による櫛描文を横位波状に施している。27～29は底部の破片である。27・28は底部縁まで付加条の縄文を施している。29は底面に木葉痕を残置している。

S 136 (F i g 167-1～3) 1は壺の口縁部である。口縁部は頸部から外傾しながら立ち上がる。口唇部に付加条縄文を押捺し、口縁部は複合口縁で、羽状縄文を施文する。口縁部下端には棒状工具により押捺した刻み目を連続して巡らし、頸部も羽状縄文とする。原体は付加条の縄文である。2も壺で胴下半部を欠損する。最大径は胴部中央に位置し、肩部は内彎して括れ、頸部から口縁部は外反する。口縁部は複合口縁で、付加条縄文を施し、頸部は無文帯とする。肩部は折返部を呈し、付加条縄文施文下位は棒状工具を押捺し、刻目を巡らす。さらに無文帯を残し、胴部は付加条縄文を施文する。3は壺の胴部破片。付加条縄文を施文する。

S 137 (F i g 167-4～14) 4～7は壺の口縁部破片。4は口縁部が大きく外反し、口唇部は肥厚する。口唇部下端は棒状工具による押捺を加え、波状を呈している。頸部は無文。5・7は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部で小さく外反する。口縁部は複合口縁で付加条縄文を施文し、口縁下に押捺痕を施す。頸部は左撫りの付加条縄文を施す。6もほぼ同様、口縁下に突起を有する。8は頸部破片で、口縁部下端に刻目を巡らし、頸部は櫛描文を縦位に施文する。9～11は頸部から胴部破片で、9は頸部は無文であり、胴部に付加条の縄文を施している。12・13も頸部付近の破片で、櫛描文を横位、縦位、鋸歯状文を施す。14は壺の底部破片。底面に木葉痕を残置している。

S 138 (F i g 167-15～21) 15は壺で最大径を胴部上位に位置する。底部から直線的に外傾し、頸部で緩やかに内彎して括れ、頸部から外反しながら立ち上がる。口縁部と胴部は付加条の縄文施文。頸部は無文帯を巡らす。16は壺の頸部破片。頸部に刺突のある円形貼付文をもち、地文に櫛描文を横走させる。17も頸部付近の破片。頸部を無文帯とし、口縁部と胴部は付加条を縄文を施文する。18・19・22・23は胴部破片。付加条の縄文を施文する。20・21は底部破片。付加条縄文を施文し、底面に木葉痕を残置している。

S 141 (F i g 168-1～7) 1は壺で、胴下半部を欠損する。胴部に最大径をもち、小さく内彎しながら、口縁部は緩やかに外反する。口縁部は複合口縁で縄文施文し、口縁下には瘤状突起を3個1単位を4単位巡らす。体部と同様縄文施文。2は胴下半部の壺で、全面付加条縄文を施文する。3は壺の口縁部破片で、櫛描文を弧状に施す。5は複合口縁の壺で、口縁部は付加条縄文を施す。4・6は胴部破片。付加条縄文を施している。7は底部破片。付加条縄文を施文する。

S 144 (F i g 168-8～27) 8～10は口縁部破片で、複合口縁を呈している。付加条縄文を施し、8は口縁部下端に瘤状突起を付せる。11～21は頸部もしくは肩部破片である。11は付加条縄文を地文に沈線による鋸歯状文を横走させる。12は頸部を無文とし、下位を付加条の縄文

を施している。13・14・18・19は羽状縄文を呈している。20・21も12と同様、頸部を無文とし、口縁部および肩部に付加条の縄文を施している。22～27は底部破片、底面縁まで付加条縄文を施し、27は底面に木葉痕を残置している。

S 145 (F i g 168-28~32) 28は底部から直線的に外傾して開き、最大径は胴部上位にもつ。頸部で括れ、口縁部はくの字状に外反する。口唇部に付加条縄文を施す。口縁部から底面までヘラナテ調整を施している。29～31は胴部破片で、付加条縄文を施している。32は底部破片で、付加条の縄文を施している。

S 147 (F i g 169-1~4) 1は壺の口縁部破片。口縁部は外反し、付加条の縄文を施す。2～4は胴部破片。いずれも付加条の縄文を施し、2・3は羽状を呈している。

S 149 (F i g 169-5~11) 5・6は口縁部破片で、5は複合口縁を呈し、口唇部および口縁部に付加条の縄文を施す。7～10は胴部破片で、いずれも付加条の縄文を施す。10は羽状を呈している。11は底部破片である。

S 154 (F i g 169-12~19) 12は壺で、底部から直線的に胴部へ外傾して立ち上がり、最大径を胴部上位にもつ。頸部から括れながら口縁部は外反する。口唇部は棒状工具による押捺を加えた刻目文を巡らし、口縁部は無文帯をなし、さらに口縁部下端は棒状工具による刻目を一周させる。また口縁部下端には3個1単位の瘤状突起を4単位施す。頸部の無文帯を挟んで口縁下と胴部は付加条縄文を施す。13も壺で胴下半部を欠損する。最大径は口縁部にあり、頸部は緩やかな括れで、口縁が外反する。口唇部は付加条の縄文を施し、口縁部は無文帯とする。口縁部下端に刻目を一条巡らし、体部は付加条の縄文を施す。14も口縁部で、口縁部を無文とし、口縁下は棒状工具による刻目を巡らし、瘤状突起が付いている。15～18は胴部破片で、いずれも付加条の縄文を施し、16・18は羽状縄文を呈している。19は胴部下半部の土器で、付加条の縄文を全面に施す。

S 167 (F i g 169-20~22) 20は口縁部破片。付加条の縄文を施す。21は複合口縁をもつ壺で、口縁部は大きく外反する。口縁部に付加条の縄文を施す。22は胴部破片で、付加条の縄文を羽状に施している。

S 170 (F i g 170-1~11) 1～5は口縁部破片で、1は壺で、複合口縁を呈する。口唇部に刻目を有し、口縁部は付加条の縄文を施し、瘤状突起を貼付けている。2～5は付加条縄文を施す。6～11は胴部破片。6は頸部付近に柳描状文を波状に横走させ、胴部は縄文を施す。7は無文帯下位に付加条の縄文を施す。9は羽状を呈している。

S 172 (F i g 170-12~14) 12は胴上半部の破片である。肩部付近に単節LRを施す下にS字状の結節縄文を施している。13は頸部から胴下半部の破片。胴部は緩やかに内寄し、頸部で括れる。付加条の縄文を羽状に施している。14は底部破片で、付加条縄文を施す。底面は木葉痕を残置している。

S 173 (F i g 170-15~22) 15は底部を欠損する壺で、底部からほぼ直線的に外傾して立ち

上がり、胴部上位で脹らみ、頸部で括れ、口縁部は緩やかに外反する。口唇部に棒状工具による刻目を巡らし、口縁部は付加条の繩文を羽状に施文し、ほぼ中央に円形刺突文を一条施し、刺突文上に2個1単位の瘤状突起を付ける。頸部は無文帶で、胴部は付加条の繩文を施文する。16も壺で頸部付近の破片である。頸部を無文帶とし、口縁部と胴部は付加条の繩文を施す。17は壺の胴下半部の土器で、全面付加条の繩文を羽状に施文している。18～20は胴部破片。いずれも付加条の繩文を施文し、19は羽状を呈している。21・22は底部破片である。

S 174 (Fig 171-1~16) 1・2は口縁部破片で、1は口縁部を付加条の繩文施文で、口縁部下端に繩文原体を連続して押捺している。頸部は無文である。2は複合口縁で、無文帶を呈し、口唇部は棒状工具による押捺を加え、口縁部下端も押捺痕を施し波状としている。3～10は胴部破片で、3～5は頸部は無文であり、胴部には付加条の繩文が施されている。6・7・9は付加条の繩文を羽状に施す。8は頸部無文帶に櫛描文を弧状に施文し、胴部には付加条繩文を施している。11～16は底部破片で、11・13～16は底部縁まで付加条繩文を施す。また11・12は底面に木葉痕を残置している。

S 175 (Fig 171-17~19) 17は壺の口縁部破片である。頸部から細く外傾して立ち上がる。口唇部は棒状工具による刻目を施す。口縁部は複合口縁で、口縁部は無文帶で瘤状突起を一条巡らす。口縁部下端は棒状工具による刻目文を等間隔に施し、胴部は付加条繩文を羽状に施文する。18は頸部を無文帶とし、胴部は付加条の繩文を施している。19は底部破片である。付加条の繩文を底部縁まで施している。

S 176 (Fig 171-20~29) 20は壺で最大径を胴部中位にもつ。脹みある胴部から頸部で括れ、口縁部は大きく外反する。複合口縁で、口縁部は付加条の繩文を施し、口縁部下端は棒状工具による刻目を巡らし、2個1単位の瘤状突起を8単位貼付けている。頸部の無文帶下に付加条の繩文を羽状に施している。21も口縁部破片で、口唇部が繩文原体の端を押捺し、一条巡らし、口縁部は付加条の繩文を施している。22～27は胴部破片である。22は無文帶の下に付加条の繩文を施す。24は付加条繩文を羽状に施文する。28・29は底部破片で、いずれも底面に木葉痕を残置している。

S 178 (Fig 171-30~34) 30は胴下半部の壺で、羽状を呈する付加条の繩文を施し、底面は木葉痕を残置している。31～34は胴部破片で、いずれも付加条の繩文を施す。32は付加条の繩文を羽状に呈している。

S 179 (Fig 172-1~5) 1は壺で最大径は胴部中位にある。胴部は脹り、頸部で緩く括れながら口縁部が外反する。口唇部は棒状工具による刻目を巡らす。口縁部から胴部はヘラナデで整形されている。2～4は口縁部破片で、2・3は複合口縁を呈する壺である。2は複合口縁で、口縁部には付加条の繩文を施し、棒状突起を付ける。3も壺で、口唇部に繩文原体の押捺痕を巡らす。口縁部は無文とし、口縁部下端は棒状工具による刻目を施し、瘤状突起2個1単位を貼付ける。4は付加条の繩文を施文する。5は底部破片で、付加条の繩文を施文する。

S I 81 (F i g 172-6~12) 6は口縁部を欠損する壺で、胴部は球形を呈しながら頸部へ括れる。胴部上位で結節縄文によって下位を区画し、羽状縄文を施す。現存施文は上から単節L RとR Lを交互に4段横方向に施している。胴部下半部は斜方向のヘラ磨きされている。底面には木葉痕を残置している。7も同様、胴上半部の破片で、胴部は球形を呈している。結節縄文で上端を区画した縄文帯が巡るもので、縄文帯は羽状になるが、上部より単節R LとL Rを施文している。縄文帯上部はヘラ磨きが施されている。8~11も胴部破片で、8は頸部を無文帯として、付加条の縄文を施す。9・11は羽状を呈している。12は手捏土器で、粗製のミニチュア土器である。楕形を呈し、指頭圧痕により造り出している。

S I 83 (F i g 172-13~15) 13は壺で、底部から直線的に胴部まで移行し、胴部で緩く脹りながら頸部で括れ、口縁部は細長く外反する。口唇部は付加条の縄文を施し、口縁部は無文帯をなし、口縁部下端は円形刺突文を巡らし、2個1単位の瘤状突起を4単位貼付ける。口縁部下と胴部は付加条の縄文を施し、頸部を無文とする。14も壺で口縁部を欠損する。胴部は緩やかに脹り、頸部で括れる。頸部は無文帯で、胴部は付加条の縄文を施す。15も胴下半部の壺で、全面付加条の縄文を施文する。

S I 96 (F i g 173-1~9) 1は壺の口縁部破片で、口唇部に棒状工具による刻目を巡らす。口縁は無文帯である。2~9は胴部破片で、2・3は頸部を無文に胴部は付加条の縄文を施す。2は羽状を呈する。4・8・9も付加条の縄文で羽状を呈する。

S I 100 (F i g 173-10~13) 10は壺で口縁部を欠損している。最大径を胴部下位にもち、胴部を球形を呈し、頸部で括れ、口縁部はくの字状に外反する。頸部には円形貼付文が付され、肩部には3段の縄文帯が巡る。羽状を呈し、上部より単節L RとR Lを交互に横方向で施文する。11も同様羽状縄文を4段施文している。12・13は付加条の縄文で、13は羽状に施している。

S I 107 (F i g 173-14~18) 14~17は壺の胴部破片で、いずれも付加条の縄文を施し、14は頸部が無文帯とする。15は羽状を呈している。18は底部の破片。付加条の縄文を施し、底面には木葉痕を残置している。

S I 109 (F i g 173-19~23) 19は底部から直線的に外傾して、胴部で脹らみ、頸部で括れながら、口縁部は緩やかに外反する。頸部は無文帯として、口縁部と胴部は左撲りの付加条の縄文を施す。20・21も同様。頸部は無文帯にし、下位に付加条の縄文を施文する。22・23も胴部破片、付加条の縄文を施文するが、23は3段の羽状を呈している。

(小川)

B) 東台遺跡

本遺跡は木田余台遺跡群の南東方向で霞ヶ浦を南に望む。ここはほぼ平坦な台地面が広範囲に拡がり、南縁辺部が緩傾斜する。標高は26~27mで、現水田面からの比高差は約21mである。

当初本遺跡は縄文時代の集落および土坑群の調査としてすすめられてきたもので、この土坑群に挟まれるように弥生時代の集落が形成されている。本来縄文土坑を壊しながら住居建築が行なわれたものであり、弥生集落が主体となって良いはずである。しかし、ここで縄文土坑が中心

となった理由の一つに古墳の築造が挙げられる。つまり、円墳である1号墳、前方後円墳である2号墳の营造に伴って多くの弥生住居が古墳築造のために削平された可能性が高いからである。したがって大半の弥生住居は少なくとも壁上面が大きく削られ、壁高そのものが低くなり、出土遺物の量も少なくなってしまったのであろう。逆に深度の深い縄文土坑のみが多数残置する結果となったのである。

今回の調査で弥生時代の住居跡は全部で11棟検出することができた。すべての所属は後期後半の時期に限定され、少なくとも1～2時期の短期間における営みと考える。調査された住居をみると調査区全体に広がるように集落形成が行なわれている。

(1) 遺構

S 101 (F i g 174)

調査区の東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、南西壁がやや弓形に張りだしている。主軸長4.53m、横軸長4.23mを測る。主軸方位はN-62°-Eを指している。壁は北西壁側がほぼ垂直に立ち上るのに對して、他の壁は外傾しながら床面より立ち上る。壁高は平均して25cm前後である。ピットは4本検出されており、住居跡対角線上に配され、主柱穴である。主柱穴の大きさは北側柱穴が最も小さく、径22cm、深さ60cmであり、他の主柱穴は径30cm前後、深さ50～72cmである。床面は貼床で、ロームを掘り込んで構築しており、ロームブロックをベースに堅く踏み固められている。とくに内区は堅緻である。炉址は主軸線上北寄りに位置し、長径70cm、短径62cmの楕円形を呈する地床炉である。深さは12cmあり、炉内部には6cm程焼土が堆積し、炉床は赤化で堅くなっている。

覆土は4層に分けられ、いずれも自然埋土である。出土遺物は壺形土器の小片がわずかに出土している。

S 103 (F i g 174)

調査区中央南端に位置する。およそ1/2は未調査である。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸長5.60m、横軸長は確認面のみで2.20mを測る。主軸方位はN-32°-Wを指す。壁はロームを掘り込んで構築しており、確認面全体に若干の傾斜をもちながら立ち上る。壁高は約20cmである。ピットは1本のみ検出されており、径23cm、深さ45cmで北壁隅に配している。床面はロームを掘り込んで構築されており、部分的に貼床が施されている。貼床はロームブロックと褐色土を混和土にして貼っている。出土遺物は図示できていないが、弥生壺形土器の小片が2点ほど出土している。



第27図 東台遺跡調査区全体図（弥生時代）

S I 12 (F i g 175)

調査区の南西端に位置する。南壁部分は古墳周溝によって切られている。平面形は長方形を呈し、確認面における主軸長7.13m、横軸長5.13mを測る。主軸方位はN-45°-Wを指している。壁はロームを掘り込んで構築されており、全体に大きく外傾しながら床面から立ち上る。壁高は低く、わずかに8cmである。ピットは4本検出され、うち南壁寄りに穿ってある1本は住居跡の対角線上からはずれるもので、主柱穴ではないであろう。主柱穴3本の大きさは、最も大きな西柱穴は、径82×62cm、深さ42cmの二段掘を呈している。また、北柱穴は径65cm、深さ32cmである。さらに東柱穴は径36cm、深さ58cmを測る。床面はロームを掘り込んで構築しており、さらにロームブロックを薄く敷きつめた貼床で、堅緻でよく踏み固められている。炉址は主軸線上北寄りに位置し、長径94cm、短径64cmの楕円形を呈する地床炉である。深さは8cmで皿状に掘窪めている。炉内部は焼土の堆積がみられ、炉床は被熱による赤化がみとめられ、堅緻である。覆土は自然埋土である。出土遺物は小型の鉢形土器のほか小片が出土している。

S I 16 (F i g 176)

調査区のほぼ中央部に位置する。東壁隅が古墳周溝によって切られている。平面形は長方形を呈し、主軸長7.69m、横軸長6.75mを測る。主軸方位はN-53°-Wを指している。壁はロームを掘り込んで構築されており、北壁側がほぼ垂直となる他は、緩く外傾しながら立ち上る。ピットは29本検出されたが、主柱穴は住居跡の対角線上に4本配された柱である。主柱穴は南側柱穴2本が二段掘りを呈し、計85cm、深さ59cmで、北側2本が径48cm、深さ52～70cmである。また北西壁面および南壁隅に径20～30cm、深さ30～50cmの小ピットが集中して穿ってある。床面は貼床で、ロームを掘り込んで構築しており、ロームブロックをベースに堅く踏み固めている。とくに炉址周辺は堅緻である。炉址は主軸線上北西側に位置する。長径105m、短径89cmの楕円形を呈する地床炉である。深さは9cmで鍋底状に掘り込んでいる。炉内部には焼土の堆積が認められ、炉床には被熱による赤化で、堅緻となっている。覆土は4層に分けることができ、自然埋土を呈している。出土遺物は覆土中より壺底部や胴部等多量に出土している。

S I 17 (F i g 175)

調査区北側に位置する。本跡の大半は中世の特殊遺構(S X 1)によって切られ、わずかに西隅壁が検出されたのみである。平面形は方形もしくは長方形で、残置床面の規模は南北2.89m、東西3.05mである。壁はわずかに掘り込まれて構築されている。床面はロームを掘り込んで構築されており、貼床面を呈している。貼床はロームブロックと褐色土の混和土によって貼られている。ピットは2本検出されており、主柱穴と思われる西壁寄りの柱穴は、径36×45cm、深さ30cmを測り、また南壁に接して径60cm、深さ75cmの円形ピットが穿ってある。出土遺物は小片のみ出土している。

S I 20 (F i g 177)

調査区北端、宝積遺跡に接して構築されている。平面形は隅丸長方形で、主軸長6.63m、横

軸長 5.39 m を測る。主軸方位は N - 56° - W を指している。壁は南壁および北壁が垂直に立ち上るのに対して、西壁・東壁は若干外傾しながら立ち上る。壁高は平均して 20 cm 前後である。ピットは 4 本検出されており、いずれも住居跡の対角線上に配され、径 28 ~ 40 cm、深さ 63 ~ 75 cm を呈する主柱穴である。床面はロームを掘り込んで構築されており、わずかにロームブロックを敷きつめた貼床状を呈している。炉址は主軸線上北西寄りで、長径 53 cm、短径 42 cm の楕円形の地床炉である。深さは 9 cm で、皿状をなし、炉内部には焼土が約 5 cm 程堆積し、炉床は赤化し堅緻である。覆土は自然埋土で、出土遺物は比較的多く、小片であるが壺形の口縁部や底部が出土している。

S I 21 (F i g177)

調査区北端、S I 20 に隣接して構築されている。平面形は隅丸長方形で、南東壁が若干弓形状に張りだしている。主軸長 5.37 m、横軸長 4.86 m を測る。主軸方位は N - 60° - W を指している。壁は北西壁がほぼ垂直となる他は、緩く外傾しながら立ち上る。壁高は平均して 27 cm 前後である。ピットは 5 本検出されている。住居跡の対角線上の 4 本は主柱穴で、大きさは径 20 ~ 30 cm、深さ 30 ~ 45 cm である。また南東壁中央部に長径 80 cm、短径 33 cm、深さ 20 cm の楕円形ピットがあり、出入口部施設の梯子穴と思われる。床面はロームを掘り込み構築されているが、全体に薄い貼床が施されており、ロームブロックを敷きつめている。とくに炉址の位置する内区では堅緻でよく踏み固められている。炉址は主軸線上の北西寄りに配され、長径 55 cm、短径 50 cm の楕円形を呈する地床炉である。深さは 10 cm の鍋底状を呈し、炉内部に焼土が多量に堆積し、炉床は赤化し、堅緻である。覆土は自然埋土である。出土遺物は大型の壺形土器が出土している。

S I 34 (F i g178)

調査区南西端に位置する。平面形は隅丸長方形で、南東壁が若干弓形状に張りだしている。規模は主軸長 6.95 m、横軸長 6.30 m を測る。主軸方位は N - 60° - W を指している。壁は全体的に低く、緩く外傾しながら立ち上る。壁高は平均約 11 cm を測るのみである。ピットは 9 本検出されており、主柱穴は不規則で、柱穴間が南壁側で幅広く、北壁側は幅狭くなっている。すなわち南壁側では 4.3 m、北壁側では 2.5 m である。また大きさは径 18 ~ 40 cm、深さ 34 ~ 52 cm である。また北壁に接して支柱穴が 3 本検出されており、径 22 ~ 39 cm、深さ 12 ~ 18 cm を測る。さらに柱穴間にも小ピットが穿ってあるが、やはり支柱穴であろう。床面はロームを掘り込んで構築しており、一部貼床面が残置している。ロームブロックを薄く敷きつめた貼床で、堅緻でよく踏み固められている。炉址は主軸線上北西寄りに配し、長径 214 cm、短径 69 cm のちょうど瓢箪形を呈した地床炉である。炉の掘り込みは浅くわずか 5 cm である。焼土の堆積はほとんどなく、被熱による赤化部分が広がっているのみである。覆土は自然埋土である。出土遺物は床面上り高壺形土器のほか、壺底部の出土がある。

S I 35 (F i g 178)

調査区西端に位置する。平面形は隅丸方形で、北側約1/4程は擾乱を受けている。確認面での主軸長径4.90m、横軸長4.40mを測る。壁は緩く外傾しながら立ち上る。壁高は南壁で25cm、北壁で13cmを測る。主軸方位はN-32°-Wを指している。ピットは6本検出されており、うち断面図で表した2本が主柱穴である。いずれも二段掘りされ、立て替えもしくは拡張が行なわれていたと示している。大きさは径49～53cm、深さ51cmである。なお北西のピットも主柱穴と考える。径30cm、深さ45cmである。また南壁寄り、主軸線上に2本のピットが穿ってある。柱穴間のピットは径35cm、深さ15cmで外側に傾斜して穿ってある。出入口施設の梯子穴である。さらに壁寄りのピットは径40×60cm、深さ35cmの長方形を呈し、貯蔵穴と思われる。床面はロームを掘り込み構築されているが、全体に薄い貼床で施されている。貼床はロームブロックと褐色土の混和土で貼っていた。炉址はすでに削平されたものと考える。覆土は自然埋土である。出土遺物は比較的多く、壺・高环形土器が出土している。

S I 38 (F i g 179)

調査区北西端に位置する。北西部はすでに工事の関係から削平されている。したがって南側約1/4程の検出である。平面形は隅丸長方形で、主軸長4.76m、現確認面の短軸2.10mを測る。主軸方位はN-45°-Eを指している。壁はロームを掘り込んでかなりしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上っている。壁高は南壁側で42cmを測る。周溝は南壁および西壁に掘込んでいる。幅は17～22cmで、深さ6cmである。ピットは検出面で3本確認でき、東側では径30cm、深さ35cmである。また西側では2本接して穿ってあり、径35×50cm、深さ50cmの二段掘り柱穴と径30cm、深さ67cmの柱穴があり、いずれも主柱穴と考えられる。床面はロームを掘り込んで構築されており、ほぼ平坦でよく踏み固められていた。一部貼床面も確認でき、ロームブロックを薄く敷きつめていた。炉址は検出できなかった。覆土は自然埋土である。出土遺物は少量であるが床面近くより出土している。

S I 39 (F i g 179)

調査区北西端に位置する。ここは14号墳周溝により、北側約1/4程が切られている。平面形は隅丸方形で、主軸長5.99m、現確認面の短軸4.05mを測る。主軸方位はN-61°-Wを指している。壁は全体的に薄く、やや外傾しながら立ち上っている。壁高は平均して約8cmである。周溝は南壁際に掘込んでおり、幅15～20cm、深さ5cmで丁寧に掘削されている。ピットは7本検出されており、住居跡の対角線上に配する3本が主柱穴と思われる。南側に位置する主柱穴は2個一対で西側は径35cm、深さ25cmと60cmである。一方南側も2個一対で径30cm、深さ25cmと70cmとそれぞれ深度では相互に対応されている。また北側の柱穴は径32cm、深さ70cmである。以上はいずれも主柱穴で拡張もしくは立て替えが行なわれていた可能性が高い。なお南西壁中央および北東壁中央に配したピットはそれぞれ径30cm前後、深さ20cm前後で出入口部施設の梯子穴と考える。おそらく立て替えもしくは拡張時に出入口部を変更したのかもしれない。床

面はロームを掘り込み構築されているが、全体に薄い貼床が施されており、ロームブロックを薄く敷きつめている。とくに炉址付近では堅く踏み固められている。炉址は主軸線上北西側に配されており、長径 168 cm、短径 92 cm の不正橢円形の地床炉である。深さは 7 cm で皿状に掘窪めている。炉内部には焼土の堆積がみられ、炉床は被熱による赤化が著しく堅敏である。覆土は自然埋土である。出土遺物は少なく、壺形土器の小片と紡錘車 1 点が出土しているにすぎない。

遺物

本遺跡の弥生時代住居跡より出土した遺物には、弥生土器と土製品の紡錘車がある。

a) 土器

弥生土器はすべて後期末葉に位置付けられている上稻吉式土器である。各住居跡より出土しており、住居跡ごとに説明を加えたい。

S I 01 (F i g 180-1~4) 1・2 は胴部破片で、1 は頸部を無文帯とし、下位は付加条縄文を施す。3・4 は底部破片で、3 は底面縁に至まで付加条の縄文を施文している。またいずれも底面に木葉痕を残置している。

S I 12 (F i g 180-5~9) 5 は底部から緩いカーブを描きながら口縁部へ移行する鉢である。体部は全面付加条の縄文を施す。底面に木葉痕を残置している。6~8 は胴部から底部にかけての破片で、付加条の縄文を施す。9 は底部破片である。木葉痕を残置している。

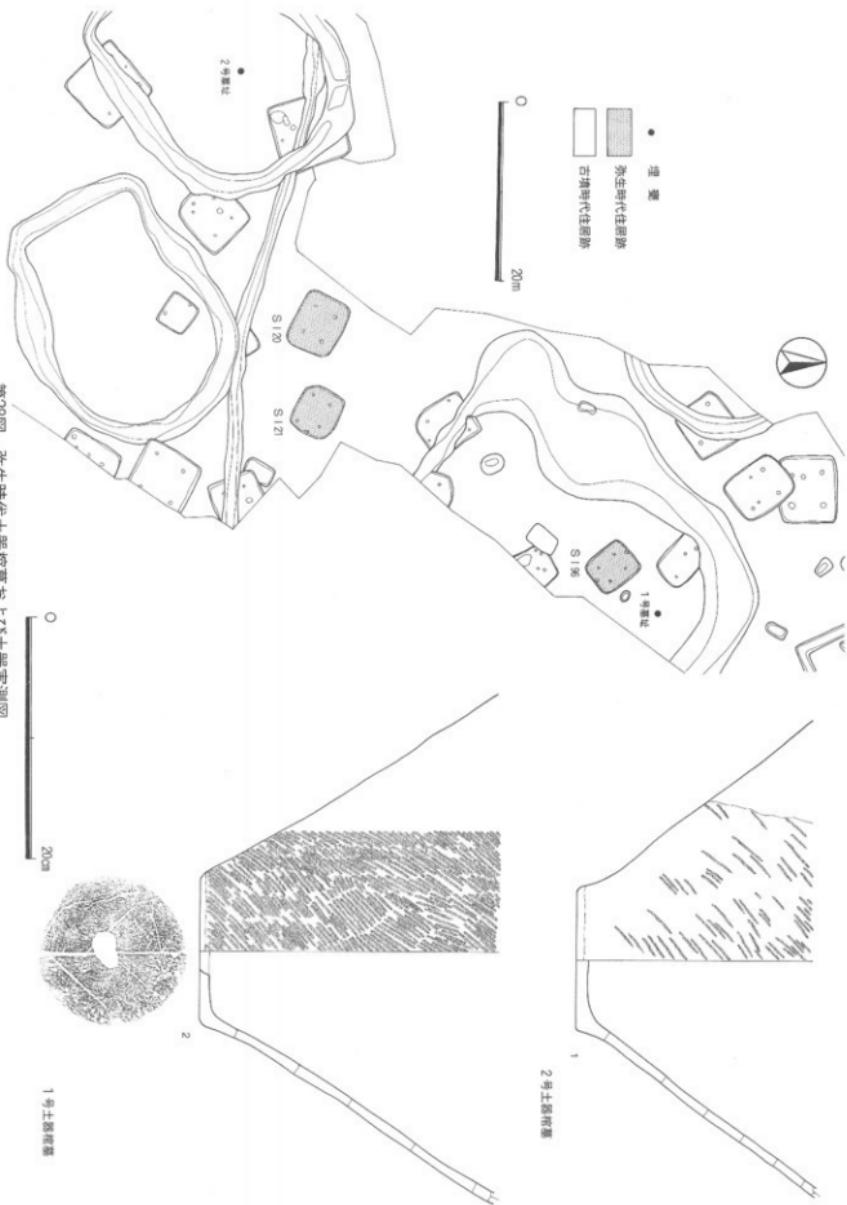
S I 16 (F i g 180-10~33) 10 は口縁部の破片で、口縁部下端に棒状工具による押捺が施され、瘤状突起が付されている。11~13 は頸部を無文帯とし、下位を付加条の縄文を施文する。14 は頸部破片で、櫛描文を横走させる。15 も櫛描文を横走させ、下位に付加条縄文を施す。16~28 は胴部破片で、いずれも付加条の縄文を施す。16~20 は羽状を呈している。29~33 は底部破片である。29 は小型台付の壺と思われる。器面に付加条の縄文を施文している。30~32 は付加条の縄文を施文し、底面は木葉痕を残置している。

S I 17 (F i g 181-1~4) 1~4 は胴部破片で、1 は結節縄文で下位を区画した縄文帯が巡るもので、単節 L R を施文している。2 は頸部を無文帯として、下位を付加条縄文を施す。3 は付加条縄文を羽状に施している。

S I 20 (F i g 181-5~19) 5~9 は口縁部破片である。5・6 は口縁部に付加条の縄文を施し、口縁部下端に瘤状突起を付ける。7 は口縁部の付加条縄文施文上に瘤状突起が付す。9 は口縁部は無文帯で、口縁部下端部に棒状工具による刻目を巡らす。10~18 は胴部破片で、10 は頸部を無文帯とし、下位を付加条縄文を施文する。12~14 は羽状に施している。19 は底部破片。

S I 21 (F i g 20~24) 20 は口縁部破片で、頸部から大きく口縁部は外反する。口縁部は付加条縄文を施文し、頸部は無文帯とする。下位は羽状を呈する付加条の縄文を施す。21 は壺の胴部破片。全面に付加条の縄文を施文する。22 も壺の胴部破片で、羽状を呈する付加条の縄文を施す。23・24 は底部破片で、24 は大型の壺と思われる。底面に木葉痕を残置している。

第28図 弓生時代土器相場および土器実測図



S I 34 (Fig 182-1~4) 1は小型の高壺で、脚部は小さく、壺部は大きく外傾して開く。壺部の口唇部および口縁部は付加条の縄文を施し、脚部は縦位のヘラナデで成形している。2は壺の口縁部破片。口唇部に縄文原体を押捺し、口縁部下端部は棒状工具による刻み目を巡らす。3・4は底部破片で、底部縁まで付加条の縄文を施し、底面には木葉痕を残置している。

S I 35 (Fig 182-5~11) 5は壺の口縁部破片で、口唇部に小さな押捺痕を巡らし、口縁部は付加条の縄文を施す。口縁部下端部では瘤状突起を貼りつける。6は高壺の下半部である。脚部は小さく作出し、壺部は外傾に大きく開く。壺部および脚部に付加条の縄文を施す。7~11は脚部破片で、7は頸部が無文帶をなし、下位に付加条の縄文を施す。10・11は付加条の縄文が羽状を呈し、11は5段の羽状縄文帯がみられる。

S I 38 (Fig 182-12~15) 12は壺の頸部破片で、櫛描文が縦位区画を設け、横位の波状櫛描文が充填する。13も同様に、櫛描文を縦位に施し、下位に付加条の縄文を施す。14は壺の胴部破片で、4段の付加条の縄文帯を交互に施す、羽状としている。15は底部破片で、木葉痕を残置している。

S I 39 (Fig 182-16~18) いずれも胴部破片で、16は頸部を無文帶とし、下位を付加条の縄文を施す。17・18は付加条の縄文を交互に施す、羽状効果をあげている。

(2) 土器棺墓（第28図）

本遺跡において2例の土器棺墓が検出された。いずれも底面に近い土器棺の身のみの出土である。

1号墓址（第28図1）前方後円墳である10号墳の後円部下部で検出された。掘り込みは土器底部とまったく同じ規模で、径42.5cm、深さ21.0cmを測る円形土坑である。土器はこの土坑内に埋設されていた。

土器は、大型の壺形土器で、底部のみ出土している。現存高19.6cm、底径11.3cmを測り、器面は著しく粗く、剥離している。全体に付加条の縄文を施している。

2号墓址（第28図2）やはり前方後円墳である6号墳の後円部真下で検出された。掘り込みは径45.0cm、深さ34.5cmの円形土坑で、この中に埋設されていた。土器は大型の壺形土器で、底部のみの出土である。現存高24.9cm、底径10.17cm測り、器面は付加条の縄文を施し、底部には木葉痕を残置している。また底部中央部に径1.8×3.1cmの孔が穿ってあり、故意に穿孔したもので、焼成後土器棺として使用するための穿孔行為である。

（小川）

古 墳 群

東台古墳群（F i g 183）

東台古墳群は、木田余台遺跡群の南西方から南東方にかけておよそ 400 m の範囲に分布する市内でも有数の古墳群である。本古墳群については古くから知られていたわりにその実態が明らかにされなかった理由の一つに、全ての古墳の墳丘が削平されていたからである。わずかにその所在が確認されていたのは主体部である箱形石棺が露出していた御灵遺跡内に所在する 1 基（17 号墳）と東台遺跡の北東方に位置する 3 基（4～6 号墳）の計 4 基である。既に主体部の内部は盗掘をうけており、副葬品の出土は全くなかった。しかも主体部は確認できても、その墳形については知るよしもない。

今回の調査で、既知の 4 基に加えて新たに 15 基の墳丘が削平された古墳を明らかにすることができた。調査の進捗状況によって周溝のみ確認した古墳 7 基、発掘調査は実施しないがその存在が明確になった古墳 3 基、発掘調査を行い主体部の所在が確認できた古墳は 9 基である。墳形は前方後円墳（含帆立貝式）12 基、円墳 5 基、方墳 2 基である。すべて台地平坦面に占地しており、したがって確認面はすべてローム面からの検出で、周溝と主体部のみに限定されている。なお各古墳の呼称は、調査順あるいは発見順に従って 1 号墳～19 号墳とした。

A. 周溝と主体部

1号墳（F i g 184・185）

東台古墳群の北端に位置する円墳である。東台遺跡で縄文時代の遺構と共に確認されたもので、円墳としては唯一完掘した古墳である。

周溝 周溝は全掘した。北側でとぎれ橋状部を形成している。正円形ではなく南北軸が長くなり、卵形梢円形を呈している。規模は外縁径南北 35.0 m、東西 32.75 m、内縁径南北 29.12 m、東西 32.5 m を測る。幅は 1.75 ～ 4.4 m で、北側が広く、南側が狭くなっている。検出面からの深さは 0.38 ～ 0.83 m を測り、北側が浅くなっている。底面は緩やかな起伏が認められ、底面からの立ち上がりは緩やかで、断面は鍋底状を呈している。橋状部は幅は 4.75 m を測る。周溝内の覆土は 4 層に区分され、自然堆積である。

主体部 南側周溝の内側、内縁部から 6.25 m の裾部に位置する。箱式石棺を主体部としているものと思われるが、検出時には既に石材が抜き取られ、掘り方のみが確認できた。まず主体部の掘り方は、東西方に長軸をもち 3.45 m、南北 2.75 m を測る長方形で、深さは 1.37 m であった。また石棺が構築された中央部分では約 18 cm 前後低くなり、ここに石材を設置していたことが判明した。さらに石棺底は若干高くなり、台状を呈している。石棺材設置溝の規模は東西 2.9 m、南北 1.7 m で、さらに東壁に 2 本のピット状遺構が横位に穿ってある、石棺埋設時に利用したものであろう。主体部覆土は大半は搅乱層で石棺材の小片が所々包含されている。なお北側の一部に裏込の一部が残置していた。ロームブロックを主とする黄橙色土と併に最下層に白色粘土が版築状に積んでいた。遺物の出土は全くなく、わずかに既述した石棺材の一部分と思われる綠泥片岩の小片が検出されている。

2号墳（F i g 186）

東台古墳群の北端、1号墳に接して立地している。やはり縄文時代の遺構と共に確認された帆立貝式前方後円墳である。

周溝 前方部西端は中世遺構（S X I）により切られ、後円部約半分の東側は既に削平され検出することができなかった。確認面での規模は、全長 22.25 m、前方部外縁幅 15.32 m、内縁幅 12.75 m、前方部長さ約 8.7 m、くびれ部外縁幅 16.53 m、内縁幅 13.00 m、後円部外縁幅 21.95 m、内縁幅 17.9 m を測る。幅は前方部が狭く 0.55 ~ 1.3 m、後円部が 1.55 ~ 2.9 m でくびれ部から後円部にかけて幅広くなっている。検出面からの深さは 0.3 ~ 0.5 m を測り、やはり南北両くびれ部が深くなっている。底面は全体的に平坦であるが、所々緩やかな起伏が認められる。底面からの立ち上がりは緩やかで断面は皿状を呈している。覆土は北くびれ部（D - D'）において 5 層に分層でき、自然埋土である。なお周溝内より耳環が出土している（第 29 図）。

主体部 前方部寄りのちょうどくびれ部に位置する。箱形石棺を主体部としているものと思われるが、1号墳と同様、検出時には既に石棺が破壊され、石材が全部抜き取られていた。ただ石材の一部が周溝内に残置されており、2号墳の石棺材と考えられる。主体部の掘り方は、長方形を呈し長軸 3.11 m、短軸 2.28 m、深さ 0.37 m を測り、主軸方位は N - 48° - E を示す。底面はローム面まで達し、石棺の埋置位置に溝状の掘り込みが認められる。溝の幅は 10 ~ 14 cm、深さ 8 cm を測る。石棺材は緑泥片岩で、石棺の規模は長さ推定 1.85 m、幅 0.92 m である。土坑内覆土は搅乱層で覆われていた。遺物の出土ではなく、石棺材の一部のみ検出されている。

3号墳（F i g 183）

1号墳の東側に位置する方墳である。南側は工事の関係から保存区域となり未調査である。なお本址が古墳であるかどうかはなはだ疑問であるが、主体部は検出できなかったものの、9号墳と周溝等が酷似していたため古墳として理解した。

周溝 遺構検出面が浅くソフトローム層上面であるため、盛土の確認はできなかった。台地の南側縁辺部にあたり、検出面は南に緩く傾斜している。また工事の関係から南側約 1/3 は未調査で、西側溝と北側溝の一部を調査したのみである。なお北溝は東へ延びるであろう。平面形は北西コーナーが丸みを帯び、各辺はほぼ直線的に延びる。確認規模は、東西辺外縁幅 11.7 m、内縁幅 10.0 m、南北辺確認幅 14.3 m で、南北に長い長方形を呈している。溝幅は 0.9 ~ 1.9 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m を測り、掘り方は皿形をなしている。覆土中は自然埋土で、遺物の出土はない。

4号墳（F i g 187~189・191）

東台古墳群のほぼ中央に位置する。本墳は古くから主体部である石棺の所在が知られていたところであり、今回の調査で帆立貝式前方後円墳であることが判明した。なお南東後円部は崖地のため調査不能であった。したがって周溝の全掘はできなかった。

周溝 全周せず前方部西隅でとぎれ橋状部を形成しており、南西側で 7 号墳と重複する。規模は、全長 23.3 m、前方部外縁幅 15.2 m、内縁幅 12.2 m、前方部長さ約 9 m、くびれ部外縁幅

20.25 m、内縁幅 12.90 m、後円部内縁幅 20.90 m を測り、後円部外縁幅は 7 号墳との重複のため計測不可能である。周溝幅は前方部が狭く 1.5 m 前後、くびれ部で 3.90 m、後円部で 2.30 m とくびれ部付近が最も広く掘削している。また検出面での深さは 48 ~ 81 cm で、やはりくびれ部から後円部にかけて深くなっている。底面は全体的に起伏があるものの、緩やかな皿状を呈している。また底面からの立ち上がりは内縁に向って急傾斜をもつ。覆土は西くびれ部で 8 層に分かれ、いずれも自然埋土である。なお 7 号墳との重複関係をみると 4 号墳が新しい (J - J') ことが判明した。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部としており、石棺は土坑内に構築されている。土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸 6.4 m、短軸 4.4 m、深さ 1.5 m を測る。主軸方位は N - 44° - W を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。石棺の埋置はさらに溝状に掘り込み、側壁・小口部石材を埋設する。溝の掘り方はすべて石材の大きさに合せて掘削している。

石棺は、緑片岩の板石を使用し、蓋石 4 枚、東側壁 4 枚、西側壁 2 枚、両側小口各 1 枚、床石 5 枚で構成されていたが、図示しているように盗掘にあってはいるため蓋石の配列が大きく乱れている。しかし、全体の移動は全くなく、盗掘されていても遺存状態は良好で、構造的に強固な作りであることが判る。

まず 4 枚の蓋石は、長さが 0.9 ~ 1.35 m とバラツクものの、幅は 1.56 m が 1 枚、1.62 m が 3 枚とほぼ 4 枚とも同じ幅寸法で打割している。側壁は東側の 4 枚とも不統一で、北側が大きく幅 1.02 m に対して、残 3 枚は半分以下の石材を用いている。西側は 2 枚で、やはり北側に本棺で最も大きな石材を使用している。幅 1.54 m、高さ 0.9 m、厚さ 0.1 m の大きさで、南側は小さめの石材をあてている。小口部は北側が幅 0.61 m、南側が 0.60 m とほぼ同じ大きさである。床石は 5 枚の板石が敷かれており、それぞれ長さ 0.55 ~ 0.6 m、幅 0.3 ~ 0.43 m の大きさで、南端では不足分を割した小石を結めて補充している。

裏込は、ロームブロックを主とする混和土を交互に版築し、基礎に白色粘土を利用して固定していた。版築の厚さはおよそ 15 ~ 30 cm 前後で、石棺埋置部は丁寧に積み重ねている。

なお石棺内部は一部分土砂の流入があったものの、まったくの空洞で、副葬品を含めた遺物は残置されていなかった。

5 号墳 (Fig 192~194)

東台古墳群のほぼ中央、4 号墳の北 6 m に位置する。本墳は先の 4 号墳とともに昭和 51 年 3 月に発見されたとの報告がある。帆立貝式前方後円墳で、遺構検出面はソフトローム上面であるため墳丘は既に失われていた。周溝および主体部を完掘する。

周溝 全周する。全長外縁部 29.4 m、内縁 24.4 m、前方部外縁幅 17.65 m、内縁幅 13.75 m、くびれ部外縁幅 18.2 m、内縁幅 13.7 m、後円部外縁幅 21.6 m、内縁幅 17.7 m を測る。また周溝幅は後円部が狭く、くびれ部が極端に広くなっている。後円部でとくに東側が 1.4 m で、平均

して2.5m前後でまわっている。また前方部もやや狭く1.8~2.4mを測る。一方くびれ部は両側とも広く北西部では3.8m、南東部では3.9mである。深さも均一ではなく、全体にかなりの起伏がみられる。とくにくびれ部では確認面から0.9~0.95mと深く、このくびれ部から徐々に浅くなり、前方部では0.45~0.55m、後円部では0.24~0.38mである。底面は全体的に皿状を呈し、くびれ部付近では鍋底状の丸味を帶んでいる。また底面からの立ち上がりは緩やかであるが、南西くびれ部では内側に向って急傾斜をもって上っている。覆土は6層に分けられ、くびれ部の横断面図をみるとかぎり自然埋土の、いわゆるレンズ状堆積を示している。なお周溝より耳環が出土している。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部としており、石棺は土坑内に構築されている。土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.30m、短軸2.60m、深さ0.77mを測る。主軸方位はN-63°-Eを示す。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。石棺の埋置はさらにロームを溝状に掘り込み、側壁・小口部石材を埋設する。やはり溝の掘り方はすべて石材の大きさに合せて掘削している。

石棺は、緑泥片岩の板石を使用し、蓋石4枚、東側壁2枚、西側壁2枚、両側小口各1枚、床石4枚で構成されている。なお本墳も盜掘されていて南側の3枚の蓋石は動かされていた。まず4枚の蓋石のうち、昭和51年の記録では2枚との報告がある（市教育委員会の記録）。確かに調査時においても南側2枚の蓋石の埋置方法は不自然だし、確実に後世になって埋置されていたことは確かである。なお蓋石のうち往時の遺存状態を残しているのは、北側で長さ1.45m、幅0.95m、厚さ0.1mの大きな石材を利用している。また2枚目は長さ0.41m、幅1.0mであった。

側壁は両側とも2枚の板石を使用している。いずれも北側小口寄りの石が大きく、東側壁では幅1.49m、高さ1mの石と幅0.68m、高さ0.9mの縦に長い石が埋置されており、西側壁では幅1.63m、高さ0.9mの石と幅0.54m、高さ0.8mのやはり縦に長い石が利用されていた。

小口の板石は、北側が若干大きく幅0.73m、高さ1.03mで、南側が幅0.61m、高さ1.0mである。床石は4枚の板石が敷かれていた。幅は小口部の幅と同様、北側が広く0.69mで、南側が0.62mとわずかな幅差がみられ、しかも長さも北側が大きくて南側が小さな板石を使用している。南側から長さ0.63m、0.47m、0.47m、0.33mを測る。本来水平に置かれていたものであろうが南側がわずかに低くなっている。盜掘の影響もあると思われるが、これは追葬の際に踏み押されて低くなったとも考える必要があろう。

裏込はロームブロックと褐色土や暗褐色土との混和土を貼って版築したものである。版築の厚さは5~25cmと幅があるが、ロームブロック土を主とする土を基礎固めに使用していた。また北側上面では石棺材の残屑と思われる小石材が約10cmほどの厚さでつき固めたように込められていた。なお石棺内部は空洞で、副葬品等の遺物は検出されなかった。

6号墳 (Fig. 195~197、第29図)

東台古墳群のほぼ中央、5号墳の西2mに位置する。本墳の発見は古く昭和37年8月に所在の報告が行われている。帆立貝式前方後円墳で、遺構検出面はソフトローム上面で、墳丘は既に削平され石棺のみが露出していた。したがって調査は周溝および主体部で、いずれも完掘する。

周溝 全周する。全長外縁部は29.45m、内縁部25.2m、前方部外縁幅19.35m、内縁幅13.5m、くびれ部外縁幅20.05m、内縁幅14.0m、後円部外縁幅24.0m、内縁幅19.35mを測る。また周溝幅は前方部が狭く、やはりくびれ部が広くなっている。まず前方部では幅1.2m、深さ0.35m、後円部北側で幅2.95m、深さ1.04m、同北東側で幅2.37m、深さ0.56m、くびれ部南西側で幅2.55m、深さ0.72m、同南東側で幅3.05m、深さ0.98mを測る。以上のように周溝の幅はもちろん深さも一定ではなく、かなり起伏が認められ、南側くびれ部と北側後円部は極端に深くなり、底面からの立ち上がりも急傾斜を呈している。また周溝内の覆土は9層に分けられ、図示していない6層極暗褐色土（ローム粒子を多量に含む）、7層暗褐色土（ローム粒子を多量に含む）、8層褐色土（ローム粒子を多量に含む）、9層明黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）がくびれ部において堆積している。なお周溝内において管玉1点と埴形土器が出士している（第29図）。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部としており、石棺は土坑内に構築されている。土坑の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.40m、短軸2.54m、深さ0.47mを測る。主軸方位はN-37°-Eを指す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、石棺の埋置部が溝状に掘り込まれている。台座は掘り込み底面よりは低くなっている。

石棺は緑泥片岩の板石を使用し、蓋石4枚、東側壁2枚、西側壁2枚、両側小口各1枚、床石4枚で構成されている。なお本墳も盜掘を受けており、蓋板の少なくとも南側2枚は動かされていた。まず蓋石4枚のうち、昭和52年の記録では3枚との報告がある（市教育委員会の記録）。確かに南側の1枚は不自然な埋置を呈しており、盗掘を受けた際に新たに置かれたものである。この石材は大きさからみて、床石の抜けた1枚と合い、おそらく剥された床石と考えてよいであろう。まず蓋石の大きさは5号墳と同様、北側が大きく長さ0.93m、幅1.0m、中央部が幅0.57m、幅1.01m、南側が幅0.66m、幅0.99mで、因み剥された床石は幅0.21m、幅0.65cmである。

側壁は両側とも2枚の板石を利用している。いずれも北側小口寄りの石が大きく、東側壁では幅1.58m、高さ0.74mの大きな石と幅0.58m、高さ0.79mの綫長の石材が使用されており、また西側壁では幅1.47m、長さ0.76mの石と幅0.66m、高さ0.77mの長方形の石材が埋置されていた。

小口の両板石は若干異なり、北小口部では幅0.67m、高さ0.8mの長方形の石に対し、南側では幅0.65m、高さ0.68mのほぼ正方形の石を利用していた。床石は4枚の板石が敷かれていたが南側の1枚が剥されており、これは先に述べた蓋石に置かれていたものと考えられる。なおほ

ほぼ同じような大きさの石を使用しており、北側より幅 0.66 m、長さ 0.34 m の長方形石材。幅 0.65 m、長さ 0.47 m の方形石材。幅 0.64 m、長さ 0.48 m の長方形石材。そして南端の幅 0.66 m、長さ 0.29 m を測る。これらはほぼ水平に敷っていたものであろうが、北側 3 枚はほぼ水平であるにもかかわらず、南端板石は若干浮いている。これは後世の盗掘によって動いたものであろう。

なお石棺内部の側壁および小口部の上面に赤彩が薄く認められた。発見当時鮮やかな朱で覆われていたといわれているが、今回の調査では辛うじてその痕跡をとどめるにすぎない。

裏込はロームブロックを主に、褐色土、黒褐色土等を混和土にし版築しているが、基礎固めにはロームブロックそのものを使用して踏み固めており、また上層では白色粘土によって裏込を行っている。石棺内部は空洞で、副葬品等の遺物は検出されていないが、かつて本墳主体部より出土したといわれる直刀類が保管されており、出土状況は不明であるがここで報告しておきたい。

7号墳 (F i g 187・190・191)

東台古墳群のほぼ中央に位置する。北東側で 4 号墳が構築されており、4 号墳周溝との切り合い関係から 7 号墳の築造が古いことが確認されている。しかし、7 号墳周溝が 4 号墳に切られているにもかかわらず、4 号墳丘下にはその痕跡は全く確認することはできなかった。したがって 7 号墳の周溝が浅いために検出できなかったものと思われる。

なお 4 号墳と同様、南東部は崖のため調査不能であった。また周溝の形状から帆立貝式前方後円墳と考える。墳丘は削平され、主体部と周溝の一部が確認されたのみである。

周溝 検出された周溝部は南西側の前方部およびくびれ部である。確認面の全長 20 m である。溝幅は前方部で 2.30 ~ 4.15 m、深さ 0.25 ~ 0.48 m、くびれ部で幅 0.40 ~ 0.52 m、深さ 0.67 ~ 0.81 m でくびれ部が深くなっている。底面は全体的に起伏があるものの、緩やかな皿状を呈している。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部とするものと思われるが、1・2 号墳同様、検出時には既に石棺は破壊され、石材が全部抜き取られていた。主体部の掘り方は、隅丸長方形を呈し、長軸 3.41 m、短軸 2.53 m、深さ 0.66 m を測り、主軸方位は N - 40° - W を指す。底面掘方はハードロームまで達し、石棺の埋置位置に溝の掘り込み認められる。溝の幅 12 ~ 25 cm、深さ 12.0 cm である。石棺の規模は溝の位置から推定 2.21 m、幅 1.05 m を測る。土坑内の覆土は搅乱層で覆われていた。主体部からの出土遺物はなく、石棺材である緑泥片岩の小片が出土している。

8号墳 (F i g 183)

東台古墳群のほぼ中央部に位置する。6 号墳の西側に接して、周溝の一部のみ発掘した。全容は計り知れないが、西側の畠地における周溝の黒色落込みから判断して円墳であることが判明している。調査された周溝の幅 1.20 ~ 1.50 m、深さ 0.25 ~ 0.35 m を測り、底面は若干の起伏があるものの、ほぼ平坦で、皿状を呈している。なお周溝中から石棺材の一部と思われる緑泥片岩

の石材が出土している。

9号墳（F i g 198・199）

東台古墳群東端に位置する方墳である。遺構精査面はソフトローム上面で、墳丘は削平され、しかも主体部である石棺は抜き取られ遺存していない。周溝は完掘した。

周溝 全周する。平面形は各辺とも直線的であり、各コーナーもきっちりとした方形を呈する。規模は、南北軸外縁幅 14.6 m、内縁幅 12.5 m、東西軸外縁幅 14.4 m、内縁幅 12.24 m を測る。各辺の長さは 14.3 ~ 14.4 m とほぼ均一である。南北軸は N - 23° - W を指しており、南北方向に主軸をもっている。周溝の規模は、北溝の幅 1.18 m、深さ 0.27 m、南溝の幅 0.99 m、深さ 1.03 m、東溝の幅 0.89 m、深さ 0.26 m、西溝の幅 1.17 m、深さ 0.27 m を測る。底面は主体部前面が最も深く、若干起伏があるものの、ほぼ平坦である。また底面からの立ち上がりは急傾斜を呈している。

主体部 周溝南辺のほぼ中央部より掘り込まれ、南に開口部を有する横穴式石室を呈している。しかし、既に石材はすべて抜き取られ遺存していない。石室を埋置する土坑の掘り方は、ローム面で周溝からの長さ 5.18 m、幅 1.70 ~ 1.79 m、確認面からの深さ 0.8 m を測り、長方形を呈する。主軸方位は N - 20° - W とほぼ周溝方位と同じ向きに講築されている。底面はほぼ平坦であるが、開口部付近を除き、石室奥部からコの字に溝が掘られている。溝の幅は 0.2 ~ 0.42 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m で、若干の起伏があるもののほぼ平坦に掘削している。覆土は周溝部から大半は擾乱層で覆われているものの、最奥部ではかろうじて裏込と思われる土層の堆積が検出できた。裏込はわずか 30 cm 程であるが 6 層に分けることができ、下層基礎固めに灰白色粘土を使用していた。また版築が実施されておりロームブロックを主にする褐色土の混和土を貼っている。

なお検出された石室埋設跡と思われる溝から石室の規模を推定してみると、玄室の長さ 3.45 m、幅 1.2 m、深さ 0.8 m を測り、羨道部長さ 1.4 m、幅 1.8 m、深さ 0.54 m である。また玄室は框石によって前室と奥室とに分かれるものと思われるが、おそらくコの字を呈する溝で分かれるものと思われ、前室は長さ約 1.1 m、幅 1.8 m、奥室の長さ約 2.3 m 程と推測される。主体部内からは遺物の出土はなかった。また石材は緑泥片岩と考えられる。

10号墳（F i g 200~203）

東台古墳群の北東端、9号墳の南 10 m に位置する前方後円墳である。本墳は今回の調査で確認されたものであるが、すでに主体部は開蓋され埋葬品の大半は盗掘をされているが、主体部北端においてかろうじて遺物が残置されていた。しかしこれらも擾乱をうけているため原位置を保っているとはいひ難い。なお東側約半分は崖地のため調査不可能であった。したがって主体部と周溝の 1/2 を調査したのみである。本墳も墳丘は既に削平されていた。

周溝 調査は 1/2 のみ実施した。本溝は確認面においても全周せず、前方部西隅でとぎれ橋状部を形成している。検出面での全長外縁の規模は 39.6 m、内縁 32.15 m を測り、本古墳群の中では最大級の前方後円墳である。周溝の規模は、前方部で幅 4.5 m、深さ 0.4 m、前方部西隅で幅

4.5 m、深さ 0.45 m、くびれ部で幅 6.62 m、深さ 0.7 m、後円部北側で幅 2.53 m、深さ 0.39 m、後円部中軸部で 2.5 m、深さ 0.35 m である。やはりくびれ部が最も深く、次いで前方部西隅、後円部北隅が深く掘り込まれている。したがって底面は大きなうねり状な起伏となり、平坦面は前方部は除いてはみられない。底面の状態は、前方部からくびれ部にかけては緩やかな皿状を呈し、後円部の一部は箱形の壠形態を呈している。またくびれ部では外縁は緩やかな勾配をしているのに対し、内縁に向って急傾斜して立ち上がっている。

周溝内の覆土は 12 層に分けられ、上面は耕作による搅乱が激しいが、下位面はいわゆるレンズ状堆積を示しており、自然埋土である。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部としており、石棺は土坑内に構築されている。土坑の平面形は、東側が弓形に脹む不正長方形を呈し、規模は長軸 3.75 m、短軸 2.3 m、深さ 0.64 m を測る。主軸方位は N - 39° - E を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は若干の凹凸がみられ、平坦ではない。また石棺の埋置部が溝状に深く掘り込まれている。いずれも床石よりも各側壁部および小口部では 0.20 ~ 0.30 cm も深く、平均して台座よりも 0.25 cm 剥削している。

石棺は緑泥片岩の板石を使用し、蓋石 4 枚、東側壁 2 枚、西側壁 3 枚、両側小口各 1 枚、床石 4 枚で構成されている。なお既述したとおり本墳も盗掘をうけており、蓋石の南側 3 枚は少なくとも動かされていた。蓋石の大きさは原位置を保っている北側からみてみると、幅 0.85 m、長さ 0.99 m と大きく、次いで幅 0.74 m、長さ 0.35 m、中央南側蓋石の幅 0.69 m、長さ 0.31 m、南端蓋石の幅 0.7 m、長さ 0.36 m といずれも幅・長さとも小さい。

側壁は東側が 2 枚使用している。北側が大きく幅 1.18 m、高さ 0.99 m で、天井部を平いらに底部は北側が長く打割りされている。南側は幅 0.96 m、高さ 0.76 m である。反対の両側壁は 3 枚の板石が使用され、やはり北側が大きく幅 1.14 m、高さ 0.96 m、中央板石が幅 0.655 m、高さ 0.89 m、南端が幅 0.25 m、長さ 0.89 m と幅の狭い石材を埋置している。これら側壁の配置からみて、両小口を押さえるように北側の両側壁から並べていき、東側の南側壁、西側の中央側壁と立てた後、隙間を埋めるように幅狭の石材を立てたものと推定される。

小口部の両板石は若干大きさの異なる石材を利用している。北側では幅 0.67 m、高さ 0.92 m に対して、南側では幅 0.62 m、高さ 0.94 m とわずか 5 cm であるが幅が狭くなっている。これはいずれの古墳でもみられることで石棺が倒壊しないための工夫と思われる。床石は 4 枚の板石が敷かれていた。やはり北側より並べていたものと思われ、南側で打割りしながら長さの調整を行っている。まず板石の大きさは北側から幅 0.66 m、長さ 0.49 m、中央北側幅 0.63 m、長さ 0.50 m、中央南側幅 0.62 m、長さ 0.43 m、南端石材幅 0.62 m、幅 0.37 m である。これらはほぼ水平に敷かれている。

裏込は白色粘土を主に、石棺に直接押し込めて裏込し、さらにロームブロックを主体とする褐色、黒褐色土の混和土を貼って版築している。版築の厚さは 5 ~ 32 cm と不統一である。石棺内

部は空洞であったが、北隅に原位置は保っていないが、骨片と副葬品である小玉および鉄片が検出された。

遺物の出土状況 石棺内部は開蓋され、副葬品の大部分は遺存していない。しかし北隅において床石より3~5cm程度の砂質土が堆積しており、これらを除去し、ふるいにかけたところ、骨片と小玉および鉄片が検出された。骨片は人骨と思われるが、性別等の鑑定は不可能であろう。また小玉点出土した。鉄片については鏽の目立つ鋒のようである。径0.7cm程である。

11号墳（F i g 183）

東台古墳群の北西端に位置する。調査は北側の周溝のみ検出し、大半は未調査区域内に含まれている。周溝の形状からみて前方後円墳と思われる。主体部は検出できなかった。

周溝 全体の約1/2を確認したのみである。ちょうど北側くびれ部から後円部にかけて検出した。全長は推定であるが、32~33m前後と考えられる。周溝の規模は、くびれ部で幅2.1m、深さ0.45m、後円部北側で幅5.7m、深さ0.6m、後円部中軸付近で幅2.4m、深さ0.7mを測る。底面は平坦ではなく、くびれ部や後円部に大きな起伏部が認められ、うねり状を呈している。また底面の状態は、横断面は皿状をなしている。全体に緩やかな傾斜で底面から立ち上がっている。出土遺物は検出されていない。

12号（F i g 200）

東台古墳群の北端、10号墳の西1.5mに位置する。調査は東側の周溝のみ検出し、大半は未調査区域内に含まれている。周溝の形状から判断して円墳と思われる。主体部は検出されていない。

周溝 全体の約1/4以下を検出したのみである。全長は25m前後と推定される。周溝の規模は、幅1.8~2.5m、深さ0.4~0.5mで、南側が深く北側が若干浅くなる。底面は皿状を呈し、緩やか傾斜をもって立ち上がる。出土遺物は検出されなかった。

13号墳（F i g 204~206、第30~32図）

東台古墳群の西端に位置する帆立貝式前方後円墳である。本墳は今回の調査で新たに発見されたものであるが、検出時が調査期間中でなかったため、主体部である石棺の蓋石は開封され、副葬品や埋葬骨は大きく擾乱され、かろうじて底面近くの遺物のみ原位置で捉えることができた。なお後円部の大半は保存区域に入り発掘調査を実施していない。

周溝 前方後円墳の後円部は保存区域に入っており未調査であるが、前方部からくびれ部にかけて全掘している。確認面での周溝は全周せず、前方部北側でとぎれ橋状部を形成している。後円部はボーリング調査を行い、全長約28m前後を測るものと思われる。また前方部外縁幅は17.3m、内縁幅13.3m、くびれ部外縁幅19.6m、内縁幅12.8mを測る。また周溝の規模は、前方部で幅1.5~3m、深さ0.35~0.54m、くびれ部北側で幅3.5m、深さ1.05m、同南側で幅3.65m、深さ0.75mであるが、前例から比較する前方部がかなりしっかりと掘削されていることがわかる。底面は平坦ではなく、大きな起伏がみられ、また底面からの立ち上がりもくびれ部においては内側に急な傾斜をもっている。覆土は6層に分けることができ、黒色系を主体に

いわゆるレンズ状堆積を示しており、自然埋土である。

主体部 くびれ部中央に位置する。箱形石棺を主体部としており、石棺は土坑内に構築されている。土坑の平面形は方形を呈し、規模は長軸 3.42 m、短軸 3.17 m、深さ 0.64 m を測り、さらに内側に掘り込まれており、二段構築されている。内側の土坑の規模は長軸 2.82 m、短軸 2.12 m で、底面より深さ 0.1 m、上面より 0.76 m を測る。また西隅には径 40 × 30 cm 前後、深さ 96～98 cm のピットが穿ってある。加えて石棺の埋置部が溝状に掘り込まれている。主軸方位は N - 40° - W を指している。

石棺は緑泥片岩の板石を使用している。蓋石は現存で 2 枚（1～2 枚盗掘により抜き取られている）、東側壁 2 枚、西側壁 3 枚、両側小口各 1 枚、床石 4 で構成されている。まず蓋石の大きさは北側が大きく、幅 0.86 m、長さ 1.28 m、中央が幅 0.84 m、長さ 0.46 m である。側壁は東側が 2 枚使用している。南側が大きく幅 1.41 m、高さ 0.94 m、北側が幅 0.77 m、高さ 0.92 m である。また西側が 3 枚使用しており、南側の石材の大きさは幅 0.94 m、高さ 0.98 m、中央が幅 0.91 m、高さ 0.97 m、北端が幅 0.52 m、高さ 0.94 m で、とくにこの北端の石材が大きく外へはみだし、打割調整は行なわなかったようである。

小口部の両板石はほぼ同じ大きさで、南側が幅 0.64 m、高さ 0.97 m、反対の北側では幅 0.63 m、高さ 0.92 m である。床石は 4 枚の板石が敷かれていた。大きさは南側より幅 0.63 m、長さ 0.53 m、中央南側は幅 0.64 m、長さ 0.43 m、厚さはわずか 0.02 m で他の石枚の半分以下である。中央北側の板石は幅 0.64 m、長さ 0.45 m、北側では幅 0.62 m、長さ 0.49 m を測り、北側の床石が若干沈みかけていた。

裏込はロームブロックを主とする土で基礎固めを行い。西側壁では白色粘土によって押え込んでいる。さらにロームブロックを主体とする褐色土・暗褐色土の混和土を貼って版築しており、しかも中央位では石棺材の残滓を埋め込んでいる。石棺内部はとくに上面は踏み固められたように搅乱をうけているものの、最下層では原位置を保つ埋葬品が検出された。

遺物の出土状況 石棺内部は開蓋され、直刀等の副葬品の大半が取り上げられ、かろうじて棺隅に埋置されていた鐵鎌、刀子および玉類が原位置を保っていた。また人骨も検出されたがほとんどが踏みつけられ原形を保っているものはわずかであった。蓋が開かれた状況をみると、石棺内部には埴土等の流入はなく、わずかに人骨片や砂質土等の自然堆積土が認められたにすぎなかつたという。蓋を抜き取り、棺内の埋葬品や骨等を取り上げるために数人が中に入り、そのため中央部を大きく破壊し、さらに多量の土砂が内に流込んだのである。これら新しく埋没した土砂を除去し、元の状態に復原することは不可能であったが、床石上から最高で 17 cm 付近までの遺物を検出することができた。

まず人骨は成人骨 3 個体が確認でき、頭部を北側にして埋葬されていることが判明した。一部骨が東隅にかたまっていたことからみて追葬が行われたと考えられる。副葬品は北小口部付近に集中し、直刀・鐵鎌・玉類がまとめて発見された。また足元である南側でも鐵鎌がばらばらで

検出された。なお抜き取られた直刀は西側壁に沿ってまとめて埋置されていたという。

14号墳（F i g 204）

東台古墳群の西端で、13号墳の北3mに位置する帆立貝式前方後円墳である。前方部の一部が検出されたのみで、主体部等大半は保存区域内で未調査である。したがって周溝のみ調査している。

周溝 前方部と前方部南隣部を調査した。周溝の規模は幅1.70～2.60mで、深さ0.25～0.88mを測る。底面は丸味を帯びたU字状を呈し、極端に深くなっている。平坦面は全く確認できなかった。底面から急に傾斜して立ち上がる一方で、陥部は緩やかな形状をみせている。覆土は4層に分けることができ、自然埋土である。

15号墳（F i g 183）

東台古墳群の中央部に位置する。本墳の墳丘は削平されており、道路脇で周溝の一部と思われる黒色土の落込みを確認した。円墳であるかどうか疑問であるものの、一応円墳として判断した。なお本墳の大半は宅地下に保存されている。確認された溝より遺物の出土はない。

16号墳（F i g 183）

東台古墳群の南東、北に位置する。周溝のくびれ部のみ検出された。周溝の検出された長さは7.55mである。周溝の規模は幅1.95～2.80m、深さ0.54～0.64mを測る。ほぼ平坦で、起伏はみられない。底面は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。覆土より出土遺物は検出されていない。主体部の存在は不明である。

17号墳（F i g 183）

東台古墳群の南東の北側、16号の南約10mに位置する前方後円墳である。本墳は古くから主体部である箱形石棺が露出しており、今回の調査で後円部の一部を確認することができた。検出面の後円部は全周せず北側においてとぎれ橋状部を形成している。周溝の規模は幅1.65～2.80m、深さは0.1～0.30と浅く、底面は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。周溝内より遺物の出土はない。

18号墳（F i g 183）

東台古墳群南東端に位置する。御衣遺跡に入り、前方後円墳と思われる。検出された周溝は南側前方部から後円部の一部で、確認された長さは約14.5mである。規模は幅1.1～2.1m、深さ0.27～0.45mを測る。底面はほぼ平坦で、起伏は全くみられない。周溝内より遺物の出土はない。なお主体部は検出できなかった。

19号墳（F i g 183）

東台古墳群の南端に位置する。既に周溝および主体部等が削平され、墳丘等の形状は不明であるが、本墳より多量の埴輪の出土が報告されている。

B. 検出された遺物

今回の調査で東台古墳群は19基存在することが確認された。しかし、墳丘が遺存しているも

のが全くなく、全て墳丘が削平されていた。幸い多くの古墳が円墳や方墳ではなく前方後円墳であることから、いわゆる円形周溝状遺構もしくは方形周溝状遺構として処理せずに調査をすすめることができた。

しかし、19基のうち半分の10基は主体部を検出できたものの、いずれも盗掘され、あるいは擾乱を受け、良好な遺存状態を呈していたものは皆無であった。これは古墳の時期決定を困難なものにした。かろうじて地元で保管され、あるいは記録に残されていたものによってより正確な記述を務めていきたい。

2号墳出土遺物（第29図7）

耳環（7）銅芯に金を貼ったもので、外径2.75cm、内径1.53cmを測り、径0.73cmの円形の断面をもつ。南側くびれ部周溝内より出土。

3号墳出土遺物（第29図9）

勾玉（9）土製の勾玉である。長さ4.86cm、径2.83cm、孔径0.33cmを測る。孔は一方から開けられており、全体にやや扁平に作出されている。したがって胴部断面は梢円形を呈している。周溝西側より出土。

4号墳出土遺物（第29図27・28）

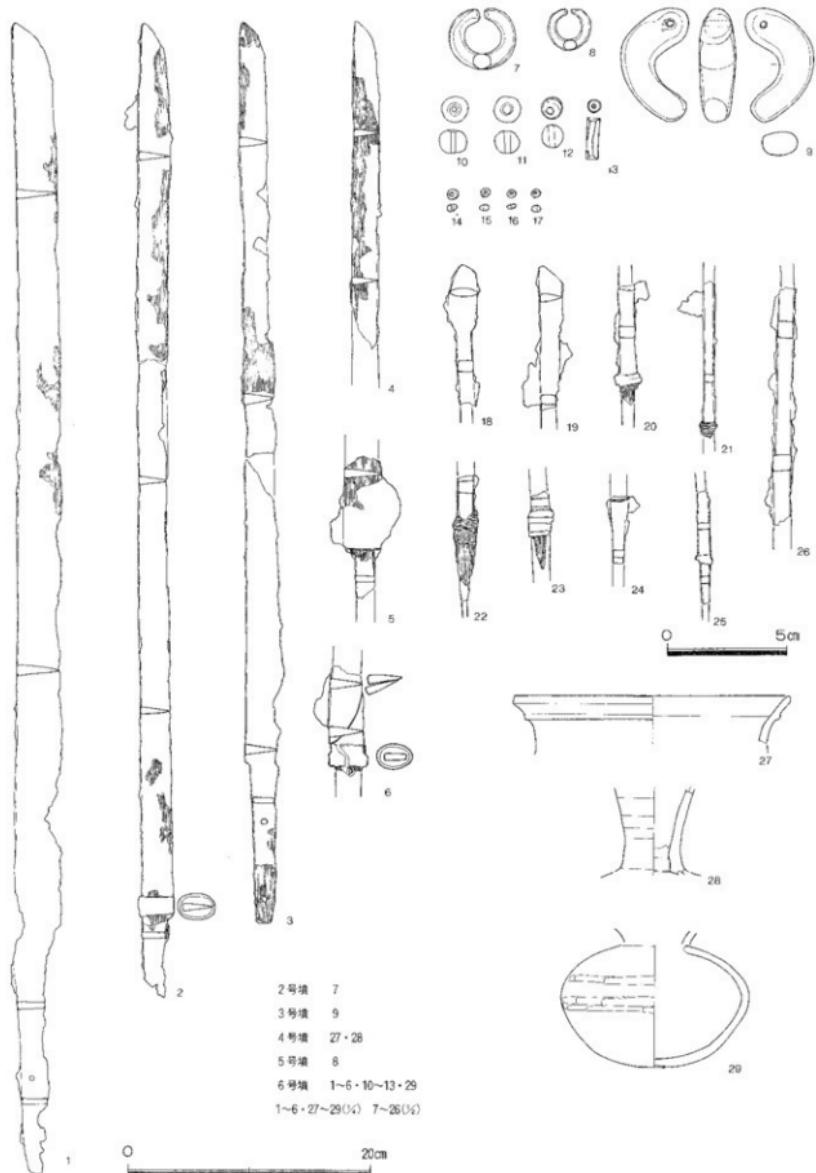
須恵器（27・28）27は長頸壺の頸部破片。内外面とも灰釉がかかっている。28は甕口縁部破片。口縁部に稜を有する。いずれも周溝内より出土。

5号墳出土遺物（第29図8）

耳環（8）銅芯に金を貼ったもので、外径1.77cm、内径1.06cmを測り、径0.52cmの円形の断面をもつ小形の耳環である。前方部周溝内より出土。

6号墳出土遺物（第29図1～6、10～13、18～26、29）

刀（1～6）1はほぼ完形である。平造りで、全長96.10cmを測る。身部長75.5cm、茎部長20.7cmの直刀である。身部最大幅3.6cm、棟幅9mmで、茎部は少し内反りになっており、断面は刀部側がやや幅狭の大略長方形を呈している。目釘穴は1個認められる。2は茎尻を欠損している。平造りで、現存長81.3cmを測る。身部長74.4cm、茎部長7.0cmの直刀である。身部最大幅2.6cm、棟幅8mmである。関は刃関で、やや斜めに切り込まれている。緑金具は遺存し、長さ3.2cm、幅2.1cmで、目釘穴が関より6cmの位置に穿たれている。木質は刀身部および関付近に認められる。3はほぼ完形で、刃部の一部が欠損している。平造りで、全長75.0cm、身部長61.7cm、茎部長13.2cmの直刀である。身部最大幅2.4cm、棟幅9mmで、両側に関を有する。関より4.5cmの位置と心々間で6.5cmの位置に径4.5mmの目釘穴が穿たれている。木質は刀身部と茎部に遺存している。4は身部のみの破片である。平造りで、現存長27.7cm、刃幅2.15cm、棟厚6mmを測る直刀である。刀身部には木質が遺存している。5はちょうど関付近の破片である。平造りで、現存長11.9cm、刃幅3.1cm、棟厚8mmを測る直刀である。関付近は銹化がはげしく原形を把握できない。茎部の幅1.5cm、厚さ5mmで、銹下より緑金具がわずかであるが確認でき



第29図 東台古墳群（2~6号墳）出土遺物

る。6も破片でやはり銹化がはげしく2振の直刀がこびりついている。上面は鋒部分で現存長6.5cm、刃幅2.6cm、棟厚9mmを測る。下面は関付近の破片で現存長8.5cm、刃幅2.9cm、棟厚9mmを測る。縁金具が遺存し、長さ3.0cm、幅2.2cmで、木質部が残置している。

鉄鐵（18～26）いずれも矢柄ないし茎部などの破片ばかりで、身の形態が判別できるのは2点のみである。18は無闇鑿箭式で両丸造りである。19は片刃箭で無闇である。20も片刃箭と思われる。21～26は籠被から茎にかけての部分であり、25・26は矢柄の痕跡を残すもので、これらからいざれも矢柄をつけて埋納されたとみられる。

玉類（10～13）丸玉（10～12）は、10が径1.1cm、厚さ0.95cm。11が径1.01cm、厚さ0.92cm。12が径0.89cm、厚さ0.9cmを測る。蛇紋岩製である。管玉（13）は滑石片岩製で径0.5cm、長さ1.8cmを測る。管玉のみ主体部ではなく周溝より出土している。

土器（29）口縁部を欠損する壺形土器で、最大径が胴部中位にある。全面ナデによる整形が施されている。

10号墳出土遺物（第29図14～17）

玉類（14～17）ガラス小玉である。径0.4cm前後、厚さ0.3mm前後を測る。断面は偏平な梢円形を呈している。主体部北隅より出土。

13号墳出土遺跡（第30図1～8、第31図9～53、第32図54～184）

刀（1～5）1は鋒部を欠損している。平造りで、現存長85.1cmを測る。現存する身部長70.5cm、茎部長14.0cmの直刀である。身部最大幅4.6cm、棟幅9mmで、茎部はわずかに内反りになっている。茎部幅2.1cm、厚さ5mmを測る。関には縁金具と鐔を有している。鐔は倒卵形呈し、鉄製である。関より12cmのところに目釘穴がある。刀身および茎には木質が遺存している。2は鋒部と茎部の大半を欠損している。平造りで、現存長76.5cmを測る直刀である。現存する身部長は72.5cmで、刃幅は4.6cm、棟厚は7mmである。関は両関で、刃部側はやや斜めに切り込んでいる。茎は現存長3.8cm、幅2.3cmを測る。関より2.0cmの位置に目釘穴が穿たれている。身部および関付近には木質が遺存している。3も鋒部と茎部の大半を欠損している。平造りで、現存長66.7cm、を測る直刀である。現存する身部長は63.1cm、刃幅3.6cm、棟厚9mmである。関には縁金具と鐔を有している。茎部は現存長わずかに2.7cmを測るのみである。縁金具は長さ3.9cm、幅2.5cmで、鐔は倒卵形を呈する鉄製で、長さ7.6cm、幅6.3cm、厚さ6mmを測る。刀身および茎には木質が遺存している。4は茎尻を欠損している。平造りで現存長61.4cmを測る直刀である。身部長51.8cm、刃幅3.0cm、棟幅9mmを測る。茎は現存長9.4cm、幅1.9cm、厚さ6mmで、関より7.3cmの位置に目釘穴が穿たれている。鐔を有し、倒卵形の鉄製で、長さ7.3cm、幅4.8cm、厚さ4mmである。刀身および茎部の一部に木質が遺存している。5は直刀で関付近の破片である。平造りで現存長19.2cmである。刃幅2.7cm、棟幅6mmを測る。銹化が著しく茎部の長さは計測不能であるが、茎部幅1.4cm、厚さ3mmである。刀身の一部に木質を遺存している。

短刀（6）刀部の大半を欠損し、茎部のみである。現存長14.5cmで、現存する身部の長さは5.0cm、幅1.7cm、棟幅8mmを測る。関は片関で、茎部の長さ9.4cm、幅1.2cm、厚さ0.45cmを測る。茎尻に向って小さく内彎する。

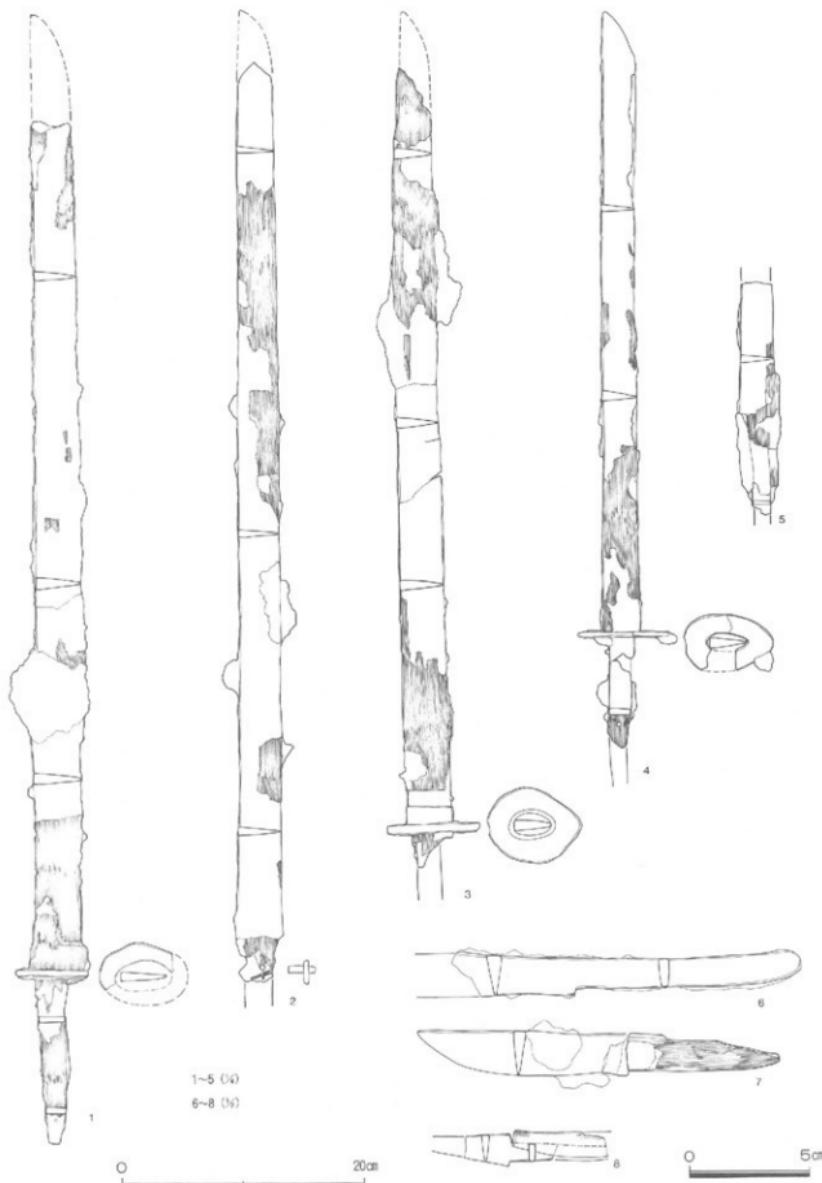
刀子（7・8）7はほぼ完形で、全長15.1cm、刃部の長さ8.8cm、幅1.8cm、棟厚0.55cmを測る。茎の長さ6.3cm、幅1.2cm前後である。茎には全体に木質が遺存しており、柄木の残存であろう。8は刃部の大半と茎部の一部を欠損している。現存長は3.8cm、現存する刃部の長さ1.9cm、最大幅1.1cm、棟厚3mmを測る。刃幅は身元幅と比較して鋒にかけて細くなっていく。関は両関で、若干斜めに切り込まれている。現存する茎の長さは1.8cm、幅0.8cm、厚さ0.25cmである。なお柄木がよく残っており、柄木は木製である。

鉄鐵（9～53）46点を図示することができた。1は腹扶柳葉式で籠被を欠損している。2～4は腹扶三角形式である。9～11には薄い纖維状物質を付着していた。13～20腹扶長三角形式で、鐵身長4.5～5.5cm、頸部長4.0～5.0cmを測る。21～25片丸造棘籠被鑿箭式で、鐵身長5.7～6.0cm、頸部長2.5～3.5cmを測る。26～52も同じ形式であるが、長い籠被を有し、茎の間に棘状突起をもつ。26～40の鐵身長が3.2～4.5cm、頸部長が6.8～8.8cmで、41～52の鐵身長が1.9～2.3cm、頸部長が10.0～10.5cmである。53は広鋒両丸造棘籠被三角形式で、鐵身長2.8cm、頸部長5.6cm、茎部長3.2cmを測る。54は刃側に切り込まれる関を有する片關片刃箭式で、鋒と茎を欠損している。本墳では唯一の出土例である。なお1～3・30・40・42・50には薄い纖維状素材の付着が認められる。また2でみるように矢柄が装着された状態で遺存しており、はさみ込みが明瞭に観察される。

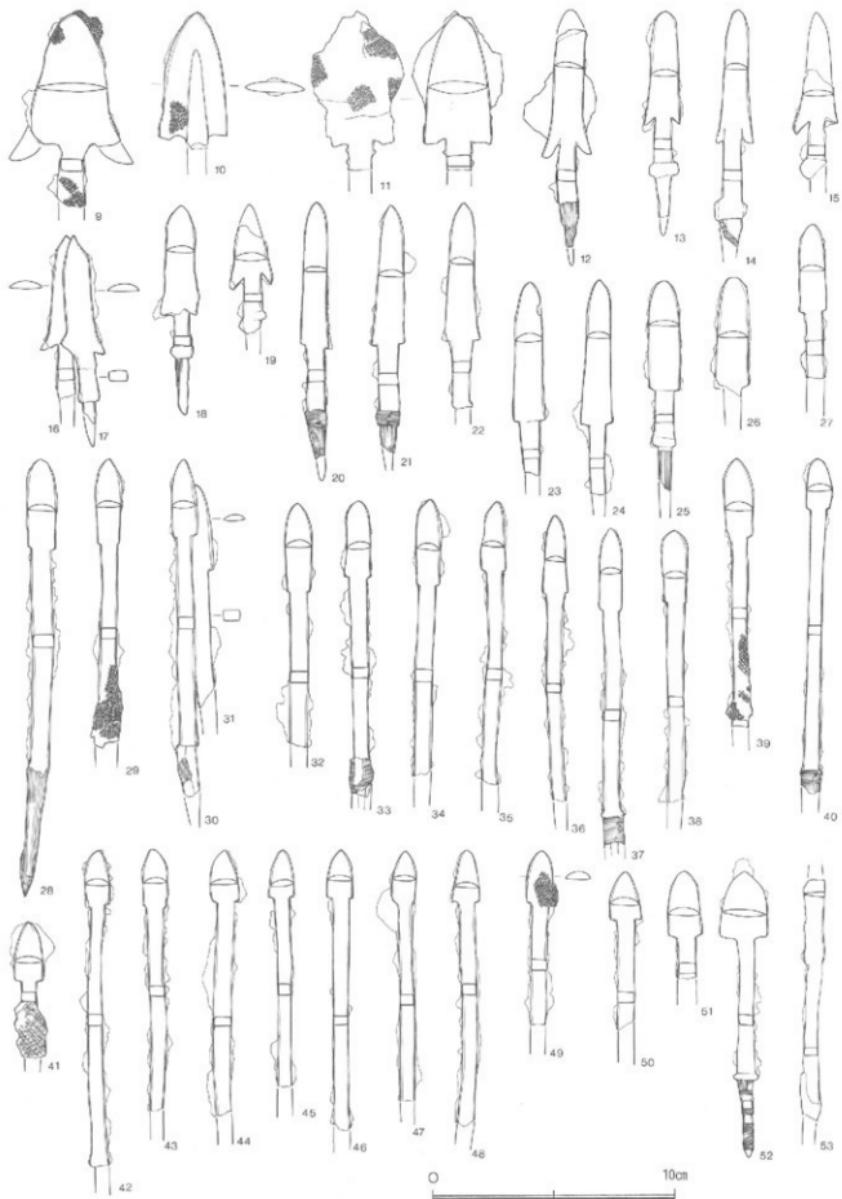
玉類 土製丸玉は130点出土し、1点を除き完形あるいはほぼ完形ですべて計測可能であった。径0.37～0.75cm、厚さ0.20～0.58cmを測る。平均的には径0.55cm、厚さ0.4cm前後のものが多い。形状は偏平なものと丸味のあるものに分けられるが、平坦で偏平なものが多い。土製丸玉の出土には、主体部北側に集中していた1群（玉1群）とやや中央北寄りに集中していた1群（玉2群）分けられ、玉1群では73点が、玉2群では47点が検出された。色調は黒色もしくは灰黄褐色を呈しているものの、灰黄褐色の玉類にはかすかに斑点状の黒色がみうけられる。これらはいずれも黒漆が施されたものである。（註*）。その他に闇玉の土製品が出土している。1点あり、径0.95cm、長さ1.88cm、厚さ1.0cmを測る。

（小川・大淵）

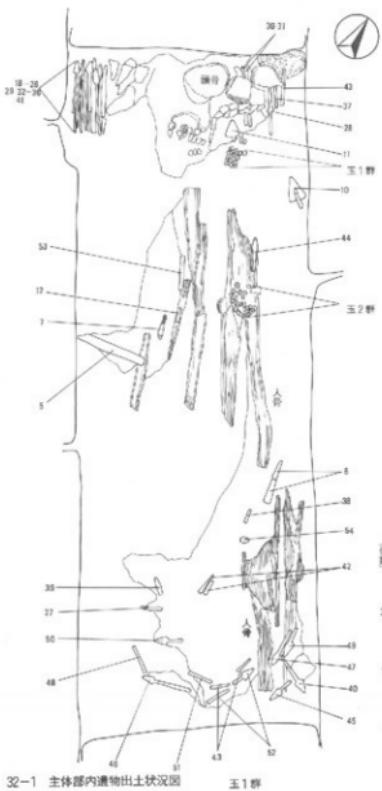
（註*）玉類については早稲田大学・橋本博文氏のご教示を得ることができました。



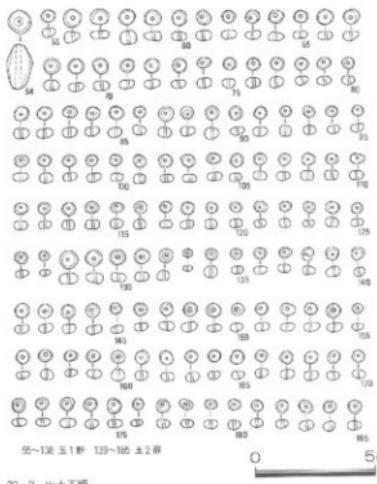
第30図 東台古墳群第13号墳出土遺物（1）



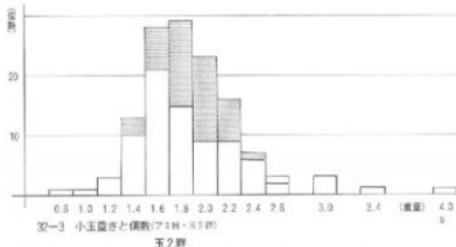
第31図 東台古墳群第13号墳出土遺物（2）



32-1 主体部内遺物出土状況図

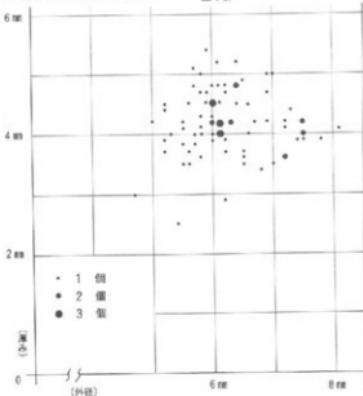


32-2 出土玉類

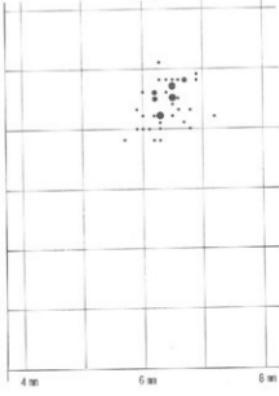


32-3 小玉と其の偶数(73件・52件)

玉2群



32-4 小玉計測分布図



第32図 東台古墳群第13号墳主体部と出土玉類

図面・図版



Fig 1 東台遺跡調査全測区（縄文時代）

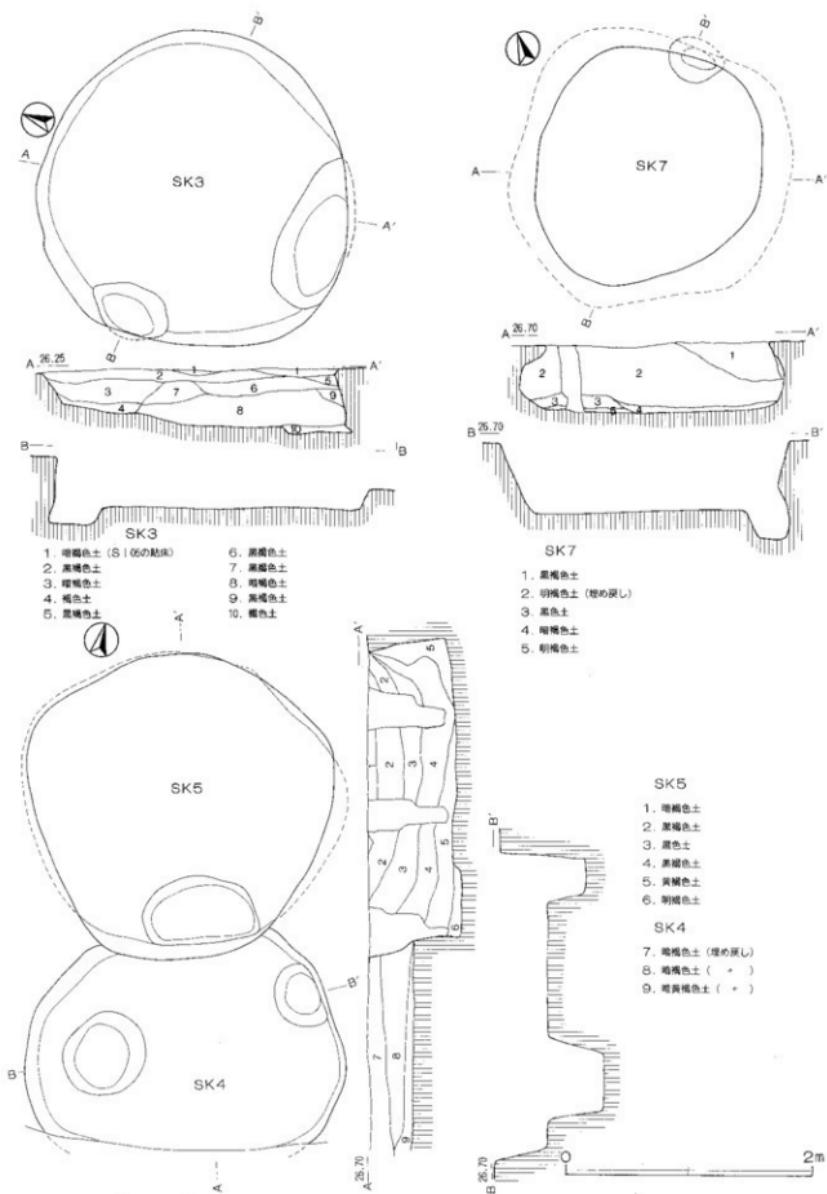


Fig 2 東台遺跡 SK3・4・5・7

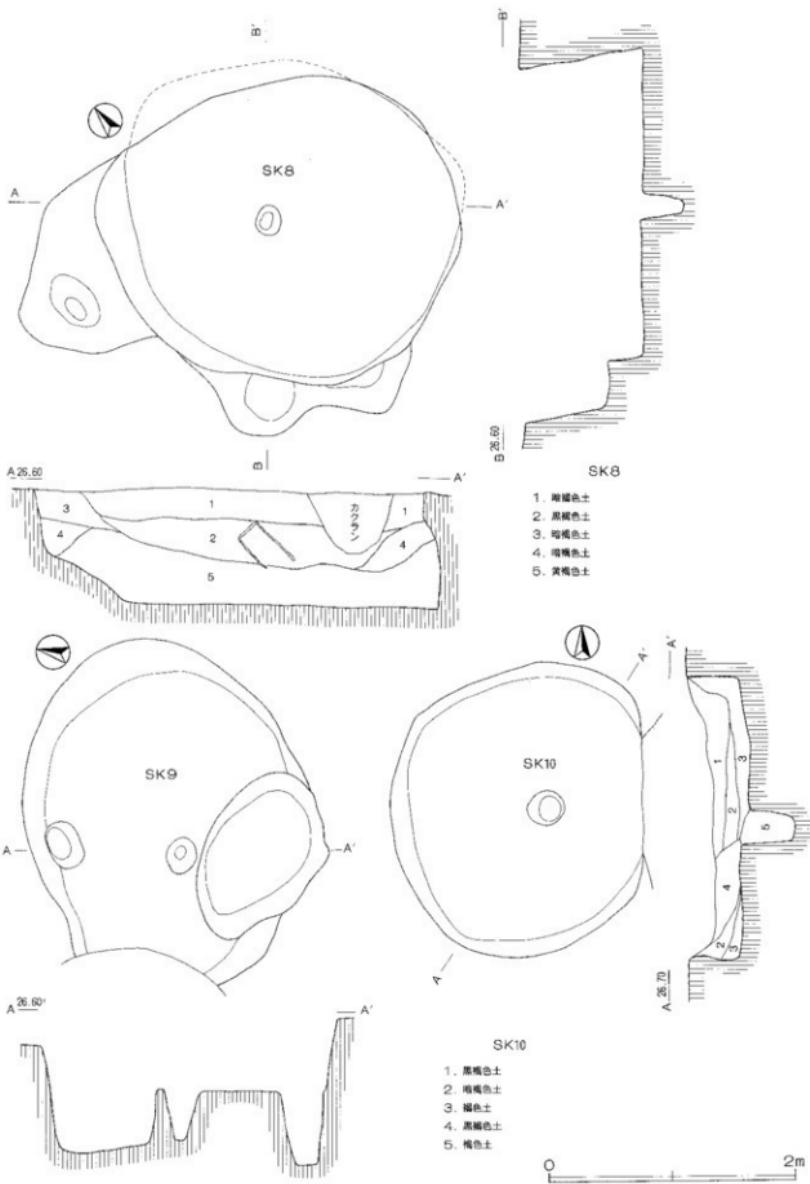


Fig 3 東台遺跡 SK8・9・10

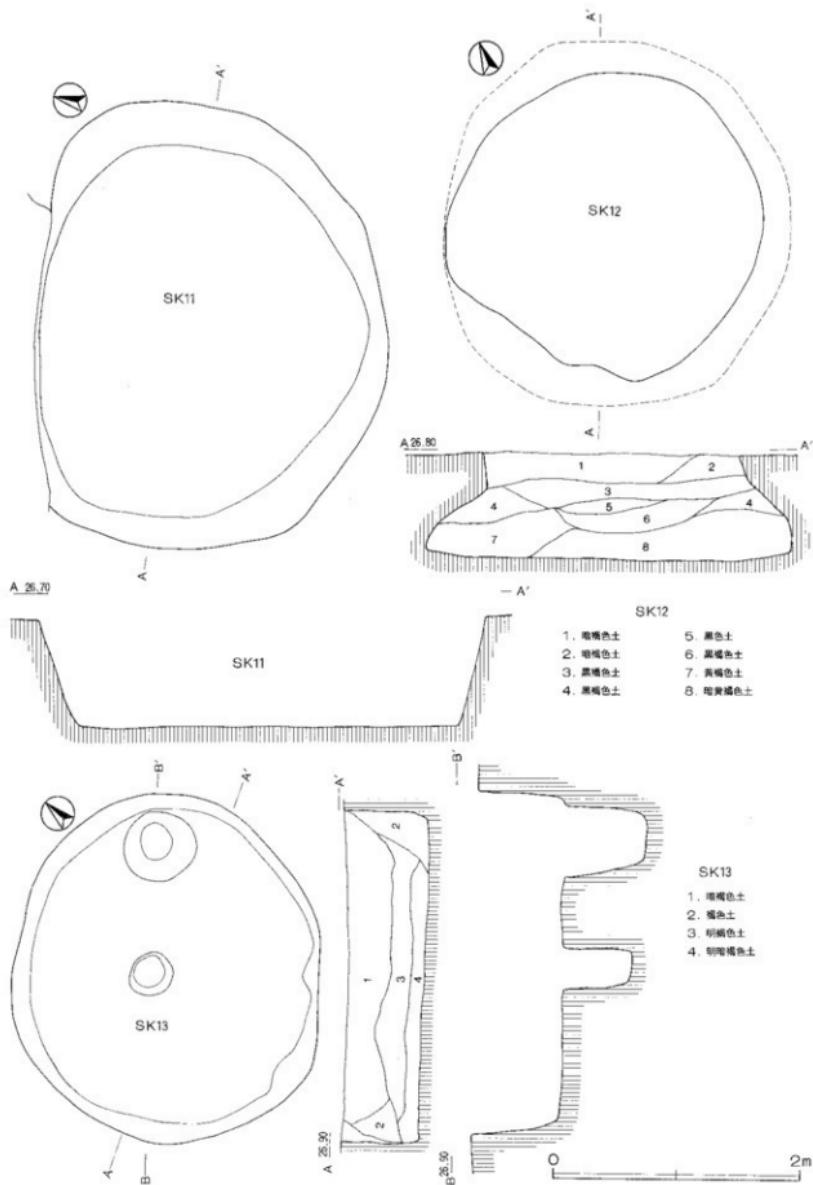


Fig 4 東台遺跡 SK11・12・13

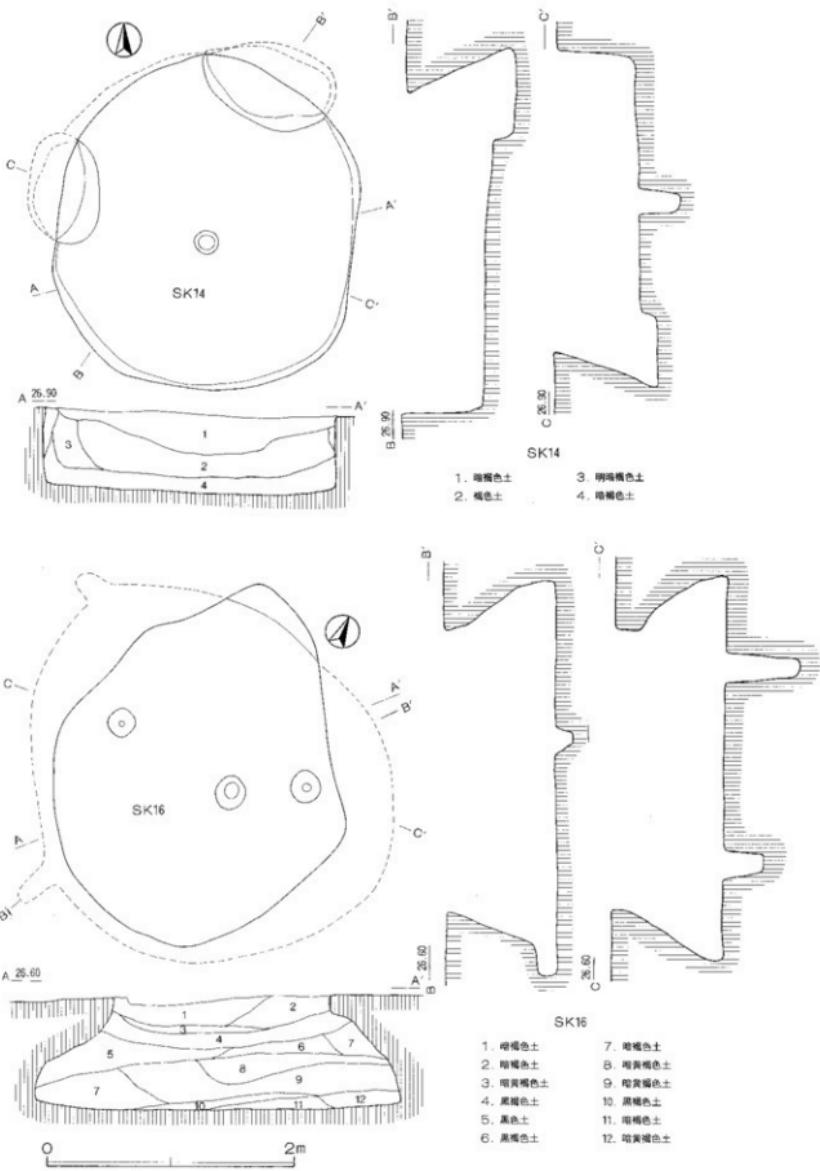


Fig 5 東台遺跡 SK14・16

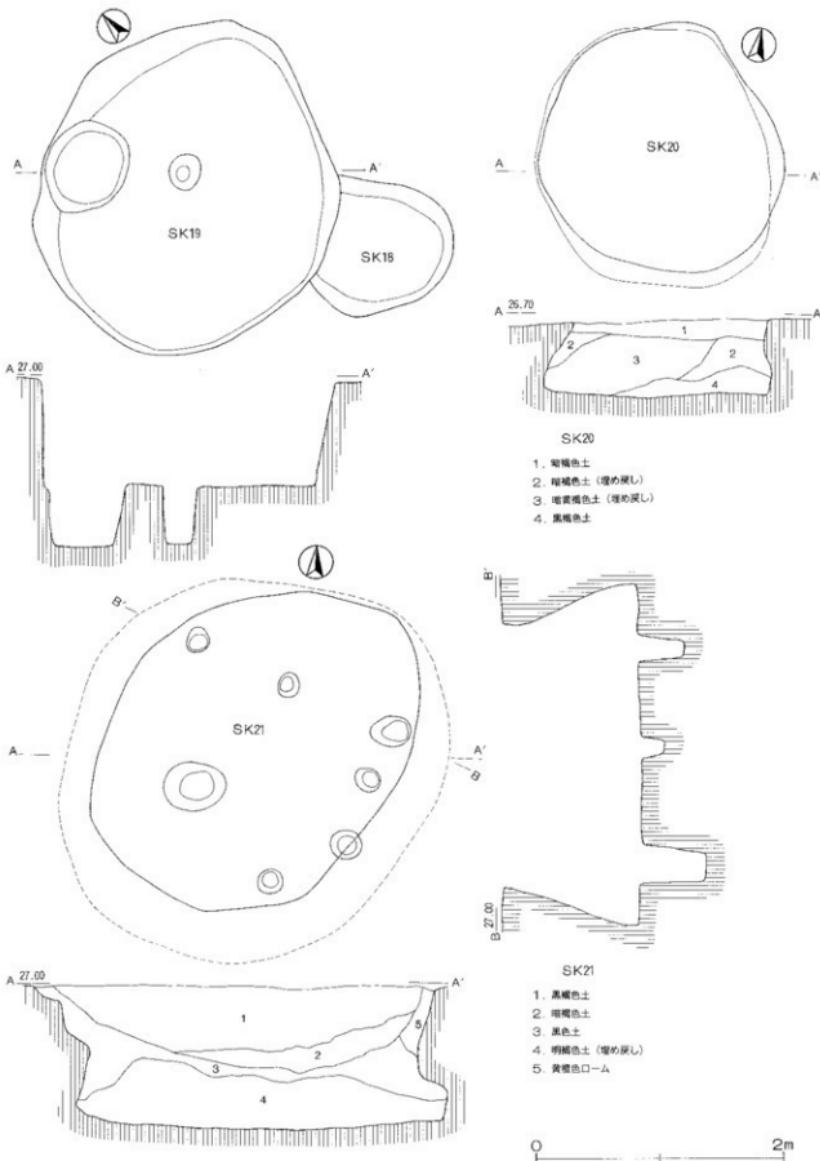


Fig 6 東台遺跡 SK19・20・21

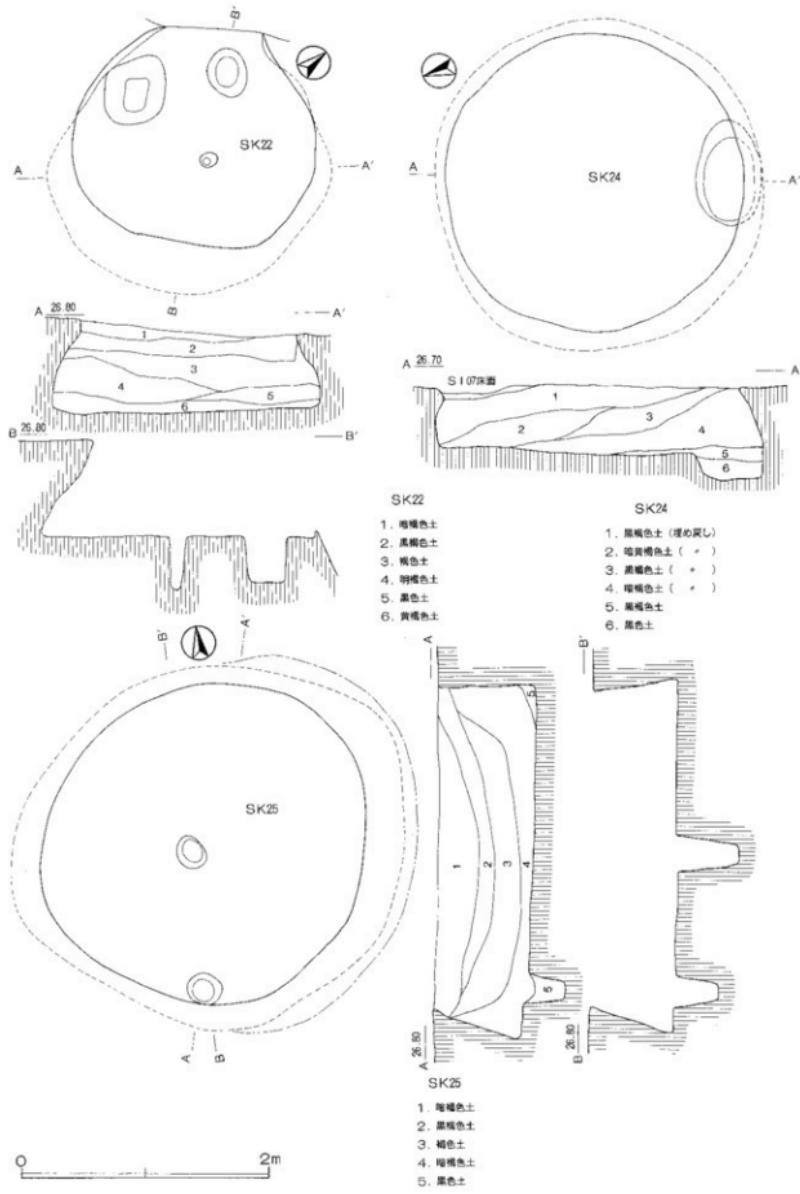
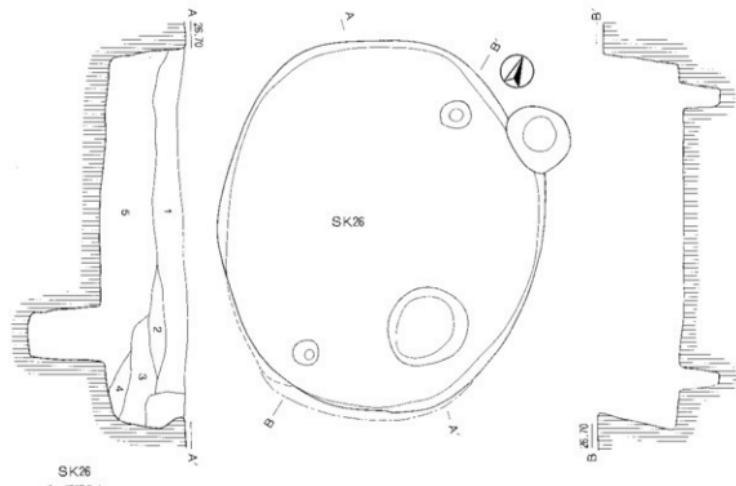
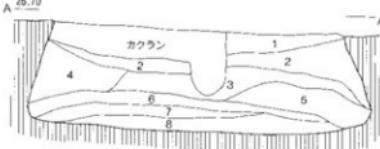
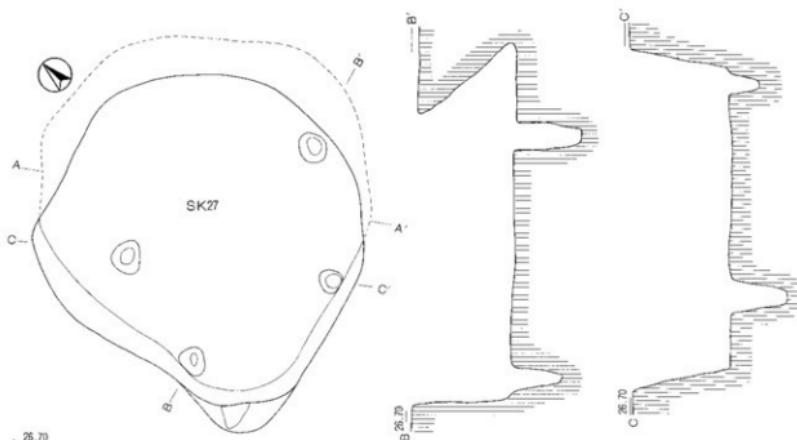


Fig 7 東台遺跡 SK22・24・25



1. 暗褐色土
2. 明褐色土
3. 黒褐色土
4. 黑褐色土
5. 増粘質色土（埋め戻し）



1. 暗褐色土
2. 明褐色土
3. 黒褐色土
4. 明褐色土
5. 明褐色土
6. 黒色土
7. 黑褐色土
8. 明褐色土

0 2m

Fig 8 東台遺跡 SK26・27

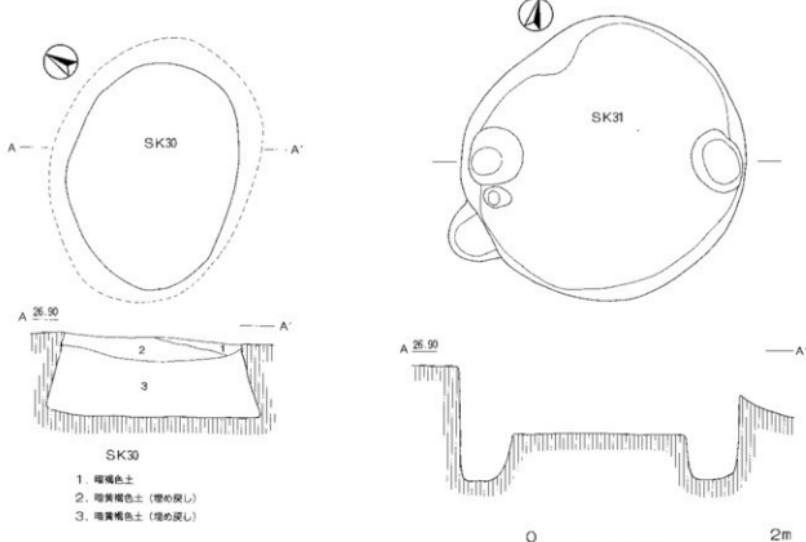
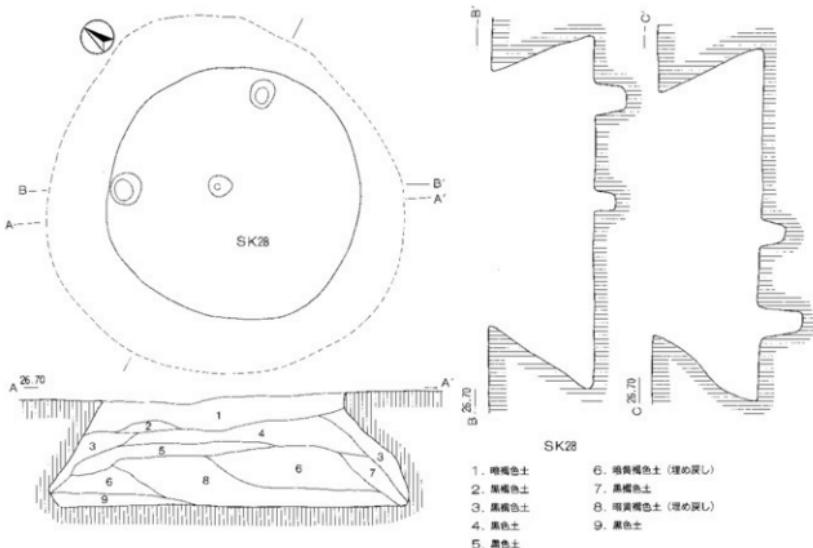


Fig 9 東台遺跡 SK28・30・31

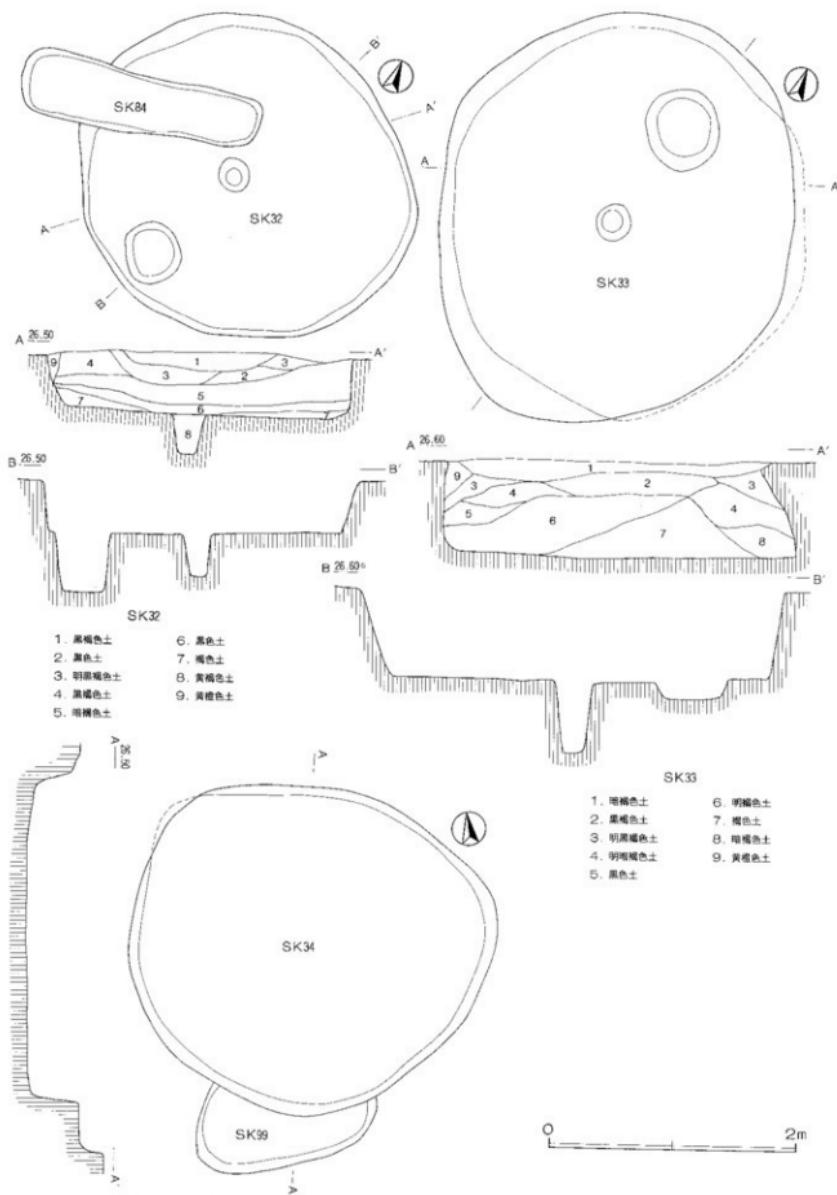


Fig 10 東台遺跡 SK32・33・34

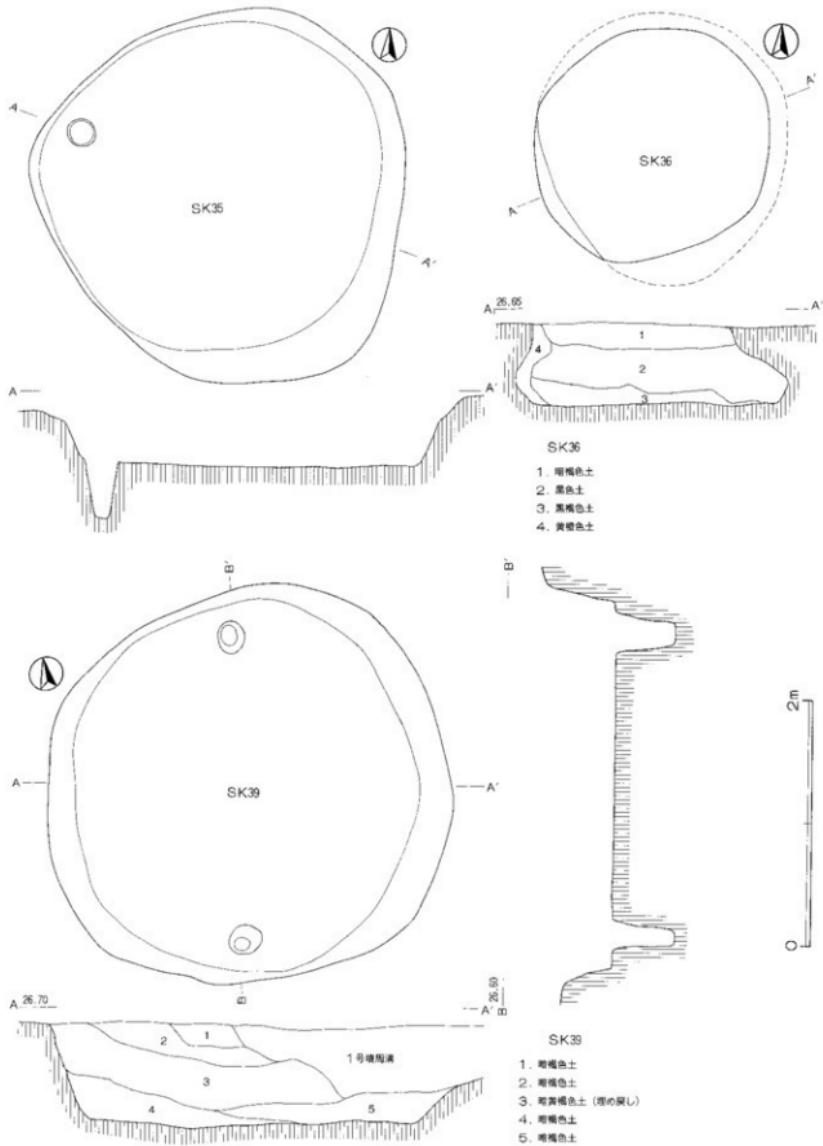


Fig 11 東台遺跡 SK35・36・39

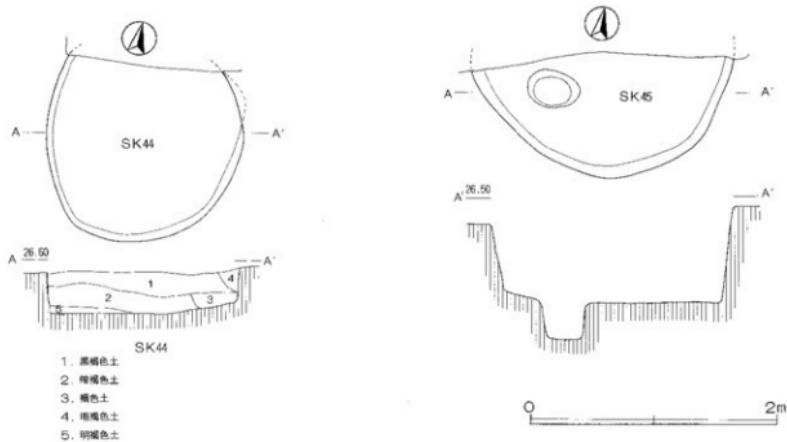
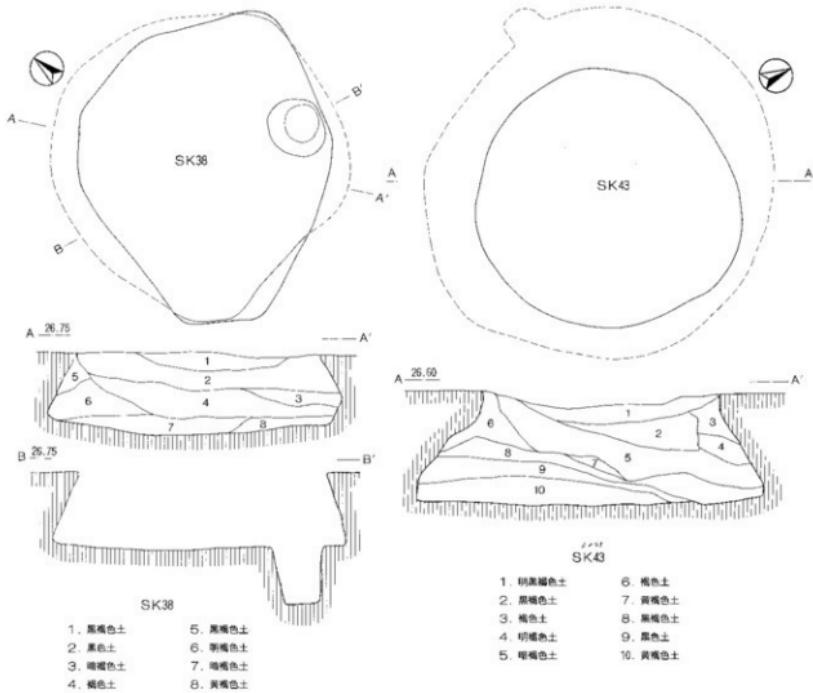


Fig 12 東台遺跡 SK38・43・44・45

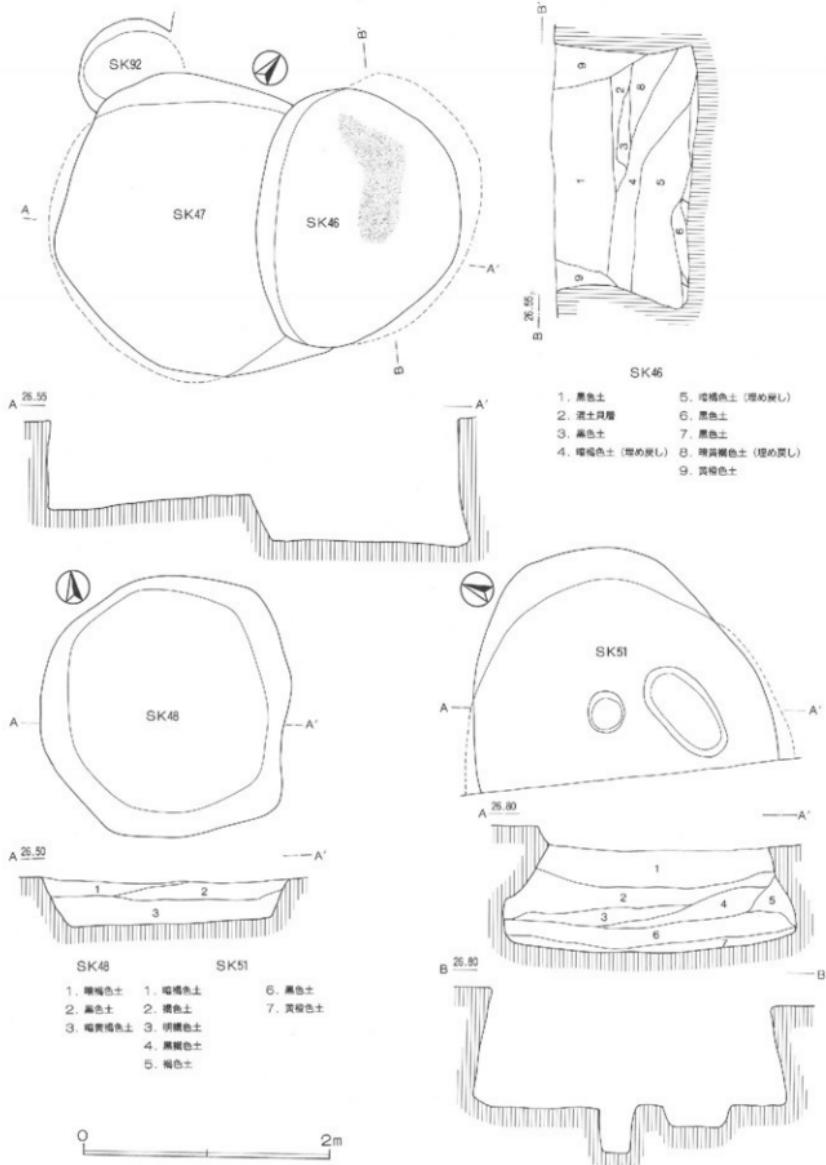


Fig 13 東台遺跡 SK46・47・48・51・92

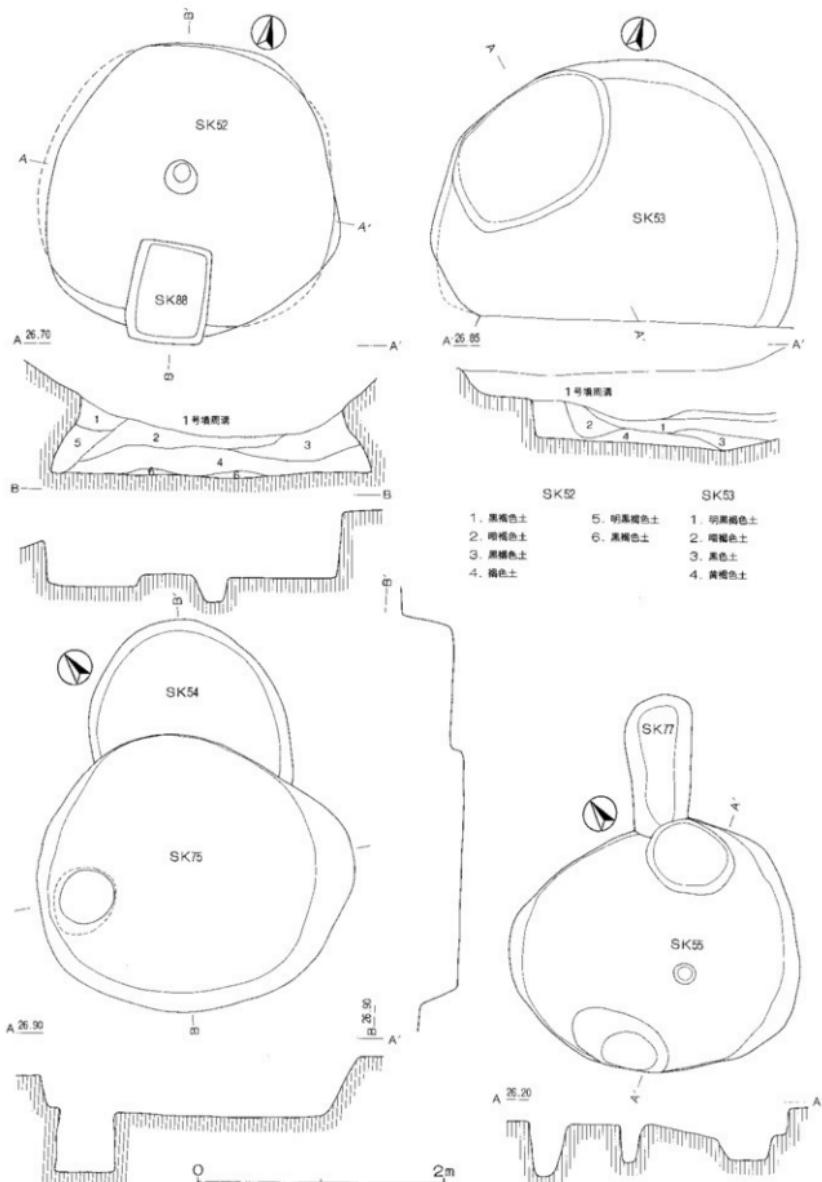


Fig 14 東台遺跡 SK52・53・54・55・75・77・88

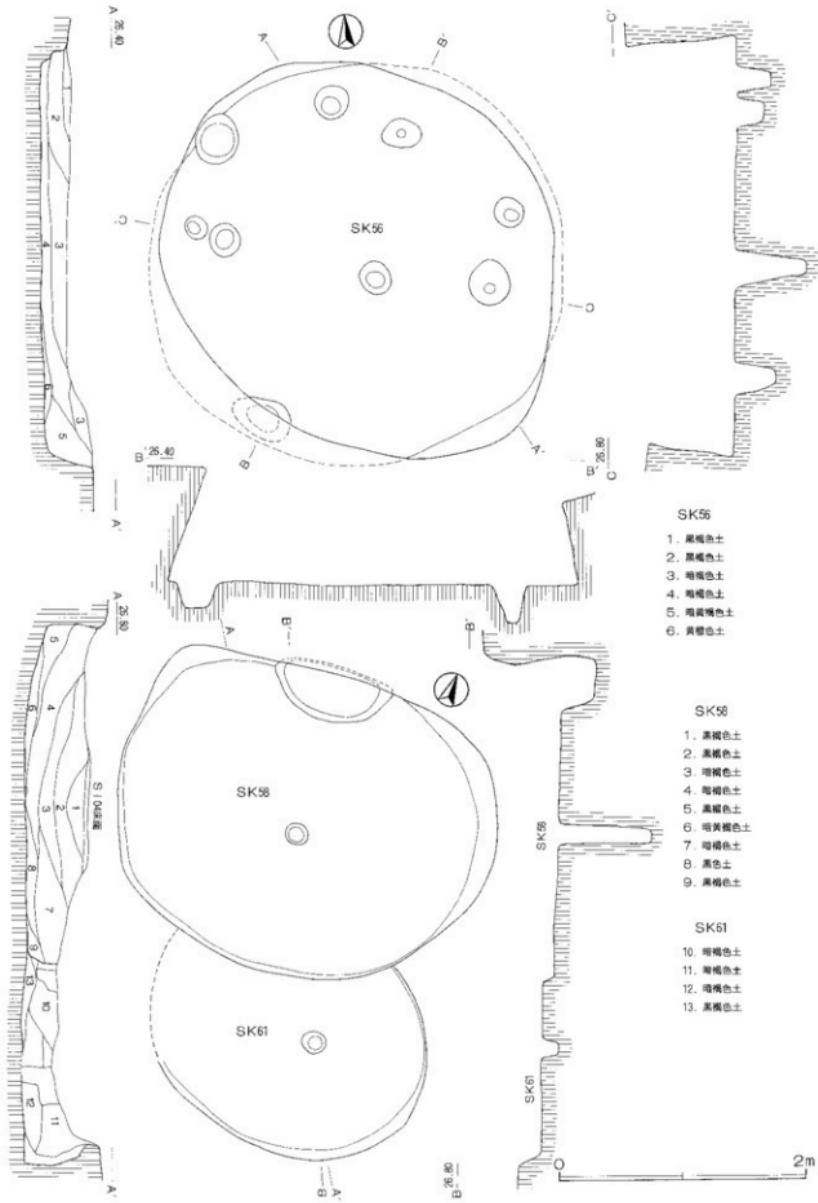


Fig 15 東台遺跡 SK56・58・61

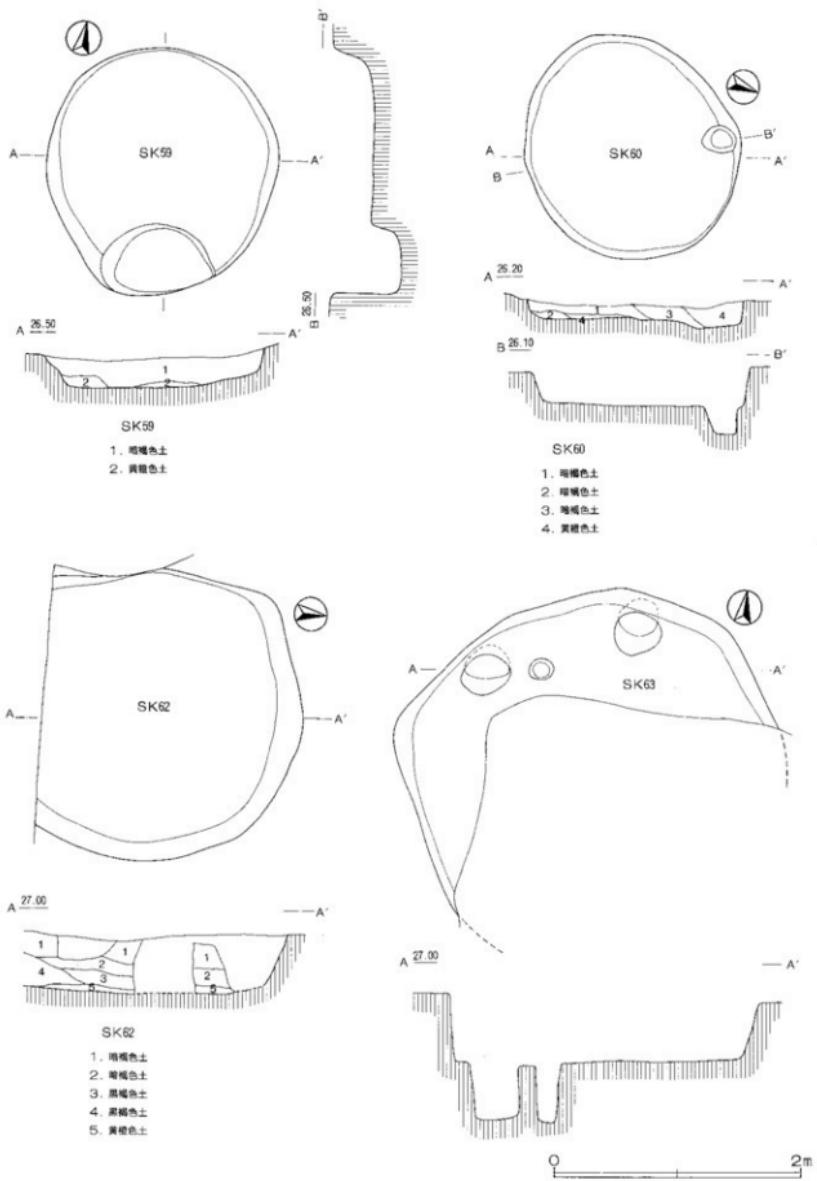


Fig 16 東台遺跡 SK59·60·62·63

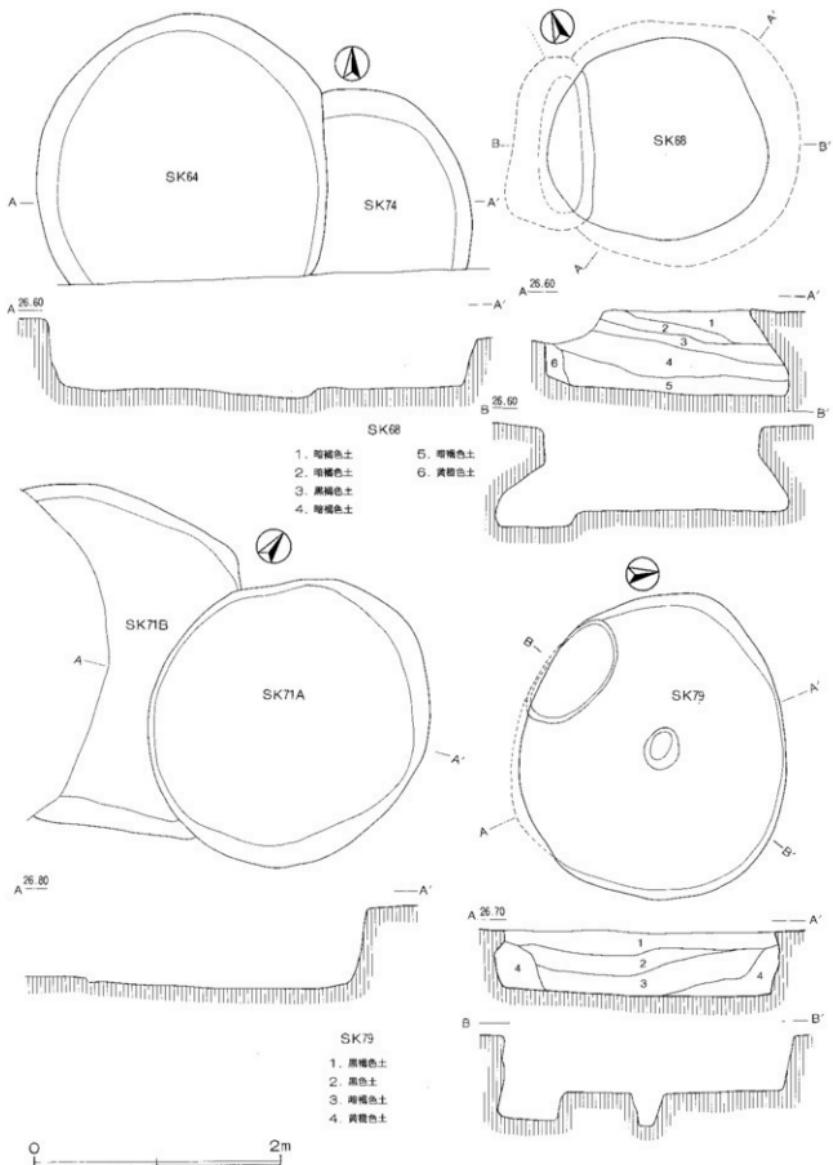


Fig 17 東台遺跡 SK64・68・71A・71B・74・79

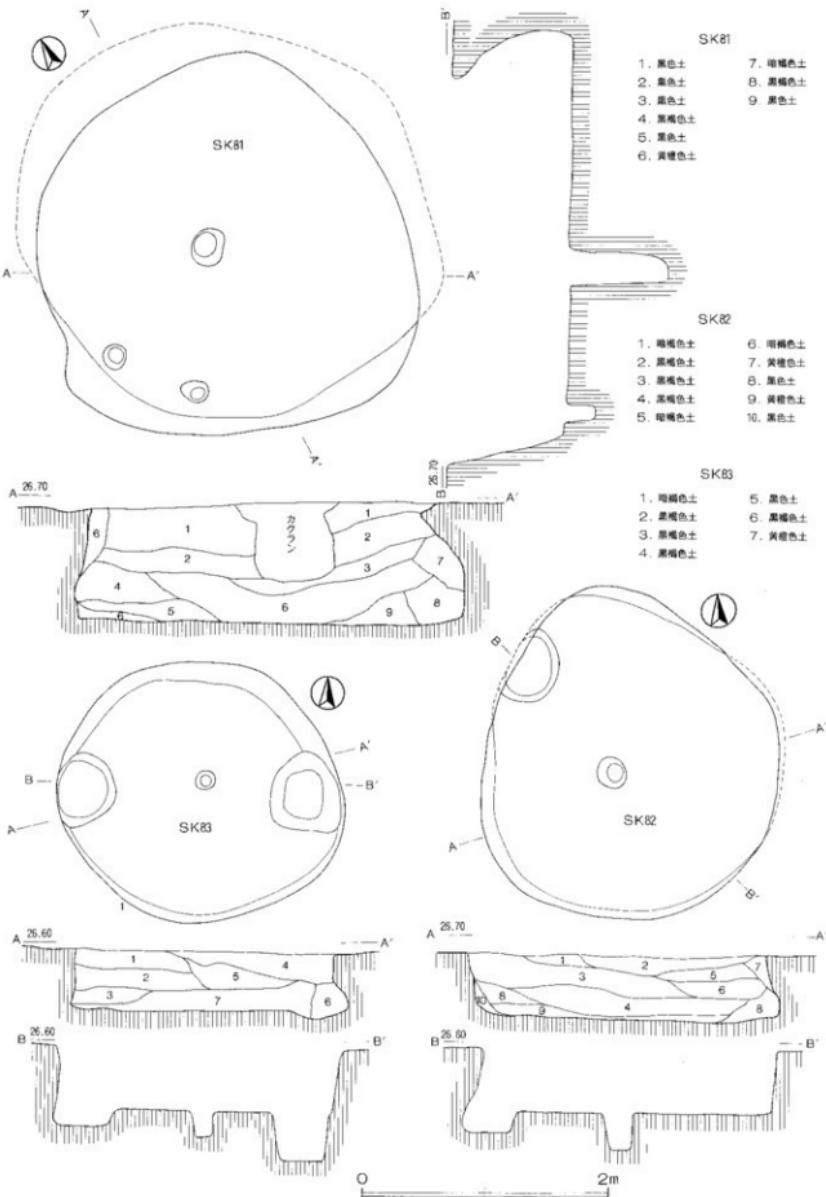


Fig 18 東台遺跡 SK81・82・83

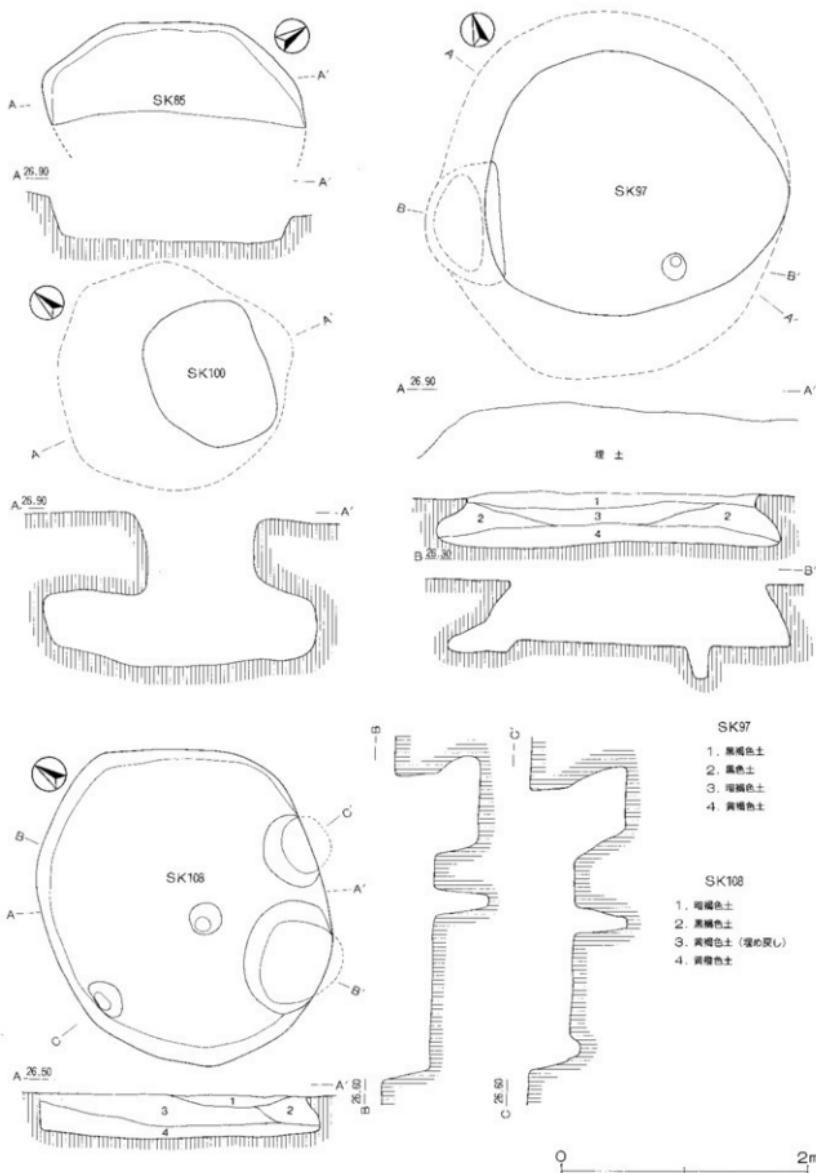


Fig 19 東台遺跡 SK85・97・100・108

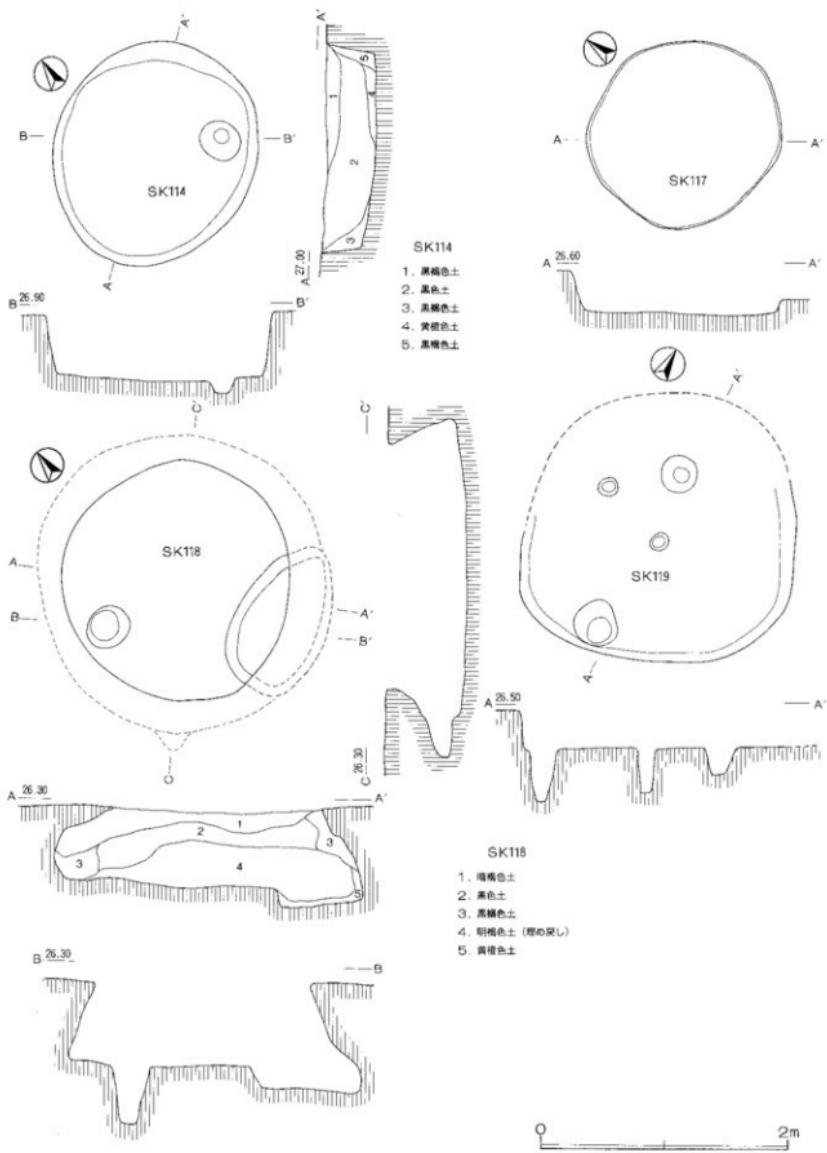


Fig 20 東台遺跡 SK114・117・118・119

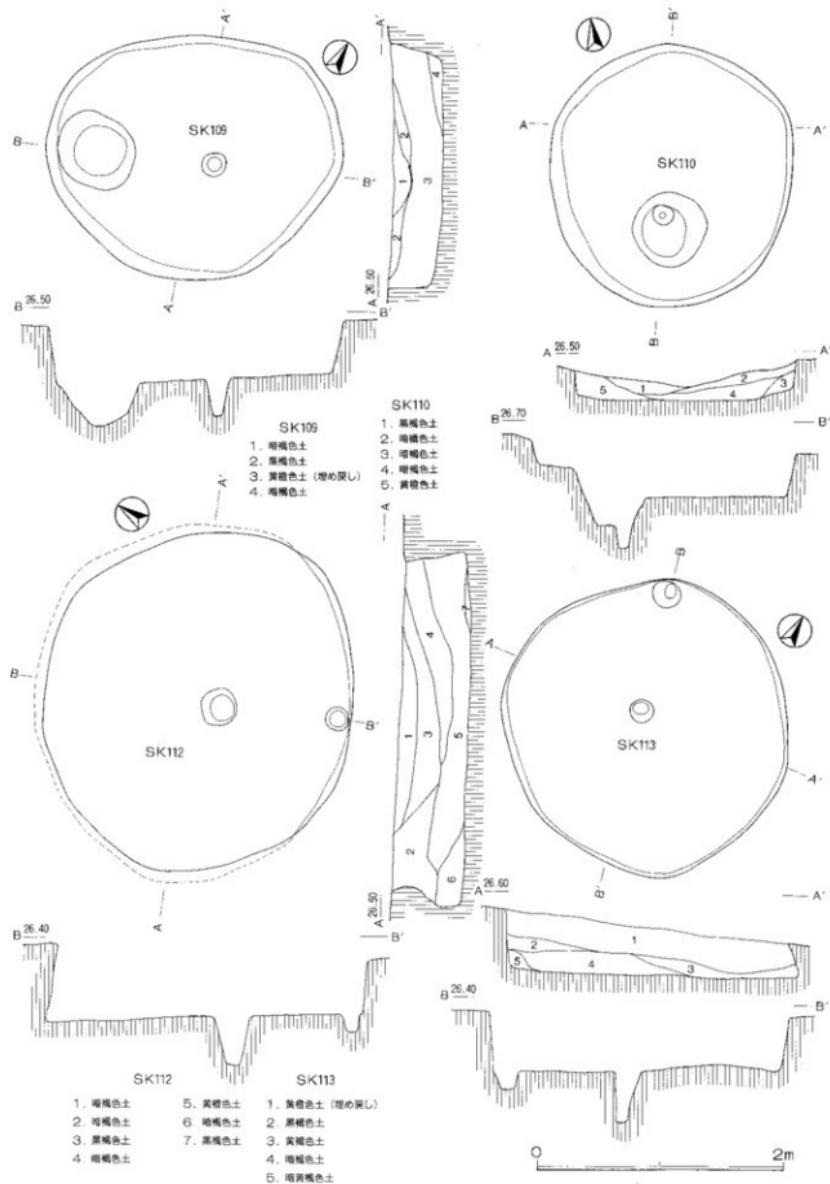


Fig 21 東台遺跡 SK109・110・111・112・113

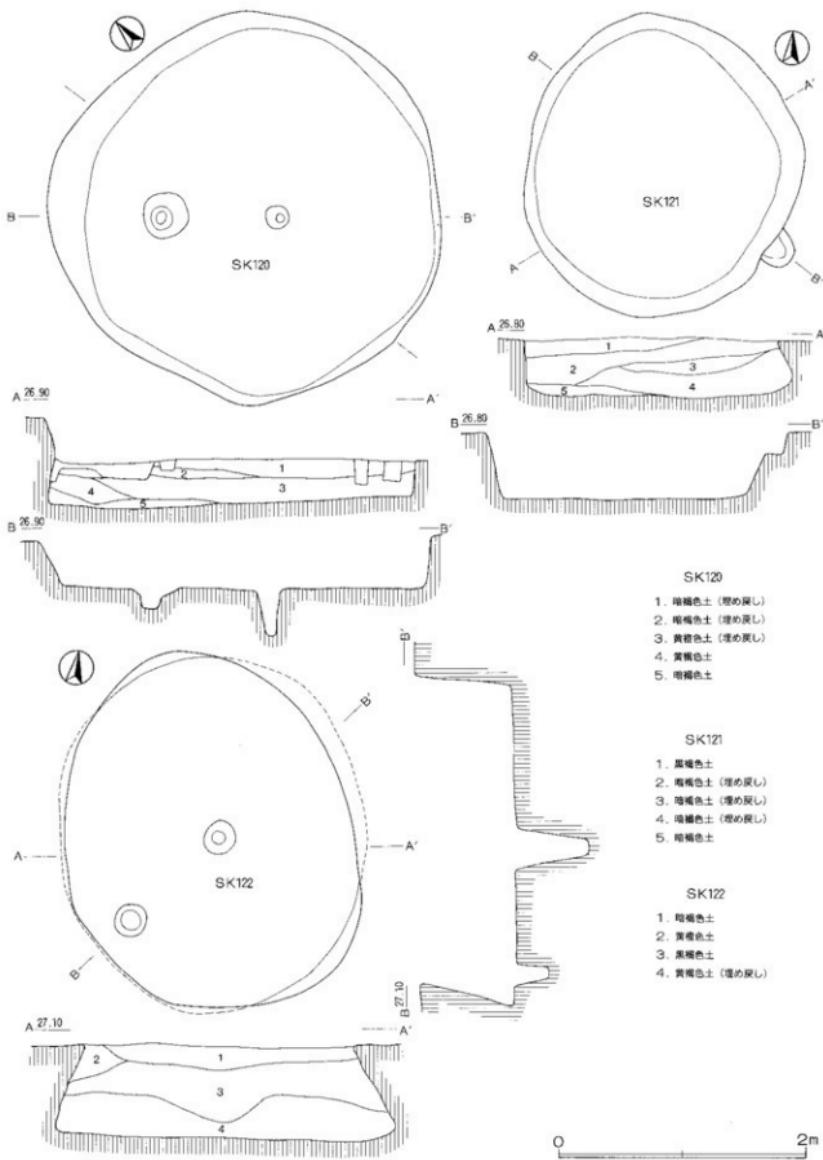


Fig 22 東台遺跡 SK120・121・122

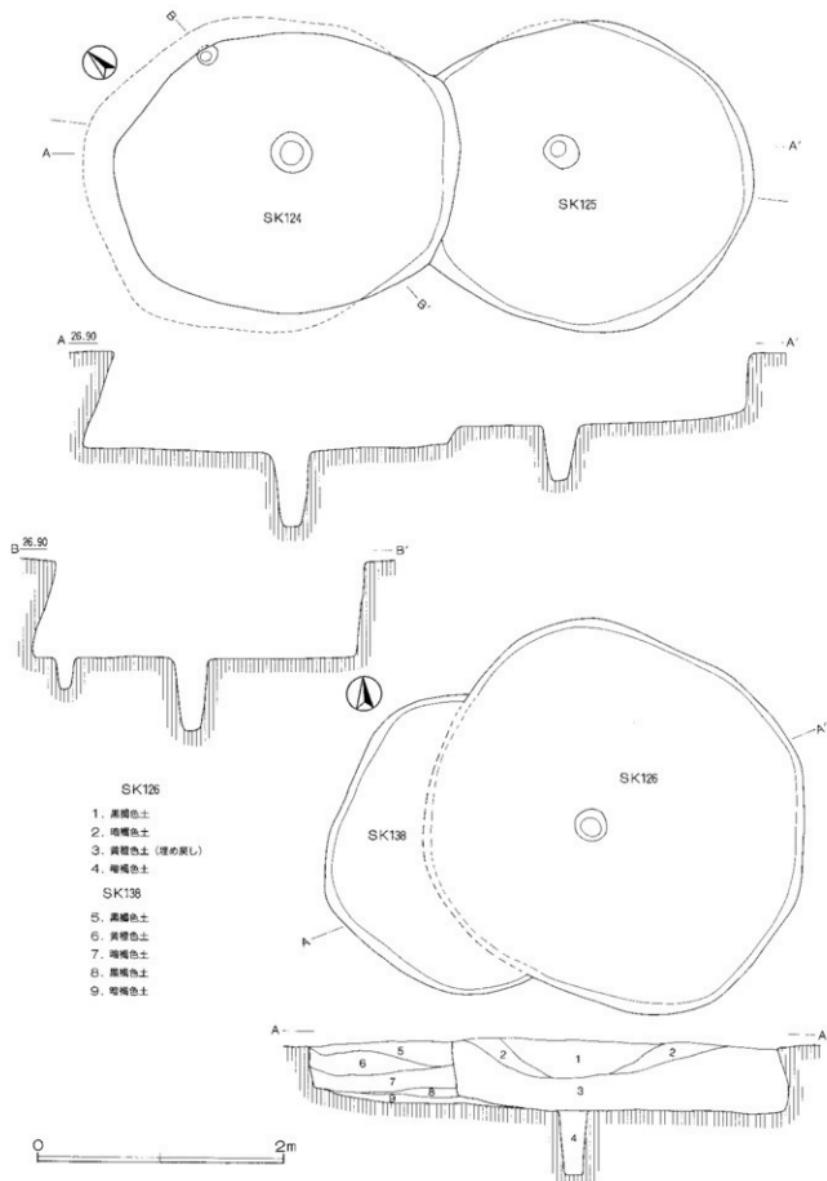


Fig 23 東台遺跡 SK124・125・126・138

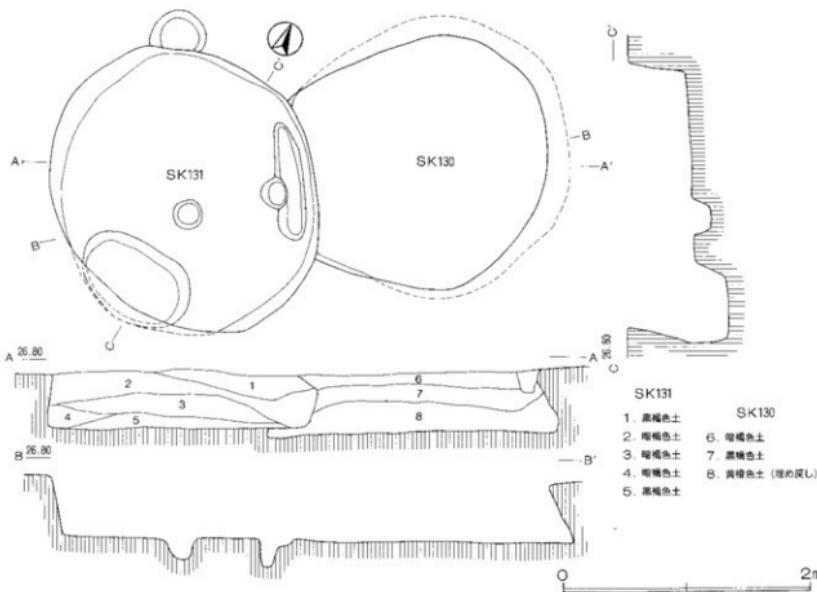
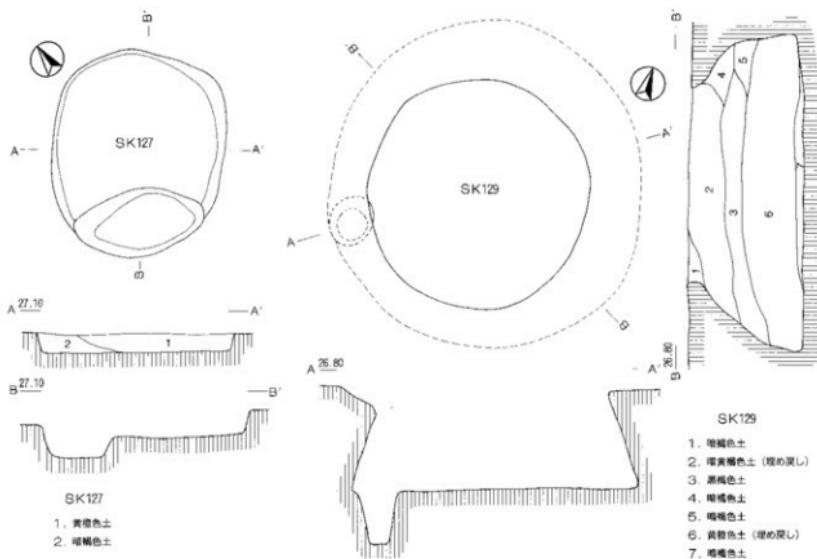


Fig 24 東台遺跡 SK127・129・130・131

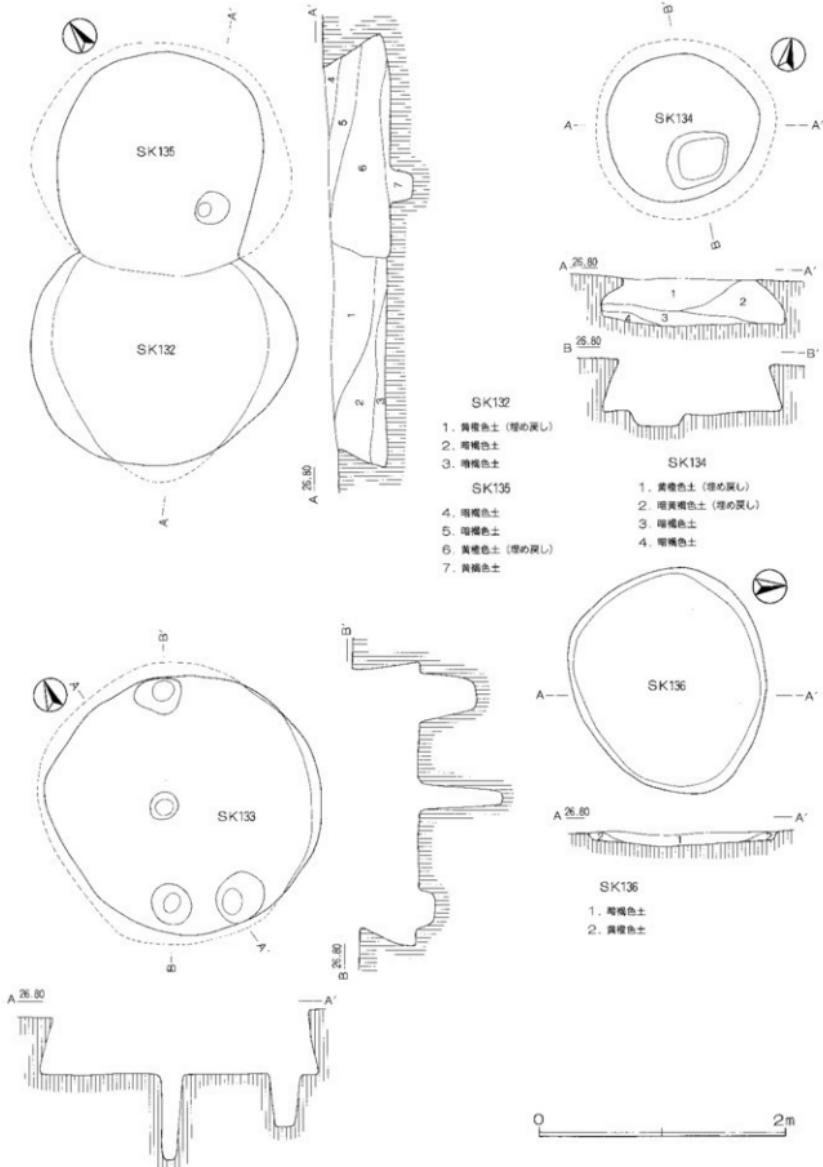


Fig 25 東台遺跡 SK132・133・134・135・136

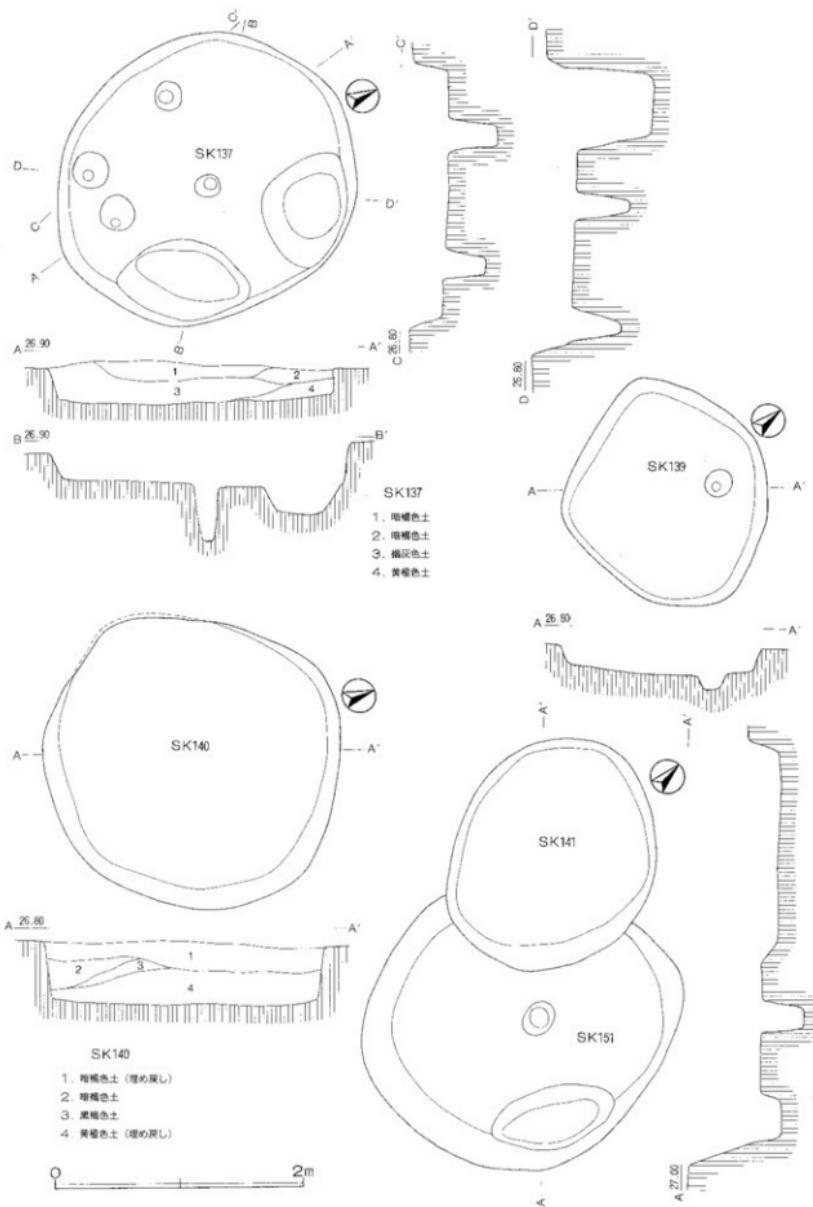


Fig 26 東台遺跡 SK137・139・140・141・151

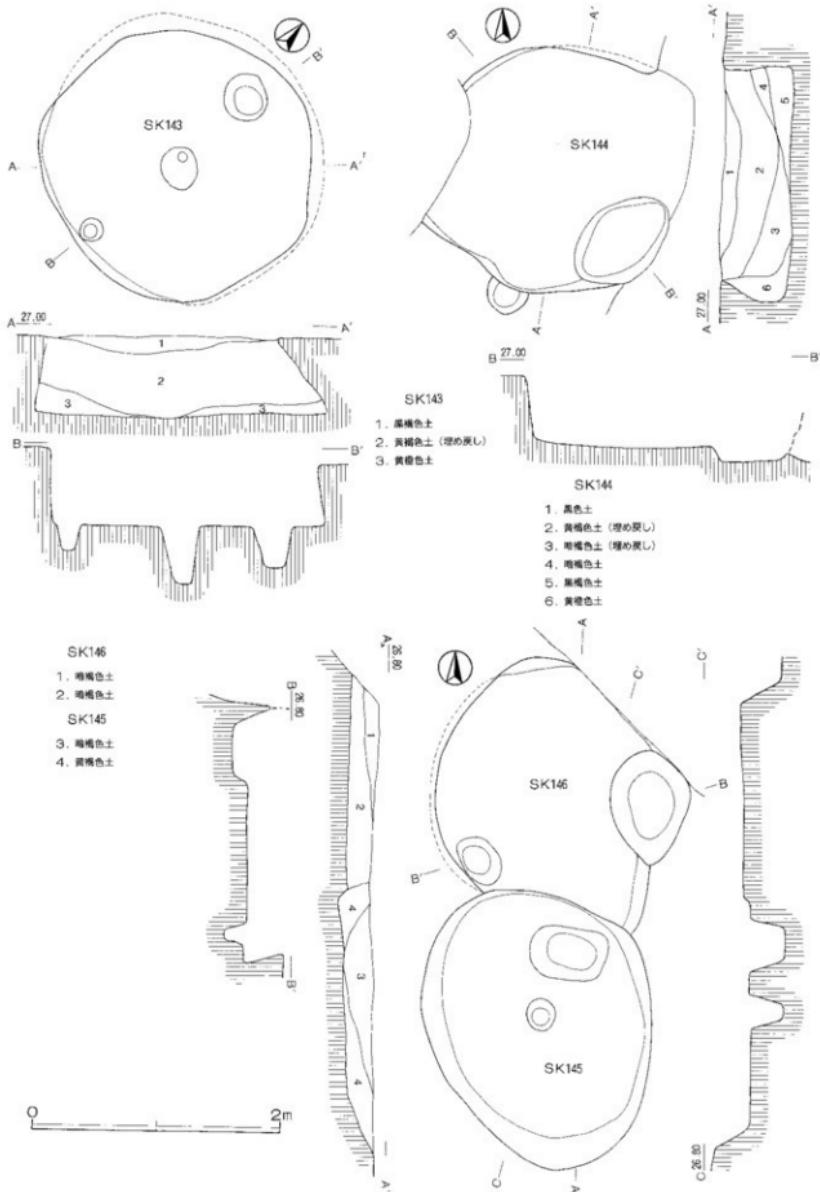


Fig 27 東台遺跡 SK143・144・145・146

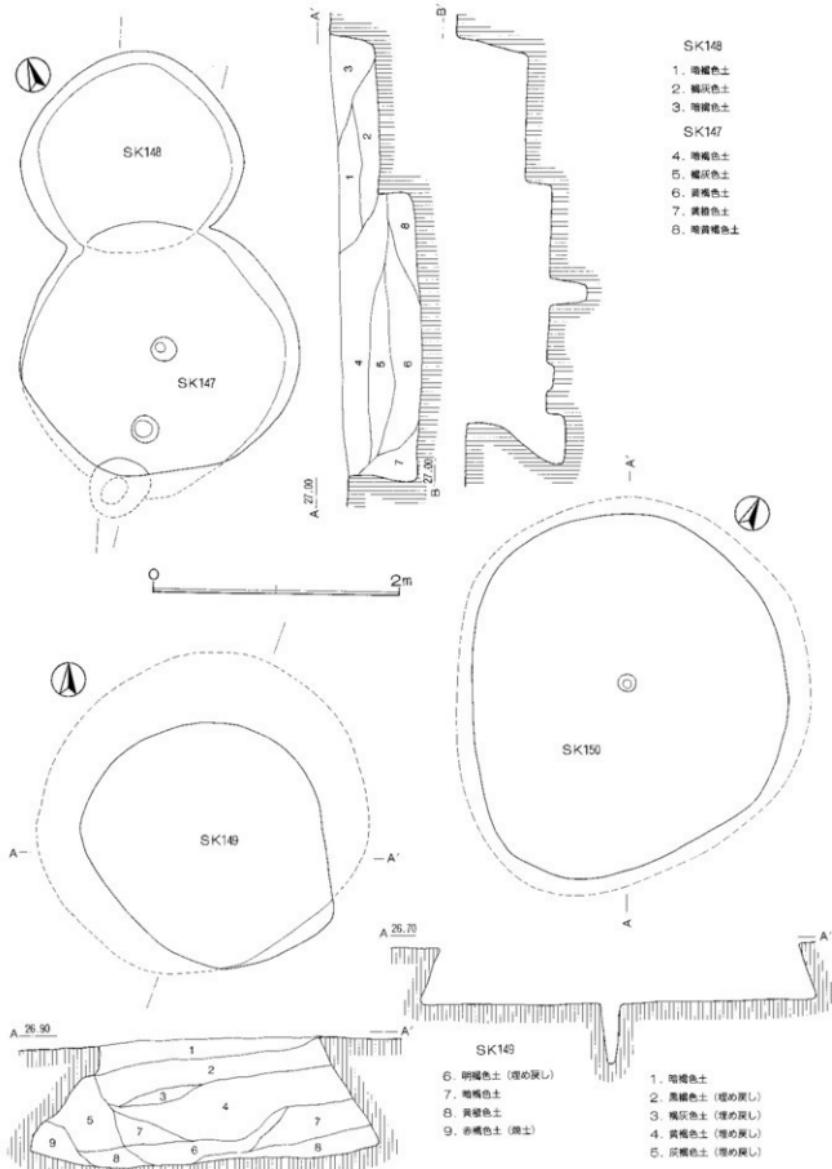


Fig 28 東台遺跡 SK147・148・149・150

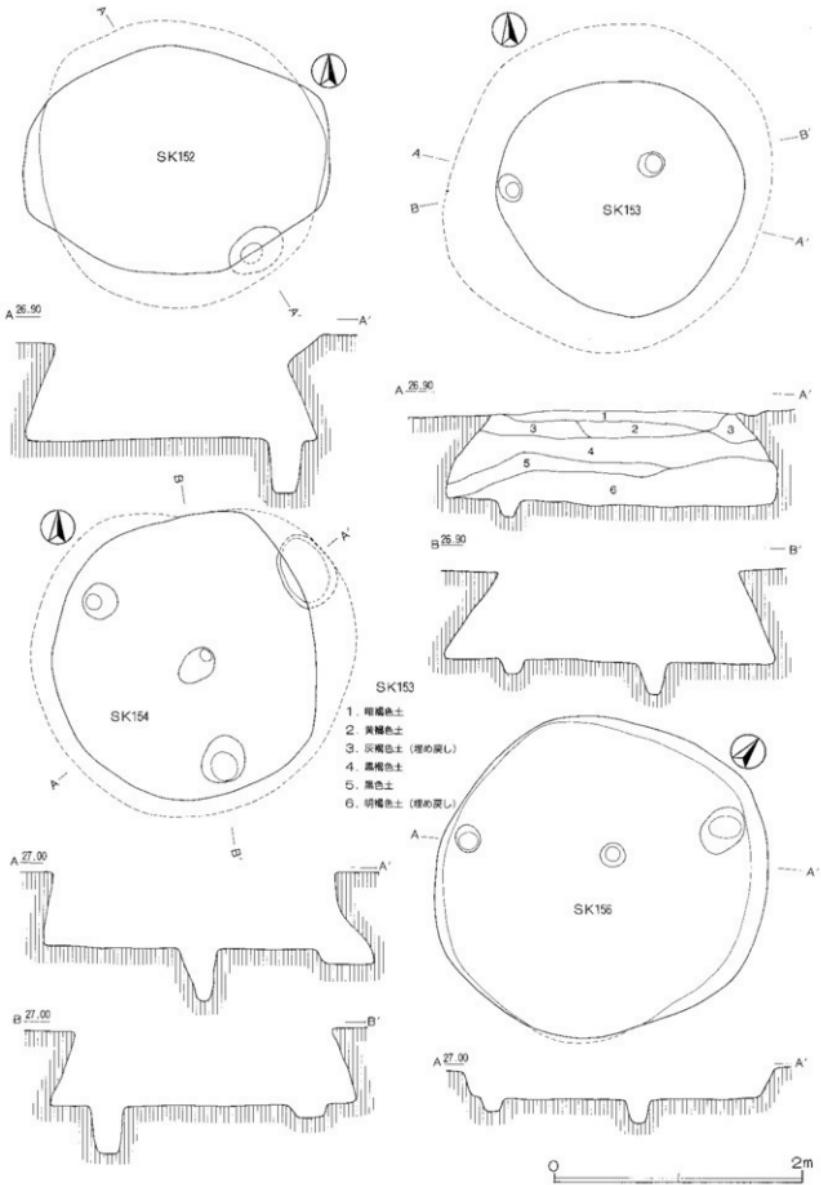
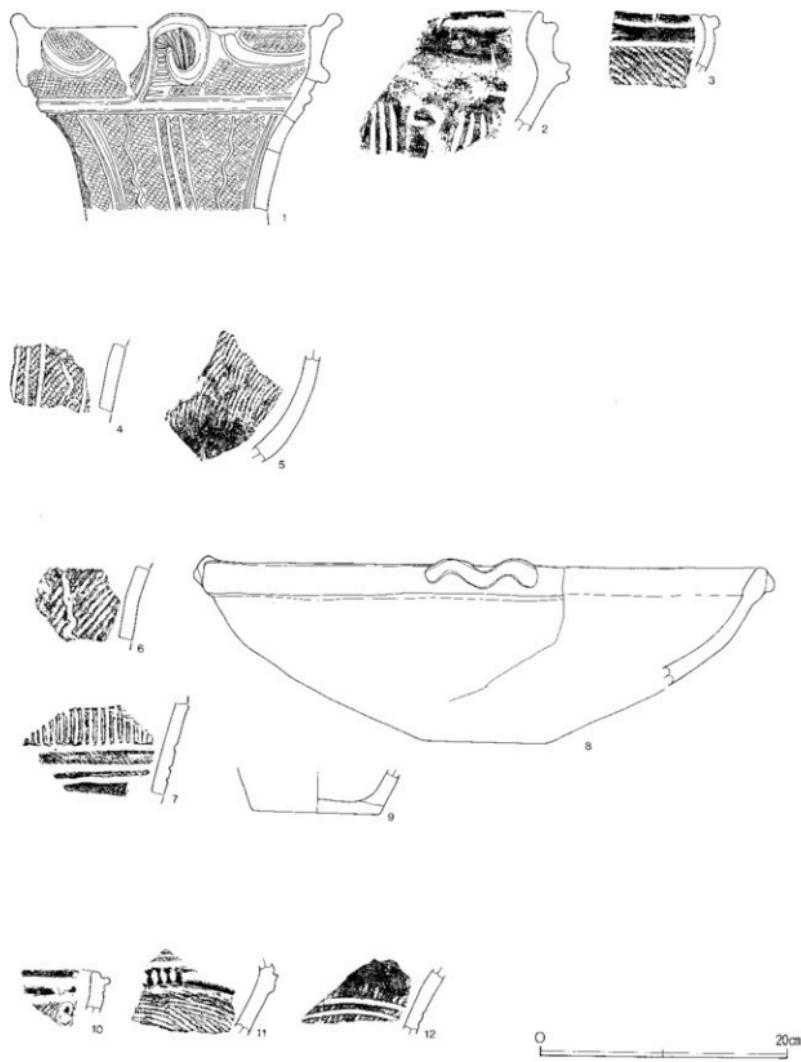


Fig 29 東台遺跡 SK152・153・154・155



SK3(1~3)・SK4(4・5)・SK5(6~9)・SK7(10~12)

Fig 30 東台遺跡 SK3・4・5・7

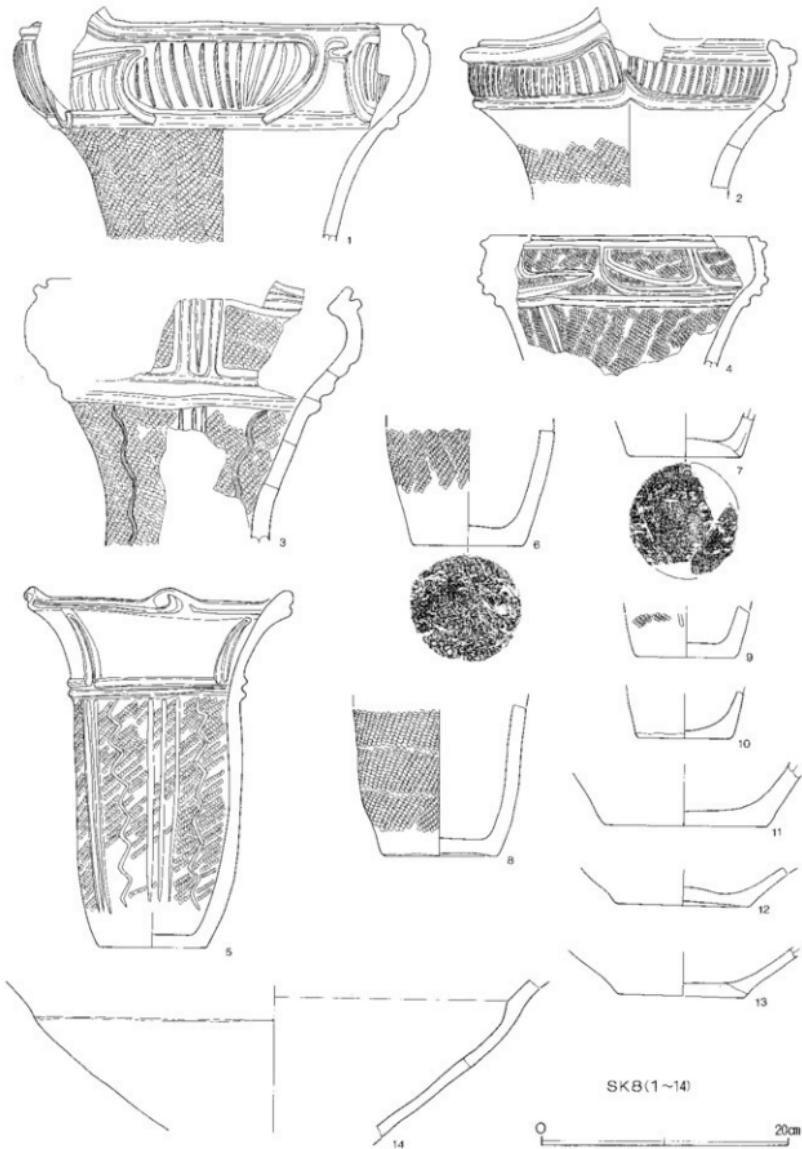


Fig. 31 東台遺跡 SK8(1)

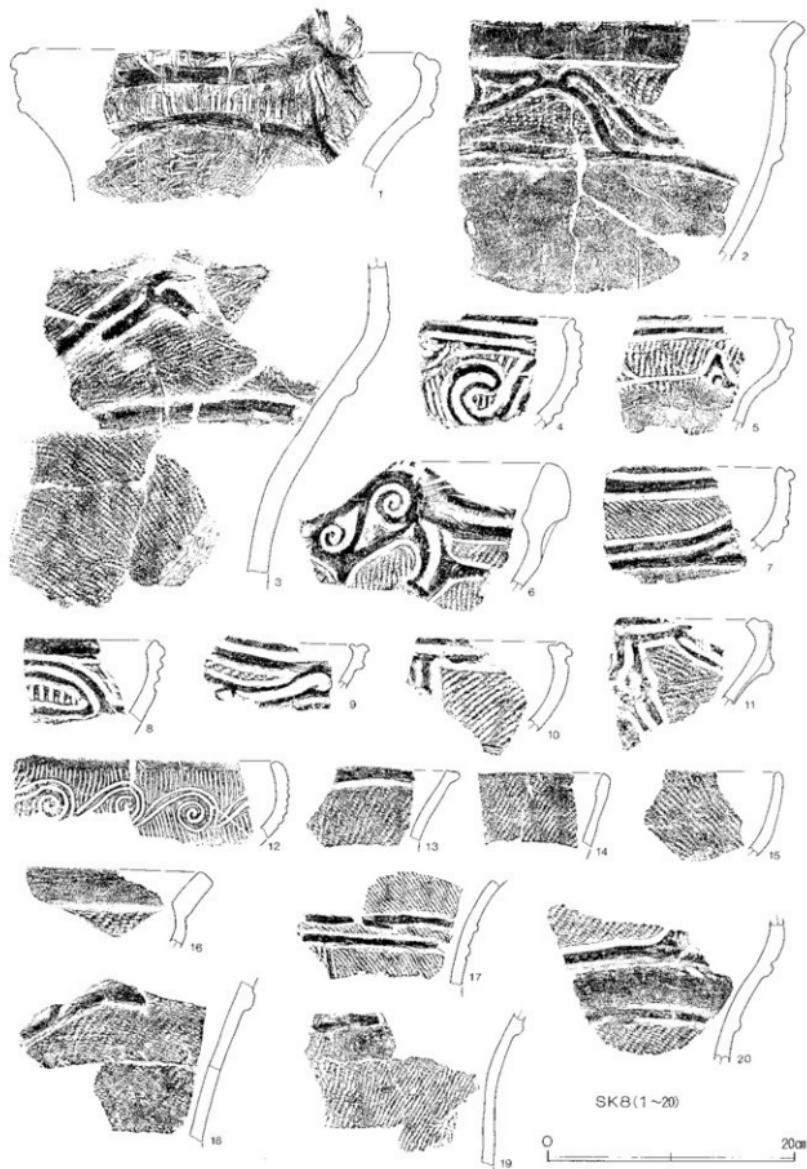


Fig 32 東台遺跡 SK8(2)



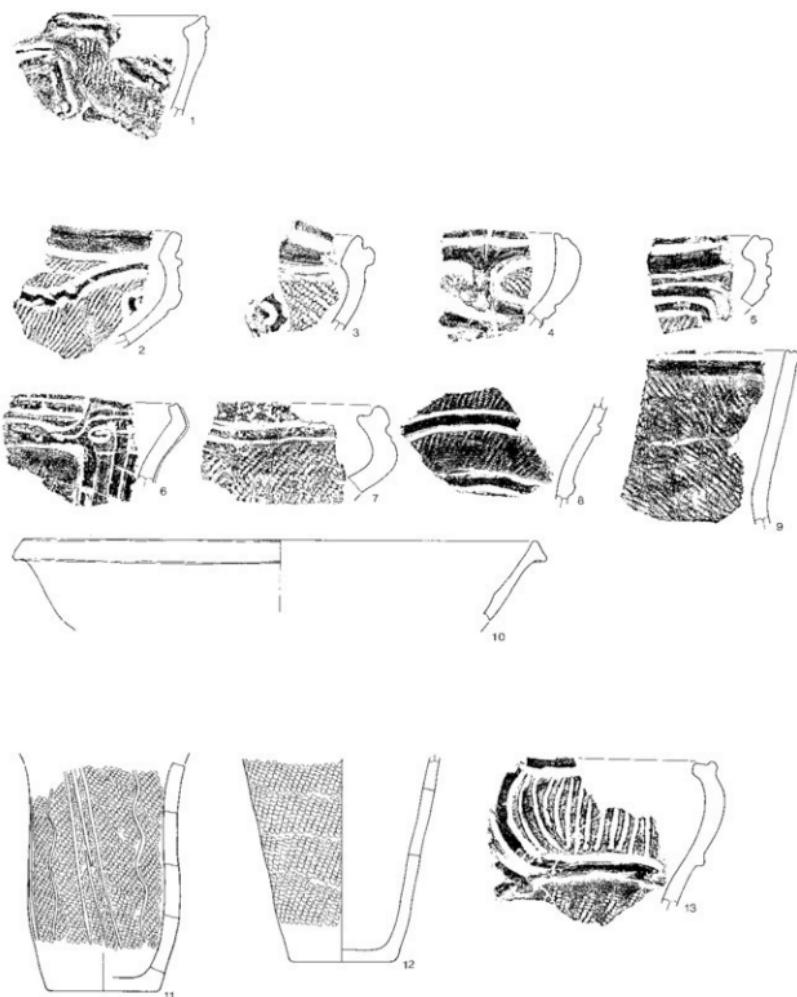
Fig 33 東台遺跡 SK9・12



SK13(1~9) SK14(10~16)

0 20cm

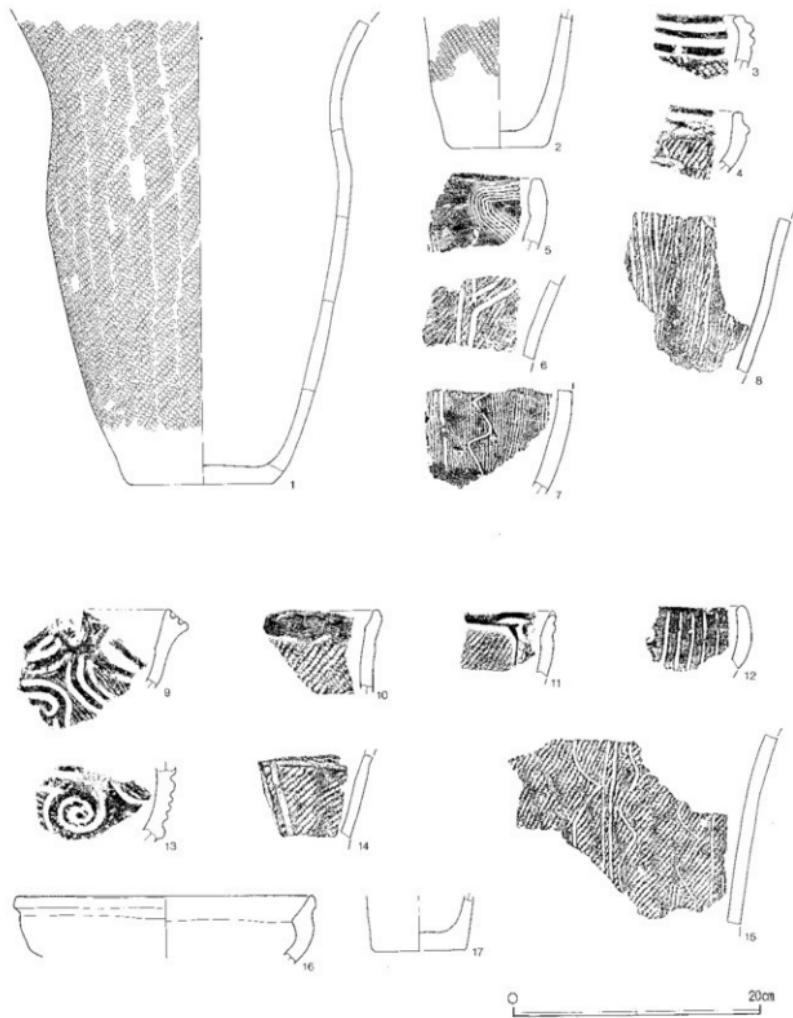
Fig 34 東台遺跡 SK13・14



SK16(1) SK19(2~10) SK20(11~13)

0 20mm

Fig 35 東台遺跡 SK16・19・20



SK21(1~8) SK22(9~17)

Fig 36 東台遺跡 SK21・22

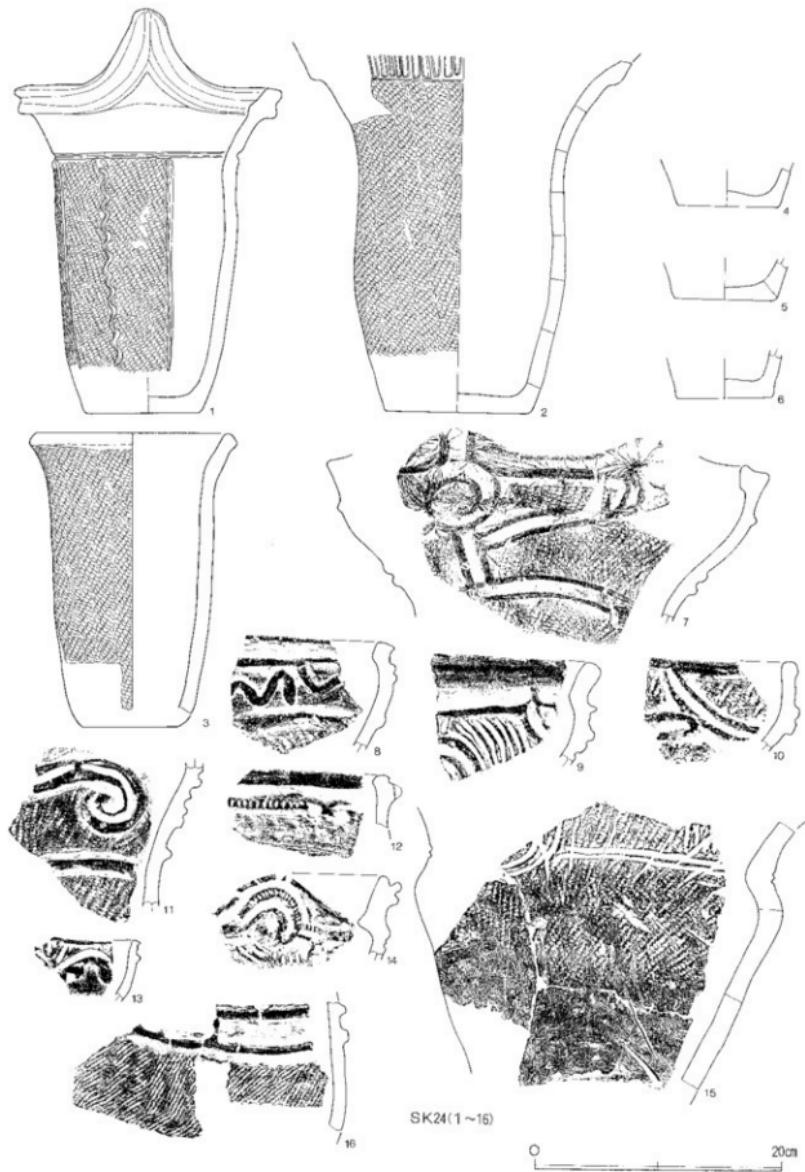
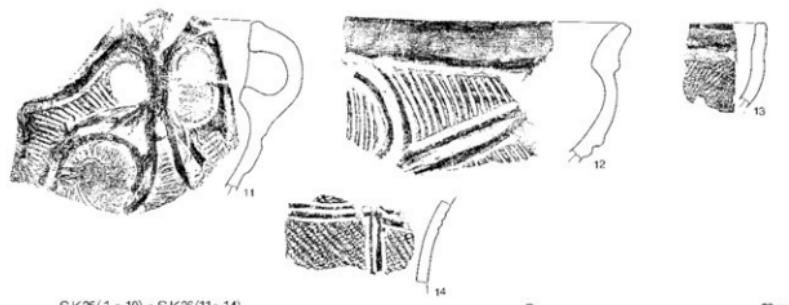
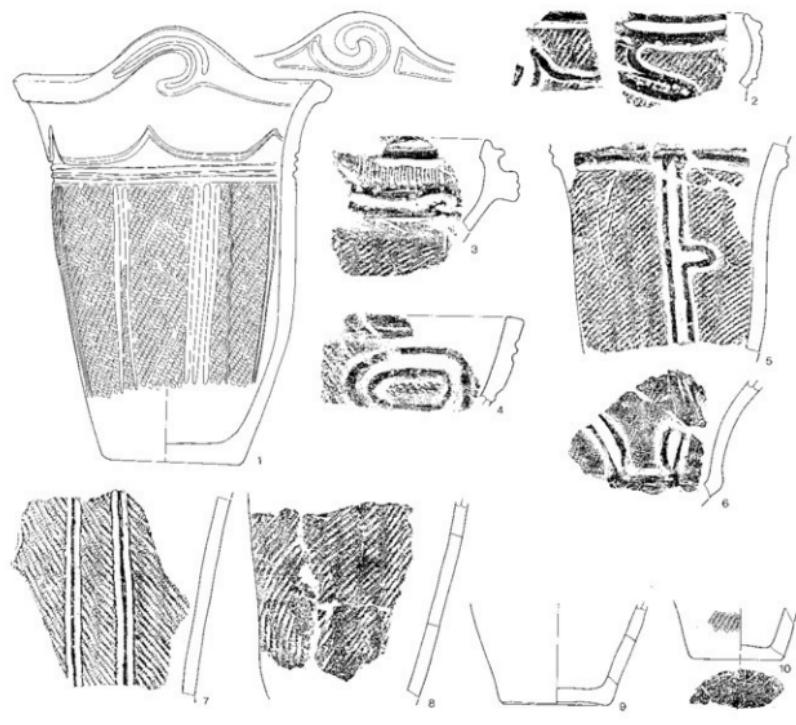


Fig 37 東台遺跡 SK24



SK25(1~10)・SK26(11~14)

0 20cm

Fig 38 東台遺跡 SK25・26

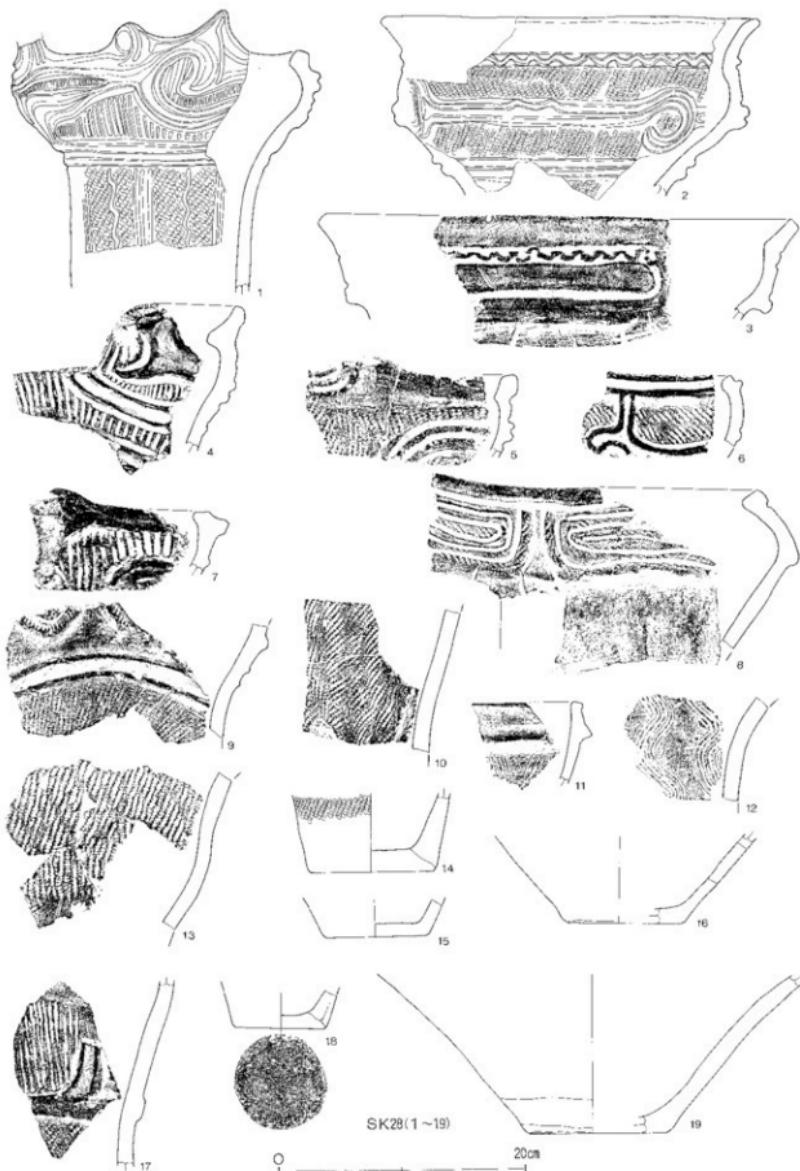
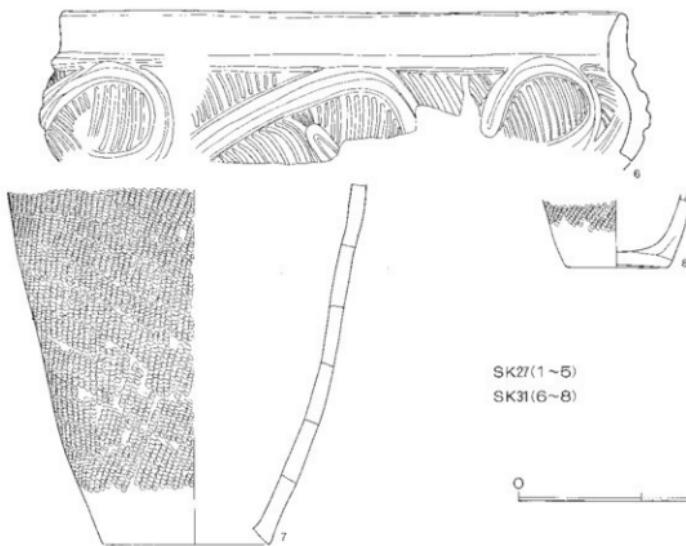
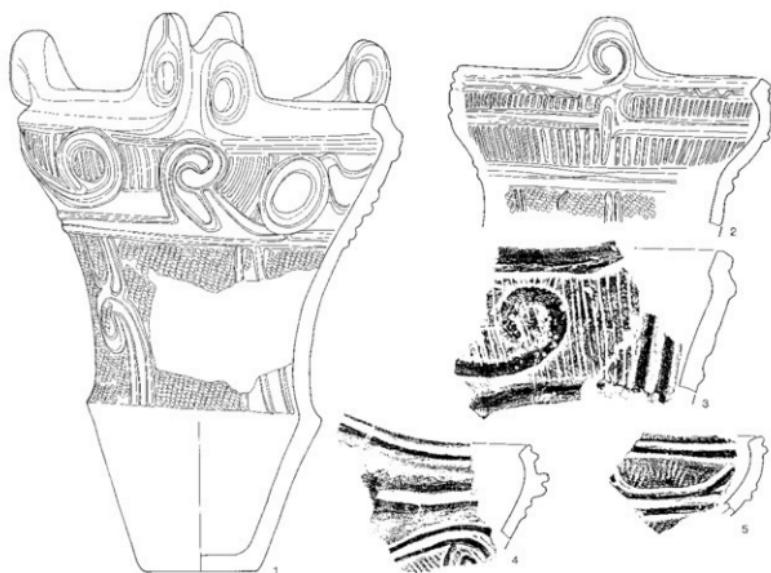


Fig 39 東台遺跡 SK28



SK27(1~5)
SK31(6~8)

0 1 20cm

Fig 40 東台遺跡 SK27・31

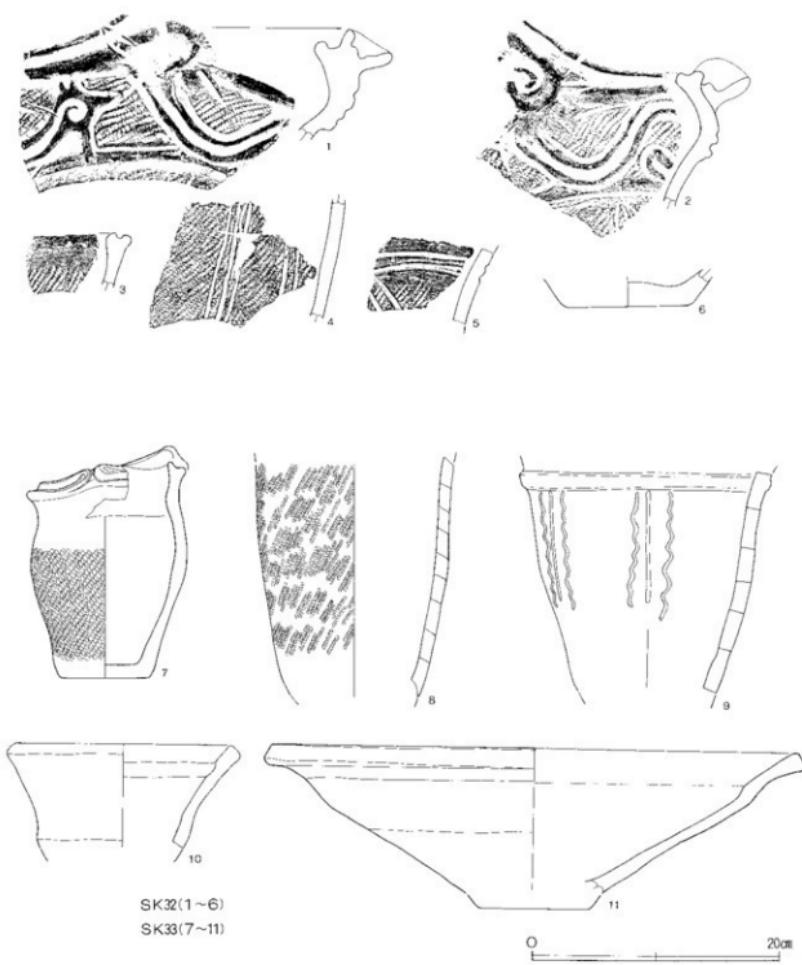


Fig 41 東台遺跡 SK32・33



SK34(1~16)

SK35(17)



0 20cm

Fig 42 東台遺跡 SK34・35

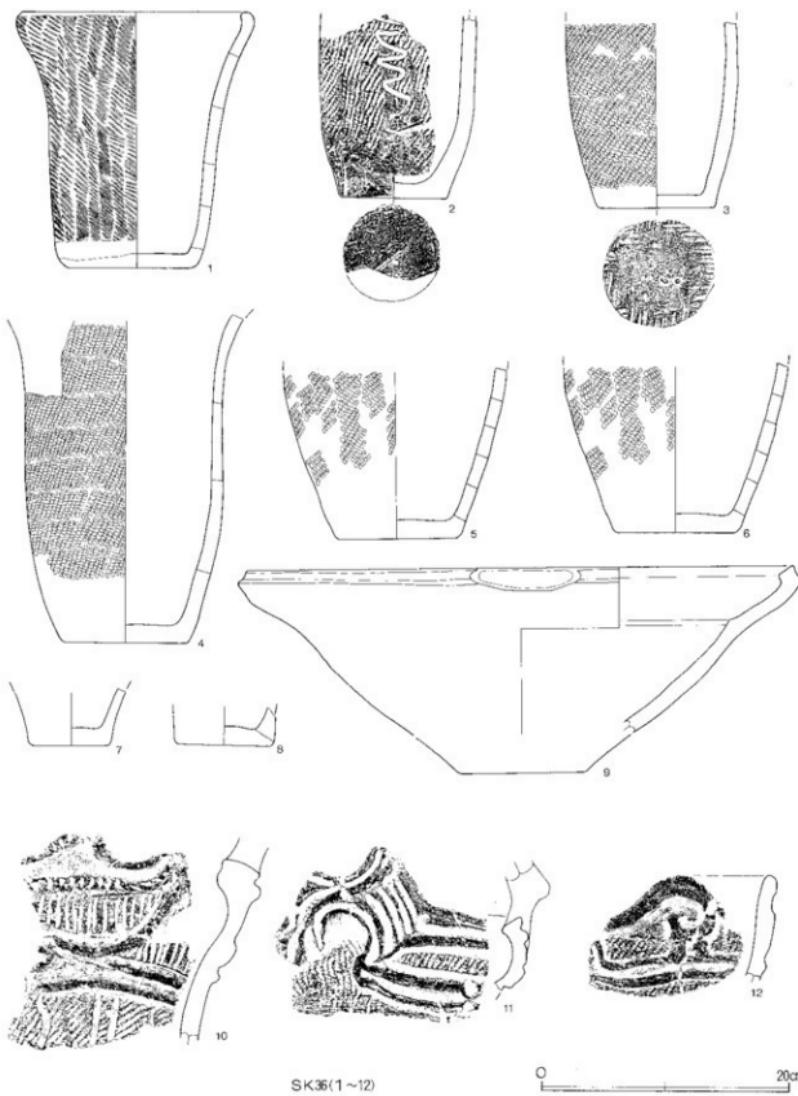
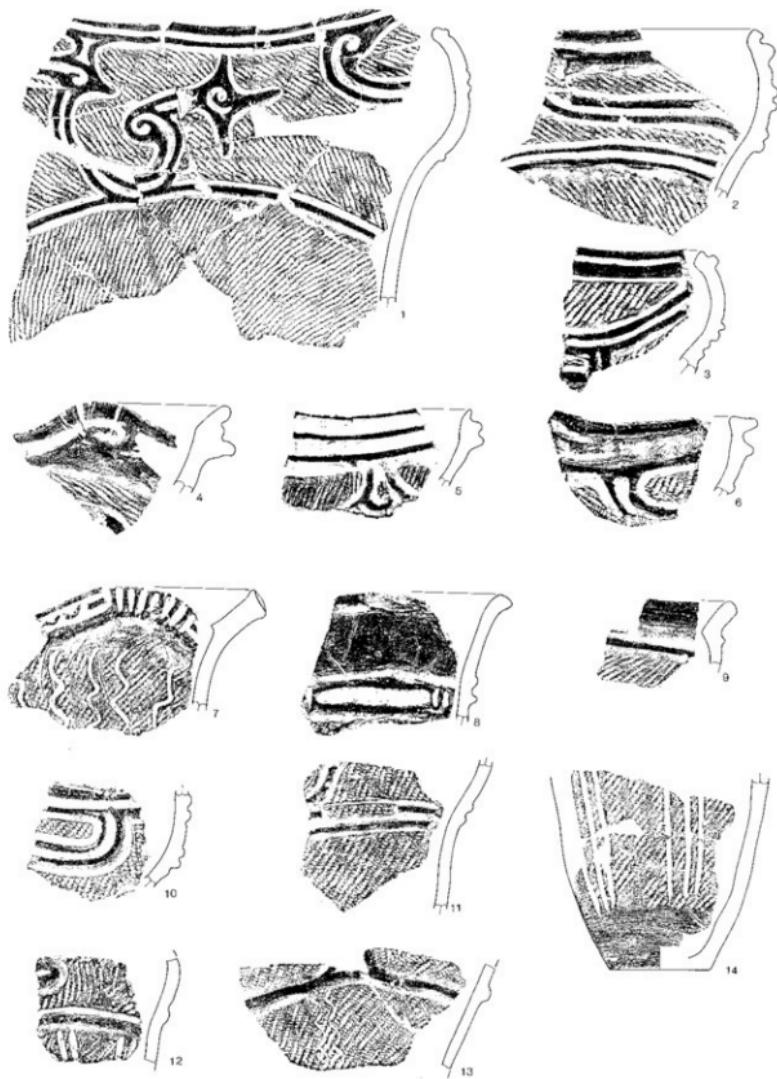


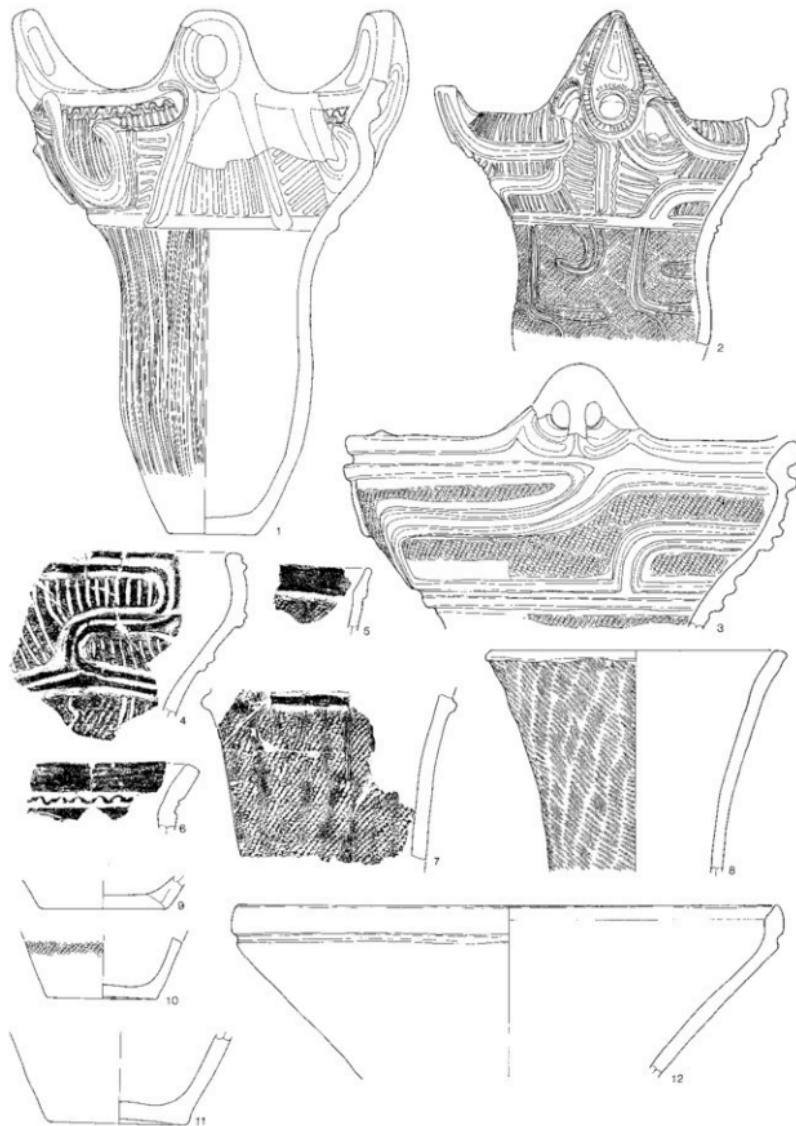
Fig 43 東台遺跡 SK36(1)



SK36(1~14)

0 20cm

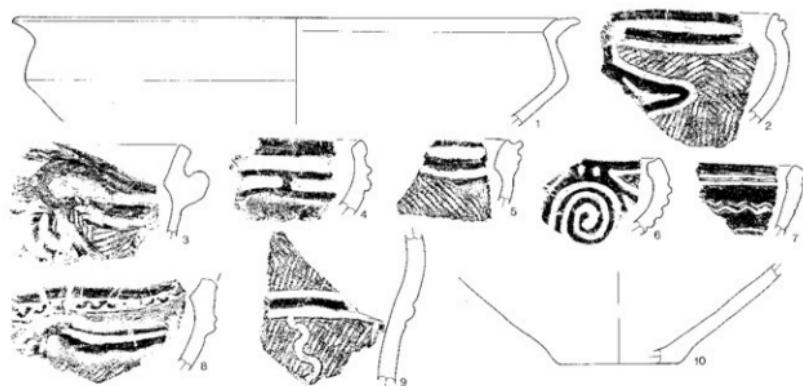
Fig 44 東台遺跡 SK36(2)



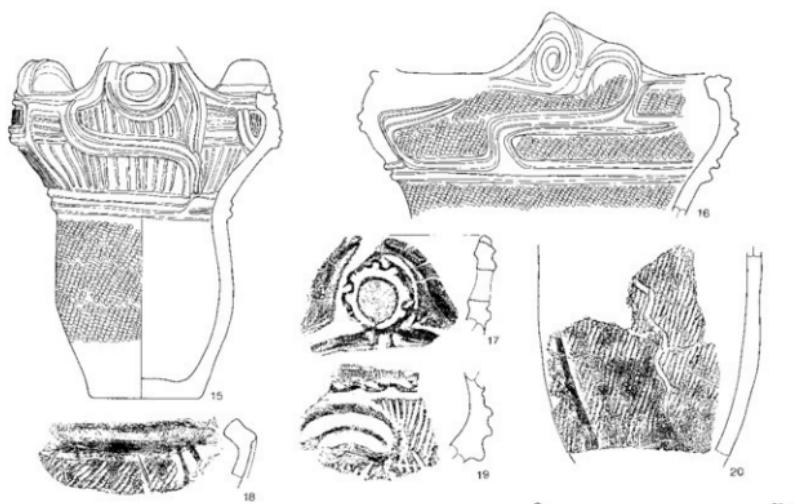
SK43(1~12)

0 1 20cm

Fig 45 東台遺跡 SK43



SK38(1~10)
SK39(11~14)
SK45(15~20)



0 20cm

Fig 46 東台遺跡 SK38・39・45

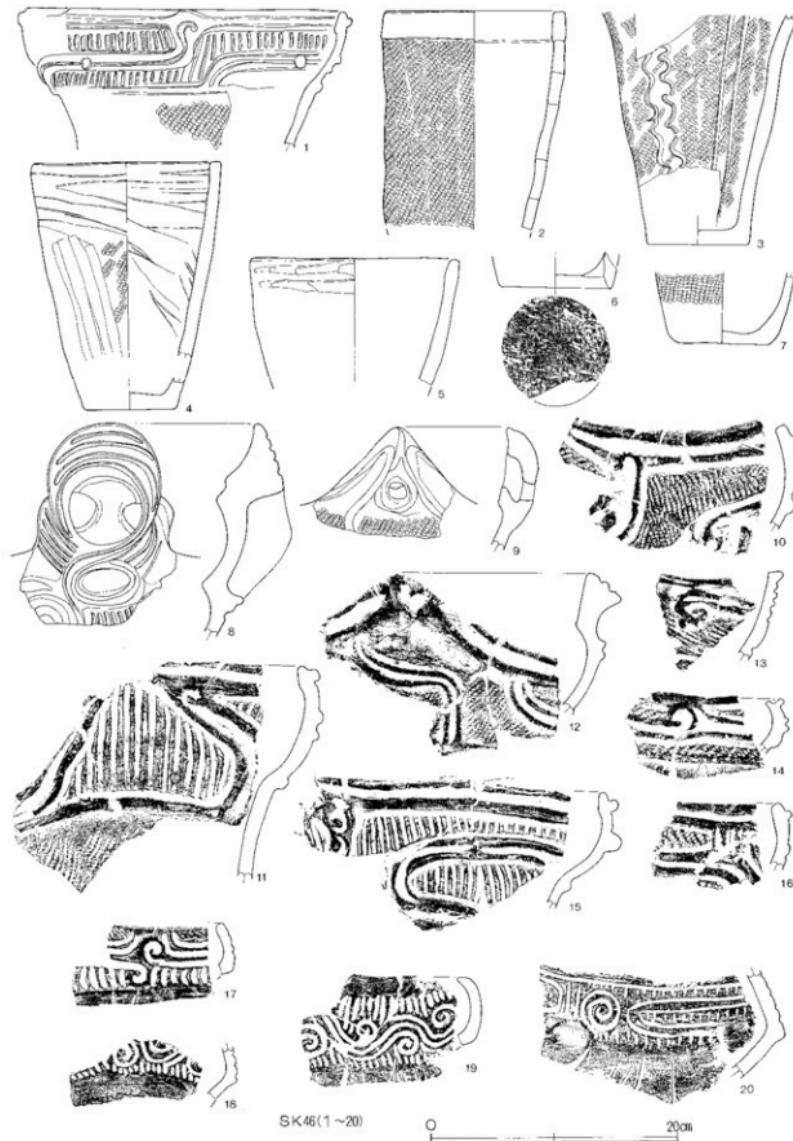
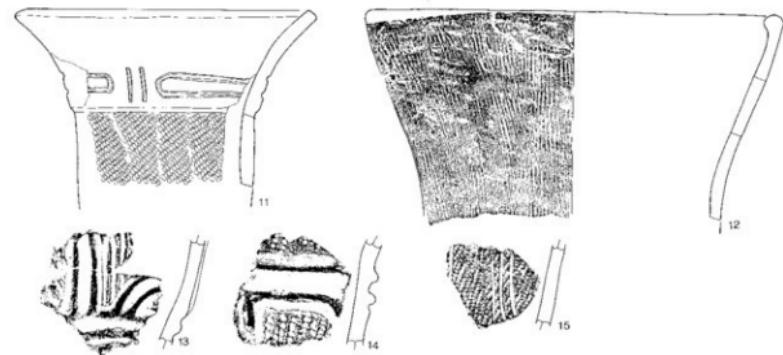
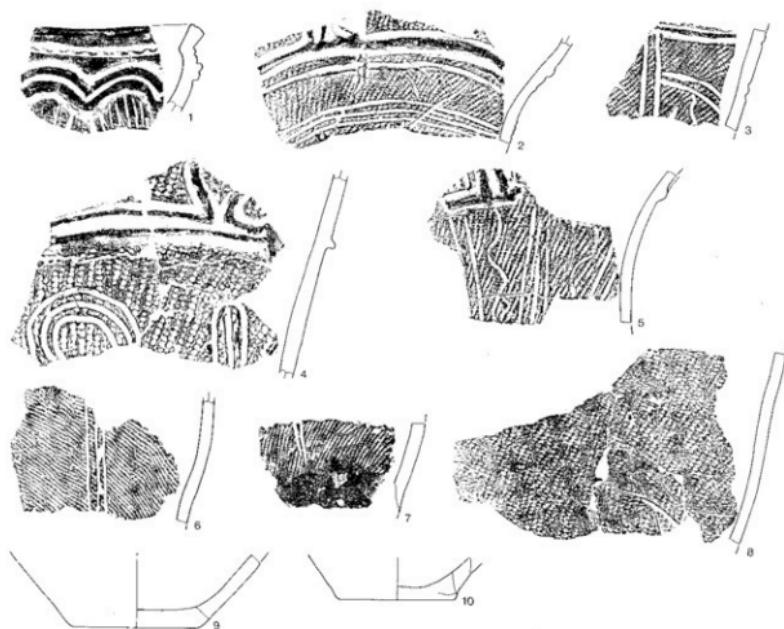


Fig 47 東台遺跡 SK46

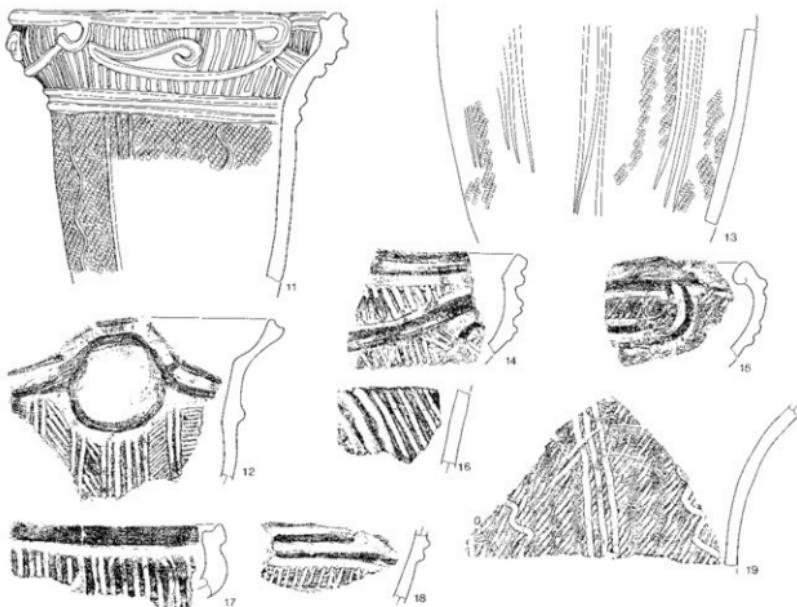
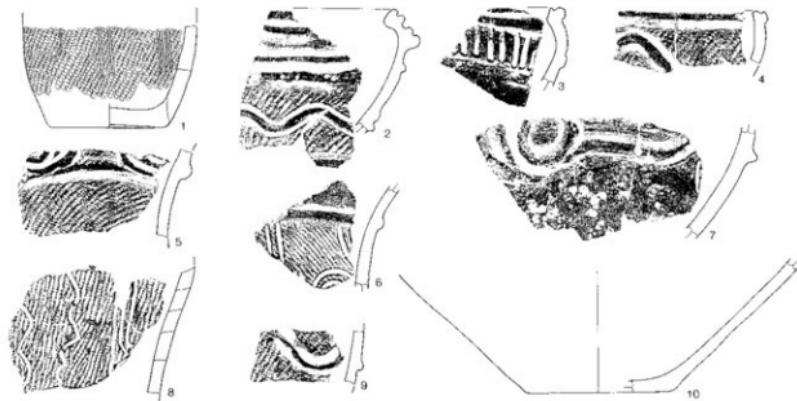


SK46(1~10)

SK47(11~15)

0 20cm

Fig 48 東台遺跡 SK46・47



SK48(1~10)・SK49(11~19)

0 20cm

Fig 49 東台遺跡 SK48・49

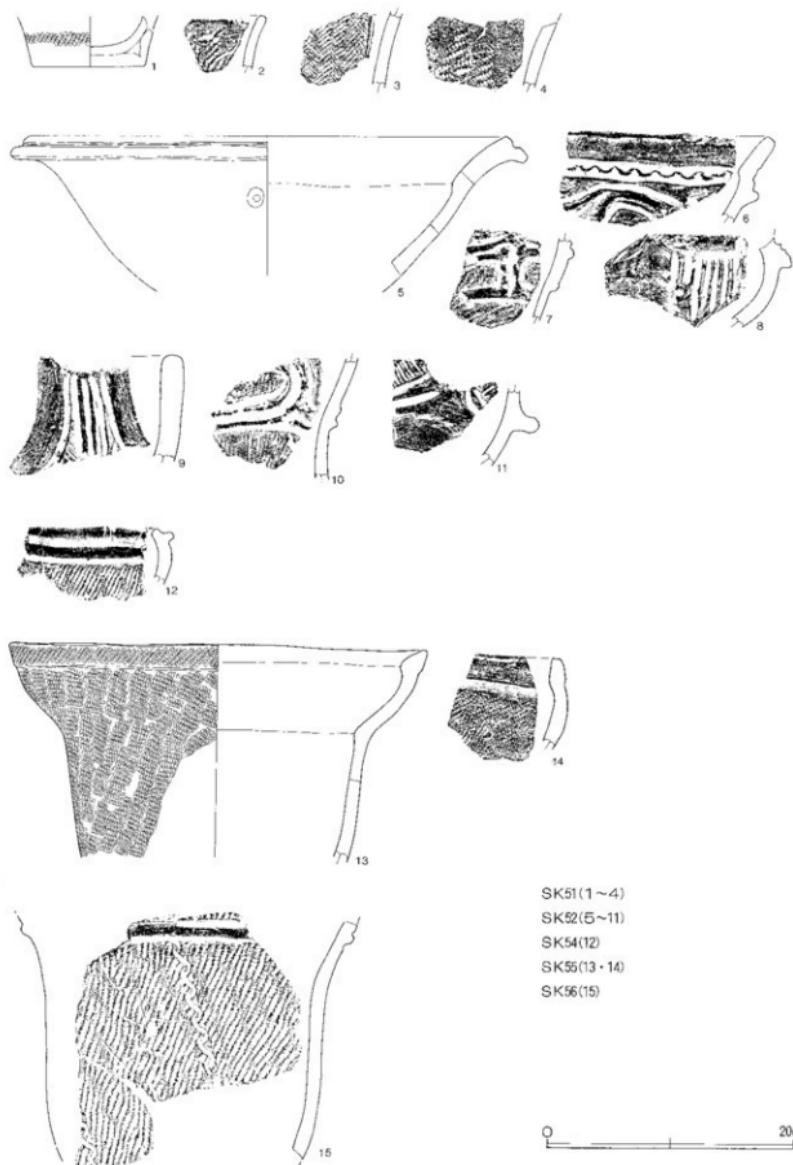
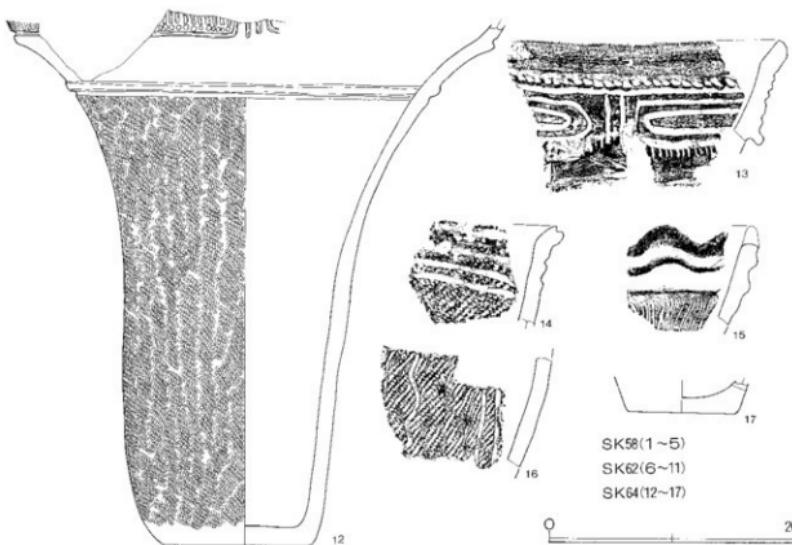
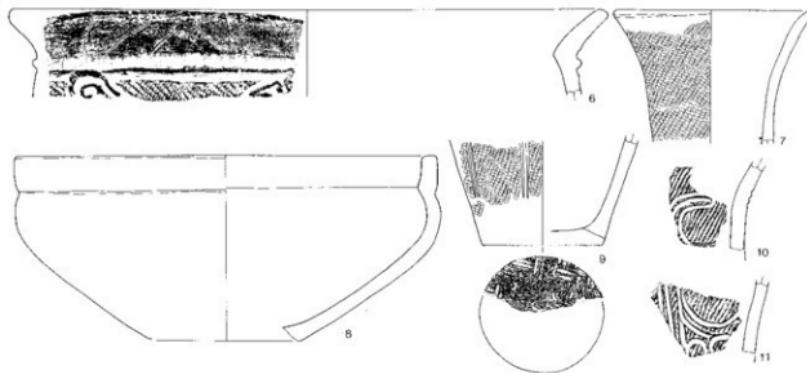


Fig 50 東台遺跡 SK51・52・53・54・55・56



SK58(1~5)
SK62(6~11)
SK64(12~17)

0 20cm

Fig 51 東台遺跡 SK58・62・64

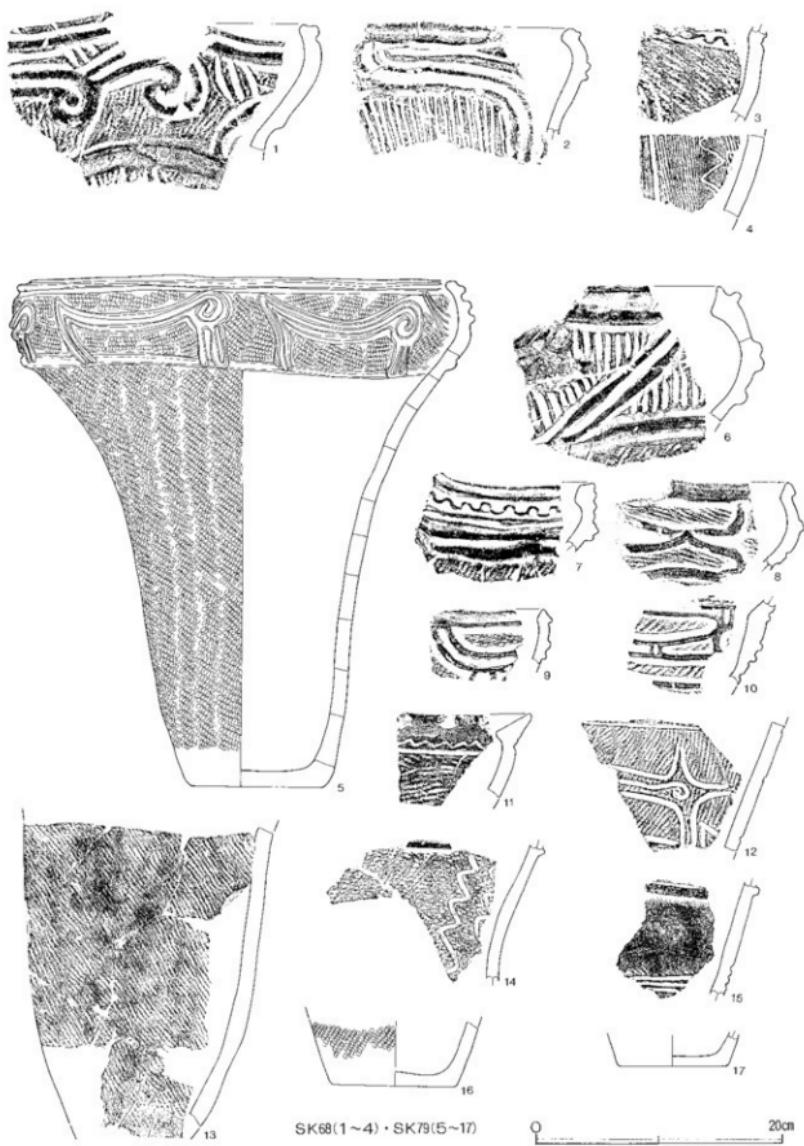


Fig 52 東台遺跡 SK68・79

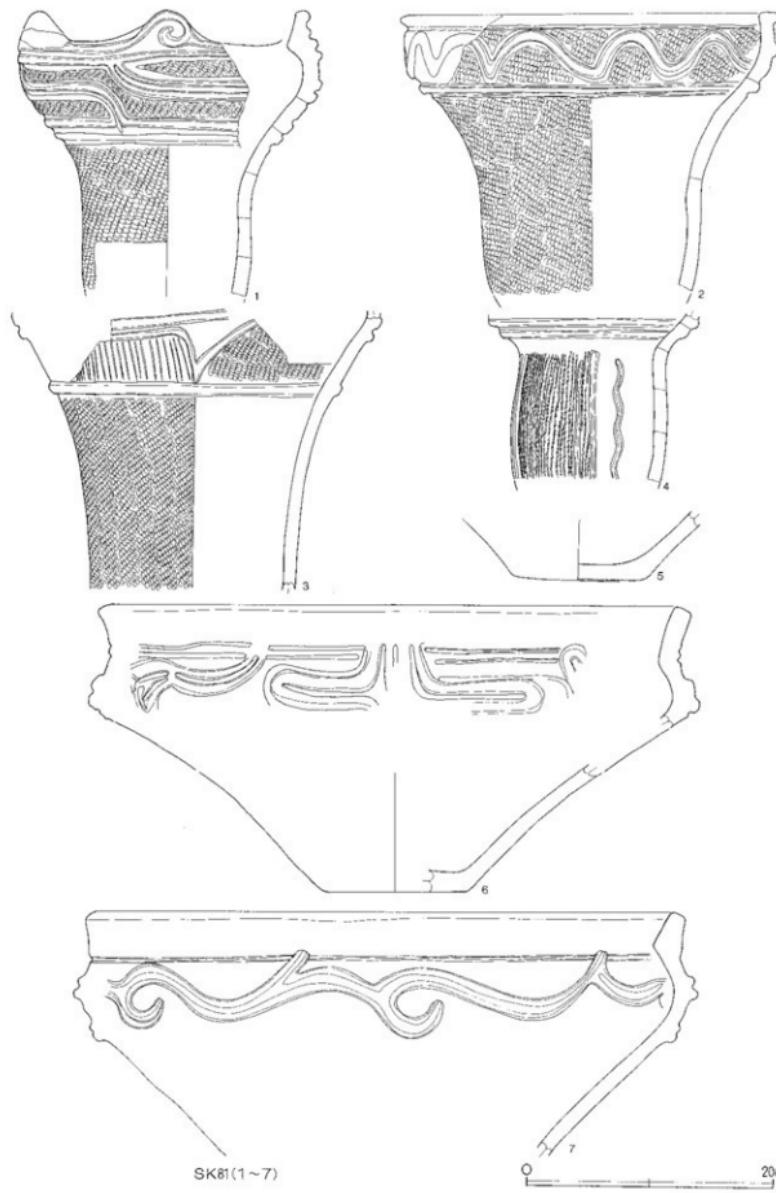
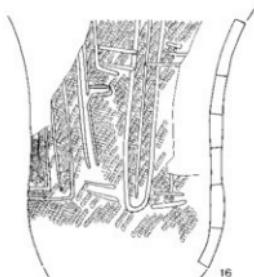


Fig 53 東台遺跡 SK81(1)



SK81(1~15)

SK91(16)



0 20cm

Fig 54 東台遺跡 SK81(2)・91

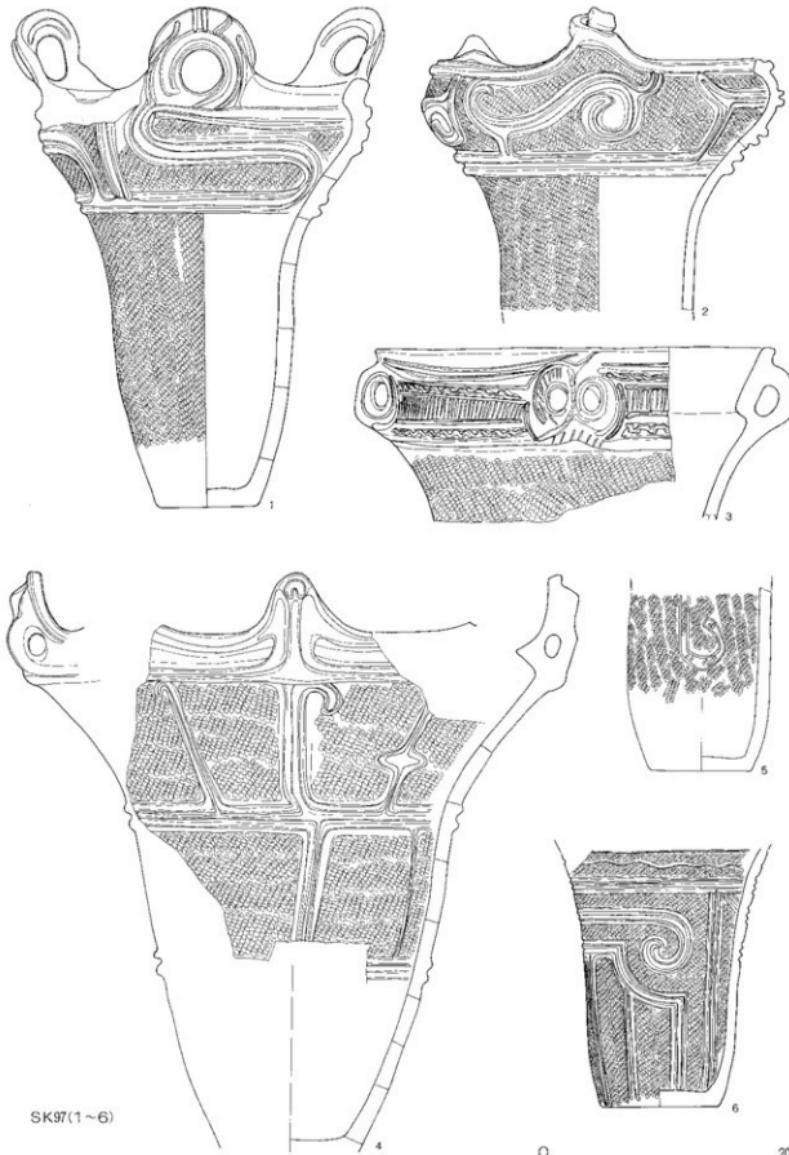


Fig 55 東台遺跡 SK97(1)

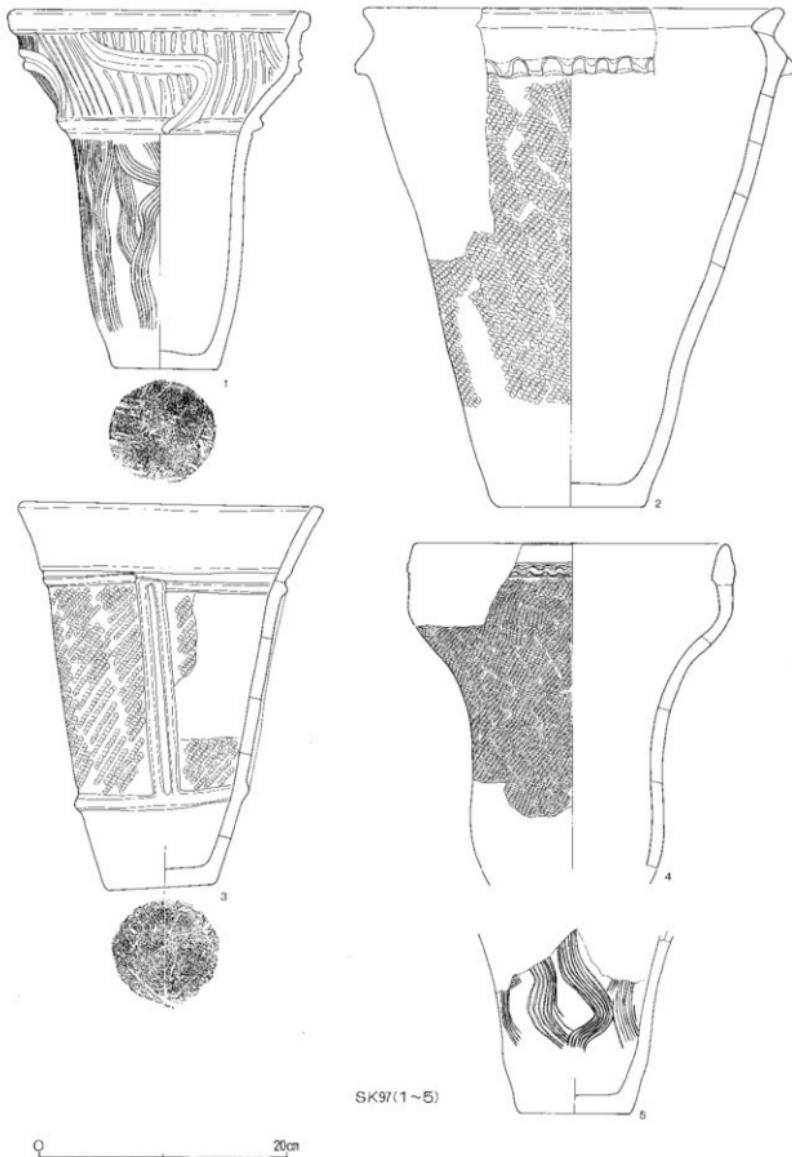


Fig 56 東台遺跡 SK97(2)

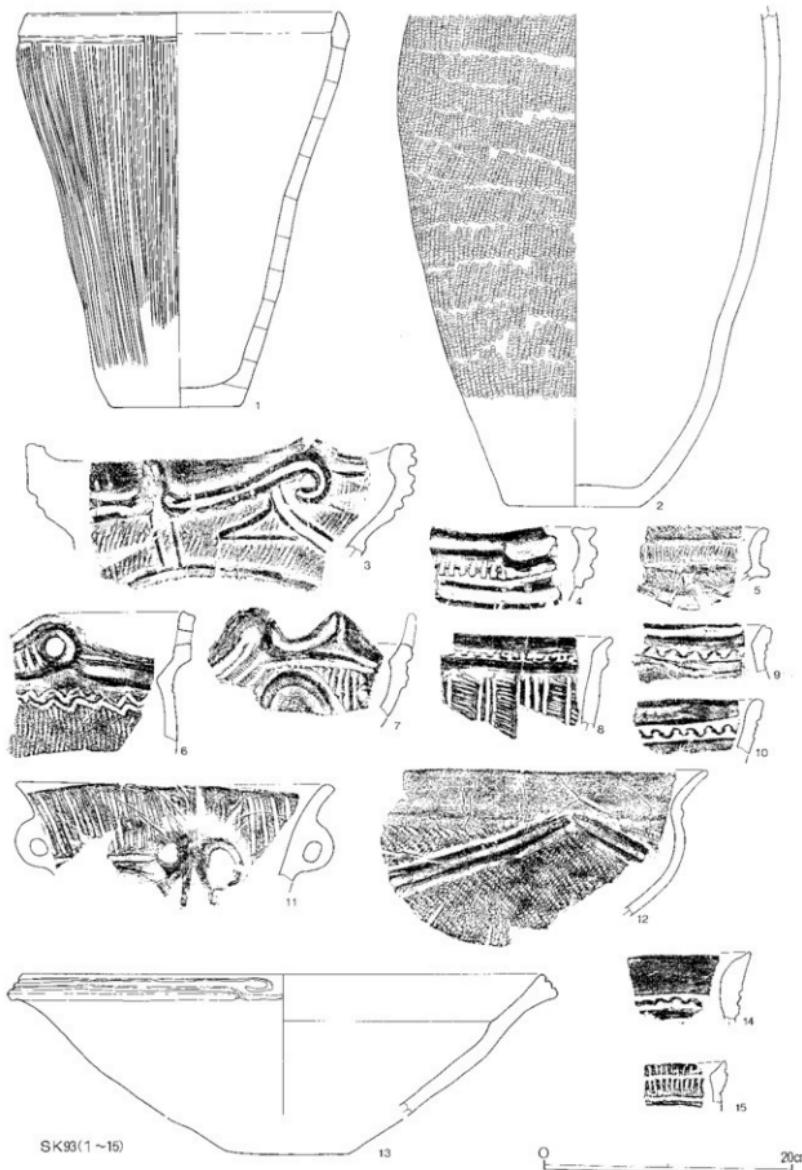


Fig 57 東台遺跡 SK97(3)

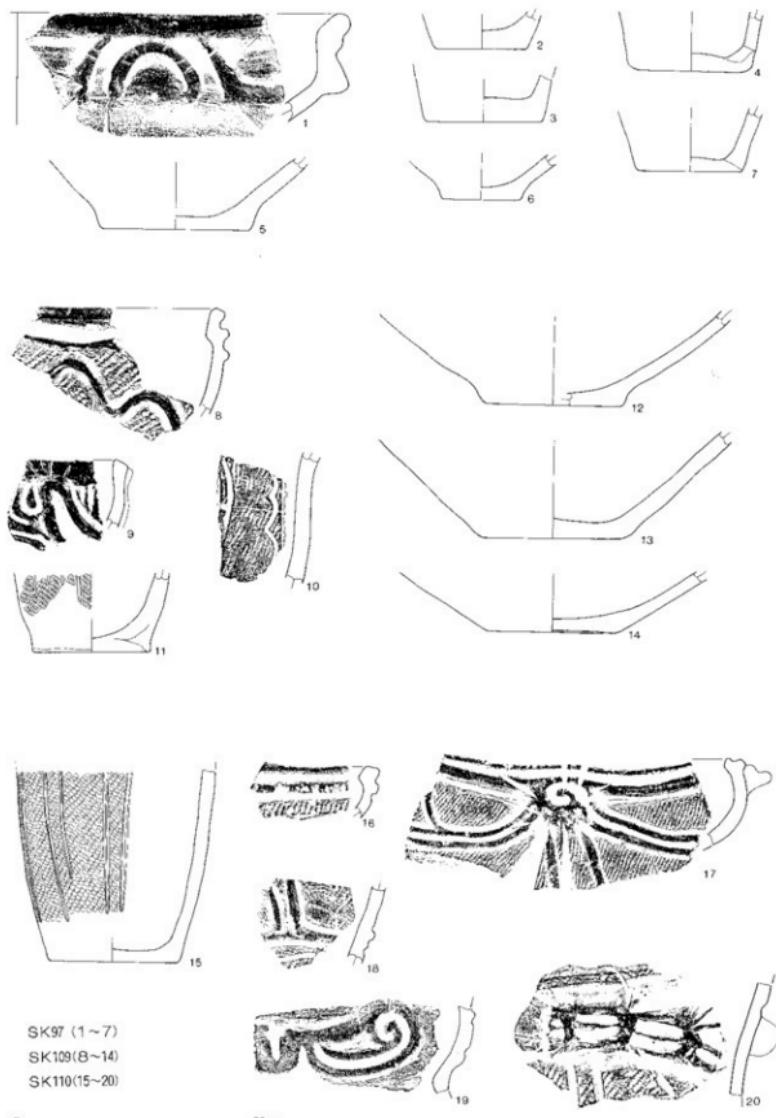
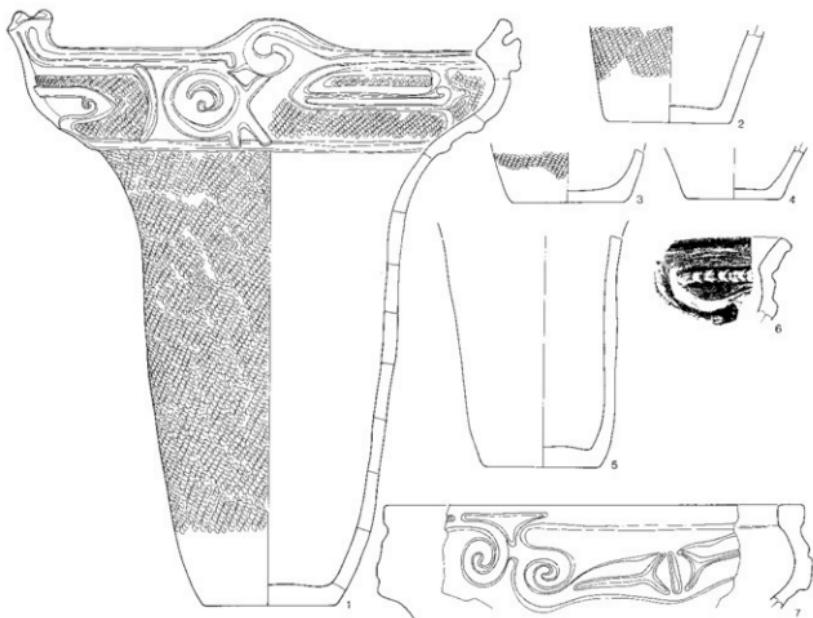


Fig 58 東台遺跡 SK97(3)・109・110



SK112(1~7) SK113(8~12)

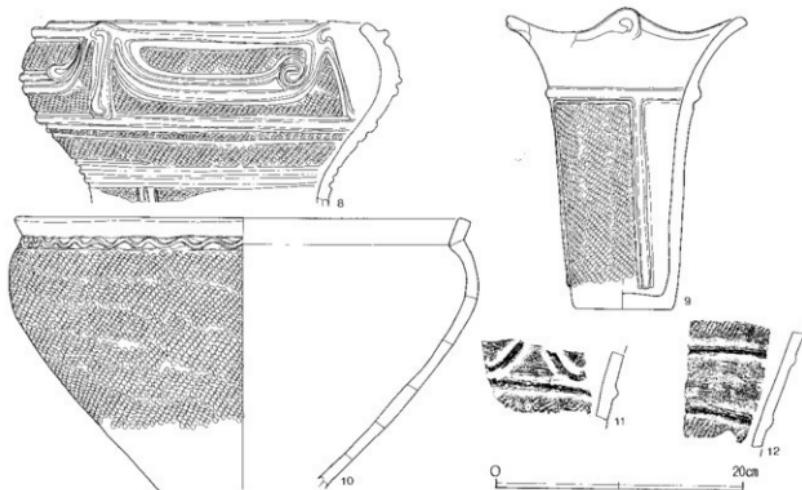


Fig 59 東台遺跡 SK112・113

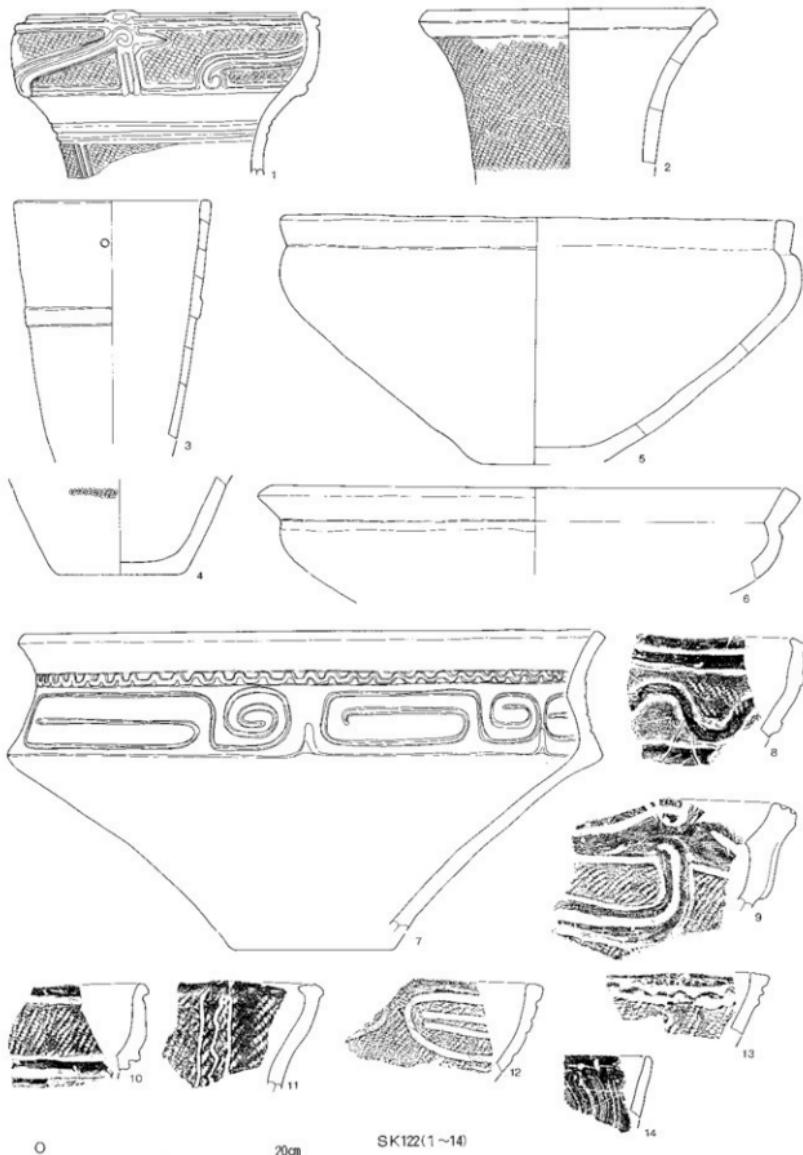


Fig 60 東台遺跡 SK122

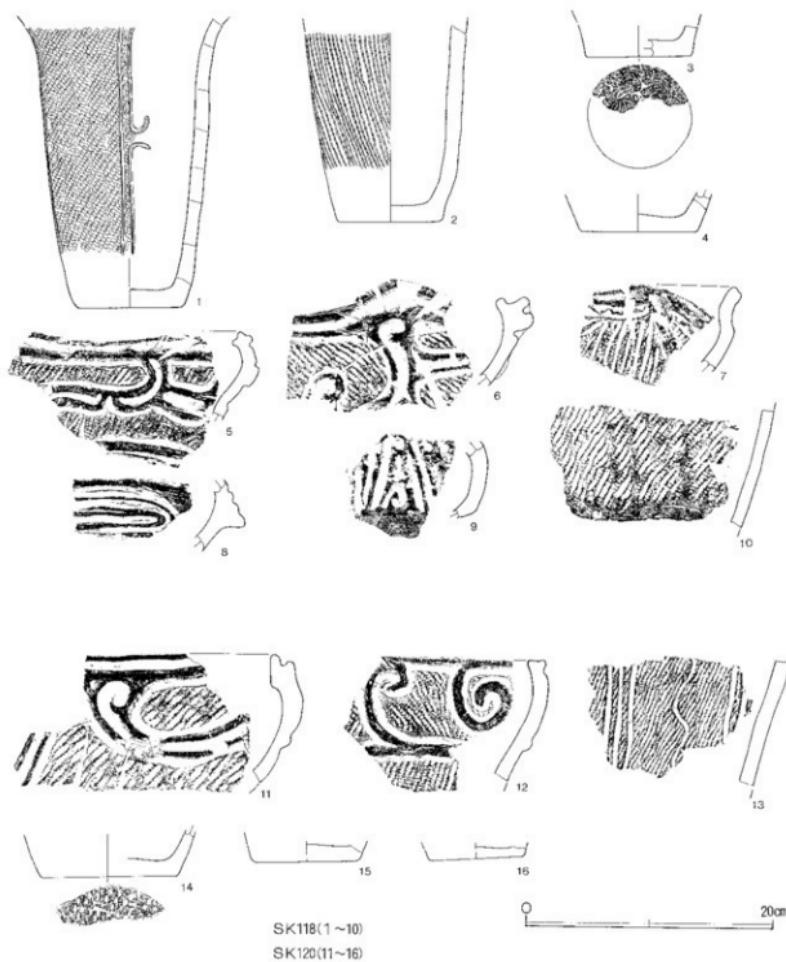


Fig 61 東台遺跡 SK118・120

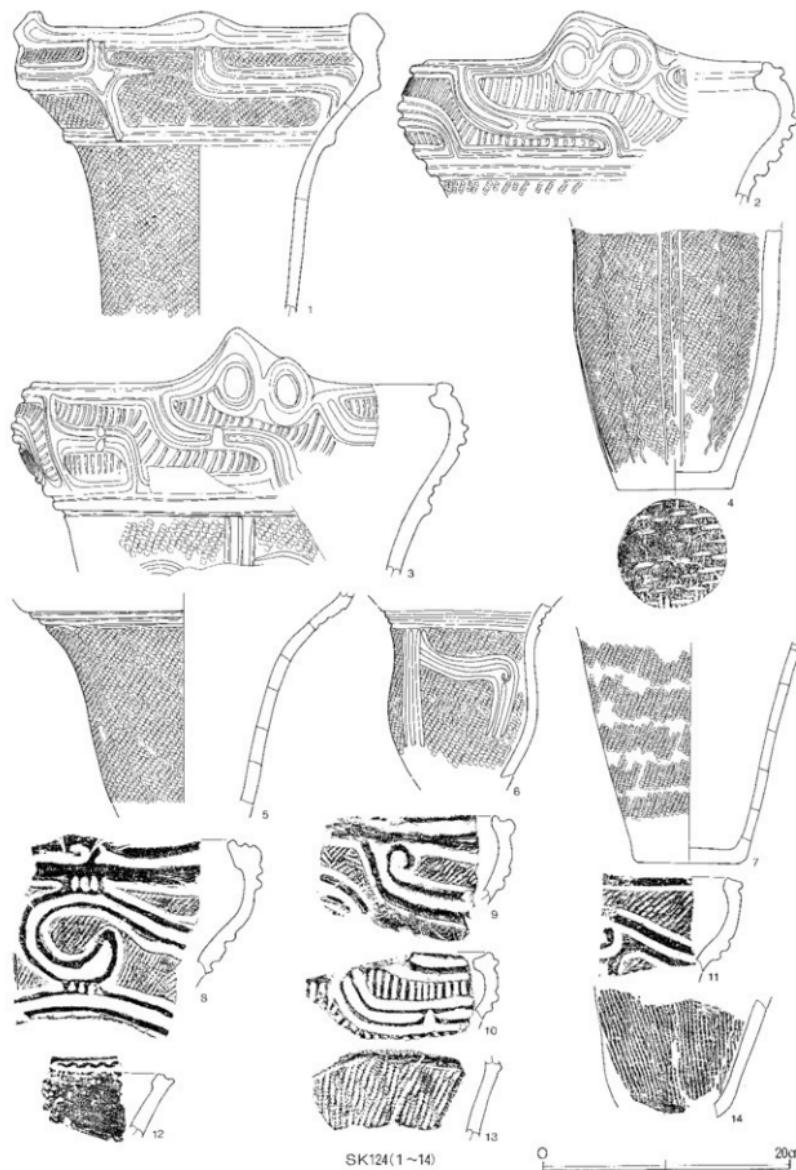


Fig 62 東台遺跡 SK124

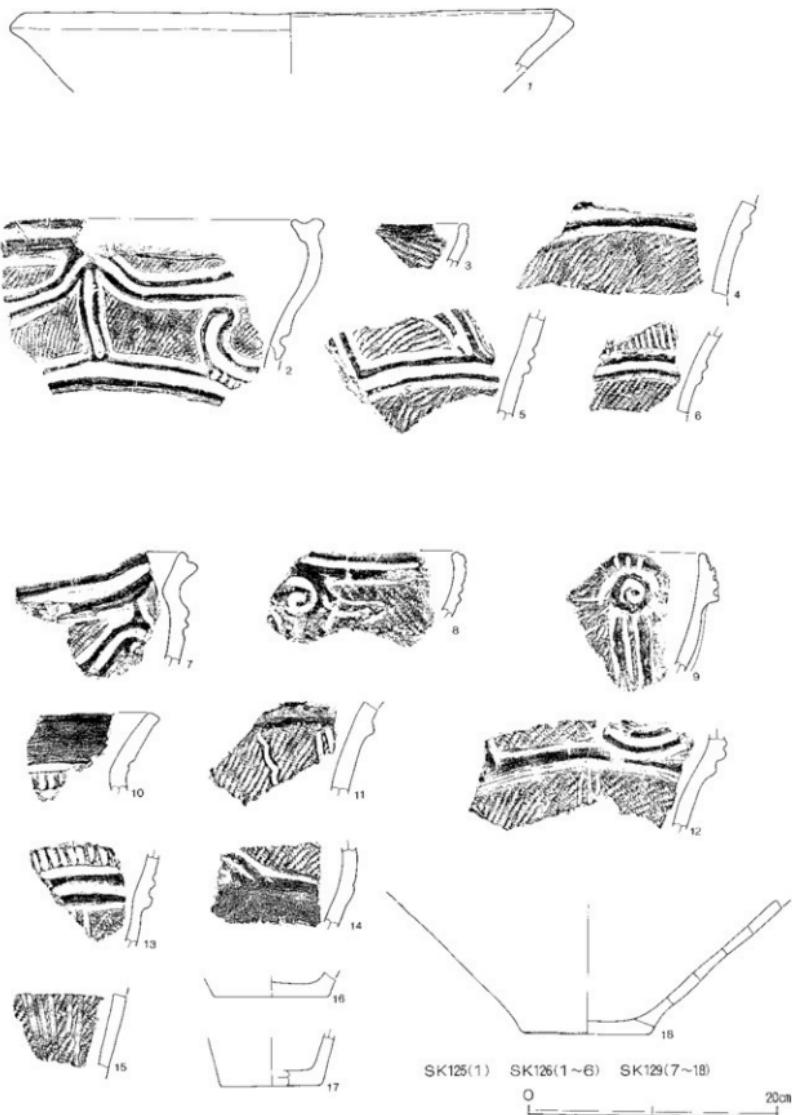
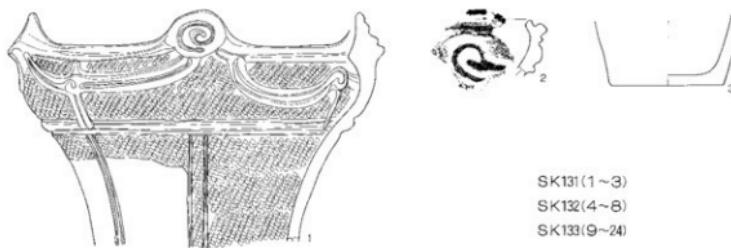


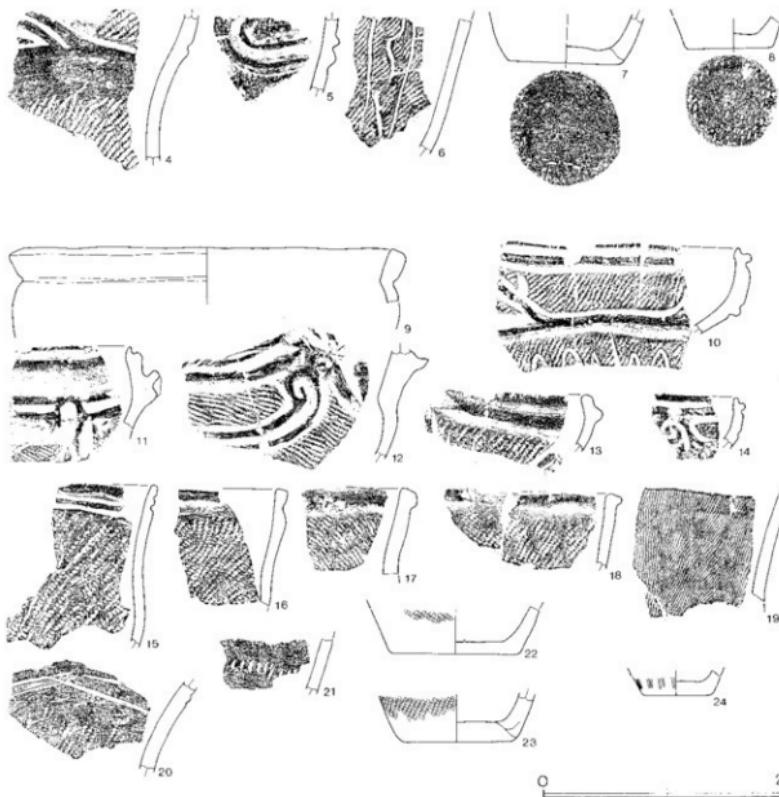
Fig 63 東台遺跡 SK125・126・129



Fig 64 東台遺跡 SK130

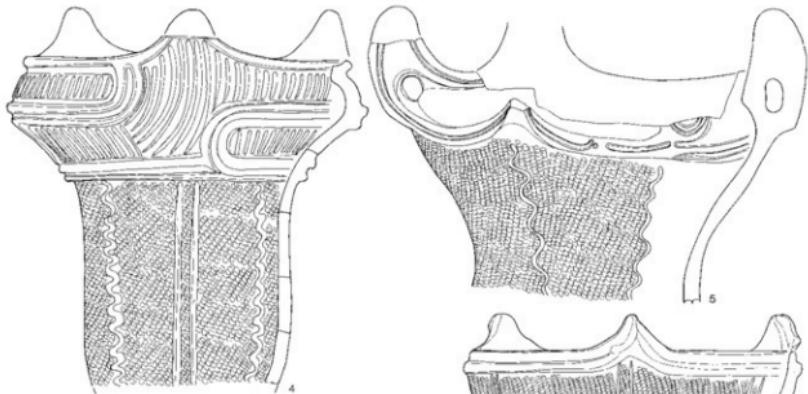
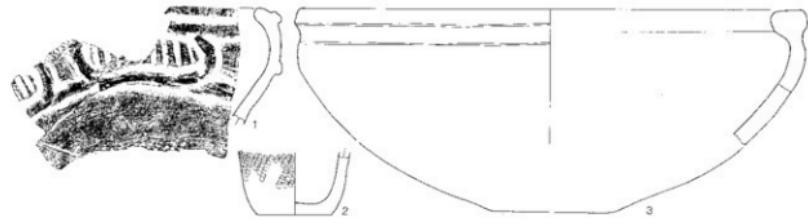


SK131(1~3)
SK132(4~8)
SK133(9~24)



0 20cm

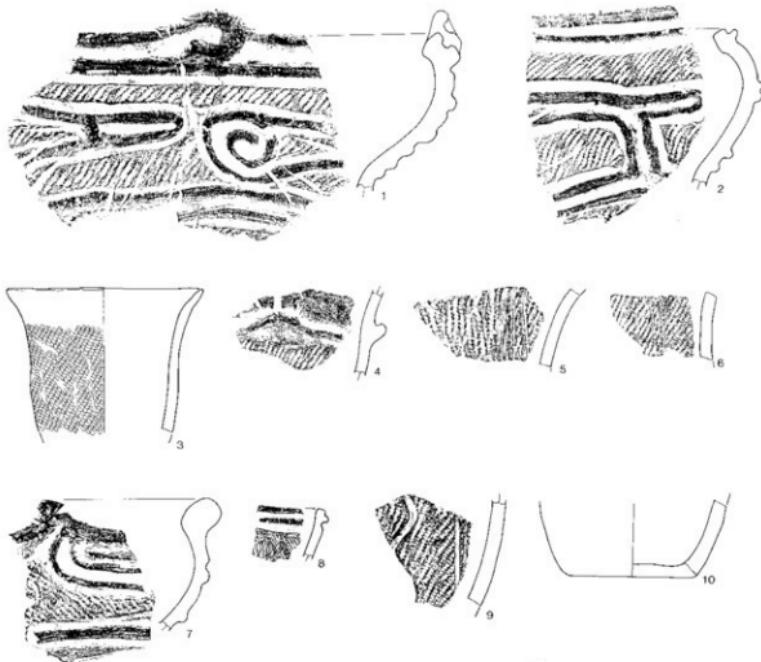
Fig 65 東台遺跡 SK131・132・133



SK134(1~3)
SK135(4~10)

0 20cm

Fig. 66 東台遺跡 SK134・135



SK136(1・2)・SK137(3～6)・138(7～10)・SK140 (11～18)

0 200

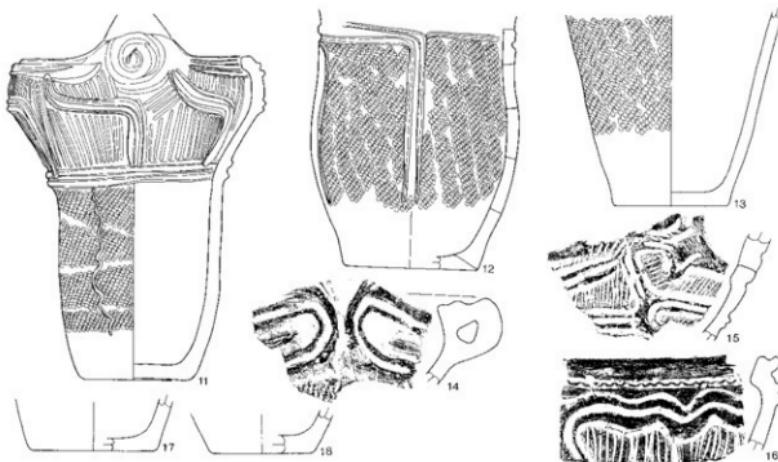
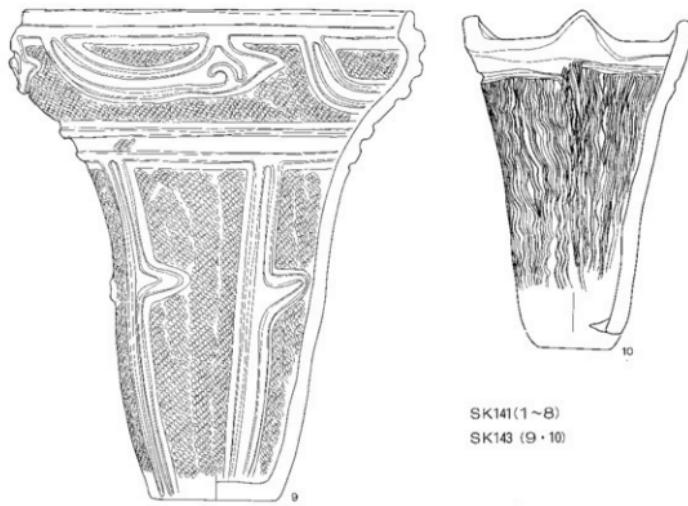
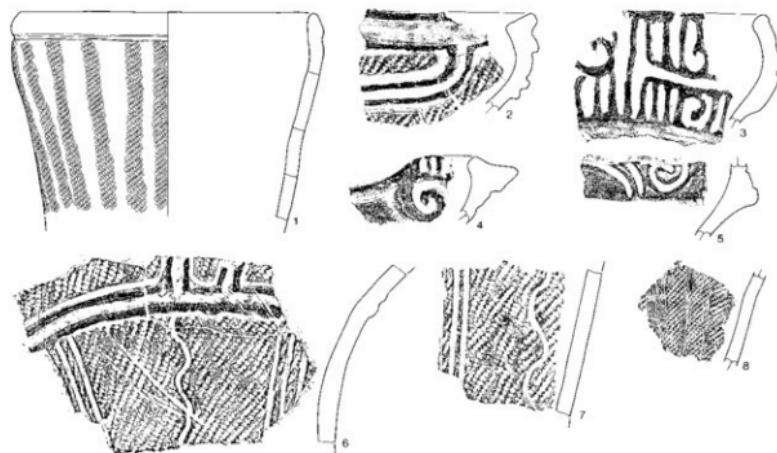


Fig 67 東台遺跡 SK136・137・138・140

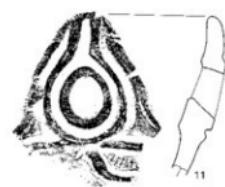
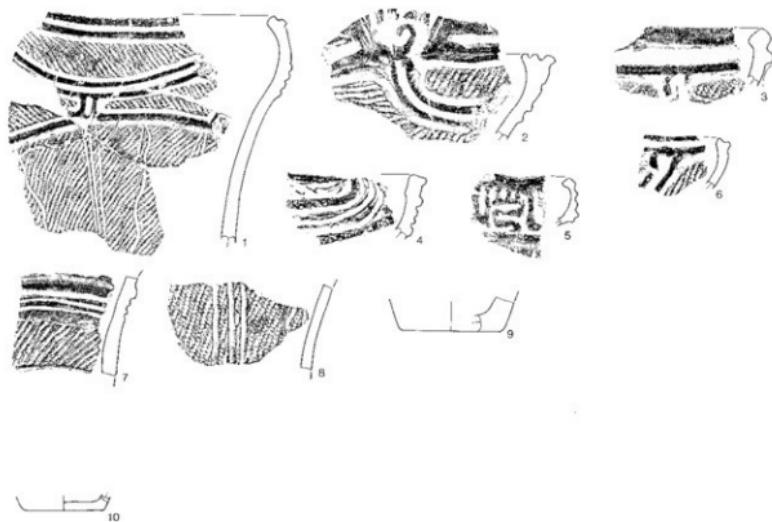


SK141(1~8)

SK143 (9·10)

0 20cm

Fig 68 東台遺跡 SK141・143



SK144(1~9) SK148(10) SK149(11)
SK151(12~14)



Fig 69 東台遺跡 SK144・148・149・151

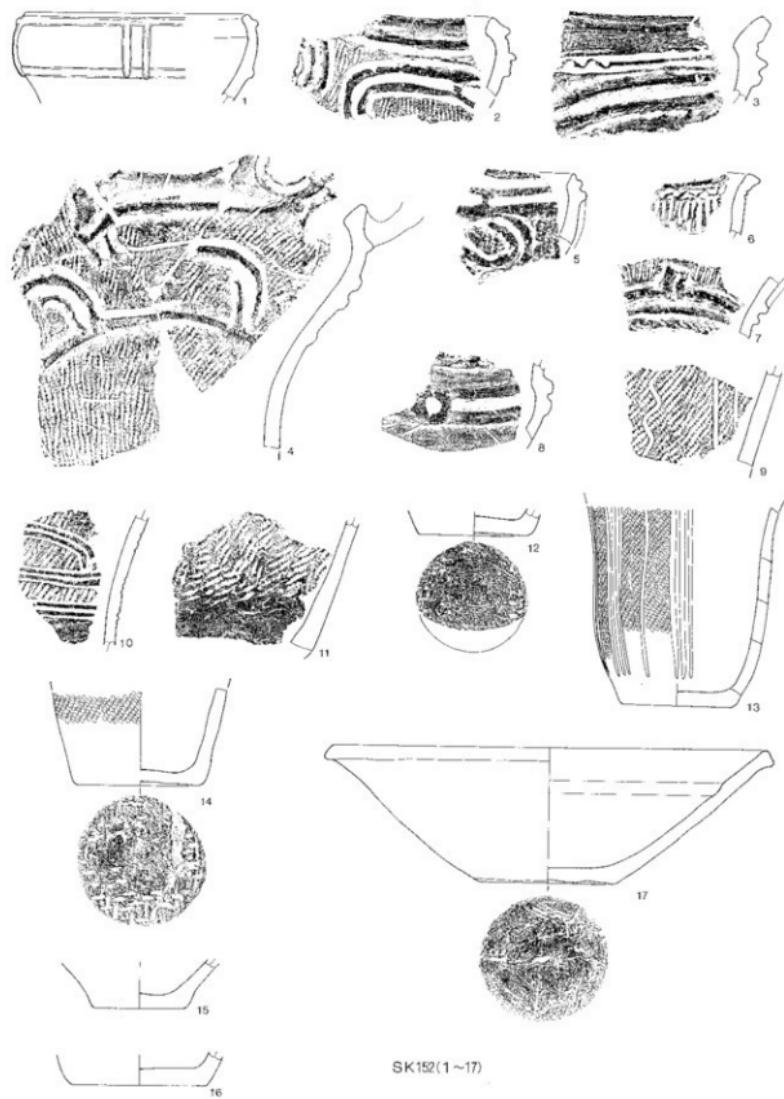


Fig 70 東台遺跡 SK152

0 20cm



Fig 71 東台遺跡 SK153

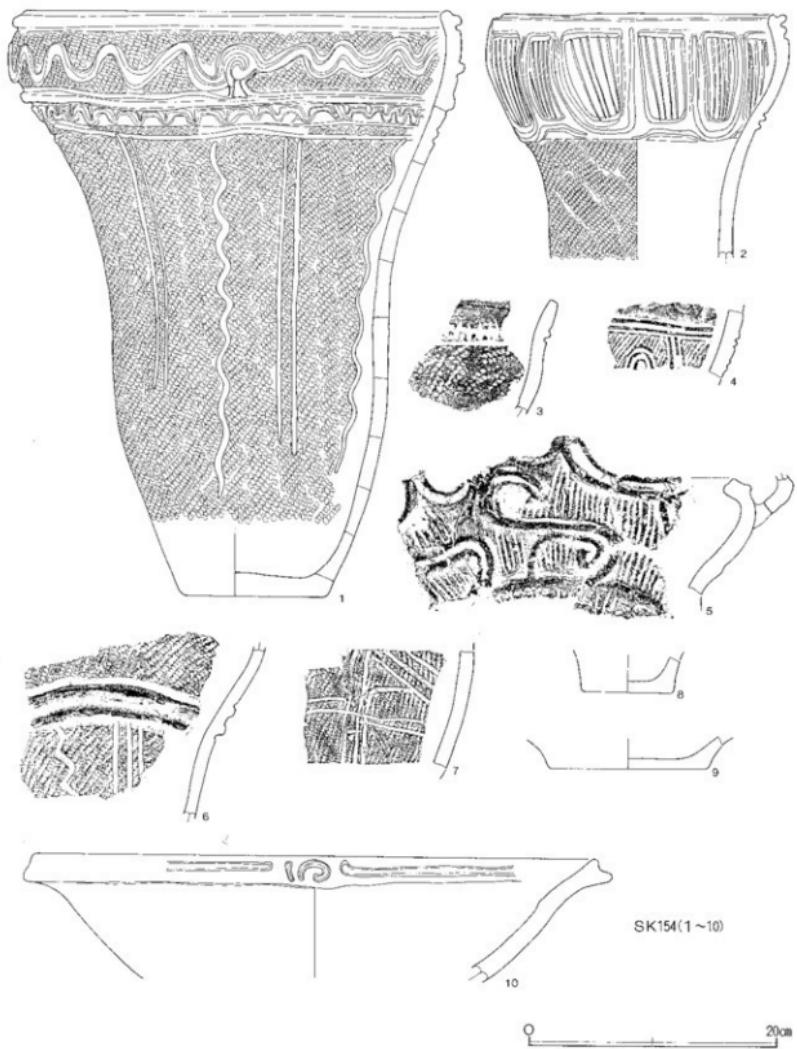


Fig 72 東台遺跡 SK154



SK155(1~2) SK156(3~8) 裝撰(9~15)

0 1 20cm

Fig 73 東台遺跡 SK155·156



Fig 74 御貝遺跡調査全測区（縄文時代）

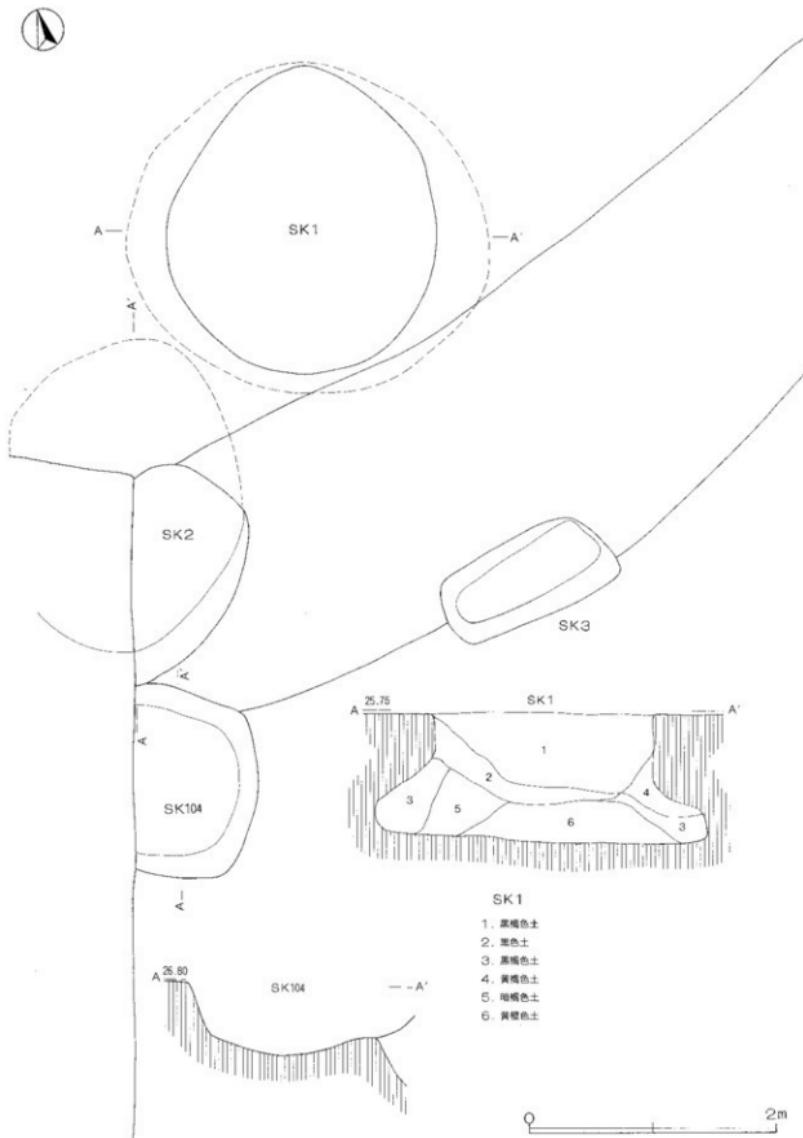


Fig 75 御灵遺跡 SK1・2・3・104

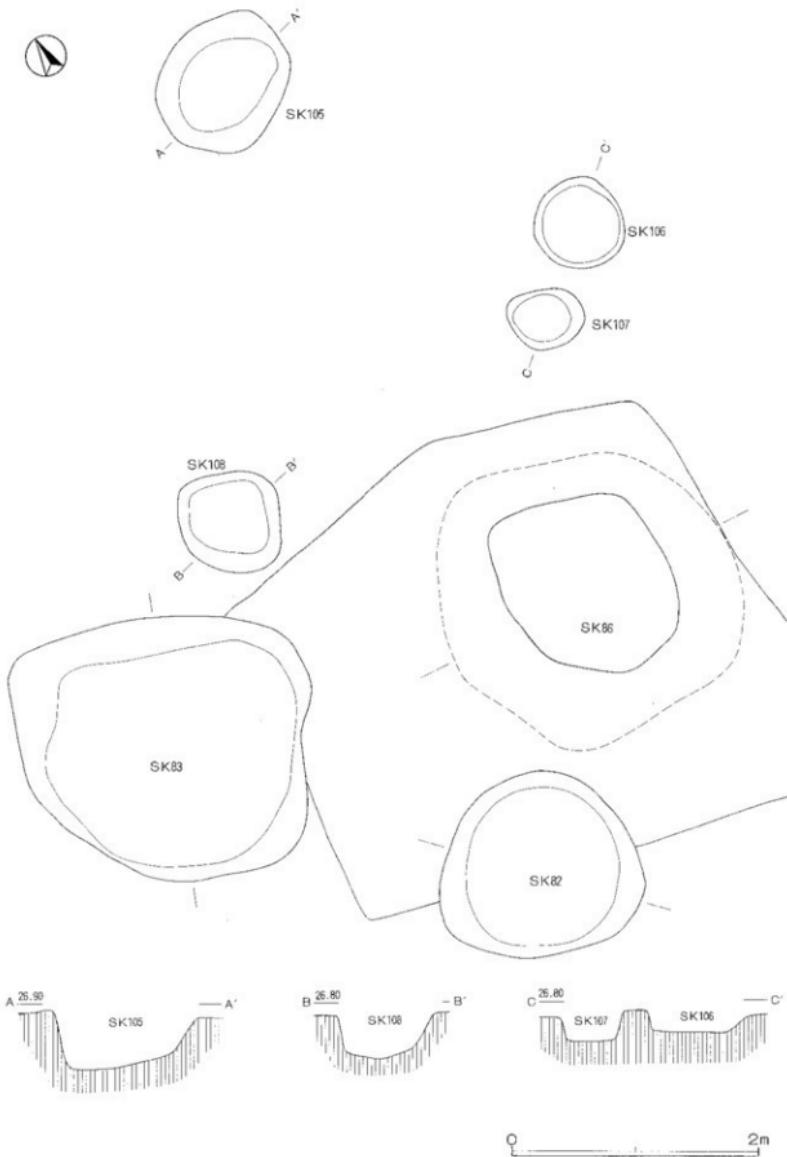


Fig 76 衡灵遺跡 SK82·83·86·105·106·107·108

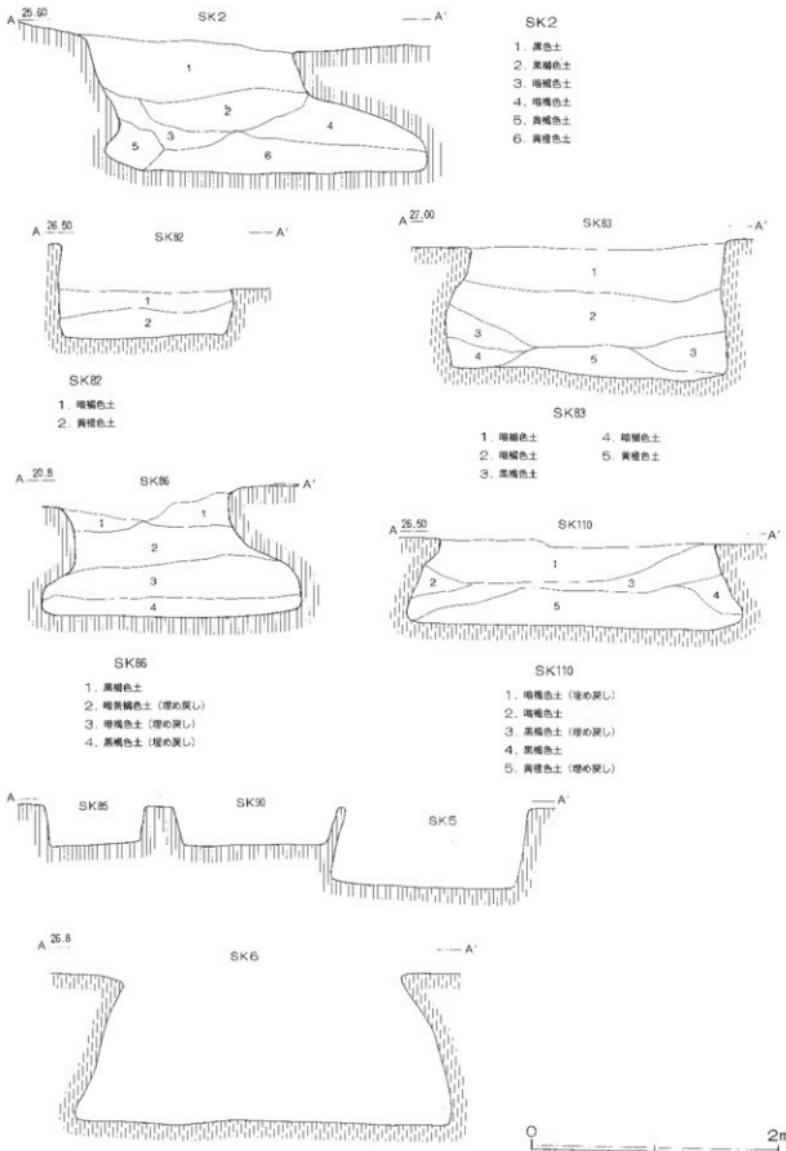


Fig 77 御灵遺跡 SK2・5・6・82・83・85・86・90・110

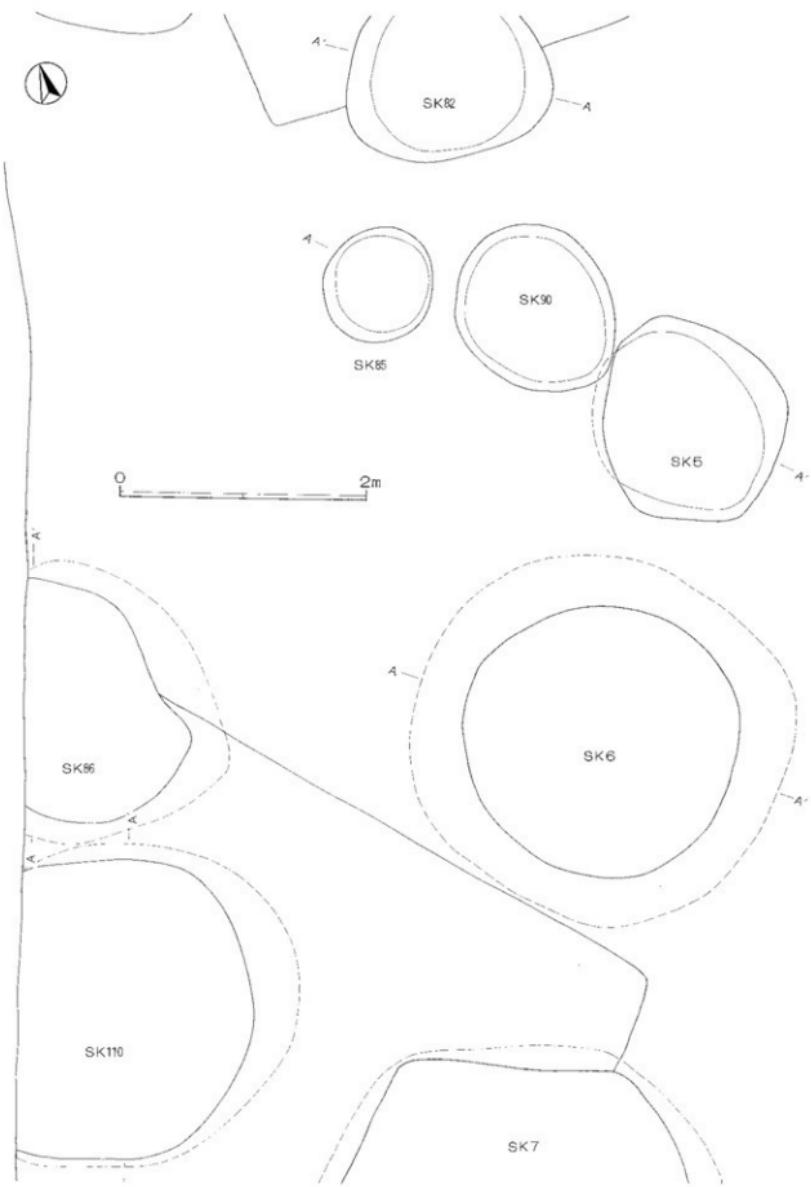


Fig 78 御吳遺跡 SK5・6・7・82・85・86・90・110

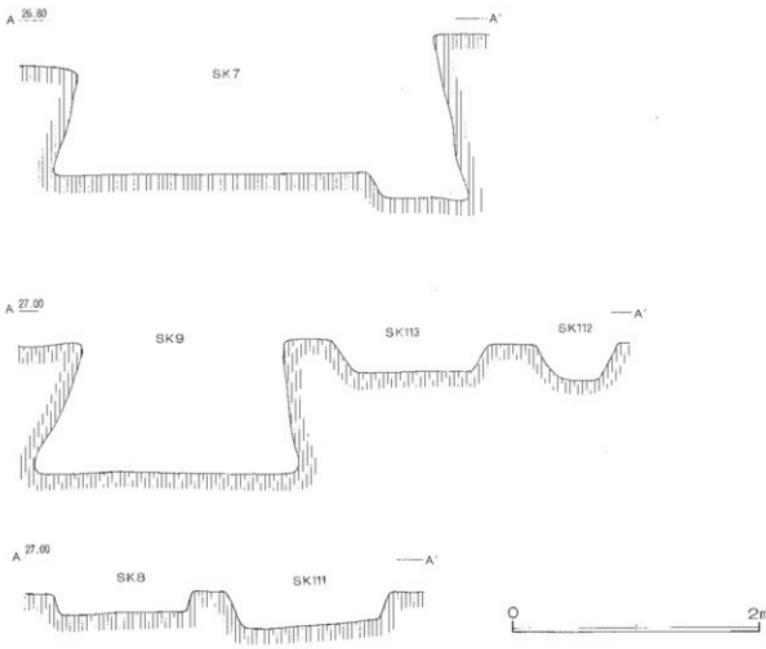


Fig 79 御灵遺跡 SK7・8・9・111・112・113

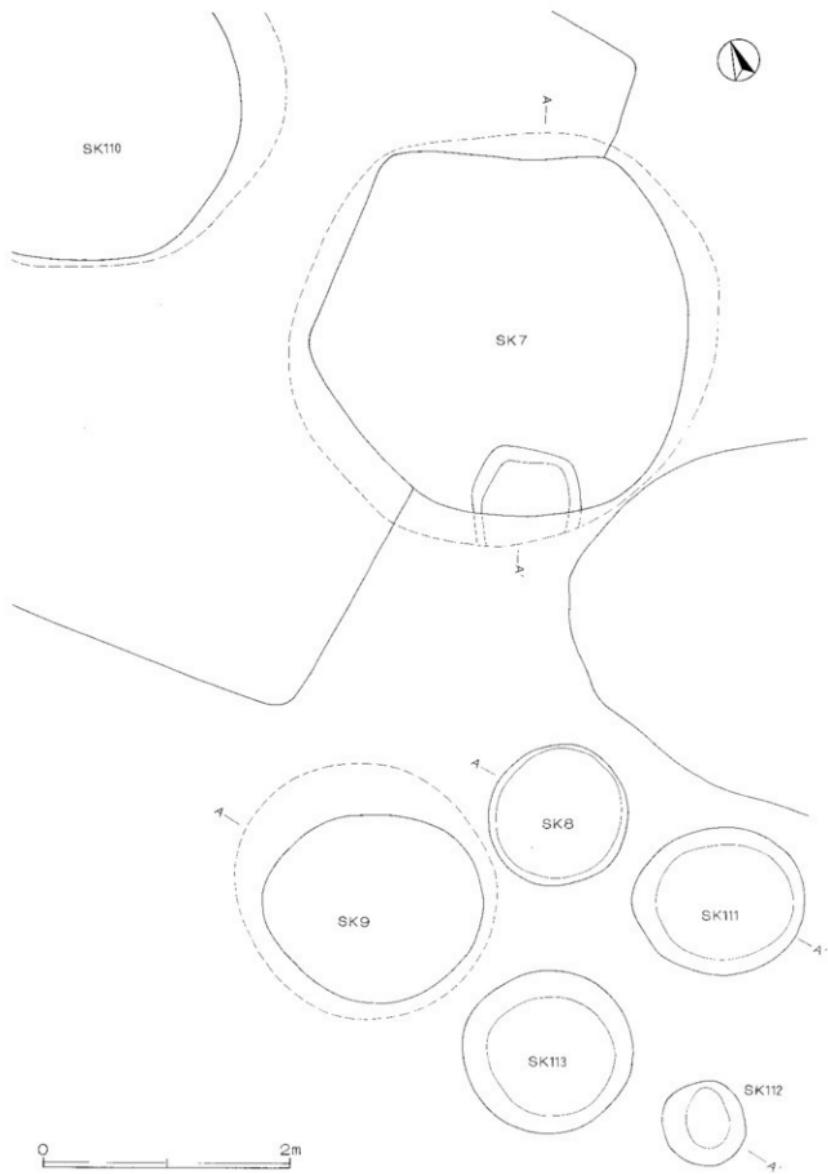


Fig 80 御灵遺跡 SK7・8・9・110・111・112・113

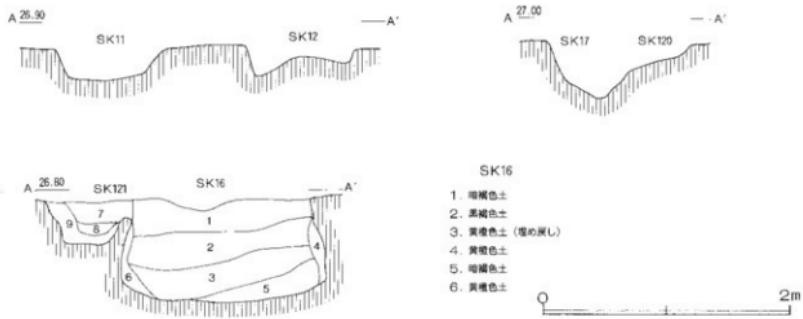


Fig 81 御灵遺跡 SK11・12・16・19・120・121

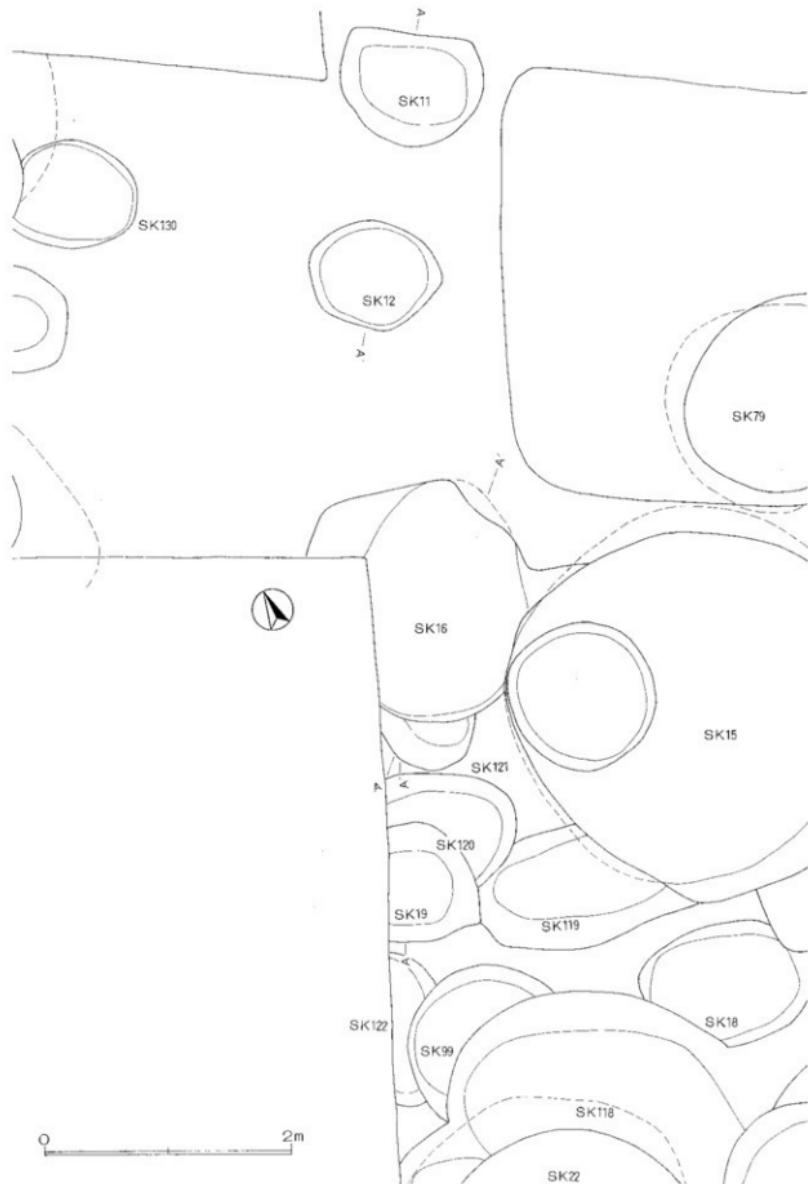


Fig 82 御灵遺跡 SK11・12・15・16・18・19・22・99・119・120・121・122・130

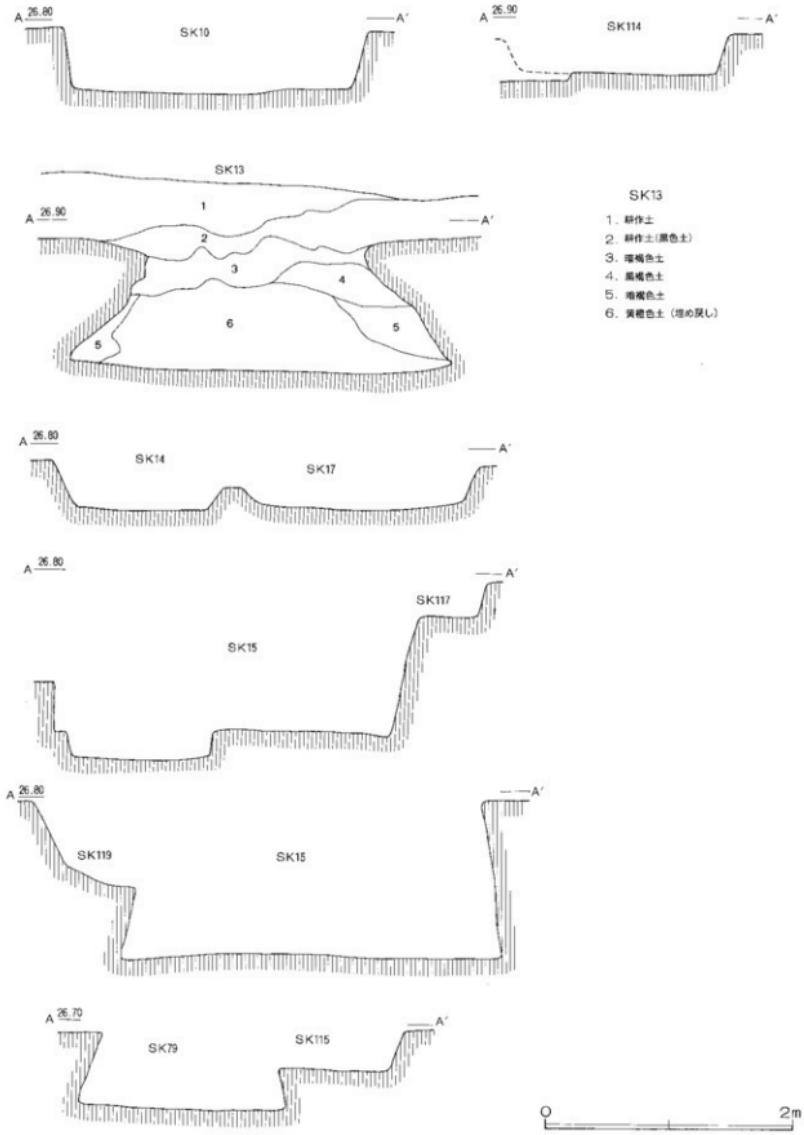


Fig 83 御灵遺跡 SK10・13・14・15・17・79・114・115・117・119

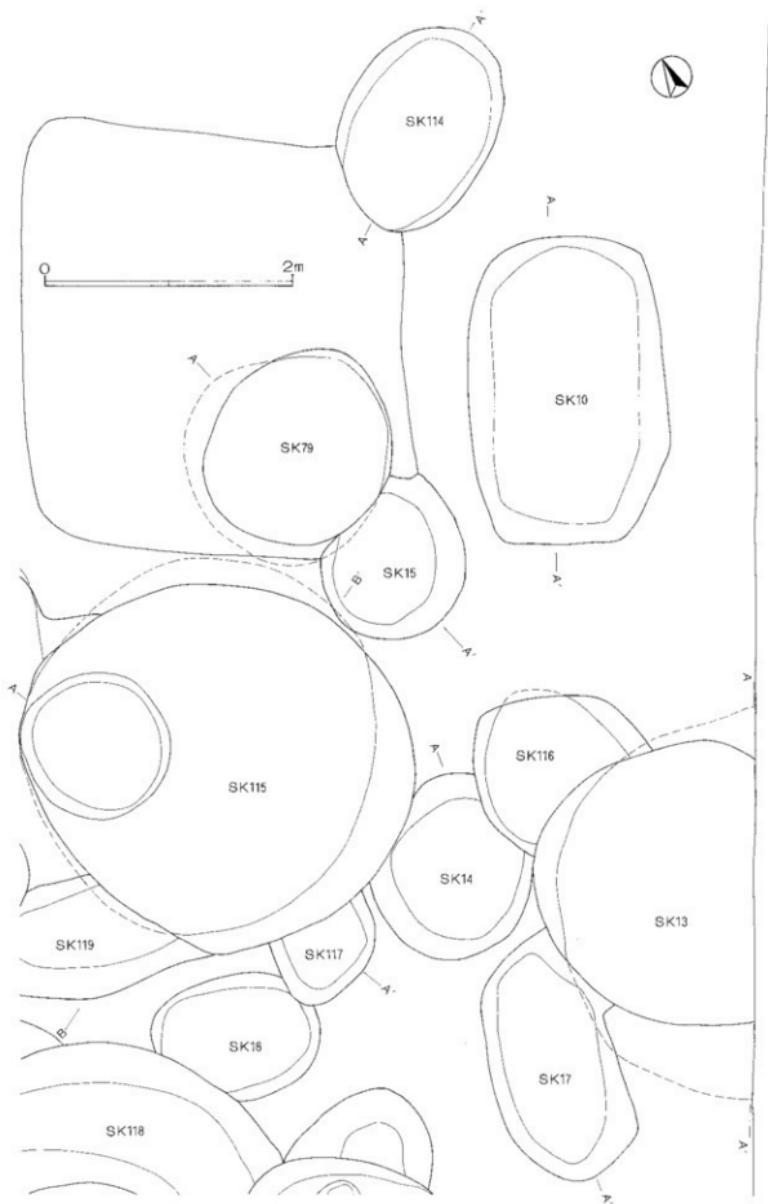


Fig 84 御灵遺跡 SK10・13・14・15・17・18・79・114・115・116・118・119

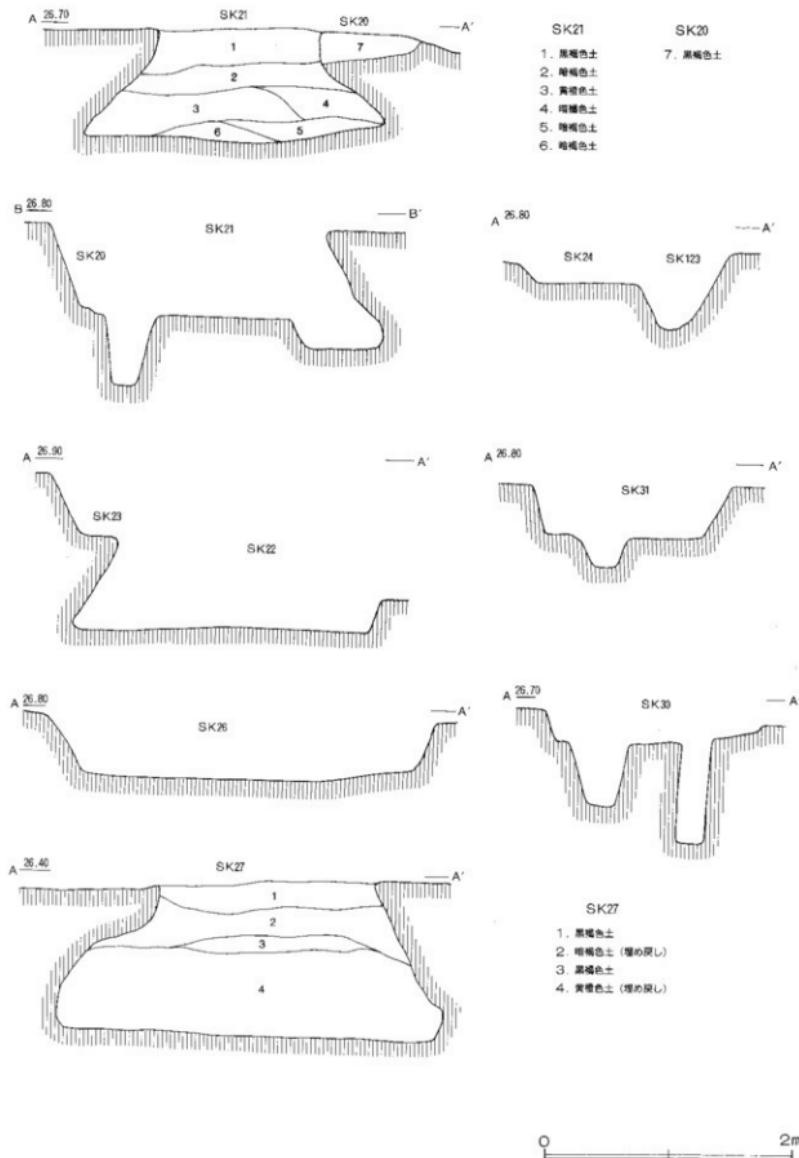


Fig 85 御吳遺跡 SK20・21・22・23・24・26・27・30・31

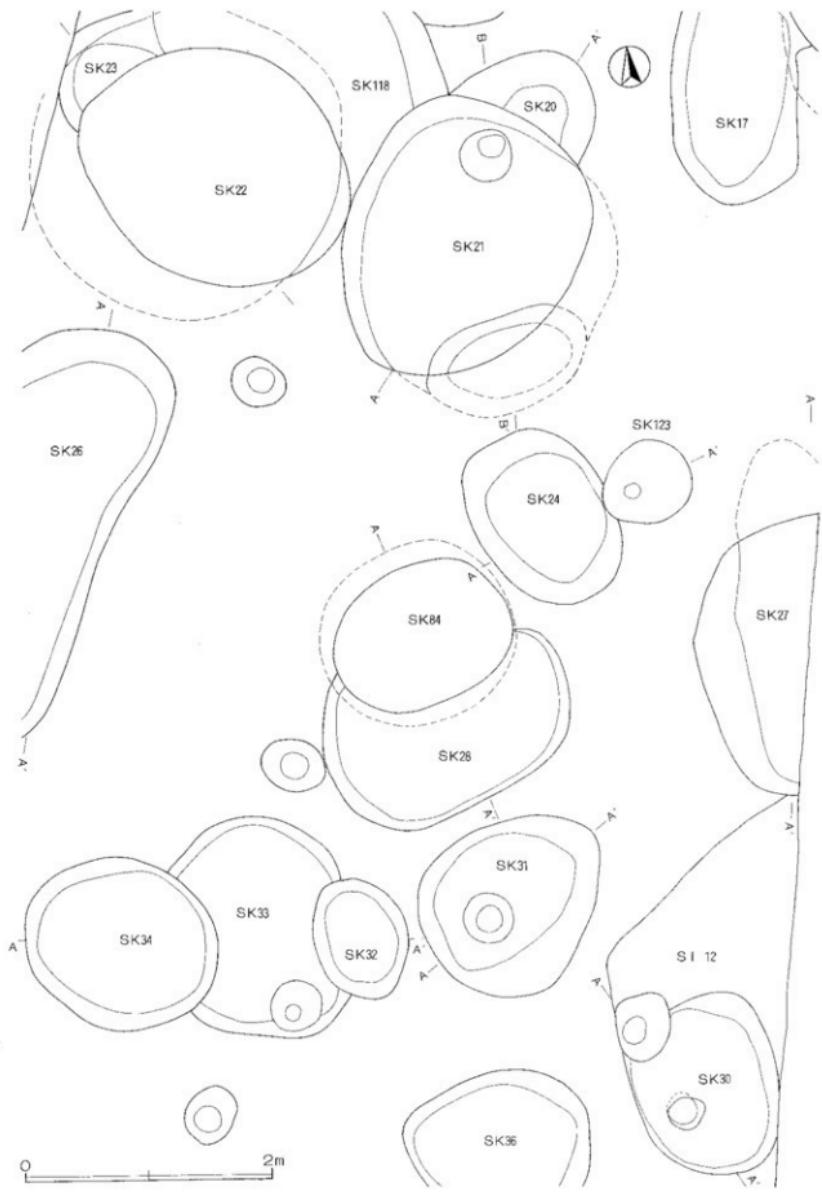


Fig 86 御灵遺跡 SK17・20・21・22・23・24・26・27・28・30・31・32・33・34・36・84・118・123

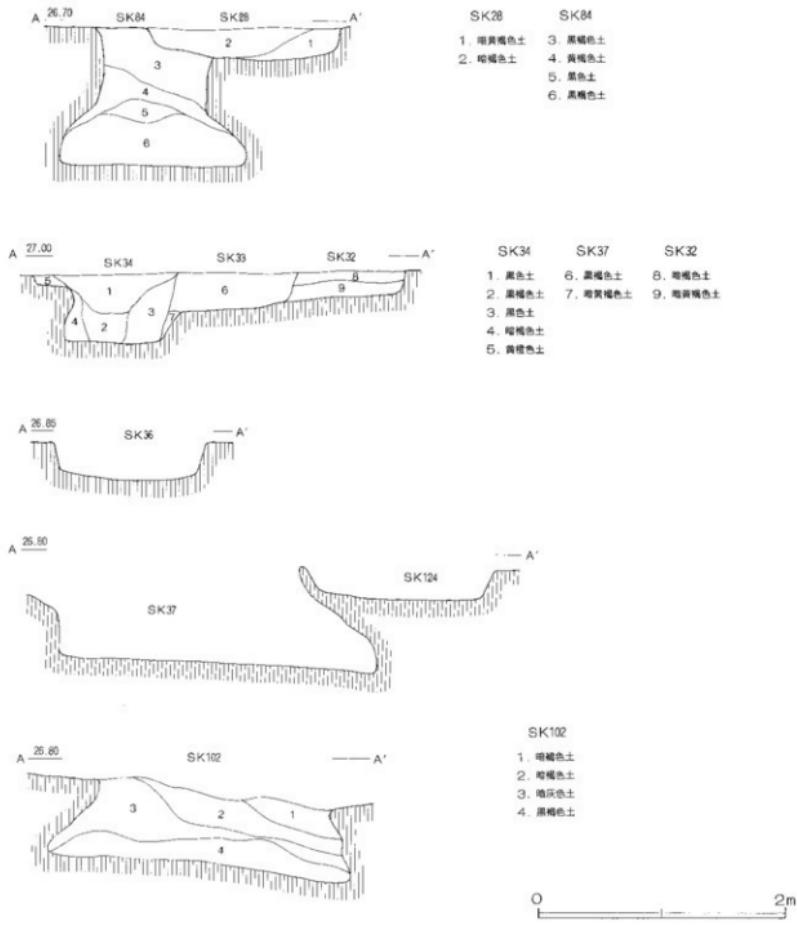


Fig 87 御天遺跡 SK28·32·33·34·36·37·84·102·124

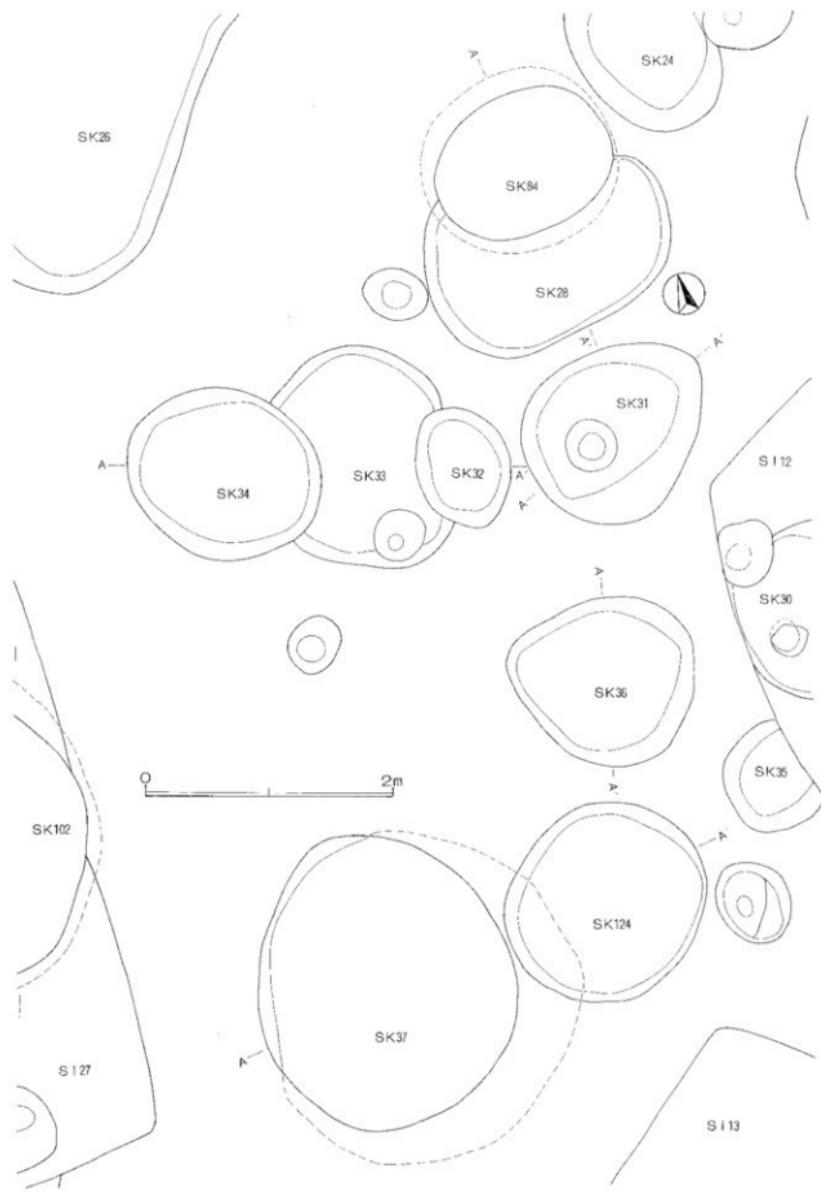


Fig 88 御灵遺跡 SK24・28・31・32・33・34・35・36・37・84・102・124

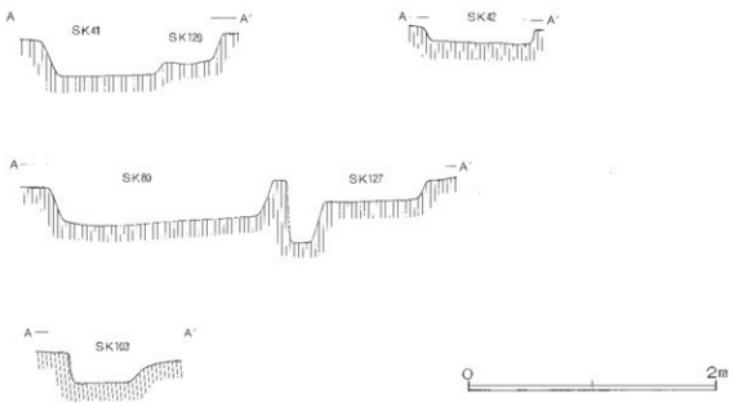


Fig 89 御灵遺跡 SK41・42・80・103・127

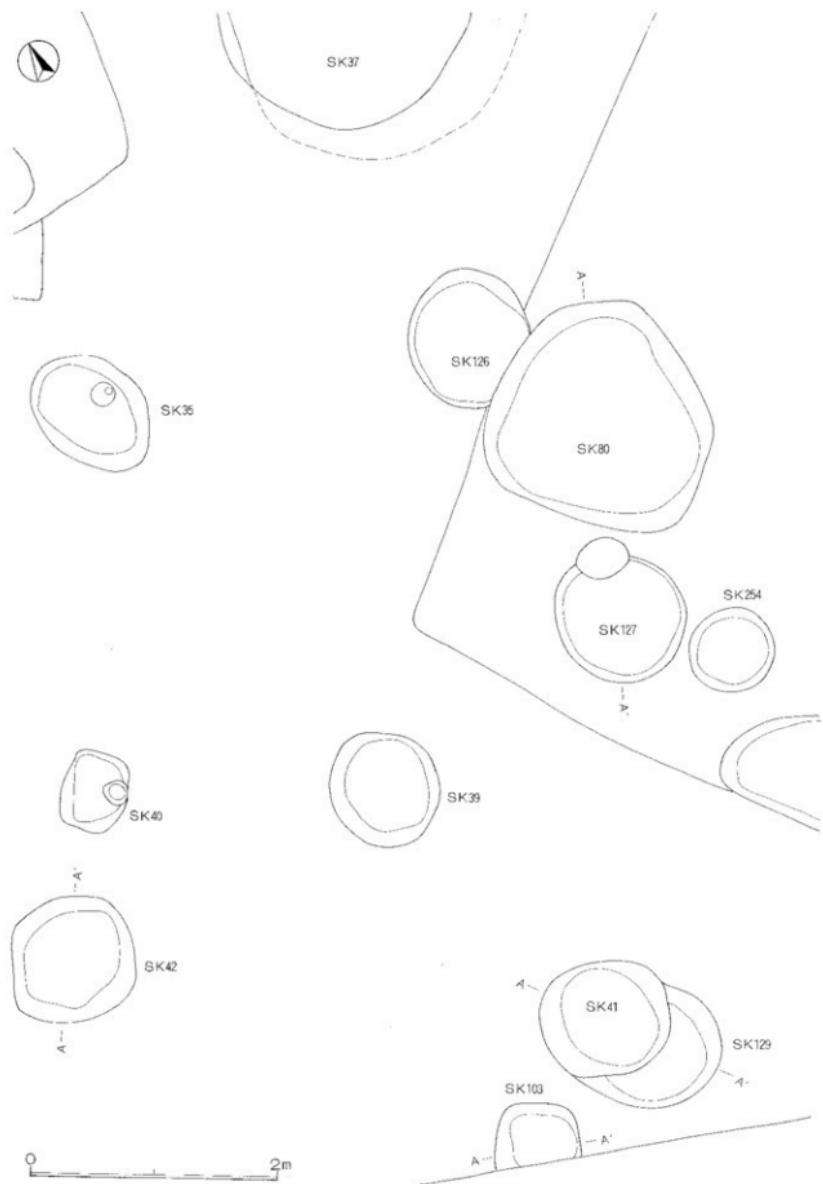
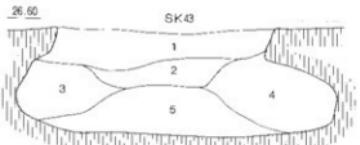
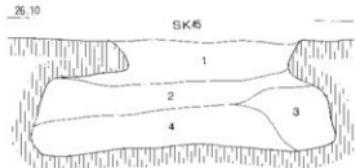


Fig 90 御灵跡 SK35・37・39・40・41・42・80・103・123・126・127・254



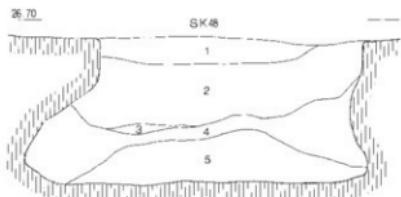
SK43

1. 咸褐色土
2. 黑褐色土
3. 地褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土 (埋め戻し)



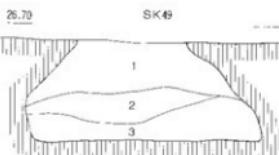
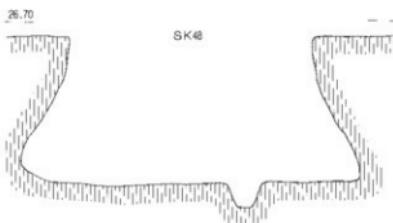
SK45

1. 咸褐色土
2. 黑褐色土
3. 地褐色土
4. 黄褐色土 (埋め戻し)



SK46

1. 黑褐色土
2. 咸褐色土 (埋め戻し)
3. 黑色土
4. 咸褐色土 (埋め戻し)
5. 黄褐色土 (埋め戻し)



SK49

1. 黄褐色土 (埋め戻し)
2. 黑褐色土
3. 黄褐色土 (埋め戻し)

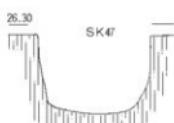


Fig. 91 御灵遺跡 SK43・45・46・47・48・49・50・51

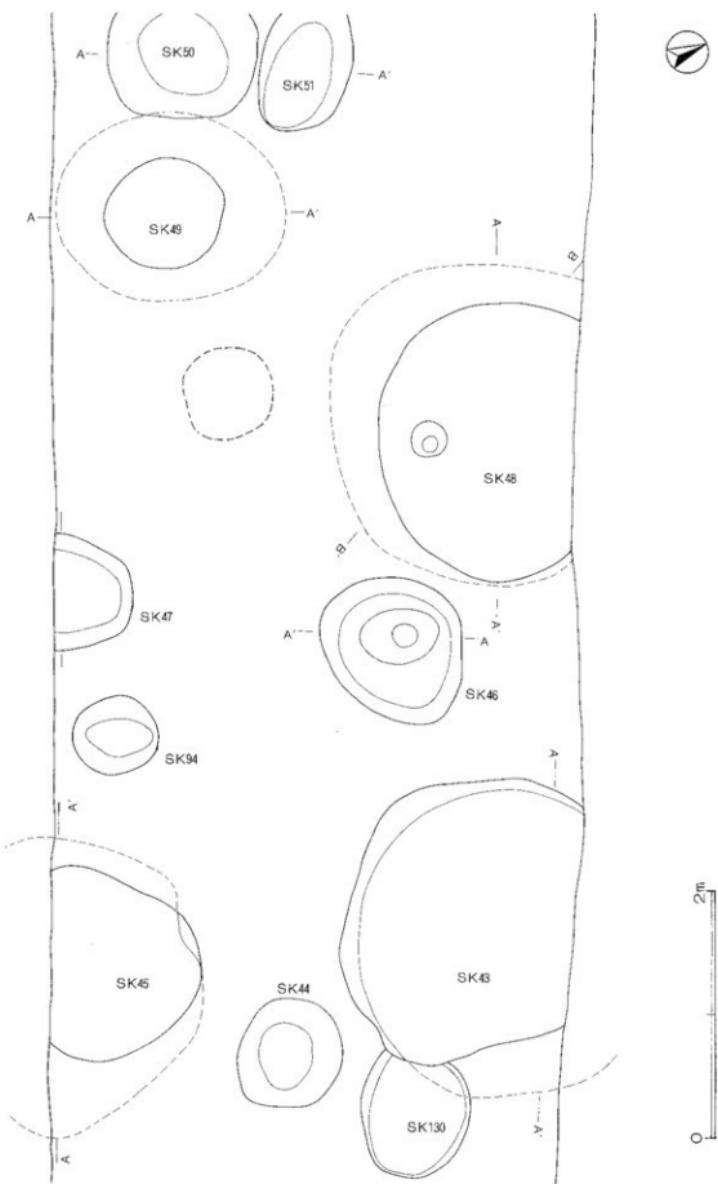


Fig 92 御灵遺跡 SK43・44・45・46・47・48・49・50・51・94・130

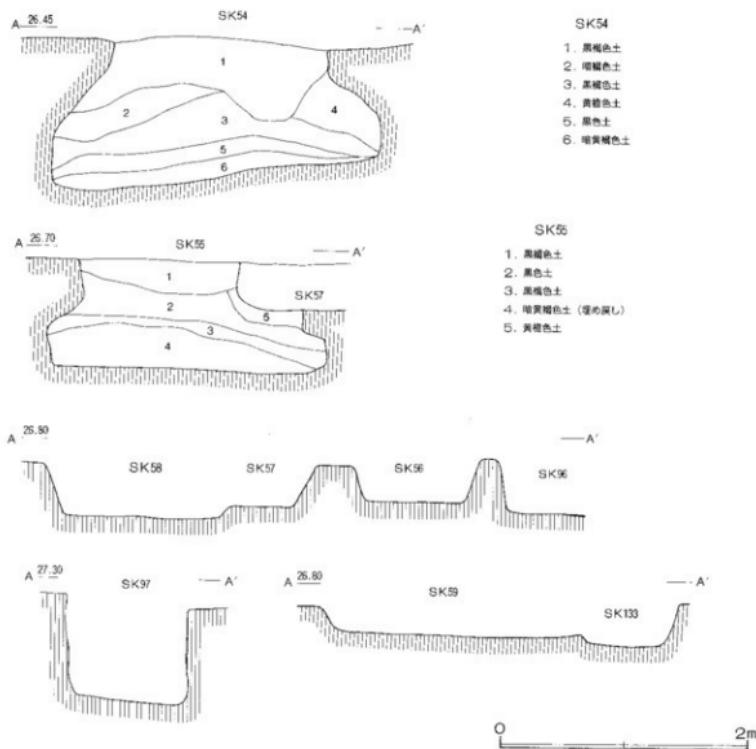


Fig 93 御灵遺跡 SK54・55・56・57・58・59・97・133

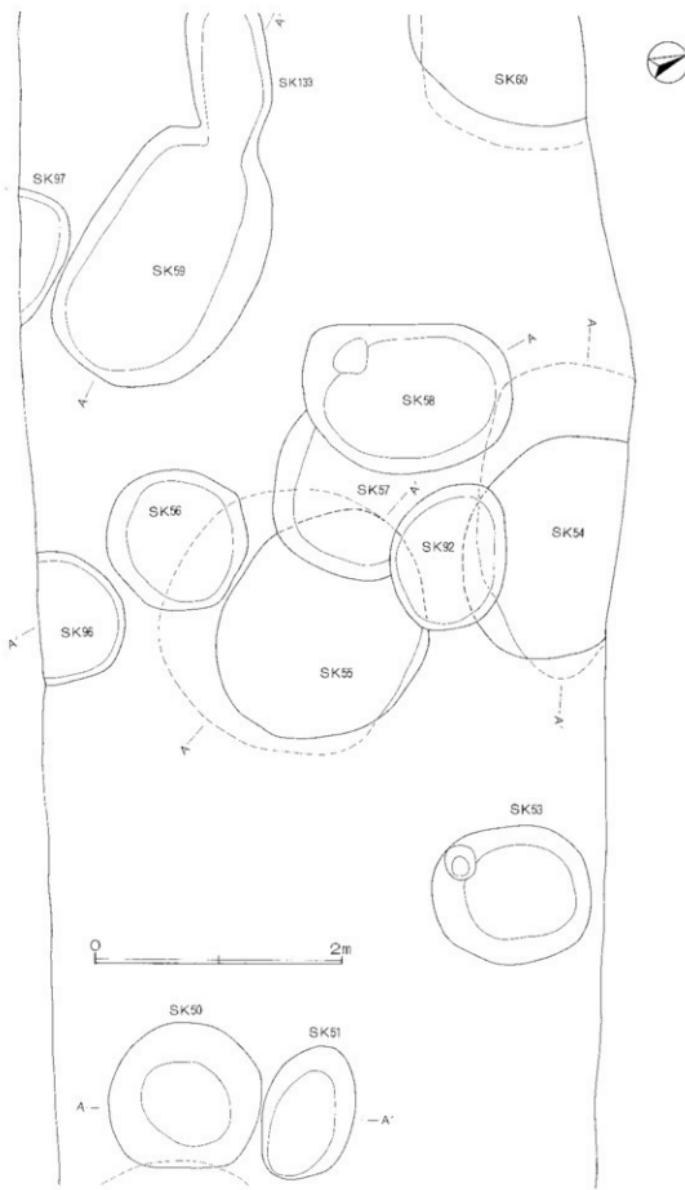


Fig 94 御灵跡 SK50・51・53・54・55・56・57・58・59・60・92・96・97・133

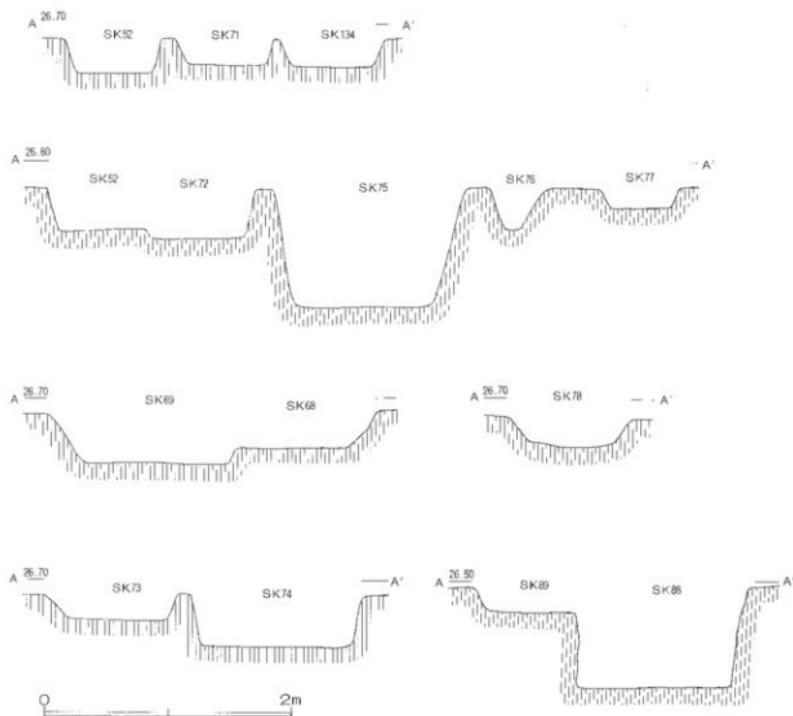


Fig 95 御灵遺跡 SK52・68・69・71・72・73・74・75・76・77・78・88・89・134

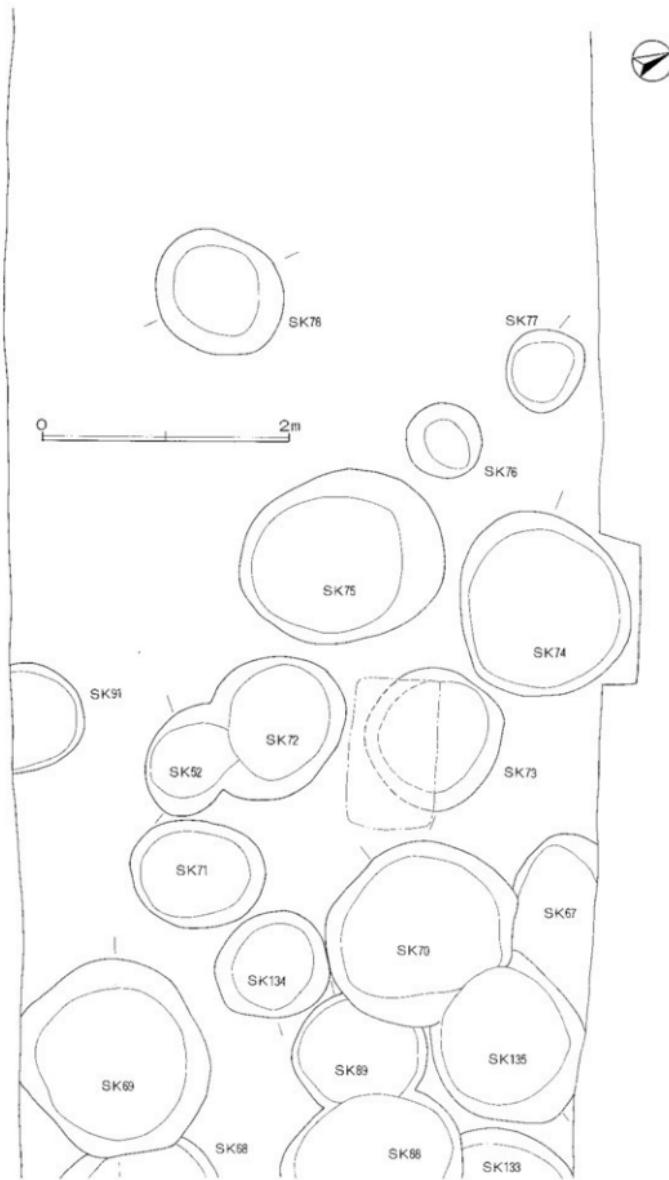


Fig 96 御吳遺跡 SK52-67-68-69-70-71-72-73-74-75-76-77-78-88-91-133-135

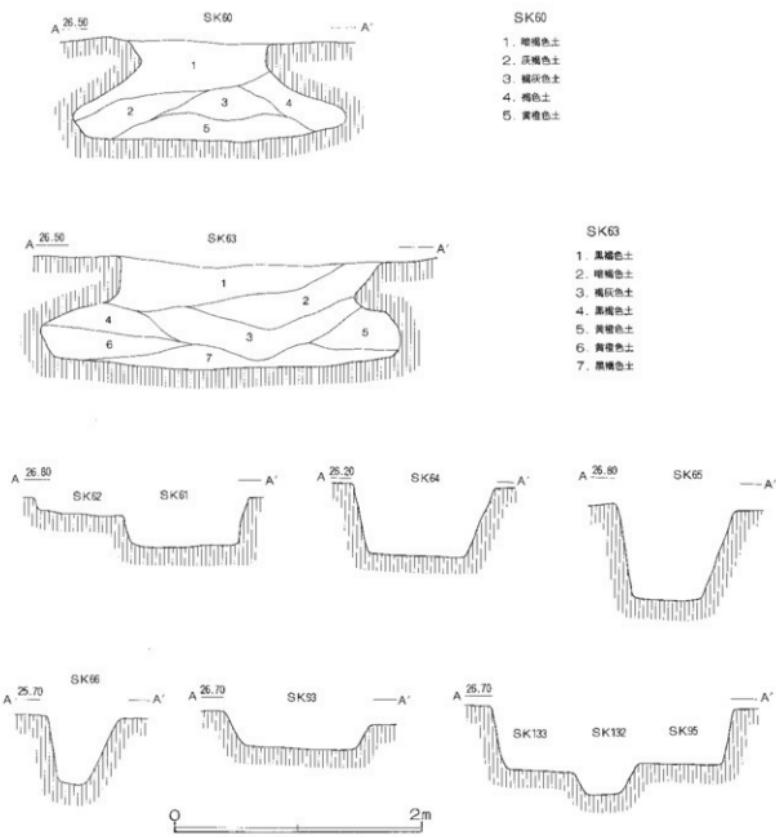


Fig 97 御灵跡 SK60·61·62·63·64·65·66·93·95·132·133

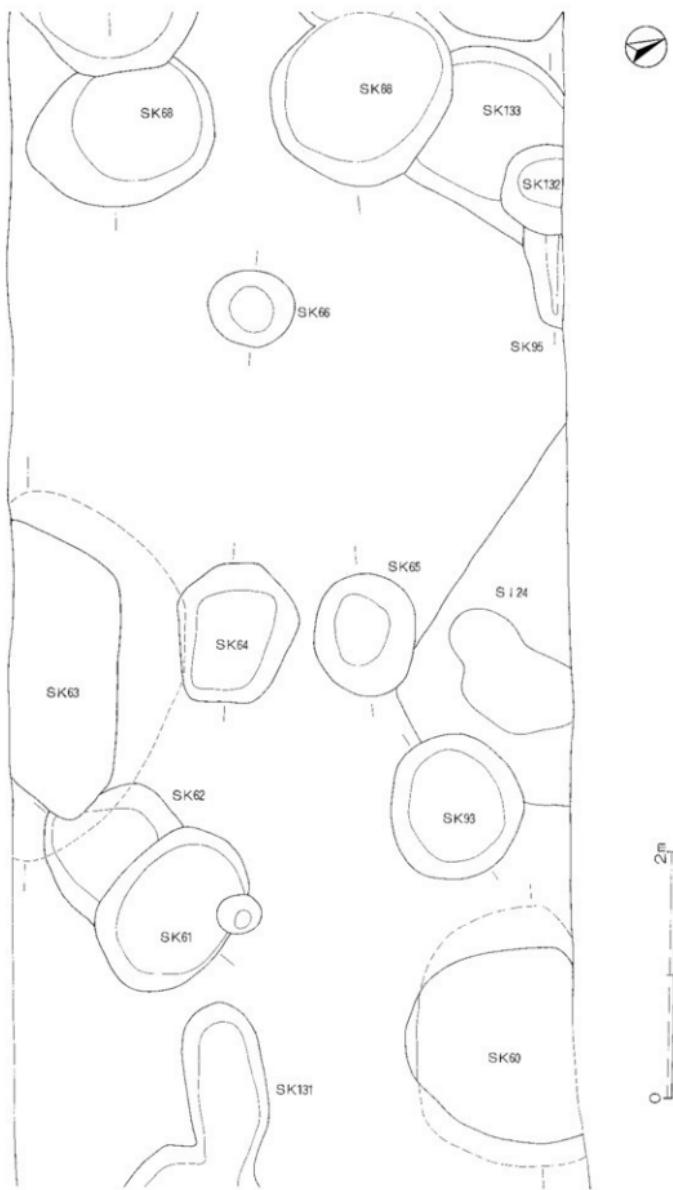


Fig 98 御灵遺跡 SK60・61・62・63・64・65・66・68・88・93・95・131・132・133

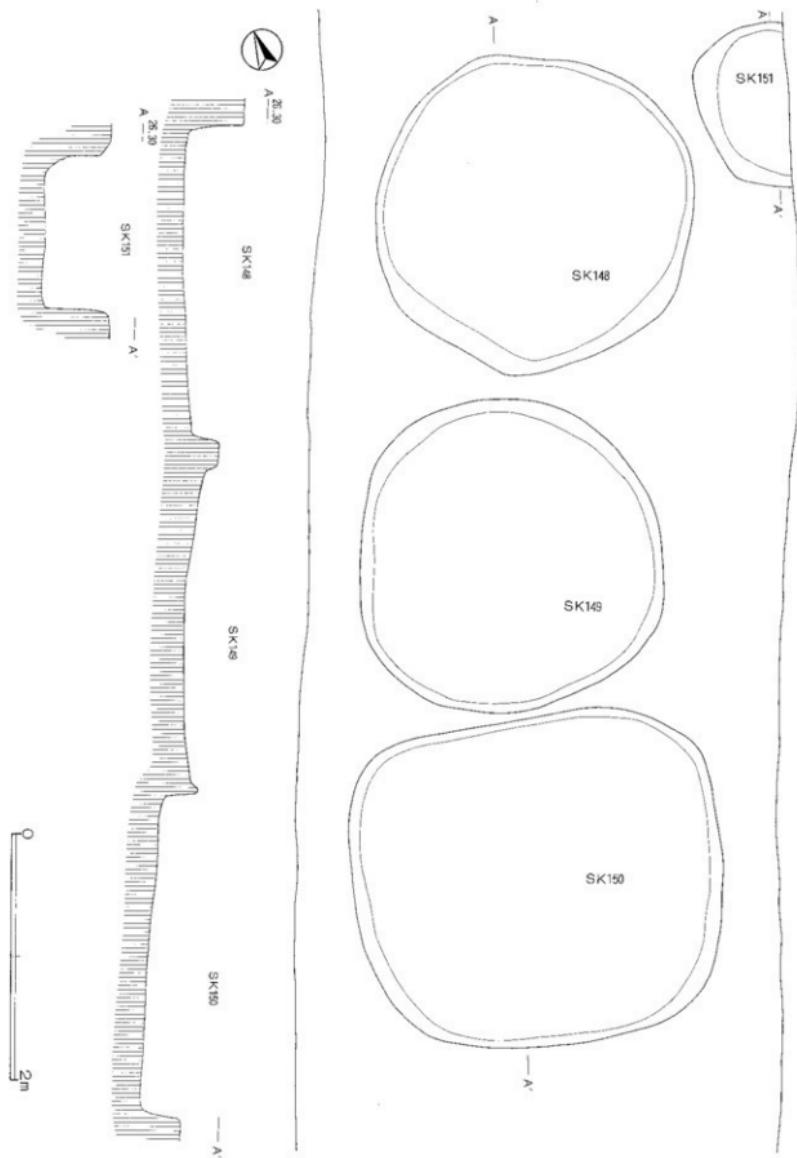


Fig 99 御灵遺跡 SK148・149・150・151

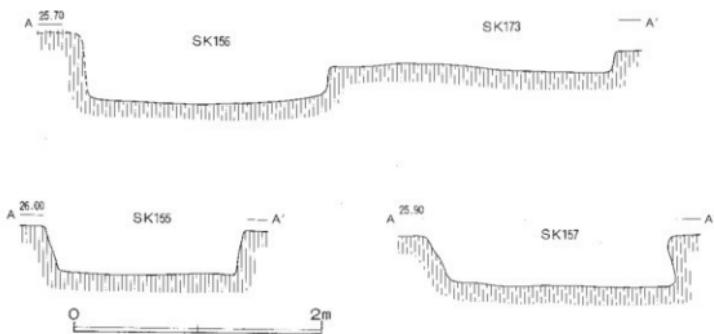


Fig 100 御灵遺跡 SK155・156・157・173

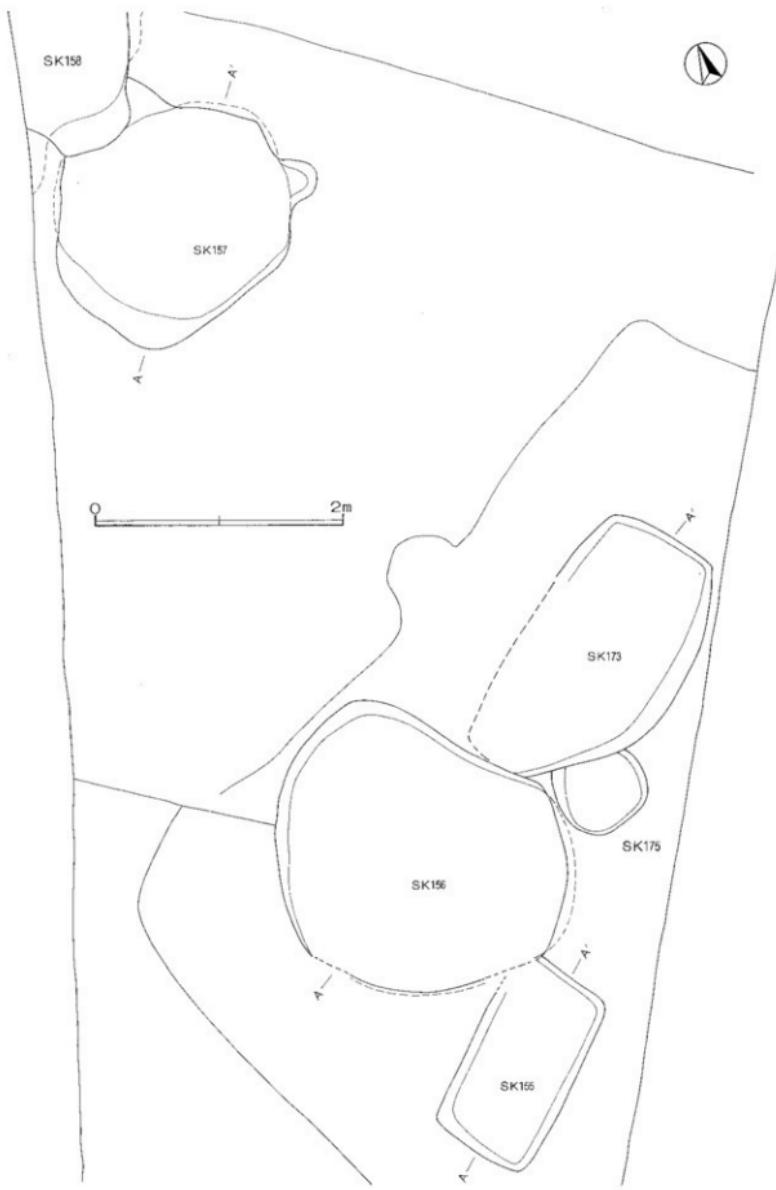


Fig 101 御灵遺跡 SK155・156・157・158・173・175

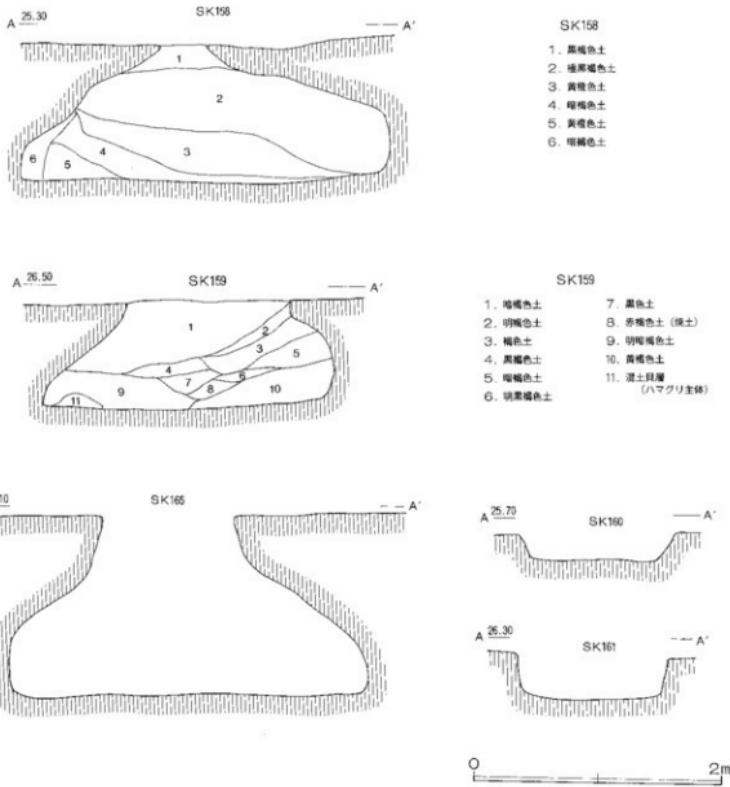


Fig 102 御吳遺跡 SK158・159・160・161・165

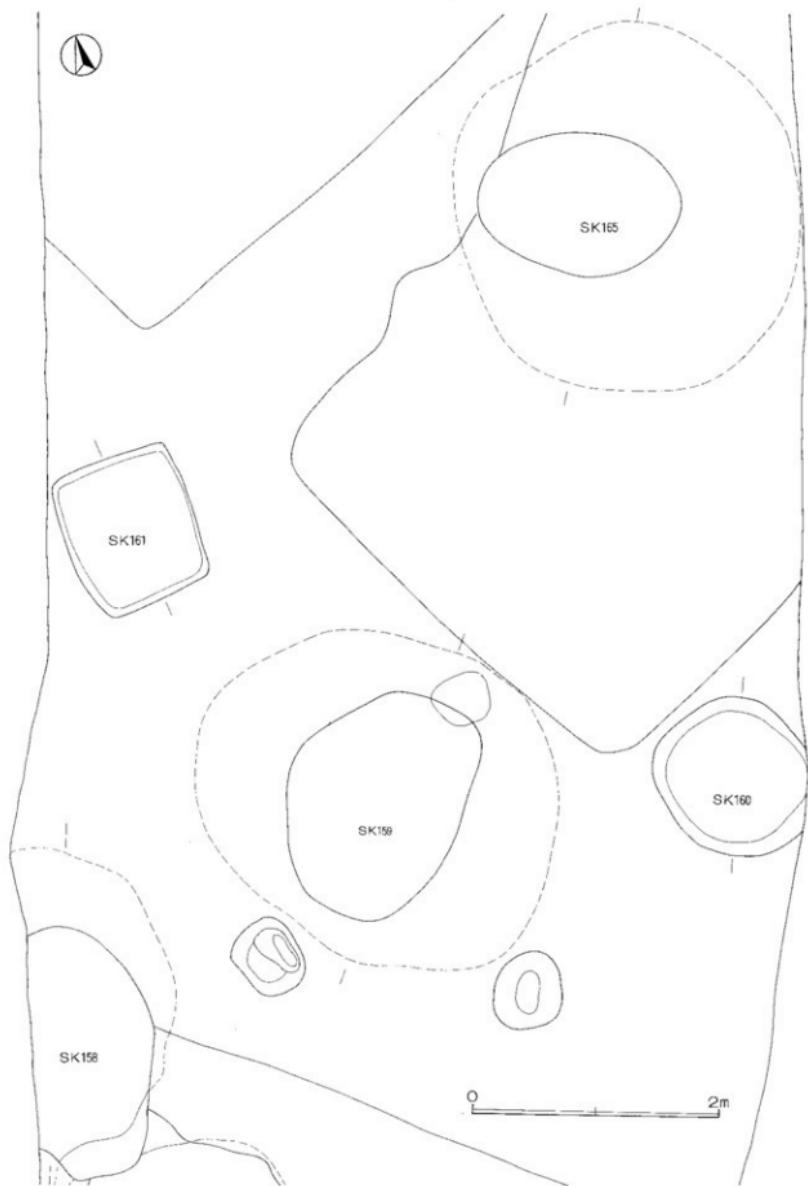


Fig 103 御灵遺跡 SK158・159・160・161・165

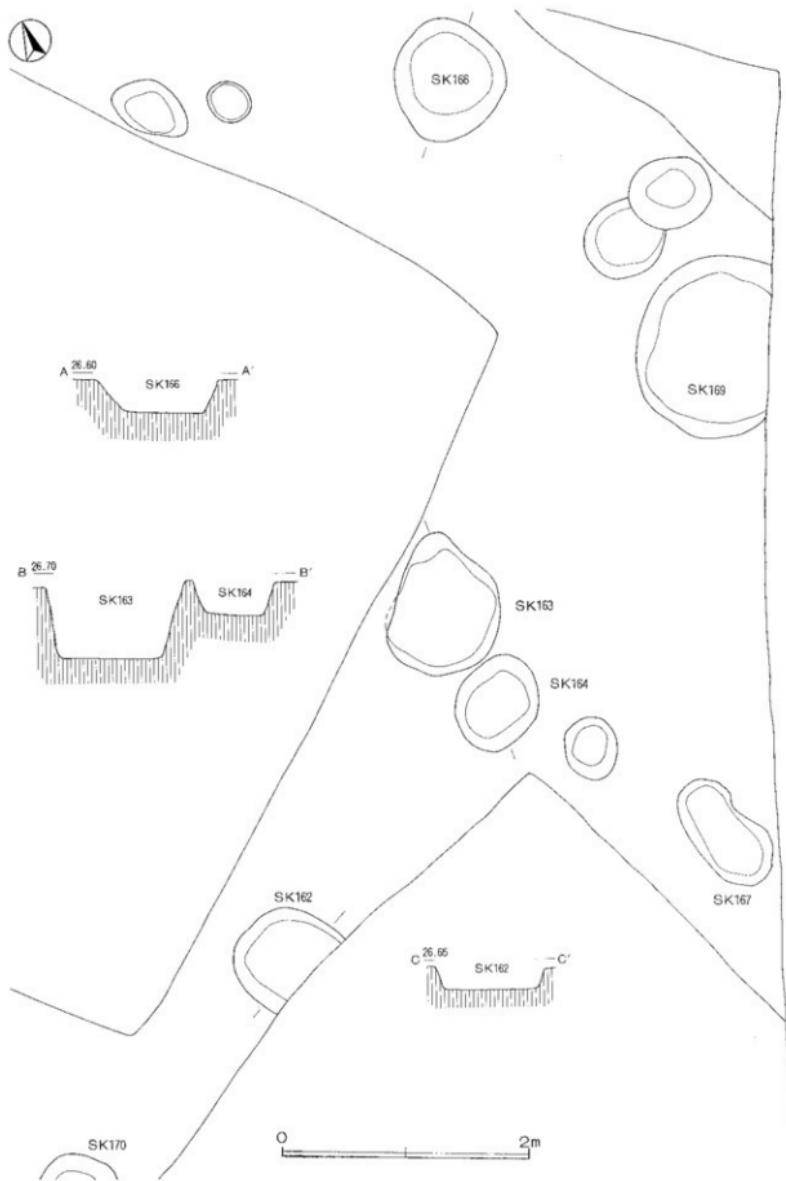


Fig 104 御灵遺跡 SK162・163・164・166・167・169

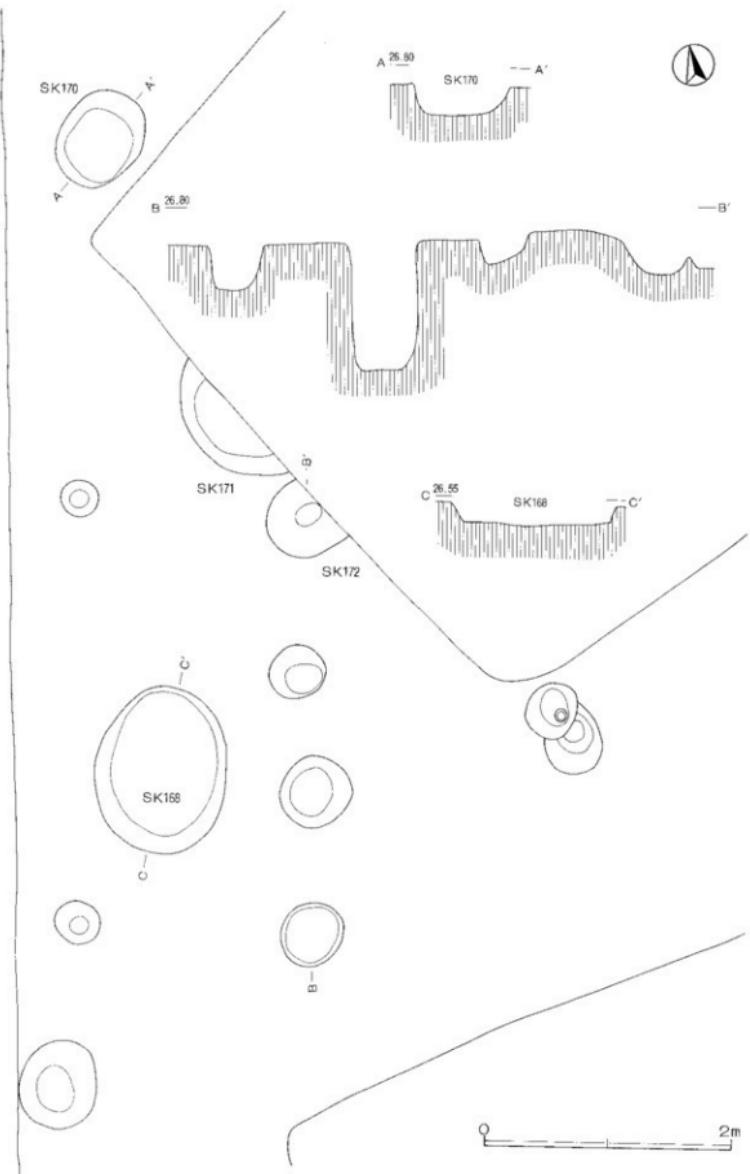


Fig 105 御灵遺跡 SK168・170・171・172

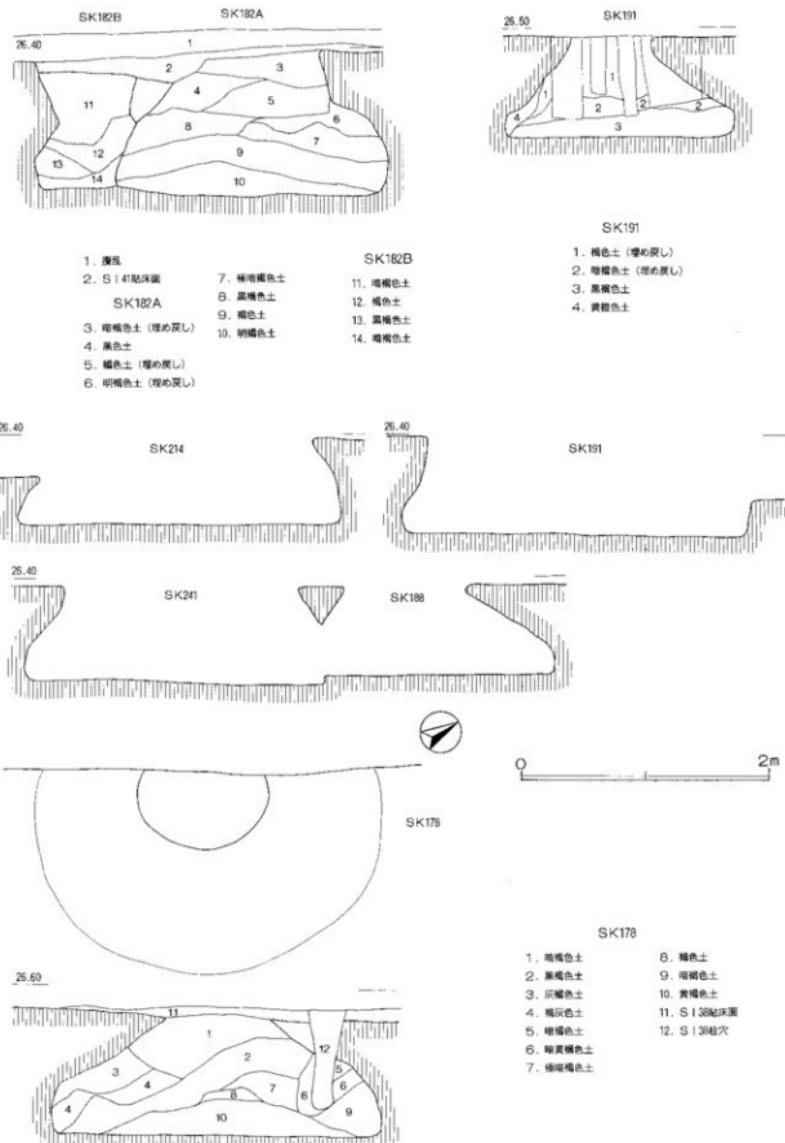


Fig 106 御灵跡 SK178・182A・182B・188・191・214・241

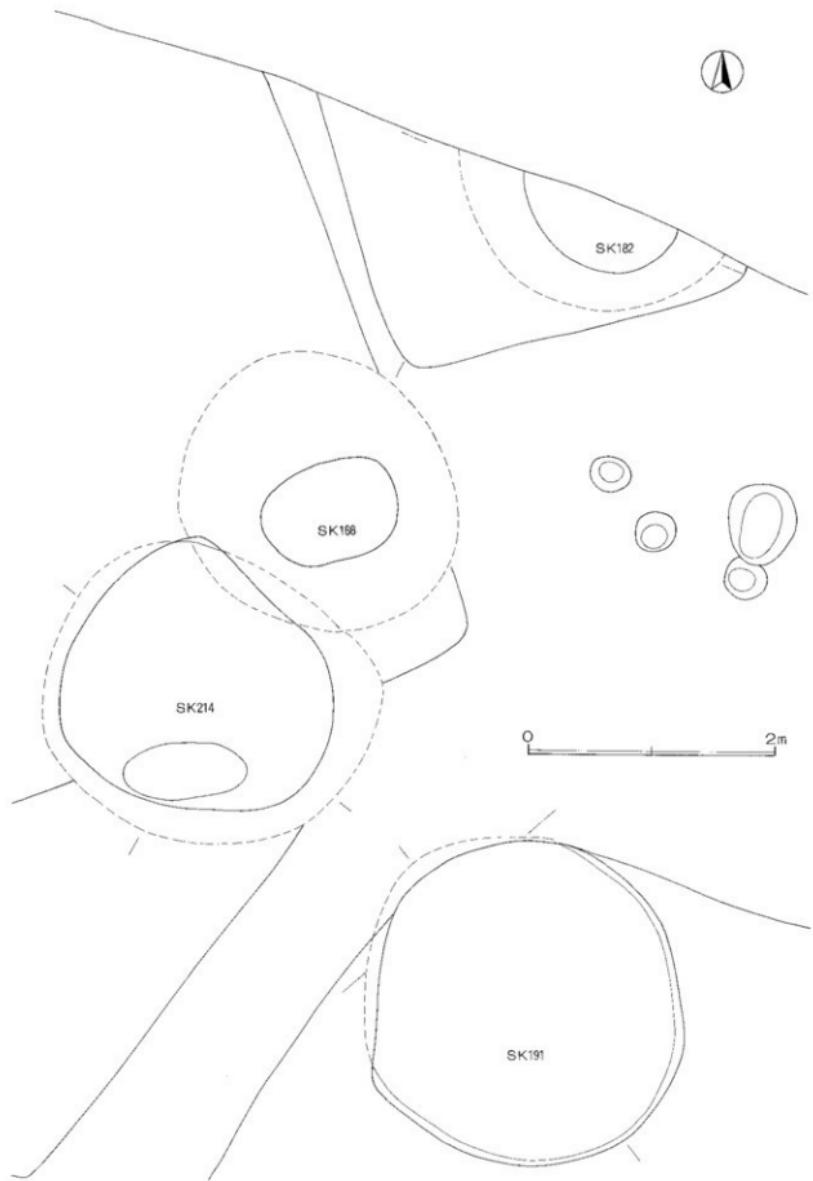
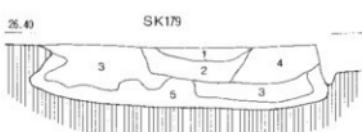
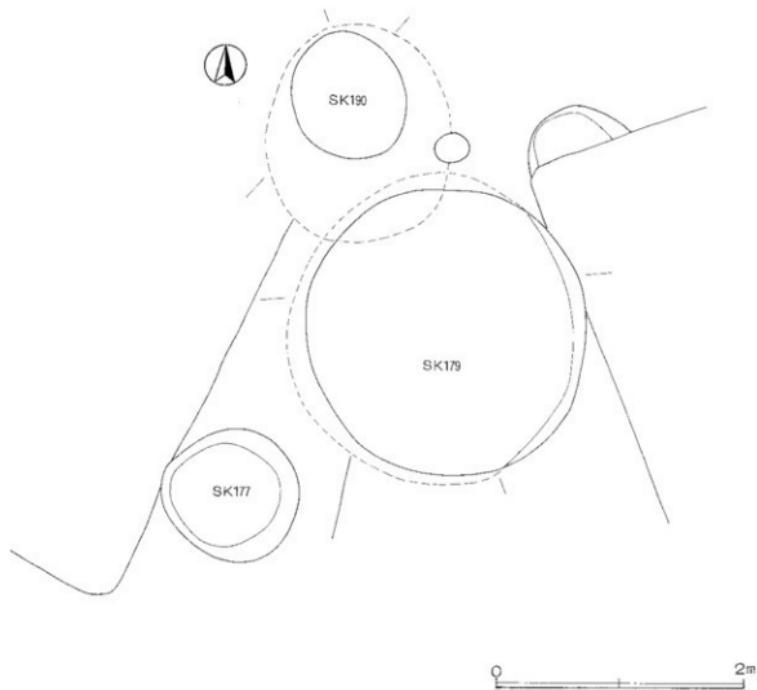
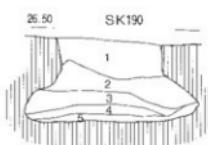


Fig 107 御天遺跡 SK182・188・191・214



SK179

1. 暗褐色土
2. 明暗褐色土
3. 黑褐色土
4. 暗褐色土
5. 明褐色土



SK190

1. 暗褐色土
2. 明暗褐色土
3. 黑褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗褐色土



SK218



SK190

Fig 108 御灵遺跡 SK177・179・190・216・218

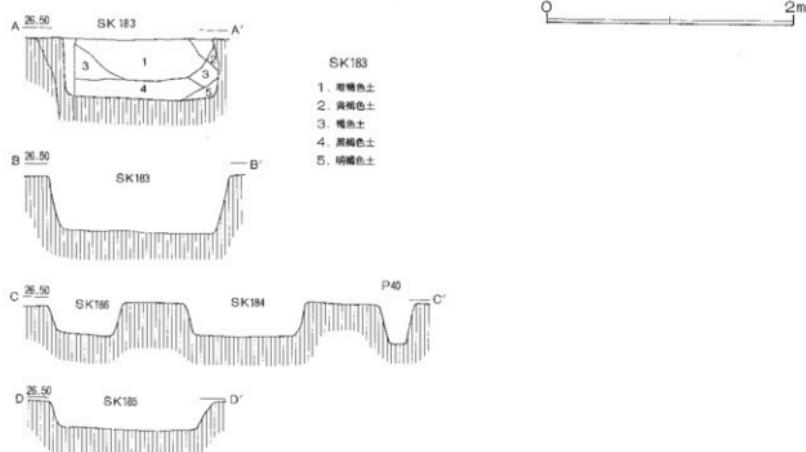
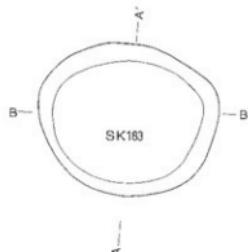
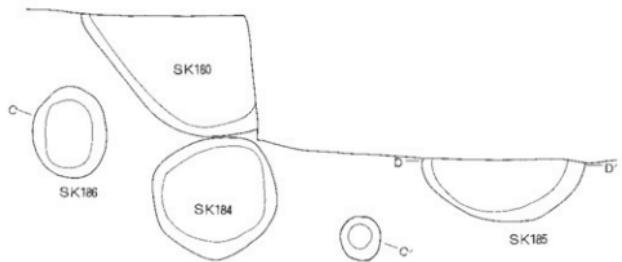


Fig 109 御灵遺跡 SK180・183・184・185・186

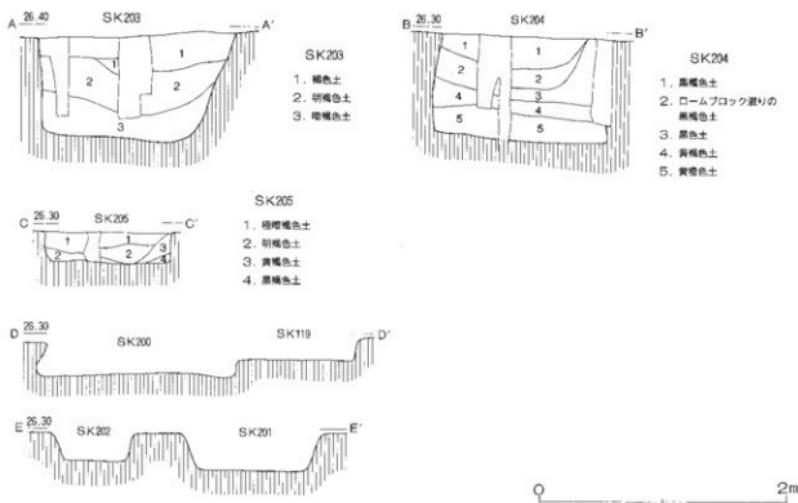
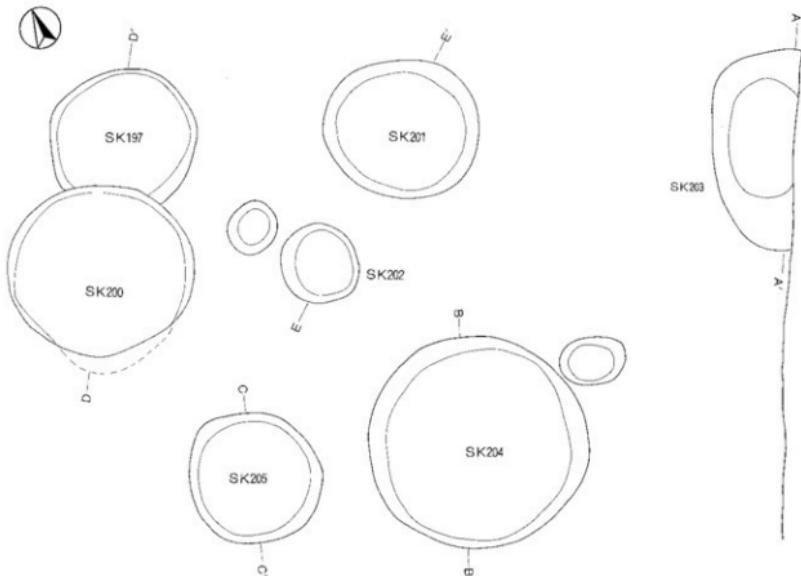


Fig 110 御吳遺跡 SK197・200・201・203・204・205

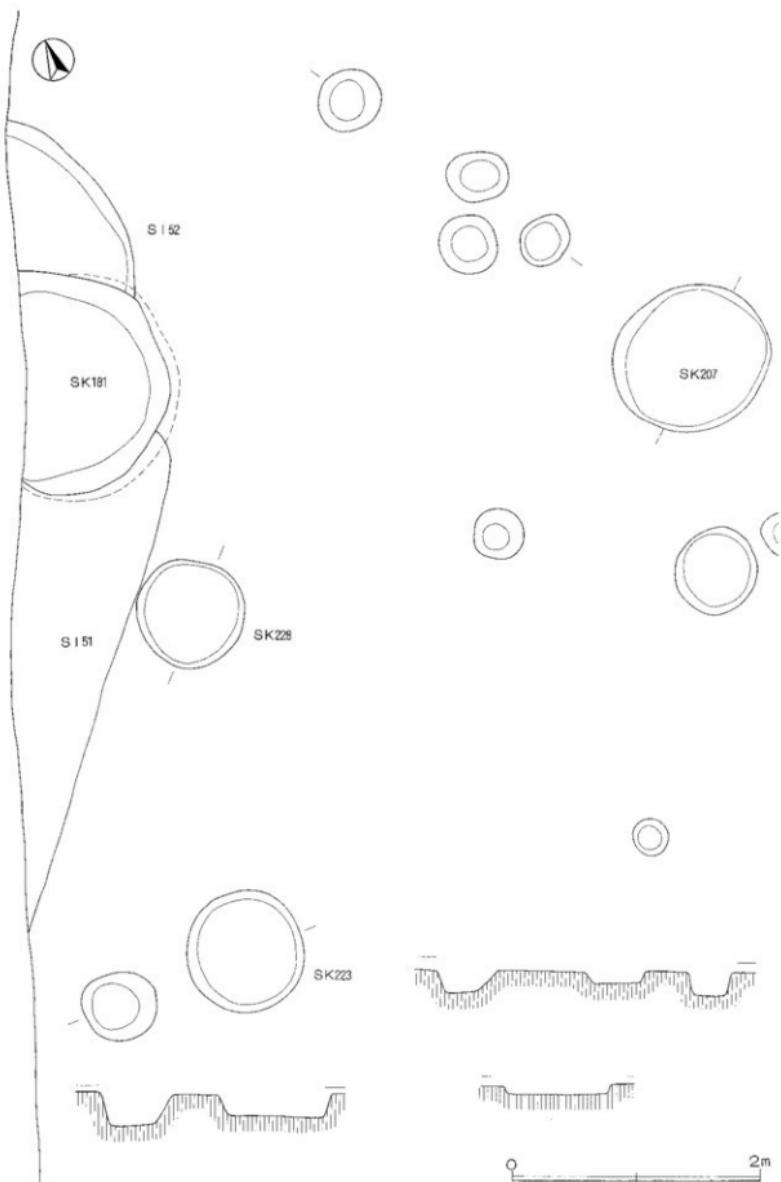
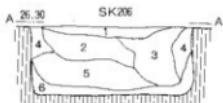
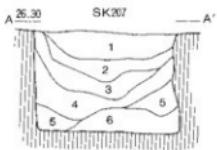


Fig 111 御灵遺跡 SK81・207・223 S 151・52



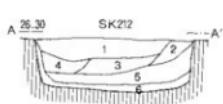
SK206

1. 喀褐色土
2. 明褐色土
3. 黑褐色土
4. 黄褐色土
5. 棕色土
6. 黑色土



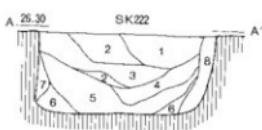
SK207

1. 黑褐色土
2. 棕色土
3. 黄褐色土
4. 赤黑褐色土
5. 黑褐色土
6. 喀褐色土



SK212

1. 墨褐褐色土
2. 黄褐色土
3. 黑色土
4. 喀褐色土
5. 黑褐色土
6. 黄褐色土



SK222

- | | |
|---------|----------|
| 1. 喀褐色土 | 6. 墨褐褐色土 |
| 2. 黄褐色土 | 7. 棕灰色土 |
| 3. 喀褐色土 | 8. 黄褐色土 |
| 4. 棕色土 | |
| 5. 黑褐色土 | |



Fig 112 御灵遺跡 SK206・207・212・222

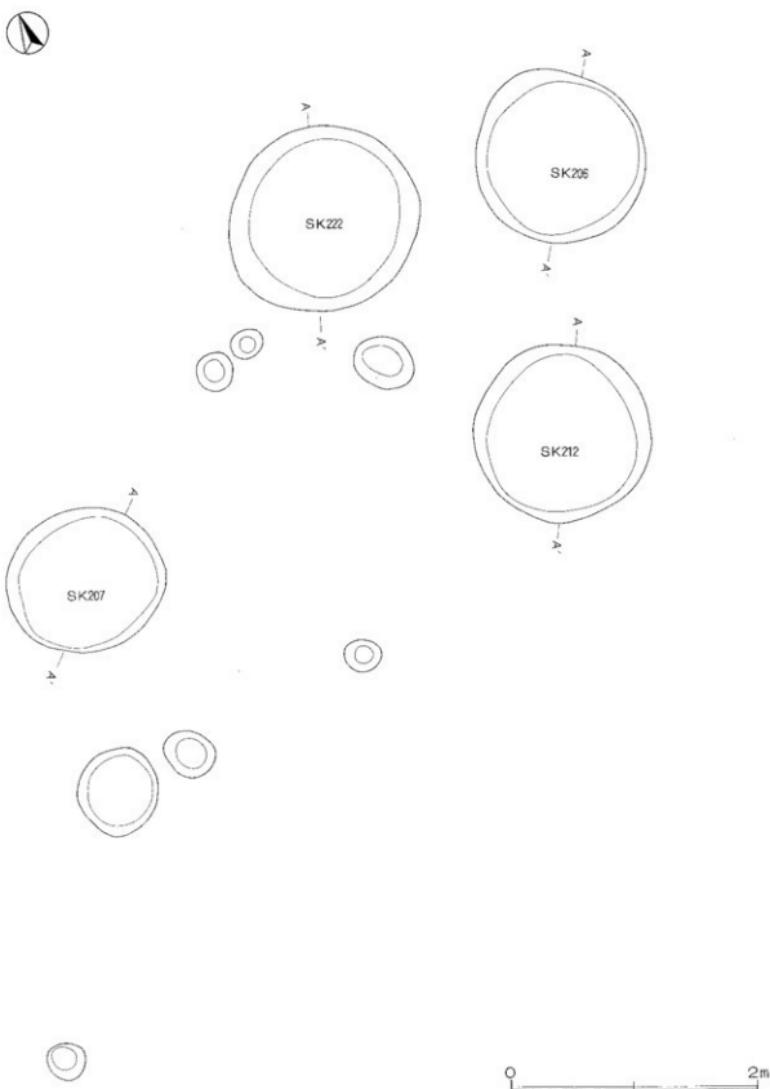


Fig 113 御灵遺跡 SK206・207・212・222

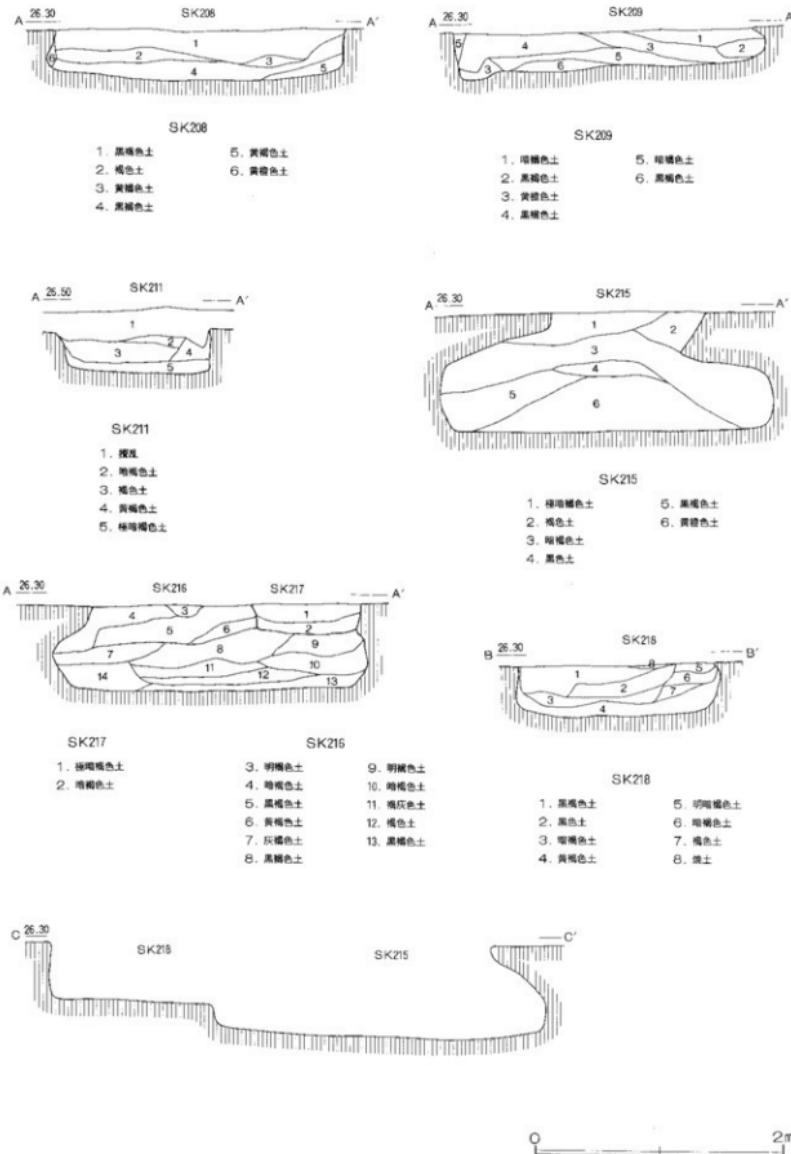


Fig 114 御吳遺跡 SK208・209・211・215・217・218

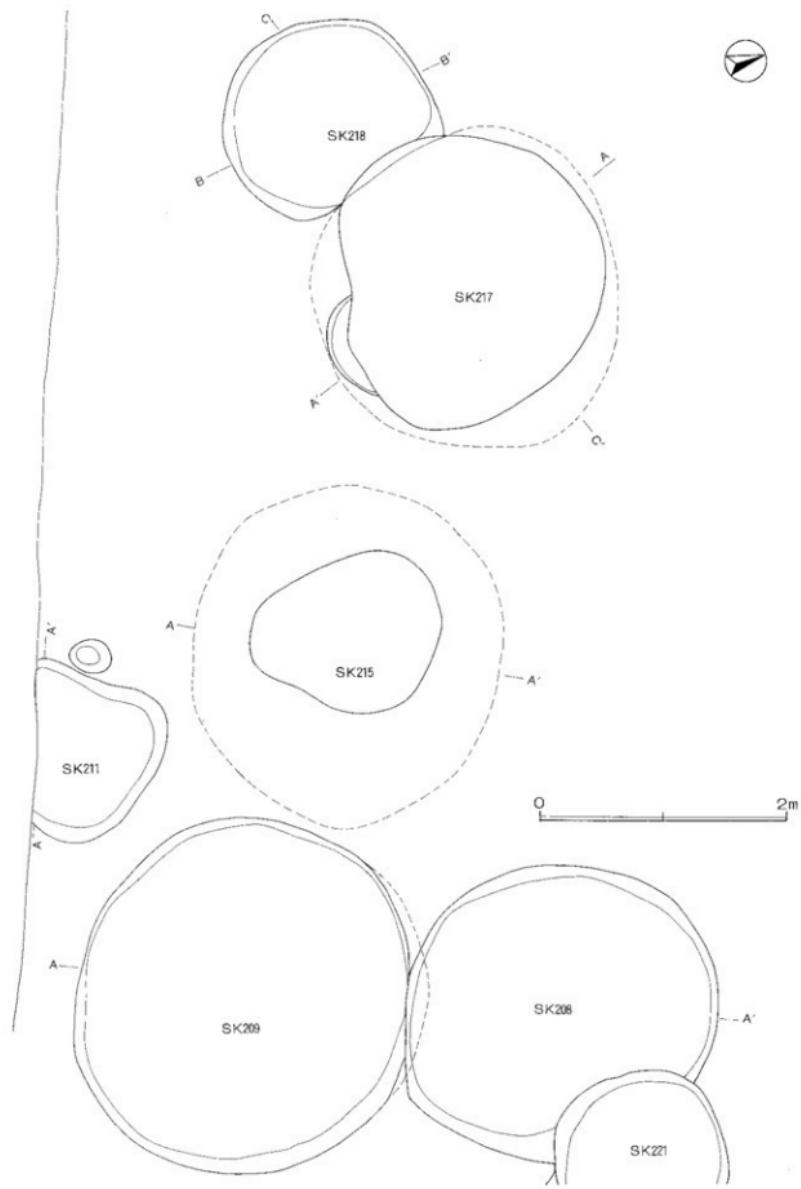


Fig 115 御灵遺跡 SK208・209・211・215・217・218

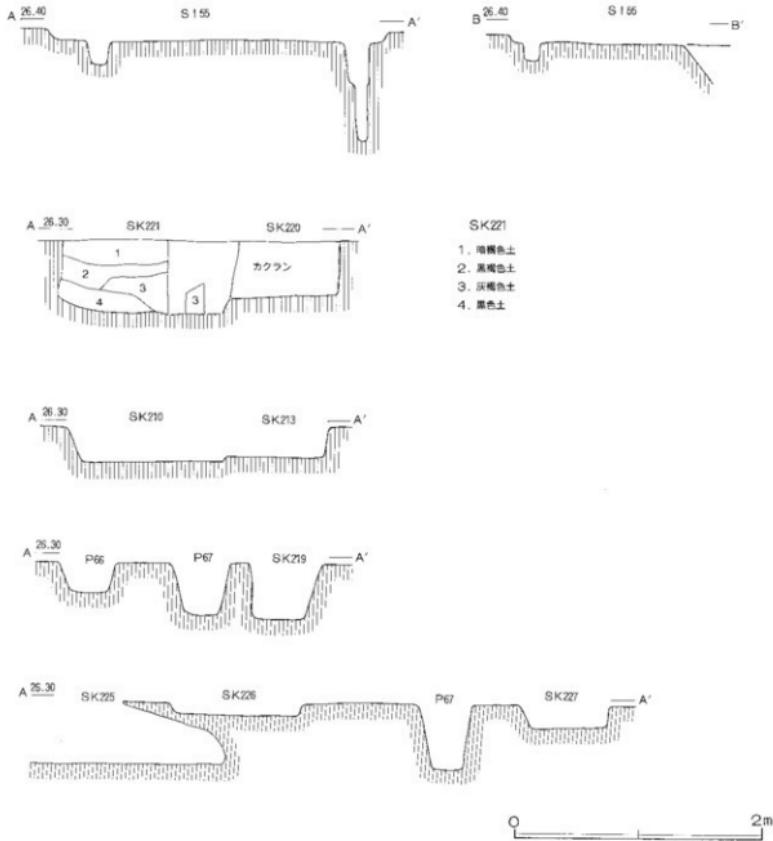


Fig 116 御灵遺跡 S 155 SK210・213・219・220・221・225・226・227
P66・67・68

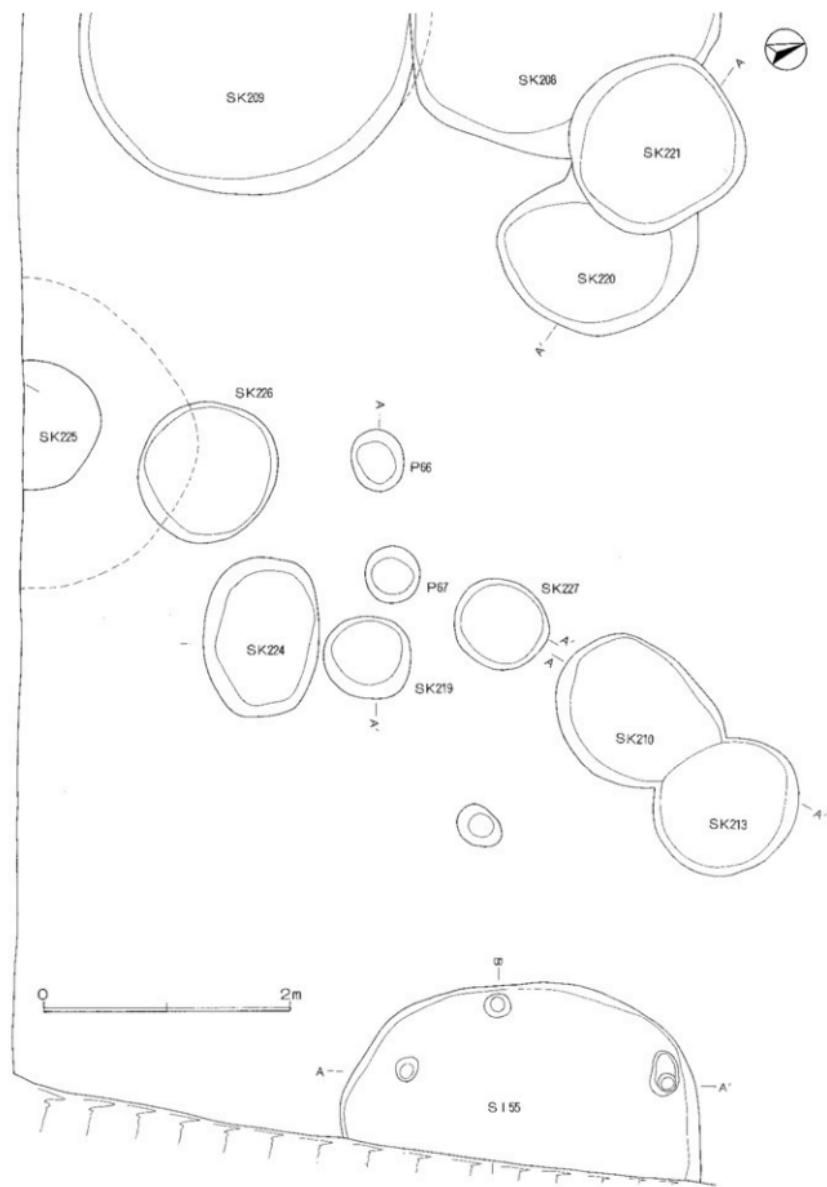
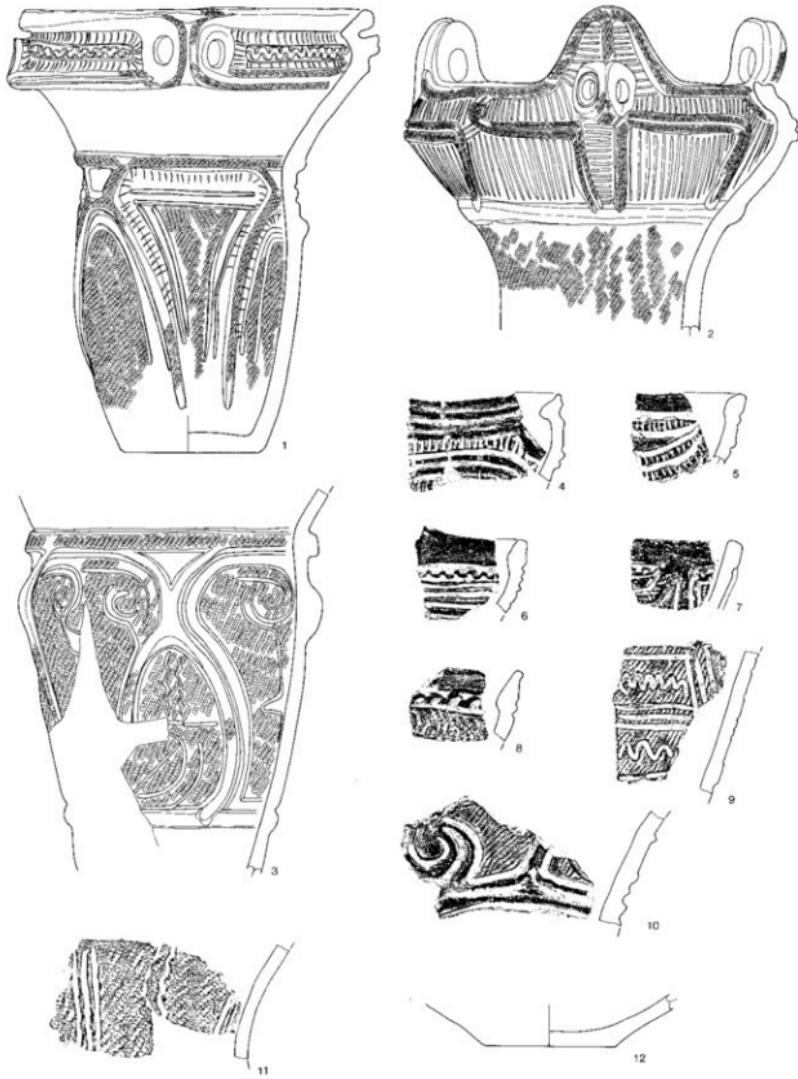


Fig 117 御冥遺跡 S 155 SK208・209・210・213・219・220・221・224・225・226・227



SK1 (1~12)

0 20cm

Fig 118 御灵遺跡 SK1

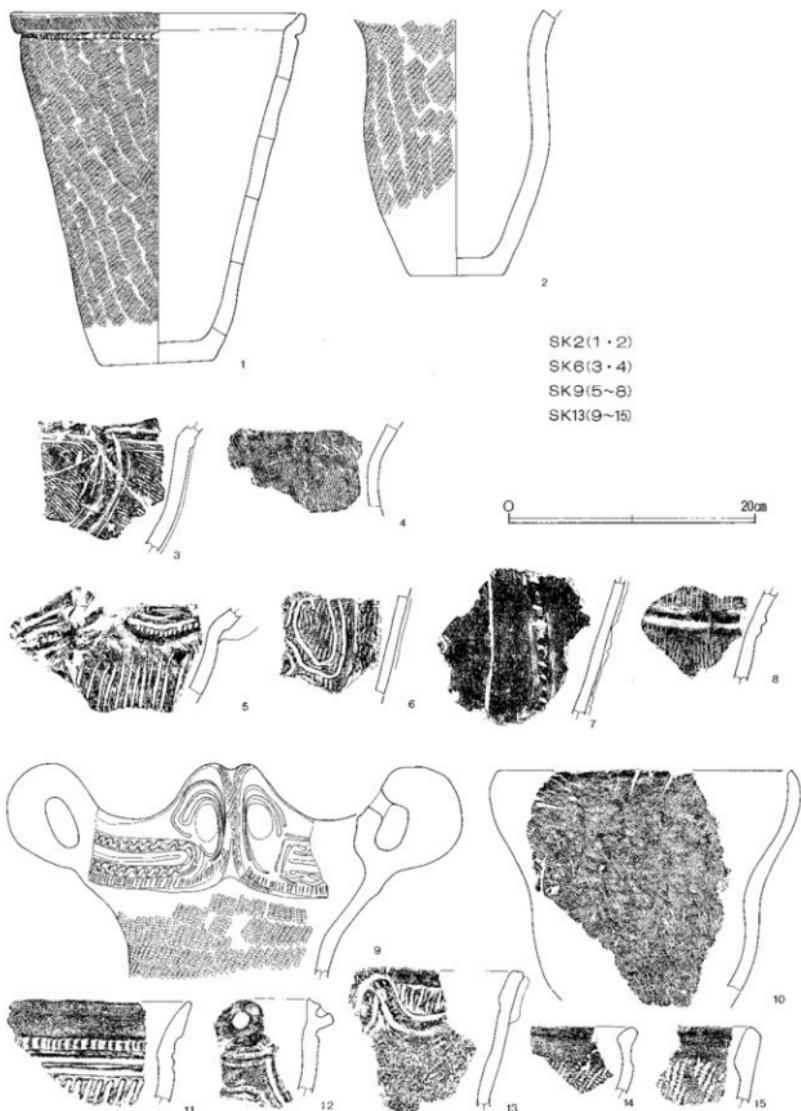


Fig 119 御灵遺跡 SK2・6・9・13

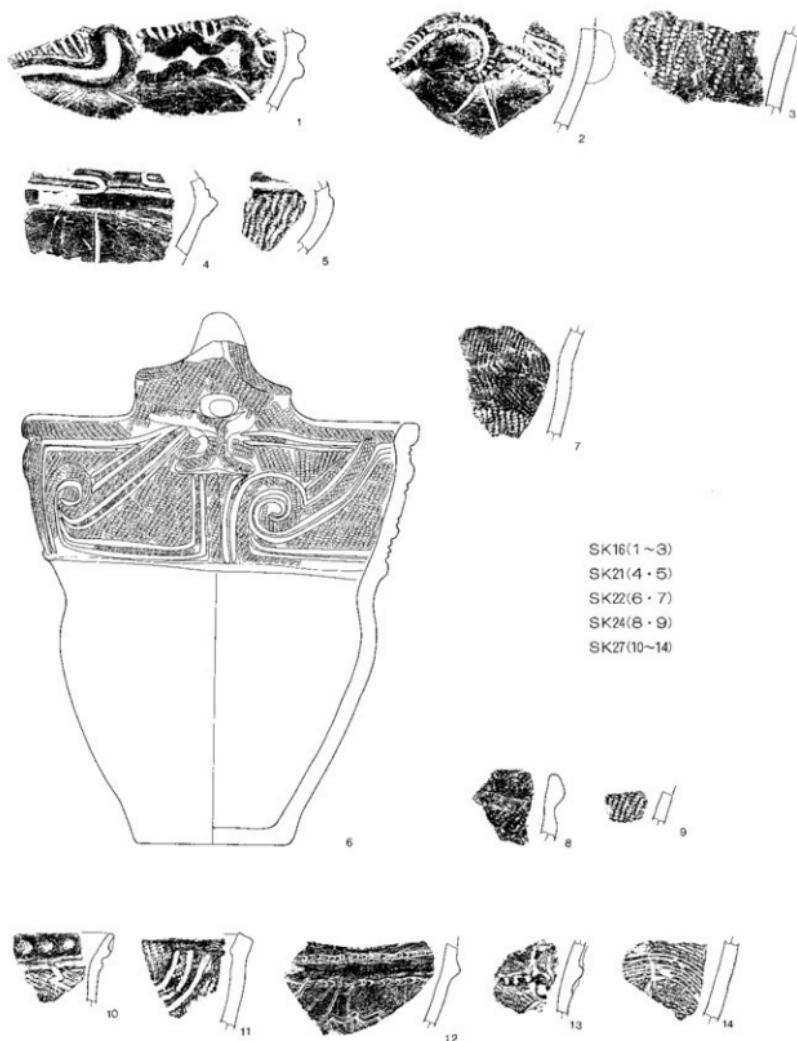


Fig 120 御灵遺跡 SK16・20・21・22・24・27

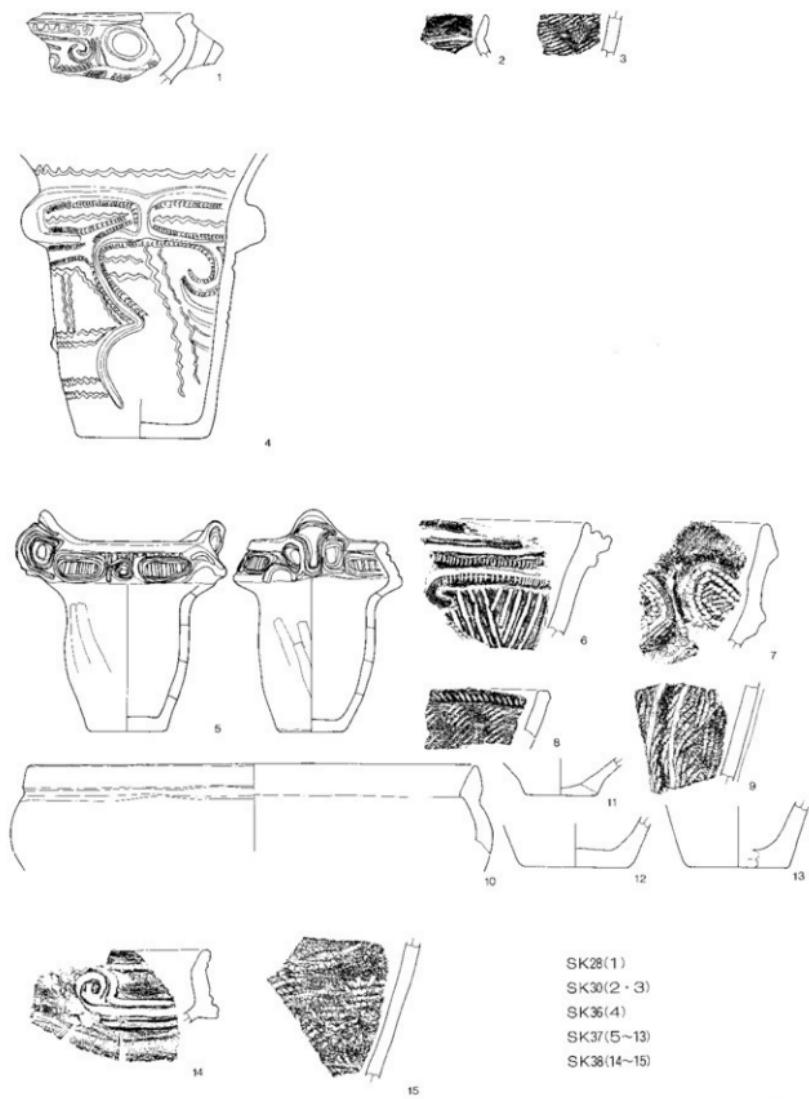
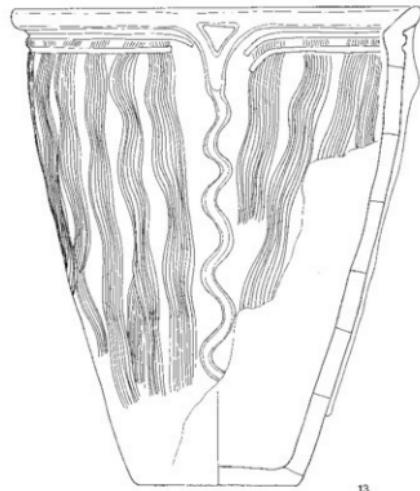
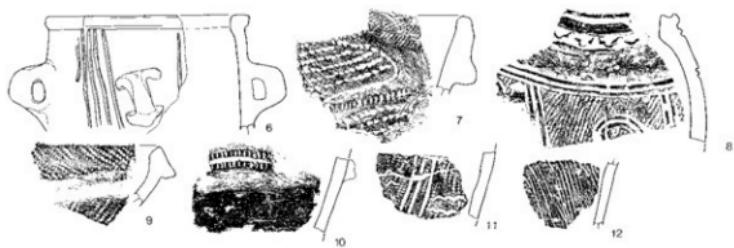
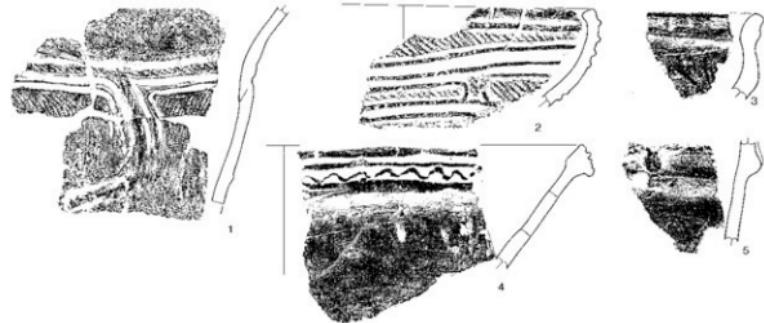


Fig 121 御灵遺跡 SK28・30・36・37・38



SK45(1~5)

SK48(6~12)

SK49(13)

SK50(14)

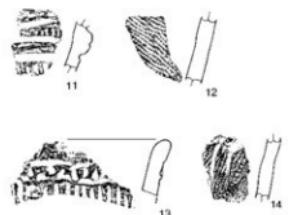
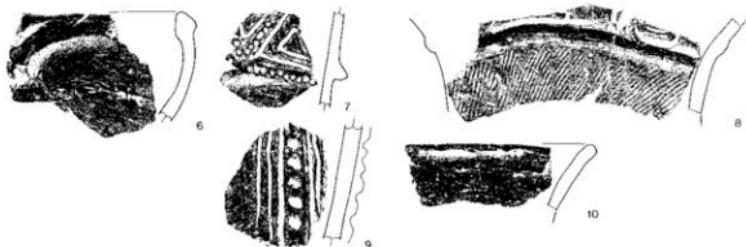
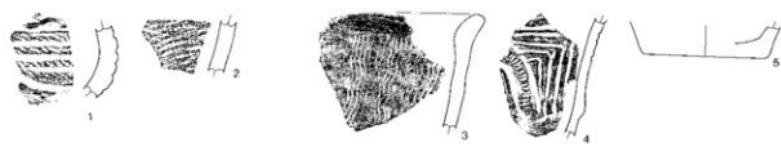


0

20cm



Fig 122 御吳遺跡 SK48・49・50



SK53(1~2)
SK54(3~5)
SK55(6~10)
SK70(11~12)
SK79(13~14)
SK80(15~18)

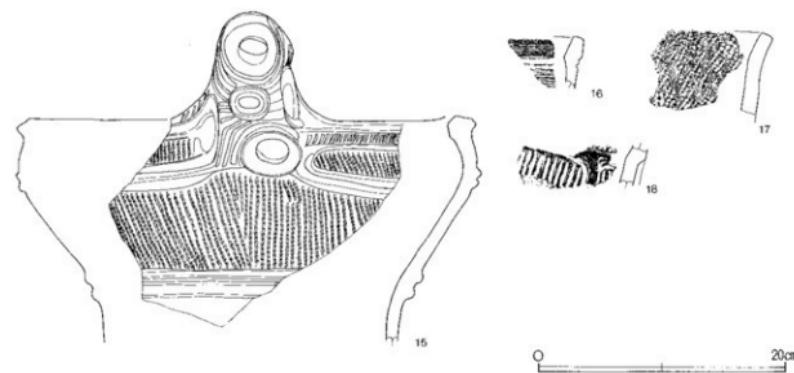
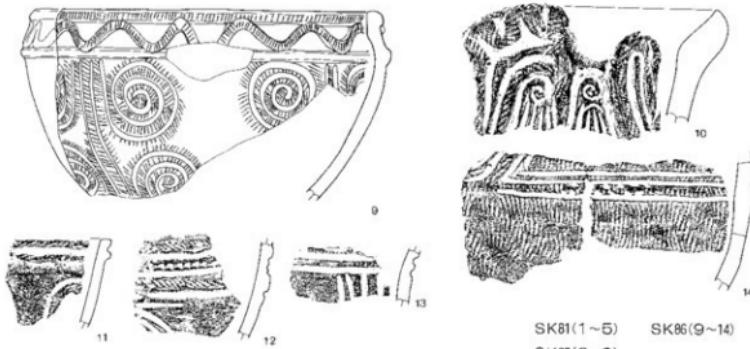
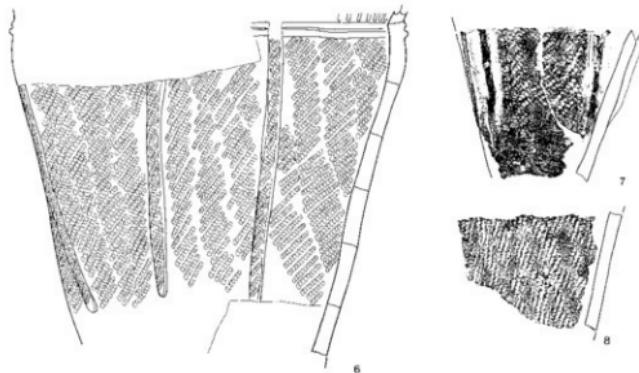
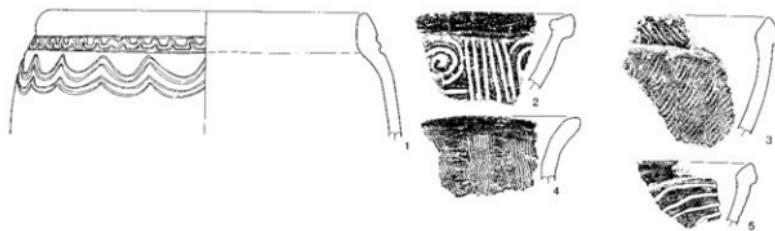


Fig 123 御吳遺跡 SK53・54・55・70・79・80



SK81(1~5) SK86(9~14)
SK83(6~8)

0 20cm

Fig 124 御灵遺跡 SK81・83・86



0 20cm

Fig 125 御灵遺跡 SK100・110・145・148

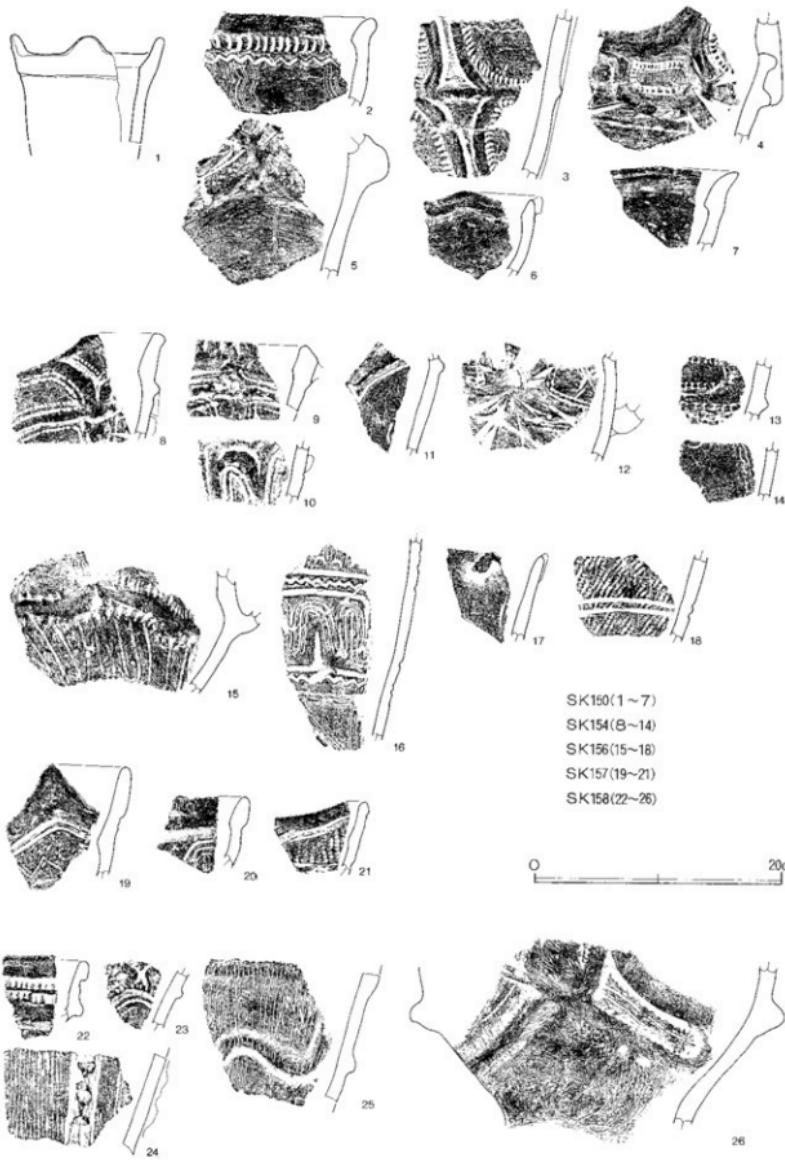


Fig 126 御吳遺跡 SK154・156・157・158

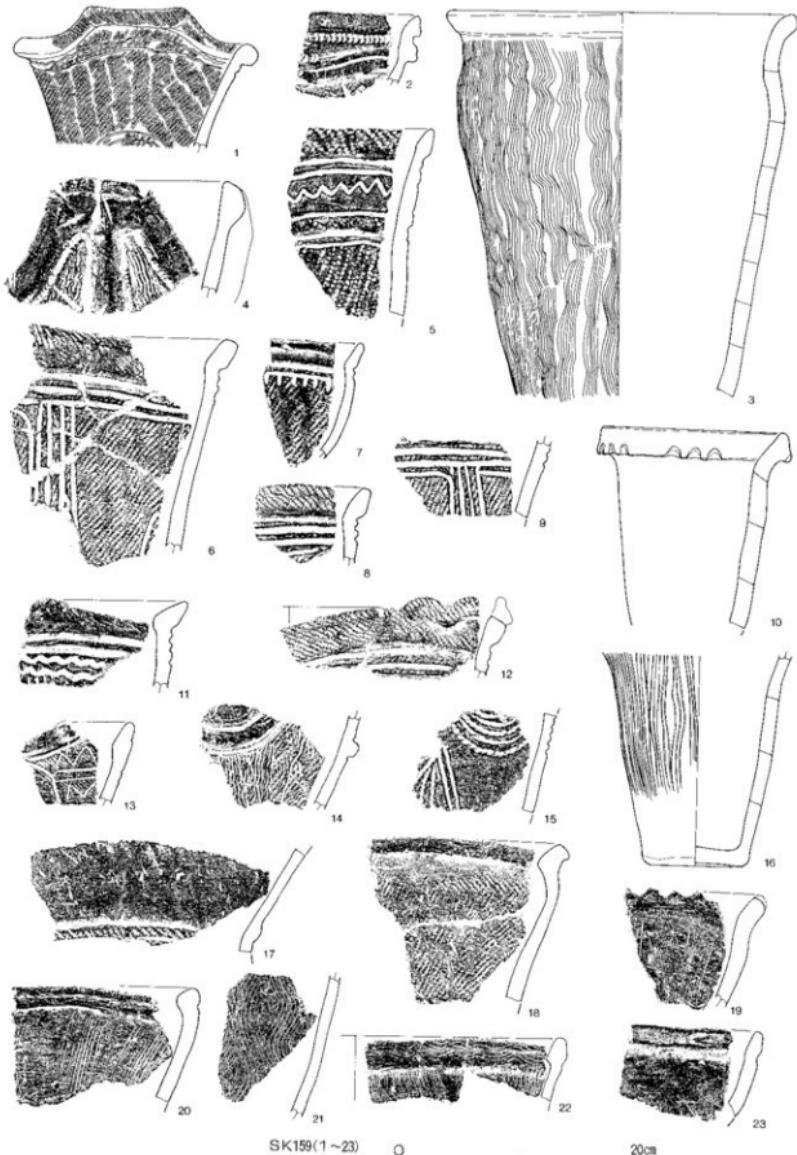


Fig 127 御吳遺跡 SK159

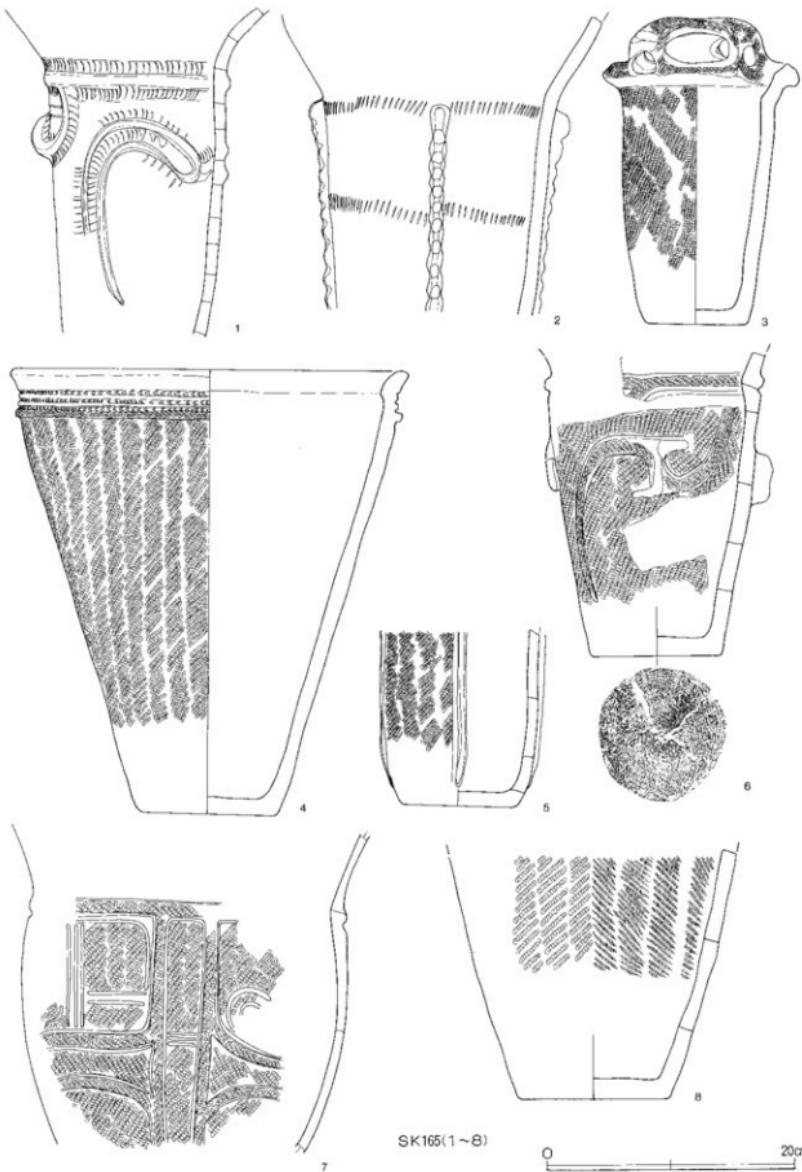


Fig 128 御灵道跡 SK165(1)

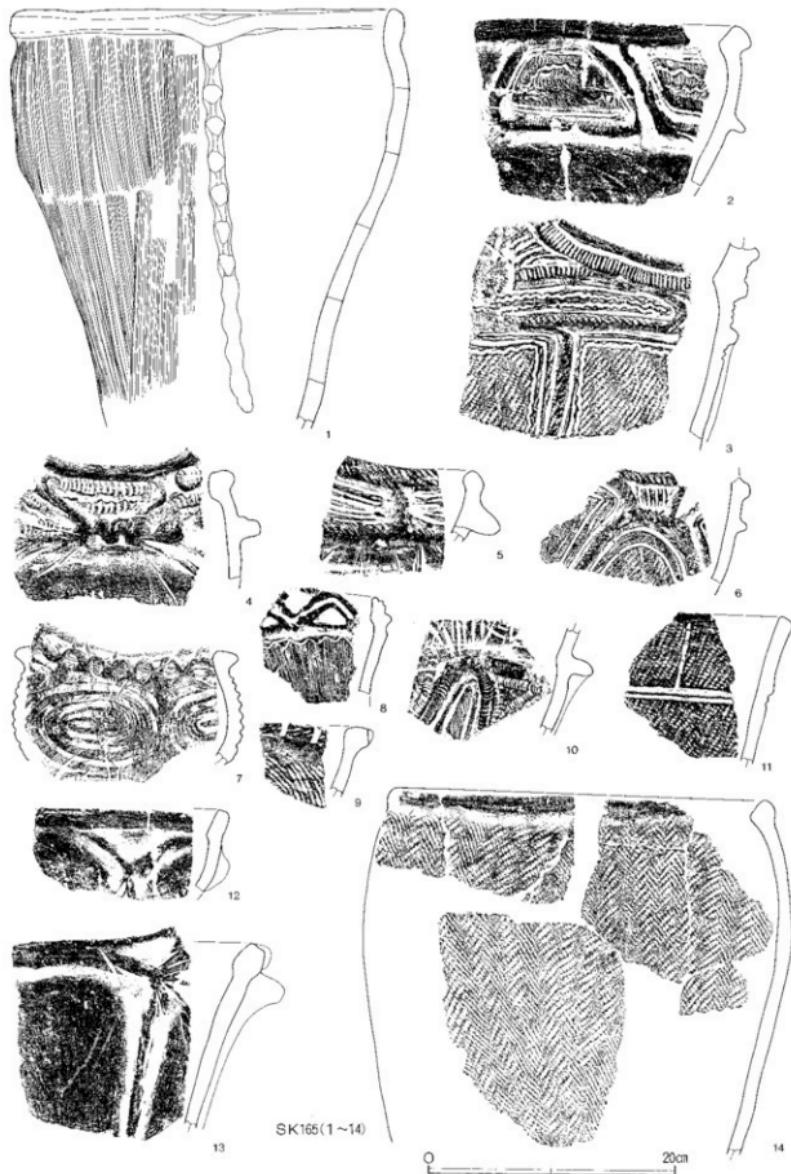
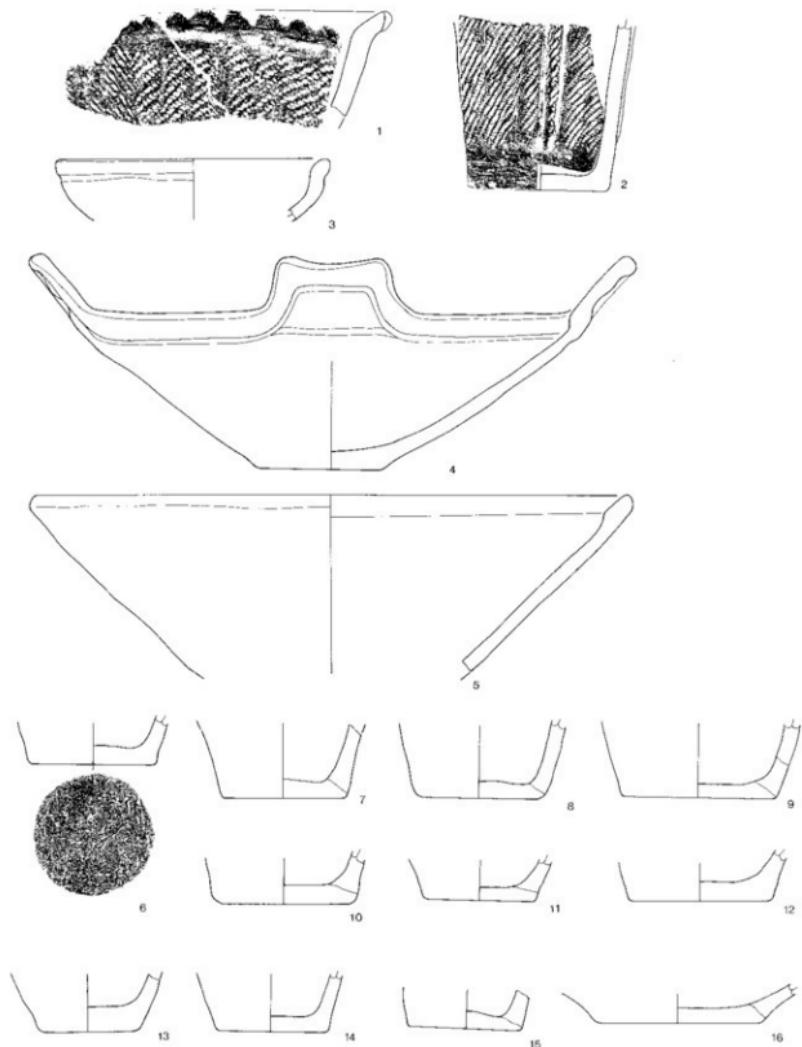


Fig 129 御灵遺跡 SK165(2)



SK165(1~16)

0 20cm

Fig 130 御灵遺跡 SK165(3)

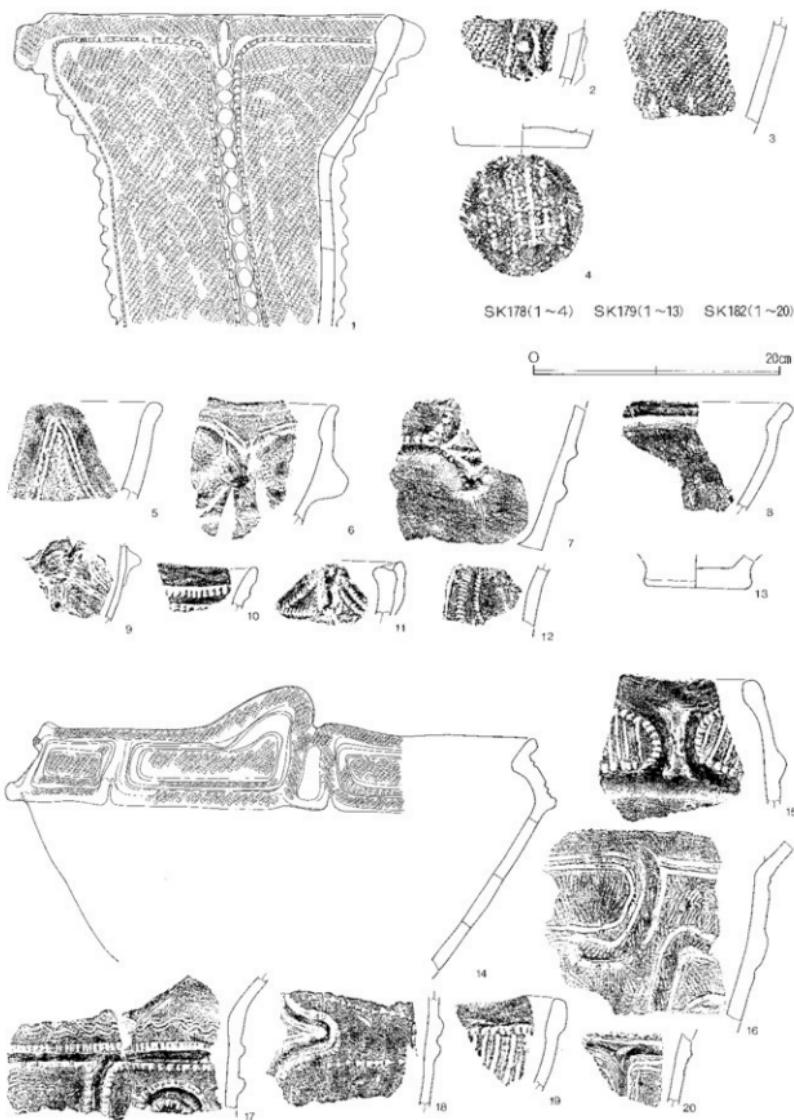
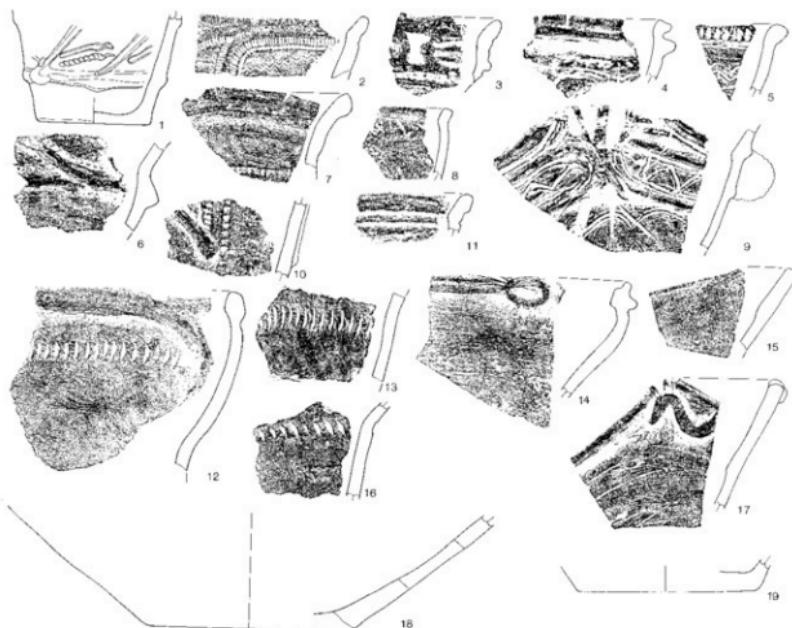


Fig 131 御灵遺跡 SK178・179・182



SK188(1~19)

SK190(20~22)

SK191(23~30)

0 1 200

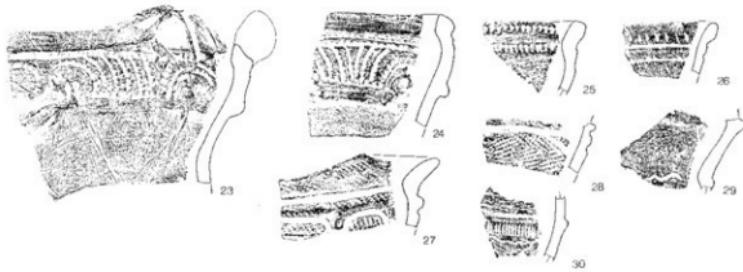
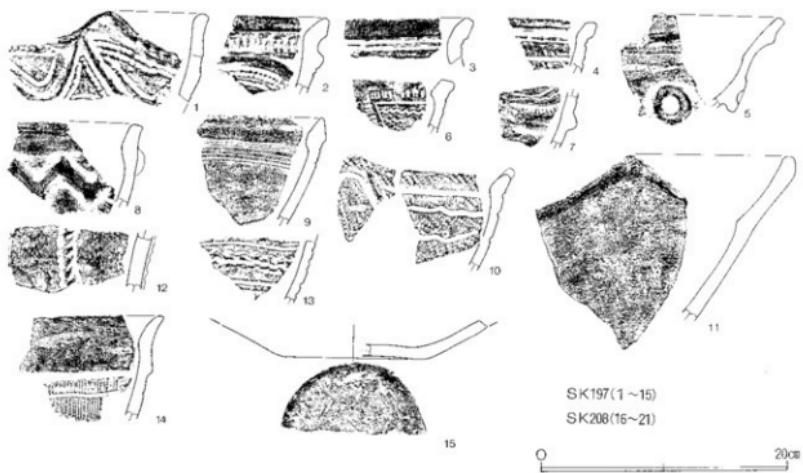


Fig 132 御灵遺跡 SK188・190・191



0 20cm

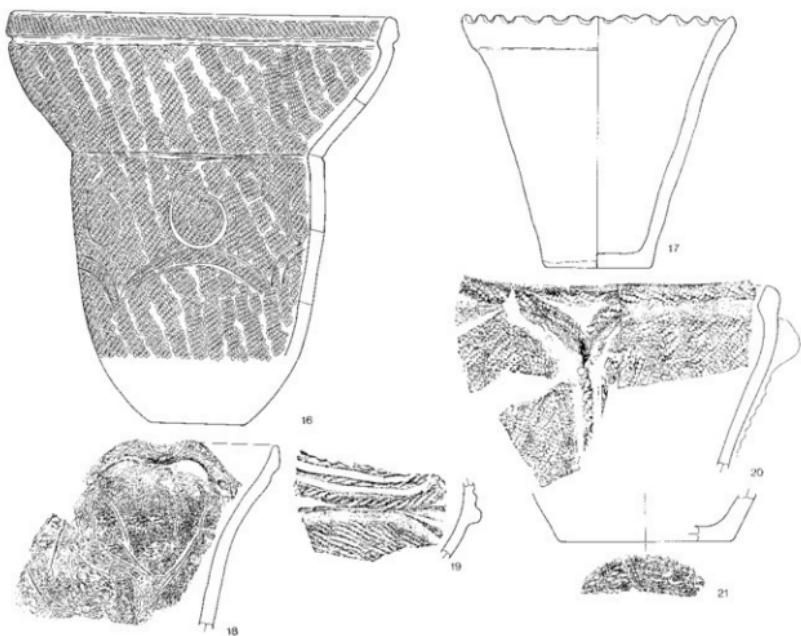


Fig 133 御灵遺跡 SK197・208

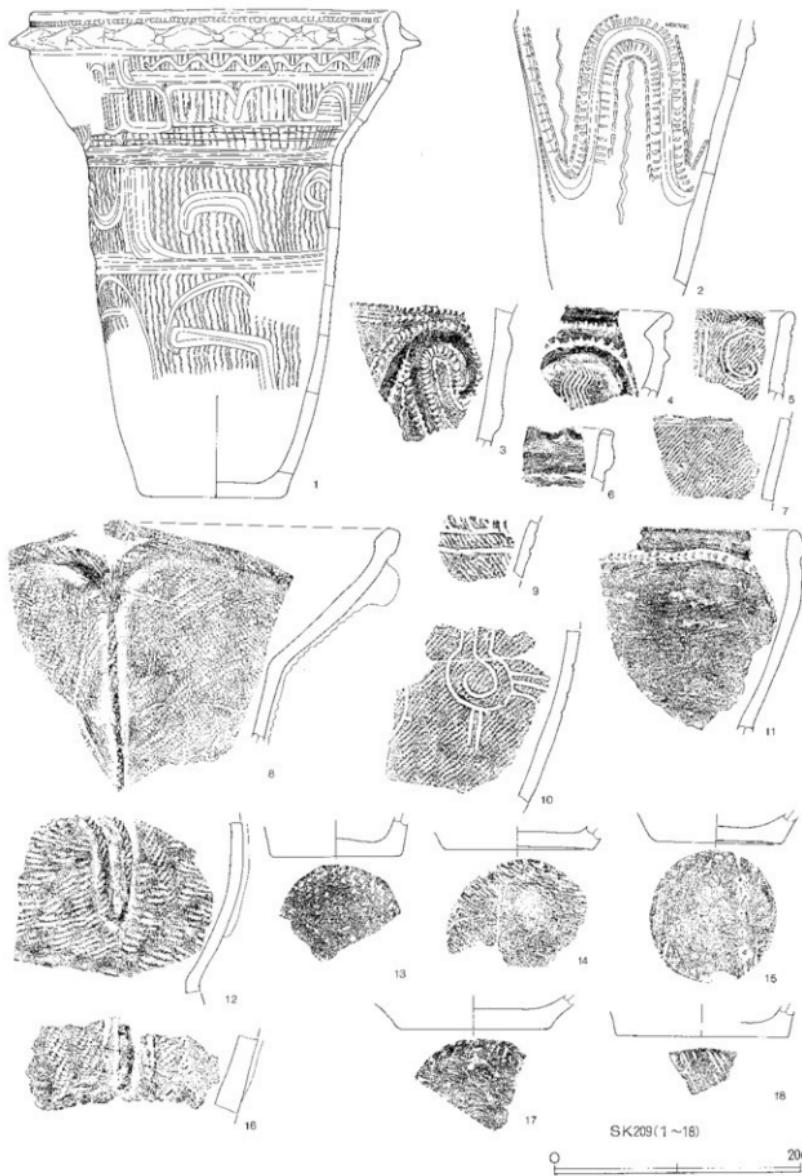


Fig 134 御灵遺跡 SK209

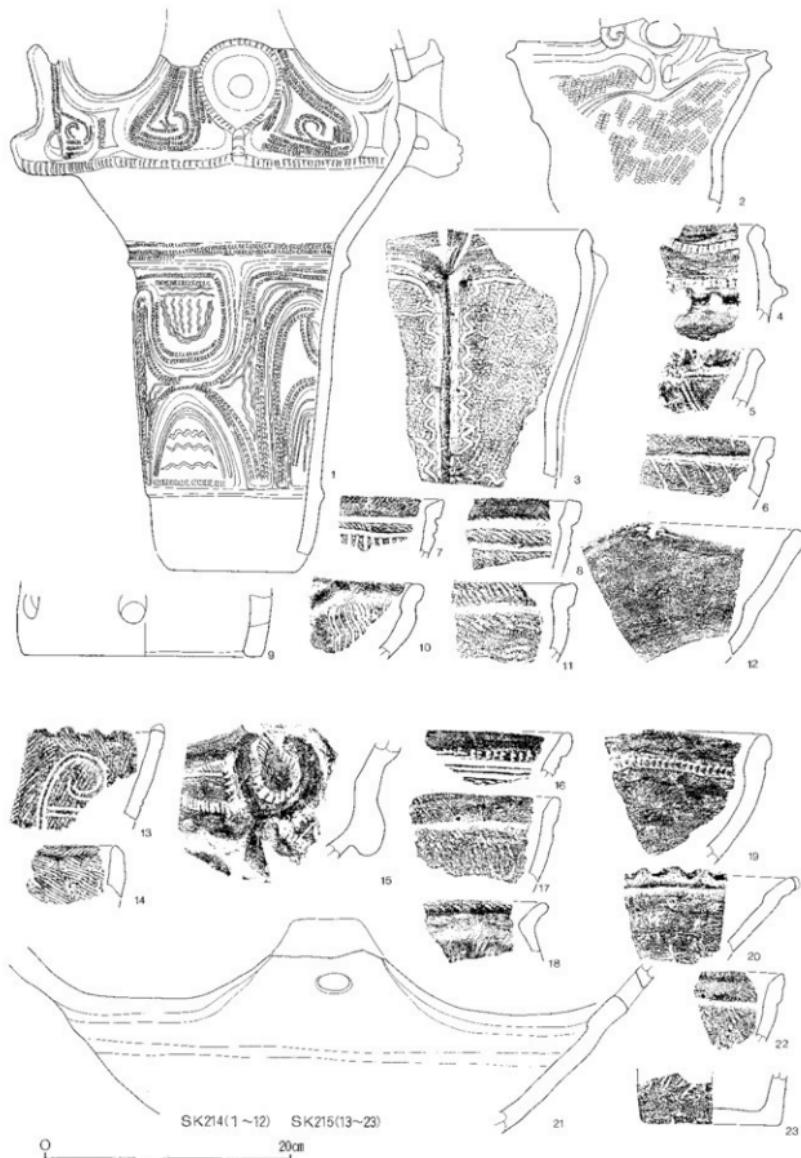
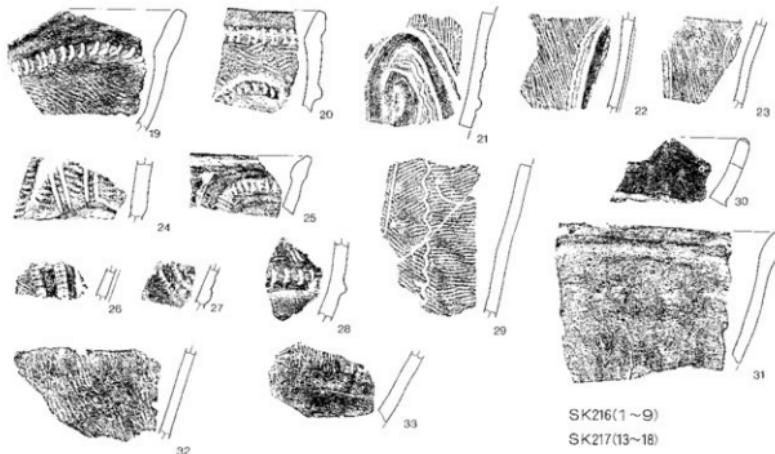
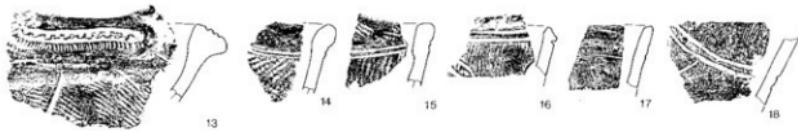
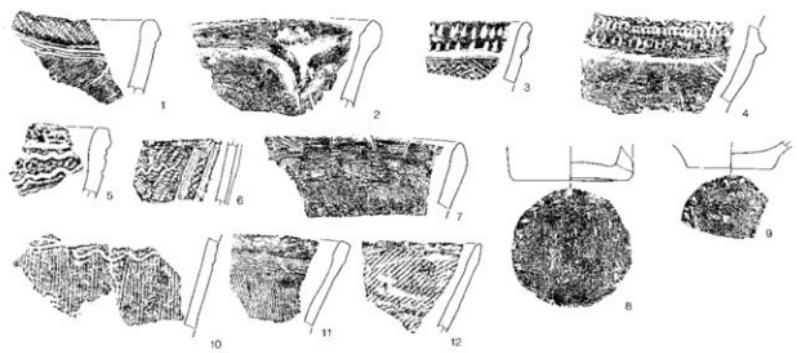


Fig 135 御吳遺跡 SK214・215



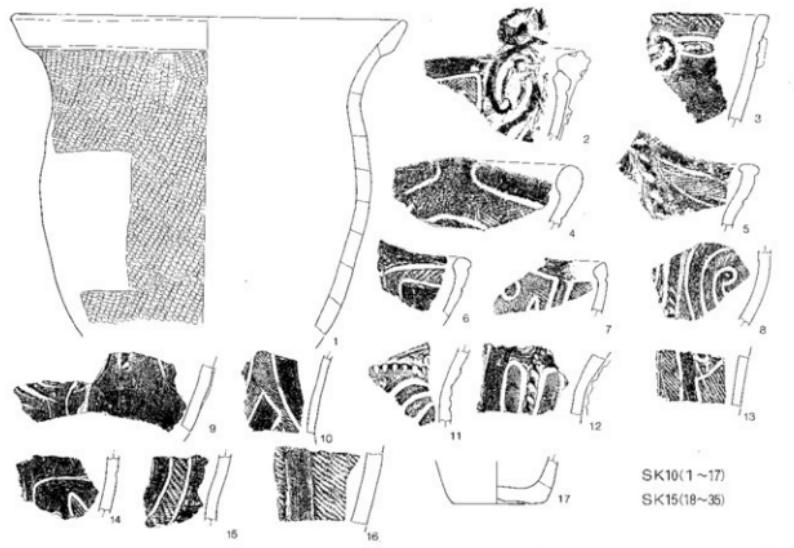
SK216(1~9)

SK217(13~18)

SK225(19~31)

0 20cm

Fig 136 御灵遺跡 SK216・217・225



SK10(1~17)
SK15(18~35)

0 20cm

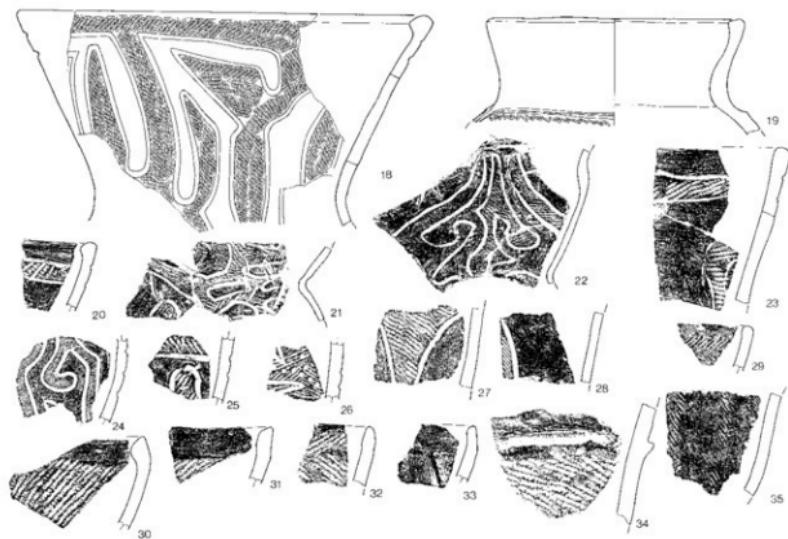


Fig 137 御吳遺跡 SK10・15



Fig 138 御吳遺跡 SK17・18・25

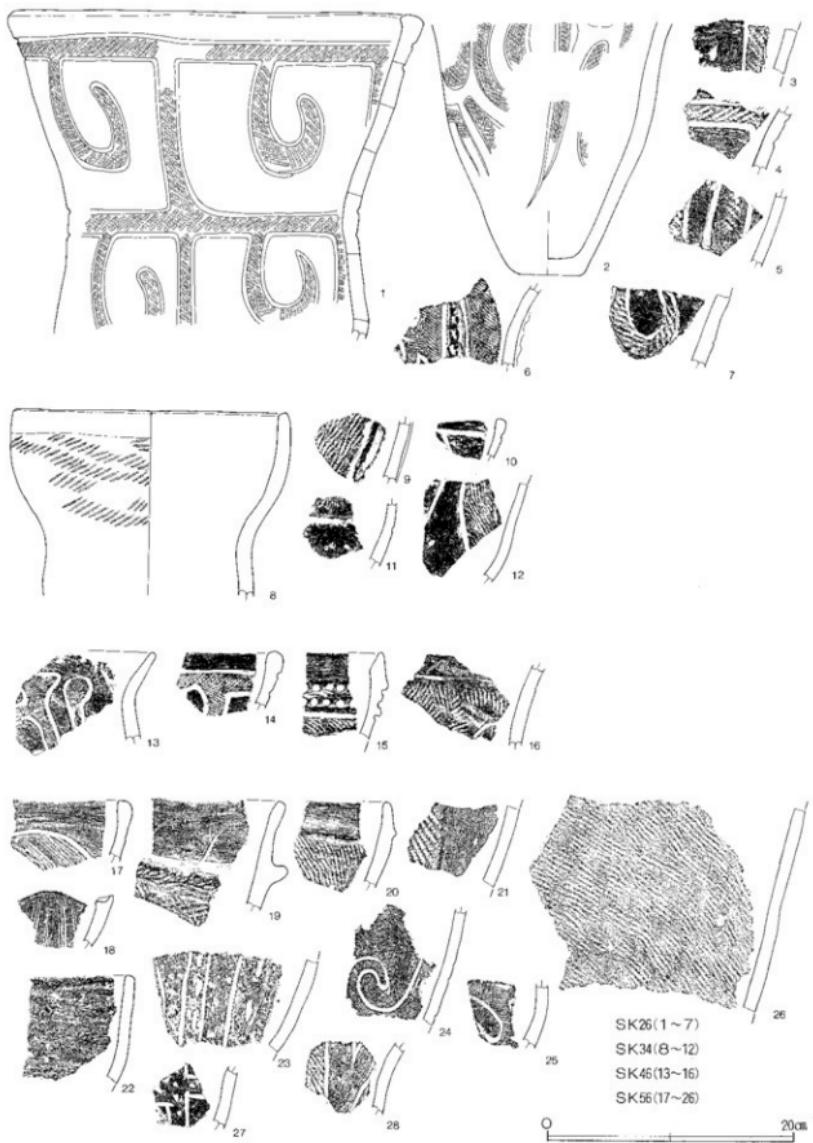


Fig 139 御吳遺跡 SK26・34・46・56

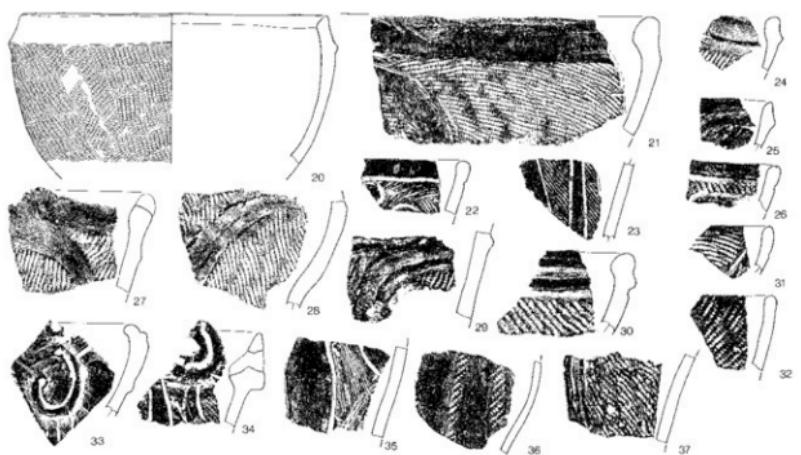
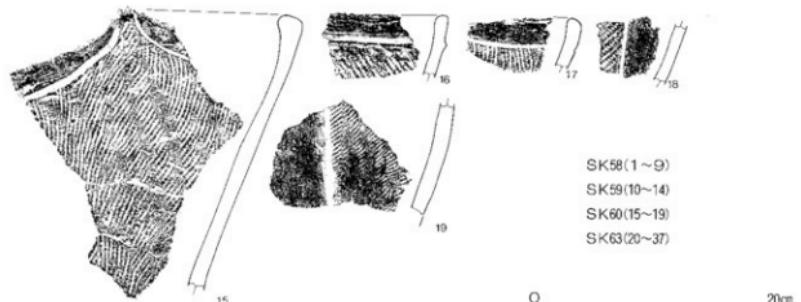
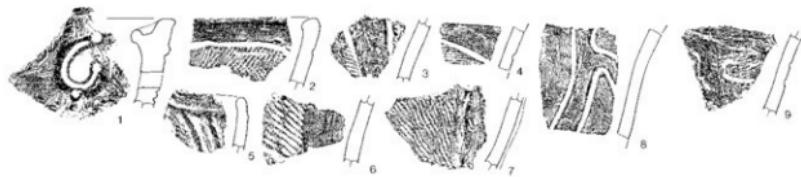


Fig 140 御灵遺跡 SK58・59・60・63

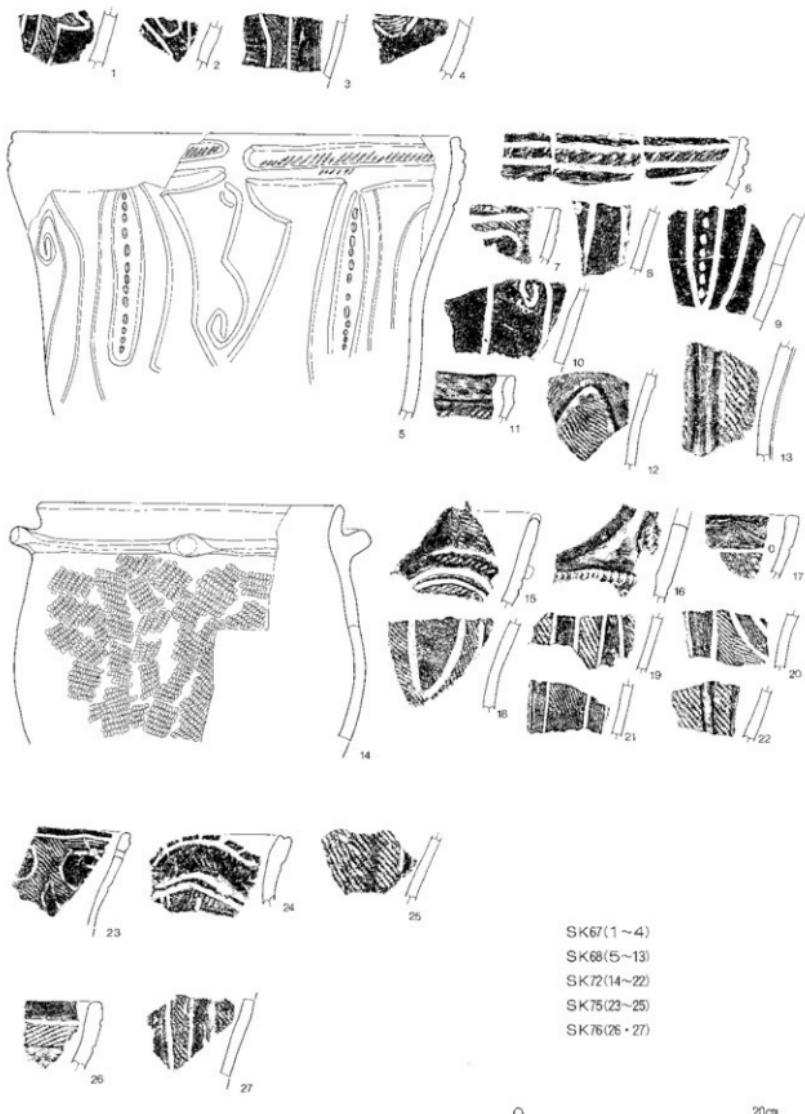


Fig 141 御灵遺跡 SK67・68・72・75・76

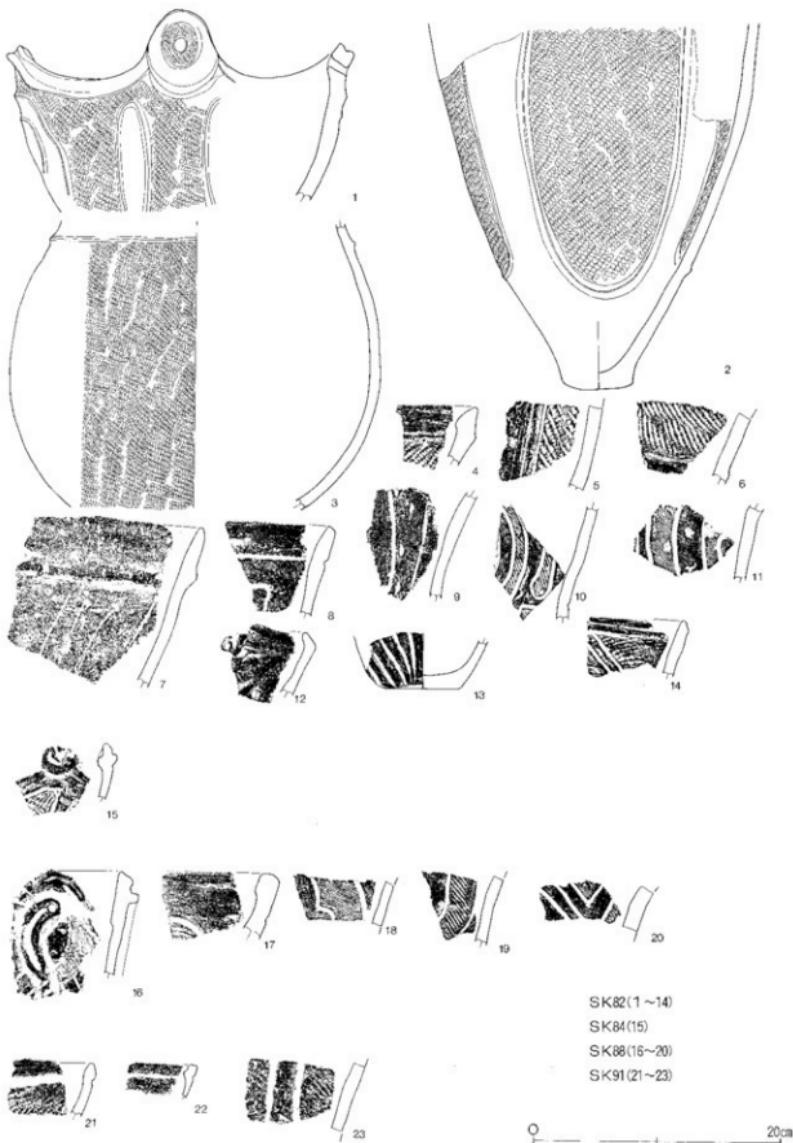
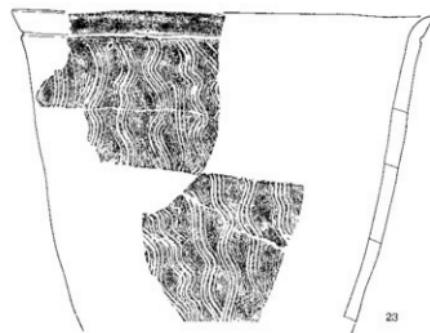
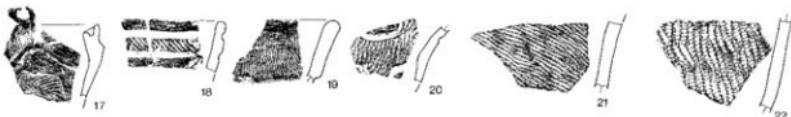


Fig 142 御尖遺跡 SK82・84・88・91



Fig 143 御吳遺跡 SK93・96・97・102・104・115



SK118(1~4)

SK120(5~13)

SK128(14~16)

SK135(17~22)

SK149(23)



Fig 144 御灵遺跡 SK118・120・128・135・149

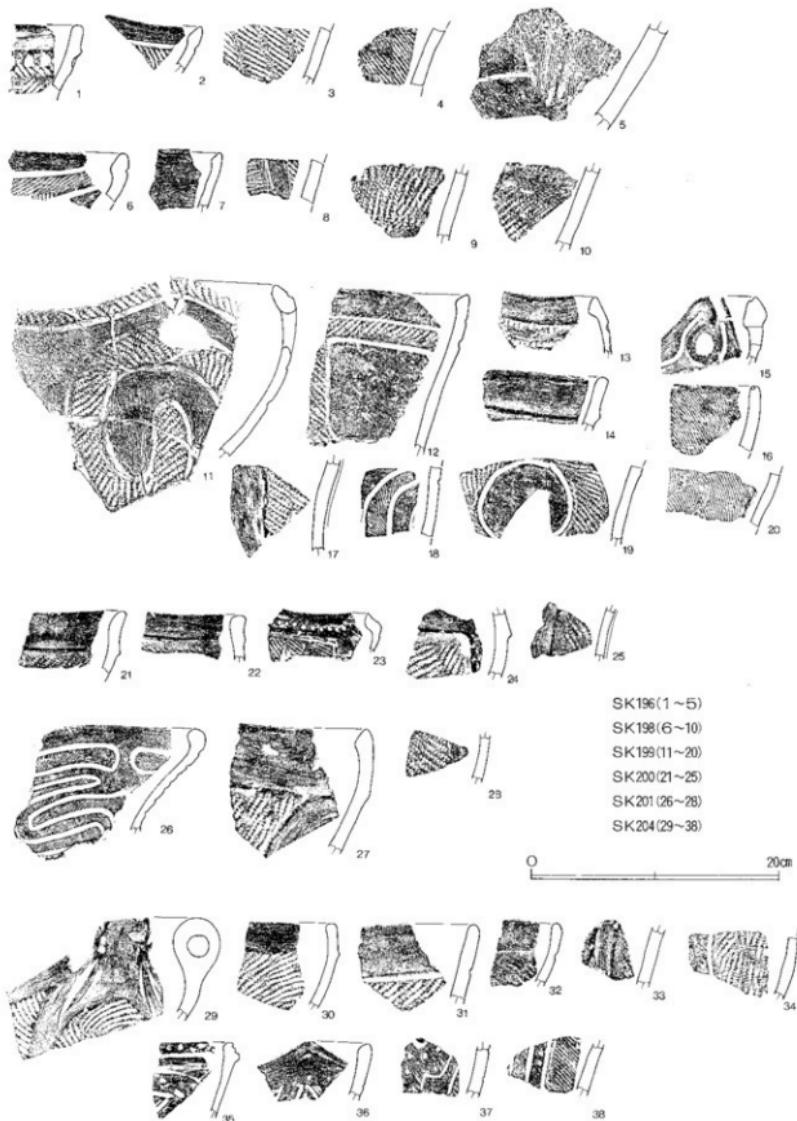
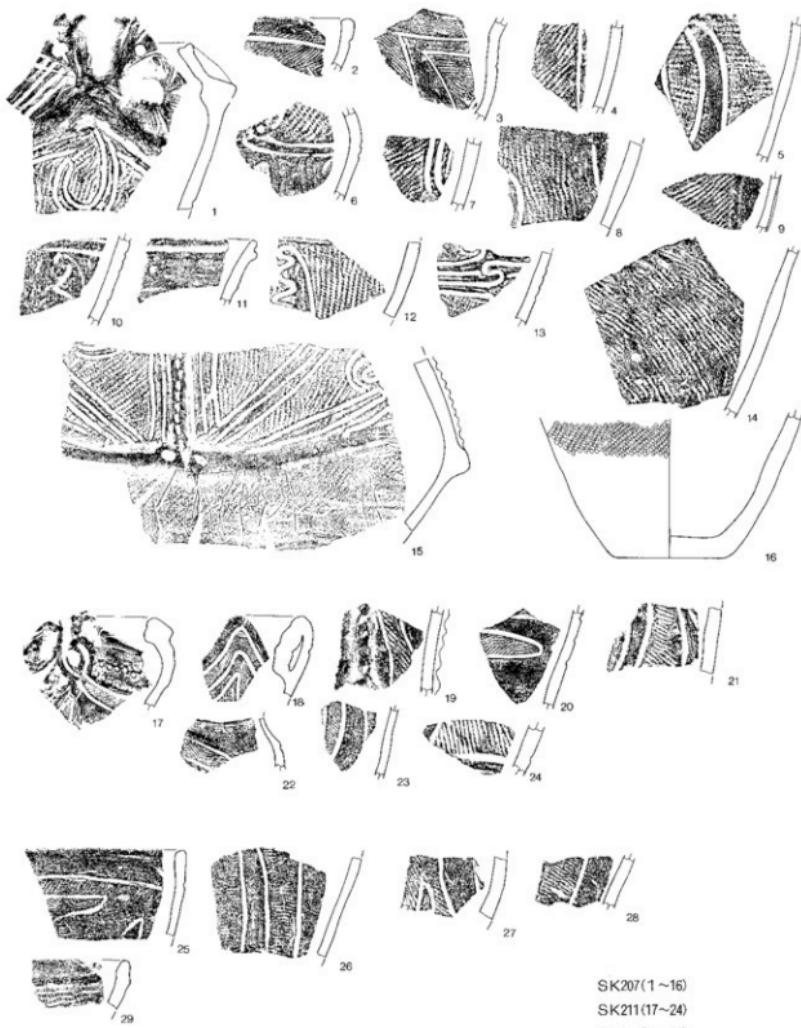
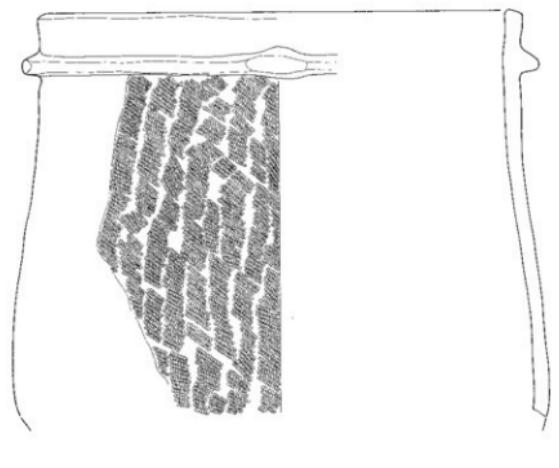
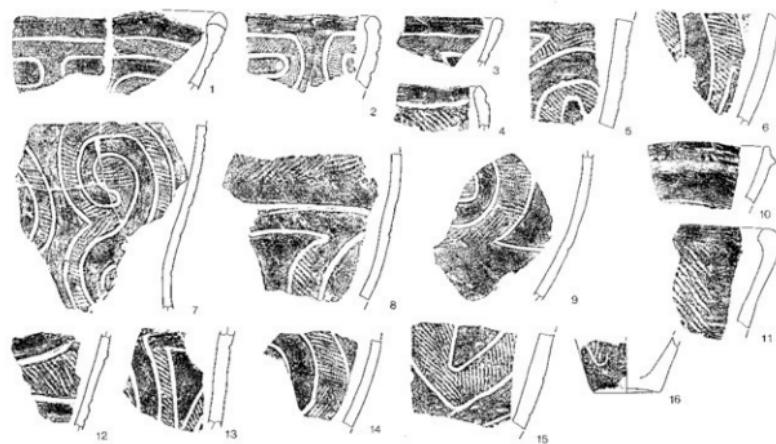


Fig 145 御吳遺跡 SK196・198・199・200・201・204



0 20cm

Fig 146 御灵遺跡 SK207・211・212



SK218(1~16)
SK224(17)



Fig 147 御灵遺跡 SK218・224

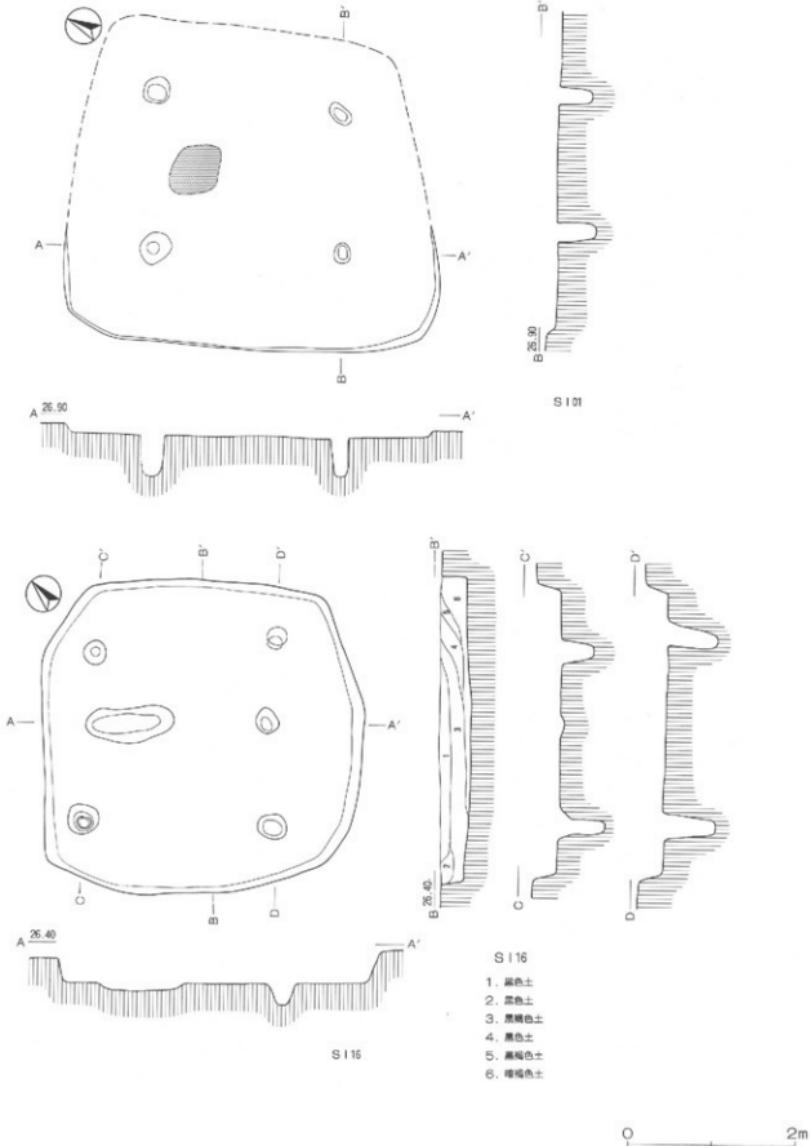
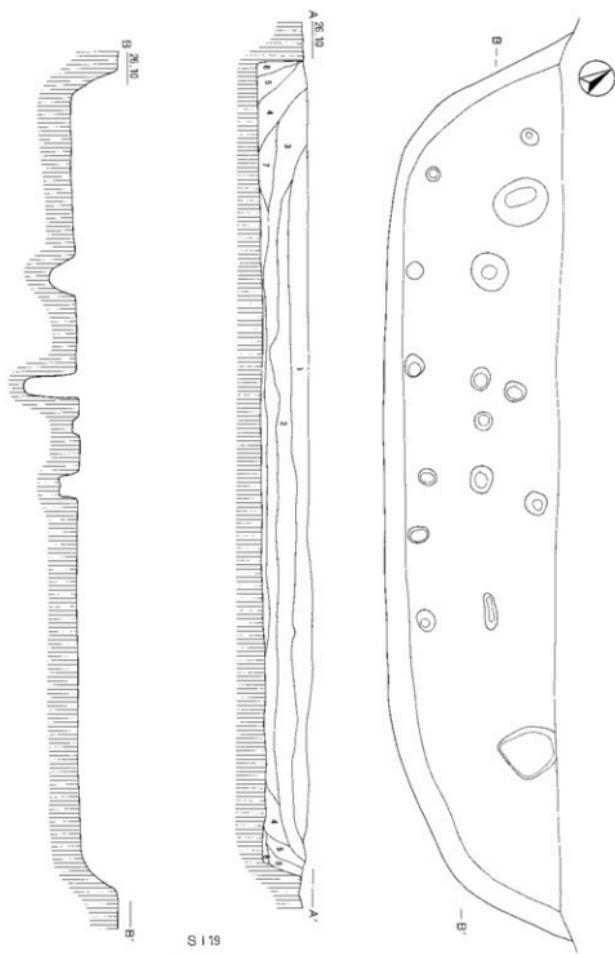


Fig 148 宝积遗跡 S I 1 · 16



S I 19

1. 黑色土
2. 黑色土
3. 黑褐色土
4. 墨黑褐色土
5. 墨褐色土
6. 明褐色土
7. 高黄色土
8. 黄褐色土

0 2m

Fig 149 宝积遗跡 S I 19

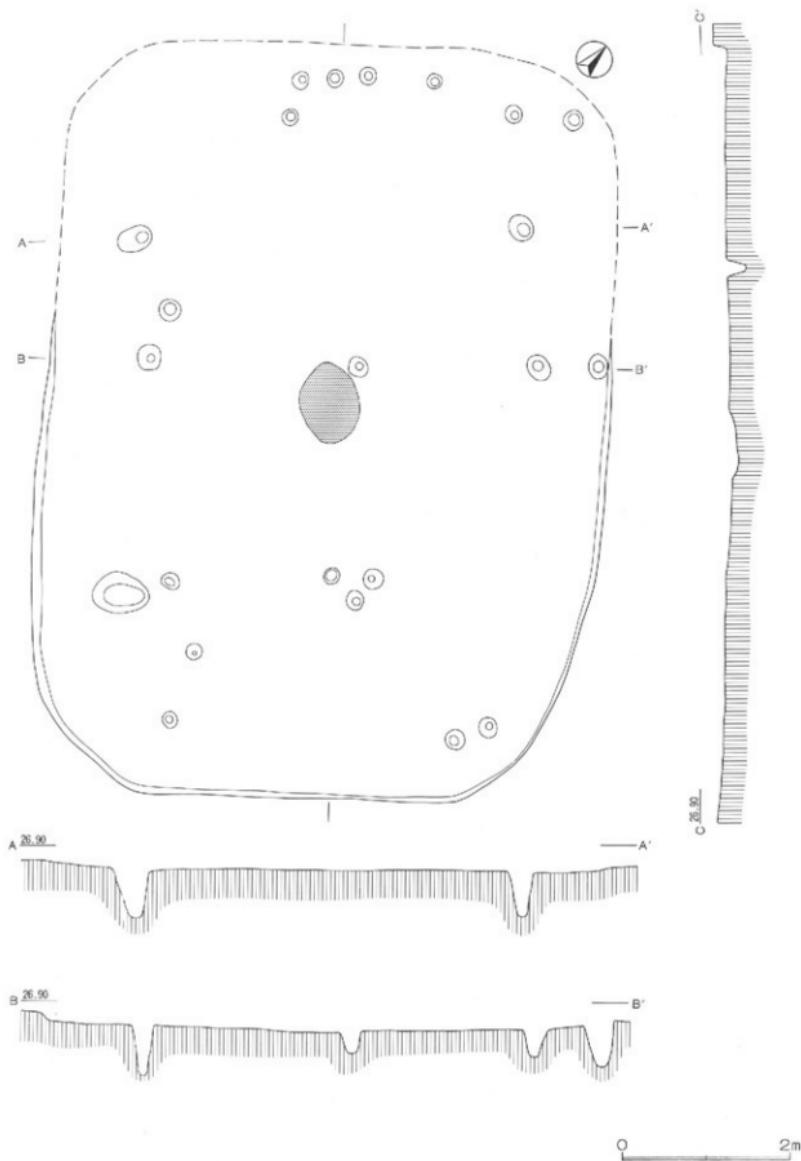


Fig 150 宝積遺跡 S I 29

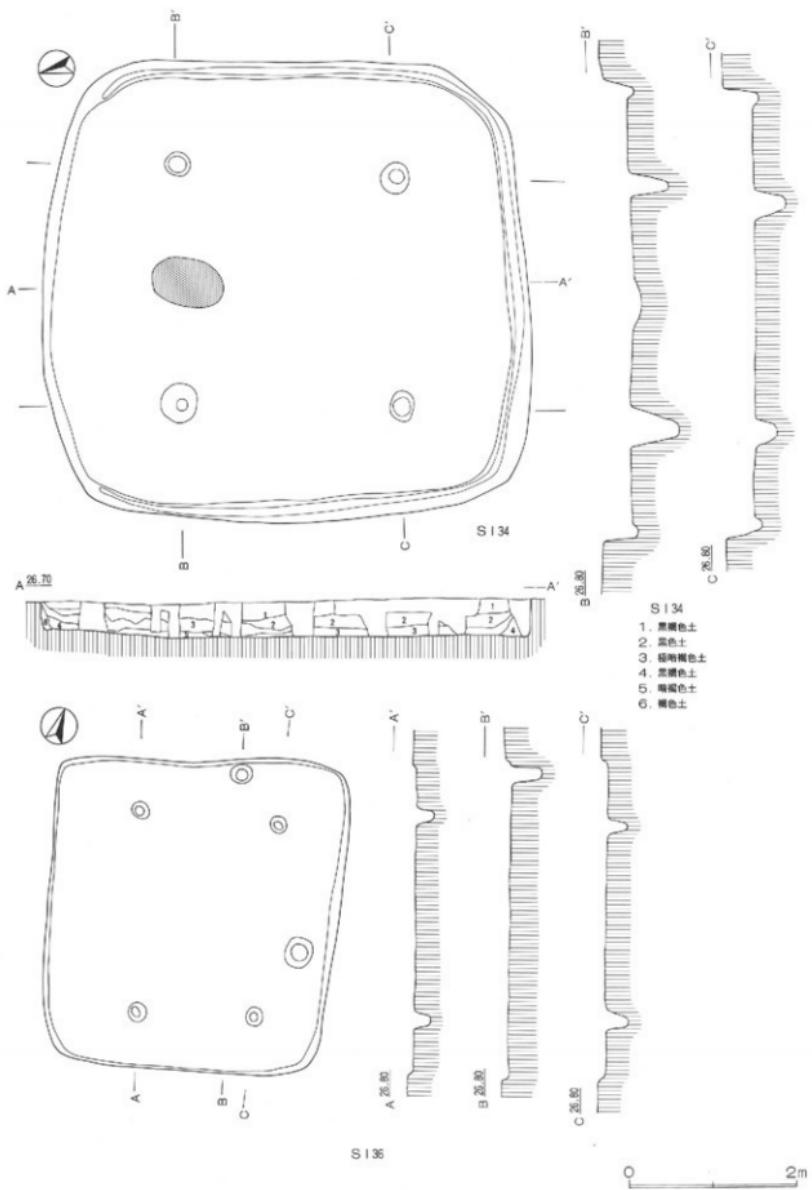


Fig 151 宝积遗跡 S I 34・36

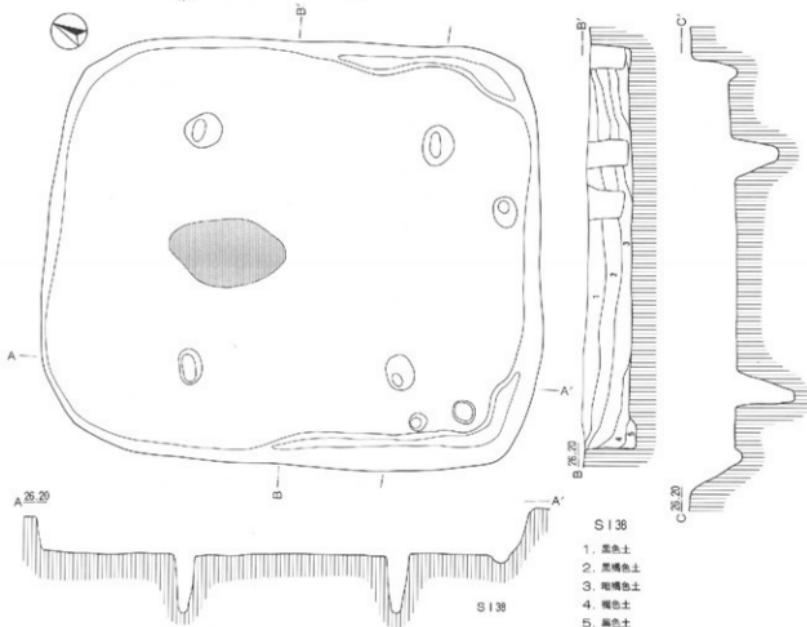
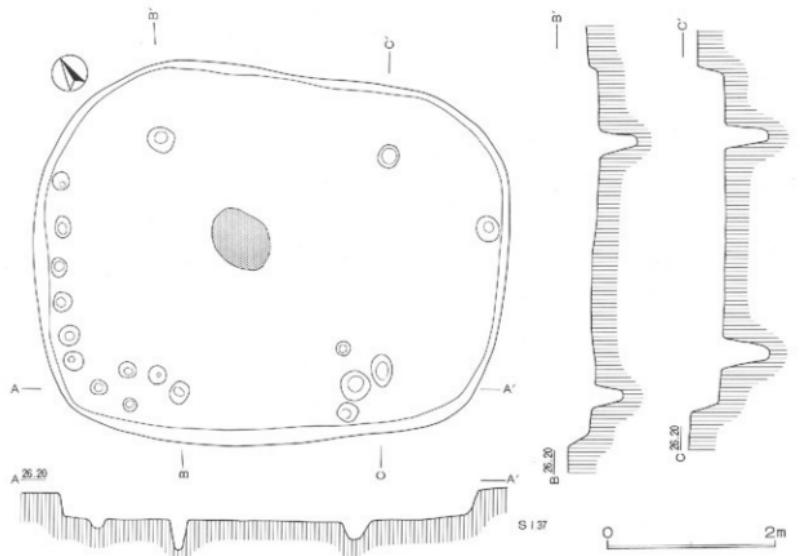


Fig 152 宝积遗迹 S 137·38

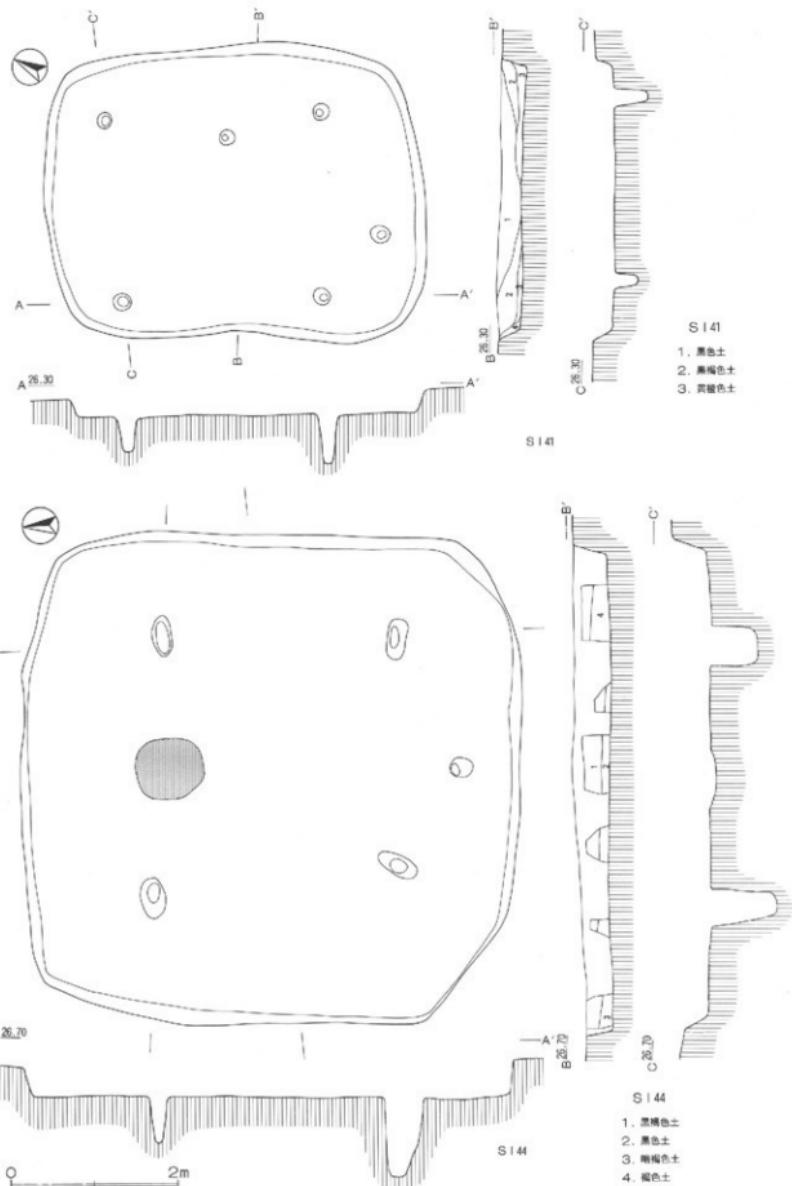


Fig 153 宝积遗迹 S141・44

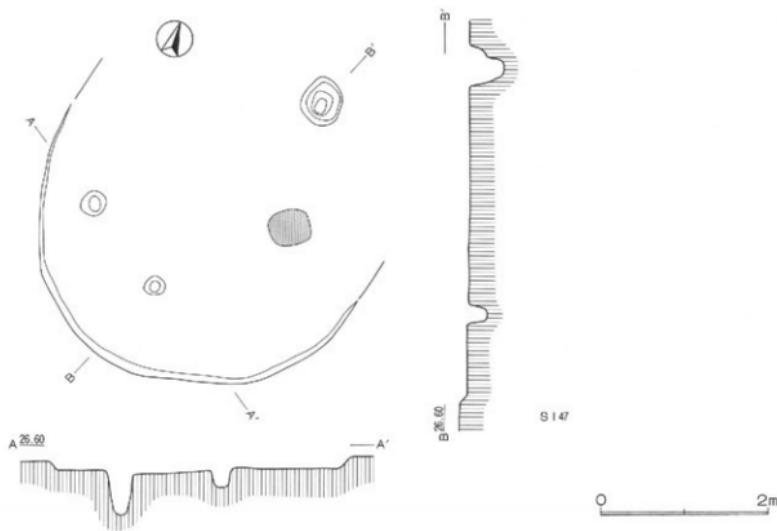
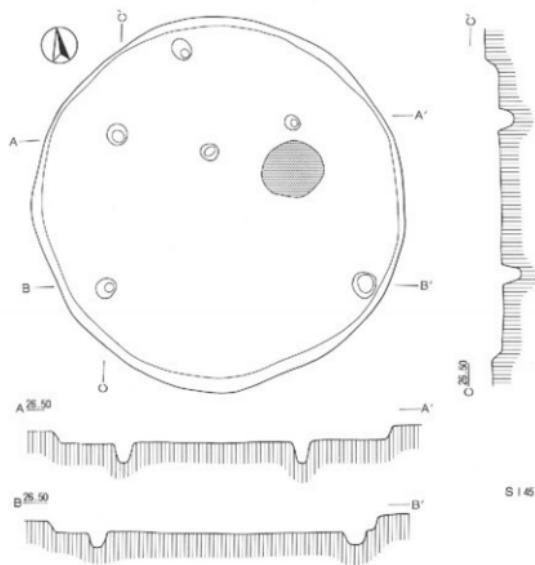


Fig 154 宝積遺跡 S 145・47

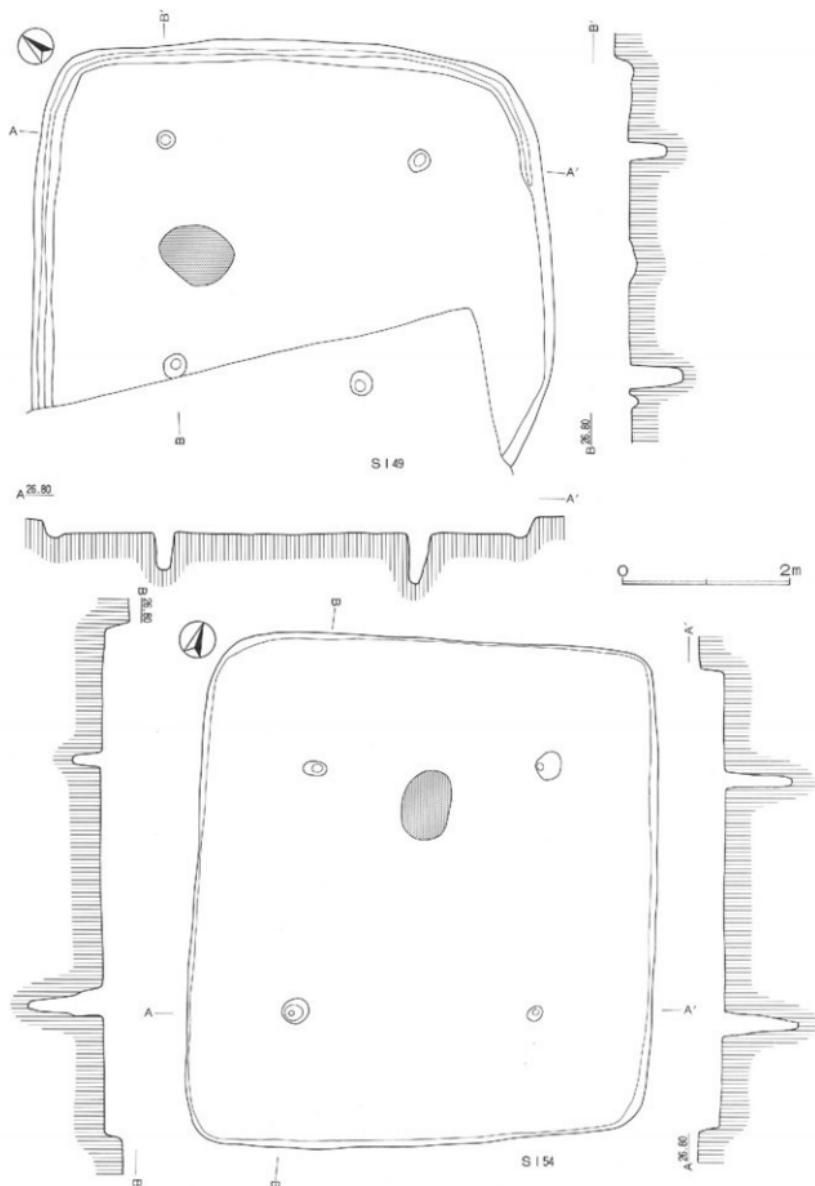


Fig 155 宝积遺跡 S I 49・54

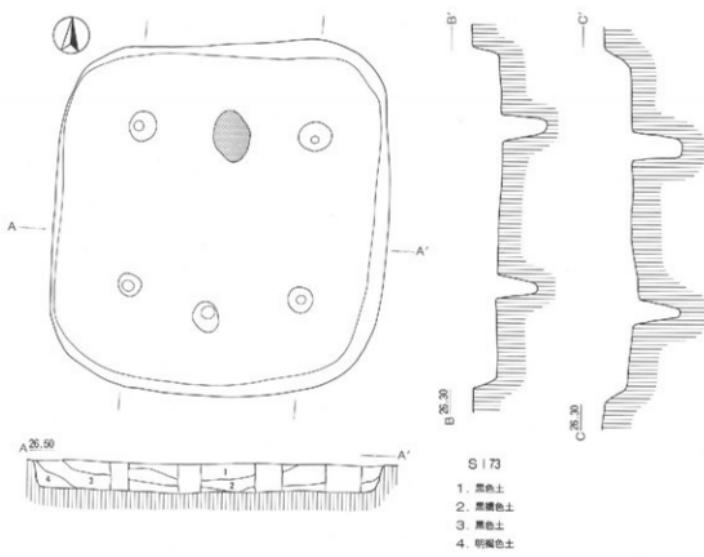
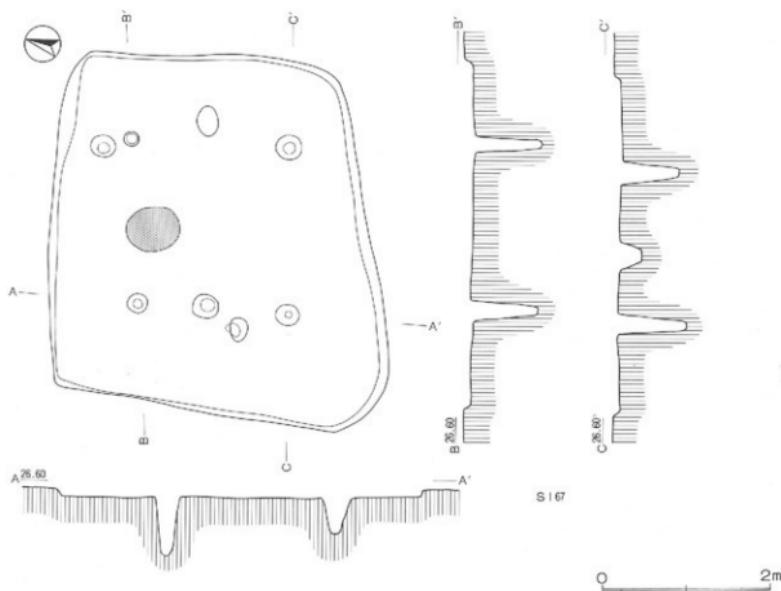
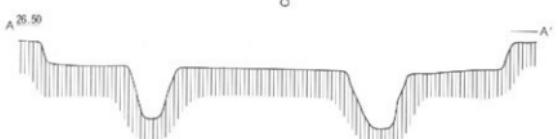
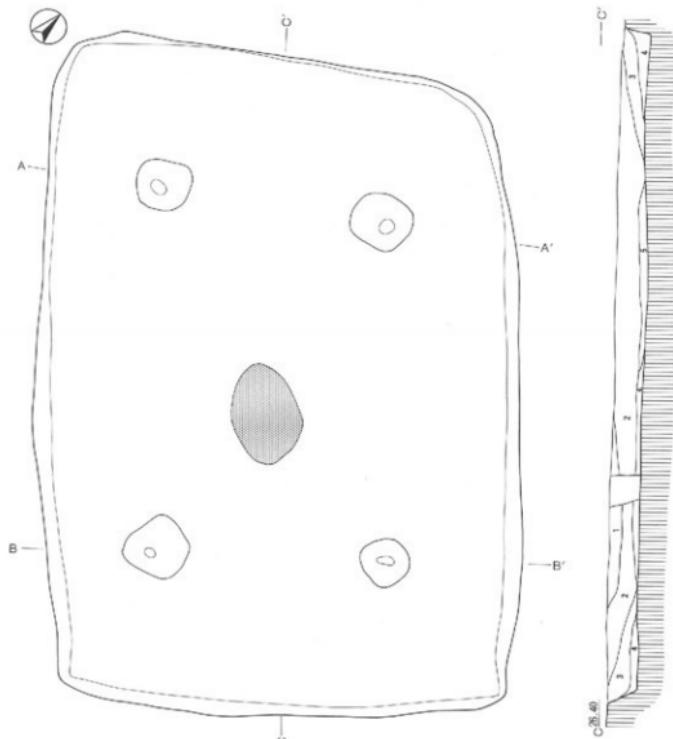


Fig 156 宝積遺跡 S I 67・73



S I 70
 1. 暗褐色土
 2. 黑色土
 3. 黑褐色土
 4. 褐色土
 5. 深褐色粘质土

0 2m

Fig 157 宝积遗跡 S I 70

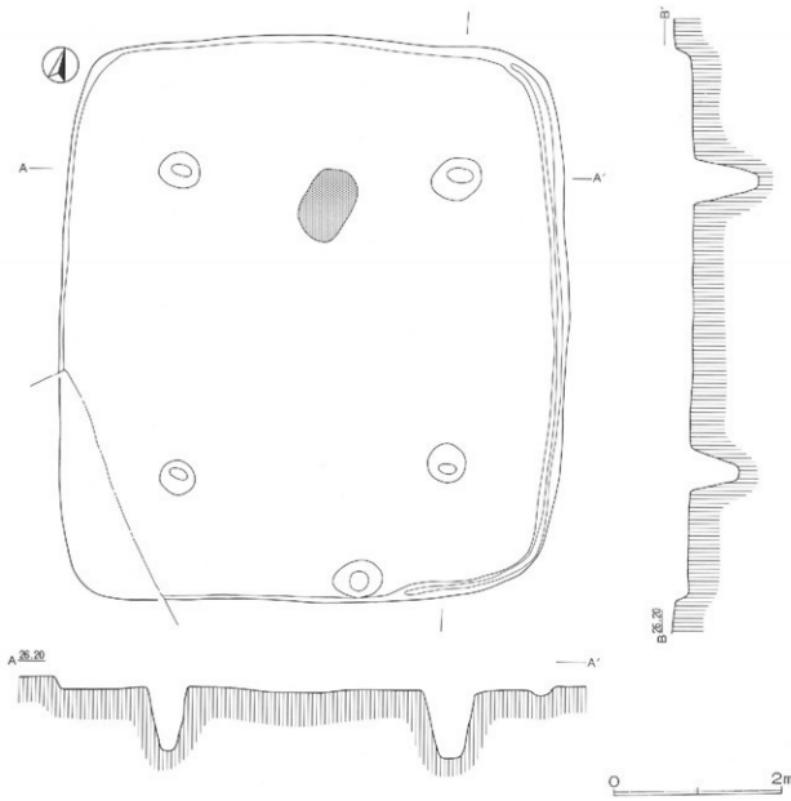


Fig 158 宝積遺跡 S I 72

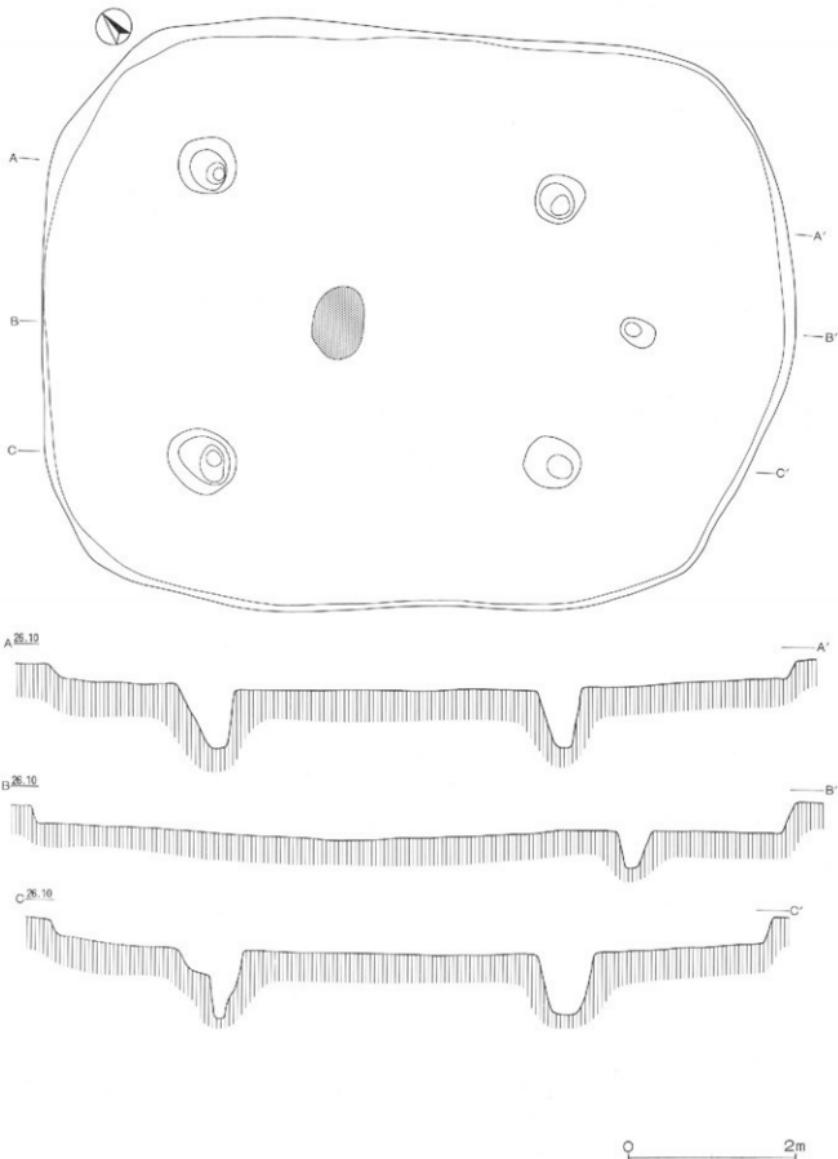


Fig 159 宝積遺跡 S I 74

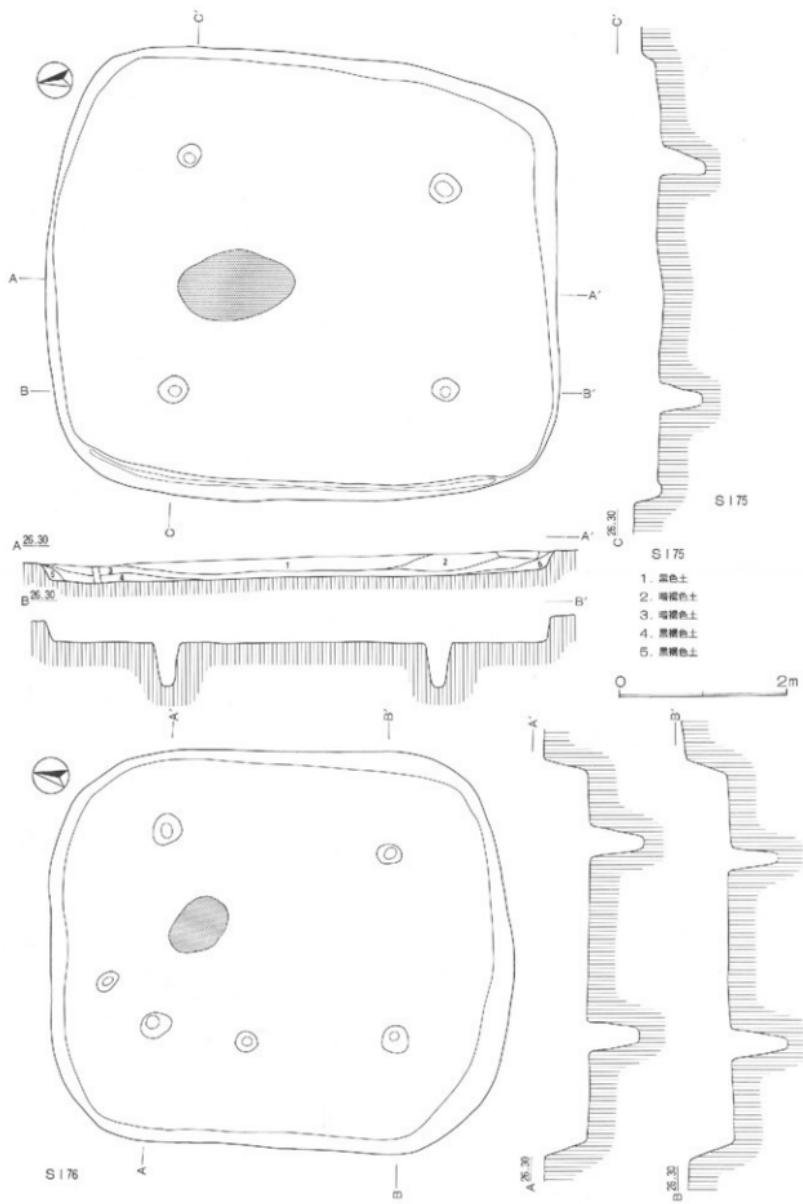


Fig 160 宝积遗迹 S I 75 - 76

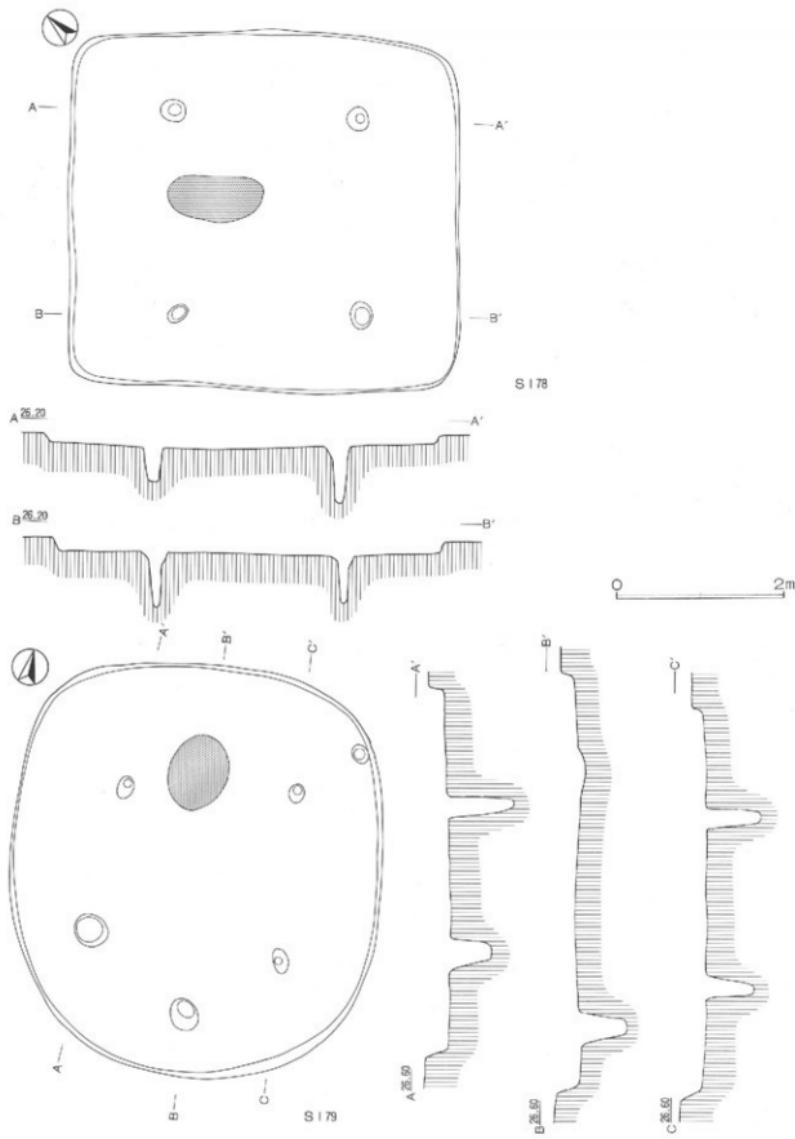


Fig 161 宝积造迹 S 178·79

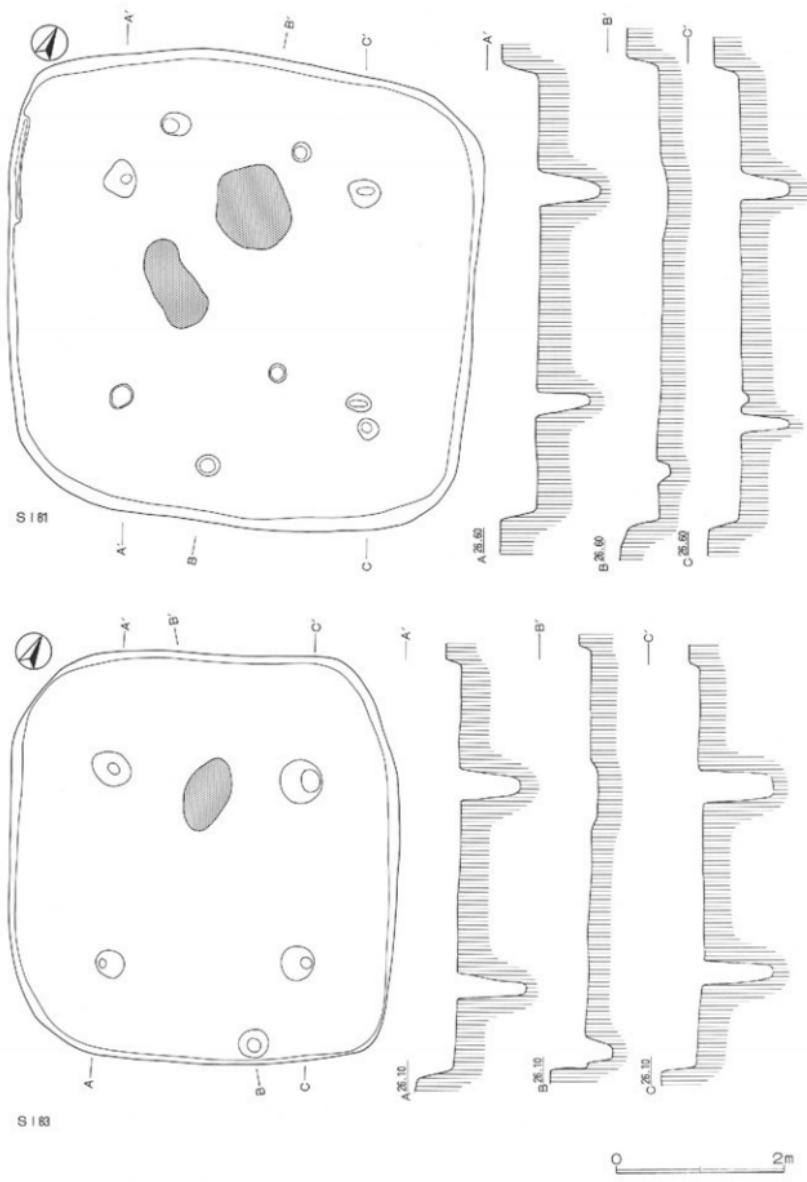


Fig 162 宝积遗迹 S 181 · 83

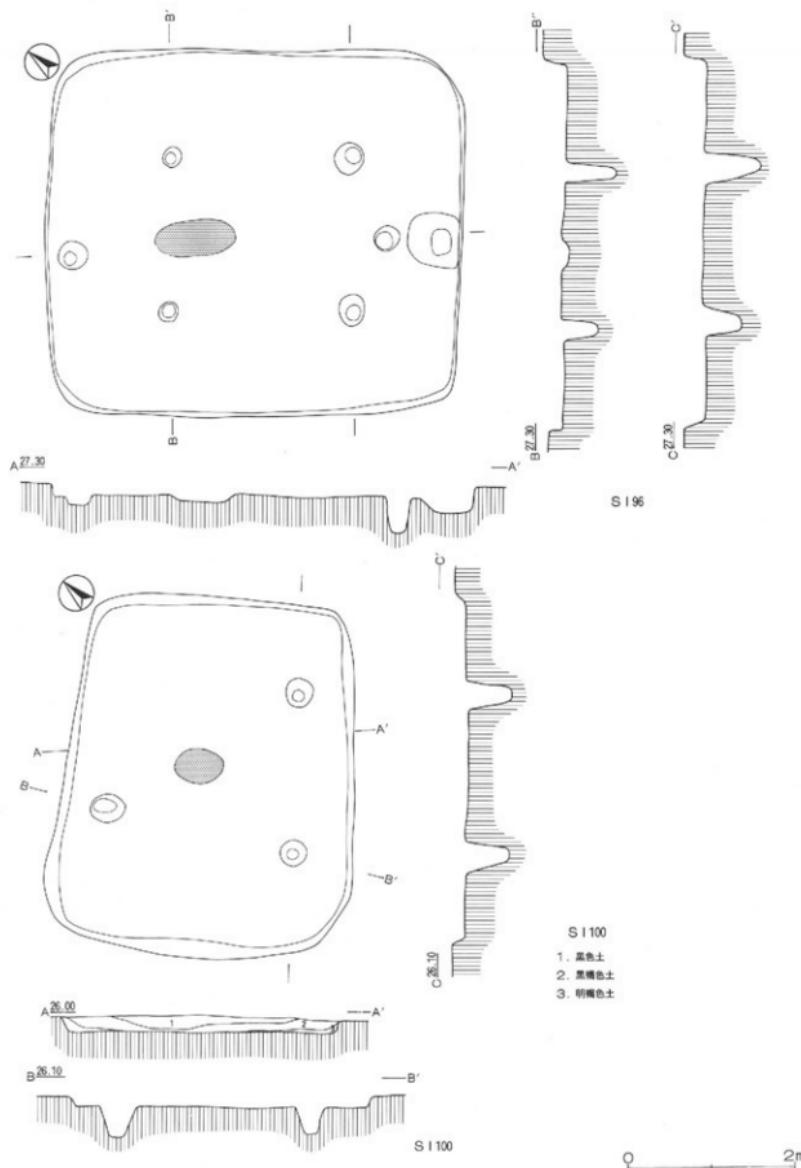


Fig 163 宝積遺跡 S I 96 · 100

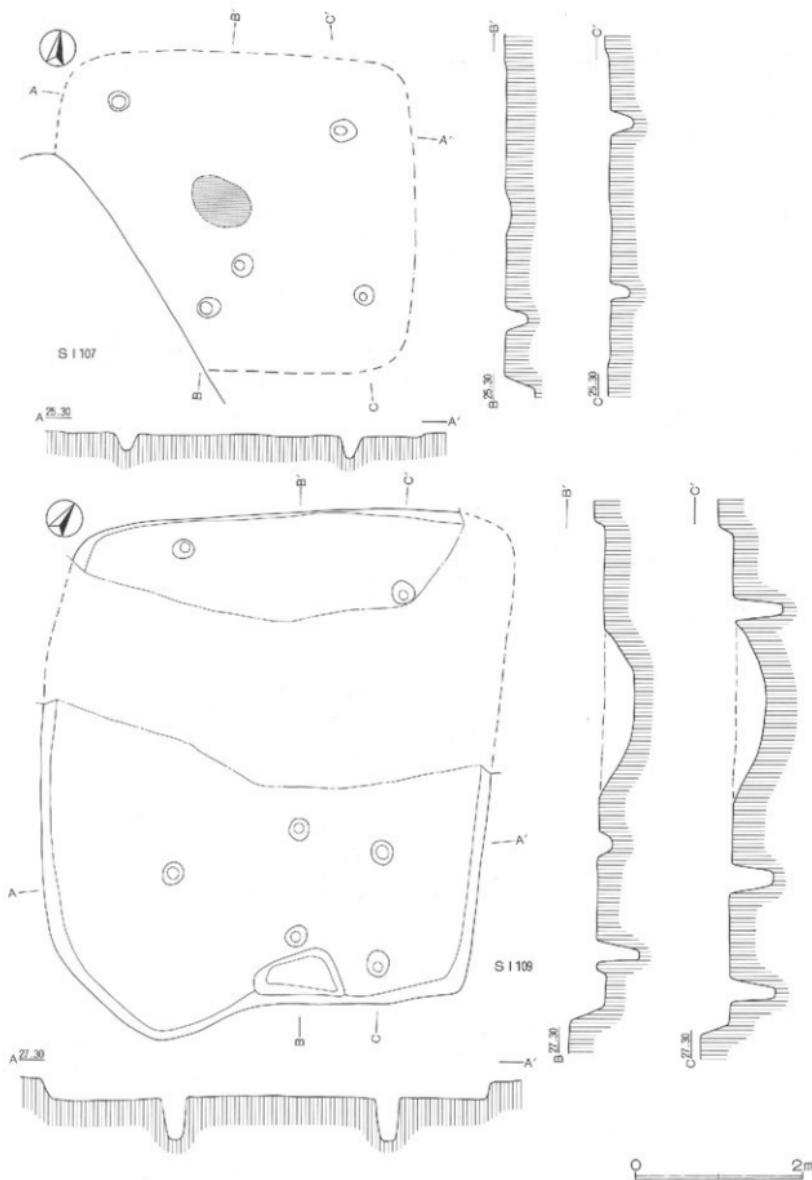


Fig 164 宝積遺跡 S I 107・109

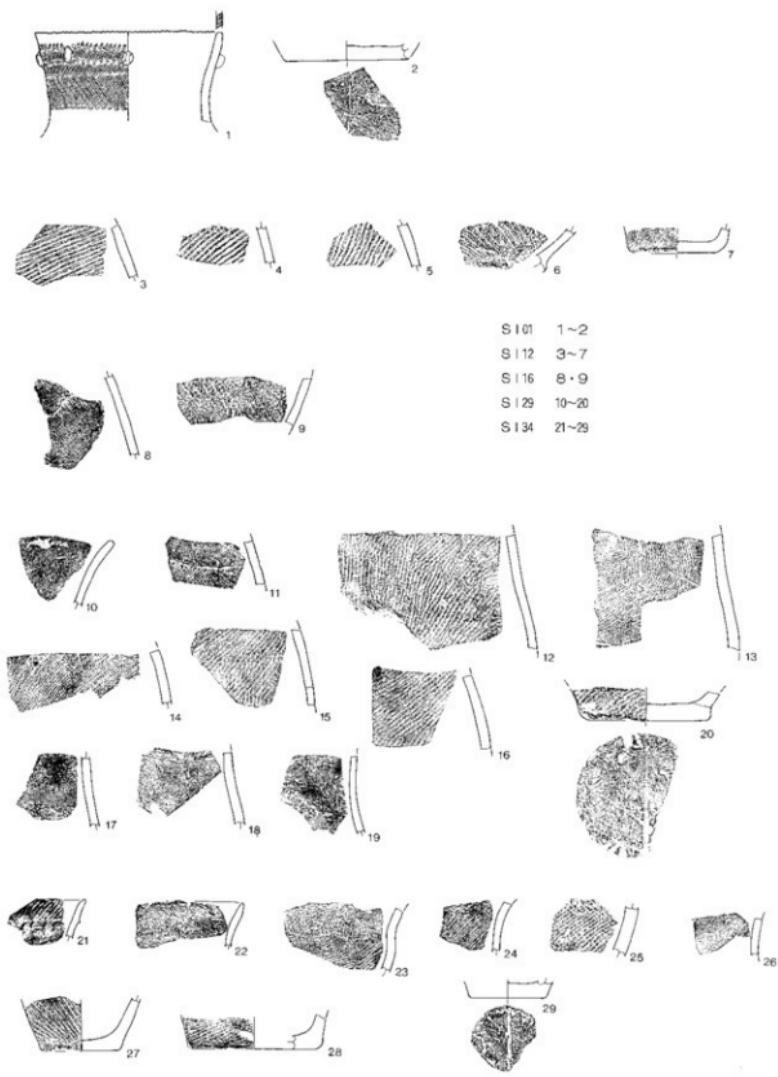


Fig 165 宝箱遺跡 S | 1 · 12 · 16 · 29 · 34

10mm

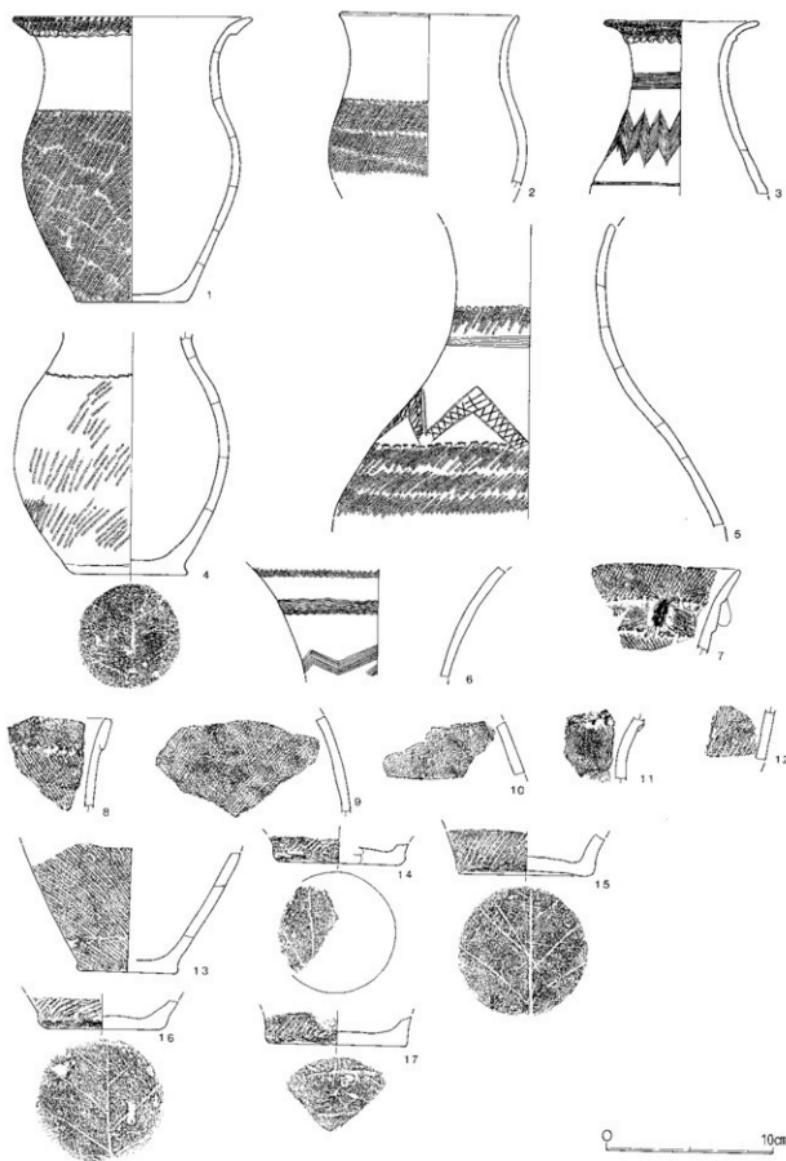
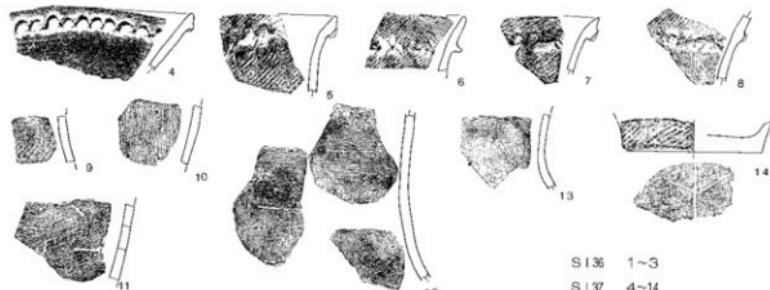
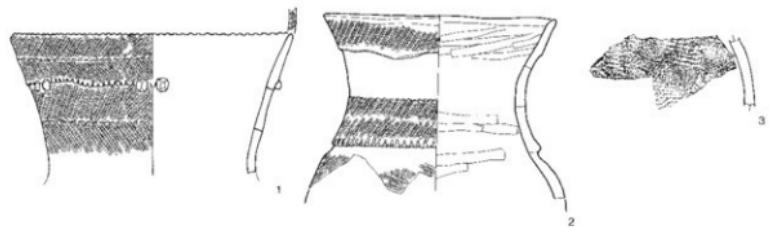


Fig 166 宝积遗址 S I 19



S 136 1~3

S 137 4~14

S 138 15~21

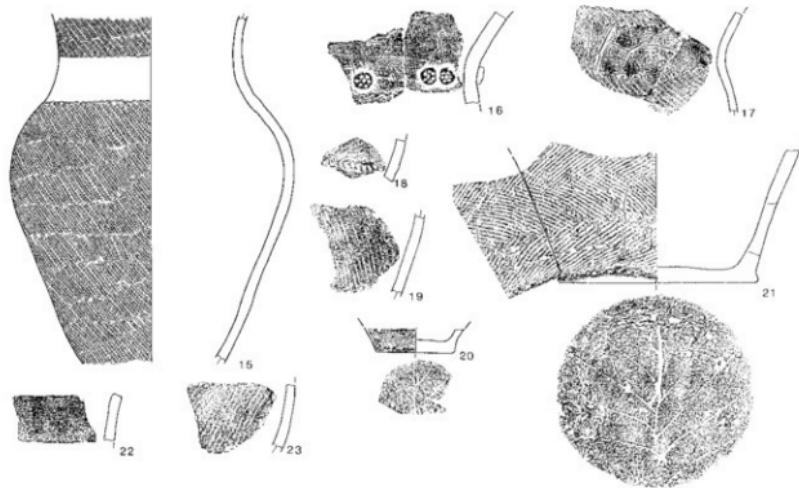
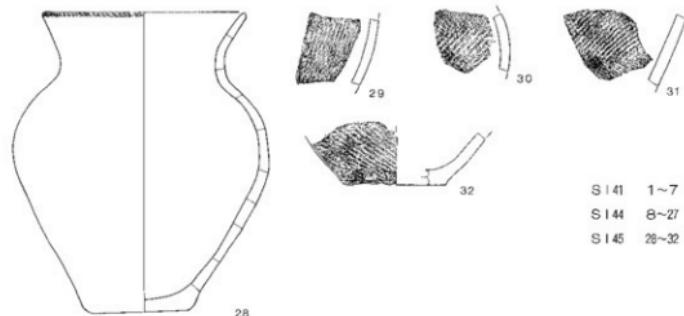
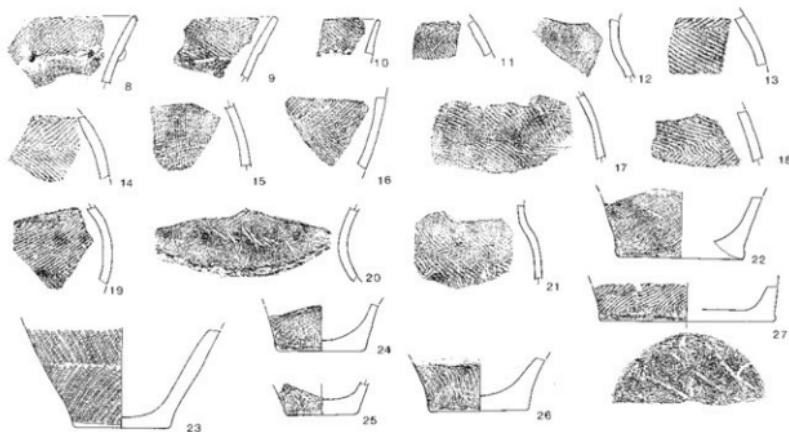
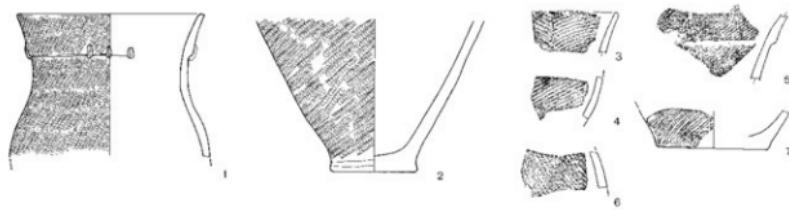


Fig 167 宝積遺跡 S 136・37・38



S 141 1~7
S 144 8~27
S 145 28~32



Fig 168 宝積遺跡 S 141・44・45

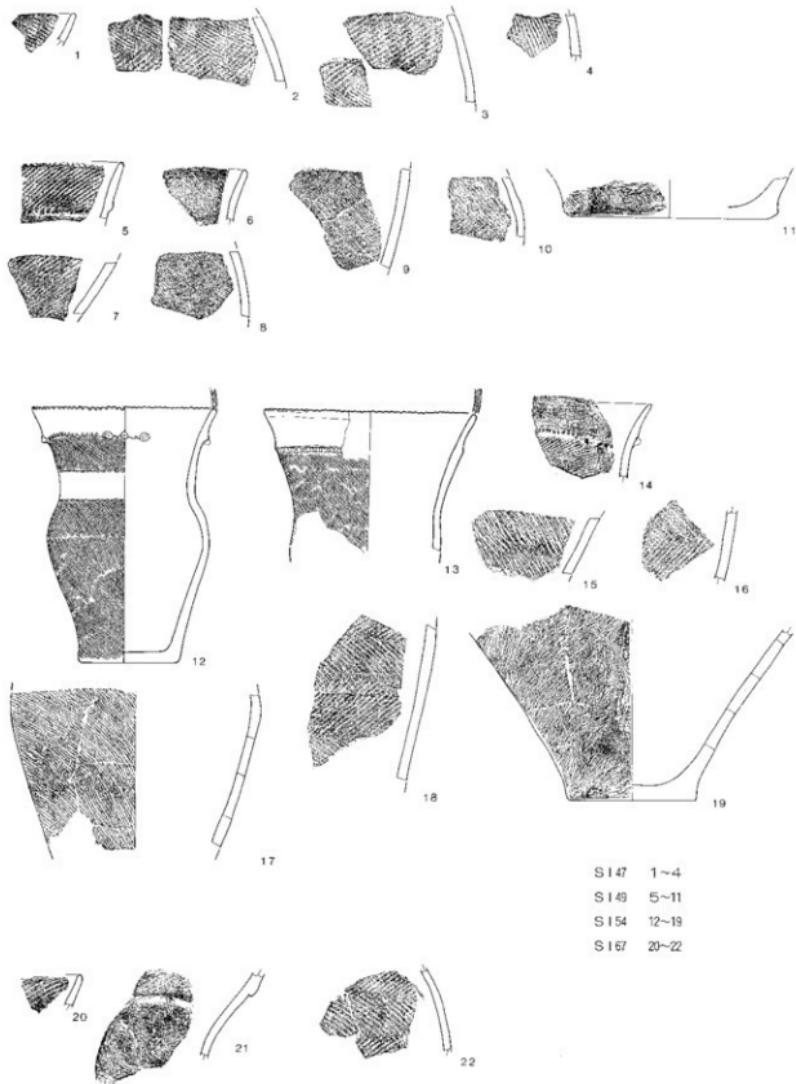
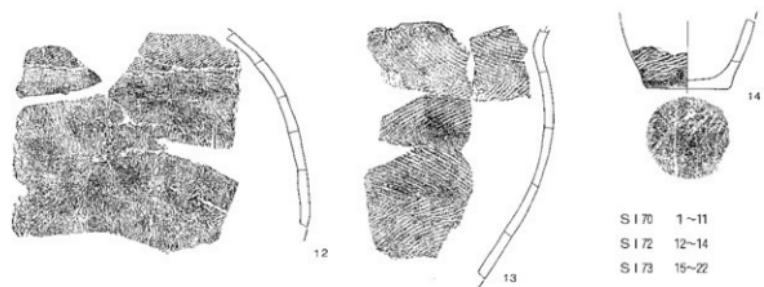
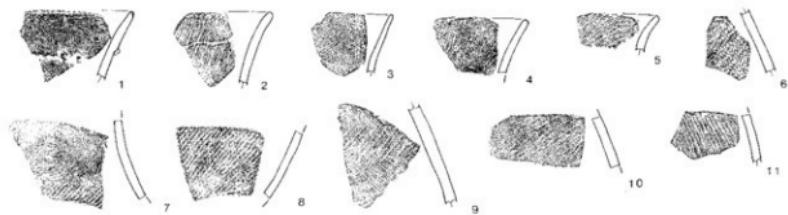
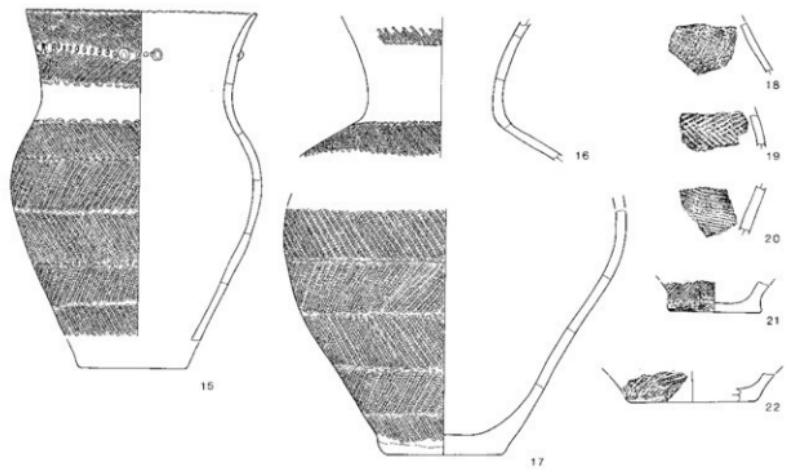


Fig 169 宝積遺跡 S147・49・54・67

○ 10cm

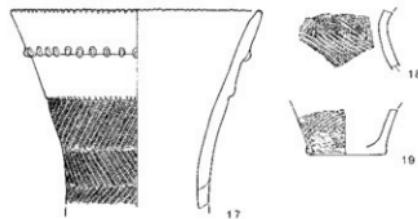
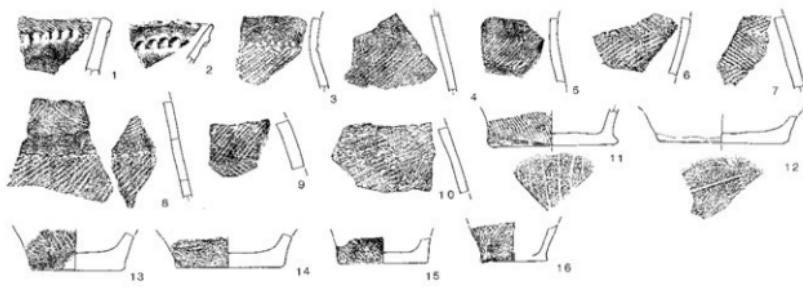


S I 70 1~11
S I 72 12~14
S I 73 15~22



0 10cm

Fig 170 宝積遺跡 S I 70・72・73



S I 74 1~16
S I 75 17~19
S I 76 20~29
S I 78 30~34

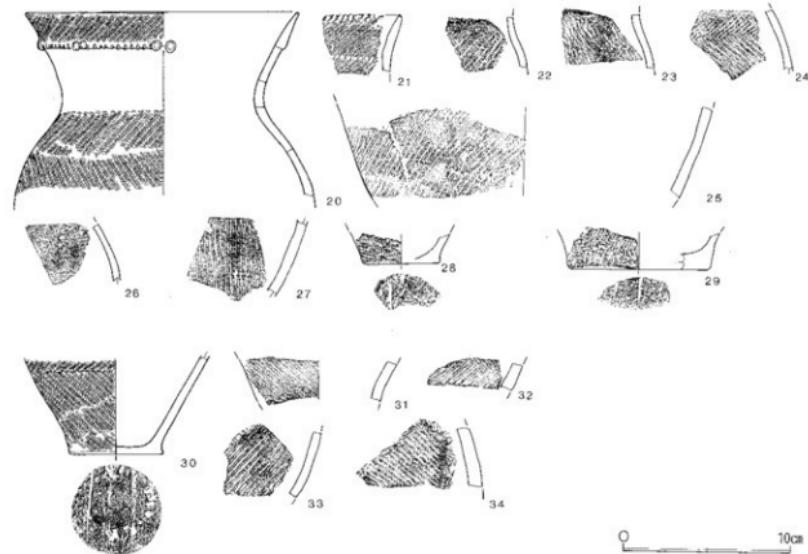


Fig 171 宝積遺跡 S I 74・75・76・78

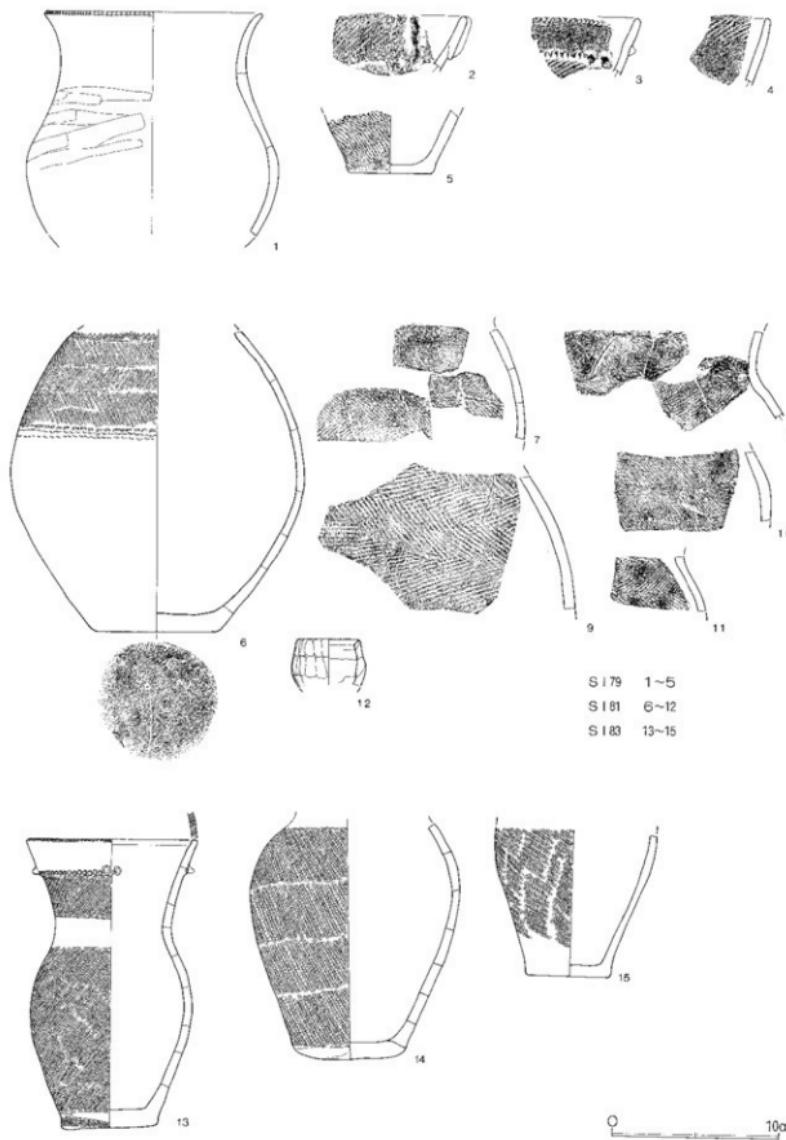
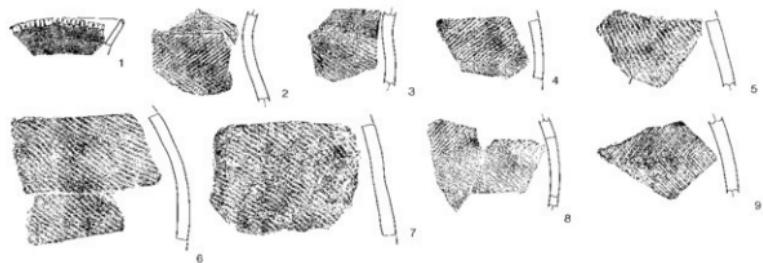
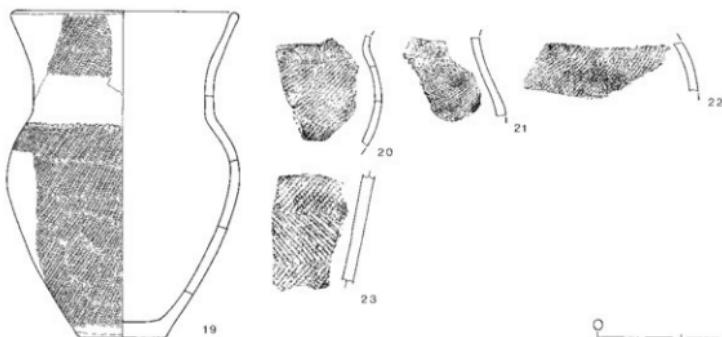
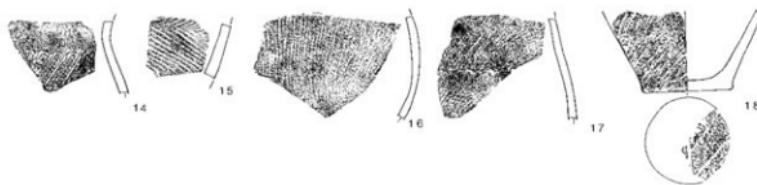
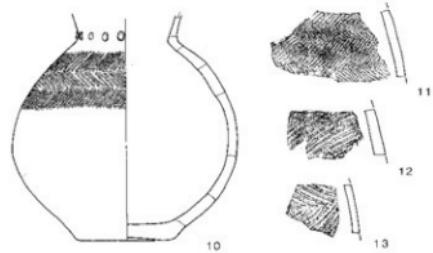


Fig 172 宝積遺跡 S I 79・81・83

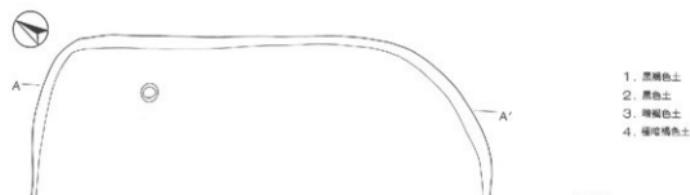
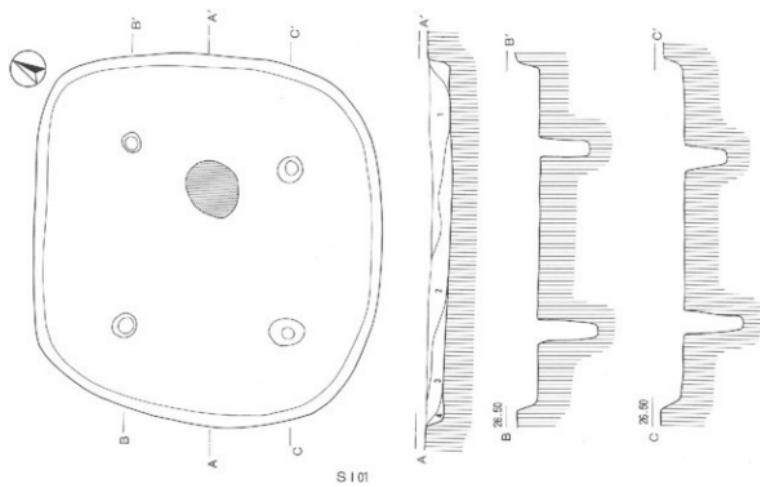


S I 96 1~9
S I 100 10~13
S I 107 14~18
S I 109 19~23



0 1 10cm

Fig 173 宝積遺跡 S I 96・100・107・109



1. 黑褐色土
2. 黑色土
3. 灰褐色土
4. 棕褐色土

Fig 174 東台遺跡 S 101·03

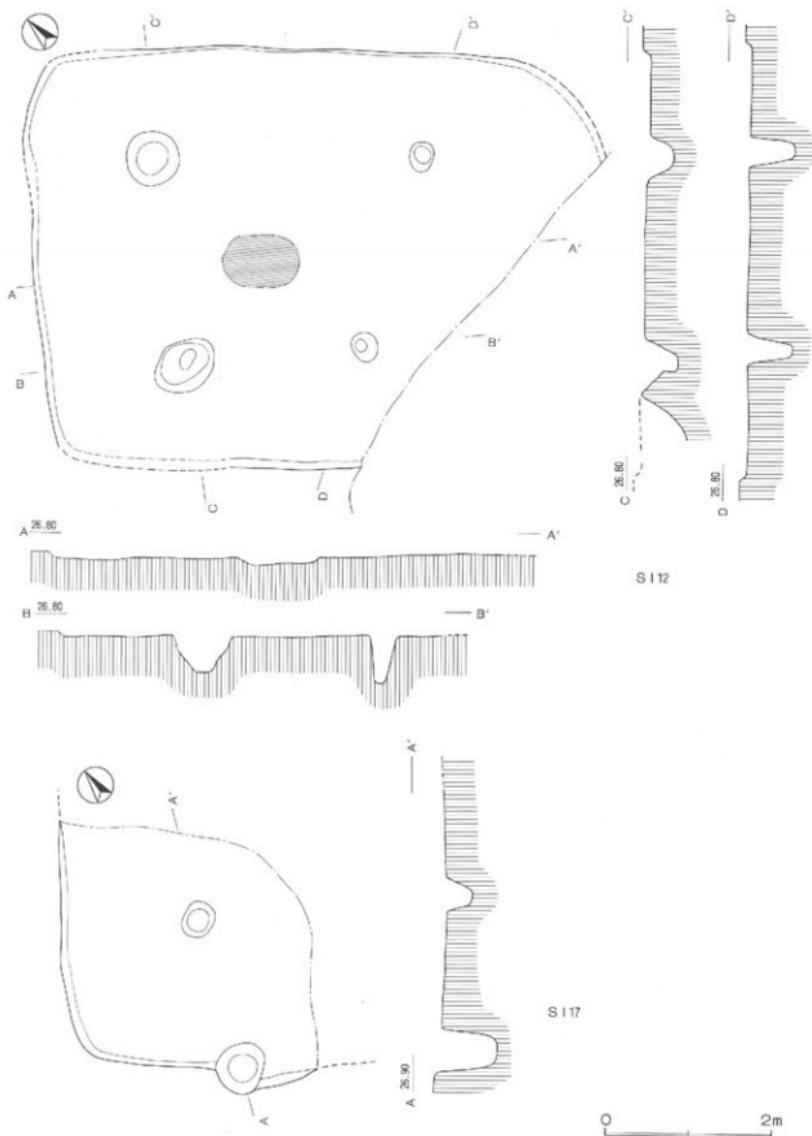


Fig 175 東台遺跡 S I 12・17

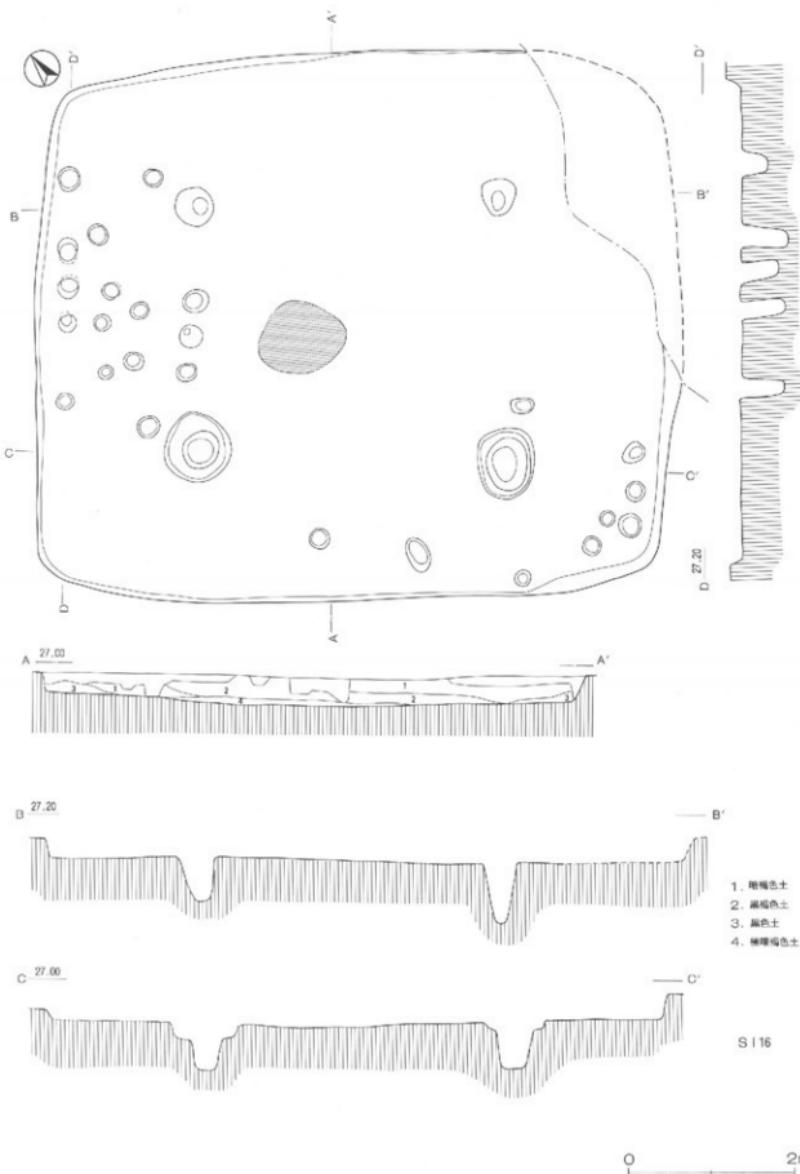


Fig 176 東台遺跡 S.I. 16

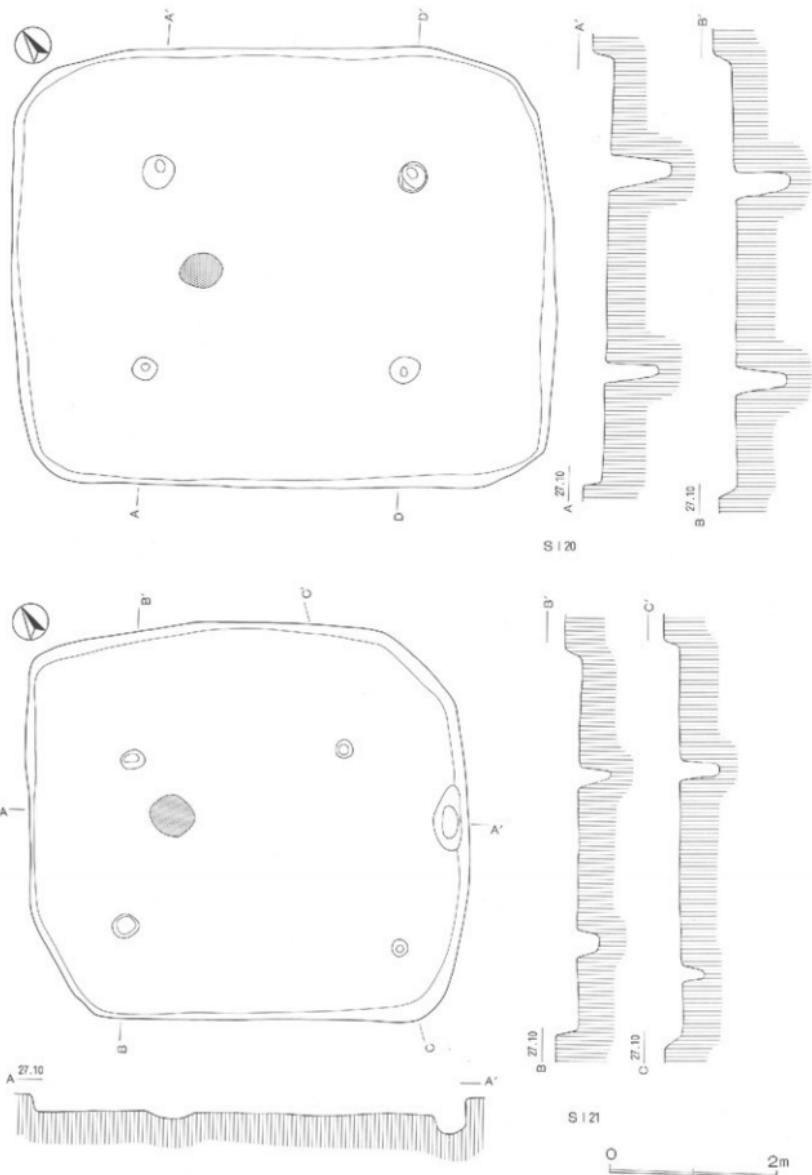


Fig 177 東台遺跡 S 120・21

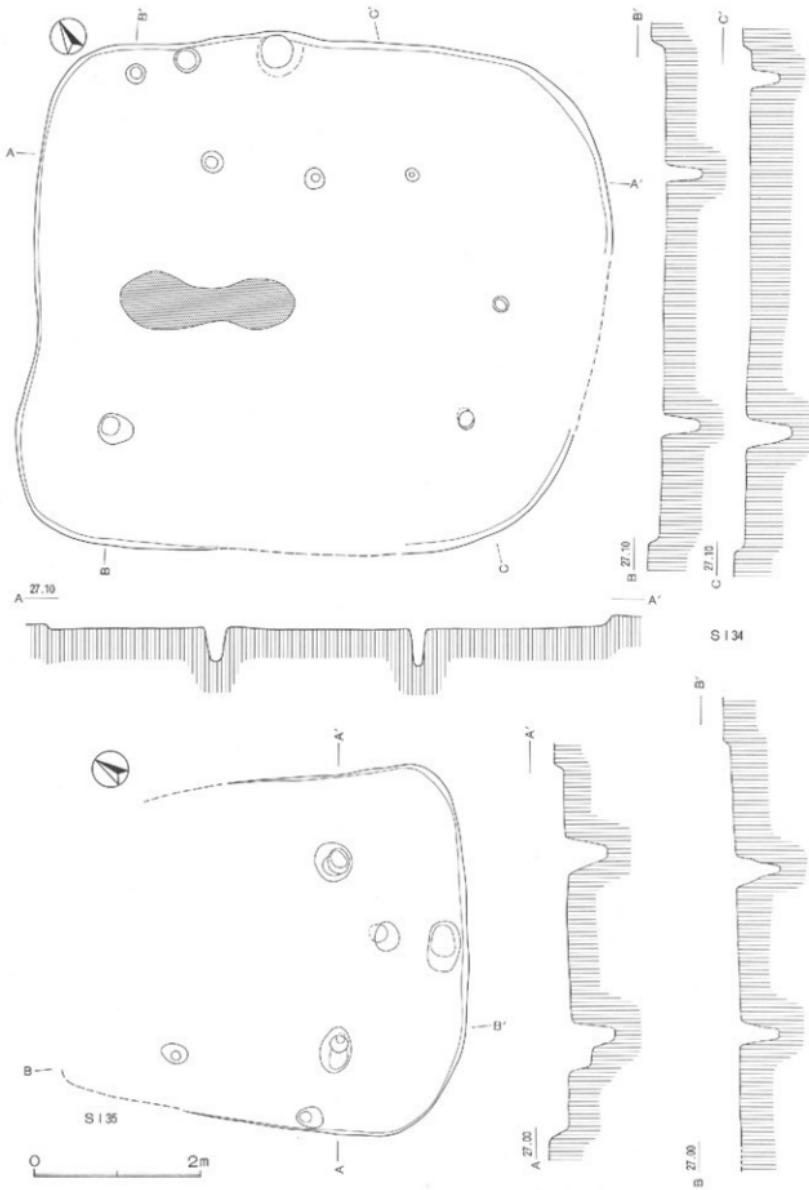


Fig 178 東台遺跡 S 134・35

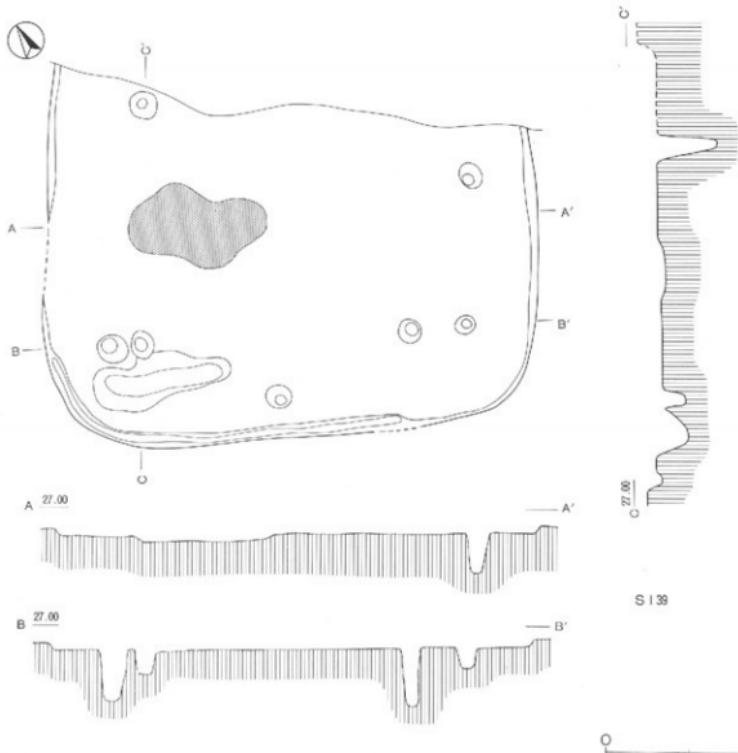
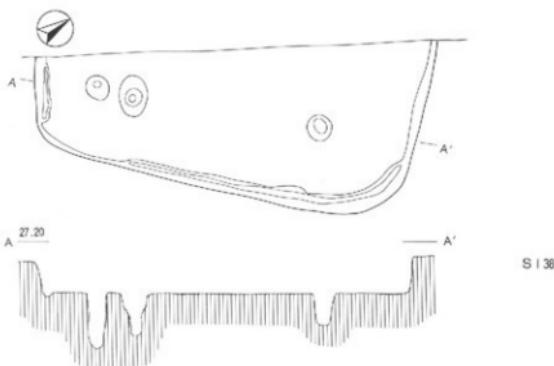


Fig 179 東台遺跡 S I 38・39

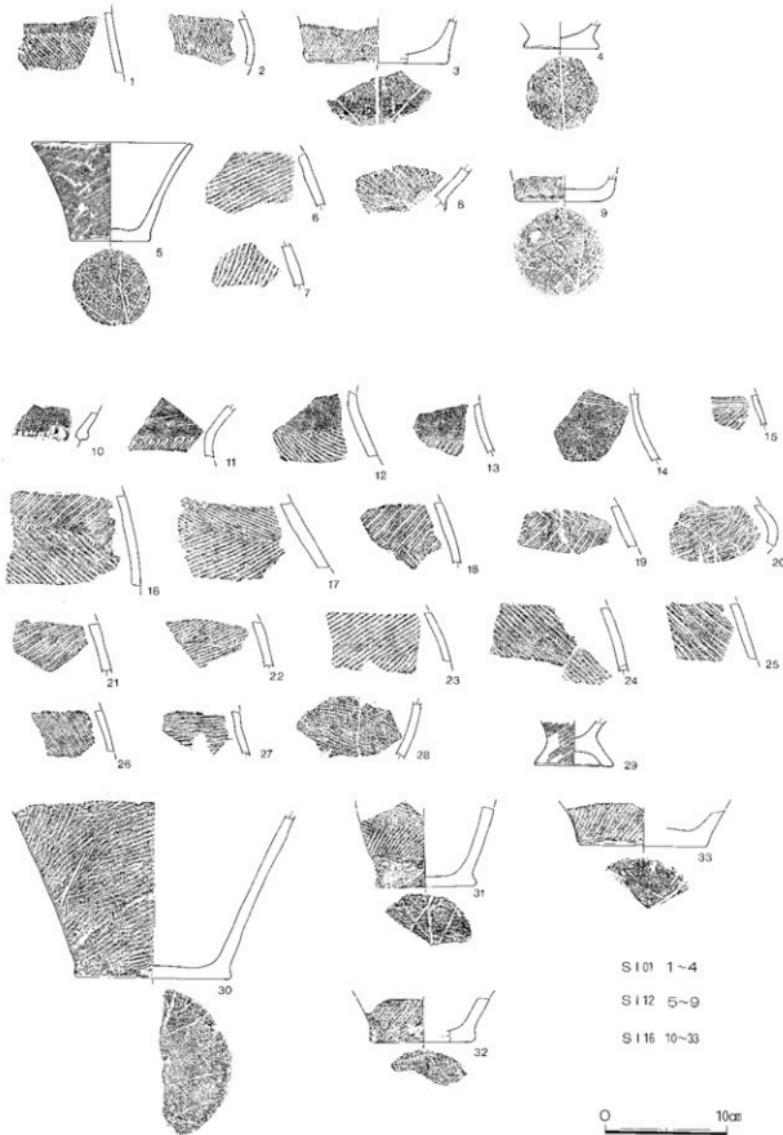
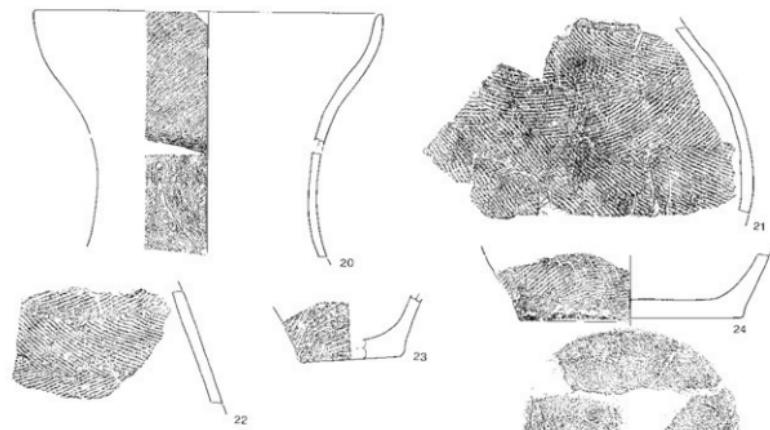
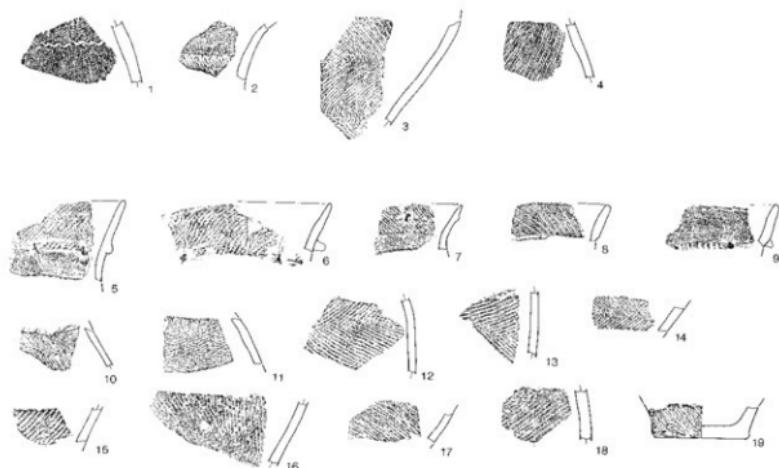


Fig 180 東台遺跡 S I 01・12・16



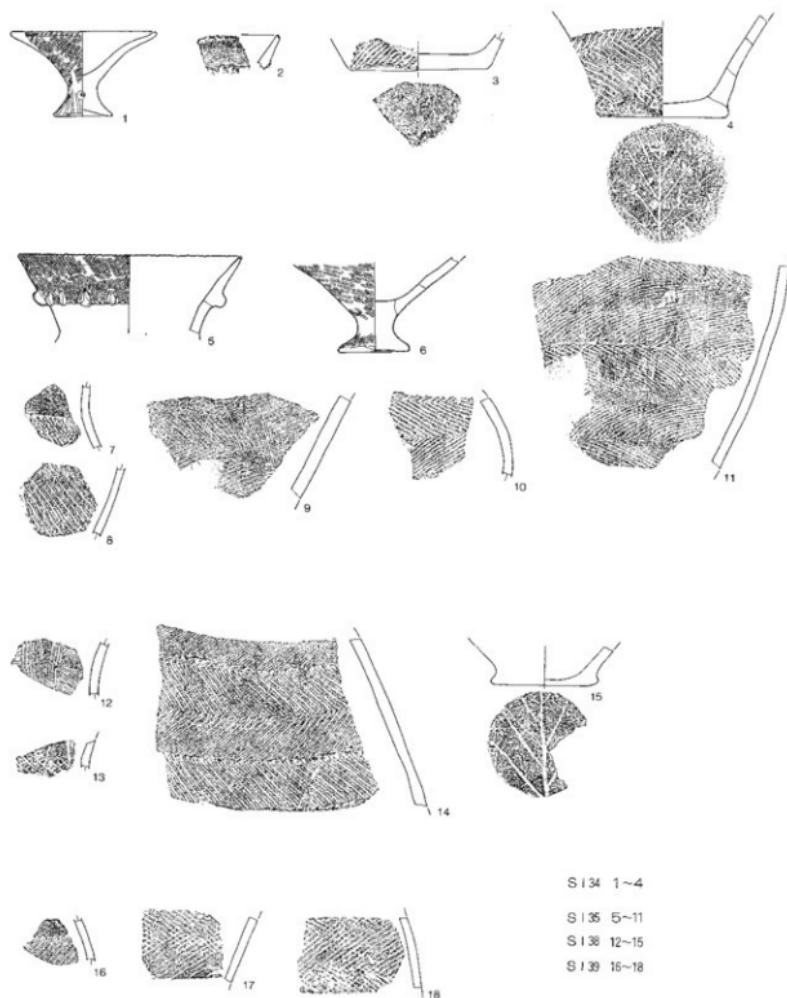
S I 17 1~4

S I 20 5~19

S I 21 20~24

0 10cm

Fig 181 東台遺跡 S I 17・20・21



○ 10cm

Fig 182 東台遺跡 S I 34・35・38・39



Fig 183 東台古墳群

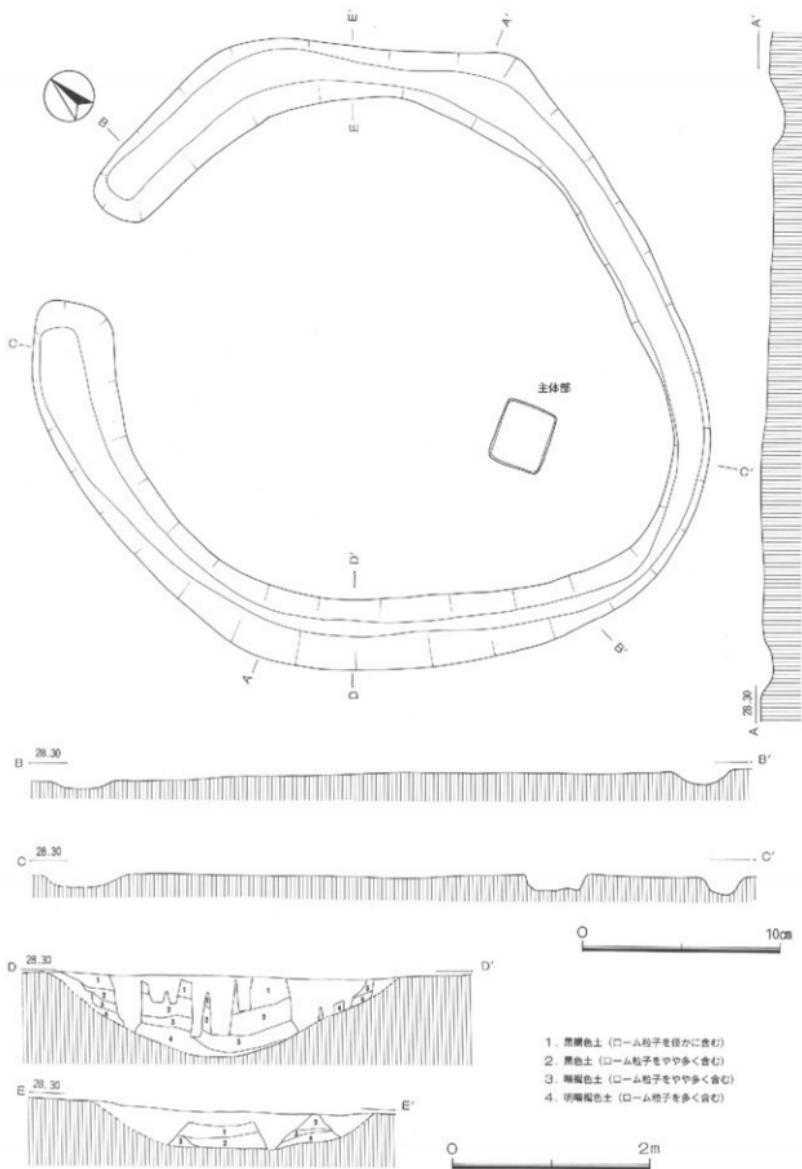


Fig 184 東台古墳群 第1号墳

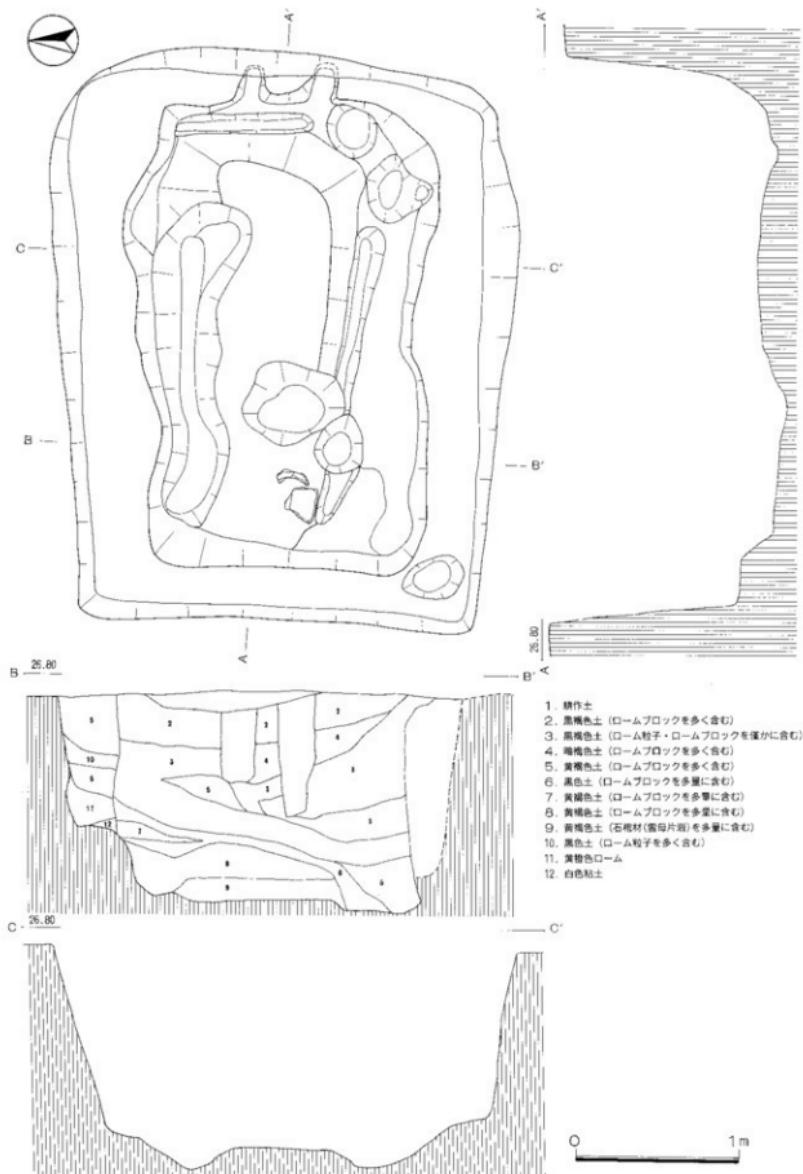
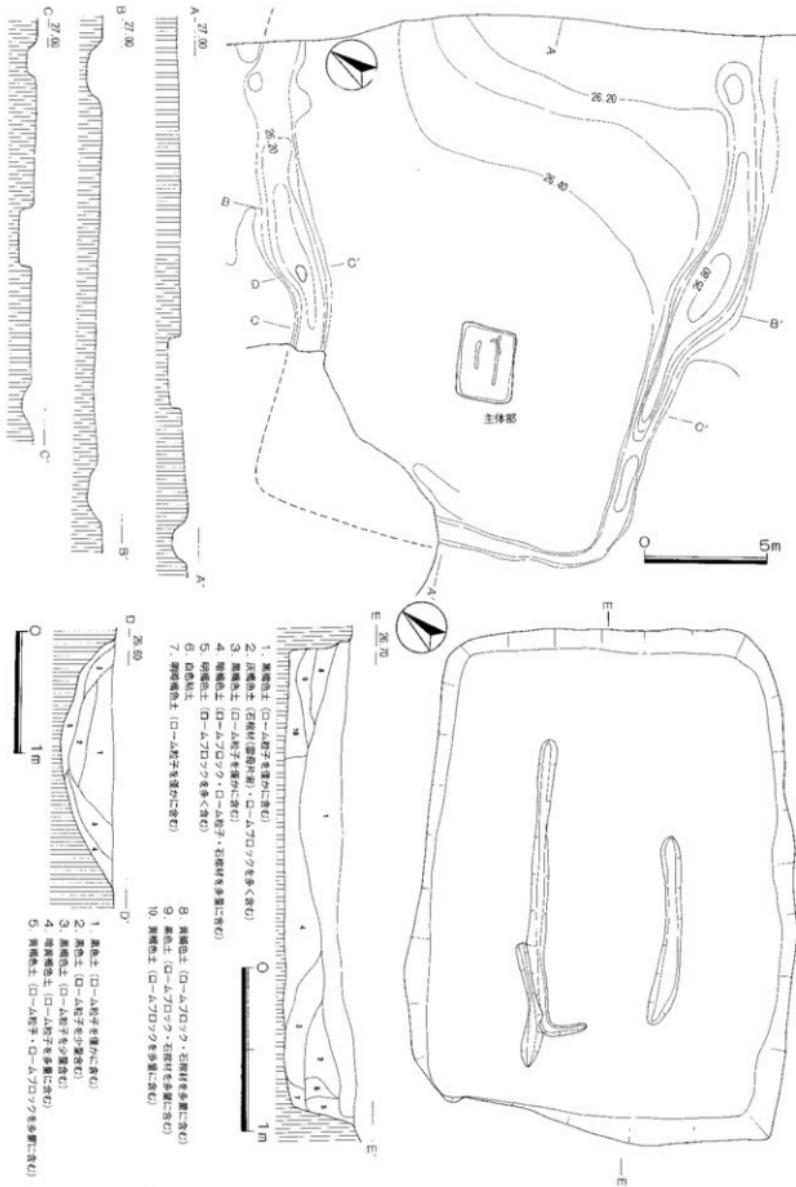


Fig 185 東台古墳群 第1号墳



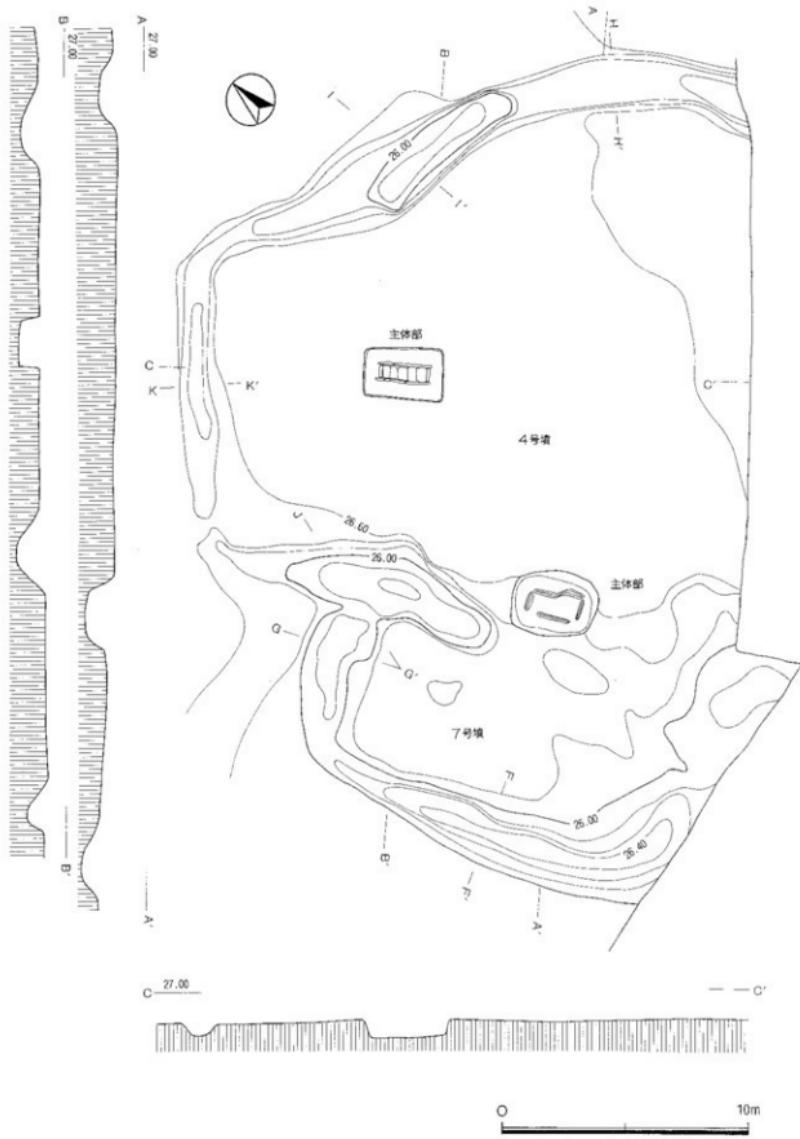


Fig 187 東台古墳群 第4・7号墳

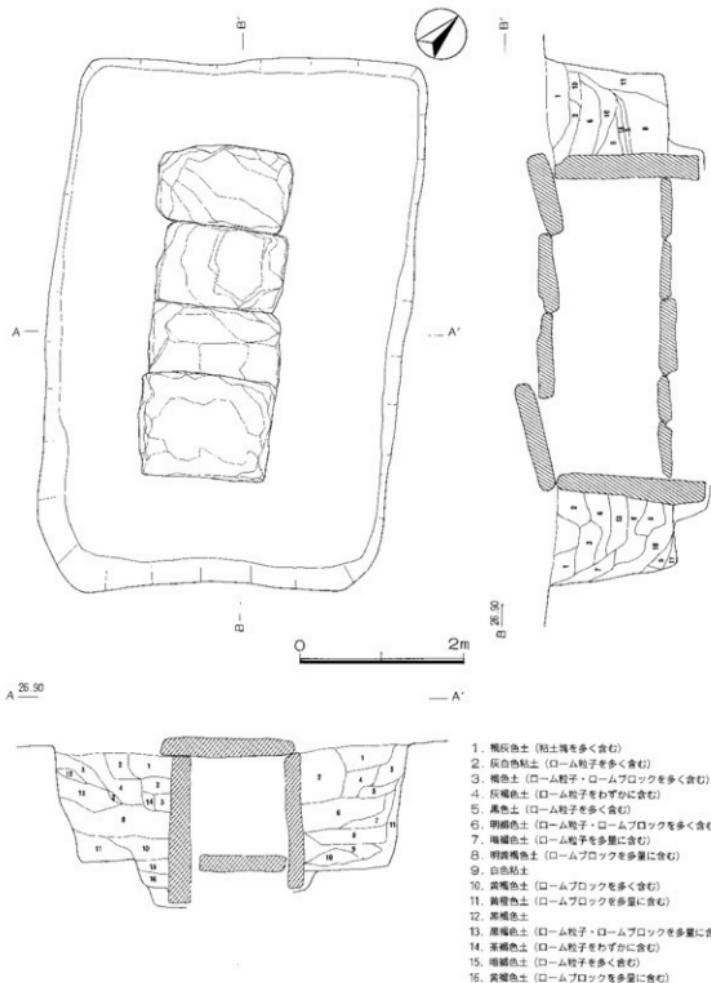
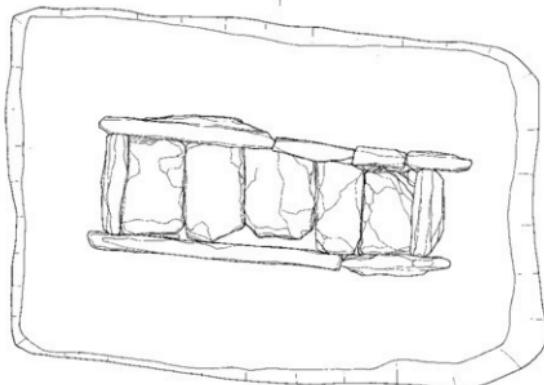
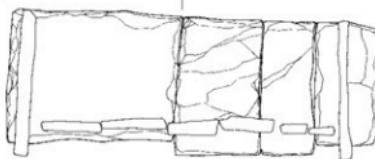


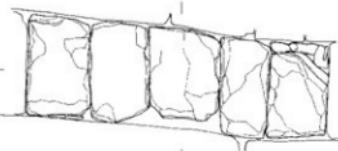
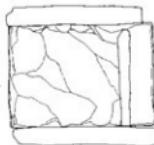
Fig 188 東台古墳群 第4号墳



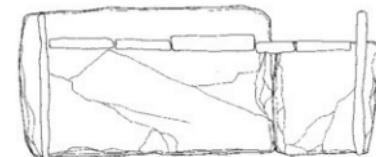
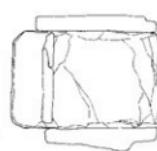
26.50



26.50



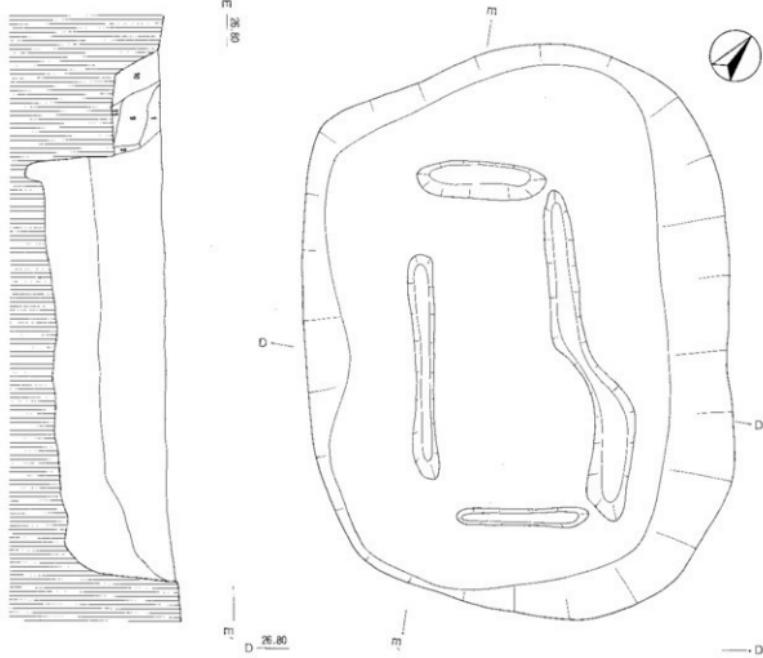
26.50



05.50



Fig 189 東台古墳群 第4号墳



1. 深黄褐色土 (ローム粒子を多く含む)
2. 反白色粘土 (ローム粒子・ロームブロックを多く含む)
3. 黑褐色土 (石棺材(箆舟片岩)を多量に含む)
4. 青色土 (ロームブロックを多量に含む)
5. 黑褐色土 (ローム粒子を多く含む)
6. 黑色土 (ローム粒子を僅かに含む)
7. 黄褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量に含む)
8. 黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
9. 青色土 (ローム粒子を多量に含む)
10. 黄褐色土 (ローム粒子を多く含む)
11. 明褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多く含む)

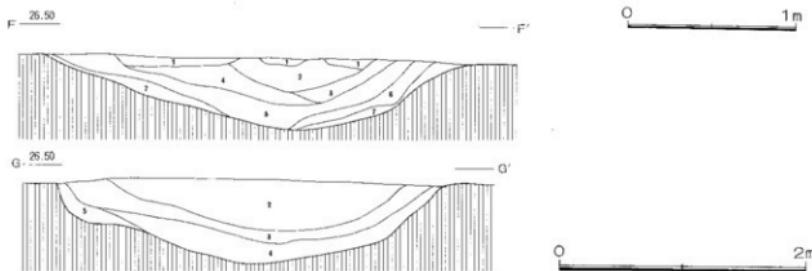


Fig 190 東台古墳群 第7号墳

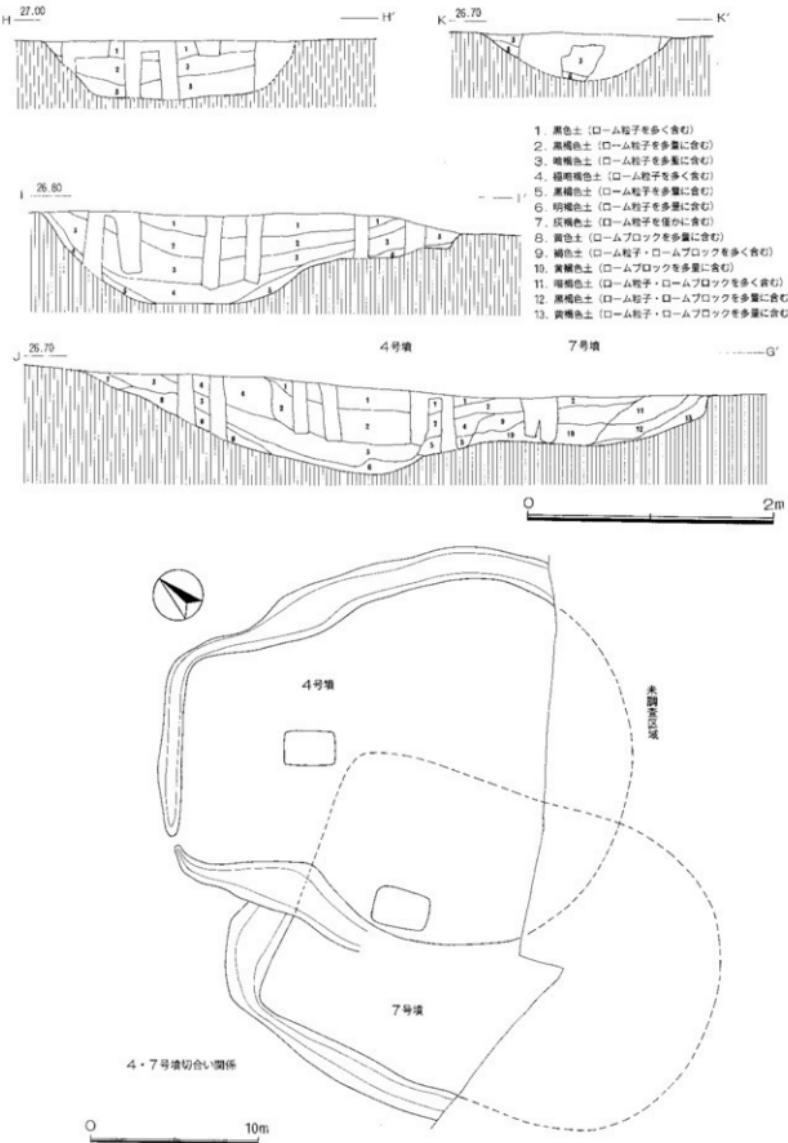


Fig 191 東台古墳群 第4・7号墳

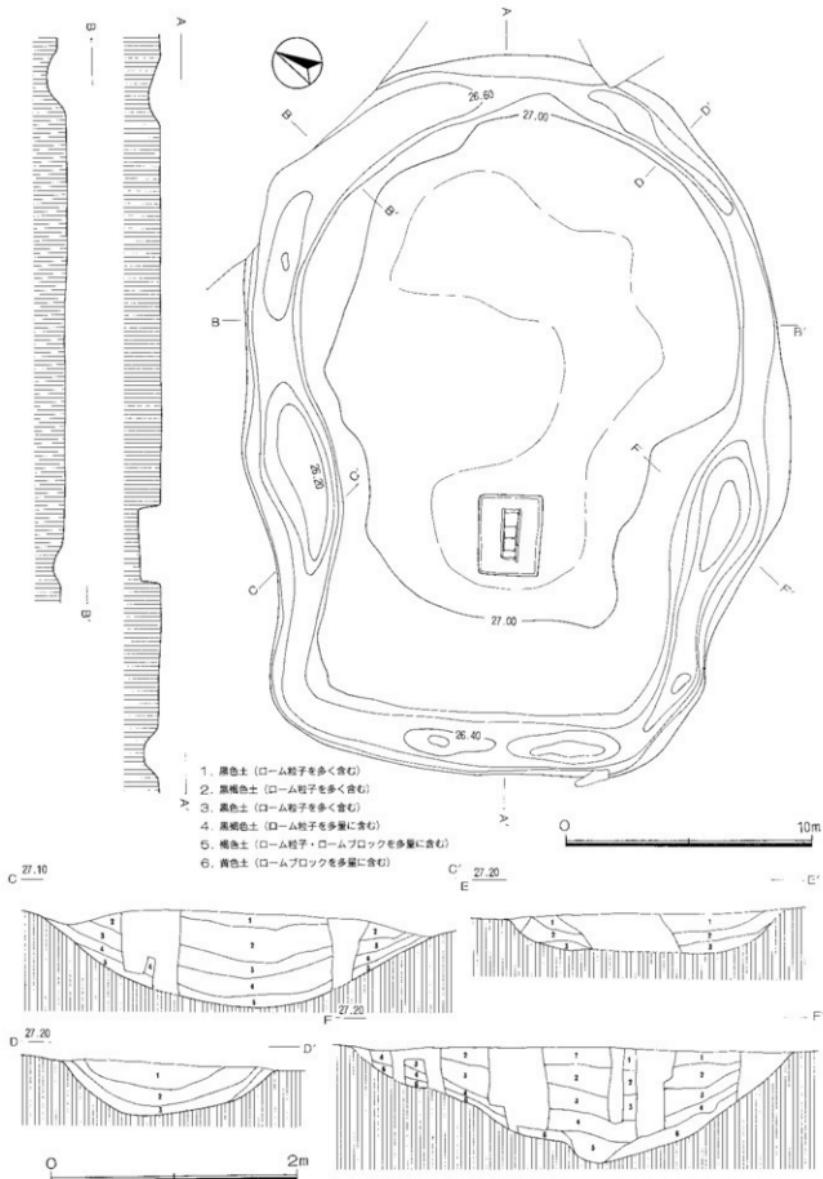


Fig 192 東台古墳群 第5号墳

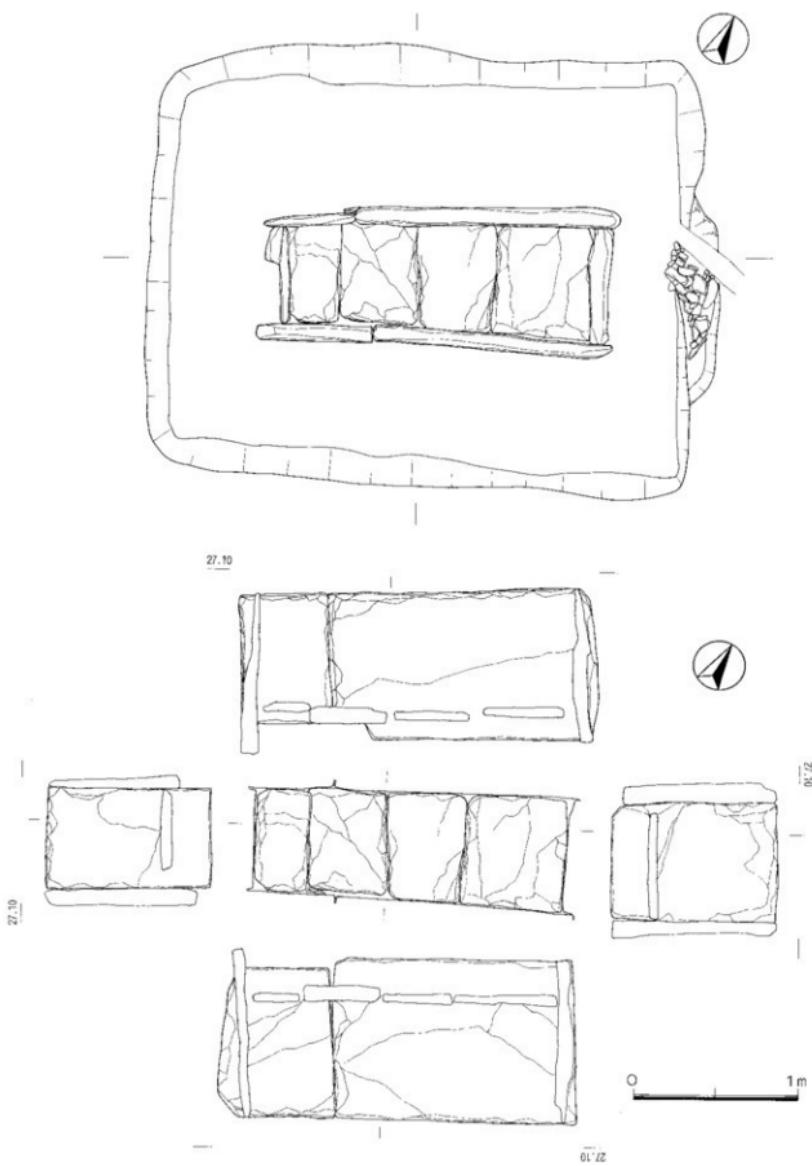


Fig 193 東台古墳群 第5号墳

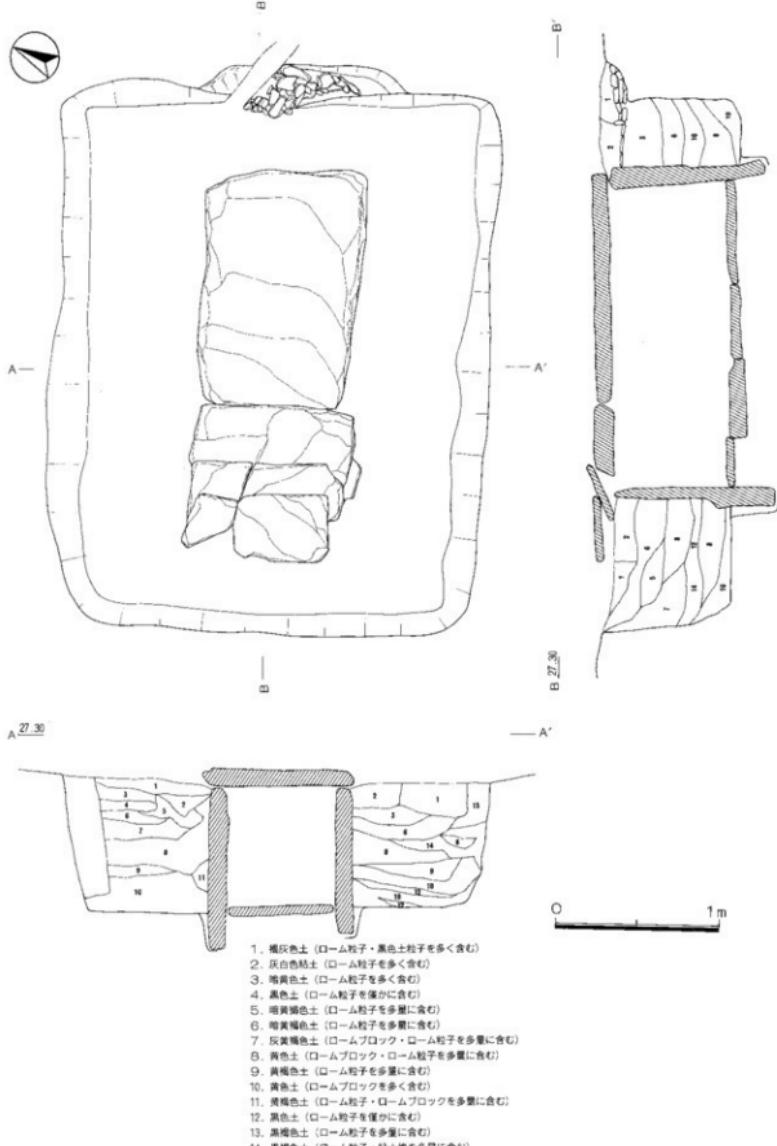


Fig 194 東台古墳群 第5号墳

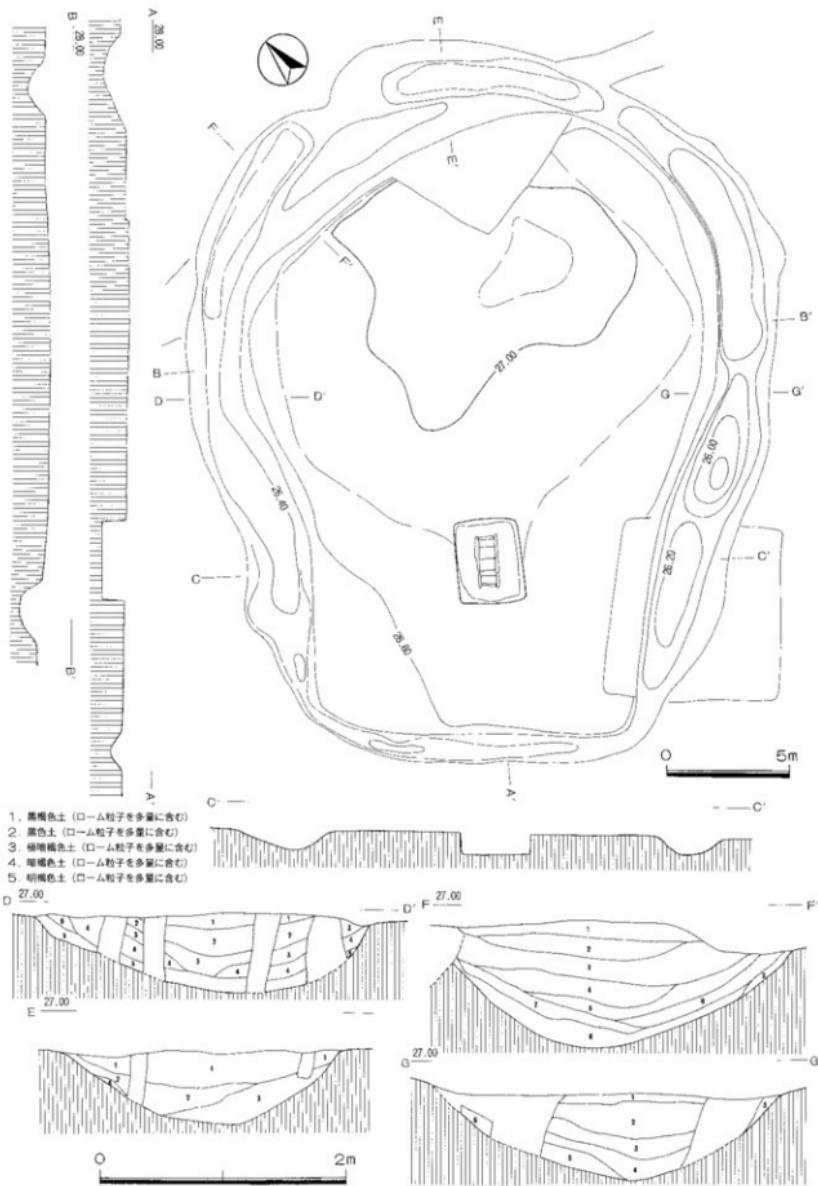
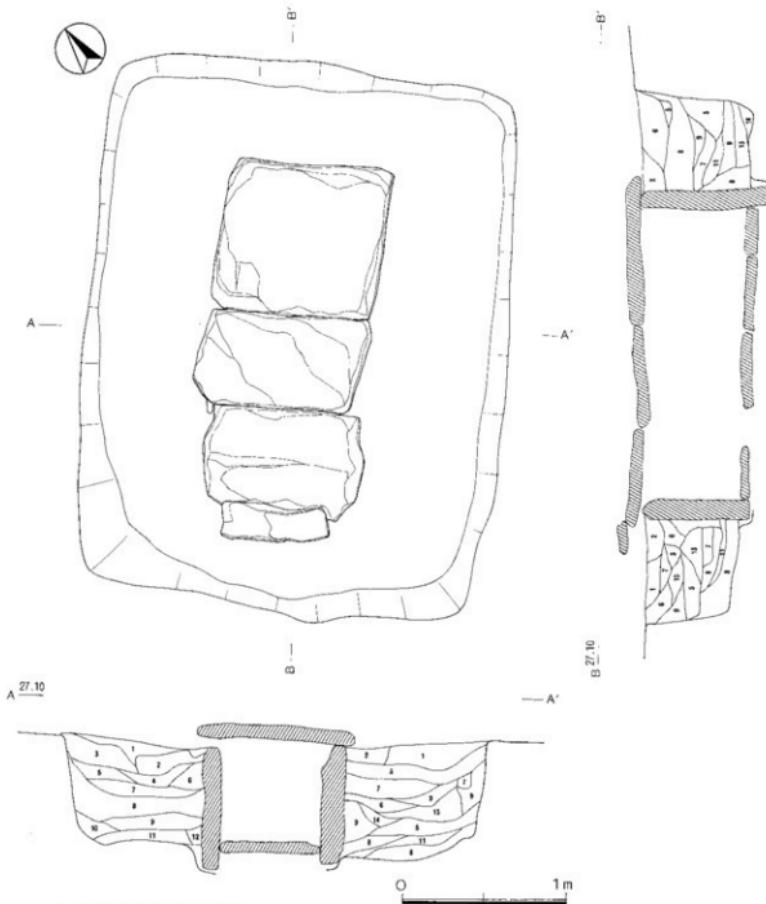
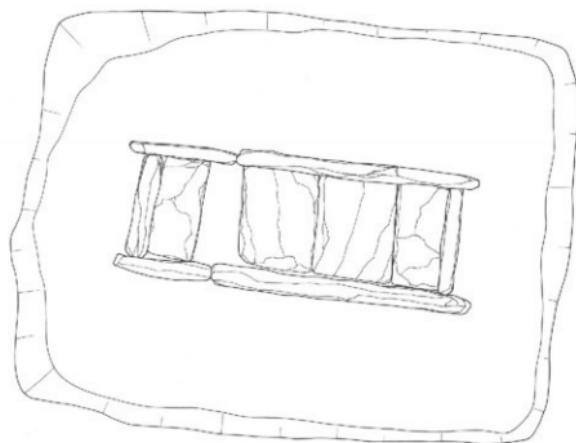


Fig 195 東台古墳群 第6号墳



1. 灰白色色土 (ローム粒子を多く含む)
2. 灰白色粘土
3. 明褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多く含む)
4. 反褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量に含む)
5. 黑褐色土 (ロームブロックを多く含む)
6. 明黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
7. 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒子を多量に含む)
8. 黄褐色土 (ロームブロック・ローム粒子を多量に含む)
9. 明黄褐色土 (ロームブロックを多く含む)
10. 棕色土 (ロームブロック・ローム粒子を多く含む)
11. 黑色土 (ローム粒子を確かに含む)
12. 黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
13. 黑褐色土 (ローム粒子を多量に含む)
14. 黑褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量に含む)

Fig 196 東台古墳群 第6号墳

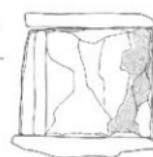
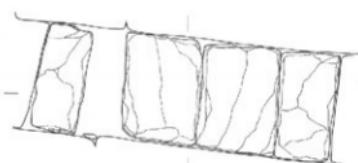


0 1m

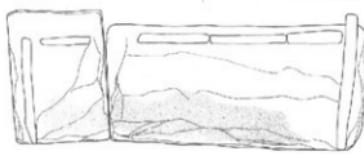
27.10



27.10



27.10



27.10

Fig 197 東台古墳群 第6号墳

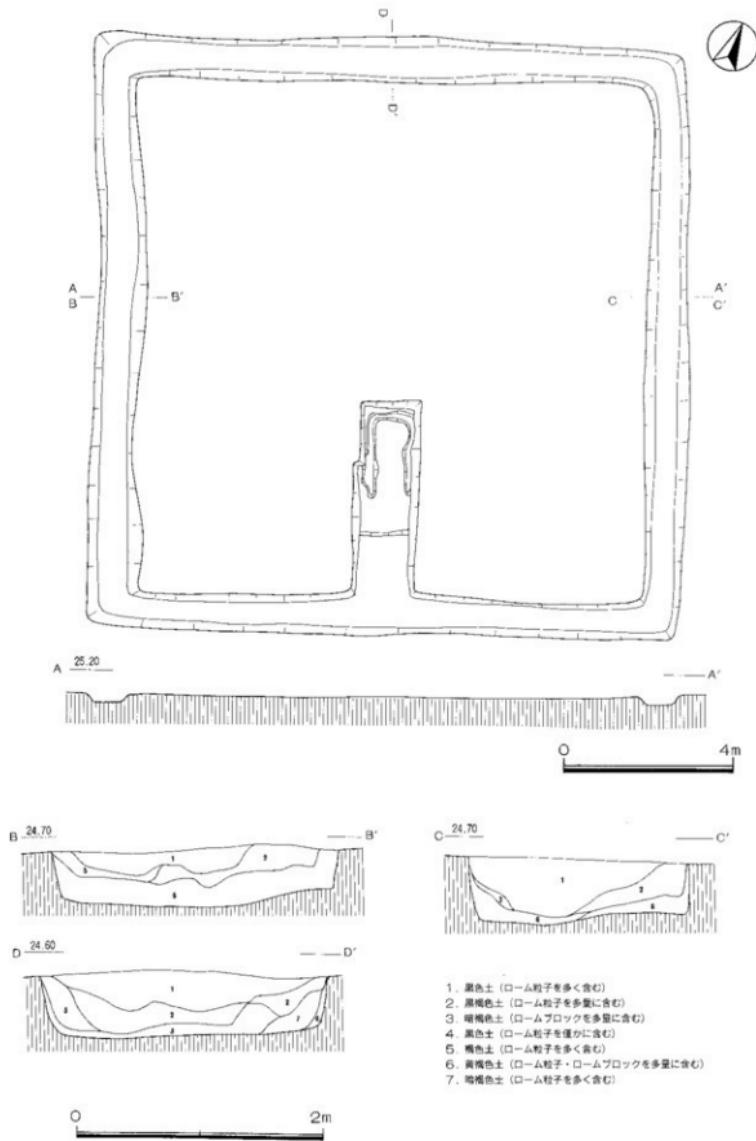


Fig 198 東台古墳群 第9号墳

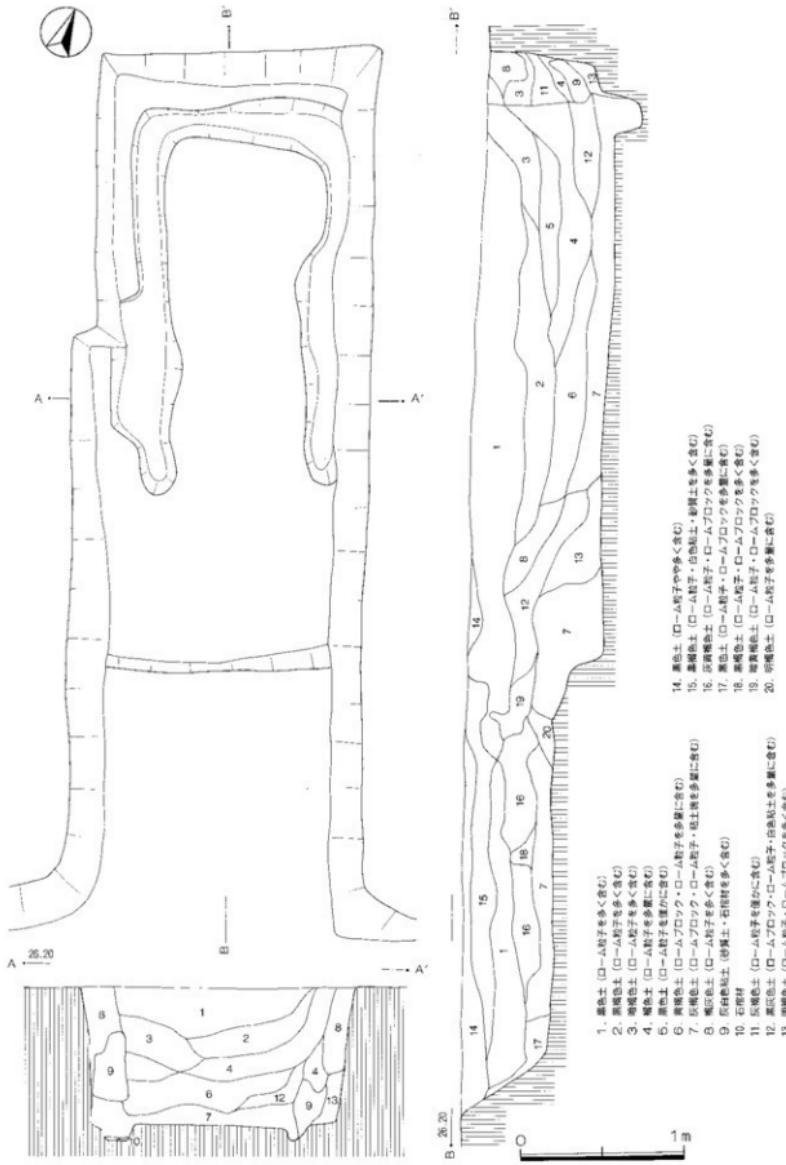


Fig 199 東台古墳群 第9号墳

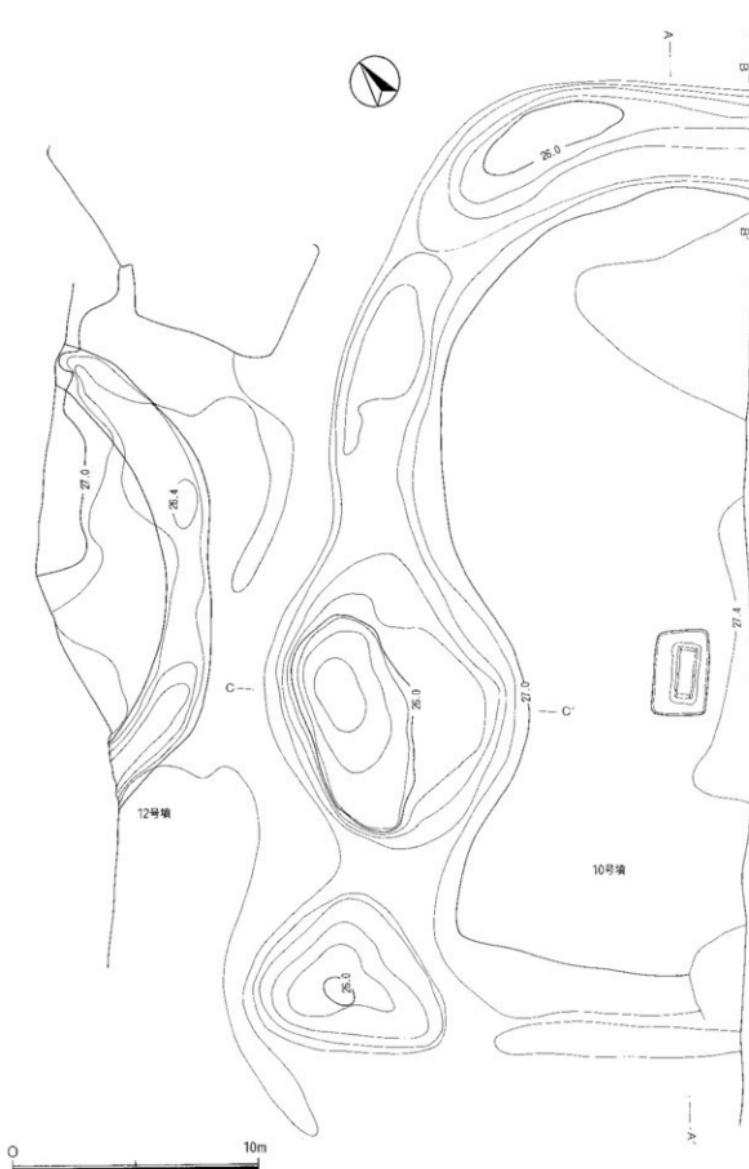
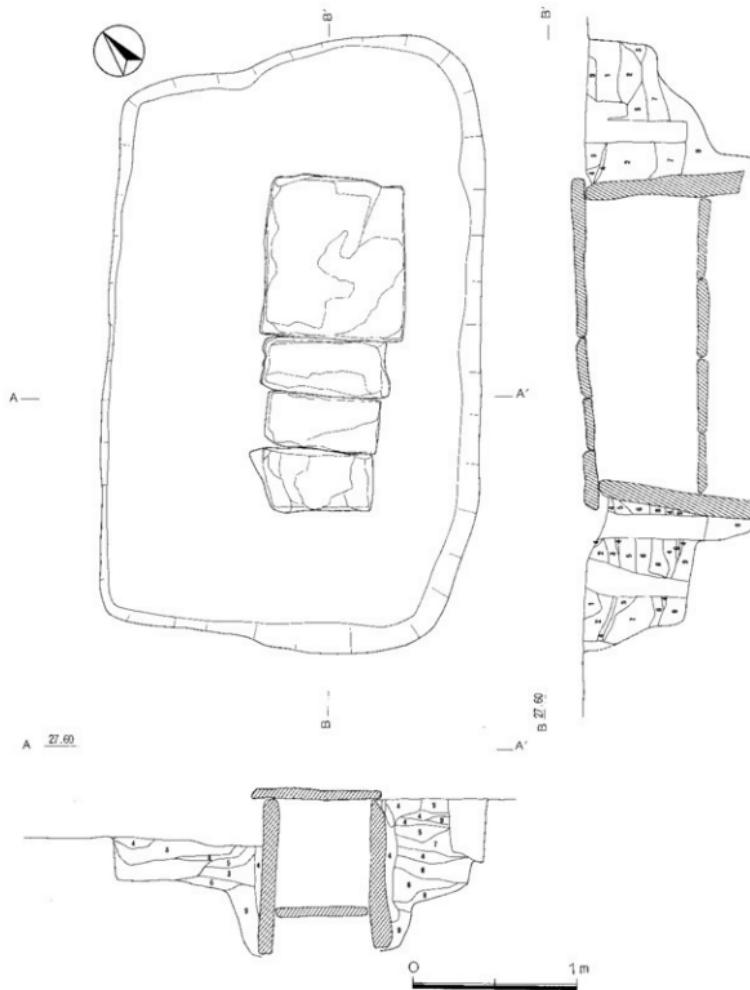
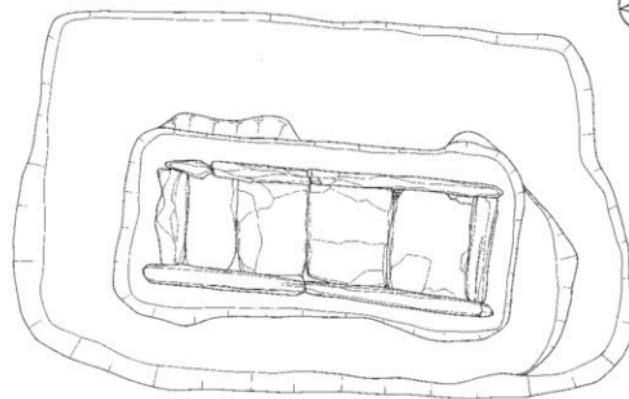


Fig 200 東台古墳群 第10・12号墳



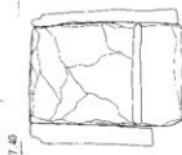
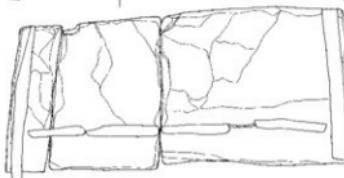
1. 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む)
2. 増粘土 (ローム粒子・ロームブロックを多く含む)
3. 粘土 (ロームブロック・ローム粒子を多量に含む)
4. 白色粘土
5. 明褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量に含む)
6. 黄褐色土 (ローム粒子・ロームブロックを多量に含む)
7. 黑褐色土 (ローム粒子を多く含む)
8. 黑色土 (ロームブロックを僅かに含む)
9. 黄褐色ローム層

Fig 201 東台古墳群 第10号墳

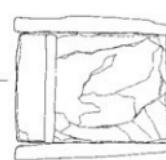
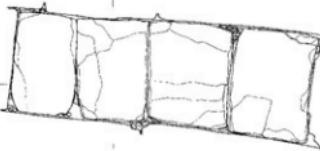


0 1m

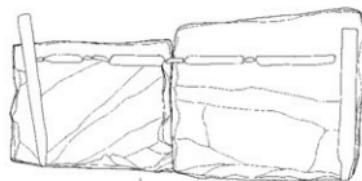
27.40



27.40



27.40



27.40

Fig 202 東台古墳群 第10号墳

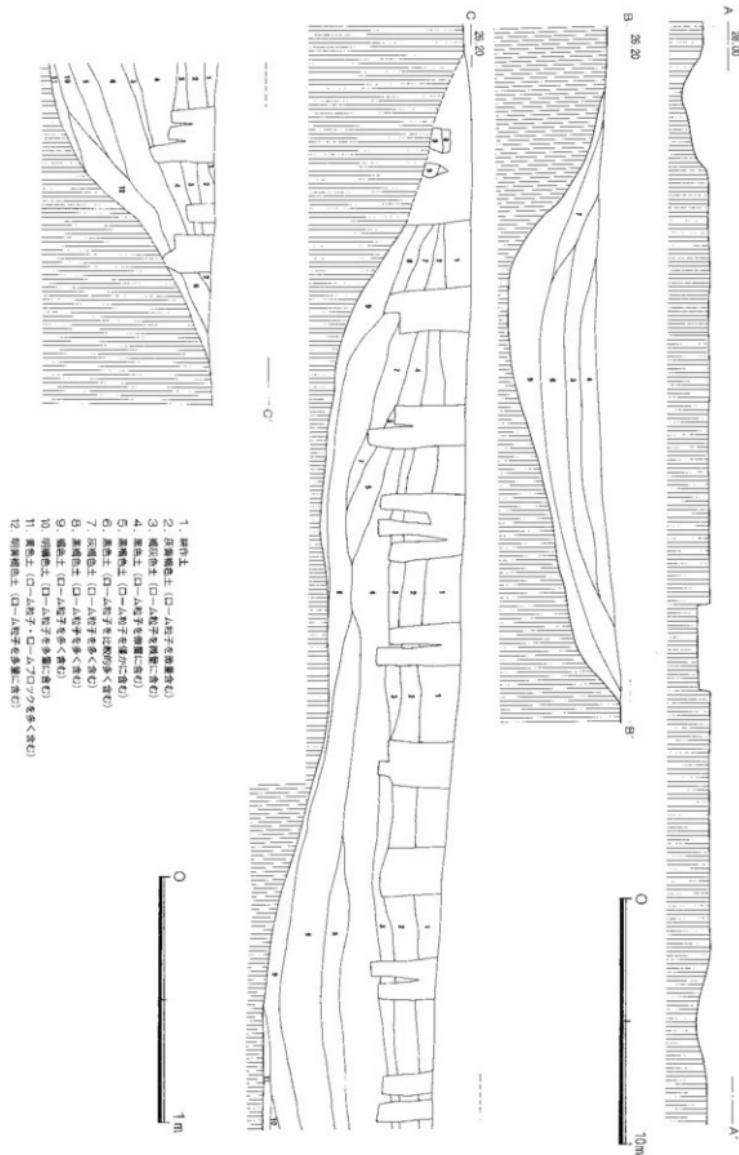


Fig 203 東台古墳群 第10号墳

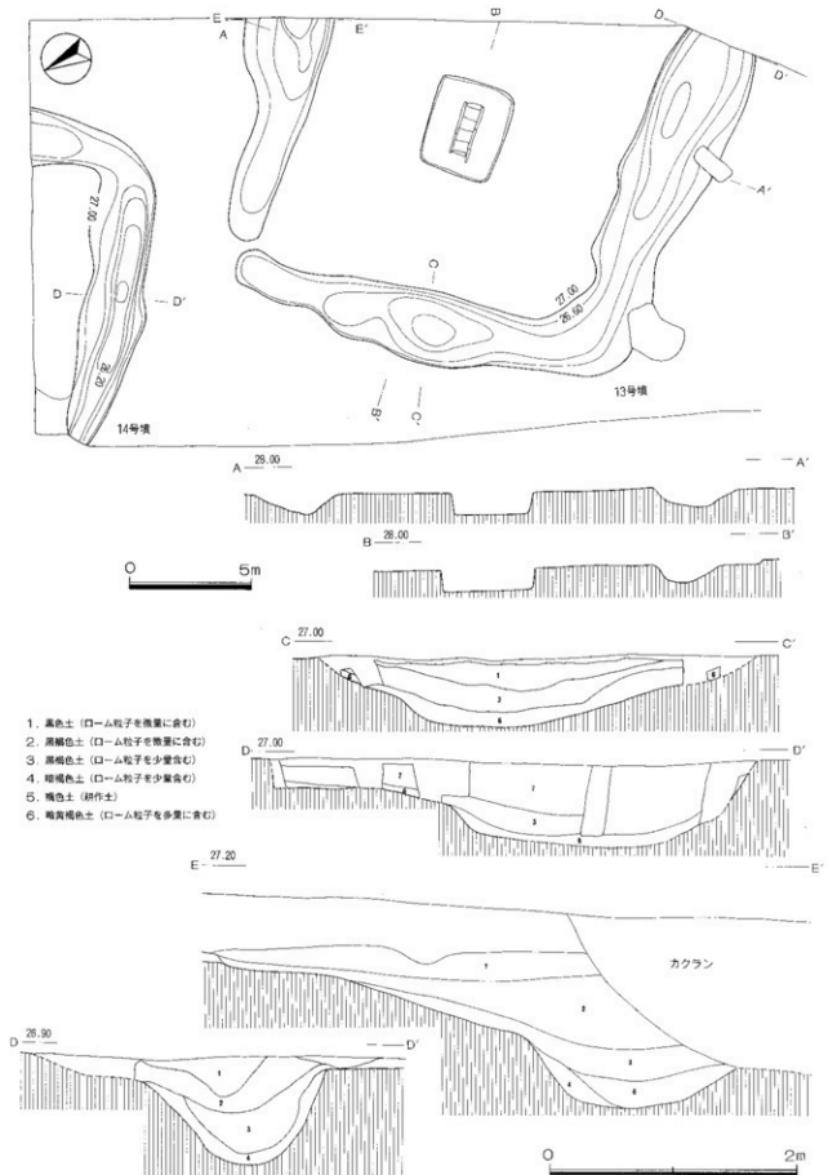
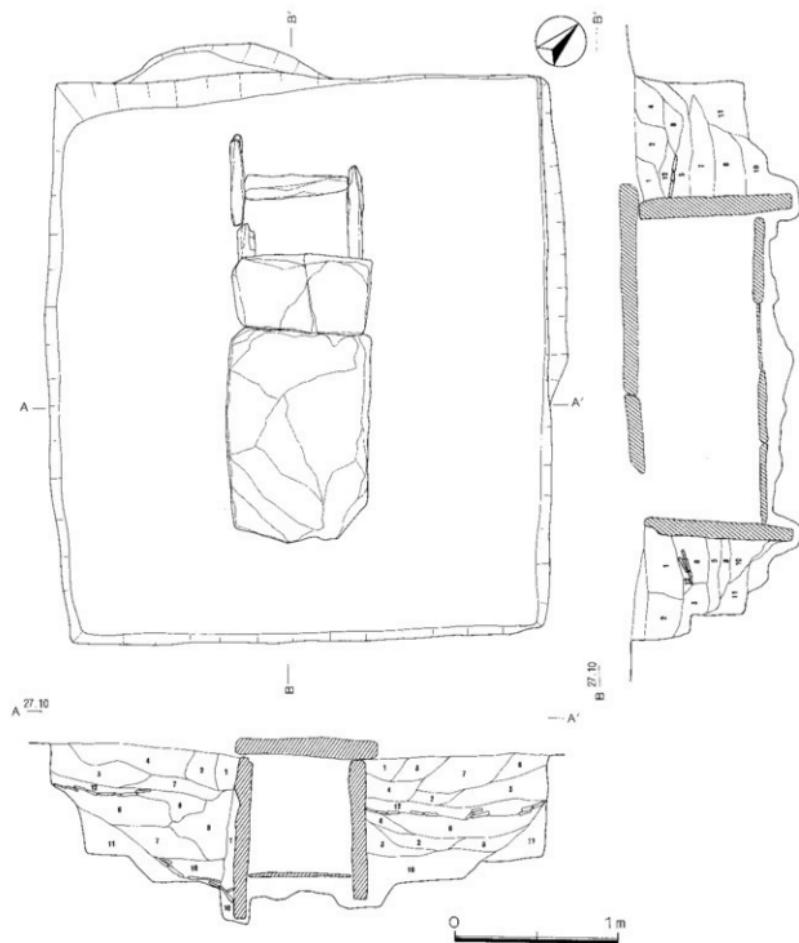


Fig 204 東台古墳群 第13・14号墳



1. 白色粘土
2. 黒褐色土 (白色粘土を多く含む)
3. 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む)
4. 墓室
5. 黑色土 (ローム粒子を多く含む)
6. 黒褐色土 (ローム粒子を多く含む)
7. 反転色土 (ローム粒子を多く含む)
8. 黄褐色土 (ロームブロックを多量に含む)
9. 細粒土 (白色粘土を多く含む)
10. 黄色土 (ロームブロックを多量に含む)
11. ロームブロック
12. 黑褐色土 (石棺材を多量に含む)

Fig 205 東台古墳群 第13号墳

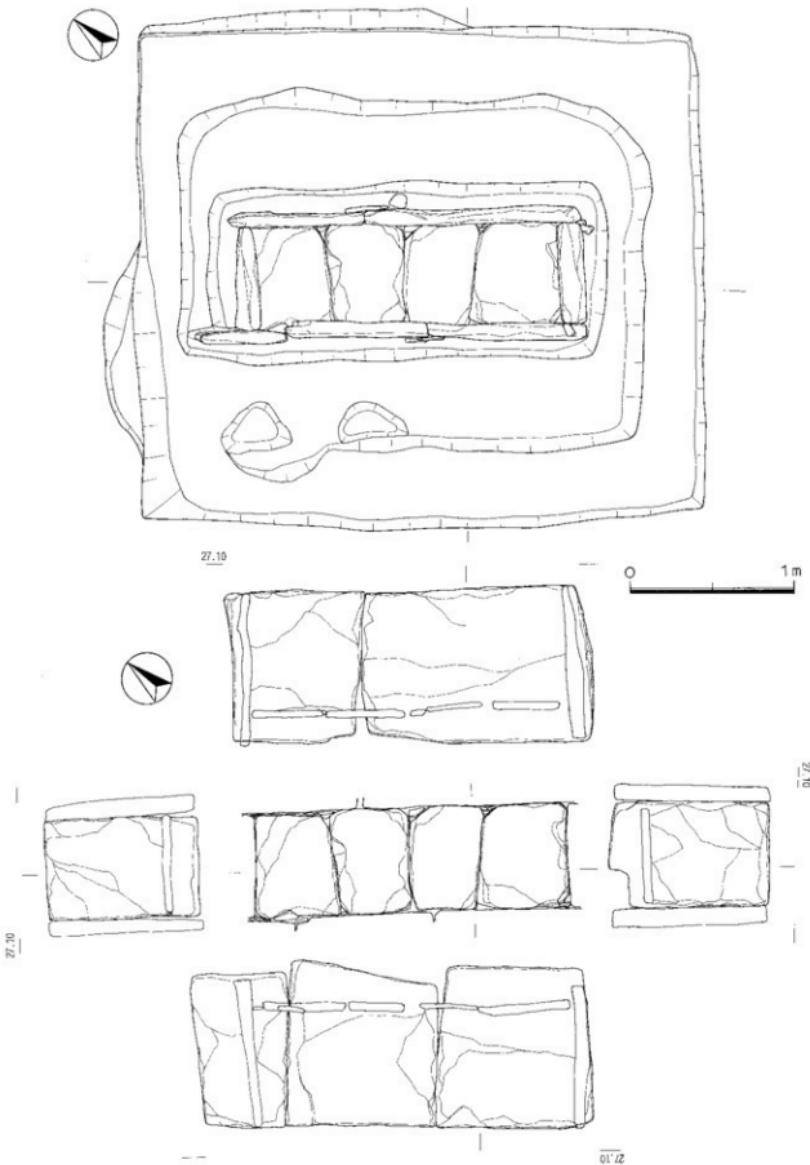
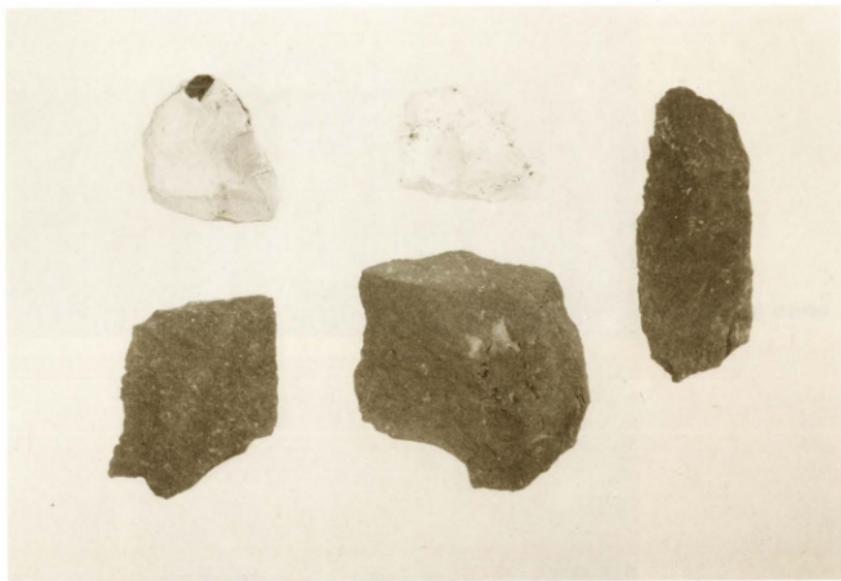


Fig 206 東台古墳群 第13号墳

図版1 木田余遺跡群



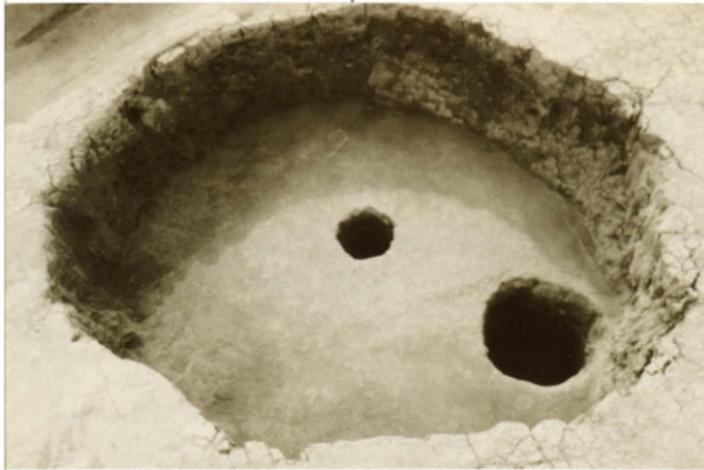


宝積遺跡

圖版 3 東台遺跡



図版4 東台遺跡



SK13



SK14



SK18▶

SK19◀

図版5 東台遺跡

SK24



SK24遺物出土状況



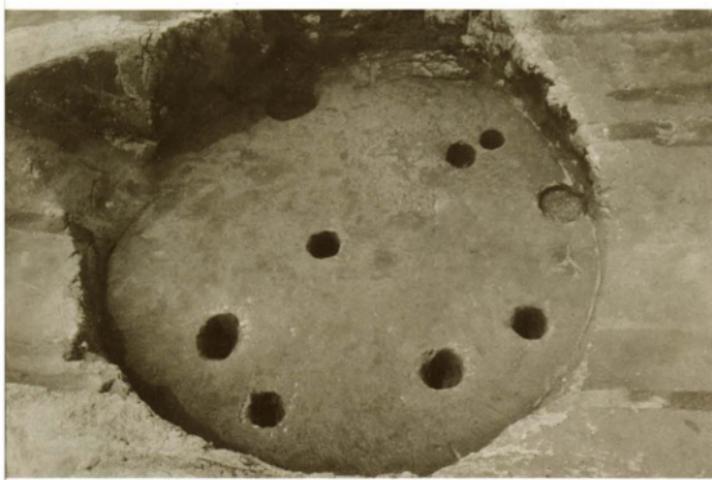
SK25



図版 6 東台遺跡



SK43遺物出土状況



SK56



SK79

図版7 東台遺跡

SK79遺物出土状況



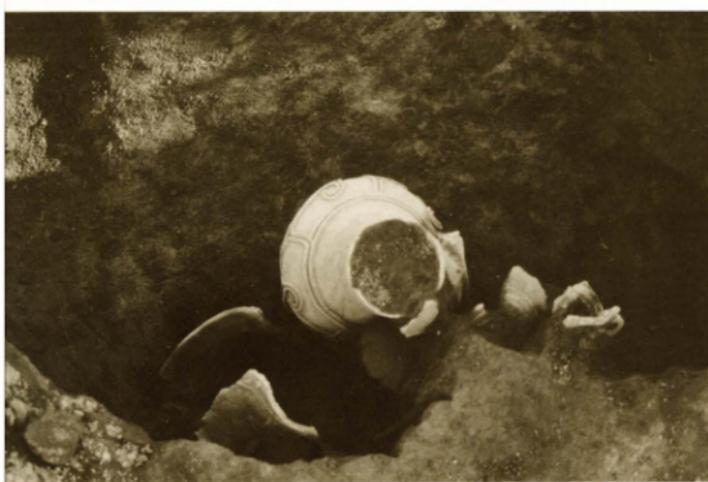
SK82



SK83



図版 8 東台遺跡



図版9 東台遺跡

SK97遺物出土状況



SK112



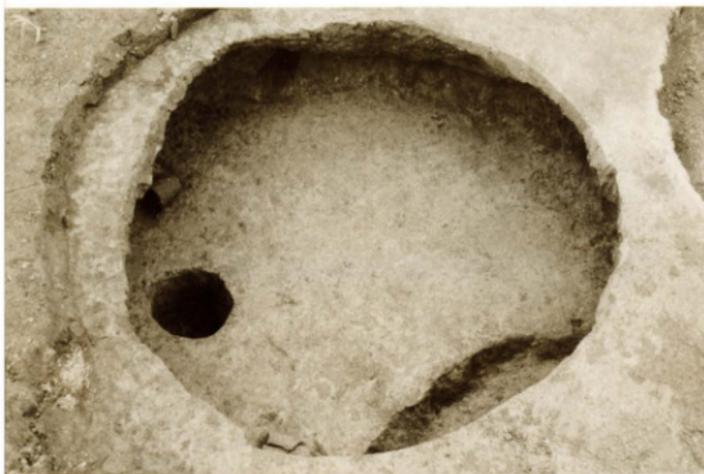
SK112遺物出土状況



図版10 東台遺跡



SK113

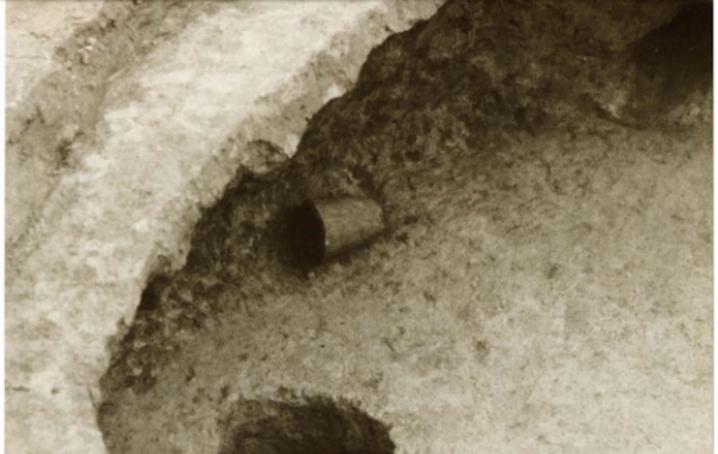


SK118



SK118遺物出土状況

SK118遺物出土狀況



SK122



SK122遺物出土狀況



図版12 東台遺跡



SK124遺物出土状況



SK126・138



SK120

圖版13 東台遺跡



SK137



SK135遺物出土狀況



SK140



SK143



SK153



SK153遺物出土状況



SK08



SK24



SK25



SK27

SK08・24・25・27出土土器



SK33・36・43・79出土土器

図版17 東台遺跡



SK97・112・122出土土器



SK135



SK140



SK143



SK145



SK145



SK153

SK135・140・143・145・153出土土器



御灵遺跡全景



御灵遺跡全景

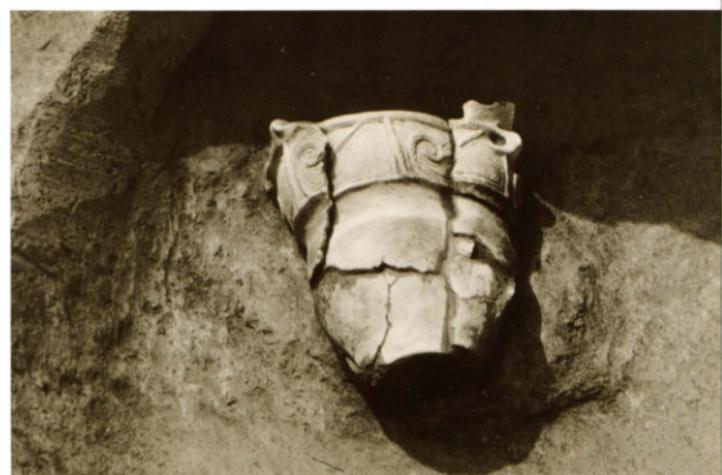




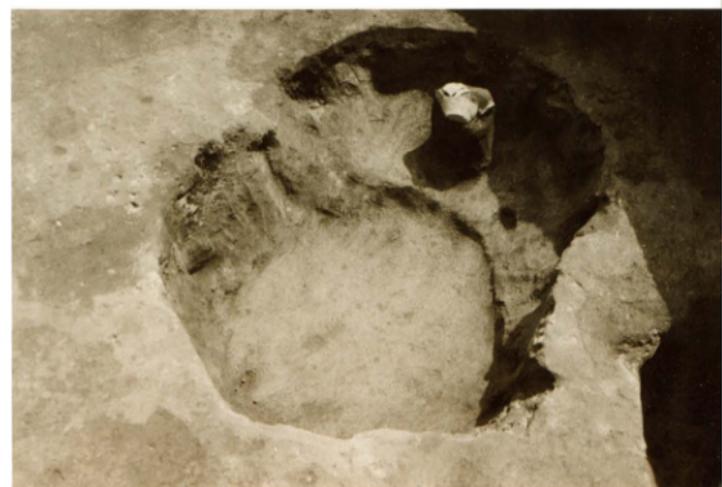
図版21 御灵遺跡



SK22



SK22遺物出土状況



SK129▲

SK41 ▼

図版22 御吳遺跡



SK43



SK81



SK82

図版23 御灵遺跡



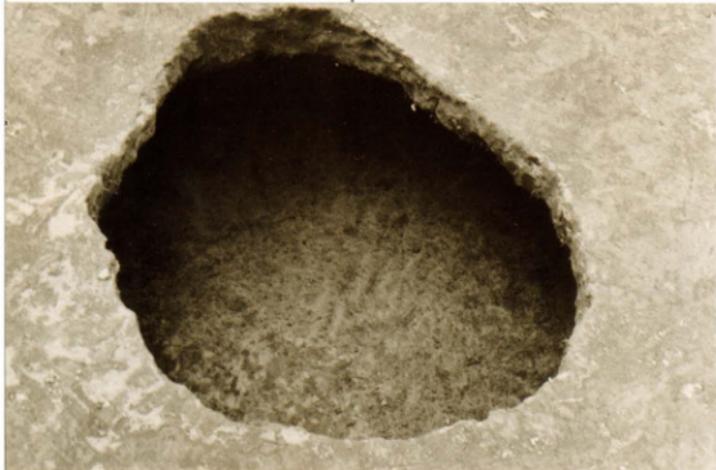
SK191



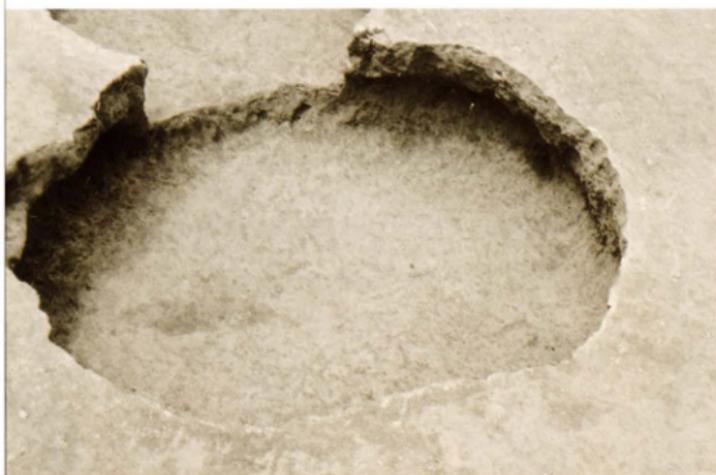
SK-197



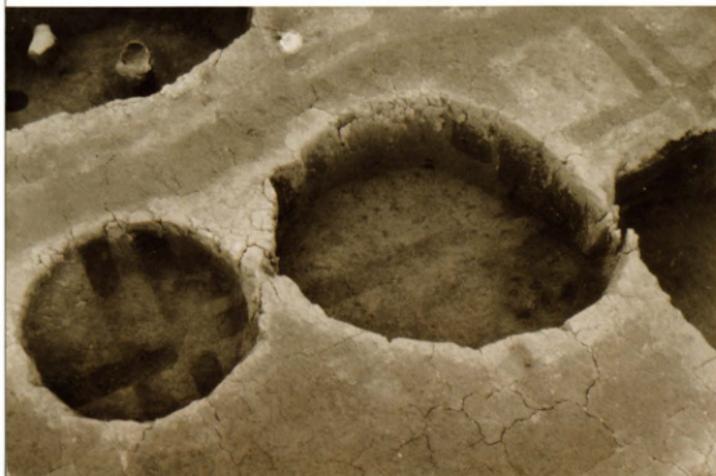
SK214遺物出土状況



SK215



SK216



▶ SK85

◀ SK90



SK01



SK22

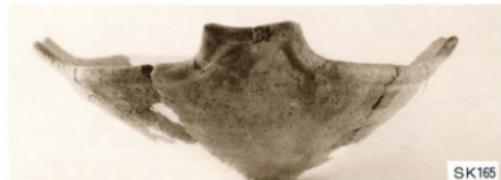


SK02



SK208

SK01・02・22・208出土土器



SK37・159・165出土土器

図版27 東台・御灵遺跡



東台・御灵遺跡出土土製品



東台・御灵遺跡出土石器・石製品

図版28 宝積遺跡



図版29 宝積遺跡



S141



S144



S145

図版30 宝積遺跡



S149



S154



S154遺物出土状況

図版31 宝積遺跡



S167

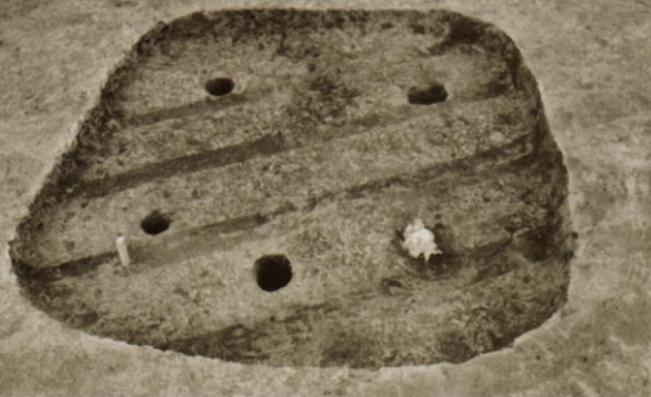


S170



S172

図版32 宝積遺跡

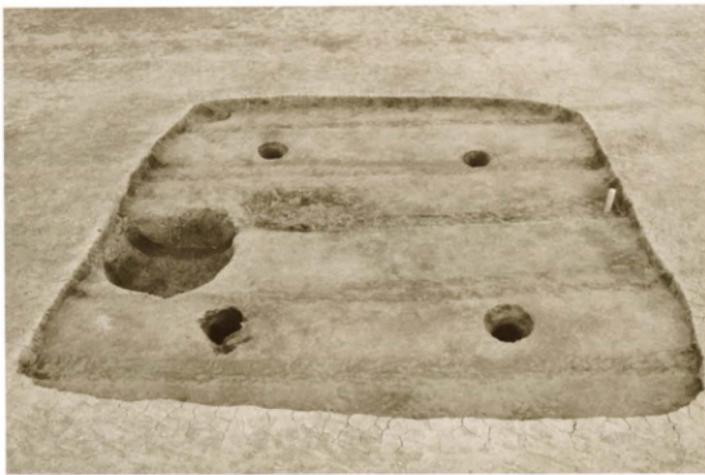


図版33 宝積遺跡

S175



S178



S179



図版34 宝積遺跡



S I 81



S I 96



S I -109

図版35 宝積遺跡



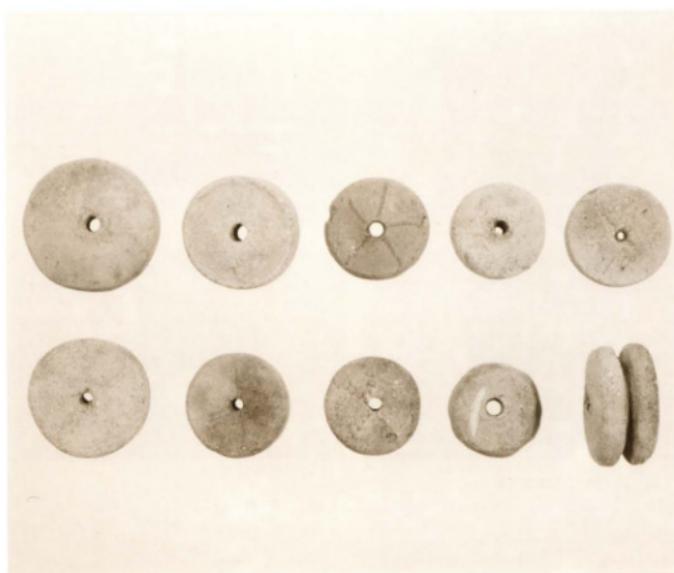
SI 54・73・83・109出土土器



宝積遺跡S119



宝積遺跡S145
宝積遺跡S119・45出土土器

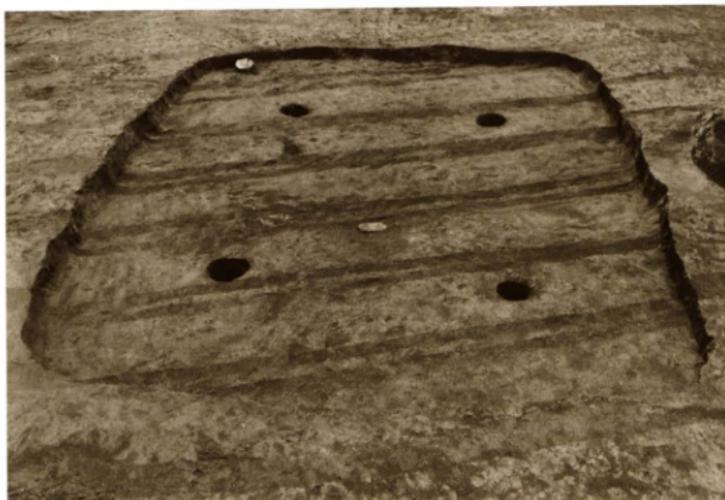


宝積・東台遺跡出土土製紡錘車

図版37 東台遺跡



S101

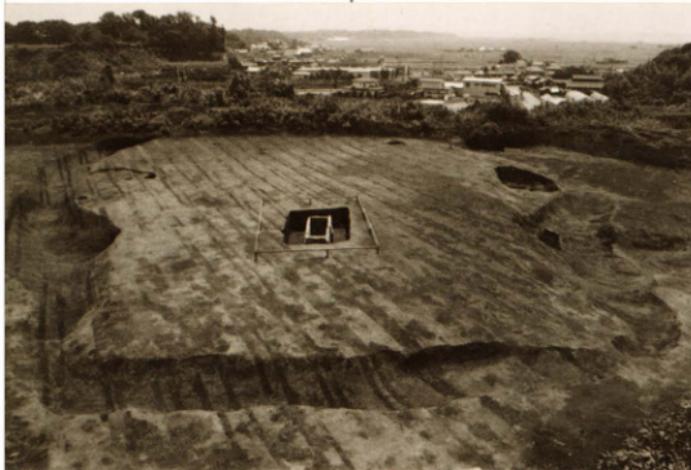


S120



S121

図版38 東台古墳群



4号墳全景



4号墳主体部



4号墳主体棟出工作状況

図版39 東台古墳群



4号墳主体部



7号墳全景



7号墳主体部



5号墳全景



5号墳主体部



5号墳主体部

図版41 東台古墳群





9号墳全景



9号墳主体部



10号墳全景



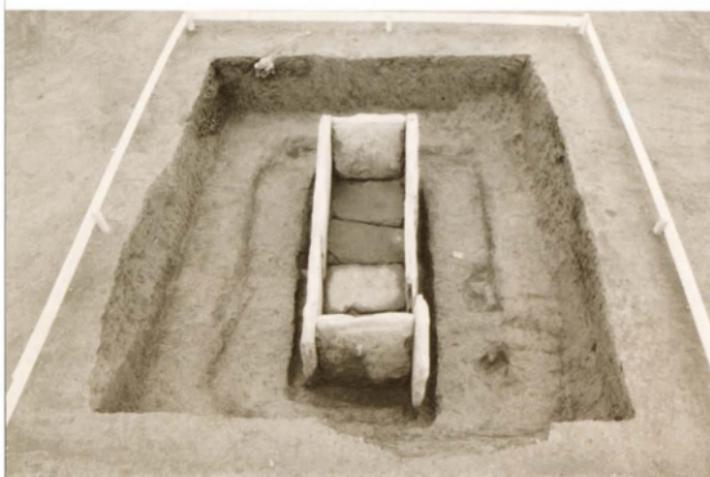
10号墳主体部



10号墳主体部



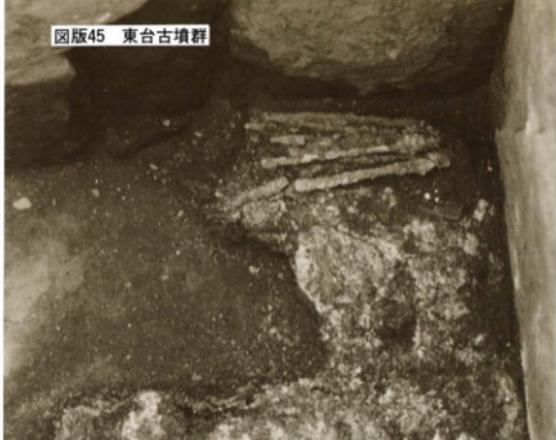
13号墳全景



13号墳主体部



13号墳主体部



13号墳主体部遺物出土状況



13号墳主体部遺物出土状況



13号墳主体部遺物出土状況



13号墳主体部遺物出土状況

図版46 東台古墳群



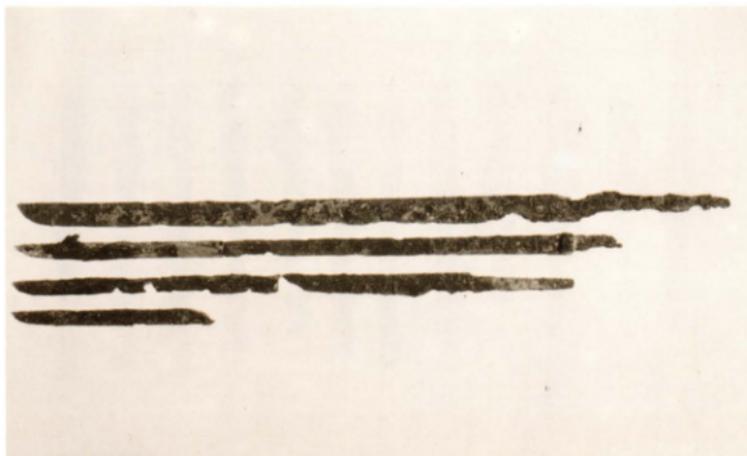
13号墳主体部石棺除去後状況



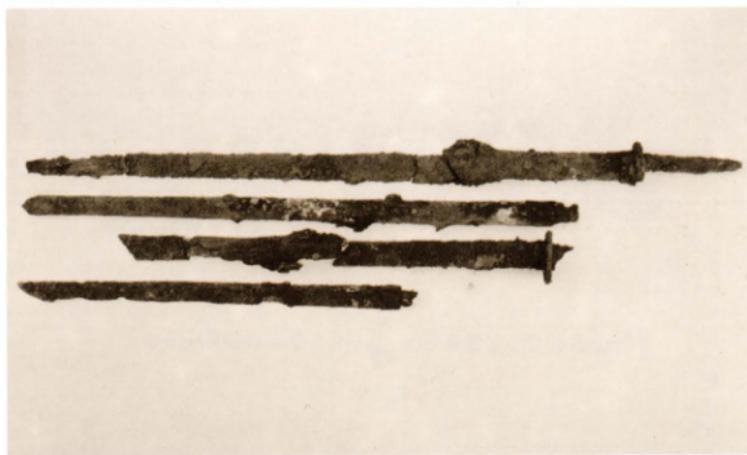
14号墳全景



1号円形周溝状遺構全景



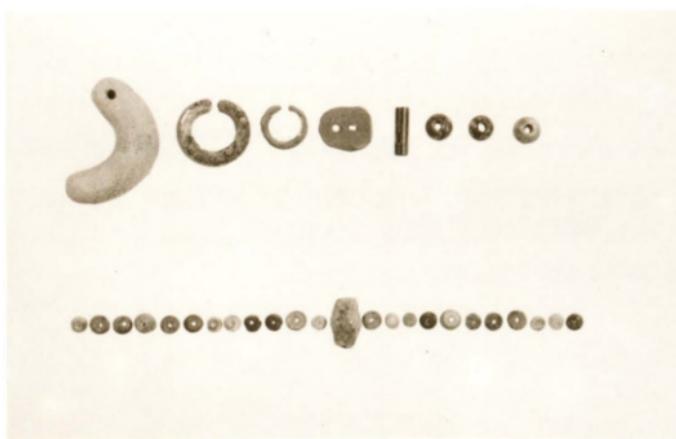
6号墳主体部出土鉄製直刀



13号墳主体部出土鉄製直刀



主体部出土鉄鎌



古墳出土遺物

木田余台 I

発行年月日 平成3年3月31日

発行 土浦市教育委員会
、
土浦市遺跡調査会
木田余地区画整理組合

印刷 塚本プロセス
千葉県佐倉市王子台6丁目(さくら通り)
TEL 043(487)0839